

北堀新田前遺跡Ⅱ(A 2・A 3地点)・
北堀新田遺跡Ⅳ(A 2・B地点)・久下東遺跡Ⅷ(G 3地点)

－本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8－

2015

本庄市教育委員会

序

利根川を境に群馬県に接する本庄市は、県北の中心都市としての躍進が期待されています。そうした期待を担い、新たな地域拠点形成の一貫として、新幹線本庄早稲田駅開設を機に駅周辺の区画整理事業や早稲田リサーチパーク地区の整備を進めてまいりました。とくに本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業は、広大な事業予定地を対象として住宅地、商・産業用地、公共施設用地、道路、公園・緑地などを整備する大規模なまちづくりの事業です。しかし、事業用地は、本庄市域でも埋蔵文化財の大変多い一帯でもありますので、計画当初より埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を慎重に行ってまいりました。

平成18年度より着手した同事業に係る発掘調査、報告書作成作業も早や9年に及び、旧石器時代にはじまり、近世にいたる様々な遺跡の調査により膨大な資料が得られただけでなく、この地に繰り広げられた人々の多様な生活の諸相、地域の歴史の一端が少しずつ明らかになりつつあります。

本書は、この土地区画整理事業地内の主に商・産業用地の整備に先立ち、平成18・21・22・23年度に実施した北堀新田前遺跡A2・A3地点、北堀新田遺跡A2・B地点、久下東遺跡G3地点の記録保存を目的とした発掘調査の報告書です。

北堀新田前遺跡A2・A3地点では、古墳時代や奈良・平安時代の重なり合う多数の竪穴住居跡とともに、古墳時代前期の方形周溝墓、前方後方墳を調査しました。隣接する北堀新田遺跡A2・B地点、久下東遺跡G3地点では、同様に古墳時代や奈良・平安時代の集落跡を調査しましたが、北堀新田遺跡では、多数の土器とともに須恵質の硯などが出土しています。久下東遺跡では、多数の竪穴住居跡、一角に集中する複数の掘立柱建物跡を調査し、また2つの遺跡を貫き、広い範囲を取り囲む中世の溝跡を調査しました。

いずれも大変大きな遺跡のほんの一部ですが、今後本庄市の遺跡が物語る歴史を考える一助にならうかと思えます。この報告書が広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財や郷土の歴史についての関心が一段と深められ、地域を活性化させる文化的資源として生かされれば幸いに存じます。

末筆ながら、発掘調査から報告書作成にあたり、様々なご尽力、ご教示を賜った関係諸機関並びに各位に対して、心から御礼申し上げます。

平成27年3月

本庄市教育委員会
教育長 勝山 勉

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市北堀1958-1、1963-1他に所在する北堀新田前遺跡A2・A3地点の調査、同市北堀1549-1、1556-1他に所在する北堀新田遺跡A2・B地点の調査、同市北堀1559-6・7他に所在する久下東遺跡G3地点の調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う都市計画道路の新都心環状線の建設および周辺の商業用地の開発に先立ち実施した。発掘調査期間は、北堀新田前遺跡A2・A3地点が平成19年1月9日から平成19年4月6日まで、北堀新田遺跡A2・B地点が平成22年4月7日から6月3日、同年6月3日から8月17日まで、久下東遺跡G3地点が平成23年8月26日から同年10月27日までである。
3. 北堀新田前遺跡A2・A3地点に関しては、現地調査の時点では、A2地点の大きくくびれた狭小な部分を境に、北西部分を「A2地点」、南東部分を「A3地点」、A3地点を「A4地点」と仮称したが、本書の地点名をもって正式な地点名とする。また、北堀新田遺跡A2地点、久下東遺跡G3地点の地点界に関しては、遺跡範囲の変更を行っており、現地調査の時点の境界線とは若干異なる。
4. 発掘調査は、本庄市教育委員会が行ない、各地点の現地調査に関しては、北堀新田前遺跡を松本、的野が、北堀新田遺跡を恋河内、松本が、久下東遺跡を松本が担当した。
5. 発掘調査から報告書刊行に要した経費は、いずれも市事業費である。
6. 本書で使用した地図のうち、第2図は、国土地理院発行の5万分の一地形図（「本庄」）、第5図に関しては、2千5百分の一都市計画図をもとに作成した。
7. 本書で用いたXY座標値は、世界測地系による新座標値である。
8. 土層および遺物の色調表現は、一部を除き『新編標準土色帳』を基準とした。
9. 遺構平面図中のNo. 付き番号、および写真図版中の遺物番号は、挿図中の遺物番号に一致する。
10. 写真図版中の遺物の縮尺は、原則として挿図中の遺物の縮尺とほぼ同じである。
12. 遺跡上空からの写真撮影は、株式会社測研に委託した。遺跡全景写真などの写真図版は、その成果に基づく。
13. 本書で用いた全体図、遺構図面に関しては、現地作業時の図化作業、および報告書作成段階の製図作業、編集作業の一部を、株式会社測研に委託した。
14. 出土土器・土製品、陶磁器類、石製品の一部に関しては、整理作業の一部と写真撮影を、有限会社毛野考古学研究所に委託した。なお、遺物観察表の「法量」の記載で、()内の数値は推定値、[]内の数値は残存値である。
15. 自然科学分析に関しては、株式会社パレオ・ラボに委託した。分析結果に関しては、第VI章に掲載した。
16. 本書の執筆および編集は、第VI章の「自然科学分析」以外を、松本が行なった。
17. 発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたって、ご協力頂いた方々は、下記のとおりである（敬称略、五十音順）。

青山 力 新井千都子 新井 正治 新井 嘉人 池田 一彦 磯崎 勝人 今井 豊和 落合智恵美
龜山 久枝 河田 倫子 川永 一幸 川中子浩史 熊谷由美子 倉林 美紀 工藤 和美 黒澤 恵
黒沢 律子 小暮 悠樹 小林美代子 小松 帝一 佐藤 昭二 塩原 晴幸 篠原 朗 城田 恵一
菅野 裕子 高井 武一 高田 和正 高橋 愛子 高橋 辰馬 高橋 好男 高柳とみ子 田島 里香
立石 益一 為貝 祐恵 塚越 金作 辻野 琢也 土屋 牧子 戸沢ミチ子 中原 好子 野本ミチ子
張替 恭子 福島 礼子 藤重千恵子 逸見百合子 細谷 悟 植島 直樹 町田 泰三 三木よ子
最能 秀行 山田マサミ 山本 勇 吉田 耕作 吉田 重政 渡辺 裕子

18. 発掘調査及び本書の作成に関しては、下記の方々や諸機関からご助言、ご協力を賜った。ここに記し、感謝する次第である（敬称略、五十音順）。

荒川 正夫 有山 径世 石坂 俊郎 市毛 勲 井上 裕一 大谷 徹 柿沼 幹夫 金子 彰男
 車崎 正彦 小出 輝雄 昆 彭生 坂本 和俊 佐々木幹雄 佐々木由香 篠崎 潔 杉崎 茂樹
 高林 真人 鳥羽 政之 中沢 良一 長井 正欣 長滝 歳康 西川 修一 日沖 剛史 比田井克仁
 福田 聖 藤根 久 増田 一裕 宮本 久子 矢内 勲
 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 早稲田大学本庄考古資料館
 株式会社測研 株式会社パレオ・ラボ 有限会社毛野考古学研究所

19. 発掘調査及び整理作業、報告書の刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は、以下のとおりである。

発掘調査組織（平成18・21～23年度、役職名は、平成23年度、もしくは発掘調査時）

主体者 本庄市教育委員会

事務局 事務局 長

事務局 事務局 長

茂木 孝彦

丸山 茂（平成18年度）

腰塚 修（平成21・22年度）

関和 成昭（平成23年度）

文化財保護課

課 長

前川 由雄（平成18年度）

儘田 英夫（平成21年度）

金井 孝夫（平成22・23年度）

課長補佐

増田 一裕（平成18年度）

副参事兼

鈴木 徳雄

課長補佐

担当者 課長補佐兼

太田 博之（平成18年度、北堀新田前遺跡）

埋蔵文化財係長

担当者 主 幹

恋河内昭彦（平成22年度、北堀新田遺跡）

主 査

大熊 季広

主 査

松澤 浩一

担当者 主 任

松本 完（平成18年度、北堀新田前遺跡、平成21年度、

北堀新田遺跡、平成23年度、久下東遺跡）

臨時職員

の野 善行（平成18年度、北堀新田前遺跡）

整理・報告書刊行組織（平成26年度）

主体者 本庄市教育委員会

事務局 事務局 長

事務局 事務局 長

勝山 勉

関和 成昭

文化財保護課

課 長

川上 美恵

課長補佐兼

太田 博之

埋蔵文化財係長

担当者 主 幹

恋河内昭彦

担 当 者	主	査	大熊	季広
	主	査	松本	完
	主 事 補		栗原	秀太
	臨 時 職 員		の野	善行

北堀新田前遺跡Ⅱ(A2・A3地点)・
北堀新田遺跡Ⅳ(A2・B地点)・久下東遺跡Ⅷ(G3地点)

目次

序

例言

目次

第Ⅰ章	調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	2
第1節	遺跡の立地	2
第2節	周辺の遺跡と歴史的環境	3
第Ⅲ章	北堀新田前遺跡A2・A3地点の調査	11
第1節	調査の概要	11
第2節	検出された遺構と遺物	13
1	竪穴住居跡	13
2	掘立柱建物跡	46
3	方形周溝墓および前方後方墳	51
4	井戸跡	70
5	土坑	83
6	溝跡	97
7	ピット	100
8	遺構外出土遺物	101
第Ⅳ章	北堀新田遺跡A2・B地点の調査	106
第1節	調査の概要	106
第2節	検出された遺構と遺物	108
1	竪穴住居跡	108
2	掘立柱建物跡	170
3	井戸跡	173
4	土坑	176
5	溝跡	197
6	ピット	208
7	遺構外出土遺物	208

第V章 久下東遺跡G3地点の調査	210
第1節 調査の概要	210
第2節 検出された遺構と遺物	211
1 竪穴住居跡	211
2 掘立柱建物跡	253
3 井戸跡	264
4 土坑	266
5 溝跡	286
6 ビット	292
7 遺構外出土遺物	292
第VI章 自然科学分析	294
第1節 北堀新田前遺跡の自然科学分析	294
1 2号墓周溝覆土内出土炭化物の放射性炭素年代測定	294
2 2号墓周溝覆土内出土炭化種実の同定	298
第VI章 まとめ	301
引用・参考文献	306

図 版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	2	第17図 9・10・12・13号住居跡平面・断面図	
第2図 周辺の主要遺跡(1)	4	(2)	22
第3図 周辺の主要遺跡(2)	5	第18図 11号住居跡平面・断面図	23
第4図 発掘調査地点近傍の遺跡(1)	6	第19図 11号住居跡出土遺物	24
第5図 発掘調査地点近傍の遺跡(2)	8	第20図 12号住居跡平面・断面図	26
第6図 発掘調査地点位置図	9	第21図 12a号住居跡出土遺物	27
北堀新田前遺跡		第22図 12b号住居跡出土遺物	27
第7図 北堀新田前遺跡A1～A3地点遺構分布図	12	第23図 13号住居跡出土遺物	28
		第24図 14～17号住居跡平面・断面図(1)	29
第8図 北堀新田前遺跡A2・A3地点全体図	13	第25図 14～17号住居跡平面・断面図(2)	30
第9図 2号住居跡平面・断面図	14	第26図 14～17号住居跡平面・断面図(3)	31
第10図 4・5号住居跡平面・断面図	15	第27図 14・15号住居跡平面・断面図	32
第11図 6号住居跡平面・断面図	16	第28図 14号住居跡出土遺物	33
第12図 7号住居跡平面・断面図	17	第29図 15号住居跡出土遺物	35
第13図 7号住居跡出土遺物	17	第30図 16・17号住居跡平面・断面図	36
第14図 8号住居跡平面・断面図	18	第31図 16号住居跡出土遺物	36
第15図 8号住居跡出土遺物	19	第32図 17号住居跡出土遺物	37
第16図 9・10・12・13号住居跡平面・断面図		第33図 18号住居跡平面・断面図	38
(1)	21	第34図 18号住居跡出土遺物	39

第35图	19号住居跡平面・断面図……………39	第78图	25~30号土坑平面・断面図……………90
第36图	19号住居跡出土遺物……………40	第79图	35号土坑出土遺物……………91
第37图	20号住居跡平面・断面図(1)……………41	第80图	31~36号土坑平面・断面図……………92
第38图	20号住居跡平面・断面図(2)……………42	第81图	37号土坑出土遺物……………93
第39图	20号住居跡出土遺物(1)……………43	第82图	37~43号土坑平面・断面図……………94
第40图	20号住居跡出土遺物(2)……………45	第83图	44~46号土坑平面・断面図……………96
第41图	21号住居跡平面・断面図……………45	第84图	2号溝跡平面・断面図……………97
第42图	1号掘立柱建物跡平面・断面図(1)……………47	第85图	4号溝跡平面・断面図……………98
第43图	1号掘立柱建物跡平面・断面図(2)……………48	第86图	4号溝跡出土遺物……………99
第44图	2号掘立柱建物跡平面・断面図(1)……………49	第87图	5号溝跡溝跡出土遺物……………99
第45图	2号掘立柱建物跡平面・断面図(2)……………50	第88图	5・6号溝跡平面・断面図……………100
第46图	3・4号掘立柱建物跡平面・断面図……………51	第89图	遺構外出土遺物(1)……………102
第47图	1号墓等高線図……………52	第90图	遺構外出土遺物(2)……………104
第48图	1号墓平面・断面図(1)……………53	北堀新田遺跡	
第49图	1号墓平面・断面図(2)……………54	第91图	北堀新田遺跡A2・B地点全体図……………106・107
第50图	1号墓平面・断面図(3)……………55	第92图	4号住居跡平面・断面図……………108
第51图	1号墓出土遺物……………55	第93图	4号住居跡出土遺物……………109
第52图	2号墓等高線図……………58	第94图	5号住居跡平面・断面図(1)……………111
第53图	2号墓平面・断面図(1)……………59	第95图	5号住居跡平面・断面図(2)……………112
第54图	2号墓平面・断面図(2)……………60	第96图	5号住居跡出土遺物(1)……………113
第55图	2号墓平面・断面図(3)……………61	第97图	5号住居跡出土遺物(2)……………114
第56图	2号墓平面・断面図(4)……………62	第98图	6号住居跡出土遺物……………115
第57图	2号墓南東溝遺物出土状態……………62	第99图	6号住居跡平面・断面図……………116
第58图	2号墓出土遺物(1)……………63	第100图	7号住居跡出土遺物……………116
第59图	2号墓出土遺物(2)……………64	第101图	7号住居跡平面・断面図……………117
第60图	3号墓等高線図……………66	第102图	8・9号住居跡平面・断面図……………118
第61图	3号墓平面・断面図(1)……………67	第103图	8号住居跡出土遺物……………119
第62图	3号墓平面・断面図(2)……………68	第104图	9号住居跡平面・断面図……………119
第63图	3号墓出土遺物……………69	第105图	9号住居跡出土遺物……………119
第64图	1号井戸跡・5~10号土坑・1号溝跡 平面・断面図(1)……………72	第106图	10号住居跡平面・断面図……………121
第65图	1号井戸跡・5~10号土坑・1号溝跡 平面・断面図(2)……………73	第107图	10号住居跡出土遺物……………122
第66图	1号井戸跡出土遺物……………74	第108图	11号住居跡平面・断面図……………124
第67图	1号溝跡出土遺物(1)……………76	第109图	11号住居跡出土遺物……………124
第68图	1号溝跡出土遺物(2)……………77	第110图	12号住居跡平面・断面図(1)……………125
第69图	2・4・5号井戸跡平面・断面図(1)……………79	第111图	12号住居跡出土遺物……………126
第70图	2・4・5号井戸跡平面・断面図(2)……………80	第112图	12号住居跡平面・断面図(2)……………126
第71图	2・4・5号井戸跡出土遺物……………80	第113图	13号住居跡平面・断面図(1)……………127
第72图	6・7号井戸跡平面・断面図……………81	第114图	13号住居跡平面・断面図(2)……………128
第73图	6号井戸跡出土遺物……………82	第115图	13号住居跡出土遺物……………129
第74图	1・2号土坑出土遺物……………83	第116图	14号住居跡平面・断面図……………130
第75图	1~4・11~15号土坑平面・断面図……………85	第117图	14号住居跡出土遺物……………131
第76图	16~24号土坑平面・断面図……………87	第118图	15号住居跡出土遺物……………132
第77图	26・30号土坑出土遺物……………89	第119图	15号住居跡平面・断面図……………133
		第120图	16号住居跡平面・断面図……………134

第121图	17号住居跡平面・断面図	135
第122图	17号住居跡出土遺物	136
第123图	18号住居跡平面・断面図	137
第124图	18号住居跡出土遺物	138
第125图	19号住居跡平面・断面図	139
第126图	19号住居跡出土遺物	140
第127图	20号住居跡平面・断面図	142
第128图	20号住居跡出土遺物	142
第129图	21号住居跡平面・断面図(1)	143
第130图	21号住居跡平面・断面図(2)	144
第131图	21号住居跡出土遺物	144
第132图	22号住居跡平面・断面図	145
第133图	22号住居跡出土遺物	146
第134图	23号住居跡平面・断面図	146
第135图	23号住居跡出土遺物	146
第136图	24・25号住居跡平面・断面図	147
第137图	24号住居跡出土遺物	148
第138图	25号住居跡出土遺物	149
第139图	26号住居跡出土遺物	149
第140图	26号住居跡平面・断面図	150
第141图	27号住居跡平面・断面図	151
第142图	27号住居跡出土遺物	151
第143图	28・29号住居跡平面・断面図(1)	152
第144图	28・29号住居跡平面・断面図(2)	153
第145图	29号住居跡出土遺物	153
第146图	30号住居跡平面・断面図	154
第147图	30号住居跡出土遺物	155
第148图	31号住居跡平面・断面図	156
第149图	31号住居跡出土遺物	157
第150图	32号住居跡平面・断面図	158
第151图	32号住居跡出土遺物	159
第152图	33号住居跡平面・断面図	160
第153图	33号住居跡出土遺物	160
第154图	34号住居跡平面・断面図	161
第155图	34号住居跡出土遺物	162
第156图	35号住居跡平面・断面図	163
第157图	35号住居跡出土遺物	163
第158图	36号住居跡平面・断面図	165
第159图	36号住居跡出土遺物	166
第160图	37号住居跡出土遺物	167
第161图	37・38号住居跡平面・断面図	168
第162图	38号住居跡出土遺物	169
第163图	1号掘立柱建物跡平面・断面図	170
第164图	2号掘立柱建物跡平面・断面図	171
第165图	2号掘立柱建物跡出土遺物	172

第166图	3号掘立柱建物跡平面・断面図	173
第167图	1号井戸跡平面・断面図	174
第168图	1号井戸跡出土遺物	174
第169图	2・3号井戸跡平面・断面図	175
第170图	2号井戸跡出土遺物	175
第171图	14~22号土坑平面・断面図	178
第172图	26・27号土坑出土遺物	179
第173图	23~30号土坑平面・断面図	180
第174图	32号土坑出土遺物	182
第175图	31~38号土坑平面・断面図	183
第176图	39・40号土坑平面・断面図	184
第177图	39号土坑出土遺物	184
第178图	41~47号土坑平面・断面図	186
第179图	48~53号土坑平面・断面図	188
第180图	56号土坑出土遺物	189
第181图	54~61号土坑平面・断面図	191
第182图	62~70号土坑平面・断面図	193
第183图	71~79号土坑平面・断面図	195
第184图	80~82号土坑平面・断面図	196
第185图	3号溝跡平面・断面図(1)	198
第186图	3号溝跡平面・断面図(2)	199
第187图	3号溝跡出土遺物	199
第188图	4・5号溝跡平面・断面図	201
第189图	6~11号溝跡平面図	204
第190图	6~11号溝跡断面図(1)	205
第191图	6~11号溝跡断面図(2)	206
第192图	6~11号溝跡断面図(3)	207
第193图	6・7・10・11号溝跡出土遺物	207
第194图	遺構外出土遺物	209
久下東遺跡		
第195图	久下東遺跡G3地点全体図	210・211
第196图	250号住居跡平面図	212
第197图	250号住居跡出土遺物	213
第198图	298号住居跡平面・断面図	216
第199图	300号住居跡出土遺物	216
第200图	299~301号住居跡平面・断面図(1)	217
第201图	299~301号住居跡平面・断面図(2)	218
第202图	301号住居跡出土遺物	218
第203图	302・303号住居跡平面・断面図(1)	220
第204图	302・303号住居跡平面・断面図(2)	221
第205图	302・303号住居跡平面・断面図(3)	

.....	222	259
第206図	302号住居跡出土遺物(1).....	第242図	21号掘立柱建物跡平面・断面図(2)
第207図	302号住居跡出土遺物(2).....	260
第208図	303号住居跡出土遺物.....	第243図	22号掘立柱建物跡平面・断面図.....
第209図	304・305号住居跡平面・断面図.....	第244図	23号掘立柱建物跡平面・断面図(1)
第210図	306~308号住居跡平面・断面図(1)	262
.....	230	第245図	23号掘立柱建物跡平面・断面図(2)
第211図	306~308号住居跡平面・断面図(2)	263
.....	231	第246図	24号掘立柱建物跡平面・断面図.....
第212図	306~308号住居跡平面・断面図(3)	第247図	30~32号井戸跡平面・断面図.....
.....	232	第248図	31号井戸跡出土遺物.....
第213図	306・307号住居跡平面・断面図.....	第249図	162・164・165・578~582号土坑
第214図	308号住居跡平面・断面図.....	平面・断面図.....	268
第215図	307号住居跡出土遺物.....	第250図	580号土坑出土遺物.....
第216図	308号住居跡出土遺物.....	第251図	583号土坑出土遺物.....
第217図	309号住居跡平面・断面図.....	第252図	583~588号土坑平面・断面図.....
第218図	309号住居跡出土遺物(1).....	第253図	589~591号土坑平面・断面図.....
第219図	309号住居跡出土遺物(2).....	第254図	595号土坑出土遺物.....
第220図	310号住居跡平面・断面図.....	第255図	592~598号土坑平面・断面図.....
第221図	310号住居跡出土遺物.....	第256図	600号土坑出土遺物.....
第222図	311号住居跡平面・断面図.....	第257図	599~603号土坑平面・断面図.....
第223図	311号住居跡出土遺物.....	第258図	605号土坑出土遺物.....
第224図	312・313号住居跡平面・断面図.....	第259図	604~609号土坑平面・断面図.....
第225図	312号住居跡出土遺物.....	第260図	611・613号土坑出土遺物.....
第226図	313号住居跡出土遺物.....	第261図	610~616号土坑平面・断面図.....
第227図	314号住居跡平面・断面図.....	第262図	617・620~623号土坑出土遺物.....
第228図	315号住居跡平面・断面図.....	第263図	617~623号土坑平面・断面図.....
第229図	315号住居跡出土遺物.....	第264図	624~626号土坑平面・断面図.....
第230図	316号住居跡平面・断面図.....	第265図	626号土坑出土遺物.....
第231図	317号住居跡平面・断面図.....	第266図	34号溝跡出土遺物.....
第232図	318号住居跡平面・断面図(1).....	第267図	34号溝跡平面・断面図.....
第233図	318号住居跡出土遺物.....	第268図	88号溝跡出土遺物.....
第234図	318号住居跡平面・断面図(2).....	第269図	88・89号溝跡平面・断面図.....
第235図	18~20号掘立柱建物跡位置図.....	第270図	97・98号溝跡平面・断面図.....
第236図	18号掘立柱建物跡平面・断面図(1)	第271図	97号溝跡出土遺物.....
.....	254	第272図	遺構外出土遺物.....
第237図	18号掘立柱建物跡平面・断面図(2)	291
.....	255	自然科学分析	
第238図	19号掘立柱建物跡平面・断面図.....	第273図	2号墓の周溝内堆積物中の年代試料
第239図	20号掘立柱建物跡平面・断面図.....	と暦年較正図.....
第240図	21~24号掘立柱建物跡位置図.....	296
第241図	21号掘立柱建物跡平面・断面図(1)	まとめ	
.....	258	第274図	北堀新田前遺跡1~3号墓推定復元図
.....	259	304

挿表目次

北碓新田前遺跡

第1表	7号住居跡出土遺物観察表	18	第42表	5号住居跡出土遺物観察表(2)	114
第2表	8号住居跡出土遺物観察表	19	第43表	5号住居跡出土遺物観察表(3)	115
第3表	11号住居跡出土遺物観察表(1)	24	第44表	6号住居跡出土遺物観察表	115
第4表	11号住居跡出土遺物観察表(2)	25	第45表	7号住居跡出土遺物観察表	116
第5表	12a号住居跡出土遺物観察表	27	第46表	8号住居跡出土遺物観察表(1)	118
第6表	12b号住居跡出土遺物観察表	27	第47表	8号住居跡出土遺物観察表(2)	119
第7表	13号住居跡出土遺物観察表	28	第48表	9号住居跡出土遺物観察表	120
第8表	14号住居跡出土遺物観察表	34	第49表	10号住居跡出土遺物観察表(1)	121
第9表	15号住居跡出土遺物観察表	34	第50表	10号住居跡出土遺物観察表(2)	122
第10表	16号住居跡出土遺物観察表	36	第51表	10号住居跡出土遺物観察表(3)	123
第11表	17号住居跡出土遺物観察表(1)	37	第52表	11号住居跡出土遺物観察表	124
第12表	17号住居跡出土遺物観察表(2)	38	第53表	12号住居跡出土遺物観察表	126
第13表	18号住居跡出土遺物観察表	39	第54表	13号住居跡出土遺物観察表(1)	127
第14表	19号住居跡出土遺物観察表	40	第55表	13号住居跡出土遺物観察表(2)	128
第15表	20号住居跡出土遺物観察表(1)	42	第56表	14号住居跡出土遺物観察表(1)	129
第16表	20号住居跡出土遺物観察表(2)	44	第57表	14号住居跡出土遺物観察表(2)	132
第17表	20号住居跡出土遺物観察表(3)	45	第58表	15号住居跡出土遺物観察表	132
第18表	1号墓出土遺物観察表	56	第59表	17号住居跡出土遺物観察表	136
第19表	2号墓出土遺物観察表(1)	64	第60表	18号住居跡出土遺物観察表	138
第20表	2号墓出土遺物観察表(2)	65	第61表	19号住居跡出土遺物観察表(1)	140
第21表	3号墓出土遺物観察表(1)	69	第62表	19号住居跡出土遺物観察表(2)	141
第22表	3号墓出土遺物観察表(2)	70	第63表	20号住居跡出土遺物観察表	142
第23表	1号井戸跡出土遺物観察表(1)	74	第64表	21号住居跡出土遺物観察表(1)	144
第24表	1号井戸跡出土遺物観察表(2)	75	第65表	21号住居跡出土遺物観察表(2)	145
第25表	1号溝跡出土遺物観察表(1)	75	第66表	22号住居跡出土遺物観察表	146
第26表	1号溝跡出土遺物観察表(2)	77	第67表	23号住居跡出土遺物観察表	147
第27表	1号溝跡出土遺物観察表(3)	78	第68表	24号住居跡出土遺物観察表	148
第28表	2・4・5号井戸跡出土遺物観察表	81	第69表	25号住居跡出土遺物観察表	149
第29表	6号井戸跡出土遺物観察表	82	第70表	26号住居跡出土遺物観察表	149
第30表	1・2号土坑出土遺物観察表	83	第71表	27号住居跡出土遺物観察表	151
第31表	26・30号土坑出土遺物観察表	89	第72表	29号住居跡出土遺物観察表	152
第32表	35号土坑出土遺物観察表	92	第73表	30号住居跡出土遺物観察表	155
第33表	37号土坑出土遺物観察表	93	第74表	31号住居跡出土遺物観察表	157
第34表	4号溝跡出土遺物観察表	99	第75表	32号住居跡出土遺物観察表(1)	158
第35表	5号溝跡出土遺物観察表	99	第76表	32号住居跡出土遺物観察表(2)	159
第36表	遺構外出土遺物観察表(1)	101	第77表	33号住居跡出土遺物観察表	161
第37表	遺構外出土遺物観察表(2)	103	第78表	34号住居跡出土遺物観察表	162
第38表	遺構外出土遺物観察表(3)	105	第79表	35号住居跡出土遺物観察表	164
北碓新田遺跡			第80表	36号住居跡出土遺物観察表(1)	166
第39表	4号住居跡出土遺物観察表(1)	109	第81表	36号住居跡出土遺物観察表(2)	167
第40表	4号住居跡出土遺物観察表(2)	110	第82表	37号住居跡出土遺物観察表	167
第41表	5号住居跡出土遺物観察表(1)	112	第83表	38号住居跡出土遺物観察表(1)	168
			第84表	38号住居跡出土遺物観察表(2)	169

第85表	38号住居跡出土遺物観察表(3) ……	170
第86表	2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 ……	172
第87表	1号井戸跡出土遺物観察表 ……	174
第88表	2号井戸跡出土遺物観察表 ……	176
第89表	26・27号土坑出土遺物観察表 ……	179
第90表	32号土坑出土遺物観察表 ……	182
第91表	39号土坑出土遺物観察表 ……	184
第92表	56号土坑出土遺物観察表 ……	189
第93表	3号溝跡出土遺物観察表(1) ……	199
第94表	3号溝跡出土遺物観察表(2) ……	200
第95表	6・7・10・11号溝跡出土遺物観察表 (1) ……	207
第96表	6・7・10・11号溝跡出土遺物観察表 (2) ……	208
第97表	遺構外出土遺物観察表 ……	209
久下東遺跡		
第98表	250号住居跡出土遺物観察表(1) ……	213
第99表	250号住居跡出土遺物観察表(2) ……	214
第100表	250号住居跡出土遺物観察表(3) ……	215
第101表	300号住居跡出土遺物観察表 ……	216
第102表	301号住居跡出土遺物観察表 ……	219
第103表	302号住居跡出土遺物観察表(1) ……	224
第104表	302号住居跡出土遺物観察表(2) ……	225
第105表	302号住居跡出土遺物観察表(3) ……	226
第106表	303号住居跡出土遺物観察表(1) ……	226
第107表	303号住居跡出土遺物観察表(2) ……	227
第108表	307号住居跡出土遺物観察表(1) ……	235
第109表	307号住居跡出土遺物観察表(2) ……	236
第110表	308号住居跡出土遺物観察表(1) ……	236
第111表	308号住居跡出土遺物観察表(2) ……	237

第112表	309号住居跡出土遺物観察表(1) ……	238
第113表	309号住居跡出土遺物観察表(2) ……	240
第114表	309号住居跡出土遺物観察表(3) ……	241
第115表	310号住居跡出土遺物観察表 ……	242
第116表	311号住居跡出土遺物観察表 ……	244
第117表	312号住居跡出土遺物観察表 ……	245
第118表	313号住居跡出土遺物観察表 ……	245
第119表	315号住居跡出土遺物観察表 ……	248
第120表	318号住居跡出土遺物観察表 ……	252
第121表	31号井戸跡出土遺物観察表 ……	266
第122表	580号土坑出土遺物観察表 ……	269
第123表	583号土坑出土遺物観察表 ……	270
第124表	595号土坑出土遺物観察表 ……	273
第125表	600号土坑出土遺物観察表 ……	276
第126表	605号土坑出土遺物観察表 ……	278
第127表	611・613号土坑出土遺物観察表 ……	280
第128表	617・620～623号土坑出土遺物観察表 ……	283
第129表	626号土坑出土遺物観察表 ……	286
第130表	34号溝跡出土遺物観察表 ……	288
第131表	88号溝跡出土遺物観察表 ……	288
第132表	97号溝跡出土遺物観察表 ……	290
第133表	遺構外出土遺物観察表(1) ……	292
第134表	遺構外出土遺物観察表(2) ……	293
自然科学分析		
第135表	測定試料および処理 ……	295
第136表	放射性炭素年代測定および暦年較正 の結果 ……	297
第137表	2号墓周溝覆土内出土炭化種実一覧表 ……	299

図版目次

北堀新田前遺跡

図版1	北堀新田前遺跡と周辺の遺跡
図版2	北堀新田前遺跡全景
図版3	北堀新田前遺跡A 2地点北西部全景、同住居跡群と掘立柱建物跡
図版4	2・6～8号住居跡
図版5	A 2地点北西部東半の住居跡群、9～11号住居跡
図版6	11～12 a・12 b号住居跡
図版7	12 a・12 b～15号住居跡
図版8	15号住居跡、3号溝跡、16・17号住居跡
図版9	18～21号住居跡

図版10	1・2号掘立柱建物跡
図版11	1～3号墓全景
図版12	1号墓(1)
図版13	1号墓(2)
図版14	2号墓(1)
図版15	2号墓(2)
図版16	2号墓(3)
図版17	3号墓
図版18	1号井戸跡、5～11号土坑、1号溝跡
図版19	2・4～7号井戸跡
図版20	1～4・11号土坑
図版21	12・14～18号土坑

図版22 19~21・25~29号土坑
図版23 30・32・33・35~37号土坑
図版24 38~40・43・45・46号土坑
図版25 2・4~6号溝跡
図版26 7・8・11号住居跡出土遺物
図版27 12a・12b・13・14号住居跡出土遺物
図版28 15~17・19号住居跡出土遺物
図版29 20号住居跡、1号墓出土遺物、2号墓出土遺物(1)
図版30 2号墓出土遺物(2)、3号墓出土遺物(1)
図版31 3号墓出土遺物(2)、1・2・4・5・6号井戸跡、1・2・26・30号土坑出土遺物、1号溝跡出土遺物(1)
図版32 1号溝跡出土遺物(2)、5号溝跡、遺構外出土遺物

北堀新田遺跡

図版33 北堀新田遺跡A 2地点全景、同北半
図版34 北堀新田遺跡B地点全景
図版35 北堀新田遺跡B地点南半、同東半
図版36 4・5号住居跡
図版37 5~7号住居跡
図版38 8・9号住居跡
図版39 9・10号住居跡
図版40 10~12号住居跡
図版41 12・13号住居跡
図版42 13・14号住居跡
図版43 14・15号住居跡
図版44 15~17号住居跡
図版45 17・18号住居跡
図版46 19号住居跡
図版47 20・21号住居跡
図版48 21~23号住居跡
図版49 24~26号住居跡
図版50 26~28号住居跡
図版51 29・30号住居跡
図版52 30・31号住居跡
図版53 31・32号住居跡
図版54 33~35号住居跡
図版55 36号住居跡
図版56 37・38号住居跡
図版57 1・2号掘立柱建物跡
図版58 3号掘立柱建物跡、1~3号井戸跡
図版59 14~21号土坑
図版60 22~28号土坑
図版61 29~35号土坑

図版62 38~40・43~46・48号土坑
図版63 47・49・51~55号土坑
図版64 56~62号土坑
図版65 63~68・71号土坑
図版66 69・73~76・78~82号土坑
図版67 3~7号溝跡
図版68 8~11号溝跡
図版69 4号住居跡出土遺物、5号住居跡出土遺物(1)
図版70 5号住居跡出土遺物(2)、7~12号住居跡出土遺物
図版71 13~15号住居跡出土遺物
図版72 17・18号住居跡出土遺物、19号住居跡出土遺物(1)
図版73 19号住居跡出土遺物(2)、21~24・26・27号住居跡出土遺物
図版74 29~35号住居跡出土遺物
図版75 36~38号住居跡、2号掘立柱建物跡、27・32・56号土坑、10号溝跡、遺構外出土遺物

久下東遺跡

図版76 久下東遺跡遠景、同G1~G3地点全景
図版77 久下東遺跡G1~G3地点全景、同G3地点、北東半掘立柱建物跡群
図版78 298~301号住居跡
図版79 302・303号住居跡
図版80 302号住居跡
図版81 303号住居跡
図版82 304~306号住居跡
図版83 307号住居跡
図版84 308号住居跡
図版85 309~311号住居跡
図版86 312~315号住居跡
図版87 315~318号住居跡
図版88 18~21・23号掘立柱建物跡
図版89 21~24号掘立柱建物跡
図版90 30~32号井戸跡
図版91 162・164・165・580・583~585号土坑
図版92 586・589・590・592~595号土坑
図版93 596~601号土坑
図版94 602~605号土坑
図版95 606~611号土坑
図版96 612~619号土坑
図版97 620~626号土坑
図版98 34・88・89・98号溝跡
図版99 300~302号住居跡出土遺物

- 図版100 303・307・308号住居跡出土遺物
図版101 309・310号住居跡出土遺物
図版102 311～313・315・318号住居跡、31号井戸
跡、580・595・600・611・613号土坑、
88・97号溝跡、遺構外出土遺物
図版103 北堀新田前遺跡2号墓出土の炭化種実

第 I 章 調査にいたる経緯

本庄市は、利根川をはさみ群馬県域と隣接する埼玉県北部に位置する。その地理的位置から古来より現在の群馬県域と密接な関係をもち、交通・交流の結節点として文物が逸早く流入する地域でもあった。そうした地の利を活かし、平成5年に地方拠点法に基づく「本庄地方拠点都市地域」の指定を受け、埼玉県北部の中心拠点として、現在の上越新幹線本庄早稲田駅周辺における「本庄新都心地区」の整備計画を進めてきた。また、平成8年以降、整備事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、埼玉県教育委員会、本庄市、本庄市教育委員会の三者は、具体的な協議を積み重ね、平成14年3月20日に「本庄新都心土地区画整理事業地区内の埋蔵文化財に関する協定書」を締結するに到った。

その後、平成16年の上越新幹線本庄早稲田駅開業を経て、独立行政法人都市再生機構への事業主体の移行を機に事業の再検討が行われるとともに、平成18年には「本庄都市計画事業本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業」の施行規定、および事業計画が認可された。これを受け、平成18年11月10日、都市再生機構本庄都市開発事務所、埼玉県教育委員会、本庄市、本庄市教育委員会の、四者により、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の取扱いについて定めた「本庄早稲田駅周辺地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。

事業地内における発掘調査に関しては、平成18年度に七色塚遺跡B地点(53-071)と北堀新田前遺跡A地点(53-063)の2遺跡の調査を実施し、平成19年度には、浅見山I遺跡A・B地点(53-114)、北堀久下塚北遺跡A地点(53-066)、久下東遺跡A・B地点(53-064)の3遺跡の発掘調査を順次実施した。続く平成20年度には、北堀久下塚北遺跡B・C1・D1地点、久下東遺跡C・D・E地点、久下前遺跡A・B地点(53-065)の調査を実施した。

平成21年度には、引きつづき久下前遺跡C1～C3地点、北堀新田遺跡A1・A2地点(53-062)、宥勝寺北裏遺跡A1・A2・B1・B2地点(53-109)、北堀久下塚北遺跡C2・D2地点、平成22年度には、久下前遺跡C4地点、D1～D3地点、E1・E2地点、F1～F3地点、久下東遺跡F1・F2地点、北堀新田遺跡A2・B地点、平成23年度には、久下前遺跡G地点、久下東遺跡G1～G3地点、同日地点の各調査地点の調査を実施した。

以上の調査を行なった各遺跡、地点の内、都市再生機構の事業に係る調査を実施した地点(浅見山I遺跡B地点を除く)に関しては、調査の翌年度に整理作業を行ない報告書を刊行し、以降本庄市の事業に係る地点に関しても漸次報告書を刊行している(恋河内・松本 2008、松本・大熊他 2009、恋河内・的野 2010、松本・的野 2010、恋河内 2012、松本 2013、恋河内・的野 2014)。

ここに報告する北堀新田前遺跡A2・A3地点、北堀新田遺跡A2・B地点、久下東遺跡G3地点は、平成18・21・22・23年度の調査地点の内、本庄市の事業に係る調査を実施した地点にあたる。北堀新田前遺跡A2・A3地点の調査は、平成18年1月9日から同年4月6日まで、北堀新田遺跡A2・B地点の調査は、平成21年12月4日から同年12月22日、平成22年4月7日から同年8月17日まで、久下東遺跡G3地点の調査は、平成23年8月26日から同年10月27日まで実施した。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

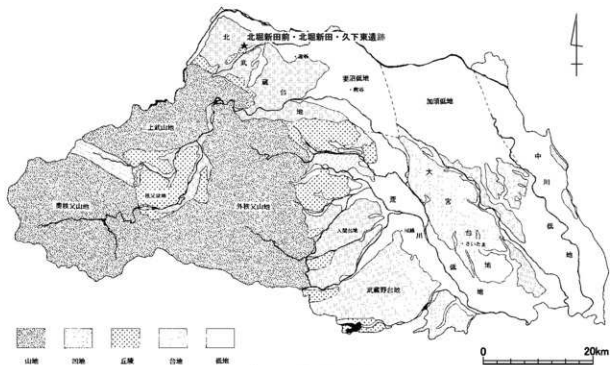
北堀新田前遺跡、北堀新田遺跡、久下東跡の3遺跡は、本庄市域北半のほぼ中央、上越新幹線本庄早稲田駅の北～北東方向に400～600mほど離れた位置にある。

本庄市は、東西に長い埼玉県の北端、利根川をはさみ群馬県伊勢崎市と境を接し、北関東への入り口とも呼ぶべき位置を占めている(第1図)。平成18年に児玉町と合併したことで、本庄市域は、南に大きく拡大し、上武山地に連なる山地、丘陵部をその内を含むこととなった。

本庄市の地形は、利根川右岸の低地、沖積地からなる北東部、市街地化の中心をなす台地、低位段丘、残丘の織りなす中央部、丘陵、山地の広がる南西部の3つに大きく分けることができる。

低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流に広がる妻沼低地、加須低地へと連なる。台地は、いわゆる北武蔵台地最北の本庄台地であり、主に神流川扇状地と身馴川扇状地の複合扇状地性の台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町淨法寺付近を扇の要とし、扇の端は本庄段丘崖を形作っている。身馴川扇状地は、北西側を児玉丘陵、生野山丘陵、浅見山丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地にはさまれた一帯である。この女堀川、身馴川(小山川)などの諸河川に刻まれた低位段丘、台地を主とする中央部の一帯が、市域でも最も遺跡が濃密に分布する範囲である。山地は、上武山地に属する陣見山、不動山などの山並で、北東斜面は裾野を広げ、児玉丘陵へ、さらに北東の生野山丘陵、浅見山丘陵など切れ切れの残丘に連なる。

以下報告する北堀新田前遺跡、北堀新田遺跡、久下東遺跡は、市域中央の男堀川と女堀川に挟まれた低位段丘の南縁寄りに立地する。



第1図 埼玉県の地形

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

北堀新田前遺跡、北堀新田遺跡、久下東遺跡周辺を中心に主要な遺跡に限って、簡単に触れることにしたい(第2～5図)註(1)。

旧石器時代の遺跡は、周辺一帯では、浅見山Ⅰ遺跡(11:以下、()内の数字、アルファベットは、第2・3・5図の遺跡番号、遺跡略号と一致する)、大久保山遺跡(12)、久下前遺跡(4)、下田遺跡(17)、古川端遺跡(44)、西五十子台端屋敷遺跡(46)、社員路遺跡(83)、西富田・四方田条里遺跡(a)、旭・小島古墳群(N)の三笠山古墳周辺、城の内遺跡(53)、将監塚遺跡(94)、古井戸遺跡(95)などがあげられる。

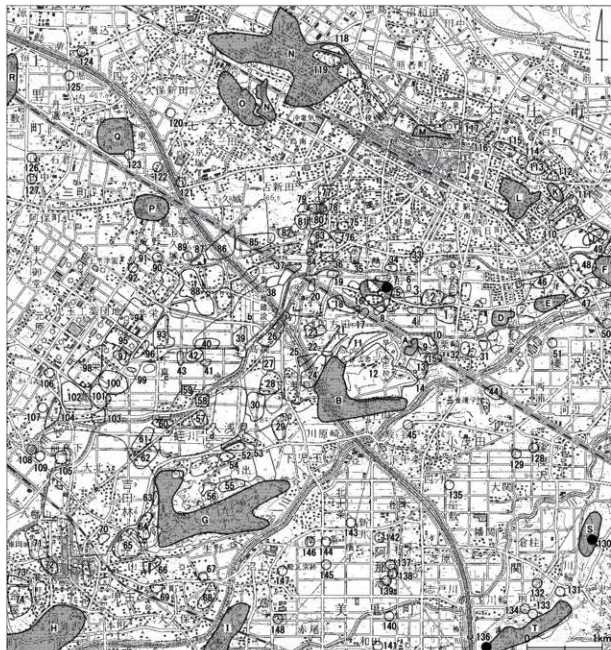
これら諸資料の大半は表面採集資料、あるいはそれに類する資料である。見玉地域全体で調査例が乏しく、宥勝寺北裏遺跡の丘陵上で明黄褐色ローム層中より出土したとされるチャート製の剥片(橋本・佐々木・高橋他 1980)、浅見山Ⅰ遺跡の丘陵斜面のローム層中より出土した黒曜石製の石器群(松本・大熊他 2009)が、稀少な発掘調査例である。ただし、近年わずかずつではあるが資料が加わりつつあり、僅少なから調査例のある丘陵部だけでなく、台地部縁辺や低位段丘上にも散漫ではあるが広範に旧石器時代の遺物が分布すること、しかもその中には、武蔵野台地の「Ⅳ層上部の段階」をさかのぼる資料がやや目立つことなどが判ってきている。今後台地、低位段丘上の旧石器時代遺跡に対しても、機会があり次第発掘調査を行ない、基礎資料を得る必要があるであろう。

わずかに遺物が出土しているだけの遺跡を除けば、縄文時代の遺跡も周辺には多くはない。遺構の検出された遺跡は、七色塚遺跡(8)、大久保山遺跡(12)、西富田前田遺跡(19)、西富田・四方田条里遺跡(a)などごく少数である。いずれも縄文時代前期後半からそれ以降の小規模な集落跡の一部である。より上の女堀川の中流域では、縄文時代中期中葉以降、遺構の検出例が増加するとともに、将監塚遺跡(94)、古井戸遺跡(95)、新宮遺跡(101)のような大規模な集落が営まれる端緒が開かれるようである。これらの大規模な集落は、いずれも中期後半に盛期を迎え、中期後半の新しい段階の内に衰微する。七色塚遺跡(13)、西富田前田遺跡(19)、西富田・四方田条里遺跡(a)などは、この中期後半の新しい段階に低位段丘、あるいは低地内の微高地上に拡散、進出した小規模、短期的な集落跡と見てよいであろう。

弥生時代の遺跡に関しては、中期前葉から中葉にかけて、丘陵部の浅見山Ⅰ遺跡(11)の土坑群をはじめとして、低位段丘や台地上でも、今井条里遺跡(b)や夏目西遺跡(81)の土坑のように、遺構の検出例が見られるようになる。また、近年、該期の土器片が出土するだけの遺跡も、根田遺跡(22)、四方田遺跡(23)、雷電下遺跡(24)、笠ヶ谷戸遺跡(33)、山王山遺跡(65)、小島本伝遺跡(118)など確実に増加しており、住居跡は見られないものの、丘陵部の一角だけでなく、沖積地をめぐる低位段丘や台地縁辺に、かなりの範囲で該期の人々の営為が及びはじめたことを物語るようである。

弥生時代中期後半～後期前半に関しては、周辺では、浅見山Ⅰ遺跡の破片資料中に、この段階かと思われる資料がわずかに見られる以外はほとんど不明である。多くの地域で、弥生時代集落の盛期を迎える中期後葉段階に、遺跡はもとより遺物さえ極少ないということには、何らかの理由があると考えざるをえない。

つづく後期後半以降に関しても、資料はそれほど多くない。集落跡と呼ぶ遺構のまとまりが見



〈本庄市〉 1. 北堀新田前 2. 北堀新田 3. 久下東 4. 久下前 5. 北堀久下塚北 6. 北堀久下東北 7. 公卿塚古墳 8. 七色塚 9. 宥勝寺北裏 10. 宥勝寺裏墳輪窓跡 11. 浅見山 I 12. 大久保山 13. 大久保山寺院跡 14. 東谷古墳 15. 東谷 16. 元富 17. 下田 18. 観音塚 19. 西富田前田 20. 九反田 21. 山根 22. 根田 23. 四方田 24. 雷電下 25. 飯玉東 26. 後張・川越田 27. 東牧西分 28. 関根氏館跡 29. 鷺山古墳・鷺山南 30. 浅見山境北 31. 東本庄 32. 栗崎館跡 33. 笠ヶ谷戸 34. 伊丹堂前 35. 雌漆 36. 西富田本郷 37. 地神 38. 塔頭 39. 今井川越田 40. 前田甲 41. 柿島 42. 藤塚 43. 堀向 44. 古川端 (美里町) 45. 村後 (本庄市) 46. 田端屋敷 47. 台 48. 西五十子大塚 49. 東五十子赤坂 (深谷市) 50. 六反田 51. 大寄 (本庄市) 52. 新屋敷 53. 城の内 54. 金鑽神社古墳 55. 向田 56. 壱丁田 57. 共和小学校校庭 58. 蛭川氏館跡 59. 左口 60. 蛭川坊田 61. 辻堂 62. 南街道 63. 吉田林割山 64. 阿知越 65. 山王山・御林下 66. 児玉清水 67. 下町古墳群 68. 大久保 69. 児玉大天白 70. 女塚 71. 鎌岡城 72. 八幡山 73. 金屋北原 74. 金屋西 75. 薬師 76. 薬師元屋舗 77. 二本松 78. 西富田 79. 弥藤次 80. 夏目 81. 夏目西 82. 西富田新田 83. 社具路 84. 社具路南 85. 今井諏訪 86. 久城前 87. 久城往東北 88. 今井原屋敷 (上里町) 89. 往東北 90. 熊野太神南 91. 八幡太神南 92. 立野南 (本庄市) 93. 将監塚東 94. 将監塚 95. 古井戸 96. 内出 97. 古井戸南 98. 南共和 99. 平塚 100. 塚畠 101. 新宮

第2図 周辺の主要遺跡(1)

られるようになるのは、周辺一帯では、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の段階を待たねばならない。浅見山Ⅰ遺跡(11)、大久保山遺跡(12)、山根遺跡(21)、飯玉東遺跡(25)、生野山遺跡(G)、美里町塚山遺跡(B)と、丘陵上や丘陵裾の低位段丘や微高地などを中心に、小規模で短期的な集落跡が見られるが、そのうちの大半は、古墳時代初頭に属するようである。ただし、この段階、児玉郡市域一帯で、「樽式系」、「吉ヶ谷式系」と呼ばれる弥生土器の製作・装飾手法を色濃く残す土器が隆盛することもあり、截然と時期区分することが困難な資料が含まれる。

古墳時代前期中葉を前後して、弥生土器の伝統を強く残す土器は影をひそめ、東海系や畿内系などとされる土器が多数を占める複雑な土器様相が見られるようになる。現状ではこの間の経緯を細部にわたって究明するには至っていない。周辺の遺跡に限るなら、前者の土器様相が見られる集落はそのまま途絶え、後者、外來の土器様相に一新された集落は、そうした様相が見られる段階に開村し、以降継続したと思われる事例が大半であり、両者の関係を仔細に知るための手がかりはわずかである。

古墳時代前期の集落遺跡は、丘陵部に分散する弥生時代後期の遺跡の様相から大きく変貌を遂げ、河川に縁取られた台地縁辺、低地内の自然堤防、低位段丘上に多くの集落遺跡が形成されることが特徴的である。該期の集落跡である久下東遺跡周辺に限っても、久下前遺跡(4)、七色塚遺跡(8)、下田遺跡(17)、山根遺跡(21)、西富田条里遺跡(a)、地神遺跡(37)、塔頭遺跡(38)、今井条里遺跡(b)と、東から西へ枚挙にいとまがない。中流域のさらに上でも後張・川越田遺跡(26)など有数の遺跡が居並ぶが、多くの遺跡が古墳時代前期中葉以降営まれた集落の跡である。この段階に沖積地の本格的な開発が始まったのであろう。

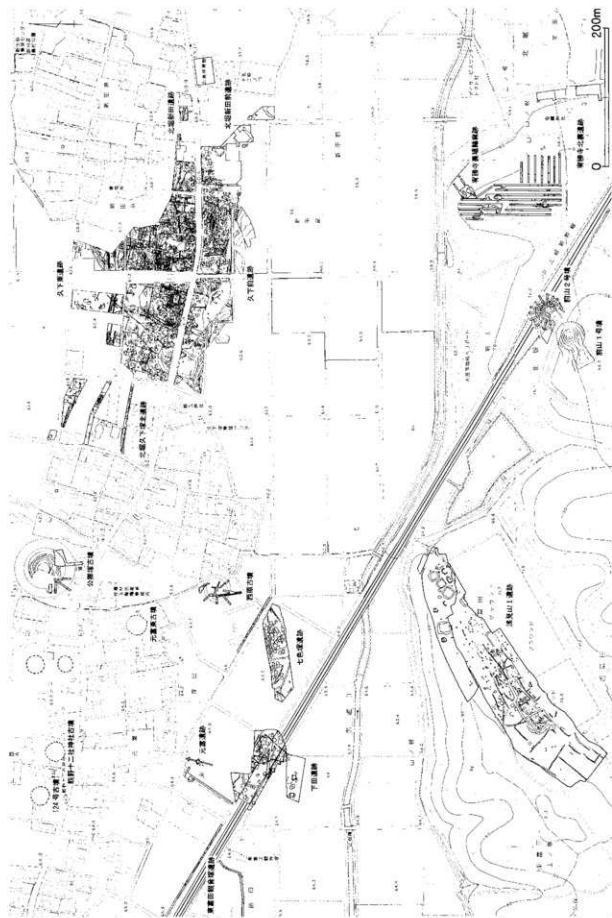
古墳時代前期の傾向を引き継ぎ、さらに倍加したのが、古墳時代中期の集落遺跡の様相である。中期、そして中期以降、遺跡の規模、遺跡数、流域内での広がり、いずれをとっても、急激な増加を見ることは間違いない。上記した古墳時代前期の遺跡の多くで、中期以降、竪穴住居跡の数が増すとともに生活域の規模が大きく拡大する。九反田遺跡(20)、笠ヶ谷遺跡(33)、雌濠遺跡(35)、弥藤次遺跡(79)、夏目遺跡(80)、夏目西(81)、西富田新田遺跡(82)など、中期段階より新たに開村したと思われる集落遺跡も多数見られる。この集落の拡大、増加傾向は、7世紀半ば頃まで続くようである。

なお、上述したように久下東遺跡、久下前遺跡でも、古墳時代前期の住居跡が相当数検出されており、北堀久下塚北遺跡、久下東遺跡、北堀新田遺跡、久下前遺跡、北堀新田前遺跡の5遺跡が一体で、

(本中市) 102. 辻ノ内 103. 上真下東 104. 真下境東 105. 金佐奈(神川町) 106. 元屋敷 107. 真下境西 108. 八荒神南 109. 反り町(本中市) 110. 諏訪新田D 111. 諏訪新田A～C 112. 御堂坂 113. 薬師堂東 114. 薬師堂 115. 天神林Ⅱ 116. 天神林 117. 本庄城址 118. 小島本伝 119. 元屋敷(上里町) 120. 窪前 121. 本郷東 122. 愛宕 123. 愛宕耕地 124. 耕安地B地点 125. 中塚 126. 田中西 127. 田中前(深谷市) 128. 石葺A 129. 石葺B 130. 西山5号墳(美里町) 131. 川輪聖天塚古墳 132. 石神 133. 長坂 134. 長坂聖天塚古墳 135. 日の森 136. 諏訪山古墳 137. 向居 138. 勝丸稲荷神社古墳 139. 道灌山古墳 140. 志渡川遺跡・志渡川古墳 141. 南志渡川 142. 堂山古墳 143. 十条条里 144. 新倉館跡 145. 烏森 146. 樋之口 147. 水殿瓦窯跡 148. 宮下

A. 前山古墳群 B. 塚山古墳群 C. 東富田古墳群 D. 西五十子古墳群(西群) E. 西五十子古墳群(東群) F. 東五十子古墳群 G. 生野山古墳群 H. 長沖古墳群 I. 広木大町古墳群 J. 鶴森古墳群 K. 御堂坂古墳群 L. 塚合古墳群 M. 北原古墳群 N. 旭・小島古墳群 O. 三田古墳群 P. 本郷古墳群 Q. 東塚古墳群 R. 帯刀古墳群 S. 西山古墳群 T. 諏訪古墳群
a. 西富田・四方田条里 b. 今井条里 c. 児玉条里(児玉北部地区) d. 児玉(鉦川)条里 e. 児玉条里 f. 五十子陣跡

第3図 周辺の主要遺跡(2)



第4図 発掘調査地点近傍の遺跡(1) (志河内・的野 2014より転載)

古墳時代前・中期、そしてそれ以降へと続く規模の大きな集落跡を構成する模様である。

また、この一帯は、古墳時代前期から中期にかけて方形周溝墓や古墳に関して、興味深い遺跡が集中する一帯でもある。

まずは、今回報告する古墳時代前期の方形周溝墓1基、前方後方墳2基が検出された北堀新田前遺跡(1)があり、北堀新田前遺跡の北西、久下東遺跡の西、250m余には、古墳時代中期前葉とも目される墳丘径60m前後の短い造り出しの付いた円墳とされる公卿塚古墳(7)がある。

さらに久下東遺跡および久下前遺跡の沖積地を隔てた南側の丘陵上には、古墳時代前期末葉の前方後円墳、方墳である前山1・2号墳(A)がある。前山1・2号墳のある丘陵先端をわずかに下った痩せ尾根上の宥勝寺北裏遺跡では、古墳時代前期の7基の方形周溝墓が確認されており、前山1・2号墳の北西400mほど離れた北東にのびる支丘先端の南斜面には、古墳時代前期後半～末葉の12基の方形周溝墓からなる墓域の調査がなされた浅見山I遺跡がある。この墓域の中でも丘陵裾の最も低い位置に造られた周溝墓は、周溝の形状から前方後方墳の一種であることが推定されている。

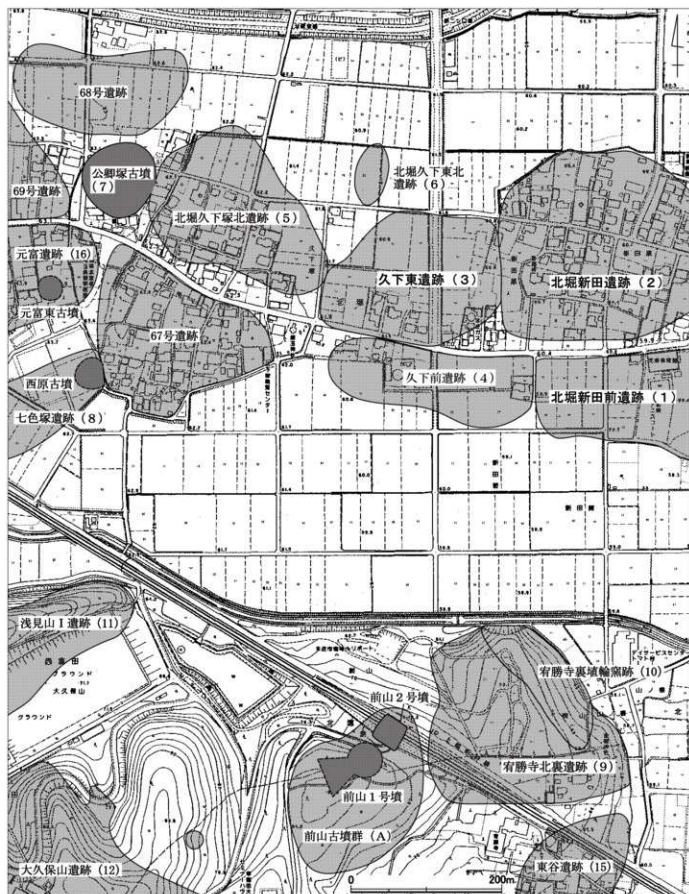
つまり、久下東遺跡を中心として、おおよそ600、700mほどの範囲内に、古墳時代前期のある段階以降、中期前葉にかけて、時期を違え、種々の立地や墳形、規模の5つの墓域が形成されたことになる。北堀新田前遺跡や北堀新田遺跡、久下東遺跡の集落に暮らした人々は、仰ぎ見る丘陵上に、あるいは同じ段丘上に展開する、限られた人々の墓が織りなす光景とともに日々過ごしたことであろう。

さらに周辺に目を転じるなら、大久保山の南側、東西にのびる支丘上には、7基の方形周溝墓、2基の前方後方墳が報告されている本庄市および美里町の塚本山古墳群(B)があり、塚本山古墳群の北西には、7基の方形周溝墓が検出された飯玉東遺跡(24)、南西には、墳丘長60m前後の前方後方墳とされる鷺山古墳(28)がある。鷺山古墳の南西には、生野山古墳群(G)が展開する生野山の残丘が連なる。生野山古墳群には、中期以降、公卿塚古墳(7)と同種の格子目タタキ技法の円筒埴輪を伴う金鏡神社古墳(53)、生野山將軍塚古墳や埴輪を伴わないとされる生野山物見塚古墳などの諸古墳が造られたようである。

塚本山古墳群の南東、身馴川(小山川)沿いの微高地上には、やや特異な形状の前方後方墳が検出された美里町村後遺跡(44)、扇状地内をさらに下った微高地上には、方形周溝墓が4基検出された深谷市大寄B遺跡(50)、志戸川流域の微高地上には、下流から方形周溝墓11基、前方後方墳1基が検出された深谷市石碓B遺跡(128)、方形周溝墓9基、前方後方墳1基が検出された美里町南志渡川遺跡(140)、および志渡川古墳(139)がある。南志渡川遺跡の東側、諏訪山丘陵の西麓裾部には、6基の埋葬施設を有し、方格規矩鏡、獣形鏡、石製模造品などが出土した美里町長坂聖天塚古墳(133)があり、同丘陵の先端部には、特異な形態の壺形埴輪が出土した美里町川輪聖天塚古墳(130)がある。両古墳は、ともに墳丘径40、50mの円墳とされている。

以上から明らかなように、周辺一帯が、古墳時代前期から中期にかけて、種々の立地、形態、規模の墳墓、墓域の集中地帯であることが分かるであろう。

また、周辺には、塚本山古墳群(B)、東富田古墳群(C)、西五十子古墳群(D・E)、東五十子古墳群(F)、生野山古墳群(G)など、該期以降の古墳群も多い。宥勝寺北裏遺跡の支丘先端の北東斜面には、操業時期が6世紀後葉と目される、県内でも稀少な埴輪窯跡である宥勝寺裏埴輪窯跡(10)があることも、墳墓群の消長と関連し問題となるであろう。



第5図 発掘調査地点近傍の遺跡(2)

周辺の奈良・平安時代の集落跡に関しては、今回報告する北堀新田前遺跡(1)、北堀新田遺跡(2)、久下東遺跡(3)をはじめとして、久下前遺跡(4)、北堀久下塚北遺跡(5)、七色塚遺跡(8)、下田遺跡(17)、観音塚遺跡(18)と沖積地をめぐる微高地や自然堤防、低位段丘面上に、多数の遺跡が形成されたようである。この段階は、こうした中小河川流域に展開する集落と並んで、本庄台地の利根川や烏川の沖積地にのぞむ本庄台地の縁辺に、ほとんど切れ目がないまでに集落が展開する段階でもある。

本地域が平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した武蔵七党の児玉党の本貫地であり、また中世後期には、関東管領上杉方の防衛線としての五十子陣があったことから、中世からそれ以降も、由緒ある地名や时期的に関連する遺跡が多数見られる。

中世、あるいはそれ以降の遺跡に関しては、久下東遺跡(3)で、館跡を取り巻くと思われる濠状遺構や溝、掘立柱建物跡、井戸跡、地下式墳や土坑が検出されており、久下前遺跡でも区画の溝や多数の土坑、井戸跡が検出されている。また、対岸の浅見山丘陵には、東谷中世墓群、大久保山寺院跡(13)、と大久保山遺跡(12)内の中世後期の屋敷跡や館跡その他の中世遺構群、浅見山I遺跡(11)I次調査で検出された中世瓦窯跡や寺院跡と見られる遺構が検出されており、様々な考古学的な情報が得られている。また、より下流の一番では、東本庄遺跡(31)、栗崎館跡(32)などの館跡や館跡に関わる濠跡、さらに下流の五十子陣に関連する可能性のある諸遺跡と、近年資料が急速に増加しつつある。

註

- (1) 以下、とくに明記しない場合には、各遺跡の報告書および『本庄市史 資料編』、『本庄市史通史編I』(本庄市史編集室編 1976・1986)による。なお、第2・3図は、遺跡分布の概略図であり、古墳群などに関しては、おおよその範囲を示すにとどまる。

第三章 北堀新田前遺跡A2・A3地点の調査

第1節 調査の概要

北堀新田前遺跡は、女堀川と男堀川にはさまれた東西に長い低位段丘の南面する平坦地から緩斜面にかけ位置する遺跡である。同遺跡では、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に関連して平成18年度に発掘調査を行なった。都市再生機構が事業を担当した都市計画道路予定地であったA1地点に関しては、すでに発掘調査報告書を刊行している(恋河内・松本 2008)。

ここに報告するのは、A1地点と接するA2地点と既存道路をはさみA2地点の南東に位置するA3地点の2地点についてである(第7・8図)。両地点は、北から南に向かって緩やかに傾斜する低位段丘の南縁にあたり、調査範囲の西側、南西側は、かつての男堀川とその支流などにより形成された氾濫原や彎入する小埋没谷により縁どられている。A2・A3地点の調査面積は、3,461㎡である。

A2・A3地点で検出した遺構の内、本報告書で記載する遺構は、堅穴住居跡17軒、掘立柱建物跡4棟、方形周溝塹1基および前方後方墳2基、井戸跡6基、土坑46基、溝跡6条、多数のピットである(第7・8図)。なお、上記掲載住居跡とともに、A1地点の既報告(恋河内・松本 2008)の住居跡である4・5号住居跡について追加報告を行なう。

なお、A2地点は、中央東寄りに調査範囲が大きく狭まりくびれる部分があるため、以下の記載では、くびれ部に境にA2地点を便宜的に2つに分け、A2地点北西部、南東部の呼称を用いる場合がある。

北堀新田前遺跡A2・A3地点の低位段丘上の基本層序は、以下に記すとおりである。後段で報告する北堀新田遺跡A2・B地点、および久下東遺跡G3地点も、同じ低位段丘上にあるため、以下の基本層序がおおむね当てはまるものと考えられる。なお、今回報告する調査地点が地形的に限られるため、低位段丘下の低地部、谷部の基本層序については、ここでは省略する。

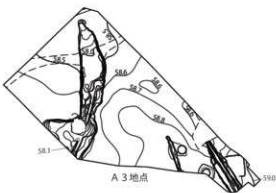
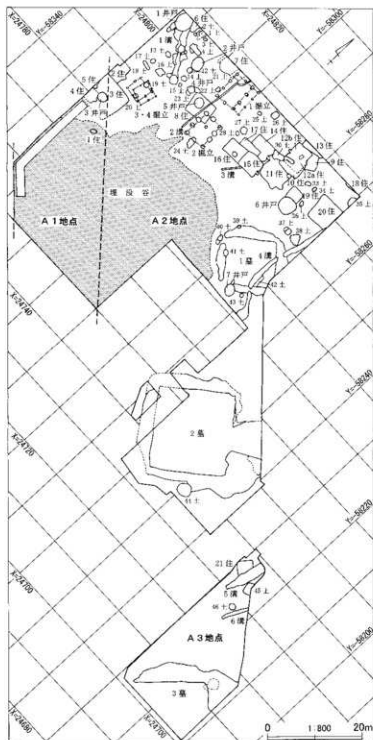
- I a 層：暗褐色～灰黄褐色土層。台地や段丘で通有の表土層であり、現耕作土である。しばしばAs-A(浅間A軽石)を多く含み、粒子が粗く、乾燥すると灰色みを帯びる。
- I b 層：灰黄褐色土層。調査範囲の南半部分では、I a 層とした現耕作土の下に、昭和40年代に行なわれた土地改良事業時の造成土である本層が見られる場合も多い。多く灰色みを帯びシャリシャリした砂を含む土を不規則に含む造成土である。
- I c 層：暗褐色～灰黄褐色土層。I a 層に近いが、ところによりローム粒、ローム小ブロックが多い。上半には、As-Aが点在する。古い表土。「I'層」と表記した場合がある。
- II a 層：暗褐色土層。ローム粒・ローム小ブロックを含む暗褐色土である。この層の上部数cmには、散漫ながらAs-Aが微量含まれる。断面観察では、古墳～奈良・平安時代の遺構の掘り込み面は、この層の下部にまでくい込む場合が多く、また中・近世遺構の掘り込み面は、この層中ないしは上面になるようである。下半は、やや黒みが強くなり、しまりが増す。遺構の掘り込み面が、多くこの層中にあるため、場所により焼土粒、炭化物、土器片などが集中する。
- II b 層：暗褐色土層。中・近世遺構の覆土を、II b 層とする。基本的にII a 層からなるが、As-A降下以降の近世遺構の覆土には当然ながらAs-Aが含まれ、また、ある種の中世土坑に

見られるローンを斑点状に含む覆土などと多様である。総じて次に記すⅡc層より黒みが弱く、しまりが弱い場合が多いようである。

Ⅱc層：暗褐色土。古墳～奈良・平安時代の遺構覆土を、Ⅱc層とする。Ⅱa層と大きな違いのない暗褐色土がベースとなるが、より黒みが強い場合、いわゆる旧表土の黒褐色土が多かれ少なかれ含まれるようである。とくに調査区南東半の方形周溝墓、前方後方形周溝墓の場合、周溝覆土として純層に近い黒褐色土、あるいは黒色土が見られる例もある。この黒褐色土、あるいは黒色土に類する土は、純層に近い状態で谷部の堆積土の一部にも見られるようである。いわゆる旧表土の黒褐色土については、現状では堆積時期の限定ができず、今後の課題とせざるをえない。

Ⅲ層：黄褐色土層。いわゆるソフトローンに類似した黄褐色の軟

ローンに類似した黄褐色の軟



第7図 北堀新田遺跡A1～A3地点遺構分布図

質ローム層である。調査範囲の北半のやや高い部分などに残存するが、そうした残りの良い部分でも層厚は、10cmほどである。次に記すIV層との境は、上下に乱れるらしく、はっきり層として認識できない範囲もかなりあるようであった。

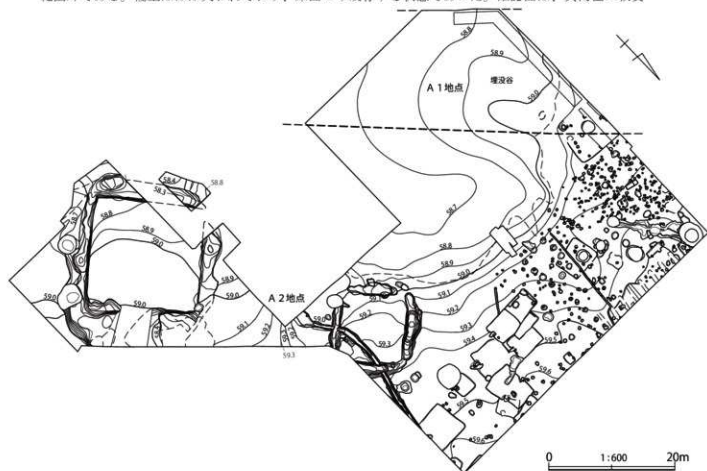
IV層：黄褐色土層。黄褐色のいわゆるハードローム層である。通常この層の上部にAs-Y Pの団塊状、雲状に濃集する部分が見られるが、局所的である。層厚は、30cm前後である。IV層より下位の土層に関しては、個別の記載を行なわないが、段丘縁辺では、IV層の下に、層厚20cm前後のIV層より微妙に黒みの強い褐色ローム層が堆積し、この層の下に、上から順に層厚10cm前後のややシルト化したにぶい黄褐色ロームの漸移層、小礫、砂粒を含む淡い「小豆色」のシルト化したローム層が堆積している。

第2節 検出された遺構と遺物

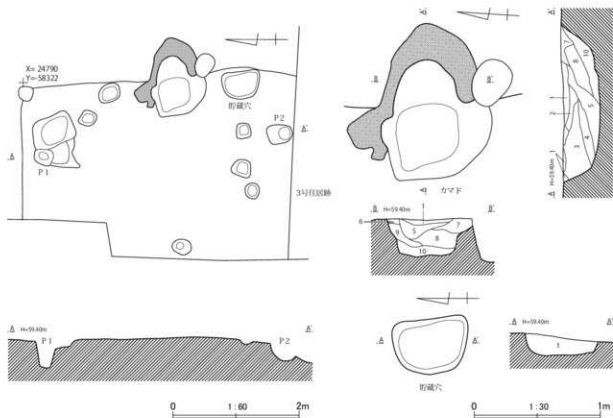
1 竪穴住居跡

2号住居跡（第9図、図版4）

A2地点北西部の西縁中央で検出した遺構である。南壁側を3号住居跡に切られ、西壁側は、調査範囲外である。覆土はほぼ失われており、床面のみ残存する状態であった。確認面は、黄褐色の軟質



第8図 北堀新田前遺跡A2・A3地点全体図



2号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。炭化物を含む暗褐色土を主に、焼土粒を多く含む。灰白色粘土をモヤモヤ含む。1～5層は、カマドの覆土。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土（炭化物粒を多量に含み黒みの強い暗褐色土）が濃集する。焼土粒も雲状に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロック、灰白色粘土、焼土粒が混じる。
- 4層：褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、焼土粒を少量含む。
- 5層：褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土を主に、焼土粒を多く含む。灰白色粘土をモヤモヤ含む。

- 6層：灰褐色土層。灰白色粘土と暗褐色土の混合土。焼土粒を少量含む。6・7層は、カマド袖および奥壁基部構築材。
- 7層：褐色土層。5層に近いが、焼土粒が多い。灰白色粘土とロームも5層より多い。
- 8層：褐色土層。7層に近いが、ロームが多く、灰白色粘土が少ない。8～10層は、カマド掘り方埋土。
- 9層：褐色土層。8層に近いが、灰白色粘土が多く、7層より焼土粒が多い。
- 10層：褐色土層。ロームを主に、焼土粒を少量含む。

2号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含む。

第9図 2号住居跡平面・断面図

ローム層上面である。

平面形は、方形になるうか。現存規模は、主軸方向で2.80m、副軸方向で4.26m、主軸方位は、おおむね東向きになるようである。床面は中央がやや高くなるが、ほぼ平坦で、硬化は著しくない。

主柱穴はP1・P2の2つを検出した。ともにやや歪な方形に近い平面形で、深さはP1が40cm、P2が27cmである。P1と重複するピットは、あるいは時期の異なるピットの可能性もある。貯蔵穴は、カマド右脇の壁寄りに設けられている。平面形は、やや歪な台形に近く、側壁は比較的急峻に掘り込まれている。全長60cm、横幅45cm、最深部での深さは16cmである。

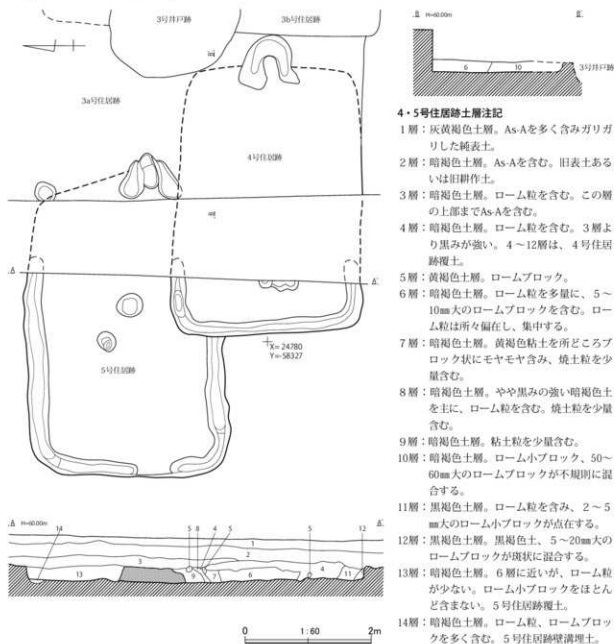
カマドは、残存する東壁の中央で検出した。カマドは基部のみ残存しており、奥壁、および袖の一

部に灰白色の粘土が広がっている。燃焼部は、角張った形に掘り込まれている。1～5層が本来のカマド内堆積土であり、5層の下面、4層下面の一部が燃焼面になるのであろうが、被熱赤化の痕跡はわずかな範囲である。全長127cm、深さは28cmである。

遺物は土師器細片がわずかに出土したのみである。残存状態が悪いが、カマドの特徴などから見て、古墳時代以降の遺構であろうか。

4号住居跡 (第10図)

A1地点北端で検出した遺構である。一部報告済みの住居跡であるが(恋河内・松本 2008)、既報告部分の西側(久下前遺跡F1地点)を調査したことで、平面形、規模などに大きく変更を加える必要が生じることとなった。



第10図 4・5号住居跡平面・断面図

3～5号住居跡と重複し、それらの住居跡を切って造られている。北堀新田前遺跡A1地点内では、本住居跡に伴う床面等を検出することができなかった。なお、久下前F1地点内で調査した西壁周辺に関しては、覆土はほぼ削平されており、床面と壁溝がかろうじて残る状態であった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅の丸い長方形であろう。規模は、いずれも推定値になるが、主軸方向で4.34m、副軸方向で2.92m、主軸方位は $N-90^{\circ}-E$ である。床面には微妙な凹凸があるが、全体的にはおおむね平坦である。床面の硬化は顕著ではない。西壁とその周辺にのみ深さ12～22cmの壁溝が見られた。カマドについては、すでに報告済みであり(上掲)、出土遺物についても新たに付け加えることはない。

5号住居跡(第10図)

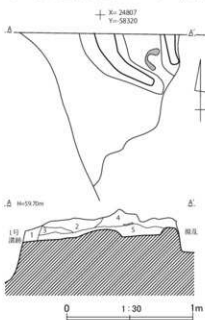
A1地点北端で検出した遺構であり、4号住居跡同様に事実関係についての追加報告のみ行なう。

3a・3b号住居跡を切って造られており、4号住居跡に切られている。久下前F1地点内で調査した遺構西半部分に関しては、覆土はほぼ削平されており、床面と壁溝のみ残る状態であった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅の丸い長方形であろう。規模は、いずれも推定値になるが、主軸方向で4.72m、副軸方向で3.22m、主軸方位は $N-90^{\circ}-E$ である。床面は、おおむね平坦である。床面の硬化は顕著ではない。残存する部分には、深さ10～12cmの壁溝が巡らされており、四周に壁溝があった可能性がある。カマド、出土遺物については、既報告に変更はない(上掲)。

6号住居跡(第11図、図版4)

A2地点北西部北線の西端寄りで検出した遺構である。残存するのは、カマドの一部とその脇のわずかな範囲の床面である。西側を1号井戸跡により壊され、東側から南側にかけて攪乱により壊されている。主軸方位がカマドの燃焼部の向きと大きく違わないとすれば、主軸方位は、北西方向になり



第11図 6号住居跡平面・断面図

6号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含む。As-Aが食い込むように、部分的に混入する。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを少量含む。炭化物を含む。As-Aを部分的に含む。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒が多い。他の層は、焼土粒をほとんど含まないが、この層のみ目立つ。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が少ない。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を含む。1～4層よりしまっている。

そうである。カマドは、半ば調査区界にかかって検出した。わずかに残る袖の基部と燃焼面の一部のみ残存する。袖は馬蹄形のような形で、南東側が開く燃焼部を囲んでいる。残存長は134cm、燃焼面の一部が微弱ながら被熱赤化している。

土師器細片が少量出土しているのみである。出土遺物から見て、古墳時代の住居跡であろう。

7号住居跡 (第12・13図、第1表、図版4・26)

A2地点北西部、北縁西寄りで検出した遺構である。残存するのは南隅を中心とする南西壁、南東壁の一部であり、遺構の大半が調査範囲外になる。1号掘立柱建物跡と重複し、一部を壊されている。また、トレンチャーなどによるものか南北に走る小溝状の擾乱によりほぼ等間隔に床面まで壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅の丸い方形に近い形態になるうか。南東壁を奥壁とすれば、南東方向が主軸方位となる。南東壁の残存長は4.5m、南西壁は2mほどしか残存していない。壁の立ち上がりがしっかりしているのはわずかな範囲であり、床面中央は顕著に硬化している。

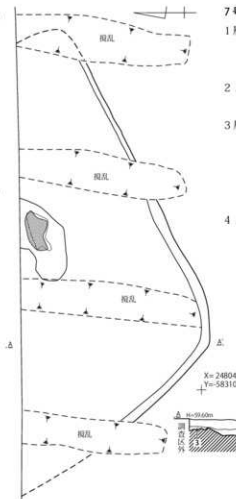
炉跡は、南西壁に寄った位置で検出した。平面形はやや彎曲した長楕円形に近く、長軸方向での現存長は135cmである。浅く床面を掘りくぼめた地床炉で、炉底は明瞭に被熱赤化している。

出土遺物は、少量の土師器片のみである。第13図に図示した出土

遺物のうち、1・2は混入した遺物、3の土器も小破片であり、問題が残る。地床炉をもつことから見て、古墳時代中期、あるいはそれ以前の遺構であろう。

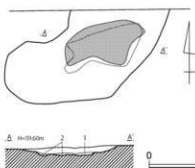
8号住居跡 (第14・15図、第2表、図版4・26)

A2地点北西部中央、西寄りで検出した遺構である。北西隅を2号土坑に、住居跡内の北西の一角を5号井戸跡に、中央を2号溝跡に、南東隅周辺を2号掘立柱



7号住居跡土層注記

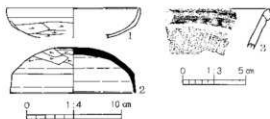
- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のロームブロックを少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土の大ブロック。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、5~60mm大のロームブロックを多量に含む。部分的に暗褐色土とロームは、同量混じる。3・4層は、掘り方埋土。
- 4層: 暗褐色土、暗褐色土とロームが同量塊状に混合する。



7号住居跡炉跡土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を多く含む。焼土粒、炭化物粒をかなり含む。
- 2層: 明赤褐色土層。焼土粒、焼土ブロックを主に、暗褐色土、炭化物粒を含む。本層上面が焼境面。

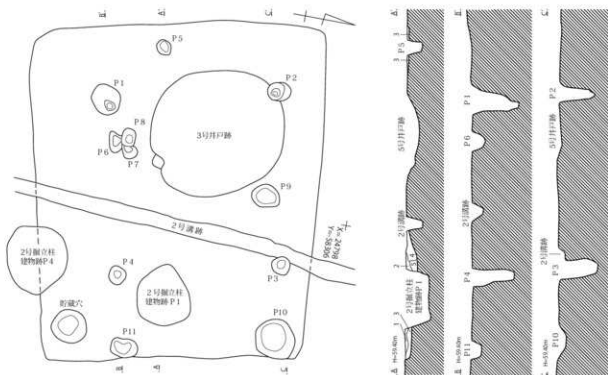
第12図 7号住居跡平面・断面図



第13図 7号住居跡出土遺物

第1表 7号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (14.0) 底径 — 器高 [3.1]	丸底。口縁部内彎。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位~下位ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、石英、雲母 内外—明赤褐色	口縁部へ片、体部1/3残存。
2	須器蓋	口径 (13.3) 底径 — 器高 4.8	天井部は丸みをもつ。口縁部はわずかに外傾する。ロクロナデ成形。	外面—口縁部~体部ロクロナデ。天井部ヘラナゲ後ヘラケズリ。内面—ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外—灰色	1/4残存
3	甕	口径 — 底径 — 器高 —	端部は折り返され、口縁部は微妙に外反しながら、立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—端部はヨコナデ。以下タテのナデ。細かな細線状の擦痕残る。内面—ヨコのミガキ。	灰色の岩片、角閃石などの細砂 内外—暗褐色	樽式



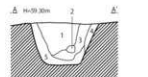
8号住居跡土層注記

- 1層：灰黄褐色土層。10～20mm大のロームを含む。貼床層。しまっている。
- 2層：灰黄褐色土層。1mm大のロームを少量含む。しまっている。この層も貼床層の一部か。
- 3層：明黄褐色土層。ローム中心。10mm大の黒色土を含む。しまっている。3～5層掘り方埋土。
- 4層：灰黄褐色土層。2mm大のロームを少量含む。しまっている。
- 5層：にぶい黄褐色土層。1～5大のロームを多く含む。土器小破片を含む。しまっている。

8号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。かなり黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒を含み、5～20mm大のロームブロックが点在する。
- 2層：黄褐色土層。ハードロームのブロック。
- 3層：暗褐色土層。淡い色調の暗褐色土を主に、ローム粒、ロームブロックを多量に含む。かなりしまっている。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームブロックを含まない。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒とロームブロック間に暗褐色土がつまっている。かなりしまっている。

0 1:60 2m



0 1:30 1m

第14図 8号住居跡平面・断面図

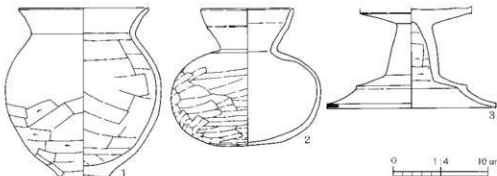
建物跡により壊されている。貼床層と掘り方埋土の一部のみ残存する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、西辺に対して東辺が短い台形に近い形態であり、各辺はかなり直線的である。ただし、主柱穴の位置から見て、北辺は削平され、本来の壁回りを留めていないのかもしれない。一応後述する炉跡の位置の推定と貯蔵穴から東西方向に主軸があるとすると、規模は、主軸方向で5.36m、副軸方向での現存長は4.48m、主軸方位はS-79°-Wである。床面はほぼ平坦で、床面中央部分はわずかに硬化している。

主柱穴はP1～P4の4つである。平面形は、いずれもやや歪な円形、楕円形で、深さはP1が73cm、P2が48cm、P3が55cm、P4が57cmである。南東隅脇のピット、あるいは土坑は貯蔵穴であろう。平面形はやや歪な円形で、バケツ形に掘り込まれている。最大径は57cm、深さは39cmである。他にP5～P11としたピットが検出されている。カマド、炉跡の痕跡は一切見られないが、あるいはP1、P2間にあった炉跡が5号井戸により壊されてしまったとも考えられる。

土師器片が少数出土したのみである。第15図1・2の土器は、住居跡の南側、やや離れた位置で出土したが、本住居跡削平された際に四散した遺物の可能性があると考え、掲載した。

出土遺物、住居形態、カマドがないことから見て、古墳時代後期初頭以前の住居跡と考えられる。



第15図 8号住居跡出土遺物

第2表 8号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 13.6 底径 5.2 器高 17.8	口縁部は外反する。胴部は丸みをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。胴部上位～中位ナゲ。胴部中位～底部ヘラケズリ。底部ヘラナゲ。内面-口縁部ヨコナゲ。胴部～底部ヘラナゲ。	白色の岩片、角閃石、雲母、霏内外-にぶい褐色	3/5残存
2	壺	口径 9.6 底径 6.0 器高 14.5	口縁部は外反し、下位に壁をもつてやや内彎する。胴部は球状を呈す。丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部～頸部ヨコナゲ。胴部上位ナゲ。胴部中位～下位ヘラナゲ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナゲ。頸部～底部ヘラナゲ。単位不明瞭。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母内外-橙色	口縁部～胴部一部欠損
3	高坏	口径 — 底径 (18.0) 器高 [10.6]	体部と胴部に段をもつ。脚部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-坏底部ヨコナゲ。脚部ナゲ。胴部ヨコナゲ。内面-坏底部ヨコナゲ後放射状ヘラミガキ。脚部上位～中位ヘラケズリ。脚部下位ナゲ。胴部ヨコナゲ。	雲母内外-明赤褐色	坏部～胴部1/2残存

9号住居跡 (第16・17図、図版5)

A2地点北西部の中央東寄り、北縁脇で検出した遺構である。10・12a・12b・13号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも古い住居跡である。床面は一切残存しておらず、カマドの燃焼面付近の覆土と掘り方埋土のみ残っている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形ないしは長方形にならうか。主軸方向での現存長は2.42m、副軸方向では3.50m、

主軸方位はN-62° - Eである。

カマドは、北東辺の東隅にやや寄った位置に付設されている。平面形は、奥壁側がくびれる歪な形で、燃焼面の下部のみ残存する。右袖からカマド前面にかけて灰白色の粘土が広がっている。全長は104cm、燃焼面は局所的によく被熱赤化している。土師器片が微量出土している。出土遺物から見て、古墳時代の住居跡であろう。

10号住居跡（第16・17図、図版5）

A 2地点北西部の中央東寄り、北縁近くで検出した遺構である。12a・12b・14号住居跡に切れ、30号土坑に西壁の一部を壊されている。9号住居跡の一部を切って造られている。ただし、12a・12b・14号住居跡との重複関係は、面的に捉えることができず、土層断面の観察により結論を得た。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長方形になる。南壁、東壁は微妙に曲折しており、南東隅は鋭角気味になる。12a・12b号住居跡に大きく壊されている北壁側にカマドがあったとすれば、副軸方向での長さは5.19mを多少越えるものと思われる。主軸方向での規模は復元できないが、土層断面A-A'では、南北方向での横幅が2.70m、東壁側での同方向の横幅現存長は3.32m、西側がかなりすぼんだ平面形になりそうである。主軸方位はN-11° - Wあたりと推定復元できる。南壁、東西壁の立ち上がりは、やや傾斜が弱いもしっかりしており、床面も明瞭に硬化している。

土師器片が少数出土しているのみである。重複関係から見て、古墳時代以降の住居跡であろうか。

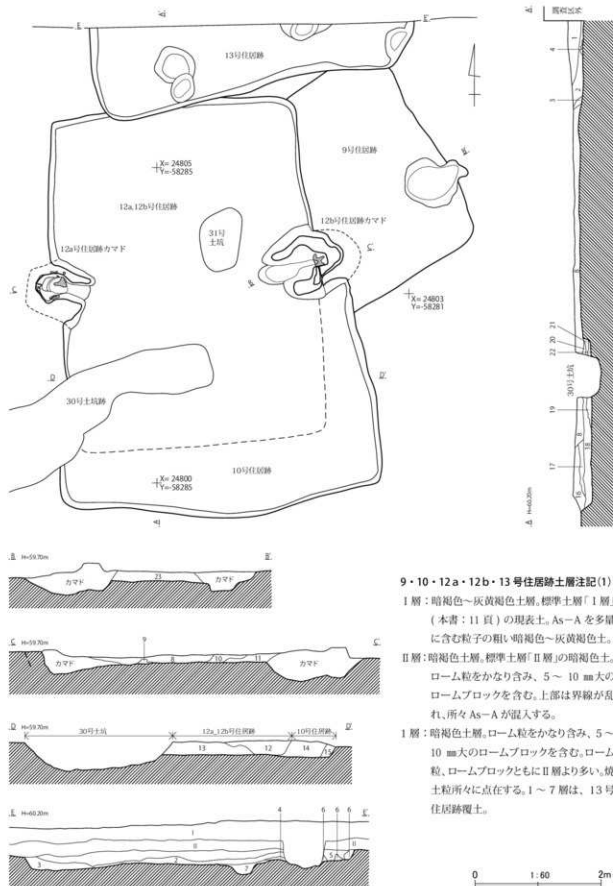
11号住居跡（第18・19・24図、第3・4表、図版5・6・26）

A 2地点北西部の中央東寄り、北縁寄りで検出した遺構である。10・15号住居跡を切って造られている。また、北西隅で30号土坑と、北東隅で32号土坑と重複し、2つの遺構いずれにも切られている。全体的な確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面であるが、標準土層II a層とした暗褐色土中でカマドの上部を確認することができた。

平面形は、おおむね隅の丸い方形に近い形態であるが、南壁は大きく曲折しており、西壁も丸みが強い。規模は、主軸方向で5.78m、副軸方向で5.00m、主軸方位はS-85° - Eである。四壁の立ち上がりは比較的緩やかであるが、床面はほぼ平坦で軽微ながら硬化している。

カマドは東壁中央、若干南寄りに設けられている。全体におにぎり形に盛り上がった状態で、煙道に連なる部分、燃焼部と袖の一部がよく残っている。全長は150cm、横幅は158cmである。細長い燃焼部を幅広い袖が包む構造で、煙道に連なる部分には、わずかではあるが細いアーチ状の天井部が残っている。カマド覆土は、夥しい量の焼土を含み、硬くしまっており、カマド全体が燃焼部に残された土器などと押しつぶされたかの観を呈する。袖やカマド壁は、暗褐色土と褐色シルト質ロームの混合土を硬く突き固めて構築されている。奥壁、側壁、底面いずれも被熱赤化が顕著である。

覆土は8層で、全体に焼土、炭化物がかなり含まれる。最下層の7・8層は、暗褐色土、ローム、焼土混りのロームなどの多数の薄層がラミナをなす層で、全体が貼床層をなすのか、あるいは繰り返し繰り返し使用されたその都度の床面上の薄い堆積土が重なり合い残されたものなのか確認を得ることができなかった。



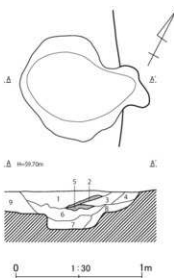
9・10・12a・12b・13号住居跡土層注記(1)

- I層：暗褐色～灰黄褐色土層。標準土層「I層」(本書：11頁)の現表土。As-Aを多量に含む粒子の粗い暗褐色～灰黄褐色土。
- II層：暗褐色土層。標準土層「II層」の暗褐色土。ローム粒をかなり含む。5～10mm大のロームブロックを含む。上部は界線が乱れ、所々As-Aが混入する。
- 1層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。5～10mm大のロームブロックを含む。ローム粒、ロームブロックともにII層より多い。焼土粒所々に点在する。1～7層は、13号住居跡覆土。

第16図 9・10・12・13号住居跡平面・断面図(1)

9・10・12a・12b・13号住居跡土層注記(2)

- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが多い。ブロックは、10mm大前後のほうが目立つ。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、20~40mm大のローム小ブロックが点在する。1層に比し、全体にロームの混入量が多く、明るみが増す。
- 4層: 暗褐色土層。2層土を主に、黒褐色土、ロームブロックが混入する。
- 5層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含む。
- 6層: 暗褐色土層。ハードローム。崩落土か？
- 7層: 暗褐色土層。5層に近いが、ロームが多い。ピット覆土。
- 8層: 暗褐色土層。ローム粒を含み、5mm大のローム小ブロックが点在する。焼土粒を少量含む。8~13層は、12a・12b号住居跡覆土。
- 9層: 暗褐色土層。ローム粒が集塊して不規則に混入する(とくに左半)。
- 10層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、5mm大のローム小ブロック、焼土粒、5mm大の焼土小ブロックを少量含む。8層よりローム粒はるかに多い。
- 11層: 暗褐色土層。10層に近いが、ローム粒が少なく、偏在している。焼土粒は、10層より多い。
- 12層: 暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを含む。所々ローム粒が集塊する。焼土粒、炭化物粒少量含む。
- 13層: 暗褐色土層。12層土を主に、1~50mm大のローム粒、ロームブロックを水玉状に含む。
- 14層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを塊状に含む。14~22層は、10号住居跡覆土。
- 15層: 暗褐色土層。14層に近いが、ロームが多い。
- 16層: 暗褐色土層。ローム粒を含み、10mm大のロームブロックを少量含む。
- 17層: 暗褐色土層。16層に近いが、若干軟質。
- 18層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、5~50mm大のロームブロックを点々と含む。
- 19層: 黄褐色土層。ローム粒、5~80mm大のロームブロックを主に、隙間に暗褐色土が混入する。
- 20層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームのそれぞれの薄層がラミナをなす。12a・12b号住居跡の貼床層の可能性もある。
- 21層: 黄褐色土層。暗褐色土の混じるロームブロック。
- 22層: 褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、ロームブロックが斑状に混じり、所々局在する。
- 23層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、10mm大のロームブロック、焼土粒を少量含む。9号住居跡掘り方埋土。

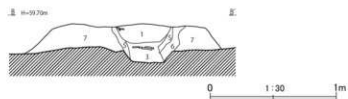
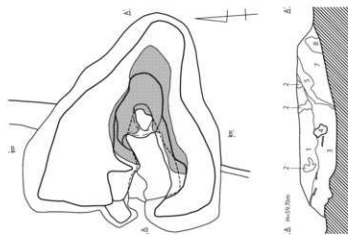
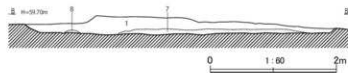
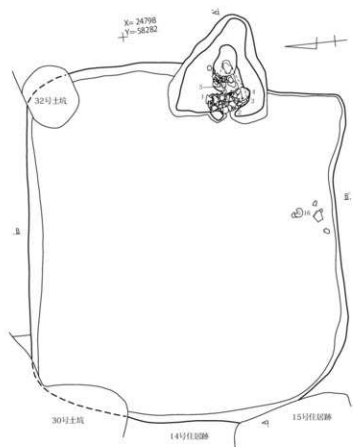


9号住居跡カマド土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み(褐色シルト質ロームも混じる)、5mm大のローム小ブロック、焼土粒を含む。
- 2層: 赤褐色土層。焼土粒、焼土大ブロックのまとまり。この上面が二次燃焼面か？
- 3層: 暗褐色土層。1層に近いが、褐色シルト質ロームが多い。
- 4層: 褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、焼土粒を含む。部分的にロームの小ブロックが見える。
- 5層: 黒色炭化物層。炭化物の遺集層。焼土粒を含む。この層の上面が第一次燃焼面。
- 6層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロック含む。焼土粒はほとんど含まない。6~8層はカマド掘り方。
- 7層: 暗褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを含む。
- 8層: 褐色土層。4層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。
- 9層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、10mm大のロームブロック、焼土粒を少量含む。掘り方埋土。

第17図 9・10・12・13号住居跡平面・断面図(2)

出土遺物の大半は、土師器小片であるが、第19図16の須恵器皿のように、破片ながら床面に残された土器も見られる。また、同図1~5の甕は、カマド内から押しつぶされたような状態で出土した。出土遺物、住居形態から見て、平安時代の住居跡であろう。



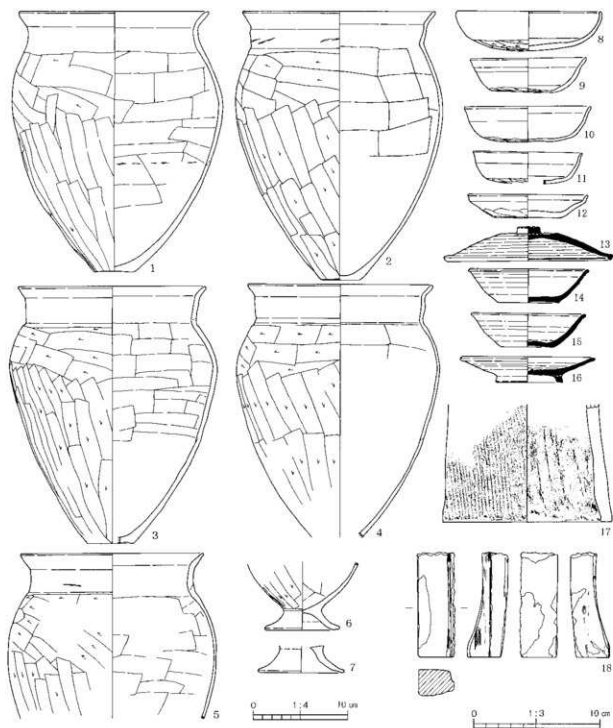
11号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を多量に含む。炭化物も点在する。硬くしまる。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、若干黒みが強く、焼土粒がわずかに少ない。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、焼土粒が少ない。
- 4層：暗褐色土層。白みがかったシルト質ロームが薄層をなす。
- 5層：暗褐色土層。3層に近いが、焼土粒が若干少なく炭化物が目立つ。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックが塊状に混じる。
- 7層：暗褐色土層。暗褐色土の薄層、ロームの薄層、焼土混じりのロームの薄層など、種々の何枚もの薄層が重なり合っている。複数の貼床層の可能性もある。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土の薄層とロームの薄層のラミナ。

11号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。褐色シルト質ローム、炭化物粒を含み、焼土粒を多量に含む。以下全層が硬くしまっており、とくに袖などのカマド本体は、硬くしまる。
- 2層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、焼土粒を多量に含む。白色粒を少量含む。
- 3層：暗褐色土層。焼土粒を多量に含む。6層より焼土粒少ない。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土と褐色ロームの混合土を突き固めた層。焼土粒、5～10mm大のロームブロックを含む。天井部の残存した部分。4～8層は、天井部や袖などのカマド構築材。
- 5層：赤褐色土層。暗褐色土と褐色シルト質ロームの混合土が被熱赤化した部分。最被熱赤化範囲。ほとんど土器かレンガのように焼けている。
- 6層：褐色土層。暗褐色土と褐色シルト質ロームの混合土。
- 7層：暗褐色土層。暗褐色土と褐色シルト質ロームの混合土。焼土粒、5～10mm大の焼土ブロックを多く含む。突き固められ著しく硬化している。
- 8層：黄褐色土層。ハードロームの大ブロック。

第18図 11号住居跡平面・断面図



第19図 11号住居跡出土遺物

第3表 11号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.8 底径 4.2 器高 27.7	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。胴部は上位に最大径をもつ。平底。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部~胴部上位ヨコナゲ。胴部上位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~胴部上位ヨコナゲ。胴部上位~中位ヘラナゲ。胴部下位~底部ナゲ。	角閃石、白色の岩片 内外-褐色	9/10残存
2	甕	口径 20.3 底径 4.0 器高 28.4	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。胴部は上位に最大径をもつ。平底。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラケズリ。底部ナゲ。内面-口縁部ヨコナゲ。胴部上位~底部ヘラナゲ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫、雲母、角閃石 内外-褐色	9/10残存

第4表 11号住居跡出土遺物観察表(2)

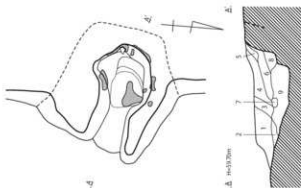
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
3	甕	口径 底径 器高	19.6 4.9 27.1	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。胴部は上位に最大径をもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位-底部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-にぶい赤褐色	7/8残存
		口径 底径 器高	19.3 — [26.8]	口縁部はコの字状を呈す。胴部は上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位-下部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。胴部中位-下部器面荒れ調整不明瞭。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	口縁部～胴部下位 2/3残存
5	甕	口径 底径 器高	19.2 — [17.4]	口縁部はコの字状を呈す。胴部は上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位～中位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位～中位ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外-にぶい赤褐色	胴部～胴部中位 1/3残存
6	台付鉢	口径 底径 器高	— 7.8 [7.2]	胴部は丸みをもつ。台部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部下位ヘラケズリ。台部ヨコナデ。内面-胴部下位ヘラナデ。台部ヨコナデ。	角閃石 内外-にぶい赤褐色	胴部下位 内外-にぶい赤褐色 1/4残存
7	台付鉢	口径 底径 器高	— 8.8 [2.8]	台部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-台部ヨコナデ。内面-台部ヨコナデ。	白色の岩片、角閃石 内外-にぶい赤褐色	台部3/4 残存
8	坏	口径 底径 器高	(15.2) — 4.1	丸底。口縁部内湾。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部～体部中位ヨコナデ後ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部中位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	3/5残存
9	坏	口径 底径 器高	12.2 7.2 3.7	平底。体部は立ち上がり丸みをもち、口縁部直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位～下部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母、礫 内外-明赤褐色	口縁部一 部欠損
10	坏	口径 底径 器高	13.2 — 3.7	平底。体部は立ち上がり丸みをもち、口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位～下部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外-褐色	1/2残存
11	坏	口径 底径 器高	(11.4) (9.0) 3.3	平底。体部は立ち上がり丸みをもち、口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位～中位ナデ。体部下位ヘラケズリ。内面-口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外-にぶい褐色	1/4残存
12	坏	口径 底径 器高	(12.6) 7.2 2.4	平底。体部は直線的に開く。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位～中位ナデ。体部中位～下部ヘラナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-褐色	1/2残存
13	須恵器蓋	口径 撫み 器高	17.3 2.0 3.6	ボタン状の撫み。口唇部は内傾する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。天井部右回転系切り後右回転周辺部ヘラケズリ。ソマミ貼付時周辺部ナデ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外-灰色	9/10残存
14	須恵器坏	口径 底径 器高	(12.5) 6.5 3.5	平底。体部はやや丸みをもつ。口唇部は外反する。ロクロ成形。	外面-口縁部～体部下位ロクロナデ。底部右回転系切り。内面-ロクロナデ。	白色の岩片、礫 内外-灰色	1/3残存
15	須恵器坏	口径 底径 器高	(12.0) 5.8 3.5	平底。体部はやや丸みをもつ。口唇部は外反する。ロクロ成形。	外面-口縁部～体部下位ロクロナデ。底部右回転系切り。内面-ロクロナデ。	白色・褐色の岩片 内外-暗灰黄色～ にぶい褐色	1/3残存
16	須恵器皿	口径 底径 器高	13.9 7.0 2.6	高台部は角形を呈す。体部から口縁部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部右回転系切り。内面-口縁部～体部ロクロナデ。高台貼付時周辺部回転ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、礫 内外-にぶい褐色	8/9残存
17	形象埴輪	口径 底径 器高	— 18.0 (12.4)	—	外面-タテハク。内面-ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内-黄灰褐色 外-にぶい褐色	基部
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考		
18	砥石	長さ8.25、幅2.8、厚さ2.05、重さ101.3g					

12号住居跡(第20～22図、第5・6表、図版6・7・27)

A 2地点北西部の中央東寄り、北縁近くで検出した遺構である。9・10号住居跡を切って造られており、北壁中央は13号住居跡に、南西隅を30号土坑に、12b号住居跡のカマド脇を31号土坑に壊されている。なお、10号住居跡の覆土内に設けられた南壁から東壁にかけての部分に関しては、床面が不明瞭であったこともあり、土層断面図の観察による以外床面の範囲を把握できなかった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

12 a 号住居跡カマド土層注記

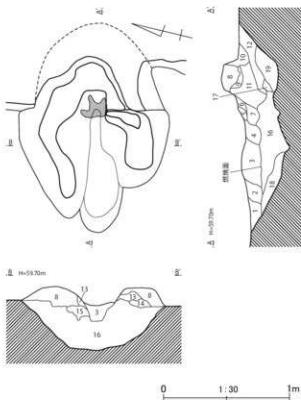
- 1層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、10～80mm大の褐色ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、灰色がかった褐色ロームが斑状に混じる。
- 3層：赤褐色土層。1層に近いが、灰色がかった褐色ロームが多く、全体が被熱赤化している。4層の最赤化範囲。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、灰色がかった褐色ロームが多い。
- 5層：赤褐色土層。暗褐色土中に、カマド壁崩落土の5～20mm大の赤褐色土ブロックが多量に分散する。
- 6層：暗褐色土層。褐色ローム、焼土粒を含む。
- 7層：赤褐色土層。焼土の大ブロック。
- 8層：暗褐色土層。6層に近いが、焼土粒が少ない。



- 9層：暗褐色土層。暗褐色土と褐色ロームの斑状の混合土。焼土ブロックを含む。

12 b 号住居跡カマド土層注記

- 1層：灰黄褐色土層。灰黄褐色シルト化ロームを主に、焼土を含む。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土、灰黄褐色シルト化ロームを主に、焼土粒、5mm大の焼土小ブロックが点在する。炭化物も含む。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、灰黄褐色シルト化ロームが多い。5～20mm大の焼土ブロックを含む。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土小ブロックが少し大きい。
- 5層：赤褐色焼土層。焼土ブロックが集中する。焼土ブロック間に灰黄褐色シルト化ロームが混入。
- 6層：暗褐色土層。4層に近いが、5mm大の焼土小ブロックが若干多い。暗褐色土も多い。
- 7層：暗褐色土層。6層に近いが、灰黄褐色シルト化ロームが多い。強くしまる。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土と灰黄褐色シルト化ロームの混合土。焼土粒、5～30mm大の焼土ブロックが偏在する。8～15層は、カマド袖構築材。
- 9層：暗褐色土層。焼土粒を少量含む。8層より黒み強い。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒を含む。焼土をほとんど含まない。
- 11層：暗褐色土層。暗褐色土、5～10mm大のロームブロック、焼土粒の斑状の混合土。
- 12層：暗褐色土層。9層に近いが、焼土粒が少ない。カマド外の土の混入した土か？
- 13層：暗褐色土層。8層に比し、シルト化ロームがモヤモヤと大ブロック状に集中する。
- 14層：暗褐色土層。暗褐色土とややシルト化ロームの斑状の混合土。13層より暗褐色土が多い。
- 15層：暗褐色土層。14層に近いが、ロームが多い。



- 16層：暗褐色土層。暗褐色土と灰黄褐色シルト化ロームの混合土を主に、ローム粒、5～10mm大の焼土ブロックを含む。しまっている。16～18層は、カマド掘り方埋土。
- 17層：暗褐色土層。ローム粒の集塊。ブロック間に暗褐色土が入る。
- 18層：暗褐色土層。16層に近いが、焼土ブロックが少ない。しまっている。
- 19層：暗褐色土層。暗褐色土とモヤモヤ偏在、集塊するロームを主に、10mm大の焼土ブロックが点在する。しまっている。

第20図 12号住居跡平面・断面図

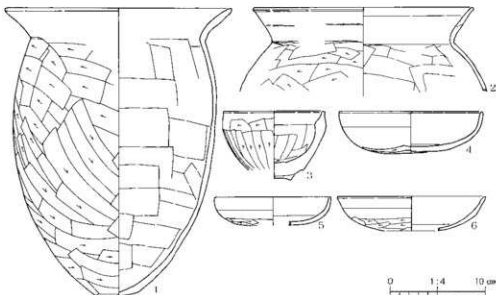
カマドの付け替えが行なわれた住居であり、袖がほとんど残っていない西側のカマドを古い段階のカマドと考えた。西側のカマドを廃棄し、東側にカマドを付け替えて、住居を継続使用したのであろう。以下、西側のカマドをもつ住居跡を12a号住居跡、東側のカマドをもつ住居跡を12b号住居跡として記載する。

12a号住居跡に関しては、残されたカマドの痕跡について記すことしかできない。カマドは西壁のほぼ中央で検出した。壁に対し南側に斜交して付設されている。掘り方を含めた全長は108cm、横幅は102cmである。



第21図 12a号住居跡出土遺物

奥壁側が深く掘りくぼめられており、側壁や底面が部分的に被熱赤化している。袖は不明瞭で、あるいは粘土混じりの土の残存範囲である可能性も捨てきれない。12b号住居跡と大きな時間差を見込むことができないとすれば、古墳時



第22図 12b号住居跡出土遺物

第5表 12a号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 15.5 底径 — 器高 3.8	丸底。口縁部は内彎。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。底部～底面ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位放射状暗文。体部中位以下螺旋状暗文。	白色・褐色の岩片、雲母 内外—褐色	4/5残存

第6表 12b号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 23.7 底径 4.4 器高 30.5	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	2/3残存
2	甕	口径 (23.2) 底径 [8.9] 器高 [8.9]	口縁部は外反する。胴部は大きく丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、礫、角閃石、雲母 内外—明赤褐色	口縁部～胴部上位 1/3残存
3	小形台付甕	口径 10.5 底径 [7.2] 器高 [7.2]	台部は剥落。胴部はやや丸みを持って開き、口縁部は直立する。器内は厚手。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位～下位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位～下位ヘラナデ。底部ナデ。	白色の岩片、雲母 内外—灰褐色	口縁部～底部 2/3 残存 台部欠損
4	坏	口径 15.1 底径 [15.6] 器高 4.4	丸底。口縁部は内彎。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。以下ナデ、ヘラケズリ。内面—体部下位以上ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外—明赤褐色	3/4残存
5	坏	口径 (15.6) 底径 [3.6] 器高 [3.6]	丸底。口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、以下ナデ、ヘラケズリ。内面—体部中位以上ヨコナデ。体部下位ナデ。	角閃石、褐色の岩片 内外—褐色	1/3残存
6	坏	口径 (12.1) 底径 — 器高 3.0	平底気味。口縁部は内彎。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、以下ナデ、ヘラケズリ。内面—体部上位以上ヨコナデ。体部中位以下ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外—褐色	1/4残存

代終末期～奈良時代住居跡の可能性がある。

12b号住居跡の平面形は、横長の長方形である。規模は、主軸方向で4.26m、副軸方向で推定5.48m、主軸方位はN-85°-Eである。壁の立ち上がりは、3辺ともに比較的急峻である。床面はほぼ平坦で、カマド周辺など局所的に硬化しているが、総じて軟弱である。10号住居跡との重複部分は、床面の硬化も顕著ではなく、床面の広がりをとらえることができなかった。

カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。掘り方を含めた全長は166cm、横幅は120cmである。燃焼部は断面V字形に近く細長く造作され、底面は微妙な凹凸はあるが、ほぼ平坦である。奥壁寄りの底面が強く被熱赤化している。掘り方は土坑状に大きく掘り込まれている。

出土遺物は、土師器片が大半であるが、第22図1・4などの甕や坏は、12b号住居跡の覆土中出土である。出土遺物、住居形態から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡であろう。

13号住居跡（第16・23図、第7表、図版7・27）

A2地点北西部の中央東寄り、北縁沿いで検出した遺構で、大半は、調査範囲外である。9・12号住居跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅の丸い方形ないしは長方形であろう。東西方向での現存長は、5.23mである。南壁はかなり彎曲しており、調査範囲に限られるが、東西壁も丸み強い。壁の立ち上がりはしっかりしている。床面には凹凸があり、東側がやや高くなるようである。床面の硬化は顕著ではない。ピットを5個検出したが、柱穴ではないらしい。

第23図の土器は、床面近くで検出した。他に土師器細片が少量覆土中より出土している。出土遺物、住居形態から見て、平安時代の住居跡であろうか。



第23図 13号住居跡出土遺物

第7表 13号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (15.7) 底径 — 底径 3.7	丸底。口縁部は外反する。結土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色・褐色 の岩片、織 内外—褐色	2/5残存

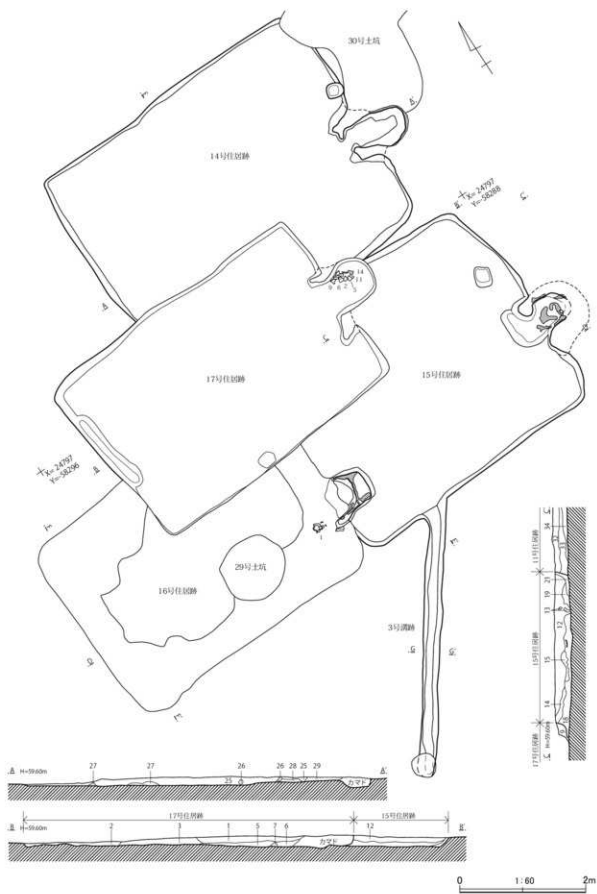
14号住居跡（第24～28図、第8表、図版7・27）

A2地点北西部の中央、北東寄りで検出した遺構である。15・17号住居跡、30号土坑により切られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

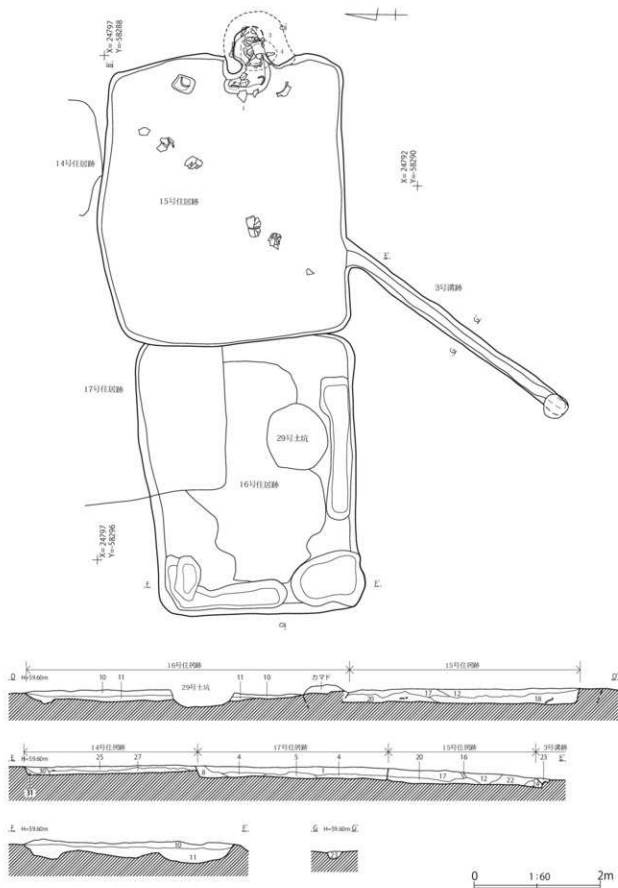
平面形は、長方形である。規模は、主軸方向で4.88m、副軸方向で4.00m、主軸方位はN-90°-Eである。残りのよい北壁の壁高でも15cm前後、西半はとくに残存状態が悪く、壁もわずかに残るのみである。わずかに凹凸があるが、床面はほぼ平坦である。床面の硬化は顕著ではない。

カマドは、東壁の中央、若干南に寄った位置に設けられている。全長112cm前後で、低平な袖と燃焼部が残存するのみである。燃焼部は底面が平らに掘り込まれており、残存する奥壁上端が被熱赤化している。カマドの覆土は、10層に分けられた。多くは天井部や側壁の崩落土であろう。

出土遺物の多くは、土師器小片であるが、図化した土器の多くは甕であった。出土遺物、住居形態から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。



第24图 14~17号住居跡平面·断面图(1)



第25图 14~17号住居跡平面・断面图(2)

14～17号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、6、7mm大のロームブロックを部分的に含む。焼土粒、炭化物粒をかなり含む。1～8層は、17号住居跡覆土。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、5mm大のローム小ブロックが多く、焼土粒、炭化物粒が激減する。
- 3層：暗褐色土層。1・2層に比し、ロームが急増する。焼土粒、炭化物粒はほとんど見られない。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、大小のロームブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を多く含む。
- 6層：暗褐色土層。5層に近いが、シルト化した（白っぽい）ローム粒を含み、5mm大の炭化物が点在する。
- 7層：褐色土層。シルト化したロームの大ブロック。
- 8層：暗褐色土層。4層に近いが、5mm大のローム小ブロックが多く、集中する。
- 9層：黄褐色土層。17号住居跡のカマド袖構築材のシルト化粘土。
- 10層：暗褐色土層。1～10mm大のローム粒、ロームブロックを少量含む。10・11層は、16号住居跡掘り方埋土。
- 11層：暗褐色土層。ローム粒、10～50mm大のロームブロックを多く含む。
- 12層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、5mm大のローム小ブロックが点在する。焼土粒を少量（西半より東半が多い）含む。12～15・17～22層は、15号住居跡覆土。
- 13層：灰白色土層。灰白色シルトの大ブロック。
- 14層：暗褐色土層。12層に近いが、ローム粒、10mm大のロームブロックをモヤモヤ雲状に含む。
- 15層：暗褐色土層。12層に近いが、炭化物粒が目立って多い。
- 16層：褐色土層。暗褐色土とローム同量の混合土。根穴か？
- 17層：暗褐色土層。12層に近いが、シルトがかったローム小ブロック、焼土小ブロックを微量含む。
- 18層：暗褐色土層。12層に近いが、黒みがやや強く、焼土粒が多い。5～10mm大の焼土ブロックも含む。ローム粒、ロームブロックからなる雲状のまとまりが点在する。

- 19層：暗褐色土層。12層に近いが、ローム粒が少なく、焼土粒をほとんど含まない。
- 20層：暗褐色土層。12・17層に近いが、ローム粒、5～50mm大の大小ロームブロックを含む。大きなブロックは点在する。全体にモヤモヤとロームが雲状にまとまる部分が見られる。
- 21層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5～10mm大のロームブロックをかなり含む。焼土粒を少量含む。
- 22層：暗褐色土層。12・17層に近いが、5mm大のローム小ブロックが多い。焼土粒（土器細片？）若干含む。本層の一部および23・24層は、15号住居跡に伴う小溝（3号溝）覆土。
- 23層：暗褐色土層。暗褐色土、ローム粒がほぼ同量斑状に混じる。
- 24層：褐色土層。23層に近いが、ローム粒がさらに多い。
- 25層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5～20mm大のロームブロックが少量点在する。より大きなロームブロックも少し含む。ローム粒は所々不規則に集塊する。25～31層は、14号住居跡覆土。
- 26層：褐色土層。ロームブロック。
- 27層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒の混合土。25層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。
- 28層：暗褐色土層。褐色がかったロームを含み、焼土粒を少量含む。
- 29層：暗褐色土層。28層に近いが、ロームが少ない。
- 30層：暗褐色土層。25・27層に近いが、5～10mm大のロームブロックが多い。
- 31層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを極微量しか含まない。
- 32層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を多量に、炭化物粒を少量含む。32～34層は、14号住居跡覆土。
- 33層：暗褐色土層。32層に近いが、ローム粒が少ない。炭化物粒を少量含む。
- 34層：暗褐色土層。33層に近いが、焼土粒、炭化物粒をほとんど含まない。

第26図 14～17号住居跡平面・断面図(3)

15号住居跡・3号溝跡（第24～27・29図、第9表、図版7・8・28）

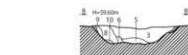
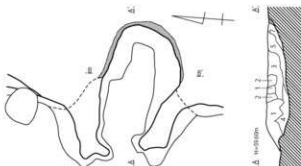
A 2地点北西部の中央、東寄りで検出した遺構である。遺構の西側部分を16・17号住居跡により壊され、14号住居跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

なお、3号溝に関しては、本住居跡に伴う小溝と考えられるため、住居跡の記載の後に触れることにしたい。

平面形は、長方形に近いが、東壁はやや膨らむようである。規模は、主軸方向で4.37m、副軸方向

14号住居跡カマド土層注記

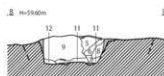
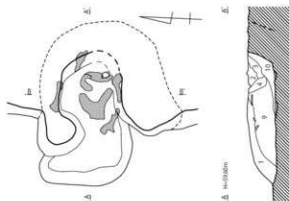
- 1層：暗褐色土層。褐色がかったロームを含み、焼土粒を少量含む。ややシルト化したロームが多い。カマド構築材の崩落土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒をかなり含む。崩落土の隙間に入った土。
- 3層：褐色土層。暗褐色土とロームがほぼ同量混じる混合土。焼土粒を多量に含む。5mm大の焼土小ブロックが点在する。
- 4層：暗褐色土層。ややシルト化したロームブロックを含む。焼土粒が分散して混入する。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。
- 6層：灰黄褐色粘土層。灰黄褐色（感覚的には灰色）粘土のブロック。
- 7層：暗褐色土層。ロームを斑状に含み、焼土粒を少量含む。
- 8層：暗褐色土層。ローム粒を含み、灰黄褐色粘土粒、焼土が点在する。



- 9層：灰黄褐色あるいは暗褐色土層。暗褐色土を主に、灰黄褐色粘土ブロック斑状に混合。
- 10層：褐色土層。暗褐色土とロームがほぼ同量混じる混合土。

15号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒をモヤモヤと多量に含み、5mm大のローム小ブロックが点在する。シルトがかったローム小ブロック、焼土小ブロックも微量含み、焼土粒を含む。
- 2層：暗褐色土層。炭化物粒（あるいは黒褐色土粒か？）を多く含む。7、8mm大の焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。焼土粒、5～10mm大の焼土ブロックを多量に含む。炭化物粒を少量含む。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、焼土が激減する。2層より焼土少なく、焼土ブロックを含まない。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を含む。
- 6層：暗褐色土層。5層に近いが、やや白みがかった褐色ロームを全体に含む。
- 7層：暗褐色土層。5層に近いが、焼土粒を若干含む。
- 8層：褐色土層。褐色ロームブロックを主に、隙間に糊状に暗褐色土が入る。焼土粒、焼土ブロックを少量含む。
- 9層：暗褐色土層。6層に近いが、焼土粒、5mm大の焼土小ブロックを若干含む。
- 10層：暗褐色土層。4層に近いが、10mm大の焼土ブロックを微量含む。



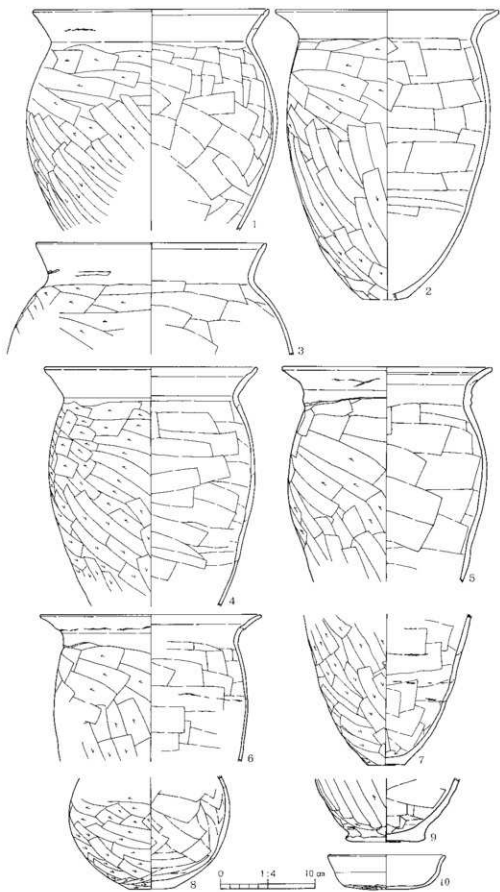
- 11層：褐色土層。やや白みがかった褐色ロームブロックを主に、隙間に焼土粒、焼土ブロックが入る。
- 12層：褐色土層。2層に近いが、白色の細かい粒子（白色粘土？）を含む。

第27図 14・15号住居跡平面・断面図

で3.78m、主軸方位はN-90°-Eである。西側は不明瞭であるが、南北壁、東壁の壁高は14～21cm、壁の立ち上がりもしっかりしている。床面はほぼ平坦であるが、硬化はそれほど明瞭ではない。

カマドは東壁中央の南東隅寄りに設けられている。残存状態が良くなく、低平で痕跡的な袖と浅い燃焼部からなるカマドで、全長は130cmである。底面、奥壁、側壁は、局所的ではあるが、よく焼けている。とくに奥壁手前は、被熱赤化が顕著である。

北東隅と南西隅を結ぶ対角線上の床面から点々と土器が出土している。第29図1・3・4の甕は、



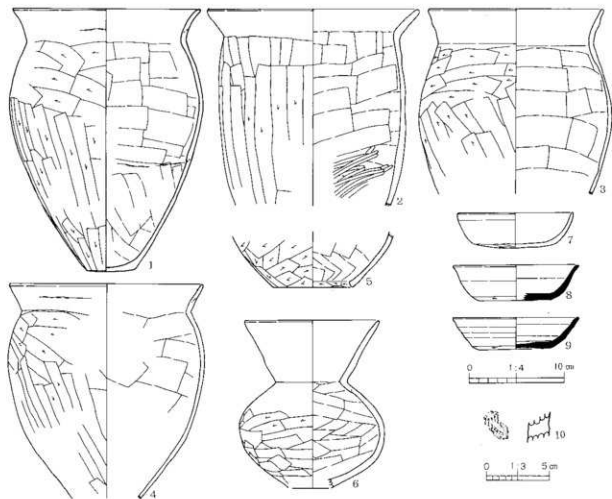
第28圖 14号住居跡出土遺物

第8表 14号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法的特徴	調整・裝飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 24.7 底径 1 器高 [23.4]	口縁部は外反し、内面上位に段。胴部は丸みあり、粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部上位へ下位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-褐色	口縁部へ胴部下位 1/4残存
2	甕	口径 23.6 (4.8) 底径 30.8 器高 [24.4]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。平底、粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。以下ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部中位以上ヘラナデ。胴部下位以下ナデ。	磯、角閃石 内外-ぶい・褐色	9/10残存
3	甕	口径 24.4 底径 11.8 器高 [11.8]	口縁部は外反する。内面上位に段をもつ。胴部は大きく丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、雲母 内外-明赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/4残存
4	甕	口径 22.3 底径 1 器高 [25.3]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、磯 内外-ぶい・褐色	口縁部へ胴部下位 7/8残存
5	甕	口径 22.0 底径 22.9 器高 [22.9]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、磯、雲母 内外-明赤褐色	口縁部へ胴部下位 3/4残存
6	甕	口径 23.4 底径 15.5 器高 [15.5]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位以下ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色、角閃石、雲母 内外-褐色	口縁部へ胴部中位 1/4残存
7	甕	口径 1 底径 3.9 器高 [16.0]	平底。胴部はわずかに丸みをもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部中位へ底部ヘラケズリ。内面-胴部中位へ底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外-褐色へぶい・黄褐色	胴部中位へ底部 1/3残存
8	甕	口径 4.9 底径 11.9 器高 [11.9]	平底。胴部は大きく丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部中位へ底部ヘラケズリ。内面-胴部中位へ底部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、磯 内外-明赤褐色	胴部中位へ底部 残存
9	甕	口径 8.6 底径 6.7 器高 [6.7]	平底。胴部はわずかに丸みをもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部下位ヘラケズリ。底部砂底。内面-胴部下位へ底部ヘラナデ。	角閃石、白色の岩片 内外-ぶい・褐色	胴部下位へ底部 残存
10	坏	口径 12.3 底径 9.1 器高 3.6	平底。体部は丸みをもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-ぶい・赤褐色	7/8残存 1/3残存

第9表 15号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法的特徴	調整・裝飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.6 底径 5.0 器高 27.7	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。平底、粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ底片ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内-ぶい・赤褐色 外-ぶい・褐色	1/4残存
2	甕	口径 22.4 底径 20.7 器高 [20.7]	口縁部は外傾する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位ヘラナデ。胴部中位ヘラミガキ。	白色の岩片、雲母、磯 内外-褐色	口縁部へ胴部中位 3/5残存
3	甕	口径 18.3 底径 19.5 器高 [19.5]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-褐色へぶい・赤褐色	口縁部へ胴部中位 1/3残存
4	甕	口径 20.4 底径 22.9 器高 [22.9]	口縁部は外傾する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位へ下位ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、磯、雲母 内外-明赤褐色	口縁部へ胴部下位 1/3残存
5	瓶	口径 8.3 底径 5.8 器高 [5.8]	胴部はやや丸みをもつ。底部は筒状。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部下位ヘラケズリ。内面-胴部下位ヘラナデ。底部ケズリ。	白色の岩片、角閃石、磯 内外-明赤褐色	胴部下位へ底部 3/5残存
6	壺	口径 14.2 底径 17.7 器高 [17.7]	口縁部は直線的に大きく開く。胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位へ下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。以下ヘラナデ。	白色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	2/3残存
7	坏	口径 12.2 底径 8.5 器高 3.7	平底。体部から口縁部は内彎気味。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片 内外-明赤褐色	2/3残存
8	須恵器坏	口径 13.2 底径 7.8 器高 3.7	平底。体部はやや丸みをもつ。口縁部は外反する。口ロク成形。	外面-口縁部へ体部中位ロクナデ。体部下位へ底部右回転ヘラケズリ。内面-口縁部へ底部ロクナデ。	白色・黒色の岩片、磯 内外-灰色	2/3残存
9	須恵器坏	口径 13.2 底径 7.2 器高 3.4	平底。体部は直線的に開く。口唇部がわずかに外反する。口ロク成形。	外面-口縁部へ体部ロクナデ。体部下位右回転ヘラケズリ。底部右回転糸切り後周辺右回転ヘラケズリ。内面-口縁部へ底部ロクナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母、磯 内外-灰、灰黄色	3/4残存
10	円筒埴輪	口径 1 底径 1 器高 1	体部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-タテハク。内面-タテのナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小磯 内外-ぶい・褐色	カマド周辺



第29図 15号住居跡出土遺物

カマド内から出土した。他に土師器片がかなりの量覆土中から出土している。出土遺物、住居形態から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡であろう。

3号溝跡とした小溝は、本住居跡の南壁の南西隅寄りで検出した溝跡である。溝端は時期の新しいビットにより壊されている。南壁から真っ直ぐに彎入する浅い谷地形に向かって伸びている。走向は、おおむね北東-南西、長さは4.45m前後である。断面形は箱葉研で、幅は25~30cm、深さは6~12cmである。溝口の底面は、住居跡床面とほぼ同じ深さである。溝口と溝端の底面の比高差は、7、8cmとわずかではあるが、谷地形に向かって微かな傾斜をもって掘り込まれている。覆土は、住居跡覆土と大きく異なることのない暗褐色土である。

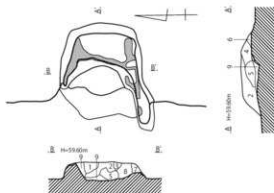
上述したように本住居跡に伴うとしてよく、ある種の排水溝のような役割をもつ溝とも考えられる。

16号住居跡 (第24・25・30・31図、第10表、図版8・28)

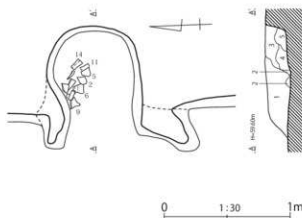
A2地点北西部の中央、東寄りで検出した遺構である。全体に削平されており、床面のみ残存する。また、17号住居跡と重複し、北東隅周辺を大きく壊され、29号土坑にも床面の一部を壊されている。15号住居跡とも重複しており、本住居跡のカマドは、15号住居跡の覆土中に設けられている。確

16号住居跡カマド土層記

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土と褐色粘土質土の混合土。1～3層は、天井、壁の崩落土。
- 2層：褐色土層。1層より褐色粘土質土が多い。焼土粒を少量含む。
- 3層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、5mm大の焼土小ブロックを水玉状に含む。20mm大の焼土ブロック1点含む。
- 4層：暗褐色土層。5～20mm大の大小焼土ブロックを多く含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、焼土ブロックを含む。
- 6層：暗褐色土層。1～3mm大の焼土粒を少量含む。
- 7層：暗褐色土層。3層に近いが、焼土粒、焼土ブロックがはるかに多い。
- 8層：暗褐色土層。5層に近いが、焼土が多い。



9層：暗褐色土層。8層に近似するが、5mm大の焼土小ブロックがやや少ない。



17号住居跡カマド土層記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、炭化物粒をかなり含む。部分的にシルト化したローム粒、60、70mm大のロームブロック、焼土粒を含む。
- 2層：にぶい黄褐色土層。シルト化したロームブロック、焼土粒を含む。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、シルト化したローム、焼土粒が多い。しまっている。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、シルト化したロームが全体に混り、焼土粒がさらに多い。
- 5層：赤褐色土層。暗褐色土を含む焼土ブロック。

第30図 16・17号住居跡平面・断面図

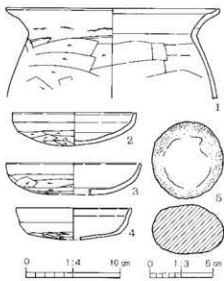
認め、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長方形である。規模は、主軸方向で4.52m、副軸方向で3.30m、主軸方位はN-90°-Eである。床面が確認できた範囲は、第24図の線で示した範囲であり、地山をそのまま床としている。床面は残存範囲全面が一様に硬化している。

カマドは、東壁のほぼ中央に付設されている。掘り方を含めた全長は83cmである。燃焼部の底面は、床面とした面よりやや高くなっており、焚口も明瞭にとらえることができなかった。被熱赤化の範囲もかなり不規則である。

第25図には、掘り方まで掘り上げた状態を示した。東壁、南壁に沿って溝状に深くなる部分があり、北西隅脇、南東隅に接してピット状、土坑状に深く掘り込まれている。

出土遺物は、カマドのそばの床面から出土した第31図1の甕や2の坏以外は、いずれも土師器の小片である。出土遺物、住居形態から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。



第31図 16号住居跡出土遺物

第10表 16号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (22.5) — 底径 器高 [9.5]	口縁部は外反し、内面上位に凹面をもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位へラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位へラナデ。	白色の岩片、雲母 内外—にぶい赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/4残存
2	坏	口径 13.1 — 底径 器高 3.5	丸底。口縁部は短く直立する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部へラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部下位へ底部ナデ。	白色・黒色の岩片、雲母、礫 内外—褐色	2/3残存
3	坏	口径 (14.3) — 底径 器高 [3.3]	丸底。口縁部は短く直立する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位へ下位へラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部中位へ下位ナデ。	雲母、角閃石 内外—にぶい褐色	1/5残存
4	坏	口径 (12.2) — 底径 器高 [3.4]	平底気味。体部は開き、口縁部は屈曲して内彎する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ下位へラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外—にぶい赤褐色	1/3残存
No.	器種	法量 (cm)・特徴				備考
5	丸石	長さ6.0、幅5.6、厚さ3.9、重さ60.2g				完形

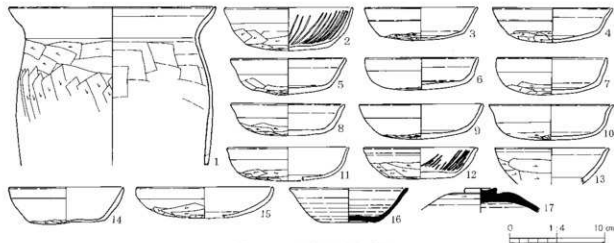
17号住居跡 (第30・32図、第11・12表、図版8・28)

A 2地点北西部の中央、東寄りで検出した遺構である。14～16号住居跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長方形である。規模は、主軸方向で4.66m、副軸方向で3.17m、主軸方位はN-90° - Eである。西半は覆土が浅く、壁の残りも悪いが、東半は残状態が比較的良く、壁の立ち上がりも急峻である。床面はほぼ平坦で、カマド焚口から中央部にかけて相応に硬化している。西壁に沿って、長さ150cm、深さ10cm前後の壁溝が掘られている。

カマドは、東壁のほぼ中央に設けられている。全長は97cm、低平で短い袖が設けられている。燃焼部は浅く、中央がわずかにくぼむ。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。

カマド内から土師器片がややまとまって出土した(第32図2・5・6・9・11・14)。出土遺物、住居形態から見て、平安時代の住居跡と考えられる。



第32図 17号住居跡出土遺物

第11表 17号住居跡出土遺物観察表(1)

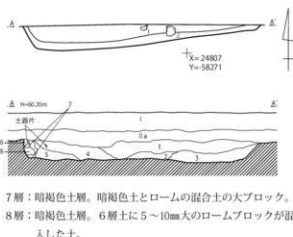
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (21.8) — 底径 器高 [16.8]	口縁部は外反し、上位はわずかに内彎する。胴部はやや膨らみをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位へラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位へ中位へラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外—褐色	口縁へ胴部中位 2/3残存
2	坏	口径 13.5 — 底径 器高 4.5	平底。体部はやや丸みをもち、口縁部は直線的に開く。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部へラケズリ。内面—ヨコナデ後放射状暗文。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	7/8残存

第12表 17号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	坏	口径 11.9 底径 8.9 器高 3.5	平底。口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位-中位ナデ。体部下位~底部ヘラケズリ。内面-ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	2/3残存
4	坏	口径 12.6 底径 9.4 器高 3.6	平底気味。口縁部はわずかに内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母、礫 内外-明赤褐色	完形
5	坏	口径 12.1 底径 8.7 器高 3.8	平底気味。口縁部はわずかに内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~下位ヘラナデ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	4/5残存
6	坏	口径 11.8 底径 8.4 器高 3.7	平底。口縁部はわずかに内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	黒色・白色の岩片、雲母 内外-にぶい橙色	5/6残存
7	坏	口径 11.5 底径 9.9 器高 3.9	平底気味。口縁部はわずかに内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母 内外-褐色	3/4残存
8	坏	口径 11.9 底径 — 器高 3.4	平底気味。口縁部はわずかに内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、雲母、褐色の岩片、角閃石 内外-にぶい赤褐色	3/4残存
9	坏	口径 (13.0) 底径 8.9 器高 3.7	平底気味。体部~口縁部はやや丸みをもって開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、雲母 内外-にぶい赤褐色	2/3残存
10	坏	口径 (13.1) 底径 (9.7) 器高 3.7	平底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、褐色の岩片 内外-褐色	1/4残存
11	坏	口径 (12.8) 底径 — 器高 3.5	平底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	1/3残存
12	坏	口径 (11.9) 底径 7.2 器高 3.3	平底。体部は直線的開き、口縁部はわずかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ後放射状増大。底部ナデ。	白色の岩片、雲母、角閃石 内外-褐色	3/5残存
13	坏	口径 11.9 底径 — 器高 [3.3]	体部は直線的に開く。口縁部はわずかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	黒色・白色の岩片、角閃石 内外-褐色	口縁~体部2/3残存
14	坏	口径 (12.0) 底径 8.2 器高 3.9	平底。体部~口縁部はやや丸みをもって開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-にぶい赤褐色	1/2残存
15	坏	口径 (14.3) 底径 — 器高 —	丸底。体部~口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色粒、角閃石、雲母 内外-褐色	口縁~体部1/3残存
16	須恵器 坏	口径 (12.3) 底径 5.8 器高 3.6	平底。体部はわずかに丸みをもって開く。口縁部は右反する。ロクロ成形。	外面-口縁部~体部ロクロナデ。底部右回転ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。	白色・褐色の岩片、礫 内外-灰黄褐色	2/5残存
17	須恵器 蓋	口径 — 穴径 3.2 器高 [2.6]	ロクロ成形。	外面-ツマミ部貼付時周辺ナデ。天井部右回転ヘラケズリ。体部ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、礫、石英 内外-灰色	天井部~体部2/3残存

18号住居跡土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、5~30mm大のロームブロックが点在する。焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。3層に近いが、ローム粒がかなり少ない。2層よりローム粒が少ない。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを多量に含む。ロームは、多少白みがかかる。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み(2層より少ない)、30mm大のロームブロックを含む。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロックがほとんど見られない。
- 6層: 暗褐色土層。暗褐色土とやや黒みの強い暗褐色土の混合土。ローム粒を少量含む。



- 7層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土の大ブロック。
- 8層: 暗褐色土層。6層土に5~10mm大のロームブロックが混入した土。

第33図 18号住居跡平面・断面図

18号住居跡 (第33・34図、第13表、図版9)

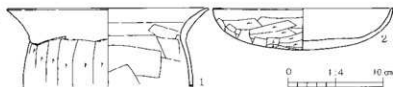
A2地点北西部の北東角で検出した遺構である。調査できたのは、南壁周辺のわずかな範囲であり、それ以外は調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

南壁はほぼ真っ直ぐ東西に伸び、東端は微妙に彎曲しはじめている。東西方向での現存長は、3.36mで、東西方向の規模は、おおよそこの数値を多少上回るものと考えてよい。壁の立ち上がりはかなり急で、壁高は30cm前後である。壁際のためか、床面には凹凸が見られ、硬化も顕著ではない。

第34図1・2の甕・坏は、南壁脇の床面からやや浮いた位置で検出した。出土遺物、住居形態から見て、奈良時代の住居跡であろうか。

19号住居跡 (第35・36図、第14表、図版9・28)

A2地点北西部の北東寄りの一角で検出した遺構である。6号井戸跡により南壁側を大きく壊され



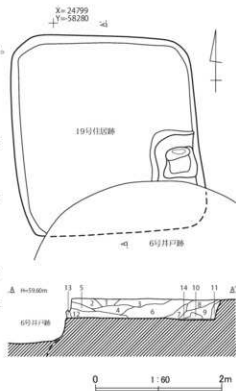
第34図 18号住居跡出土遺物

第13表 18号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整・裝飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 21.2 口径 器高 [8.4]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土粗積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外へにぶい橙色	口縁部へ胴部上位1/4残存
2	甕	口径 19.0 口径 器高 4.4	丸底。口縁部まで内彎する。粘土粗積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母、角閃石 内外へ明褐色	1/2残存

19号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、焼土粒少量含む。ローム粒集塊する。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒多く、焼土粒をほとんど含まない。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、やや黒みの強い暗褐色土をモヤモヤ含む。
5～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が少ない。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、5mm大のローム小ブロックが多い。
- 6層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームブロックが大きく、ローム粒が若干集塊する。20mm大の炭化物を含む。
- 7層：暗褐色土層。5～50、60mm大のロームブロックを多量に含む。
- 8層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。1～4層などより少ない。5mm大のローム小ブロックを微量含む。
- 9層：暗褐色土層。8層に近いが、ローム小ブロックがやや多い。
- 10層：暗褐色土層。70、80mm大のローム大ブロックをかなり含む。
- 11層：暗褐色土層。10層によく似るが、10層のように、ローム粒が乱れて、かたまりをなし入らない。
- 12層：暗褐色土層。4層に近いが、黒みがやや増し、ローム小ブロックが若干多い。5層よりはブロックが少ない。
- 13層：黄褐色土層。ハードロームのブロック。
- 14層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。貼床層か？とすれば、この上面が床面になる。



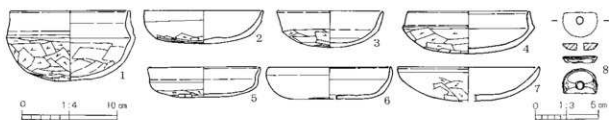
第35図 19号住居跡平面・断面図

ている。確認面は黄褐色の軟質ローム層上面である。通常の住居跡に見られる内部施設を欠いており問題があるが、規模の面では、住居跡として遜色ないため、一応住居跡の一種として報告することにした。

平面形は、隅丸方形である。規模は、南北方向で推定3.12m、東西方向で2.96mである。入り口、奥壁を決める施設がなく、主軸を求めることができないが、おおむね南北、ないしは東西と考えてよいであろう。残存する壁は、いずれも急峻に立ち上がる。北壁寄りの床面では、貼床層かと思われる層が確認できたが、他は地山をそのまま床面としている。床面はほぼ平坦で、硬化はさほど顕著ではない。東壁に接して、粘土混りの暗褐色土を突き固めた方形の段が付設されている。段の大きさは、東西方向で72cm、床面からの高さは、36cm前後、上面中央には深さ12cm前後の方形の掘り込みが見られる。

覆土は14層に分けられた。通常の住居跡覆土とは異なり、大半の層に大小のロームブロックがかなり含まれることが特徴的である。短期的に埋め戻された土と見てよいのかもしれない。

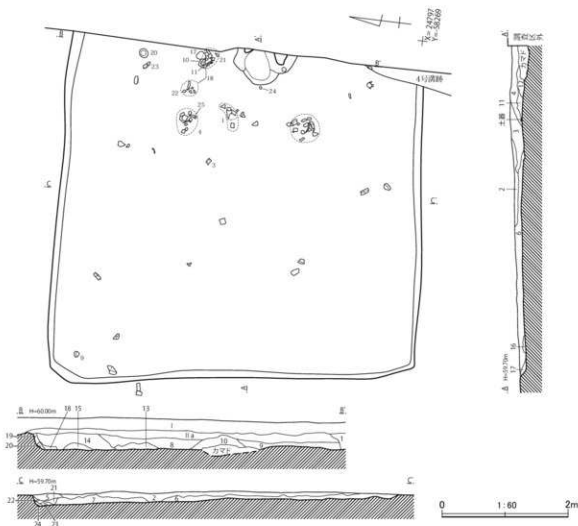
第36図1の坏は、北西隅近くの床面よりやや浮いた位置で出土した。覆土中からは、多様な時期の遺物が出土している。出土遺物から見て、古墳時代後期以降の遺構と考えられる。



第36図 19号住居跡出土遺物

第14表 19号住居跡出土遺物観察表

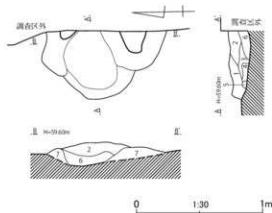
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法的特徴	調整・装飾手法的特徴	胎土・色調	備考	
1	鉢	口径	12.7	丸底。体部は深い。体部に稜をもち、口縁部は内傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位~下位ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部上位~底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片・雲母、礫 内外一赤褐色	口縁部~体部一部欠損
		底径	—				
2	坏	口径	12.5	平底気味。体部は丸みをもつ。口縁部は直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下位~底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外一にぶい赤褐色	ほぼ完形
		底径	9.8				
3	坏	口径	11.2	丸底。体部に稜をもち、口縁部は外傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部中位~底部ナデ。	褐色の岩片、角閃石 内外一褐色	2/3残存
		底径	3.3				
4	坏	口径	(12.9)	丸底。体部に稜をもち、口縁部は内傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下位~底部ヘラナデ。	白色の岩片、雲母、礫 内外一灰褐色	2/5残存
		底径	—				
5	坏	口径	(11.7)	平底気味。体部は丸みをもつ。口縁部はやや外反し、口唇部は内傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下位~底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外一褐色	2/5残存
		底径	3.1				
6	坏	口径	(13.0)	平底。口縁部は内傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部~体部下位ヨコナデ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部上位~底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母、礫 内外一褐色	1/2残存
		底径	9.0				
7	坏	口径	(15.0)	丸底。口縁部は内傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位~底部ヘラケズリ。内面-ヨコナデ。中位以下ナデ。	雲母、褐色の岩片 内外一明赤褐色	1/5残存
		底径	—				
8	石製紡錘車	上径(2.95)、下径2.4、孔径0.6、厚さ0.6、重さ3.8g					破片



20号住居跡層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒、土器粒をかなり含む。ガサガサしている。4号溝跡覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、焼土粒を少量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大までのローム小ブロック、焼土粒をかなり含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒をかなり含み、炭化物粒を微量含む。2・3層より黒みが強い。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒含み、ローム小ブロック少量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5～10mm大のロームブロックを局部的に、焼土粒、炭化物粒を少量含む。暗褐色土とロームが斑状に混じる大ブロック3箇所に見られる。
- 7層：暗褐色土層。6層に近いが、ロームブロックが大きい(5～30mm大)。20、30mm大の炭化物を2、3点含む。
- 8層：暗褐色土層。II a層に近いが、ローム粒多く、黒み増す。
- 9層：暗褐色土層。8層に近いが、ローム粒、土器粒が多い。
- 10層：暗褐色土層。8層に近いが、焼土が多い。
- 11層：暗褐色土層。4層に近いが、焼土粒が多く、焼土小ブロックをかなり含む。
- 12層：暗褐色土層。11層に近いが、上部に焼土ブロックが集中し、下部には、モヤモヤロームが集塊する。
- 13層：暗褐色土層。8層に近いが、10mm大を超えるロームブロックが含まれ、ブロックの量増える。焼土が局部的に集塊。
- 14層：暗褐色土層。13層に近いが、ローム粒、ロームブロック、焼土が少ない。
- 15層：暗褐色土層。13層に近いが、焼土が少ない。
- 16層：黄褐色土層。ハードロームのブロックのまとまり。
- 17層：暗褐色土層。ローム粒を含み、20～30mm大のハードロームのブロックが点在する。
- 18層：暗褐色土層。15層に近いが、ロームブロックが多い。
- 19層：暗褐色土層。18層に近いが、さらにロームブロックが多い。暗褐色土とロームは同量。
- 20層：暗褐色土層。16層に近いが、ロームブロックが少ない。
- 21層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 22層：暗褐色土層。5層に近いが、ロームブロックを含まない。
- 23層：暗褐色土層。21層に近いが、ローム粒が若干少ない。
- 24層：暗褐色土層。ローム粒を含み、ロームブロック点。

第37図 20号住居跡平面・断面図(1)



第38図 20号住居跡平面・断面図(2)

20号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、焼土粒を多く含む。炭化物粒を含む。ローム粒は、所々不規則な集塊をなす。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが若干少なく、焼土粒、炭化物は多い。全体に黒みがかなり強い。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒が少ない。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、細かい焼土粒が密に入る。
- 5層：黄褐色土層。暗褐色土の混じるソフトロームの集塊。
- 6層：暗褐色土層。焼土粒、被熱ローム（焼土ほど赤化していない）を多量に含む。下部に炭化物の薄層あり。
- 7層：褐色土。暗褐色土とローム粒、ロームブロックの混合物。しまっている。カマド軸構築材。

20号住居跡（第37～40図、第15～17表、図版9・29）

A 2地点北西部の東縁、北東角寄りで検出した遺構である。東壁は調査範囲外であり、カマドは一部調査できなかった。4号溝に、南東隅近くを壊されている。確認面は、おおむね黄褐色の軟質ローム層上面である。

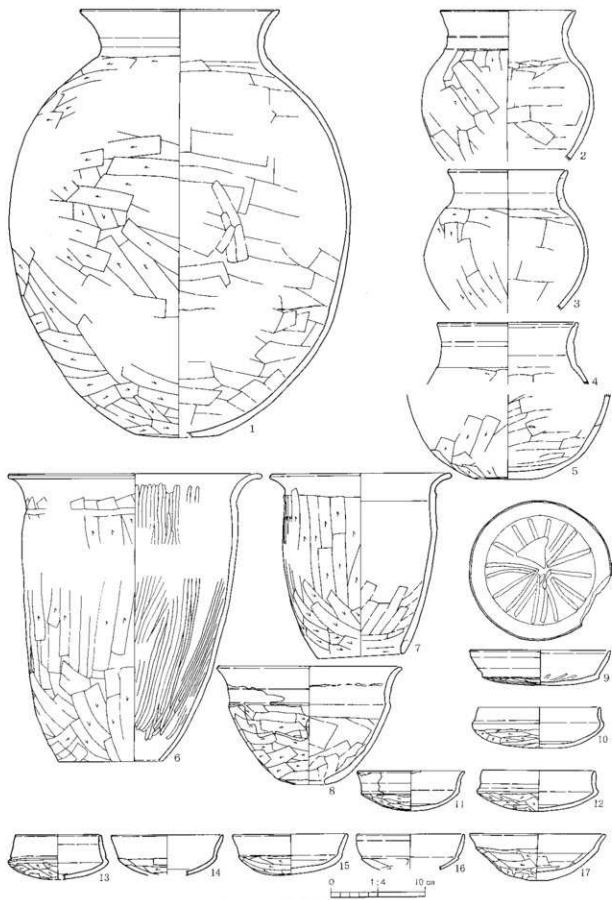
平面形は、若干横幅がまさる方形、ないしは隅丸方形である。規模は、主軸方向で現存5.27m、副軸方向で5.84m、主軸方位はN-89°-Eである。南北壁、西壁はほぼ直線的で、壁の立ち上がりも明瞭である。床面は、中央が微妙に高くなるように仕上げられており、壁際を除き硬化も顕著である。

カマドは、調査範囲を画する東側壁面で検出した。本来は東壁、すなわち奥壁中央に付設されていたのであろう。東西方向での残存長は54cm、燃焼部の奥壁手前までしか調査できなかったことになる。燃焼部は、浅く丸みをもって掘りこまれており、被熱赤化の痕跡は顕著ではない。暗褐色土とロームの混合物で造られた低平な軸が両側に遺存する。

カマドの周辺を中心に、多数の土器(第39・40図1・3・4他)と鉄鏝(同図25)が出土している。いずれも床面直上、ないしは床面よりやや浮いた位置での出土である。25の鉄鏝も、カマドの左手前、床面直上の層中出土である。出土遺物から見て、古墳時代後期～終末期の住居跡と考えられる。

第15表 20号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.8 底径 8.8 器高 45.2	口縁部は外反する。胴部は丸みをもつ。平底気味。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁～頸部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁～頸部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。胴部中位ユビナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内一黒褐色～暗褐色 外一赤褐色	2/3残存
2	甕	口径(14.4) 底径 一 器高 [16.0]	口縁部は外反し、下位に稜をもち、胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁～頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁～頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英、角閃石 内外一にぶい褐色	口縁～胴部下位 1/4残存
3	甕	口径 12.7 底径 一 器高 [19.8]	口縁部は外反する。胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁～頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁～頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、燧 内外一褐色	口縁～胴部下位 2/5残存
4	甕	口径(14.4) 底径 一 器高 (6.5)	口縁部は外反する。口唇部に凹線が走る。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、燧 内外一黒褐色 素：にぶい黄褐色	口縁～頸部5/12残存
5	甕	口径 一 底径 7.4 器高 [8.9]	平底。胴部は丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一にぶい褐色	胴部下位～底部 1/3残存



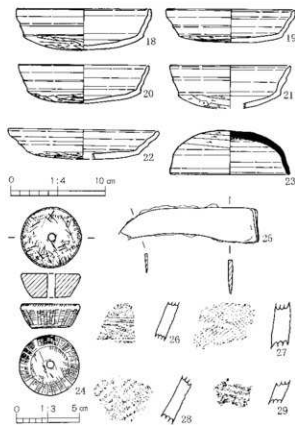
第39图 20号住居跡出土遺物(1)

第16表 20号住居跡出土遺物観察表(2)

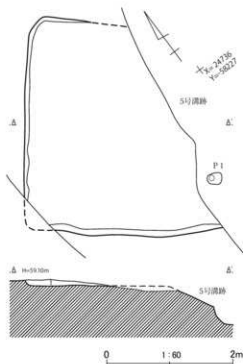
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
6	甌	口径 26.9	口縁部は外反する。胴部は上位にわずかに丸みもち、直線的にすぼまる。底部は筒状。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部-胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-胴部ヘラミガキ。胴部最下端ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、籾内外-橙へにぶい褐色	3/5残存
		底径 11.1				
		器高 30.4				
7	甌	口径 18.8	口縁部は外反する。胴部はわずかに丸みをもつ。底部は筒状。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位ヘラナデ。最下端ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片、角閃石、石英、籾内外-明赤褐色	3/4残存
		底径 9.3				
		器高 19.6				
8	甌	口径 19.3	口縁部は外反する。中位に弱い稜をもつ。底部に径3.3cmの円孔。粘土組織み上げによる成形。使用の痕跡が顕著。	外面-口縁-胴部ヨコナデ。胴部スス付着胴部ヘラケズリ。内面-口縁-胴部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。最下端ケズリ。	白色・黒色・褐色の岩片、籾、雲母内外-赤褐色へにぶい橙色	3/4残存
		底径 3.3				
		器高 12.5				
9	坏	口径 14.75	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反し、弱い稜を2段もち、上位は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ヨコナデ後放射状ヘラミガキ。	雲母、籾内外-にぶい赤褐色	ほぼ完形
		底径 12.3				
		器高 3.7				
10	坏	口径 12.9	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位-底部ヘラケズリ。内面-ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、籾内外-灰黄褐色	ほぼ完形
		底径 4.3				
		器高 4.3				
11	坏	口径 11.3	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面-ヨコナデ。底部ナデ。口縁部一部スス付着	白色・黒色・褐色の岩片、籾内外-にぶい褐色	口縁部1/6欠損
		底径 4.2				
		器高 4.2				
12	坏	口径 12.0	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石内外-褐色外-にぶい褐色	1/3残存
		底径 4.3				
		器高 4.3				
13	坏	口径 9.0	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、籾内外-明赤褐色外-にぶい赤褐色	1/2残存
		底径 4.7				
		器高 4.7				
14	坏	口径 11.7	体部に弱い稜をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	褐色の岩片、角閃石内外-にぶい赤褐色	1/3残存
		底径 [4.2]				
		器高 [4.2]				
15	坏	口径 12.2	丸底。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ナデ。	白色・褐色の岩片内外-褐色	2/3残存
		底径 4.3				
		器高 4.3				
16	坏	口径 (11.3)	体部に稜をもつ。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。	褐色の岩片内外-にぶい褐色	口縁部-体部上位残存
		底径 [3.8]				
		器高 [3.8]				
17	坏	口径 14.5	丸底。体部は大きく開く。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、籾内外-にぶい赤褐色へ灰褐色	9/10残存
		底径 4.9				
		器高 4.9				
18	坏	口径 (14.0)	丸底。体部は大きく開き、稜を2段もち。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、石英、籾内外-にぶい黄褐色	1/3残存
		底径 4.3				
		器高 4.3				
19	坏	口径 (13.5)	平底気味。体部は大きく開き、稜を2段もち。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母内外-灰黄褐色	1/3残存
		底径 3.5				
		器高 3.5				
20	坏	口径 13.7	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反し、弱い稜を2段もち。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、籾、雲母内外-にぶい黄褐色	ほぼ完形
		底径 4.0				
		器高 4.0				
21	坏	口径 12.8	丸底。体部は外傾し、中位に稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色の岩片、角閃石、石英、籾内外-褐色	2/3残存
		底径 [4.5]				
		器高 [4.5]				
22	坏	口径 15.8	平底気味。体部は大きく開き、稜を2段もち。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色、角閃石、籾内外-にぶい赤褐色	1/2残存
		底径 (3.1)				
		器高 (3.1)				
23	須恵器蓋	口径 12.5	天井部は丸みをもつ。体部の稜は弱い。口縁部は外傾する。	外面-天井部右回転ヘラケズリ。体部ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、籾内外-灰色	9/10残存
		底径 4.6				
		器高 4.6				

第17表 20号住居跡出土土物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)・特徴			備考		
24	石製 紡錘車	上径4.7、下径3.0、孔径0.6、厚さ1.9、重さ67.3g			完形		
25	鉄製品 鎌	長さ[10.9]、幅2.7、厚さ0.35、重さ35.871g			先端部欠損		
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
26	深鉢	口径 底径 器高	— — —	口縁部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面—半截竹管状の工具による2条単位の沈線で帯状の区画を設ける。区画内に短斜沈線か。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片、雲母など細砂。植物繊維を含む。 内外—にぶい黄褐色	黒浜式?
27	深鉢	口径 底径 器高	— — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面—ヨコ回転のLR・RLの単節縄文を羽状に施す。内面—ナデ。	白色・灰色・黒色・赤褐色の岩片など細砂 内外—にぶい橙色	縄文時代 中期
28	深鉢	口径 底径 器高	— — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面—Rの撫糸文。内面—ナメのナデか。	白色・灰色の岩片、角閃石など細砂 内外—にぶい褐色	縄文時代 中期?
29	深鉢	口径 底径 器高	— — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面—RLの単節縄文(磨耗し節がよく見えないため、他の撫りの可能性もある)。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片など大小砂粒。植物繊維を含む。 内外—にぶい褐色	黒浜式?



第40図 20号住居跡出土土物(2)



21号住居跡土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒を多く含む。5mm大のローム小ブロックが水玉状に点在する。

第41図 21号住居跡平面・断面図

21号住居跡(第41図、図版9)

A3地点北端近くで検出した遺構である。東隅は調査範囲外であり、南東半を5号溝跡により大きく壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は方形、ないしは隅丸方形になろうか。5号溝跡に壊された部分にカマドがあったと仮定す

れば、主軸方位は、 $S-39^{\circ}-E$ あたりになる。規模は、推定主軸方向で現存2.50m、同様に副軸方向で3.33mである。残存部分の床面は、ほぼ平坦であるが、硬化はあまり顕著ではない。

覆土中より土師器細片が少量出土している。出土遺物、住居形態から見て、古墳時代の住居跡の可能性がある。

2 掘立柱建物跡

A2地点では、1～4号掘立柱建物跡と呼称した4棟の掘立柱建物跡を検出した。1・2号掘立柱建物跡は、柱穴が大きく、深く、全体の規模も大きく、規模、柱穴ともに小振りな3・4号掘立柱建物跡とはかなり異なる。1・2号掘立柱建物跡と3・4号掘立柱建物跡は、時期、性格ともに異なる掘立柱建物跡とも考えられる。また、3・4号掘立柱建物跡の周辺は、類似したピットが集中する一帯で、いくつかのピットの並びを見出すことができるが、3・4号掘立柱建物跡以外は、いずれも数個のピットの列状の並びであり、建物跡としての配列をとらえることができない。あるいは一部礎石立ちの柱などを併用した建物跡などが造られたため、建物跡を析出できないのかもしれない。

1号掘立柱建物跡（第42・43図、図版10）

A2地点北西部のほぼ中央、北寄りで検出した遺構である。7号住居跡を切って造られている。確認面は、標準土層Ⅲ層とした黄褐色の軟質ローム層上面である。

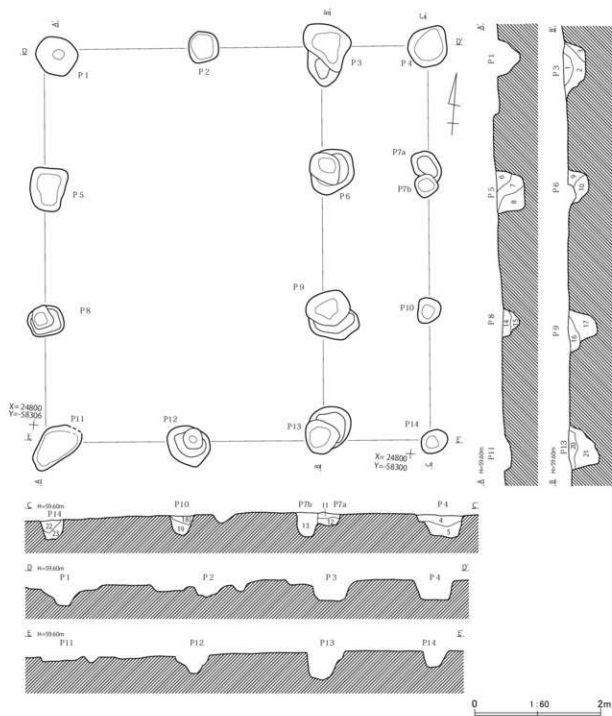
南北に長い2間×3間の側柱建物跡で、東側に1間の底が付されている。柱間での規模は、南北方向で6.20m、東西方向で4.25～4.30m、東側の底の横幅は1.65～1.80mである。南北方向、長軸の方向は、 $N-4^{\circ}-W$ である。柱間の長さは、南北方向で1.90～2.26m、東西方向で1.96～2.20mである。

柱穴の平面形は、総じて不整な円形、楕円形であるが、P5・P6・P8のようにやや角ばった形のものも目に付くようである。鍋底形、バケツ形に掘り込まれているものが多い。深さは、P1～P3が18～32cm、P4が32cm、P5、P6が44、32cm、P7aが22cm、P7bが37cm、P8、P9が26、46cm、P10が32cm、P11～P13が8～46cm、P14が25cmである。覆土は、ロームの混じる暗褐色土、黒褐色土が主で、水平堆積やレンズ状堆積に近い堆積状態を示すものがほとんどである。P5の覆土は、柱根跡が崩れた堆積状態とも見えなくはないが、他の柱穴覆土には、柱穴らしい堆積状態はほとんど見られない。あるいは柱が抜去され、埋め戻されるような過程があったのかもしれない。

少数の土師器小片が出土している。覆土の性状、新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世以前の遺構と考えられる。

2号掘立柱建物跡（第44・45図、図版10）

A2地点北西部のほぼ中央で検出した遺構である。24号土坑に切られ、8号住居跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。



1号掘立柱建物跡土層注記(1)

- 1層：黒褐色土層。1～3mm大のローム粒を少量含み、土器細片を含む。1～3層は、P3覆土。
- 2層：黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多く含む。
- 3層：黒褐色土層。1～3mm大のローム粒を少量含む。
- 4層：暗褐色土層。10～15mm大のロームブロック、土器細片を含む。4・5層は、P4覆土。
- 5層：暗褐色土層。1～3mm大のローム粒を多く含み、20mm大のロームブロックを少量含む。

- 6層：暗褐色土層。2～3mm大のローム粒を少量含む。6～8層は、P5覆土。
- 7層：暗褐色土層。2～3mm大のローム粒を含む。
- 8層：暗褐色土層。2～3mm大のローム粒を多く含み、10～20mm大のロームブロックを含む。
- 9層：黒褐色土層。1～3mm大のローム粒を少量含み、土器細片をむ含む。9・10層は、P6覆土。

第42図 1号掘立柱建物跡平面・断面図(1)

1号掘立柱建物跡土層注記(2)

- | | |
|---|--|
| 10層：黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックを含む。 | 18層：黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。18・19層は、P10覆土。 |
| 11層：黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。11～13層は、P7覆土。 | 19層：黒褐色土層。1～10mm大のローム粒、ロームブロックを多く含む。 |
| 12層：黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを含む。 | 20層：暗褐色土層。1～3mm大のローム粒を少量含む。20・21層は、P13覆土。 |
| 13層：暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを少量含む。 | 21層：暗褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロックを含み、土器細片を含む。 |
| 14層：暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む、土器片を含む。14・15層は、P8覆土。 | 22層：黒褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロックを少量含む、土器細片を含む。22・23層は、P14覆土。 |
| 15層：暗褐色土層。10～30mm大のロームブロックを含む。 | 23層：黒褐色土層。5～15mm大のロームブロックを多く含む。 |
| 16層：黒褐色土層。10～30mm大のロームブロックを含み、土器細片を含む。16・17層は、P9覆土。 | |
| 17層：黒褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロックを含み、土器細片を含む。 | |

第43図 1号掘立柱建物跡平面・断面図(2)

南北に長い2間×3間の側柱建物跡である。北妻側の柱間に比し、中央2列の柱間がやや広く、胴張気味に微妙に膨らんでいる。柱心間での規模は、南北方向で5.98m、東西方向で4.15～4.55mである。長軸の方向は、ほぼ真北を指す。柱心間での柱間の長さは、南北方向で1.75～2.03m、東西方向で1.85～2.39mとややばらつきがある。

柱穴の平面形は、総じて不整な円形、楕円形である。P2・P6・P10は、最大径が1m以上あり、全体的に柱間に比し、柱穴径が大きいことが特徴になる。鍋底形、バケツ形に掘り込まれており、底面に凹凸が目立つようである。深さは、P1～P3が27～47cm、P4～P6が29～45cm、P7、P8が30、55cm、P9～P11が30～40cmである。

P5を除く10個の柱穴で覆土が観察できた。P6・P8には、柱穴中央に径30cm前後の明瞭な柱根跡が見られ、その周りに暗褐色土、ないしは黒褐色とロームを主とする褐色土が交互に裏込めとして詰められていた。P1・P7・P10・P11などの覆土も、土坑に通常の堆積状態とはやや異なるかにも見える。

少数の土器器小片が出土している。覆土の性状、新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世以前の遺構と考えられる。

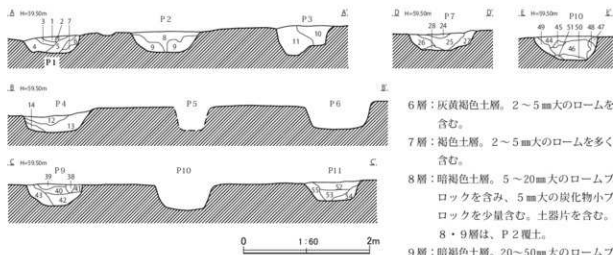
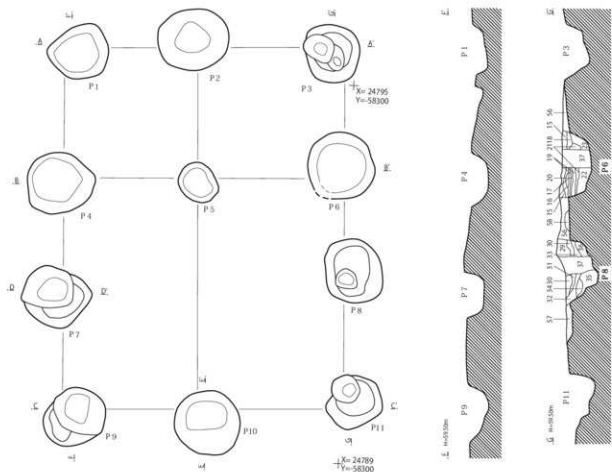
3号掘立柱建物跡(第46図)

A2地点北西部の南西寄りの一角で検出した。調査時確認することができず、図面整理作業を経て、柱穴の並びから掘立柱建物跡の一種と認定し遺構である。19号土坑と重複し、その部分の柱穴が欠くが、先後関係は不明である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

ほぼ正方形を呈する2間×2間の小規模な建物跡と思われる。柱心間での規模は、南北方向で3.6m前後、東西方向で3.6～3.9mである。南北方向の柱列は、真北から若干東に傾いた方位を指す。柱心間での柱間の長さは、南北方向で1.65～2.23m、東西方向で1.75～2.02mとややばらつきがある。

柱穴の平面形は、いずれも不整ではあるが、どこかしら角張って辺のある方形に近い形のものが多い。鍋底形、バケツ形に掘り込まれている。

微量の土器器細片しか出土していない。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



2号掘立柱建物跡土層注記(1)

- 1層：灰黄褐色土層。1～2mm大のローム粒を少量、径10mm大の炭化物粒を含む。1～7層は、P1覆土。
- 2層：褐色土層。1～2mm大のローム粒が多い。
- 3層：2～10mm大のロームを含む。しまりあり。
- 4層：灰黄褐色土層。1～2mm大のローム粒を少量含む。
- 5層：褐色土層。5～10mm大のロームが多い。しまり弱い。10mm大の炭化物粒を少量含む。
- 6層：灰黄褐色土層。2～5mm大のロームを含む。
- 7層：褐色土層。2～5mm大のロームを多く含む。
- 8層：暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを含み、5mm大の炭化物小ブロックを少量含む。土器片を含む。
- 8・9層は、P2覆土。
- 9層：暗褐色土層。20～50mm大のロームブロックを含む。
- 10層：黒褐色土層。20～30mm大のロームブロックを多く含み、土器細片を少量含む。10・11層は、P3覆土。
- 11層：黒褐色土層。10mm大のロームブロックを少量含み、土器細片を多く含む。
- 12層：黒褐色土層。1～10mm大のローム粒、ロームブロックを含み、土器細片を含む。12～14層は、P4覆土。

第44図 2号掘立柱建物跡平面・断面図(1)

2号掘立柱建物跡土層注記(2)

- 13層: 黒褐色土層。1~30mm大のローム粒、ロームブロックを多く含む。
- 14層: 黒褐色土層。1~10mm大のローム粒、ロームブロックを含む。
- 15層: 暗褐色土層。15mm大のロームブロックを少量含む。強くしまる。3・37層は、P 6 覆土。
- 16層: 褐色土層。ロームを主に、10~15mm大の暗褐色土ブロックを含む。強くしまる。
- 17層: 暗褐色土層。3~5mm大のローム粒、ローム小ブロックを少量含む。強くしまる。
- 18層: 褐色土層。ロームを主に、10mm大の暗褐色土ブロックを極少量含む。
- 19層: 褐色土層。ロームを主に、10~15mm大の暗褐色土ブロックを含む。強くしまる。
- 20層: 暗褐色土層。明瞭に黒みが強く、水平堆積する土層。10~15mm大のロームブロックを含む。強くしまる。
- 21層: 暗褐色土層。明瞭に黒みが強く、水平堆積する土層。15~20mm大のロームブロックを少量含む。強くしまる。
- 22層: 褐色土層。ロームを主に、10~20mm大の暗褐色土ブロックを少量含む。強くしまる。
- 23層: 暗褐色土層。10~20mm大のロームブロックを多く含む。
- 24層: 黒褐色土層。10mm大のローム小ブロックを少量含む、土器片を含む。24~28層は、P 7 覆土。
- 25層: 黒褐色土層。2~10mm大のローム粒、ロームブロックを含み、土器片を少量含む。
- 26層: 暗褐色土層。10~30mm大のロームブロックを多く含む。
- 27層: 暗褐色土層。10~20mm大のロームブロックを含む。
- 28層: 黒褐色土層。2~10mm大のローム粒、ロームブロックを少量含む。
- 29層: 暗褐色土層。5~10mm大の大小ロームブロックを極少量含む。強くしまる。29~37層は、P 8 覆土。
- 30層: 暗褐色土層。10~30mm大のロームブロックを含む。強くしまる。
- 31層: 暗褐色土層。10mm大のロームブロックを少量含む。土器細片を含む。強くしまる。
- 32層: 暗褐色土層。15~30mm大のロームブロックを含む。強くしまる。
- 33層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。強くしまる。
- 34層: 暗褐色土層。5~10mm大の大小ロームブロックを少量含む。強くしまる。

- 35層: 褐色土層。ロームを主に10~20mm大の暗褐色土ブロックを少量含む。強くしまる。P 6の22層に近似する。
- 36層: 暗褐色土層。5~10mm大の大小ロームブロックを多く含む。強くしまる。
- 37層: 黒褐色土層。2mm大のローム粒を極少量含む。柱根の腐蝕した部分か。
- 38層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。新しいピットか?
- 39層: 黒褐色土層。2~10mm大のローム粒、ロームブロックを少量含む。39~43層は、P 9 覆土。
- 40層: 褐色土層。2~30mm大のローム粒、ロームブロックを多く含む。土器細片を含む。
- 41層: 褐色土層。2~10mm大のローム粒、ロームブロックを含む。
- 42層: 褐色土層。1~30mm大のローム粒、ロームブロックを多く含む。
- 43層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを含む。
- 44層: 暗褐色土層。ローム粒を含む。局所的にロームブロックを少量含む。44~51層は、P 10 覆土。
- 45層: 暗褐色土層。暗褐色土と同量のローム粒、ロームブロックがモヤモヤ混入する。
- 46層: 暗褐色土層。44層に近いが、5mm大以下のローム粒、ローム小ブロックが多い。
- 47層: 暗褐色土層。46層に近いが、ロームが多い。
- 48層: 黄褐色土層。ロームブロックを主に、ブロック間に暗褐色土が混入する。
- 49層: 暗褐色土層。44層に近いが、ロームが少ない。
- 50層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームがモヤモヤ混入に混入する。
- 51層: 黄褐色土層。壁などの崩落ローム。暗褐色土を少量含む。
- 52層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む、土器細片を多く含む。52~55層は、P 11 覆土。
- 53層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを多く含む、土器細片を含む。
- 54層: 黒褐色土層。20~30mm大のロームブロックを含む。
- 55層: にぶい黄褐色土層。20~30mm大のロームブロックと黒色土の混合土。
- 56層: 暗褐色土層。10~20mm大のロームブロックを少量含む。56・57層は、標準土層Ⅱa層、あるいはⅡb層に相当する土層。
- 57層: 暗褐色土層。30~40mm大の暗褐色土ブロックを含む。
- 58層: 褐色土層。ロームを主に、10mm大の暗褐色土ブロックを少量含む。Ⅱ~Ⅲ層の漸移層か。

第45図 2号掘立柱建物跡平面・断面図(2)

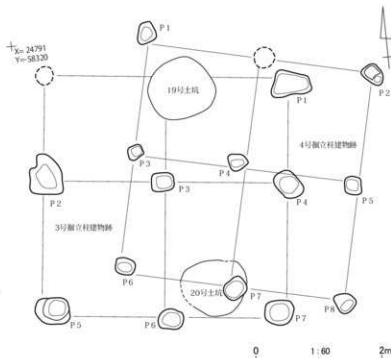
4号掘立柱建物跡(第46図)

A 2地点北西部の南西寄りの一角で検出した遺構である。図面整理作業を経て、掘立柱建物跡の一種と認定した。20号土坑と重複するが、先後関係は不明である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

ほぼ正方形を呈する2間×2間の小規模な建物跡である。柱心間での規模は、南北方向で3.7m前後、東西方向で3.55~3.70mである。南北方向の柱列は、真北から13°ほど東に傾いた方位を指す。柱心間での柱間の長さは、南北方向で1.80~1.98m、東西方向で1.65~1.90mと多少ばらつきがある。

柱穴の平面形は、いずれも不整形な方形に近い形態である。鍋底形、バケツ形に掘り込まれている。

土器器細片が極微量出土したのみである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



第46図 3・4号孤立柱建物跡平面図

3 方形周溝墓および前方後方墳

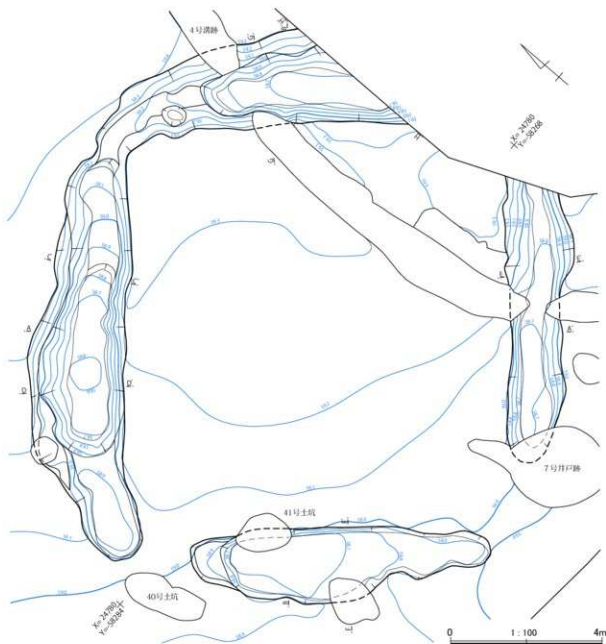
今回の調査では、A2地点で方形周溝墓1基、前方後方墳1基、A3地点で前方後方墳1基を検出した。調査範囲に限られるため、他に墳墓がないとは言いきれないが、3基の墳墓が大きく間隔をあげ配置されたかのように造られたことは間違いない。

1号墓 (第47~51図、第18表、図版11~13・29)

A2地点北西部の南東端近くで検出した。南西側に沖積地をのぞむ低位段丘南西縁の微傾斜地に位置する方形周溝墓である。遺構確認時、方台部で円筒埴輪片が出土したため(第51図1・2)、当初円墳と推定し、精査開始後方形周溝墓であることが判明した経緯がある。東隅を含む一角は、調査範囲外である。7号井戸跡、41・42号土坑、4号溝跡により周溝の一部を壊されている。確認面の大半は、黄褐色の軟質ローム層の上面であるが、ローム上の暗褐色土層で確認できた部分もある。

方台部の平面形は、ほぼ正方形で、方台部中央の標高は59.2~59.3mである。南隅、西隅には陸橋部が掘り残されている。周溝内縁は、おおむね直線的であるが、周溝外縁は、全体に丸みをもち、曲折が著しい。規模は、周溝外縁中央の南北で15.19m、同じく東西で13.75m、東西方向での最大長は14.34mである。方台部長は、南北で10.72m、東西で10.43mである。南北方向での中軸線方位は、N-51°-Eである。

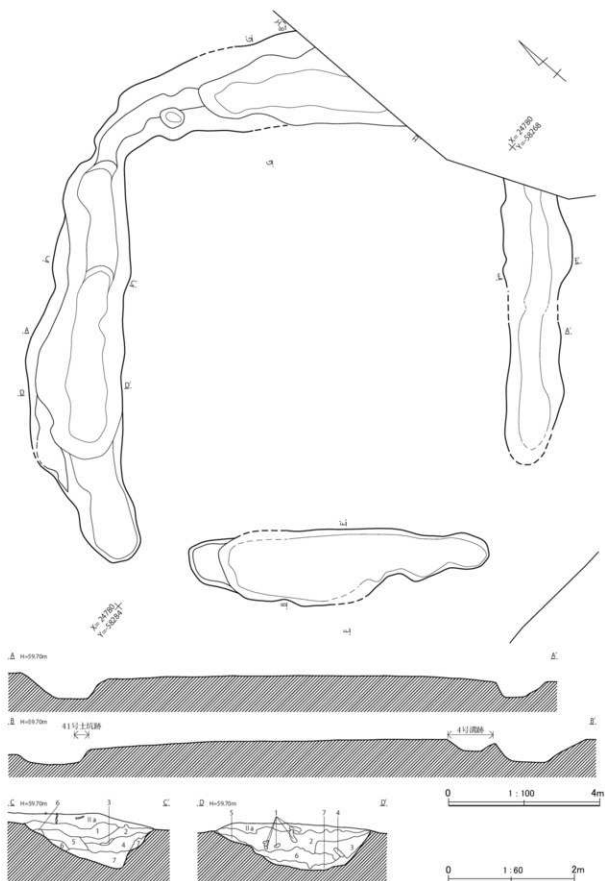
周溝中央付近での溝幅は、北西溝で2.53m、北東溝で2.49m、南東溝で1.89m、南西溝で2.00mである。北隅は、くびれるように細くなっている。周溝の断面形は、鍋底形、船底形に近いが、総じて



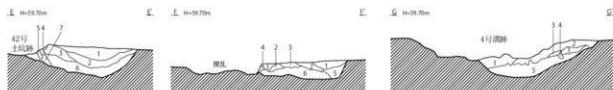
第47図 1号墓等高線図

方台部側の溝壁の方が急峻である。周溝中央での深さは、北西溝で58cm、北東溝で61cm、南東溝で40cm、南西溝で33cmである。北西溝、北東溝は、中央部が土坑状に掘りくぼめられている。北東溝の北隅近くに、ビット状の掘り込みが見られる。

覆土は、周溝それぞれでかなり異なるかにも見えるが、いくつかの周溝で共通する特徴的な堆積土が見られるようである(第48～50図)。ひとつは、C-C'、D-D'、G-G'、H-H'断面の溝底を覆う「黄褐色土」である。この「黄褐色土」は、ロームと暗褐色土の不規則な斑状の混合土であり、総じて溝底を厚く覆う特徴的な一次堆積土をなしている。F-F'断面の「6層」とした「暗褐色土」も、ロームが多少少ないものの同種の堆積土であろう。また、F-F'断面では、暗褐色土を主にロームブロックの多寡により区別される土層が交互に堆積しており、埋め戻されたかの観を呈すること(第49図、図版13)にも留意したい。



第48图 1号墓平面·断面图(1)



1号墓土層注記(1)

〔C-C'断面〕

IIa層：黒褐色土層。やや淡い色調の黒褐色土（暗褐色土との違いは軽微）を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、焼土粒を少量含む。

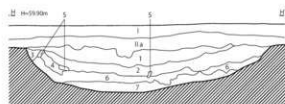
1層：暗褐色土層。上位のIIa層に近いが、しまりが若干強く、黒みが減ずる。ローム粒、ロームブロックをかなり含む。

2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が若干減り、20～30mm大のロームブロックを含む。

3層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒が少なく、よりしまっている。

4層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックをモヤモヤ不規則に多量に含む。2層よりしまっている。

5層：暗褐色土層。1層に近いが、10mm大のロームブロックが多く、



ローム粒が偏在する。

6層：暗褐色土層。5層に近いが、10～30mm大のロームブロックが集中する。

7層：黄褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～80mm大のロームブロックがほぼ同量斑状に混合する。下部は、ほとんどロームからなり、ローム間にモヤモヤ暗褐色土が混じる。

〔D-D'断面〕

IIa層：黒褐色土層。ローム粒を含む。

1層：黒褐色土層。ロームブロックを多量に含む。

2層：黒褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロック、モヤモヤとローム粒を多量に含む暗褐色土の雲状の大ブロックをかなり含む。

3層：暗褐色土層。2層の雲状の大ブロックがさらに増える。

4層：褐色土層。やや粘性のある褐色ロームの大ブロック。

5層：暗褐色土層。黒褐色土、暗褐色土、ロームの混合土。

6層：暗褐色土層。4層に近いが、さらにローム粒、ロームブロックが多く、斑状を呈する。

7層：黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、隙間に黒褐色土が入っている。

〔E-E'断面〕

1層：暗褐色土層。ローム粒、5～60mm大のロームブロックを含む。

2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒少量含む、5～20mm大のロームブロックを含む。5mm大のローム小ブロックが点在する。

3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。

4層：暗褐色土層。暗褐色土とロームのブロック。

5層：暗褐色土層。暗褐色土のブロック。

6層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～10mm大のロームブロックの斑状の混合土。

7層：暗褐色土層。6層に近いが、暗褐色土が多い。

〔F-F'断面〕

1層：暗褐色土層。ローム粒を含む。1～5層は、暗褐色土を主とするロームブロックの多い土とそれが少ない土とが、交互に周溝内流入、あるいは投棄されたことを示している。全体に埋め戻された土のような様相を呈する。

2層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多く含む。

3層：暗褐色土層。1層とほとんど同じ。若干ローム小ブロックが

目立つ。

4層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックが斑状に多量に混入する。

5層：暗褐色土層。2層に近いが、20、30mm大のロームブロックを少量含む。

6層：暗褐色土層。ローム粒、5～100mm大のロームブロックを不規則に多量に含む。ロームより暗褐色土の方がやや多い。

第49図 1号墓平面・断面図(2)

遺物としては、主に方台部を覆うIIa層中や周溝上層から出土した埴輪片(第51図1・2・4～9)を除けば、周溝内から土師器細片が数点出土したのみである。本遺構の時期を探りうる唯一の手がかりは、同図3の土器片である。周溝下層から出土しており、2号墓の壺(第58図8)に類似した小型の

1号墓土層注記(2)

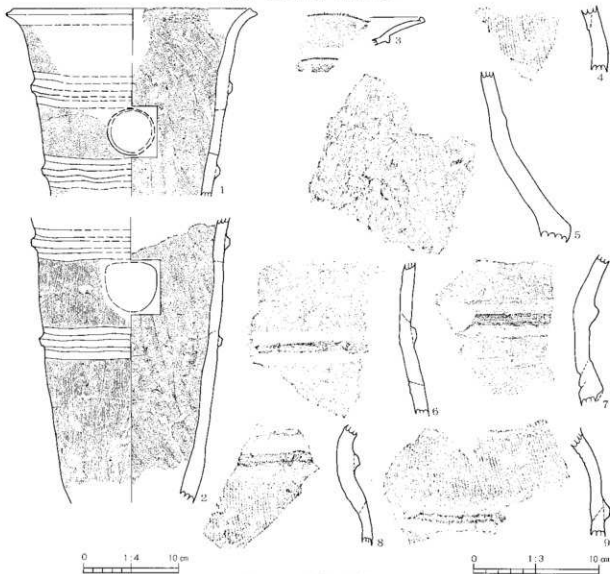
〔G-G'断面〕

- 1層:暗褐色土層,ローム粒,5~50mm大のロームブロックを含む。 4層:暗褐色土層,暗褐色土とロームの大ブロック。
 2層:暗褐色土層,ローム粒,5mm大のローム小ブロック,焼土粒 5層:黄褐色土層,ローム粒,5~100mm大のロームブロックを主に、
 を含む,20mm大のロームブロックが点在する。 ブロック間に暗褐色土が混じる,しまっている。
 3層:暗褐色土層,ローム粒を含む。

〔H-H'断面〕

- 1層:暗褐色~灰黄褐色土層,純表土,As-Aを多量に含む粒子の 4層:暗褐色土層,ローム粒をかなり含む,60mm大のロームブロッ
 粗い暗褐色土,中にロームの間層あり。 クを1点含む。
 IIa層:暗褐色土層,やや色調の明るい暗褐色土を主に,ローム粒、 5層:暗褐色土層,暗褐色土とロームの大ブロック。
 焼土粒を含む,上半にのみAs-Aが混入する。 6層:暗褐色土層,2層土を主に,5~40mm大のロームブロッ
 1層:暗褐色土層,ローム粒をかなり含む,焼土粒を少量含む。 クを斑状に含む,全体に斑状を呈する,かなり強くしまっ
 2層:暗褐色土層,ローム粒を多量に含む,5~20mm大のローム ている。
 ブロックが点在する,全体に乱れている。 7層:黄褐色土層,ローム粒、ロームブロックを主に、褐色土を
 3層:暗褐色土層,2層土のビットか? 含む。

第50図 1号墓平面・断面図(3)



第51図 1号墓出土遺物

第18表 1号墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	円筒埴輪	口径 (25.1) 底径器高 [19.9]	凸帯は台形状を呈す。口縁部は外側につまみ出されるように外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。凸帯部ナデ。体部ハケメ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ後ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫 内外—褐色	口縁〜胴部2/3残存
2	円筒埴輪	口径 — 底径器高 [30.2]	凸帯は台形状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—凸帯部ナデ。体部ハケメ。内面—胴部ヘラナデ後ナデ。	白色・褐色の岩片、礫、角閃石、石英 内外—褐色	胴部〜基底部1/3残存
3	壺	口径 — 底径器高 —	口縁部は微妙に屈曲しながら大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片、雲母、角閃石などの細砂 内外—ぶい褐色	二重口縁壺(胴部片の可能性も残る)下層
4	朝顔形埴輪	口径 — 底径器高 —	肩部は丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—タテハケ。下端はヨコナデ。内面—上半はヨコナデ、下半はヨコハケ。	白色・灰色の岩片、角閃石などの大小砂粒、小礫 内外—暗褐色	
5	形象埴輪	口径 — 底径器高 —	ゆるやかに外反しながらすそ広がる。下端は接合部らしく肥厚する。粘土組織み上げによる成形。	外面—粗いタテハケ。コブ状に粘土が所々付着している。剥落顕著。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—ぶい褐色	人物埴輪?
6	朝顔形埴輪	口径 — 底径器高 —	体部は若干膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面—平坦面を有する突帯。突帯両脇はヨコナデ。それ以外はタテハケ。内面—タテ、ナナメのナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—明赤褐色	
7	円筒埴輪	口径 — 底径器高 —	上半はゆるやかに外反し、下半は垂直に近く立ち上がる。下端は肥厚する。粘土組織み上げによる成形。	外面—ヨコハケの施された平坦面を有する突帯。突帯両脇はヨコナデ。それ以外はタテハケ。内面—タテのナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—ぶい褐色	
8	朝顔形埴輪	口径 — 底径器高 —	体部は丸く膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面—平坦面を有する突帯。突帯両脇はヨコナデ。以下タテハケ。内面—タテ、ナナメのナデ。	白色・灰色の岩片、石英などの大小砂粒、小礫 内外—ぶい褐色	1号墓上面9と同一個体?
9	朝顔形埴輪	口径 — 底径器高 —	丸みをもち、筒状の体部に連なる。粘土組織み上げによる成形。	外面—下端に平坦面を有する突帯。突帯両脇はヨコナデ。それ以外はタテハケ。内面—ナナメのナデ。	白色・灰色の岩片、石英などの大小砂粒、小礫 外—灰褐色 内—ぶい褐色	8と同一個体?

二重口縁壺の口縁部片と考えたが、内面の調整がかなり粗略であり、問題が残る。

後述する2・3号墓と並列してほぼ等間隔で造られていることから見て、遠からぬ時期に連続して造られた一連の墳墓であることは間違いない。また覆土なども類似していることから、本遺構の時期は、古墳時代前期と考えてよいように思われる。

2号墓 (第52～59図、第19・20表、図版14～16・29・30)

A 2地点南東部、沖積地をのぞむ低位段丘南西縁の微傾斜地に位置する前方後方墳である。全体に土地改良事業に伴う掘削・整地作業の跡や攪乱がいたるところに及んでおり、周溝外縁のほとんどが本来の姿を留めていないが、一応後方部の全体、前方部の一部を精査することができた。なお、後方部の南西溝から東隅にかけての一角は、用水路により壊され、前方部の前端は、調査範囲外である。また、44号土坑により南東溝の一部を壊されている。確認面は、おおむね1 b層直下に露出する黄褐色の軟質ローム層上面である。

後方部の平面形は、残存部分から推定するなら、北西辺に比し、南東辺がやや長い台形を横にしたような形になる。中央の標高は、59.0m前後である。周溝内縁は直線的であるが、周溝外縁は不規則に曲折する。後方部の規模は、周溝内縁中央、あるいはその直近の南西—北東で17.74m、南東—北西で18.20mである。ただし、北西辺は推定で16.01m、南東辺は17.89mとかなり差がある。後方部

前縁の長さは、向かって右側で6.20m、左側で5.05mである。周溝を含めた後方部の規模は、南西—北東で推定20.74m前後、南東—北西で24.39mである。

後方部前縁から前方部にかけては、とくに削平、攪乱が著しく、前縁からくびれ部にかけ上端の稜線が崩れており、前方部の両側縁は、くびれ部付近を残し、攪乱により壊されている。後方部前縁から鋭角的に屈折してくびれ部をなし、前方部は、調査範囲外の前端に向かってゆるやかに開く形態となるようである。くびれ部の横幅は6.51m、前方部の横幅は、残存部分の末端での最大値が7.72m、中軸線上での前方部長は5.53mである。よって墳丘の現存長は、23.27m、残存部分での周溝を含めた全長は、推定で26.27m前後である。南西—北東方向での中軸線方位、つまり主軸方位は、S—51°—Wである。

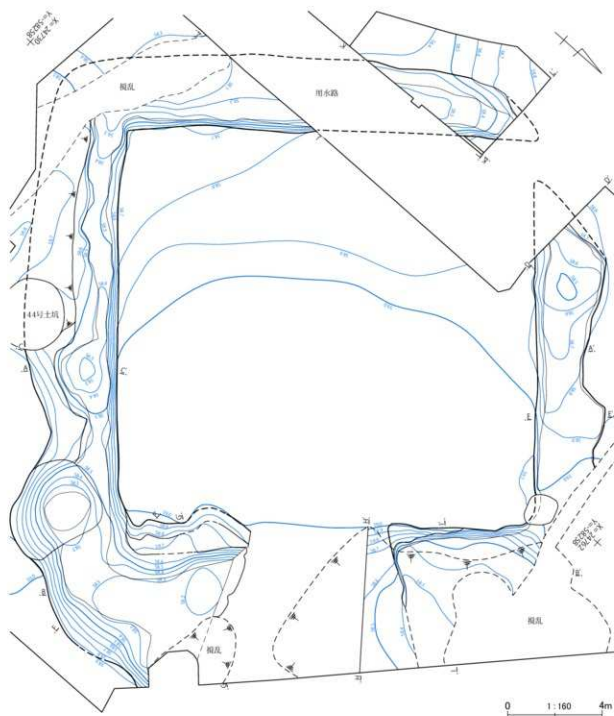
周溝中央での溝幅は、南東溝で4.92m、北西溝で2.36m、南西溝の溝幅は、2.58mと広狭が著しい。南西溝と北西溝は、用水路によって壊された西隅に向かって先細りとなり、かなり浅くなるため、西隅で溝幅が一旦著しく減じると見るより、陸橋部があった可能性が高いと考えられる。陸橋部があったとすれば、後述する西隅に陸橋部を有する3号墓と形態的にも類似することになる。

周溝の横断面形は、船底状に近いが、外縁側の溝壁に比し、内縁側の溝壁の方が急峻に立ち上がる。周溝中央での深さは、南東溝が57cm、北西溝が3～27cm、残りのよい部分での深さになるが、南西溝が57cm、北東溝が61cmである。後方部前縁から前方部にかけて、溝幅が広がるとともに周溝の深さも増し、前方部の南東側周溝で深さ85cm、北西側、西側の周溝で深さ72cmを測る。いずれの周溝の溝底にも凹凸が見られるが、北西溝の溝底は、とくに凹凸が著しい。南東溝の東隅近くには、最大径4.47m、溝底からの深さが25cm前後の不正円形の土坑状の掘り込みが見られる。調査時の所見では、周溝覆土と大きく異なることのない覆土で、周溝に伴う掘り込みと考えられた。

各周溝で細かな違いはあるが、覆土には、大きく分けて3つのパターンが見られるようである（第53～56図）。

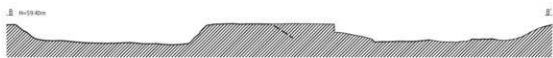
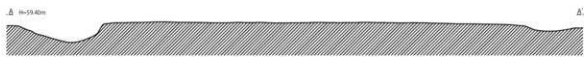
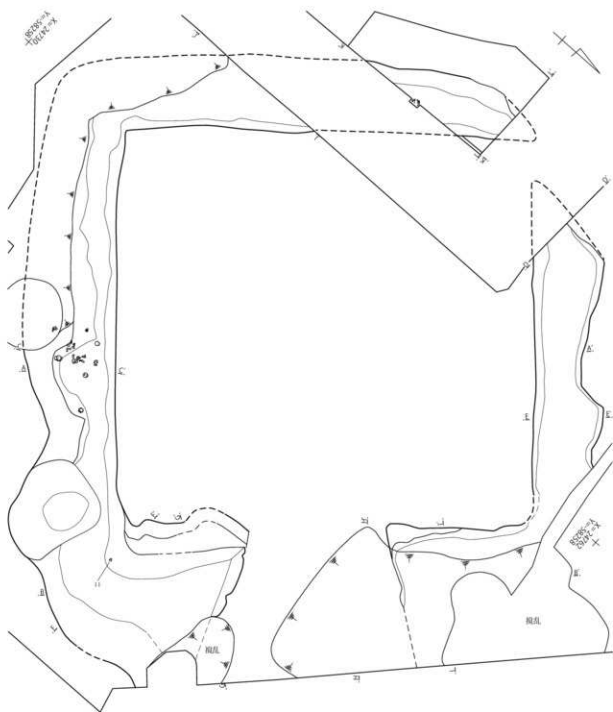
ひとつは、南東溝のC—C'断面を典型とする覆土である（第54図）。C—C'断面の場合、まず溝底から下層にかけて多量の「黄褐色土」（全体が黄褐色の土ということではなく、黄褐色のロームが量的に卓越する土という意味）が堆積していることが目を引く。この堆積土は、ローム粒、大小のロームブロックと黒褐色土、あるいは暗褐色土とが不規則に混じる混合土で、何らかの形で周溝に多量に流入、投棄された土である可能性が考えられる。類似した覆土は、南西溝のJ—J'断面にも見られ、残存状態が悪いが、北西溝のD—D'断面、後方部前縁のI—I'断面の最下層に見られる堆積土も同種の土と思われる。南西溝の場合、この「黄褐色土」の堆積後、わずかな間層（C—C'断面の「6層」、「7層」）の堆積を経た段階に多数の土器が周溝内に転落したり、遺棄、廃棄されることになったと見られる。この多量の「黄褐色土」の堆積に続いて、黒褐色土、あるいは黒みの強い暗褐色土が堆積したようであるが、総じて住居跡などの覆土の暗褐色土に比べ、格段に黒みが強い点が、この上層の堆積土の特徴である。

北西溝のE—E'断面、南西溝のK—K'、L—L'断面でも、C—C'断面などに見られた最下層の「黄褐色土」は見られるが、それほど厚くなく、溝底の一次堆積土に通有のロームを多く含む土と見て問題はない。引き続き黒褐色土や暗褐色土が漸次堆積した過程は、他の覆土と同様である。この種の覆土が、第2のパターンである。



第52図 2号墓等高線図

いま一つのパターンは、東隣のF-F'断面、後方部前縁のG-G'断面に見られるものである。この2つの断面、とりわけF-F'断面の場合、まず上下層を問わず覆土全体が異様に黒みが強く、混入するロームが白色みを帯びるなど顕著な特徴が見られる。また、他の周溝の多くで観察された最下層のローム粒、ロームブロックが卓越する層が見られず、土器片などの遺物が極端に少ないことも特徴になる。F-F'断面に近接するG-G'断面では、F-F'断面ほど黒みが強くなく、白みがあったロームの混入も目立たないものの、同じような堆積土により埋積していることが観察できた。

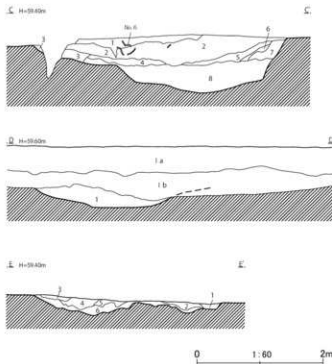


第53图 2号墓平面·断面图(1)

2号墓土層注記(1)

〔C-C 断面〕

- 1層：黒褐色土層。ローム粒をかなり含む。20mm大のロームブロックを1点含む。以下の層に比し、しまりが弱い。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。5～20mm大のロームブロックが点在する。所々1層が根っ子のようにこの層に食いこむ。
- 3層：暗褐色土層。部分的にローム粒、5～20mm大のロームブロックを多量に含む。やや黒みがある。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが多く、かつ大きい(30、40mm大のもの含む)。
- 5層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが多い。10～20mm大のブロックが水玉状に入る。
- 6層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒が少ない。
- 7層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒ははるかに多い。部分部分でローム粒の含有量にかなりばらつきがある。
- 8層：黄褐色土層。黒褐色土、ローム粒、5～150mm大の大小ロームブロックが斑状に(黒褐色土とロームはほぼ同量)混合する。下部には、圧倒的にハードロームのブロックが密集する。しまっている。



〔D-D 断面〕

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～120mm大のロームブロックを斑状に含む。

〔E-E 断面〕

- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含む。 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多く、ロームブロックも多く、大きい(30mm大を含む)。 3層：褐色土層、暗褐色土とロームの混合土を主に、5～30mm大のロームブロックを不規則に含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 4層：褐色土層。2層に近いが、ローム粒がやや多い。 5層：褐色土層。4層に近いが、ロームブロックをほぼ含まない。 6層：褐色土層、暗褐色土、ローム粒、5～40mm大のロームブロックをほぼ同量、不規則に含む混合土。 |
|---|--|

〔F-F 断面〕

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1層：褐色土層。灰色がかった褐色土を主に、ローム粒、焼土粒を含む。白みの強い褐色土と焼土が所々雲状の塊(10～40mm大)をなし混入する。 1層：黒褐色土層。ローム粒を含む。5mm大のローム小ブロック、焼土が点在する。 2層：黒褐色土層。1層に近いが、黒み、粘性が強くなる。ローム粒は白みを帯びる。 3層：黒褐色土層。2層に近いが、ローム粒が多い。 4層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックが、不規則に所々100～150mm大のブロックをなし混入する。 5層：黒褐色土層。ロームブロック混じりの黒褐色土のブロック。 | <ol style="list-style-type: none"> 6層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒、5mm大のローム小ブロックが多い。 7層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。ロームブロックの中には、70、80mm大のものが含まれる。 8層：暗褐色土層。ベースの黒褐色土が全体にやや明るい色調を帯び、暗褐色土に近くなる(シルト化した黄白色ロームの均一な混入による)。所々ローム粒などが集塊し、5～10mm大のブロックをなし混入する。 9層：暗褐色土層。8層に近いが、やや黒みが強い。暗褐色土とロームからなる雲状のブロックが、2、3箇所点在する。 10層：暗褐色土層。9層に近いが、ロームが多い。 |
|---|---|

第54図 2号墓平面・断面図(2)

2号墓土層注記(2)

〔G-G'断面〕(1)

1層：黒褐色土層。ローム粒を含む。

2層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い、粘性がややある。

3層：黒褐色土層。1・2層に近いが、ローム粒が多い。

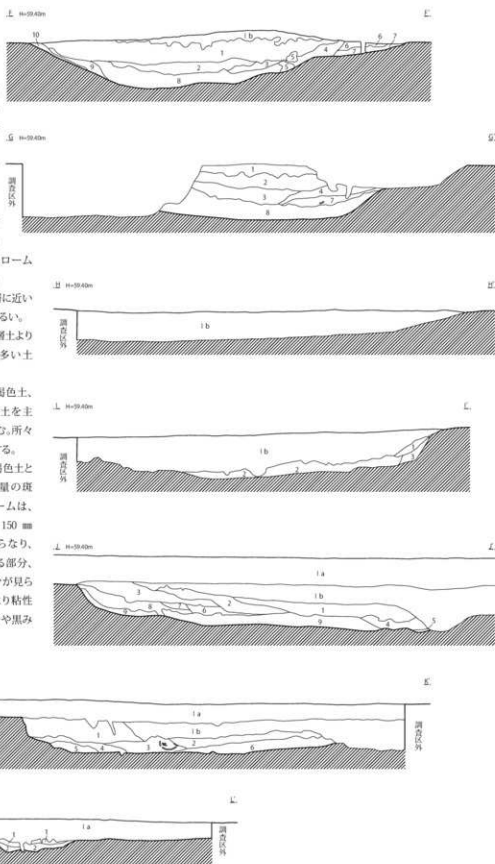
4層：黒褐色土層。3層に近いが、ローム粒がさらに多い、ローム粒を多量に含む。

5層：暗褐色土層。2層に近いが、やや色調が明るい。

6層：暗褐色土層。5層土よりややローム粒の多い土のブロック。

7層：暗褐色土層、黒褐色土、暗褐色土の混合土を主にローム粒を含む。所々ローム粒が集塊する。

8層：暗褐色土層。暗褐色土とロームのほぼ同量の斑状の混合土。ロームは、ローム粒と5～150mm大のブロックからなり、ロームが集中する部分、ラミナをなす部分が見られる。上位の層より粘性が強い。上部はやや黒みが強い。



第55図 2号墓平面・断面図(3)

2号墓土層注記(3)

[G-G' 断面](2)

9層：暗褐色土層。7層に近いが、ロームブロックが多い。ロームブロックは5～40mm大。

[I-I' 断面]

- | | |
|--|------------------------------------|
| 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含む。
所々ローム粒集塊。 | ローム粒、大小ロームブロックが集中する箇所、ラミナをなす部分がある。 |
| 2層：黄褐色土層。暗褐色土とロームが同量程度斑状に混ざる。 | 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームがかなり多い。 |

[J-J' 断面]

- | | |
|--|--|
| 1層：黒褐色土層。ローム粒を多量に含み、焼土粒を少量含む。 | 6層：黒褐色土層。2層に近いが、5～20mm大のロームブロックが多い。 |
| 2層：暗褐色～黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多く、やや色調が明るい。 | 7層：黒褐色土層。3層に近いが、5mm大のローム小ブロックが若干多い。 |
| 3層：暗褐色土層。ローム粒を極多量含む。2層に比し、ローム粒が急増する。下半に5～10mm大のロームブロックを含む。 | 8層：黒褐色土層。6層に近いが、ローム粒が多く、ロームブロックの輪郭がぼやける。3層よりは、ローム粒少ない。 |
| 4層：黒褐色土層。モヤモヤ斑状にローム粒、ロームブロックを含む。不規則に灰色がかった土を含むかにも見える。 | 9層：黄褐色土層。黒褐色土とロームの斑状の混合土。所々黒褐色土とロームがラミナをなす。 |
| 5層：黒褐色土層。4層に近いが、ロームがはるかに少ない。 | |

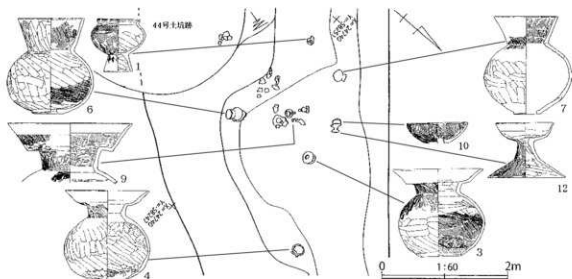
[K-K' 断面]

- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを点々と含む。 | ヤモヤ斑状で、部分部分で多寡がある。 |
| 2層：黒褐色土層。ローム粒を含み、5mm大のローム小ブロックを微量含む。 | 4層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5～30mm大のロームブロックをかなり含む。 |
| 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。ローム粒はモ | 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロックがかなり少ない。 |
| | 6層：暗褐色土層。暗褐色土と白みの強いロームの斑状の混合土。 |

[L-L' 断面]

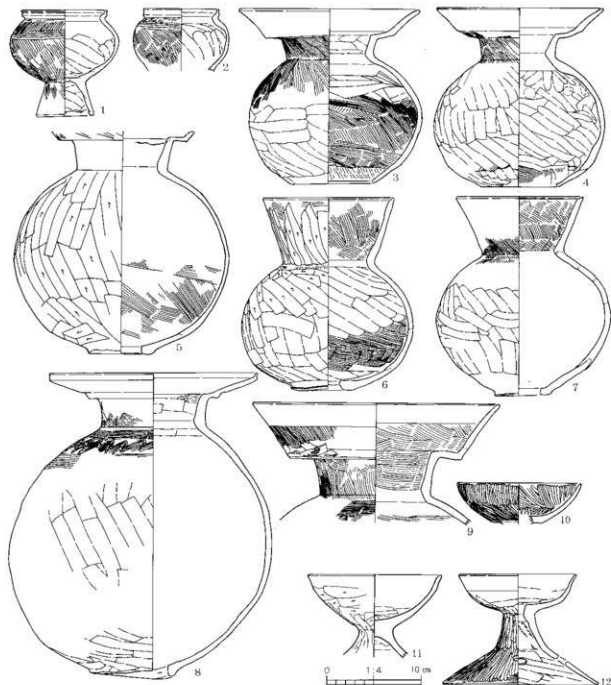
1a層：暗褐色土層。表土層。

- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを不規則に含む。 | 2層：黄褐色土層。ローム粒、大小のロームブロックを不規則に含む。 |
|---------------------------------------|----------------------------------|

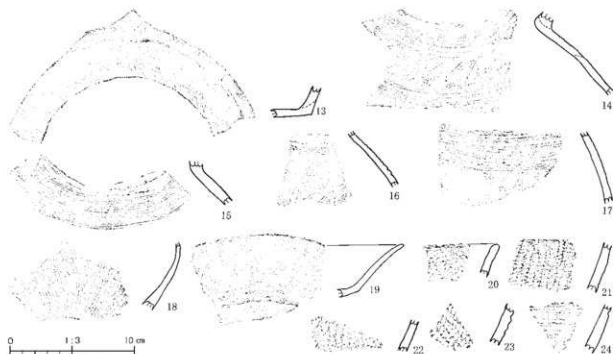


第57図 2号墓南東溝遺物出土状態

出土遺物は、ほぼ土器に限られ、大半の土器は、南東溝の中央部から出土している（第57図、第58図1・3・4他）。いずれも黒みの強い暗褐色土とロームがまだらに混じる特徴的な堆積土（C-C'断面の4～8層）中からその上位の層にかけての層準から出土している。他に南西溝から出土した壺がある（第58図5）。溝底よりわずかに浮いた位置で、多くは細かな破片になった状態で出土している。8の壺は、口縁部は、いわゆる畿内系二重口縁壺の形態を模し、肩部に断続する櫛描直線文、ジグザグに近い波形の櫛描波状文を配している。南東溝、南西溝からは、他に覆土中からではあるが、同種の壺の破片が少なくとも4個体分出土している（第59図11～15）。本来かなりの数の二重口縁壺が供献されていたのであろう。周溝の形態、出土遺物から見て、古墳時代前期中葉の遺構と考えられる。



第58図 2号墓出土遺物(1)



第59図 2号墓出土遺物(2)

第19表 2号墓出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形台付甕	口径 9.0 底径 6.0 器高 11.3	口縁部はS字状を呈す。台座部は折り返す。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ナナメ、ヨコ。台座ハケメ後ナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位～下位ヘラナデ。右部上位～中位ヘラナデ。台座下位ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母、礫 内外-褐色	ほぼ完形
2	小形台付甕	口径 (8.0) 底径 一 器高 [6.6]	口縁部はS字状を呈す。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ナナメ、ヨコ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫、雲母 内外-にがい褐色	口縁部下位 胴部下位 1/4残存
3	甕	口径 19.0 底径 8.7 器高 18.6	胴部は球状を呈す。頸部はわずかに外傾し、口縁部が大きく開く。底部は焼成前穿孔し、打ち欠き。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。頸部～肩部ハケメ。肩部下位～胴部ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。肩部ナデ。胴部上位ヘラナデ。胴部ハケメ。下部部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-赤褐色	ほぼ完形
4	甕	口径 (17.5) 底径 8.0 器高 18.9	頸部は直立し、口縁部は外反する。胴部は球状を呈す。底部は焼成前穿孔し。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。胴部ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位エビナデ(指頭痕あり)。胴部中位ヘラナデ。胴部下位ハケメ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-褐色	3/5残存
5	甕	口径 一 底径 (6.8) 器高 [23.8]	胴部は球状を呈す。頸部はわずかに外傾し、口縁部が大きく開く。底部は焼成前穿孔し。粘土組織を上げによる成形。	外面-頸部上位ハケメ。頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-頸部ヨコナデ。肩部ナデ。胴部ハケメ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-褐色	頸部～底部 1/3残存
6	甕	口径 13.8 底径 6.7 器高 20.4	口縁部は直線的に開き、口唇部内側に孔縁が巡る。胴部は球状を呈す。底部は焼成前穿孔し。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部ハケメ後ヘラケズリ。胴部上位～中位ヘラケズリ。胴部中位ヘラナデ。内面-口縁部上位ヨコナデ。口縁部中位～下位ハケメ。胴部上位～中位ナデ。胴部中位ハケメ。胴部下位～底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、角閃石 内外-褐色	9/10残存
7	甕	口径 13.3 底径 5.8 器高 21.1	口縁部は直立し、口唇部外側に溝を上げられる。胴部は球状を呈す。底部は焼成前穿孔し、打ち欠き。平底。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部～頸部ハケメヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位～底部ヘラナデ。内面-口唇部ヨコナデ。口縁部ハケメ。胴部上位～中位ナデ。胴部中位～下位ハケメ。最下端ヘラナデ。	白色、雲母 内外-褐色	9/10残存
8	甕	口径 21.8 底径 8.9 器高 32.2	胴部は球状を呈す。頸部は直立し、口縁部が大きく開く。口唇部は直立する。底部は焼成前穿孔し。粘土組織を上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。頸部ヨコナデ後ヘラナデ。肩部に直線文、波状文、直線文。胴部中位～下位ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。頸部～胴部ヘラナデ。底部ケズリ、ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	3/5残存

第20表 2号墓出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
9	壺	口径 26.3 底径 — 器高 [12.7]	頸部は直立し、口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部上位ヨコナデ。口縁部中位以下ハケメ。口縁部下面ヘラナデ。頸部ハケメ。肩部に直線文、波状文。内面—口縁部上位ヨコナデ。口縁部中位～下位ハケメ。頸部ハケメ。胴部ヘラナデ。ハケメ。	白色の岩片、雲母 内外—褐色	口縁部～ 胴部上位 1/2残存
10	高坏	口径 13.1 底径 — 器高 [4.3]	口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～体部ヘラミガキ。底部ヨコナデ。内面—口縁部～底部ヘラミガキ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外—赤褐色	口縁部～ 坏底部残存
11	高坏	口径 (14.0) 底径 — 器高 [8.8]	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。脚部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～脚部ヘラクズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位ヘラナデ。脚部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、鐵 内外—にぶい赤褐色	口縁部～ 脚部下位 1/2残存
12	器台	口径 12.3 底径 16.2 器高 11.7	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。脚部はやや開き、裾部にさらにハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。脚部ヘラミガキ。裾部ハケメ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。底部ナデ。脚部上位紋り目。脚部下位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外—褐色	11/12残存
13	壺	口径 — 底径 — 器高 —	口縁下端は屈折して水平面をなす。粘土組織み上げによる成形。	外面—ナナメのハケ後、屈折部付近はヨコナデ。内面—口縁部はヨコハケ。屈折部以下はヨコナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片、雲母などの細砂 内外—明赤褐色	二重口縁 壺 15と同一 個体?
14	壺	口径 — 底径 — 器高 —	肩部は微妙な丸みをもち、屈折して頸部に連なる。粘土組織み上げによる成形。	外面—頸部にはナナメのハケ。以下、上から9条一単位の櫛歯直線文、同櫛歯状の波状文、同直線文。内面—指押え、ナナメのナデ。	白色・灰色の岩片などの細砂 内外—明赤褐色	二重口縁 壺 南西溝
15	壺	口径 — 底径 — 器高 —	肩部は微妙な丸みをもち、屈折して頸部に連なる。粘土組織み上げによる成形。	外面—10条以上一単位の櫛歯直線文。頸部付近はナナメのハケ。内面—指押え、ヨコナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片、雲母などの細砂 内外—明赤褐色	南東溝上 ・中層、 13と同一 個体?
16	壺	口径 — 底径 — 器高 —	肩部はやや丸みをもちて立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—7、8条(?)一単位の櫛歯直線文、同櫛歯状の波状文。内面—指押え、ヨコ、ナナメのナデ。	白色・灰色の岩片、雲母などの細砂 内外—にぶい褐色	南東溝～ 南西溝
17	壺	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—7、8条一単位の櫛歯直線文、無文部はヨコ、ナナメのナデ。内面—ヨコハケ。	白色・灰色の岩片、雲母などの細砂 内外—にぶい褐色	南西溝
18	甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部下半は丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—タテ、ナナメのハケ。内面—ナナメの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの細砂 内外—にぶい褐色	S字状口 縁台付甕 南西溝中 層
19	高坏	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はゆるやかに外反し開き、坏部下端で屈折する。粘土組織み上げによる成形。	外面—ヨコ、ナナメの浅いハケ。下様以下はヨコナデ。内面—ヨコ、ナナメのナデ。擦痕残る。	白色・灰色・赤褐色の岩片、雲母などの細砂 内外—にぶい褐色	南西溝中 層
20	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はわずかに外反して開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文。磨りが乱れており、単節縄文ではない可能性もある。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片 などの細砂 内外—にぶい褐色	諸磯 b c式
21	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部下半はやや丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片 などの大小砂粒 内外—にぶい褐色	諸磯 b c式
22	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外—にぶい褐色	諸磯 b c式
23	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの細砂 内外—にぶい褐色	諸磯 b c式
24	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—太さが区々のナナメの条線。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外—にぶい褐色	諸磯 b c式

3号墓 (第60～63図、第21・22表、図版17・30・31)

A 3地点の南東部、西側に沖積地をのぞむ低位段丘の縁辺に位置する遺構と見てよいであろう。調査範囲の南側については、現状では、地形等の情報は一切得られていない。調査範囲が極めて限られ

るが、全体を調査しえた北西側の周溝の内縁は、ほぼ直角に折れて後方部前縁をなし、周溝幅が大きく拡張するとともに、前縁は末端で明瞭に屈曲し、くびれ部をなすことが観察できた。前方後方墳の一種と見て間違いない。南西-北東に主軸を有する前方後方墳の北西溝から前方部周溝にかけての周溝と、後方部に関しては、面積比でおおよそ4割ほどの範囲を調査したことになる。

また、その他の周溝は調査範囲外になるが、調査範囲の南西隅をサブトレンチ状に掘り下げた結果、北西溝の覆土の一部に類似する黒褐色土で埋まった周溝先端と見てよい掘り込みを確認することができた。なお、北西溝のほぼ中央を溝状の擾乱が走り抜けており、北隅の近くを擾乱により壊されている。

確認面は、おおむねⅡ a層とした暗褐色土直下の黄褐色の軟質ローム層上面であるが、Ⅰ b層とした造成土がローム層下に及ぶ部分も所々見られた。

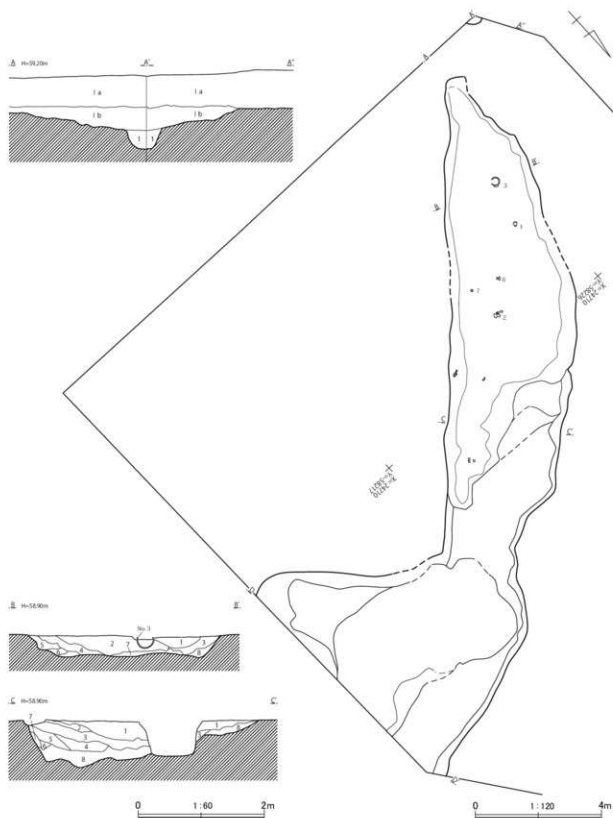
後方部の平面形に関しては、上述した調査範囲の南西端で検出した周溝をどう考えるかによって種々の見方ができるが、その部分を南西側の周溝、南西溝の先端と考え、以下の記載を進める。

周溝内縁はかなり直線的であり、したがって後方部の輪郭は、明瞭な方形を形作るかに見える。周溝外縁

は、北西溝では、丸みをもって中央が大きく膨らみ、そのままゆるやかな弧を描き、前方部へと連なる。後方部の規模は、北西溝の先端から測った北西辺の長さが14.95m、痕跡的な南西溝から測った同じ辺の長さは、16.80mである。後方部前縁の長さは、5.63mである。北西辺の方位は、S-53°



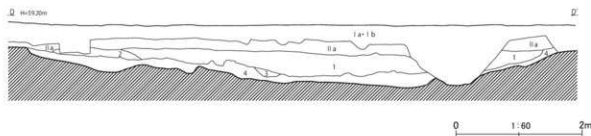
第60図 3号墓等高線図



第61図 3号墓平面・断面図(1)

一Wである。後方部上面は、ほぼ平坦で、盛土や埋葬施設の痕跡は、一切見られなかった。後方部中央付近の標高は、58.50m前後である。

周溝中央での溝幅は、北西溝で3.90mである。周溝の横断面形は、船底形であるが、総じて内縁側



3号墓土層注記

〔A-A' - A'断面〕

1層：黒褐色土層。漆黒に近い黒褐色土を主に、ローム粒を極微量含む。粘性がかなり強い。

〔B-B' 断面〕

- | | |
|---|--|
| 1層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、5～10mm大のロームブロックを微量含む。ローム粒は露降り状を呈する。 | 6層：黒褐色土層。ローム粒を含む。ロームブロックはほとんど見られない。 |
| 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が少ない。 | 7層：黒褐色土層。黒褐色土、ローム粒、5～40mm大のロームブロックの斑状の混合土。 |
| 3層：黒褐色土層。1層に近いが、若干黒みが強い。 | 8層：黒褐色土層。モヤモヤとローム粒、ロームブロックを斑状に含む。ロームブロックは、5～40mm大で、10mm大が大半を占める。 |
| 4層：黒褐色土層。1層に近いが、若干黒みが強い。1層よりローム粒が少なく、10mm大のロームブロックが多い。 | 9層：黒褐色土層。7層に近いが、ロームが多い。 |
| 5層：黒褐色土層。ローム粒を含む。ローム粒、ロームブロックが雲状にモヤモヤまとまる。 | |

〔C-C' 断面〕

- | | |
|---|---|
| 1層：黒褐色土層。ローム粒を含み、5mm大の前後のローム小ブロックを微量含む。中央にローム粒、ローム小ブロックが雲状に集塊する。 | 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ローム粒が多く、5mm大のローム小ブロックも多い。 |
| 2層：暗褐色土層。ローム粒を含む。1層よりローム粒が多い。 | 6層：黒褐色土層。ローム粒を含み、20mm大のロームブロックを微量含む。 |
| 3層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。5～10mm大のロームブロックが点在する。 | 7層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。 |
| 4層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多く、5mm大のローム小ブロックを少量含む。5層より黒みが強い。この層以下、粘性が強くなる。 | 8層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～100mm大（ほとんどが5～50mm大）のロームブロックの斑状の混合土。しまっており、粘性もかなり強い。 |

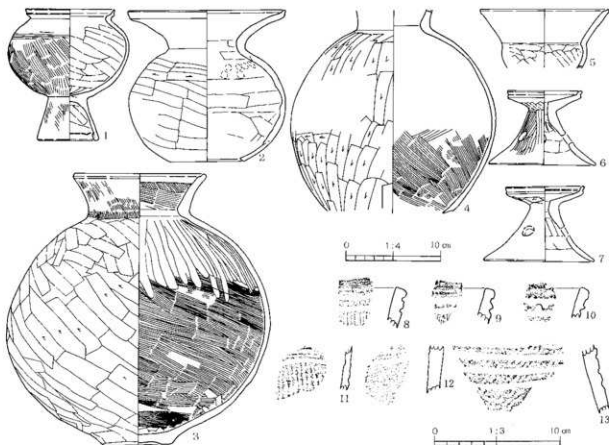
〔D-D' 断面〕

- | | |
|---|---------------------------------------|
| Ia・Ib層：暗褐色～灰黄褐色土層。As・Aを含む現表土および造成土。攪乱。 | 粘性、しまりともに強まる。 |
| IIa層：暗褐色土層。やや色調の明るい暗褐色土を主に、ローム粒を含む。I層より古い時期の表土。 | 3層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒はるかに多い。 |
| I層：黒褐色土層。ローム粒を含み、5～20mm大のロームブロックが点在する。この層以下の層は、IIa層に比し、黒みが強く、 | 4層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒がやや多い。 |
| | 5層：黒褐色土層。ローム粒、5～100mm大のロームブロックを斑状に含む。 |

第62図 3号墓平面・断面図(2)

の側壁は切り立っており、外縁側はよりゆるやかに立ち上がる。溝底にはかなり凹凸が目立ち、おおむね中央付近が深くなる。最深部の深さは、北西溝で74cm、前方部脇の周溝で52cmである。

覆土には、2号墓同様に3つのパターンが見られる(第61・62図)。ひとつは、C-C'断面に見られる溝底を一次的に埋める暗褐色土とロームの不規則な混合土の厚い層が見られる土層であり、2つ目としては、そうした最下層の混合土の厚い層が見られないB-B'断面に見られる土層である。



第63図 3号墓出土遺物

第21表 3号墓出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形台付甕	口径 9.4 底径 (5.7) 器高 13.9	口縁部はS字状を呈す。台部端部は折り変す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデハケメ若干残る。胴部中位～下位ハケメ。台部ハケメ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部、台部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一明赤褐色～にぶい褐色	7/8残存
2	甕	口径 16.8 底径 8.0 器高 16.0	口縁部は大きく外反し、口唇部は狭みおけられる。胴部は球状を呈す。底部は焼成前穿孔。磨耗顕著。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。胴部深い赤彩か。内面一口縁部ヨコナデ。頸部～胴部ヘラナデ。指頭痕アリ。	雲母、褐色の岩片 内外～にぶい赤褐色	2/3残存
3	甕	口径 13.7 底径 7.0 器高 28.7	口縁部は外反する。胴部は球状を呈す。底面輪台状。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～頸部ハケメ後ナデ。胴部上位～中位ヘラナデ。胴部中位～下位ハケメ。胴部下位～底部ヘラナデ。内面一口縁部上位ヨコナデ。口縁部中位～下位ハケメ。胴部上位～中位ナデ。胴部中位～下位ハケメ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、緑、雲母 内外一明赤褐色	3/4残存
4	甕	口径 — 底径 — 器高 [21.6]	頸部は直立気味に立ち上がる。胴部は大きく丸みをもつ。	外面～頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面～頸部ヨコナデ。胴部上位～中位ナデ。胴部中位～下位ハケメ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一明赤褐色	頸部～胴部下位 1/3残存
5	鉢	口径 (15.4) — 器高 (6.2)	口縁部は外反し、口唇部の内側に凹線がめぐる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部器壁を掻き取るようなサナメのナデ。	角閃石 内外～にぶい赤褐色	口縁部～胴部上位残存
6	器台	口径 7.7 底径 11.2 器高 7.9	体部は直線的に開き、口縁部は短く外反する。脚部はハの字状に開く。円孔は三箇所。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～体部上位ヨコナデ。体部ヘラナデ。脚部ヘラミガキ。内面一口縁部ヨコナデ。体部器面磨耗し調整不明瞭。脚部上位紋目。脚部上位～中位ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	白色・褐色の岩片、石英、角閃石 内外一褐色	完形
7	器台	口径 8.1 底径 (11.4) 器高 8.0	体部は直線的に開き、口縁部は短く外反する。脚部はハの字状に開く。円孔は三箇所。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部下位ヘラケズリ。脚部ナデ。内面一口縁部～体部上位ヨコナデ。体部下位ナデ。脚部上位ケズリ。脚部上位～中位ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	白色の岩片、角閃石、褐色の岩片、礫 内外一褐色	3/4残存

第22表 3号墓出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
8	深鉢	口径 底径 器高	口径部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一端部下端に2条の沈線。沈線間に浅い連続爪形文。以下タテの条線。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 外一にぶい褐色 内一にぶい黄褐色	勝坂式
9	深鉢	口径 底径 器高	口径部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一端部下端に2条の沈線。沈線間に連続刺突文。沈線以下は条線か？ 内面一ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外一灰黄褐色	加曾利E式
10	深鉢	口径 底径 器高	口径部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一端部下端に2条の沈線。沈線間に浅い交互刺突文。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片、石英片などの大小砂粒、小礫 内外一明赤褐色	加曾利E式
11	深鉢	口径 底径 器高	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一破片右側に2条の弧状の平行沈線。その他はR Lの単節縄文。内面一ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片、雲母片などの大小砂粒、小礫 内外一明赤褐色	加曾利E式
12	深鉢	口径 底径 器高	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一破片左端に2条のタテの沈線。その他はタテの条線。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外一にぶい褐色	加曾利E式
13	深鉢	口径 底径 器高	胴部上位は彎曲して立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一LRの単節縄文施文後、4本の沈線。上端の沈線は上半が欠損しており、右端で曲線化している。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片(多くは長石や砂岩)、角閃石などの大小砂粒、小礫 多量 内外一明赤褐色	加曾利E式 南西溝中層

3つ目は、くびれ部から前方部にかけての周溝を斜めに横切るD-D'断面に見られる土層である。D-D'断面の場合、最下層の「4層」にロームの混入が多少目立つ点を除けば、上から下まで黒みの強い黒褐色土で占められる。

出土遺物はほぼ土器に限られ(第63図1～7)、北西溝から出土している。3の壺は、西隅に寄った位置で横転した状態で、その北側からは、1の小型のS字甕が、中央に近い位置では、2の穿孔された壺と6・7の器台が出土している。いずれの土器も溝底よりかなり浮いた位置での出土である。

推定される平面形態から考えるなら、2号墓と規模、形態の類似した前方後方墳である可能性が高く、2号墓と大きく時期的に隔たるとは考えにくいところであろう。出土遺物は、それを裏付けており、近接した時期の所産としてよいようである。古墳時代前期中葉の遺構と考えられる。

4 井戸跡

井戸跡に関しては、1～7号井戸跡の都合7基の井戸跡を、A2地点の北西部で検出した。3号井戸跡については、A1地点の報告書において報告を終えている(恋河内・松本 2008)。今回報告する1号井戸跡に関しては、5～10号土坑、1号溝と連結して一体となった施設、あるいは土坑、溝と漸次連結して機能した諸段階を経た施設の遺構と考えられ、個別に記載することが困難であるため、本項で一括して記載する。

なお、井戸跡の調査に関しては、湧水が顕著になりはじめる深さまでを手掘りで精査し、以下井戸底までは、小型重機を用いて掘削し、覆土中の遺物を選別、回収した。以下の所見には、そうした過程で瞥見した事実をまじえている。いずれの井戸跡も井戸枠や井戸底施設をもたない素掘りの井戸であった。

1号井戸跡・5～10号土坑・1号溝跡（第64～68図、第23～27表、図版18・31・32）

1号井戸跡は、A2地点北西部の北東端近くで検出した遺構である。6号住居跡を切って造られており、北側の一角は調査範囲外である。確認面は、以下記す5～10号土坑、1号溝と同様に、黄褐色の軟質ローム層の上面である。平面形は楕円形で、最大径は3.85mである。南西側の上縁には、降り口であろうか、舌状に突き出た2段の平場が付設されている。平場の深さは、浅い方で5～12cm、深い方が22cmである。井戸本体は上部に向かってやや広がる形態の筒状で、開口部にかけて大きく開く形状である。手掘りで精査できたのは、深さ50cm前後までである。覆土は、2～24層の23層に分層してきたが、暗褐色土やロームや白みの強いシルト化したロームからなる最終的に井戸跡を埋め戻した際に投入された土からなるようであった。手掘りした深さから下の覆土は、灰黒色、灰色の粘性の強い土や同色の砂質の土が大半であり、井戸底は細くすばまるようであった。

5号土坑は、1号井戸跡に隣接する土坑であり、1号溝跡に南東部分を切られている。平面形は、不整な楕円形で、現存長軸長は201cm、短軸長は推定で163cm前後である。長軸方位は、N-73°-Wである。側壁はかなり急峻に掘り込まれており、最深部での深さは49cmである。底面には凹凸が著しい。

6号土坑は、5号土坑の南東側脇にある土坑である。ほぼ中央で重複する1号溝跡と底面を等しくするようであるが、新旧の関係は把握できなかった。平面形は、南側が方形気味、北側が丸みを帯びる、かなり不整な形状である。北東-南西方向での長さは205cmである。長軸方位は、N-32°-Wである。側壁はかなり急峻で、最深部の深さは71cmである。底面は隅丸長方形に近く、おおむね平坦である。

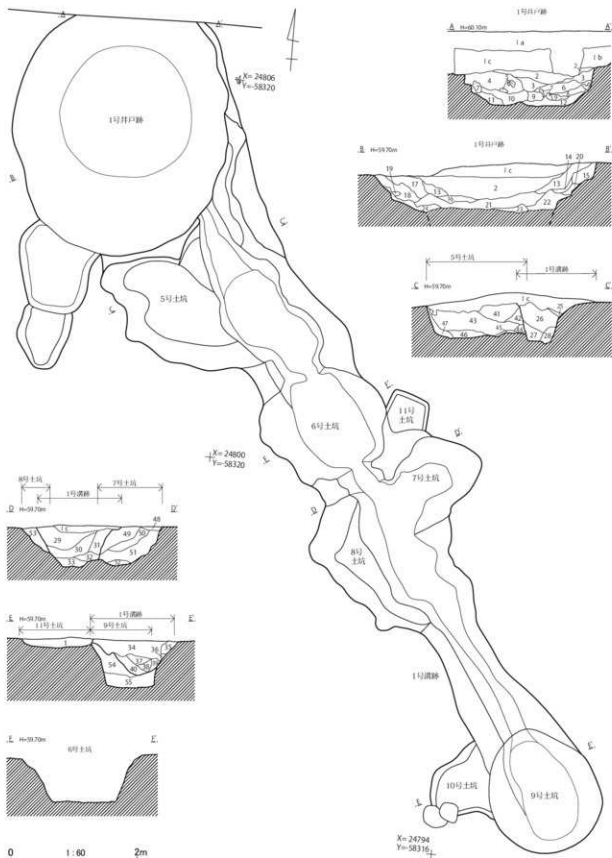
7号土坑は、6号土坑と隣り合う土坑である。平面形は、やや角ばった形態になるようであるが、1号溝跡に大半を壊されており、判然としない。北東-南西方向での残存長は70cm前後、最深部での深さは、66cmである。側壁、坑底ともに凸凹している。

8号土坑は、1号溝跡を挟んで、7号土坑と向き合う位置にある土坑である。平面形は、隅丸長方形に近い形態になりそうである。北西-南東方向での長軸長は、推定で252cm、短辺方向での長さは、117cmほどである。最深部での深さは48cmである。

9号土坑は、1号溝跡の南東端の土坑である。一応1号溝跡の溝底の標高から本土坑の覆土と溝跡の覆土を分け、1号溝跡に切られていると見たが、覆土自体に大きな違いはなく、本土坑と1号溝跡が同時に開口していた段階があったという見方もできないではない。平面形は、卵なりに近く、長さは200cm、横幅は175cm、長軸方位は、N-31°-Wである。断面形は上部がやや開くバケツ形で、最深部の深さは75cmである。底面は不整な長楕円形を呈し、おおむね平坦である。

10号土坑は、1号溝跡の南東端近くで、同溝跡と重複する遺構である。1号溝跡、9号土坑を切って造られている。平面形は、かなり不整な丸みを帯びた形で、南北方向での長さは、127cmである。断面形は皿形で、深さは15cm前後である。

1号溝跡は、1号井戸跡と結合し、南東方向に延びる溝跡である。5～8号土坑、11号土坑と重複しながら9号土坑と重なり、あるいは結合して、溝端となる。長さは10m前後である。溝幅は、5・6号土坑間で173cm、8・9号土坑間で78～117cmである。横断面形は、箱栗研に近く、側壁はかなり急峻に立ち上がる。深さは、1号井戸跡との結合部で71cm、真ん中あたりで66cmである。1号井戸跡



第64图 1号井尸跡·5~10号土坑·1号沟踏平面·断面图(1)

1号井戸跡、5～10号土坑、1号溝跡土層注記

1 a層：灰黄褐色土層。As-Aを含むガリガリした現表土。

1 c層：灰黄褐色土層。As-Aをかき取り含むガリガリした表土。1 a層よりロームが多い。旧耕作土。

1層：暗褐色土層。ローム粒、5～40mm大(40mm大は3、4個)のロームブロックを多量に含む。10号土坑覆土。

2層：暗褐色土層。1 c層に近いが、少し土壌化が進む。As-Aを含む。2～24層は、1号井戸跡覆土。

3層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。図左半部分には、焼土含まれない。

4層：暗褐色土層。3層に近いが、ローム小ブロックを含む。

5層：褐色土層。色調の暗い褐色ロームのブロック。

6層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロックが点在する。この層以下、やや黒み増す。

7層：黄褐色土層。ロームブロック。

8層：暗褐色土層。6層に近いが、ロームブロックが少ない。ローム粒を多く含み、焼土粒を少量含む。

9層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。ロームは白みがかかり、所々ブロック状。

10層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む。ブロックをほとんど含まない。

11層：黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、暗褐色土を少量含む。

12層：黄褐色土層。11層に近いが、ブロック間に暗褐色土混入。

13層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。

14層：暗褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。

15層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロックを含む。

16層：暗褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。

17層：暗褐色土層。16層に近いが、ロームが多い。

18層：暗褐色土層。15層に近いが、ロームが少ない。

19層：黄褐色土層。白みがあったロームのブロック。

20層：暗褐色土層。15層に近いが、ロームが多い。この層以下のロームは、シルト化しており、白みがかかる。

21層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。

22層：褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。21層よりロームが多い。

23層：褐色土層。22層に近いが、ロームが多い。

24層：褐色土層。ローム粒、ロームブロックが斑状に混合する。この層以下粘性がかなり増す。

25層：褐色土層。褐色土とロームの混合土。ロームの方が多い。25～28層は、その他の層に比し、総じてロームが整然と混入しており、暗褐色土が含まれるため色調が暗い。25～40層は、1号溝跡覆土。

26層：褐色土層。25層に近いが、さらにロームが多い。50mm大くらいのロームブロックが1点混入する。

27層：褐色土層。26層に近いが、ロームが多く、全体にロームが白みがかかる。

28層：褐色土層。褐色土、暗褐色土、白みがあったロームが、不規則ではあるが、ほぼ水平のラミナをなす。

29層：暗褐色土層。1 c層に近いが、2～10mm大のローム粒、ロームブロックが点在する。As-Aは含まない。

30層：暗褐色土層。29層に近いが、一部にモヤモヤ白みの強いロームが混入する。

31層：暗褐色土層。ローム粒を含む。右半に黒褐色土が混れ入る。20mm大のロームブロックを微量含む。

32層：暗褐色土層。10～40、50mm大のロームブロックが混れ入る。

33層：暗褐色土層。32層に近いが、ロームがさらに多い。

34層：暗褐色土層。ローム粒を含み、ローム小ブロック点状。

35層：暗褐色土層。ローム粒、20mm大のロームブロックを不規則に含む。

36層：黄褐色土層。ハードロームのブロック。

37層：暗褐色土層。34層に近いが、ロームブロックはほぼ含まない。

38層：暗褐色土層。37層に近いが、ローム粒がはるかに多い。

39層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、ロームブロックがほぼ同量斑状に混合する。

40層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5mm大のローム小ブロックが点在する。ローム粒の量は、37層<40層<38層。

41層：褐色土層。25層に近いが、5～10mm大のロームブロックを含む。As-Aを含む。この層は、1 c層と大きな違いはない。ブロックを含む。As-Aを含む。この層は、1 c層と大きな違いはない。41～47層は、5号土坑覆土。

42層：褐色土層。26層に近いが、色調が明るい(ロームが多い)。褐色土、暗褐色土、ロームが不規則に混入。

43層：褐色土層。42層に近いが、若干黒みが強い(暗褐色土多い)。

44層：褐色土層。44層に近いが、ロームが多い。

45層：褐色土層。46層に近いが、白みがあったロームが多い。

46層：褐色土層。45層に近いが、暗褐色土が多く、黒みが増す。

47層：黄褐色土層。45層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多く、斑状に混合する。

48層：黄褐色土層。ロームブロックを主に、隙間に暗褐色土が混入する。48～52層は、7号土坑覆土。

49層：黒褐色土層。暗褐色土と黒褐色土がほぼ同量モヤモヤと混合。ローム粒、5～10mm大のロームブロックの密集部あり。

50層：黒褐色土層。49層に近いが、ロームが多く、色調明るい。

51層：黄褐色土層。崩落ロームの隙間に、暗褐色土、黒褐色土が斑状に混入する。

52層：黄褐色土層。崩落ロームを主に、暗褐色土を含む。

53層：暗褐色土層。29層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックが多い。8号土坑覆土。

54層：暗褐色土層。ロームが斑状に混入する。鉄分沈着。この層以下、粘性が強まる。54・55層は、9号土坑覆土。

55層：暗褐色土層。54層に近いが、ローム粒、鉄分が多い。54層のようなモヤモヤロームは見られない。

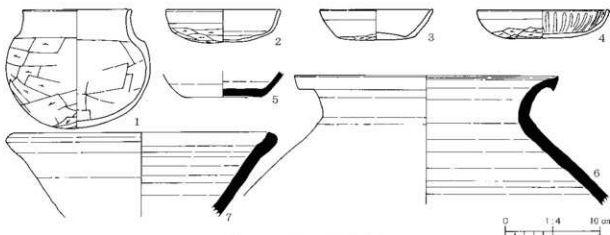
第65図 1号井戸跡・5～10号土坑・1号溝跡平面・断面図(2)

との結合部は、ほぼ井戸跡の大きく開く開口部の下端と溝底の深さが一致するようになっており、溝底はそこからわずかな傾斜をもって9号土坑との結合部に至る。溝底には所々凹凸が見られる。覆土の多くは、ローム粒やロームブロックが不規則に混合する褐色土、暗褐色土である。

井戸跡を起点に溝跡が結合していること、溝跡に貫かれるように、あるいは溝跡に接して複数の土坑が設けられていること、覆土は井戸跡、土坑、溝跡で大きな違いは見られないこと、土坑の大半はかなりの大きさで、確認できた土坑はいずれも溝跡に切られていること、しかも土坑底面は溝底と同じかやや深いこと、3種の遺構のつながりを示す直截的な手がかりは多くはないが、以下のように考えておきたい。

井戸跡と結合した溝跡は、井戸から湧出した地下水を南東側に流す仕組みであり、土坑は溝を伝った湧水を溜める施設であろう。10号土坑は、深さなどから、別種の、あるいは時期の異なる土坑の可能性もあると思う。よって5～9号土坑については、水溜めの一種と見、井戸跡に最も近い5号土坑から6号土坑、7号土坑という風に、土坑が何らかの形で使えなくなったり、埋まったりする度に、溝を掘り直し、先端に水溜めとしての土坑を順次設けたと推定する。この推定に誤りなければ、1号井戸跡とそれに結合した1号溝跡、その先端の9号土坑が、この複合的な施設の最終的な姿ということになる。

多様な遺物が出土しているが、覆土や出土遺物から見て、1号井戸跡、5～9号土坑、1号溝跡は、平安時代の遺構と考えられる。10号土坑に関しては、さらに後出する遺構と見られる。



第66図 1号井戸跡出土遺物

第23表 1号井戸跡出土遺物観察表(1)

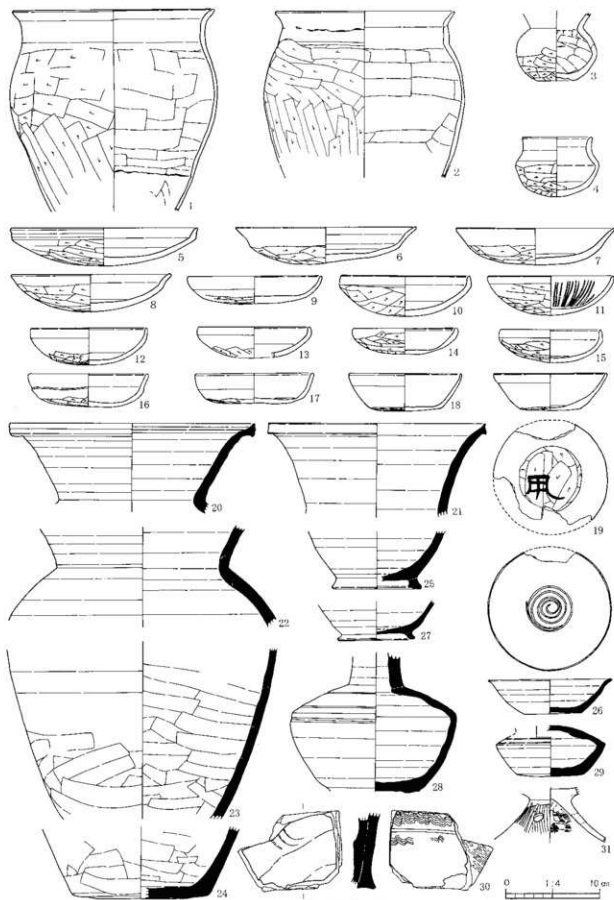
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 (11.4) 器高 12.6	口縁部は括れて直立する。胴部は球状を呈す。丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外-褐色~黒色	2/3残存
2	坏	口径 11.9 器高 3.5	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色の岩片、角閃石、霏 内外-褐色	7/8残存
3	坏	口径 (11.9) 器高 (8.4) 器高 3.2	平底。体部から口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位~中位ナデ。体部下位ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部中位~下位ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、霏 内外-にぶい褐色	1/2残存
4	坏	口径 13.7 器高 3.0	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~下位ヘラケズリ。内面-口縁部~体部放射状暗文。底部螺旋状暗文。	白色・褐色の岩片、霏、角閃石、雲母 内外-褐色	3/5残存

第24表 1号井戸跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
5	須臾器 環	口径 — 底径 8.0 器高 [2.7]	平底。体部はやや丸みをもつ。ロクロ成形。	外面一体部中位～下位ロクロナデ。底部系切り後右回転ヘラケズリ。内面ロクロナデ。	黒色の岩片、角閃石、片岩 内外一灰色	体部中位～底部残存
6	須臾器 甕	口径 (27.9) 底径 器高 [13.6]	口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部～頸部ロクロナデ。肩部並行明き後ヘラナデ。内面ロクロナデ。	白色・褐色の岩片 内外一灰色	口縁～胴部上位1/4残存
7	須臾器 鉢	口径 (27.0) 底径 器高 [8.9]	口縁部は内彎する。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面一口縁部ロクロナデ。頸部ナデ。内面一口縁部ロクロナデ。頸部ナデ。	白色・褐色の岩片 内外一灰色	口縁～体部1/7残存

第25表 1号溝跡出土遺物観察表(1)

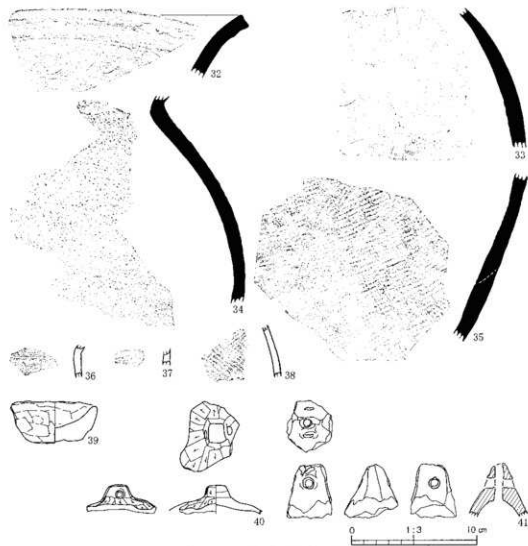
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (21.2) 底径 器高 [21.3]	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一ぶい褐色	口縁部～胴部下位 内外一残存
2	甕	口径 19.0 底径 器高 [17.6]	口縁部は不整なコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一褐色	口縁部～胴部上位5/6残存
3	小形壺	口径 — 底径 器高 [7.1]	底部はやや上広底。胴部は大きく丸みをもつ。口縁部は大きく直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上位～中位ナデ。胴部中位～下位ヘラケズリ。底部ナデ。内面～口縁部ヨコナデ。胴部上位～中位ヘラナデ。胴部中位～底部ナデ。	白色・褐色の岩片、石英、角閃石 内外一明赤褐色	口縁部4/5欠
4	小形鉢	口径 (7.1) 底径 器高 6.3	丸底。口縁部は一旦すぼまり上位は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～胴部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外一褐色	3/5残存
5	皿	口径 (19.8) 底径 器高 4.0	丸底。体部は大きく開き、稜をもつ。口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ヘラナデ。	白色の岩片、雲母、角閃石 内外一褐色	2/5残存
6	皿	口径 19.5 底径 器高 3.9	丸底。体部は大きく開き、稜をもつ。口縁部は外反して大きく開く。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部中位ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫、褐色の岩片 内外一褐色	7/8残存
7	皿	口径 16.6 底径 器高 3.9	丸底。体部は大きく開く。体部と口縁部の境の稜は不明瞭。口縁部はやや外反気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外一褐色	ほぼ完形
8	皿	口径 16.8 底径 器高 3.9	丸底。体部は大きく開き、稜は不明瞭。口縁部は外反気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外一褐色	口縁部1/4欠損
9	坏	口径 (14.1) 底径 器高 [2.9]	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、礫 内外一褐色～ぶい褐色	1/3残存
10	坏	口径 13.7 底径 器高 4.3	丸底。体部は大きく開き、稜をもつ。口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外一ぶい褐色	9/10残存
11	坏	口径 (13.2) 底径 器高 4.1	丸底。口縁部まで内彎する。口唇部がやや肥厚する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面放射状暗文。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一褐色	1/2残存
12	坏	口径 (12.1) 底径 器高 3.9	丸底。口縁部は短く直立気味。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、礫 内外一明赤褐色	3/5残存
13	坏	口径 11.7 底径 器高 [3.2]	丸底。口縁部まで内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、石英、角閃石 内外一褐色	口縁部～体部1/2残存
14	坏	口径 (11.0) 底径 器高 2.8	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外一ぶい赤褐色	1/2残存
15	坏	口径 10.6 底径 器高 3.5	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外一褐色～ぶい褐色	3/5残存



第67图 1号溝跡出土遺物(1)

第26表 1号溝跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
16	坏	口径 12.4 底径 10.2 器高 3.6	平底。体部の立ち上がりは丸みをもって開く。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位~中位ナデ体部下位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片 内外-褐色	7/8残存
17	坏	口径 12.4 底径 10.3 器高 3.2	平底。体部の立ち上がりは丸みをもって開く。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、褐色の岩片 内外-褐色~にぶい褐色	3/4残存
18	坏	口径 11.8 底径 (7.6) 器高 3.9	平底。体部~口縁部は直線的に開く。口唇部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~底部ヨコナデ。底部中央ナデ。	白色の岩片、雲母、角閃石、礫 内外-褐色	2/5残存
19	坏	口径 11.9 底径 6.6 器高 3.9	平底。体部~口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。外面底部に墨書「用」。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~底部ヨコナデ。底部中央ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-褐色	2/3残存
20	須恵器 甕	口径 (25.8) 底径 ー 器高 [9.4]	口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色粒・黒色粒・礫、内外-灰色	口縁部 1/3残存
21	須恵器 甕	口径 (23.4) 底径 ー 器高 9.8	口縁部は外反し、口端部は縁帯部をもつ。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色の岩片、礫 内外-灰色	口縁部~頸部 1/4残存



第68図 1号溝跡出土遺物(2)

第27表 1号溝跡出土土物観察表(3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
22	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 [10.8]	口縁部は外反する。粘土組織 み上げによる成形。	外面—ロクロナダ。内面—ロクロナ ダ。	白色の岩片、礫 内外—灰色	頸部～胴 部2/5残 存
23	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 [18.0]	胴部はほぼ直線的に開く。 粘土組織み上げによる成形。	外面—ロクロナダ後ヘラナダ。内面— ロクロナダ後ヘラナダ。無文の当て具 痕あり。	白色・黒色の岩 片、礫 内外—灰色	胴部中位 ～下位 2/5残存
24	須恵器 甕	口径 — 底径 (14.7) 器高 [7.6]	胴部はほぼ直線的に開く。 外をもつて開く。粘土組織み 上げによる成形。	外面—胴部下位ヘラナダ。底部ナダ。 器面摩擦あり。内面—胴部ロクロナ ダ後ヘラナダ。底部ロクロナダ。	白色・黒色の岩 片、雲母、褐色の 岩片、礫 内外—灰黄へにぶ い褐色	胴部下部 2/5残存
25	須恵器 高台付 碗	口径 — 底径 8.1 器高 (4.1)	平底。体部は立ち上がり に丸みをもつて開く。ロクロ 成形。	外面—体部ロクロナダ。底部右回転糸 切り。内面—ロクロナダ。高台貼付時 回転ナダ。	白色・褐色の岩 片、礫 内外—灰色	体部～高 台部4/5 残存
26	須恵器 環	口径 13.0 底径 6.1 器高 4.0	平底。体部はわずかに膨ら みをもつて開く。口縁部は 外反する。内面底部に渦巻 状の模様あり。ロクロ成形。	外面—口縁部～体部ロクロナダ。底部 右回転糸切り。内面—ロクロナダ。	白色の岩片、礫 内外—黒色	口縁部一 部欠損
27	須恵器 長頸甕	口径 — 底径 (9.0) 器高 [6.1]	高台部は台形状を呈し、外端 部が接合する。胴部はほぼ 直線的に開く。ロクロ成形。	外面—胴部下位ロクロナダ。底部回転 ナダ。内面—胴部ロクロナダ。底部高 台貼付時回転ナダ。自然釉。	白色・黒色の岩 片 内外—灰白色	胴部下位 ～底部 2/3残存
28	須恵器 長頸甕	口径 — 底径 — 器高 [14.9]	肩部に張りをもつ。沈線が 巡る。ロクロ成形。	外面—頸部～胴部ロクロナダ。高台貼 付時回転ナダ。内面—ロクロナダ。	白色・黒色の岩 片、礫 内外—灰色	頸部～底 部4/5残 存
29	須恵器 平版	口径 — 底径 (7.1) 器高 [5.4]	平底。胴部はほぼ直線的に 開き、肩部は強い稜をもつ。 沈線が巡る。ロクロ成形。	外面—胴部ロクロナダ。自然釉。底部 ナダ。内面—胴部上位ナダ。底部上 位～底部ロクロナダ。底部自然釉。	白色・黒色の岩 片 内外—灰色	2/5残存
30	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部片と胴部片が融着。	外面—口縁部片波状文。胴部片平行印 き。内面—当て具痕。	白色の岩片、礫 内外—灰～暗灰色	破片
31	高坏	口径 — 底径 — 器高 [5.8]	脚部はハの字状に開く。円 孔は3箇所。粘土組織み上 げによる成形。	外面—坏底部～脚部ヘラミガキ。内面 —坏底部ナダ。脚部ヘラナダ。	白色・黒色の岩 片、角閃石 内外—明褐色	坏底部～ 脚部1/3 残存
32	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	端部は肥厚・突出し、口縁 部は外反して開く。粘土組 織み上げ成形後、叩き整 形。	外面—ヨコ、ナメの粗いハケ後、櫛 掻波状文。内面—ヨコナダ。	白色・灰色・黒 色の岩片などの大小 砂粒多量 内外—灰色	
33	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上 がる。粘土組織み上げ成形 後、叩き整形。	外面—平行叩き目後、浅い櫛掻直線 文。全体に磨耗、剥落顕著。内面—青 海波様の当て具痕。	白色・灰色の岩 片、石英、長石など の大小砂粒、小礫 内外—灰白色	
34	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上 がり、頸部は屈曲する。粘 土組織み上げ成形後、叩き 整形。	外面—ほぼ全面に自然釉の剥落残 る。内面—青海波様の当て具痕。	白色・灰色の岩 片などの大小砂粒、 小礫 外—灰白色 内—灰色	
35	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はやや丸みをもって立 ち上がる。粘土組織み上 げ成形後、叩き整形。	外面—格子目の叩き目。内面—青海波 様の当て具痕。	白色・灰色の岩 片、石英、長石など の大小砂粒、小礫 内外—灰色	
36	甕	口径 — 底径 — 器高 —	くびれ部は強く彎曲し立ち 上がる。粘土組織み上 げによる成形。	外面—櫛掻簾状文(2連止めか?)、同 波状文。内面—ヨコナダ。	白色・灰色の岩 片などの細砂 外—にぶい褐色 内—にぶい黄褐色	櫛式
37	甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部上位は微妙に彎曲し立 ち上がる。粘土組織み上 げによる成形。	外面—櫛掻簾状文、同波状文。内面— 磨耗により不明。	白色・灰色の岩 片などの細砂 外—にぶい褐色 内—にぶい黄褐色	櫛式 36と同一 個体
38	甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部中央は丸みをもって立 ち上がる。粘土組織み上 げによる成形。	外面—ナメの矢羽状の粗いハケ。内 面—ナメのナダ。	白色・灰色の岩 片、雲母などの細砂 内外—暗褐色	S字状口 縁付甕
39	ミニ チュア 土器	口径 6.1 底径 4.4 器高 3.3	平底。不整形。粘土組織み 上げによる成形。	外面—口縁部～胴部ヘラナダ(指頭痕 あり)。底部木葉痕。内面—ヘラナ ダ。	白色・褐色の岩 片、雲母 内外—にぶい赤褐色	3/4残存
40	土製品	口径 — 底径 — 器高 [2.3]	握み部分の横方向に円孔が 穿たれる。	外面—ヘラケズリ。内面—天井部ナ ダ。ヨコナダ。	白色・黒色の岩 片、角閃石 内外—にぶい褐色	破片
41	土製品	口径 — 底径 — 器高 [4.2]	先端部は縦横に円孔が穿た れる。土跡か?	外面—ナダ。内面—ヘラナダ。	白色の岩片、雲母 内外—にぶい黄褐 色	破片

2号井戸跡 (第69～71図、第28表、図版19・31)

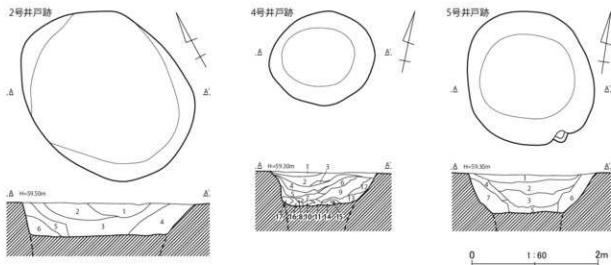
A 2地点北西部の北西で検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。平面形は、やや不整な円形で、最大径は300cmである。上端が大きく開き、以下筒状となる形態である。55cm前後の深さまで精査したが、そこまでの覆土は、ローム混りの暗褐色土が主である。下部に行くに従い、粘性、黒みが増すようであり、井戸底まで2mを超える深さがあった。出土遺物の多くは、土師器細片である。第71図1の樽式土器、あるいは樽式系土器は混入した遺物である。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の井戸跡であろうか。

4号井戸跡 (第69～71図、第28表、図版19・31)

A 2地点北西部の中央、西寄りで検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。平面形は、やや不整な円形、あるいは楕円形で、最大径は172cmである。開口部が開き、以下筒状となる形態であろう。深さ50cmくらいから少しずつ湧水が見られはじめた。以下の覆土は、深さが増すとともに、粘性、黒みの増す暗褐色土、黒褐色土であった。出土遺物の大半は、土師器細片である。覆土から見て、中世の井戸跡かと思われる。

5号井戸跡 (第69～71図、第28表、図版19・31)

A 2地点北西部の中央、西寄りで検出した遺構である。8号住居跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。平面形は、やや不整な円形で、最大径は228cmである。湧

**2号井戸跡土層注記**

- 1層：暗褐色土層。5～10mm大のロームを少量含む。土器微細破片を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。5mm大のロームを少量含む。5mm大の炭化物を含む。
- 3層：暗褐色土層。5mm大のロームを少量含む。10～15mm大の炭化物を含む。

- 4層：暗褐色土層。5～10mm大、20～30mm大のロームを含む。土器片を含む。片岩片を含む。
- 5層：暗褐色土層。20～30mm大のロームを多く含む。
- 6層：暗褐色土層。10mm大のロームを含む。土器片を含む。高坏脚部片を含む。

第69図 2・4・5号井戸跡平面・断面図(1)

4号井戸跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。2～3mm大のローム粒を含む。
- 2層：褐色土層。1～3mm大のローム粒を多く含み、5～15mm大のロームブロック、10mm大の白色粘土ブロックを含む。
- 3層：暗褐色土層。1～3mm大のローム粒を少量含む。
- 4層：褐色土層。1～3mm大のローム粒を多量に含み、5～10mm大のロームブロックを含む。しまりが弱い。
- 5層：黒褐色土層。2～3mm大のローム粒を少量含む。
- 6層：にぶい黄褐色土層。1～2mm大のローム粒を少量含み、土器微細片を含む。しまっている。
- 7層：暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含み、同大の炭化物を含む。
- 8層：明黄褐色土層。ロームブロック。
- 9層：にぶい黄褐色土層。ローム、白色粘土、暗褐色粘土が層

厚10mm前後の薄層をなし堆積している。10～20mm大の黒色土ブロックが下部に含まれる。しまりが強い。

- 10層：植物の攪乱か？
- 11層：黒褐色土層。10mm大のロームブロックを少量含む。しまっている。この層より土器出土。
- 12層：黒褐色土層。10mm大の角の残るロームブロックを少量含む。しまっている。
- 13層：暗褐色土層。2mm大のローム粒を多量に含む。
- 14層：植物の攪乱か？
- 15層：にぶい黄褐色土層。1～2mm大のローム粒を少量含む。しまっている。
- 16層：暗褐色土層。1～8mm大のローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまっている。

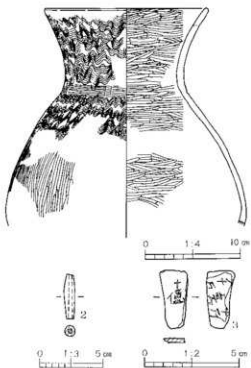
5号井戸跡土層注記

- 1層：黒褐色土層。1～3mm大のローム粒、5mm大の炭化物を少量含み、土器細片を含む。しまり弱い。
- 2層：にぶい黄褐色土層。1mm大のローム粒を極少量、同大の炭化物を少量含む。しまり弱い。
- 3層：黒褐色土層1mm大のローム粒を極少量、土器微細片を少量含む。しまり弱い。
- 4層：にぶい黄褐色土層。1～2mm大のローム粒、土器微細片

- を含む。しまり弱い。
- 5層：にぶい黄褐色土層。1mm大のローム粒を少量含む。やや粘性がある。
- 6層：にぶい黄褐色土層。1～3mm大のローム粒、土器細片を含む。
- 7層：褐色土層。1～8mm大のローム粒、ロームブロックを多く含み、土器細片を含む。

第70図 2・4・5号井戸跡平面・断面図(2)

斗状に開く開口部と筒状の井筒からなるようである。深さ60cm前後まで精査したが、そこまでの覆土は、ローム混りの黒褐色土、にぶい黄褐色土が主である。以下、下部に行くに従い、粘性、黒みが増すようであった。覆土には、土師器細片をかなり含むが、8号住居跡の覆土中の土器が混入したものであろう。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の井戸跡の可能性はある。



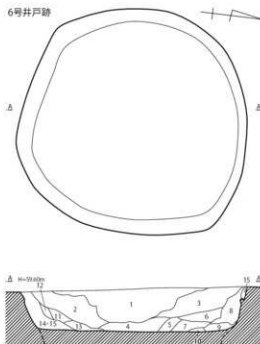
第71図 2・4・5号井戸跡出土遺物

6号井戸跡 (第72・73図、第29表、図版19・31)

A2地点北西部の東縁寄り中央で検出した遺構である。北側で19号住居跡を壊し造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。平面形は、おおむね円形と言えようが、東縁や南縁は微妙に辺をなすようにも見える。北東-南西方向での最大径は404cm、東西方向での径は362cmである。開口部がゆるやかに開き、以下少しずつすぼまる筒状の井筒が付く形態になる。70cm前後の深さまで精査したが、そこまでの覆土は、ロームや

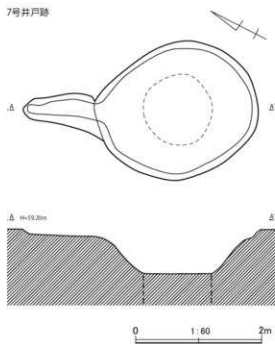
第28表 2・4・5号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 17.1 底径 — 器高 [23.0]	口縁部は外反する。粘土紐 積み上げによる成形。	外面—口縁部～頸部へラナデ後波状 文。頸部縷状文。肩部波状文。波状文 は4、5条一単位、2、3連留め縷状文。 縷状文→波状文の順に施文。胴部へラ ミガキ。内面へラミガキ。	白色の岩片、角閃 石、雲母、石英 内外—にぶい褐色	1/2残存 樽式 2号井戸 跡出土
No.	器種	法量 (cm)・特徴				備考
2	土罽	長さ3.5、厚さ0.9、孔径0.3、重さ2.7g	胎土：雲母 色調：にぶい黄褐色			完形 4号井戸 跡出土
3	石製品 石板?	長径3.1、幅径1.5、厚さ0.2、重さ1.4g	特徴：線刻文字あり。表面「十億」、裏面「千万・百万・ 十万」			5号井戸 跡出土



6号井戸跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。2～5mm大のローム粒、ローム小ブロック、2～8mm大の焼土を多量に含む。炭化物粒、土器粒、土器細片もかなり含む。しまっている。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、5～40mm大のロームブロックが多く、同大の白色粘土ブロックが加わる。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロック、白色粘土ブロックが小さい(5～20mm大)。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、やや粘性増し、黒み増す。若干炭化物が多い。1層より焼土は少ない。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、5mm大のローム小ブロックが点在する。
- 6層：暗褐色土層。3層に近いが、やや黒み増し、20、30mm大のロームブロックが少ない。
- 7層：暗褐色土層。5層に近いが、5～10mm大のロームブロックが急増する。



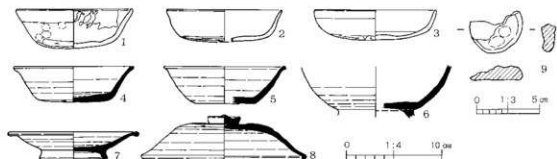
- 8層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロック、白みの強いシルト化したブロックを多量に含む(暗褐色土とロームはほぼ同量)。焼土、炭化物が点在する。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含み、焼土、炭化物を少量含む。8層よりロームブロックの輪郭が不鮮明で、量も少ない。
- 10層：暗褐色土層。9層に近いが、ロームブロックが多い。
- 11層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム大ブロックが少なく、焼土が多い。
- 12層：暗褐色土層。11層に近いが、焼土が少ない。
- 13層：暗褐色土層。ロームブロックを不規則に含む。
- 14層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを不規則に含む。焼土、炭化物を少量含む。
- 15層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。

第72図 6・7号井戸跡平面・断面図

白色粘土のブロック、焼土や土器細片を不規則にかなり含む暗褐色土が主で、埋め戻された土と見てよいものであった。以下、下部に行くに従い、粘性、黒みが増すとともに湧水も顕著であった。下層は灰黒色の砂質の泥濘が堆積していた。覆土には、土器細片を多量に含むが、19号住居跡の覆土中の土器が混入したものであろうか。出土遺物、覆土から見て、中世以前の井戸跡の可能性はある。

7号井戸跡 (第72図、図版19)

A 2地点北西部の南東端近くで検出した遺構である。1号墓の南西溝を壊して造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。平面形は、楕円形、あるいは卵形に近く、北側に降り口と思われる舌状の平場が付いている。南北方向での最大径は266cmである。開口部が漏斗状に開き、以下筒状の井筒が付く形態になる。70cm前後の深さまで精査したが、そこまでの覆土は、ローム粒やロームブロックを不規則に含む暗褐色土が主で、以下、灰黒色、黒褐色の砂質土、粘質土が堆積して



第73図 6号井戸跡出土遺物

第29表 6号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 12.3 底径 8.1 器高 4.1	平底気味。体部立ち上がり に丸みをもつ。口縁部は内 彎する。粘土組織み上げに よる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位指ナ デ。体部上位~底部ヘラケズリ。内面 -口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、雲母 内外-褐色	口縁部 1/4欠損 口縁部に 埋付着
2	坏	口径 (12.2) 底径 (9.3) 器高 (3.3)	平底。体部は僅かに丸みをも つ。口縁部は外反する。粘 土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ リ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。	角閃石、石英 内外-ぶい褐色	1/2残存
3	坏	口径 (12.5) 底径 3.2	丸底。体部は立ち上りに丸 みをもつ。口縁部は僅かに 内彎する。粘土組織み上 げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナ デ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面 -口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下 位~底部ナデ。	白色・黒色の岩 片、角閃石 内外-明赤褐色	1/3残存
4	須恵器 坏	口径 12.6 底径 7.4 器高 3.8	平底。口縁部は外反する。 ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り後 ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片 内外-浅黄色	体部一部 欠損
5	須恵器 坏	口径 (12.7) 底径 (6.4) 器高 3.9	平底。口縁部は外反する。 ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩 片、礫 内外-灰色	1/3残存
6	須恵器 碗	口径 ー 底径 ー 器高 (5.6)	体部は大きく丸みをもつ。 口縁部は外反する。ロクロ 成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナ デ。高台貼付け時ナデ。	白色の岩片、礫 内外-黄灰色	体部中位 ~底部残 存
7	須恵器 高台付 皿	口径 13.3 底径 7.0 器高 2.9	口縁部は外反する。ロクロ 成形。	外面-ロクロナデ。底面回転糸切り 後、高台接合。体部ロクロナデ。内面 -ロクロナデ。	白色・黒色の岩 片、礫 内外-灰色	7/8残存
8	須恵器 蓋	口径 (17.0) 径 3.3 器高 4.5	天井部はやや丸みをもつ。 口縁部は内傾する。ロクロ 成形。	外面-ツマミ部貼付け時周辺ナデ。天 井部右回転ヘラケズリ。体部ロクロナ デ。内面-ロクロナデ。	白色の岩片、礫 内外-ぶい褐色 外-明赤褐色	1/3残存
No.	器種	法量 (cm)		特徴		備考
9	不明 土製品	長さ3.3、幅4.2、厚さ1.1、重さ9.7g	胎土：白色・褐色の岩片、雲母		色調：褐色	破片

いた。遺物は、土師器小片が少量出土したのみである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と見られる。

5 土坑

今回の調査では、46基の土坑を検出した。それらの土坑は、調査範囲であるA2・A3地点ほぼ全域に広がるが、とくにピットが多数検出されたA2地点北西部の西半に集中する傾向が見られた。この一帯の土坑は、形態的には円形、楕円形、長方形が主で、多くは、ピット群と関連する遺構かと思われる。土坑の確認面は、おおむね黄褐色の軟質ローム層上面である。なお、5～10号土坑に関しては、1号井戸跡、1号溝跡と有機的に関連する遺構と考えられたため、1号井戸跡の項にて報告した(本書:71～74頁)。

1号土坑 (第74・75図、第30表、図版20・31)

A2地点北西部の南東北西隅近くで検出した遺構である。中央を溝状の擾乱により壊されている。平面形は、丸みの強い隅丸方形と見ることができる。やや長い北西-南東方向での長さは138cm、北東-南西方向で130cm、最深部での深さは11cmである。底面は全体としてはほぼ平坦であるが、細かな凹凸が見られる。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

2号土坑 (第74・75図、第30表、図版20・31)

A2地点北西部の北西隅近くで検出した遺構である。平面形は、やや不整な隅丸方形になろうか。南北方向での長さは64cm、東西方向で58cm、最深部での深さは10cmである。底面はほぼ平坦である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



第74図 1・2号土坑
出土遺物

第30表 1・2号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口径 — 底径 — 器高 [9.2]	脚部は直線的、中実。	外面-脚部ヘラミガキ。	白色・褐色・黒色の岩片 内外-にぶい橙～ にぶい褐色	脚部一部 残存 1号土坑 出土
2	高坏?	口径 (11.8) 底径 — 器高 [4.9]	体部～口縁部は直線的に開く。口縁端部がわずかに外反する。粘土総積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位～中位ヘラナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-にぶい褐色	2/5残存 2号土坑 出土

3号土坑 (第75図、図版20)

A2地点北西部の南東隅近くで検出した遺構である。平面形は、やや不整な楕円形である。長径83cm、短径52cm、長軸方位は、N-48°-Eである。長最深部での深さは5cmである。底面はほぼ平坦である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

4号土坑 (第75図、図版20)

A2地点北西部の北西隅近くで検出した遺構である。南側に張り出した部分は、重複する別の土坑

なのであろうが、2つを分けて調査することができなかった。南側の浅い土坑を4a号土坑、北側の縦長の大きな土坑を4b号土坑とする。

4a号土坑は、やや不整な長方形を呈する土坑で、4b号土坑に北側を壊されている。長軸長は132cm、現存短軸長は29cm、最深部での深さは6cmである。

4b号土坑の平面形は、やや不整な縦長の長方形であり、北辺側に2箇所出っ張りがある。長軸長は285cm、短軸長は102cm、長軸方位は、 $N-90^{\circ}-W$ である。最深部での深さは25cmである。底面はおおむね平坦である。覆土は、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。4b号土坑の覆土からは、混入品と思われる土師器小片が少数出土している。

どちらの土坑も、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

11号土坑 (第75図、図版18・20)

A2地点北西部の北西半、6号土坑と7号土坑に挟まれた位置で検出した遺構である。1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は、やや不整な長方形で、長軸長は140cm、短軸長は推定で72cm前後である。残りのよい北半の壁は比較的急峻に立ち上がる。最深部での深さは57cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

12号土坑 (第75図、図版21)

A2地点北西部の北西半で検出した遺構である。平面形は、ほぼ円形で、最大径は115cm、最深部での深さは15cmである。坑壁は全周整然と傾斜を変えず掘りこまれており、底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

13号土坑 (第75図)

A2地点北西部の北西半で検出した遺構である。平面形は、やや不整な楕円形で、長径は128cm、短径は98cm、長軸方位は、 $N-74^{\circ}-W$ である。断面形は船底形に近く、最深部での深さは20cmである。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構である可能性がある。

14号土坑 (第75図、図版21)

A2地点北西部の北西半で検出した遺構である。平面形は、やや不整な楕円形で、長径は125cm、短径は106cmである。船底形に掘り込まれており、最深部での深さは12cmである。底面は、ほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

15号土坑 (第75図、図版21)

A2地点北西部の北西半で検出した遺構である。平面形は、やや不整な方形で、南北方向での長さは70cm、東西方向での長さは60cm、最深部での深さは11cmである。底面はほぼ平坦である。出土遺物



第75図 1~4・11~15号土坑平面・断面図

もほとんどなく、時期限定がむつかしいが、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

16号土坑 (第76図、図版21)

A 2地点北西部の北西半で検出した遺構である。全体の平面形は、かなり歪んだ隅丸方形、菱形と見ることができる。ただし、東辺のくびれから判断するなら、重複する2基の長方形の土坑と見るのが自然であるが、一応単独1基の土坑として記載する。東西方向での長さは155cm、南北方向での長

さは145cm、最深部での深さは16cmである。底面はかなり凹凸している。底面に5個小ピットが見られるが、いずれも周辺一帯に集中する小ピットに多い方形に近い平面形のピットであり、倅なわない可能性が高い。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

17号土坑（第76図、図版21）

A2地点北西部の西縁中央近くで検出した遺構である。上端での平面形は、かなり不整な楕円形に見えるが、底面は長方形に近い。南北方向での長さは118cm、東西方向での長さは85cm、最深部での深さは15cmである。底面はほぼ平坦である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

18号土坑（第76図、図版21）

A2地点北西部の西縁中央近くで検出した遺構である。遺構上層に突き固めたような灰白色粘土が堆積しており、確認時灰白色の粘土の広がりと、明瞭に輪郭をとらえることができた。平面形は、長方形で、長軸長は203cm、短軸長は77cm、長軸方位はN-78°-Wである。底面には、西よりの位置に浅い段差があり、2面をなすように仕切られている。西側の浅い部分での深さは21cm、東側最深部での深さは36cmである。底面はほぼ平坦であるが、東半部分にやや凹凸が目立つ。上述したように上層には、灰白色粘土が詰め込まれており、以下の覆土もロームブロック混りの埋め戻されたと思しき土である。覆土中より土師器小片が少量出土している。覆土から見て、中世以前の遺構の可能性はある。

19号土坑（第76図、図版22）

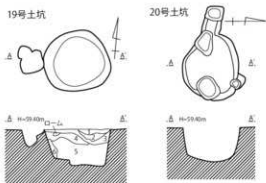
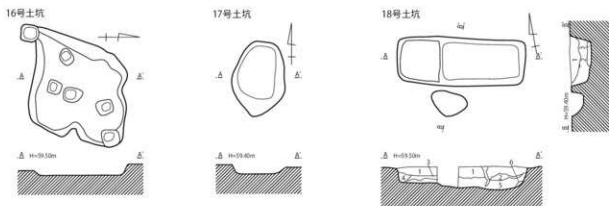
A2地点北西部の西縁中央近くで検出した遺構である。3・4号掘立柱建物跡と重複し、掘立柱建物跡より古い遺構の可能性はある。平面形は、ほぼ円形で、最大径は109cmである。坑壁は垂直に近く立ち上がる。最深部での深さは56cmである。底面はやや凹凸している。覆土は7層に分けられ、上層はかなり乱れており、下層は白みがかかったロームを多量に含む埋め戻されたかに見える土である。覆土中から土師器小片が少量出土している。覆土から見て、中世か、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

20号土坑（第76図、図版22）

A2地点北西部の西縁中央近くで検出した遺構である。3・4号掘立柱建物跡と重複し、掘立柱建物跡より古い遺構である。平面形は、やや不整な楕円形に近く、長径は109cm、短径は90cmである。最深部での深さは54cmである。断面形はU字形で、底面は中央がやや深くなっている。最深部での深さは54cmである。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世か、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

21号土坑（第76図、図版22）

A2地点北西部の北西半で検出した遺構である。平面形は、やや丸みのある長方形で、長軸長は96

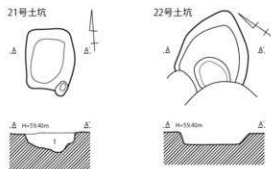


18号土坑土層注記

- 1層：灰白色粘土層。灰白色粘土粒、同ブロックを主に、暗褐色土を含む。粘土中には、マンガン・鉄分がかなり含まれる。突き固められたように、硬くしまっている。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、灰白色粘土粒を含み、5～8mm大のロームブロックが点在する。しまっている。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、15～20mm大のロームブロックを含む。しまっている。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。部分的に60、70mm大のロームブロックを微量含む、黒みが強い。

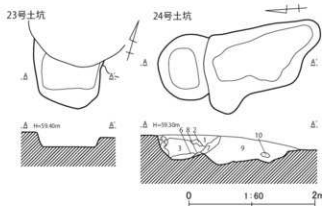
19号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。
- 2層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。
- 3層：黒褐色土層。1層に近いが、若干黒み強い。ローム粒、ロームブロックを斑状に含む。
- 4層：黄褐色土層。ロームの大ブロック。
- 5層：暗褐色土層。暗褐色土、ロームの斑状の混合土。
- 6層：黄褐色土層。暗褐色土とややシルトがかかったロームの混合土。ロームの方が多い。暗褐色土は、所々不規則なラミナをなし、雲状、ブロック状を呈する。
- 7層：黄褐色土層。ややシルトがかかったロームを主に、暗褐色土を斑状に少量含む。



21号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。20～40mm大のロームブロックを多く含む。土器微細片を含む。しまっている。



24号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。純層に近い黒褐色土。ローム粒を微量含む。
- 2層：黄褐色土層。ロームブロック。

第76図 16～24号土坑平面・断面図

cm、短軸長は78cm、長軸方位は $N-5^{\circ}-E$ である。最深部での深さは30cmである。底面にはかなり凹凸がある。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

22号土坑 (第76図)

A 2地点北西部の北西半で検出した遺構である。4号井戸跡に南西半を壊され、8号住居跡の一角を切っている。平面形は、やや不整な楕円形で、現存長軸長は123cm、短軸長は105cm、最深部での深さは20cmである。底面は全体にほぼ平坦であるが、中央付近に円形の掘り込みが見られる。土師器小片が数点出土している。覆土、重複関係から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構であろう。

23号土坑 (第76図)

A 2地点北西部の北西半で検出した遺構である。4号井戸跡に東半を壊されている。平面形は、かなり不整な方形、長方形になろうか。南北方向での長さは現存67cm、東西方向での長さは98cm、最深部での深さは23cmである。底面はほぼ平坦である。重複関係、覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構の可能性はある。

24号土坑 (第76図)

A 2地点北西部の中央南西寄り、南側から侵入する浅い谷地形のへりで検出した遺構である。2号掘立柱建物跡の柱穴のひとつを壊して造られている。平面形は、かなり歪んだ長方形、長楕円形で、南北方向での長さは212cm、東西方向での長さは111cm、長軸方位は $N-34^{\circ}-W$ である。最深部での深さは44cmである。底面には凹凸が著しい。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

25号土坑 (第78図、図版22)

A 2地点北西部の中央北寄りで検出した遺構である。平面形は、不整円形で、最大径は94cm、最深部での深さは10cmである。底面はほぼ平坦である。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構であろう。

26号土坑 (第77・78図、第31表、図版22・31)

A 2地点北西部の中央北縁近くで検出した遺構である。平面形は、長方形で、長軸長は172cm、短軸長は128cm、長軸方位は $N-3^{\circ}-E$ である。最深部での深さは25cmである。底面には微妙な凹凸があるが、おおむね平坦である。床面から坑壁にかけて2個のビットを検出したが、本遺構に伴うかどうか確認は得られなかった。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

27号土坑 (第78図、図版22)

A 2地点北西部の中央北寄りで検出した遺構である。平面形は、かなり不整な楕円形、あるいは空豆のような形である。規模は、南北方向で165cm、東西方向で133cmである。坑壁はゆるやかに立ち上

がり、底面には凹凸が著しい。最深部での深さは28cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

28号土坑（第78図、図版22）

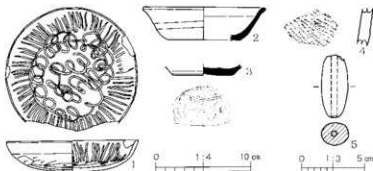
A2地点北西部の中央北寄りで検出した遺構である。平面形は、不整な円形で、最大径は93cm、最深部での深さは35cmである。椀形に近い形態で、底面は中央がくぼんでいる。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

29号土坑（第78図、図版22）

A2地点北西部のほぼ中央で検出した遺構である。16号住居跡の床面を壊して造られている。平面形は、不整円形で、最大径は103cmである。16号住居跡の床面からの深さになるが、最深部での深さは9cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。重複関係、覆土から見て、奈良・平安時代の遺構の可能性ある。

30号土坑（第77・78図、第31表、図版23・31）

A2地点北西部の中央北東寄りで検出した遺構である。10～12・14号住居跡を壊して切って造られている。平面形は、かなり歪な長方形の土坑本体の、東側に降り口かと思われる溝状の掘り込み、南西側に舌状の平場の付いた形と見ることができる。「溝状の掘り込み」を含む東西方向での全長は4.9mである。土坑本体の規模は、東西方向で247cm、南北方向で129cmである。縦方向での方位は、S-72°-Eである。東側の「溝状の掘り込み」



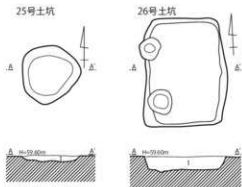
第77図 26・30号土坑出土遺物

第31表 26・30号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 13.8 底径 — 器高 3.3	丸底。口縁部は外傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部放射状暗文。体部螺旋状暗文。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-にぶい橙色	口縁部一部欠損 30号土坑出土
2	坏	口径 (12.6) 底径 (7.7) 器高 3.4	平底。体部は立ち上がりわずかに丸みをもつ。口縁部は外反する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部~体部ロクロナデ。底部回転糸切り。内面-ロクロナデ。	白色の岩片、石英、礫 内外-灰白色	1/4残存 26号土坑出土
3	須恵器 坏	口径 — 底径 6.4 器高 [1.1]	体部は直線的に立ち上る。粘土紐積み上げ成形後、ロクロ整形。	外面-回転ナデ。底面は糸切り底。沈線縁のヘラ痕残る。内面-回転ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-灰色	30号土坑出土
4	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面-皿の単節縄文。内面-ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい橙色	縄文時代中期? 30号土坑出土
法量 (cm)・特徴						
5	土師	長さ4.85、幅さ2.0、重さ15.4g	胎土：白色の岩片、角閃石	色調：にぶい橙色		ほぼ完形 30号土坑出土

25号土坑土層注記

1層：暗褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロックを少量含む。

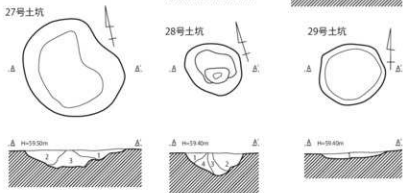


26号土坑土層注記

1層：黒褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロックを少量含む。10～30mm大のロームブロックを多く含む。ややしまっている。中世の覆土。

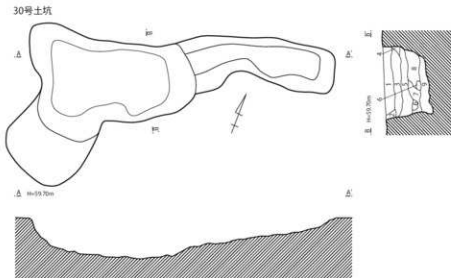
27号土坑土層注記

1層：にぶい黄褐色土層。10～15mm大のロームブロックを少量含む。
2層：黒褐色土層。10～30mm大のロームを含む。
3層：にぶい黄褐色土層。ロームを主に、10～20mm大の黒褐色土ブロックを含む。



28号土坑土層注記

1層：黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを含む。
2層：灰黄褐色土層。10mm大以下のローム粒、ロームブロックを多く含み、10、20mm大のロームブロックを含む。
3層：灰黄褐色土層。10mm大以下のローム粒、ロームブロック、10、20mm大のロームブロックを多く含む。
4層：明黄褐色土層。ロームを主に、10～20mm大の黒褐色土を含む。



29号土坑土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含む。

5層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。どちらも輪郭の不明確なブロック状で、大きな塊は70mm大くらい。

30号土坑土層注記

1層：暗褐色土層。やや淡い色調の暗褐色土を主に、ローム粒を含む。ローム粒はよく混合しており、粒子がほとんど見えない。焼土粒(土器粒?)を微量含む。
2層：暗褐色土層。暗褐色土とロームほぼ同量斑状に混合。
3層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。5～10mm大のロームブロック点在する。
4層：暗褐色土層。3層に近いが、ローム粒がモヤモヤ集塊し混合。

6層：黄褐色土層。ロームの大ブロック。
7層：暗褐色土層。5層に近いが、暗褐色土が黒みを増し、ロームより多い。中央上部に褐色がかったロームの大ブロックにあり。
8層：黒褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを斑状に含む。
9層：黒褐色土層。ローム粒、5～10mm大(5mm大が主)のロームブロックを含む。粘性が強くネチネチしている。

0 1:60 2m

第78図 25～30号土坑平面・断面図

り込み」先端から土坑本体に向かってゆるやかな傾斜をもって下り、土坑本体の坑壁はより急な傾斜で立ち上がる。住居跡の床面からの深さになるが、最深部での深さは74cmである。底面には細かな凹凸が見られる。覆土は、重複する住居跡とほとんど違いのない暗褐色土、黒褐色土を主とし、ロームブロックを多く含む埋め戻されたかと思われる土である。覆土中よりかなりの量の土師器片が出土している。不規則な形態、坑壁、坑底の凸凹の残る粗雑な造りから土取りをした跡と推定したい。重複関係、覆土から見て、住居跡と大きく隔たることのない時期、あるいは奈良・平安時代に帰属する可能性がある。

31号土坑（第80図）

A 2地点北西部の北東半で検出した遺構である。12号住居跡の床面を壊して造られている。平面形は、かなり不整な楕円形で、長径は104cm、短径は67cmである。長軸方位は、 $N-15^{\circ}-E$ である。12号住居跡の床面からの深さになるが、最深部での深さは21cmである。底面中央がやや深くなっている。土師器小片が数点出土している。覆土は、住居跡覆土と大きく異なることのない暗褐色土である。重複関係、覆土から見て、奈良・平安時代、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

32号土坑（第80図、図版23）

A 2地点北西部の北東半で検出した遺構である。11号住居跡の北東隅を壊して造られている。平面形は、不整形形で、最大径は99cmである。11号住居跡の床面からの深さになるが、最深部での深さは17cmである。底面はやや凸凹している。覆土は、住居跡覆土より若干黒みの強い暗褐色土である。重複関係、覆土から見て、奈良・平安時代、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

33号土坑（第80図、図版23）

A 2地点北西部の北東半で検出した遺構である。平面形は、不整な楕円形で、長径は127cm、短径は82cmである。長軸方位は、 $N-47^{\circ}-E$ である。鉢形に掘り込まれており、中央が1段深くなっている。最深部での深さは45cmである。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

34号土坑（第80図）

A 2地点北西部の北東半で検出した遺構である。平面形は、やや角張った不整な楕円形で、長径は89cm、短径は59cm、長軸方位は、 $N-4^{\circ}-E$ である。最深部での深さは33cmである。バケツ形に掘り込まれており、底面は凸凹している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

35号土坑（第79・80図、第32表、図版23）

A 2地点北西部の北東隅近くで検出した遺構である。小型の住居跡の可能性も捨てきれないが、土坑に含め記載する。東半は調査範囲外である。平面形は、やや不整な円形かと思われる。壁際南北方向での長さは236cm、東西方向での現存長は95cm、最深部での深さは67cmである。坑壁はかなり傾斜が不規則で、底面に



第79図 35号土坑
出土遺物

第32表 35号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 高台付 皿 器高	口径 — 底径 6.9 器高 [2.6]	高台部は長方形状を呈す。 体部は直線的に開く。ロク 口成形。	外面—底部ロクロナデ。右回転糸切 り。内面—ロクロナデ。高台貼付時周 辺部回転ナデ。	白色・褐色の岩片 多。礫 内外—灰黄色	底部～高 台部9/10 残存

31号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、焼土粒、炭化物を含む。
2層：暗褐色土層。5～40mm大のロームブロックを含む。

32号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。住居跡覆土より若干黒みの強い暗褐色土を主に、5～20mm大のロームブロックを含む。焼土粒もかなり多く含む。
2層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒を含む。60mm大のローム大ブロックが中央に見られる。

33号土坑土層注記

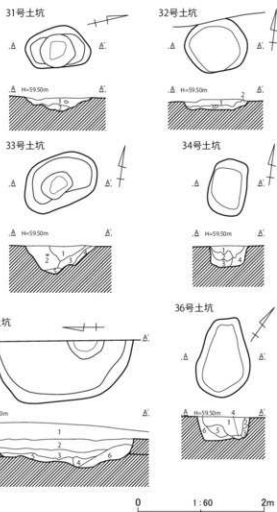
- 1層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、焼土粒を少量含む。
2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒がかなり多く、5mm大のローム小ブロックが目立つ。
3層：暗褐色土層。1層に近いが、30～50mm大のロームブロックが不規則に混入する。全体的にロームの量が多い。
4層：褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。焼土粒を微量、点々と含む。
5層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームブロックの輪郭がより明確になり、ねっとりしはじめ。

34号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。かなり黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒をかなり含む。焼土粒、炭化物粒を若干含む。
2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームがかなり多い。
3層：褐色土層。2層よりさらにロームが多い。焼土粒は微量。
4層：褐色土層。3層に近いが、ロームがブロック状にまとまる。

35号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックをかなり含む。
2層：暗褐色土層。1層に近いが、やや黒みが強まり、(全体に粒子が細くなり)ガサガサ感尙まる。
3層：暗褐色土層。ローム粒を少量含む。
4層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームブロックがはるかに多い。
5層：暗褐色土層。3層に近いが、ローム粒が雲状に集塊する。



36号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、5～20mm大のロームブロックを多量に含む。焼土粒、炭化物粒もかなり含む。
2層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒を多量に含む。
3層：黄褐色土層。ロームブロックを主に、ブロック間に暗褐色土が混入する。
4層：褐色土層。暗褐色土とロームのほぼ同量の混合土。
5層：黄褐色土層。30～100mm大のロームブロック間に暗褐色土が乱れ入る。
6層：黄褐色土層。ロームを主に、斑状に暗褐色土、褐色土混入。

も凹凸が顕著である。覆土は、住居跡の覆土と大きく異なることのないローム混りの暗褐色土である。覆土中より土師器片が少量出土している。第 図は、覆土中より出土した高台付きの須恵器皿の破片である。覆土や出土遺物から見て、平安時代以降の遺構の可能性が考えられる。

36号土坑 (第80図、図版23)

A 2 地点北西部の東縁近くの中央で検出した遺構である。平面形は、角張った洋梨形ともいべきで、南北方向での長さは127cm、東西方向での長さは80cmである。長軸方位は、 $N-14^{\circ}-W$ である。バケツ形に掘り込まれており、最深部での深さは37cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

37号土坑 (第81・82図、第33表、図版23)

A 2 地点北西部の東縁近くの中央で検出した遺構である。2基の土坑の重複例であり、東側の古い方の土坑を37a号土坑、西側の新しい方の土坑を37b号土坑と呼称する。平面形は、ともに丸みの強い隅丸方形で、底面には凹凸が顕著である。

37a号土坑の規模は、長軸長127cm、短軸長111cmである。長軸方位は、 $N-9^{\circ}-W$ 、最深部での深さは20cmである。

37b号土坑の規模は、長軸長107cm、現存短軸長50cmである。長軸方位は、 $N-2^{\circ}-W$ 、深さは10cmである。

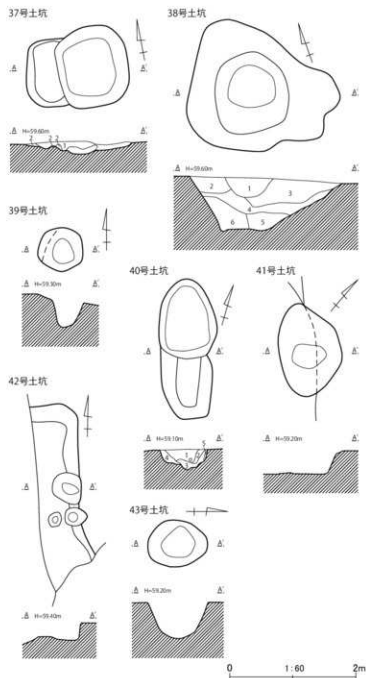
土師器小片が少量出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



第81図 37号土坑出土遺物

第33表 37号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	杯	口径 (13.8) 底径 (9.2) 器高 3.0	平底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外-橙色	3/5残存
2	杯	口径 (15.6) 底径 — 器高 [4.5]	平底。体部は直線的に開く。口縁部はやや外傾し、口唇部内側に弱い沈線が流る。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部中位~底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	1/4残存
3	杯	口径 (12.8) 底径 — 器高 3.8	丸底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片 内外-にぶい橙色	2/5残存
4	須恵器 杯	口径 (16.2) 底径 — 器高 [5.4]	体部はわずかに丸みをもつ。口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片 内外-暗灰黄色	口縁部~ 体部1/3 残存
5	須恵器 高台付 碗	口径 — 底径 7.6 器高 [1.9]	高台部は方形を呈し、外端部が接地する。体部は丸みをもつ。ロクロ成形。	外面-体部下位ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。高台貼付時周辺回転ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-灰黄色	体部下位~ 底部残 存



第82図 37～43号土坑平面・断面図

38号土坑 (第82図、図版24)

A 2 地点北西部の東縁近くの中央で検出した遺構である。平面形は、やや角張った不整形形と見ることができ、上端の、とくに東側は不定形な形に広がっている。北西～南東方向での長さは250cm、北東～南西方向での長さは193cmである。搦鉢形に掘り込まれており、最深部での深さは85cmである。覆土には、大小のロームブロックが不規則に含まれ、埋め戻されたと思しき堆積状態を示す。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

37号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。5～10mm大のロームブロック、10mm大の炭化物ブロックを含み、1～3mm大の焼土粒、土器片を多く含む。
- 2層：にぶい黄褐色土層。20～30mm大のロームブロックを多く含み、3～5mm大の焼土粒、焼土小ブロックを少量含む。

38号土坑土層注記

- 1層：にぶい黄褐色土層。5～20mm大のロームブロックを含む。
- 2層：黒褐色土層。10～15mm大のロームブロックを少量含む。
- 3層：黒褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロック、10～15mm大のロームブロックを少量含む。
- 4層：黒褐色土層。1～5mm大のローム粒、ローム小ブロック、10～40mm大のロームブロックを多量に含む。粉末状のロームを部分的に多く含む。
- 5層：黒色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。
- 6層：黒色土層。10～30mm大のロームブロックを多く含む。

40号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒を含み、ローム小ブロック少量含む。中央下部に暗褐色土のブロックが見られる。
- 2層：黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。
- 3層：黒褐色土層。1・2層に近いが、さらにローム粒が多く、ロームブロックを含む。
- 4層：暗褐色土層。黒褐色土、暗褐色土、ローム粒、ロームブロックの混合土。

39号土坑 (第82図、図版24)

A 2地点北西部の南東半で検出した。1号墓の北西溝の溝壁を壊して造られている。平面形は、不整な円形で、最大径は72cmである。バケツ形に掘り込まれており、底面はやや丸みをもって掘り込まれており、最深部での深さは41cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

40号土坑 (第82図、図版24)

A 2地点北西部の南東半、1号墓の西陸橋部の近くで検出した遺構である。2基の土坑の重複例であろう。調査時点では、2基の土坑と見極めることができなかつたが、断面図でも、1～3層が新しい方の土坑覆土、4層は古い方の土坑覆土と見ることができる。古い方の土坑を40a号土坑、新しい方の土坑を40b号土坑と呼称し、記載する。

40a号土坑の平面形は、かなり不整な隅丸長方形で、長軸長の現存値は97cm、短軸長は83cm、長軸方位はN-18°-Wである。最深部での深さは19cmである。底面には凹凸が見られる。

40b号土坑の平面形は楕円形に近く、長径129cm、短径94cmで、長軸方位は40a号土坑と同じである。最深部での深さは33cmである。断面形は船底形に近く、底面には凹凸が顕著である。

覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

41号土坑 (第82図)

A 2地点北西部の南東半で検出した遺構である。1号墓の南西溝の溝壁を壊して造られている。平面形は、やや不整な楕円形で、長径は147cm、短径は98cmである。確認できた坑壁は急峻に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。断面形は箱葉研になるようである。最深部での深さは37cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

42号土坑 (第82図)

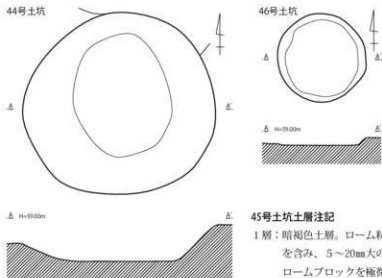
A 2地点北西部の南東端近くで検出した遺構である。1号墓の南東溝を切り、4号溝に切られている。全体の平面形は不明であるが、残存部分は隅丸長方形のような形である。いずれも残存する部分での長さになるが、南北方向での長さは282cm、東西方向での長さは58cmである。最深部での深さは11cmである。東側の坑壁に接して、あるいは近接して、ピットを3個検出しているが、伴うかどうか確定できなかった。土師器小片が数点出土している。4号溝との重複関係から、近世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

43号土坑 (第82図、図版24)

A 2地点北西部の南東端近くで検出した遺構である。平面形は、楕円形で、長径は93cm、短径73cmである。断面形はU字形で、最深部での深さは58cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

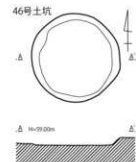
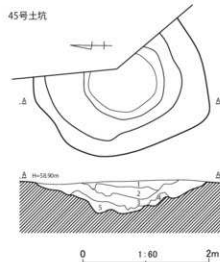
44号土坑 (第83図)

A 2 地点南東部の南東縁近くで検出した遺構である。2号墓の南東溝の中央を壊して造られている。平面形は、不整な円形で、最大径は305cmである。断面形は、坑壁が底面から直線的に大きく開く漏斗形で、底面は平坦である。最深部での深さは57cmである。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



45号土坑 (第83図、図版24)

A 3 地点の北端近くで検出した遺構であり、北東側の一角は、調査範囲外である。平面形は、かなり不整な円形で、北西-南東方向での長さは278cm、北東-南西方向での現存長は143cmである。坑壁がゆるやかに立ち上がり、底面が小さくぼみをなすような形態である。最深部での深さは49cmである。坑壁、底面ともに不規則な凹凸が顕著である。覆土は、ローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土が主である。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



45号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5～20mm大のロームブロックを極微量含む。灰色みの強い暗褐色土がモヤモヤ混入する。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ややローム粒の粒径が大きい。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、5～20mm大のロームブロックが点在する。黒褐色土がモヤモヤ少量混入。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～50mm大のロームブロックの斑状の混合土。

第83図 44～46号土坑平面・断面図

46号土坑 (第83図、図版24)

A 3 地点の北半で検出した遺構である。平面形は、円形で、最大径は140cmである。盆形、皿形に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは11cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

6 溝跡

今回の調査では、A2地点で4条、A3地点で2条の、計6条の溝跡を調査した。

1号溝以外は、総じて南北方向、低位段丘の微傾斜地から彎入する浅谷、あるいは低地部に向かって造られており、排水のための施設と考えてよいであろう。なお、1号溝跡は、1号井戸跡とともに記載した(本書:71~78頁)。

また、3号溝跡に関しては、15号住居跡と結合した小溝と判断されたため、15号住居跡の項にて記載した(本書:31~35頁)。

2号溝跡 (第84図、図版25)

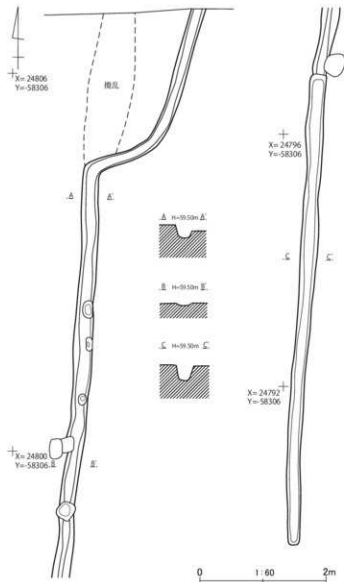
A2地点北西部の中央西寄りで見出した遺構である。8号住居跡を切って造られている。

また、直接重複関係はないが、1号掘立柱建物跡を縦断している。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはその上位の暗褐色土層上面である。調査範囲を彎入する浅谷、あるいは低地部に向かってほぼ南北に走り抜けるが、北寄りの部分で鉤の手に屈折する部分が見られる。南北方向

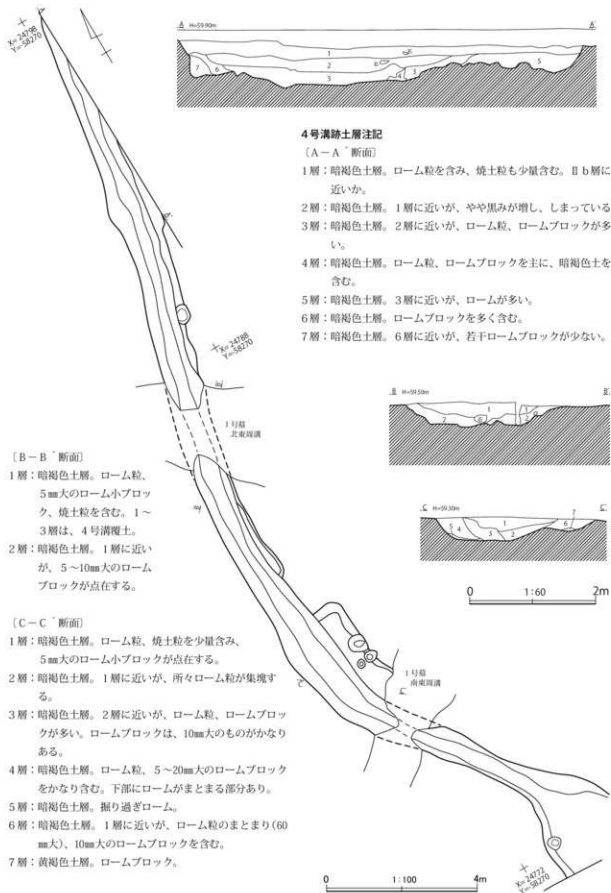
の現存長は、17.95m、溝幅は22~30cmである。断面形はおおむねU字形である。深さは、1、2cmと浅い部分から22cmとしっかり掘り込まれている部分まで区々であるが、全体として溝底は、南へ向かって弱い傾斜をもっており、排水施設の種類と見られる。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

4号溝跡 (第85・86図、第34表、図版25)

A2地点北西部の東縁から南東端にかけて見出した遺構である。20号住居跡、1号墓北東溝、同南東溝、42号土坑を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはその上位の暗褐色土層中である。A2地点北西部の東縁中央から彎曲しながら伸び、同南東端に抜けてゆく南北方向に走る溝跡である。南端は溝幅が広がり、浅くなって、そのまま彎入する浅谷に開口し、途切れるようである。現存長は南北で26.89mである。溝幅は60~150cm、ただし、南端は溝幅が227cmまで広がる。溝壁はゆるい傾斜をもって立ち上がり、溝底はかなり狭くなる。深さは37~44cmである。溝



第84図 2号溝跡平面・断面図



4号溝跡土層注記

[A-A'断面]

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒も少量含む。II b層に近いが。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、やや黒みが増し、しまっている。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、暗褐色土を含む。
- 5層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
- 6層：暗褐色土層。ロームブロックを多く含む。
- 7層：暗褐色土層。6層に近いが、若干ロームブロックが少ない。

[B-B'断面]

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロック、焼土粒を含む。1～3層は、4号溝覆土。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、5～10mm大のロームブロックが点在する。

[C-C'断面]

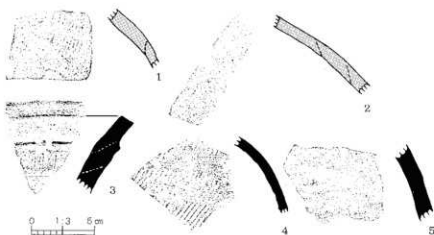
- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を少量含む、5mm大のローム小ブロックが点在する。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、所々ローム粒が集塊する。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。ロームブロックは、10mm大のものがかなりある。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックをかなり含む。下部にロームがまとまる部分あり。
- 5層：暗褐色土層。振り過ぎローム。
- 6層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒のまとまり(60mm大)、10mm大のロームブロックを含む。
- 7層：黄褐色土層。ロームブロック。

第85図 4号溝跡平面・断面図

底は南に向かってかすかに傾斜している。やはり排水のための施設であろう。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土が主になる。土師器小片を中心にかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、中世の遺構と思われる。

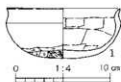
5号溝跡 (第87・88図、第35表、図版25・32)

A3地点北端で検出した遺構で、南端は攪乱により壊され、北端は調査範囲外である。21号住居跡を切つて造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。走向は、ほぼ南北方向、若干西に振れている。現存長は、南北方向で9.3mである。南端に向かってすばまる部分を除いた溝幅



第86図 4号溝跡出土遺物

は207~229cm、南端での溝幅は65cmである。幅広い部分では、溝の掘り直しが行なわれているらしく、東側の平場は、古い段階の溝の痕跡の可能性がある。溝壁はゆるやかに立ち上がり、溝底は狭まり丸みをもっている。最深部での深さは55cmである。覆土は、ローム、ロームブロックを含む暗褐色土である。第87図1のような土師器片などが少数出土しているが、覆土から見て、中世以降の遺構であろう。



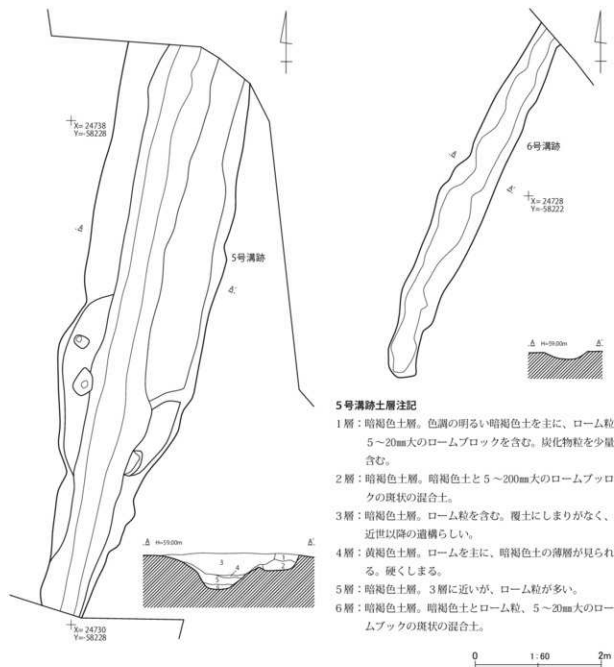
第87図 5号溝跡出土遺物

第34表 4号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法的特徴	調整・裝飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面—ヨコ、ナメの粗いハケ後、編挿波状文。内面—ヨコナデ。	白色(一部長石)・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 外—ぶい赤褐色 内—灰色	
2	常滑窯系 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面—ヨコナデ、磨痕残る。内面—指押さえ、ヨコナデ。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—ぶい赤褐色	
3	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	下端に先端の突き出た穂を有し、口縁部はわずかに外反しながら開く。粘土組織み上げ成形後、ロクロ整形。	外面—回転ナデ後、振幅大きく波長短い波状文。下端に横位の沈線。内面—回転ナデ。磨耗顕著。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外—灰黒色	
4	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面—ナメの平行叩き目後、ヨコナデ。横位の磨痕残る。内面—弧状あるいは青海波線の当て具痕。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—灰色	
5	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面—部分的に極浅い平行叩き目残る。内面—青海波線の当て具痕。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外—灰色	

第35表 5号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法的特徴	調整・裝飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.9 底径 — 器高 5.3	丸底。体部は丸みをもち、口縁部に向かってすばまり、口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位~中位ナデ。体部下位~底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外—明赤褐色	3/4残存



第88図 5・6号溝跡平面・断面図

6号溝跡 (第88図、図版25)

A 3 地点の北半で検出した遺構である。北東端は調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。北東から南西に向かって走る溝跡で、現存長は6.02m、溝幅は42～83cmである。皿状に掘り込まれており、溝壁、溝底の区別も明瞭ではない。深さは10cm前後である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

7 ピット

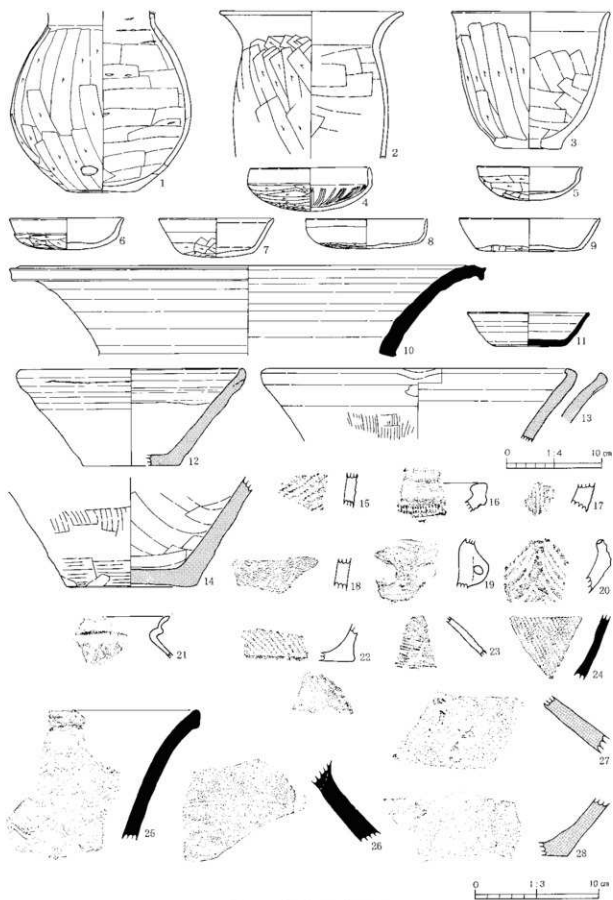
今回の調査では、A 2 地点の西半で多数のピットを検出しているが、とくに西縁寄りの一帯では夥しい数のピットが見られた(第8図)。3・4号掘立柱建物跡として選り分けえた柱穴列以外は、建物

跡の柱穴と見做しうる規則的な配列を見出すことができなかった。しかし、それらのピットに関しては、時期的に近世およびそれ以降に帰属するピットが主となるようであり、集中する場所が特定の範囲に限られ、通常土坑や井戸跡などが集中する範囲と重なって集中すること、上端の平面形が方形、長方形に近い微妙に角張ったピットがかなり含まれること、大きさ、深さから見て柱穴として全く遜色のないピットが多数含まれるものの、そうしたピットは決まって数本しか並ばず、建物跡とすることができないこと、少数ながら礎石の一種と思われる平石や板石が埋置されているものが見られることなど、いくつかの特徴がまとめられる。一部のピットは、耕作痕や作物の跡、樹木、立木の痕跡であろうが、すべてがその種の痕跡ではないであろう。これらのピットが、長期、累代にわたるものであるにせよ、上記した諸特徴を勘案するなら、近世およびそれ以降に関しては、一部の柱を柱穴に埋め、他を柱穴を設けず礎石立ちとする建物や柱穴の並びそのものにある程度自由度のある建物も視野に入れるべきかもしれない。

8 遺構外出土遺物

第36表 遺構外出土遺物観察表(1)

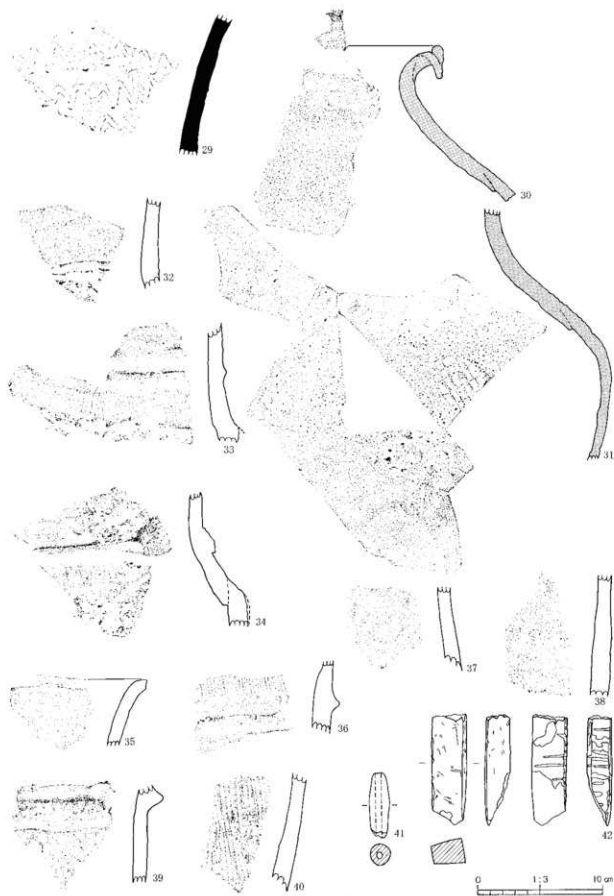
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 底径 器高 [19.2]	胴部は下位に最大径をもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面一頸部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。焼成後の穿孔あり。内面一口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外一明赤褐色	頸部～底部残存
2	甕	口径 底径 器高 [19.3] [15.5]	口縁部は外反する。胴部はわずかに丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～頸部ヨコナデ。頸部～胴部中位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上位～中位ヘラナデ。	白色岩片、角閃石 内～にぶい褐色 外～にぶい褐色	口縁～胴部 中位 1/4残存
3	瓶	口径 底径 器高 16.6 7.1 14.6	口縁部は外反する。胴部は直線的、下位にわずかに丸みをもつ。平底。孔径2cmの円孔が開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。口縁部下位～胴部ヘラケズリ。底部ナデ。内面一口縁部～胴部上位ヨコナデ。体胴部上位～下位ヘラナデ。端部ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外一明赤褐色	1/2残存
4	坏	口径 底径 器高 12.5 — 4.6	丸底。体部は丸みをもち、稜をもつ。口縁部はやや内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部～底部放射状ヘラミガキ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外一褐色	4/5残存
5	坏	口径 底径 器高 11.0 — 3.6	丸底。体部は弱い稜をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外一褐色	口縁部一部欠損
6	坏	口径 底径 器高 [12.0] — [3.3]	丸底。体部は弱い稜をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外一褐色	1/3残存
7	坏	口径 底径 器高 [12.0] 7.4 4.1	平底。体部～口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一明赤褐色	1/3残存
8	坏	口径 底径 器高 12.8 — 3.1	平底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は直立的。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、礫、雲母 内外一褐色	2/3残存
9	坏	口径 底径 器高 14.9 11.1 3.5	平底。体部から口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外一赤褐色	1/2残存
10	須恵器 甕	口径 底径 器高 [50.2] — [9.6]	口縁部は外反する。口縁端部は縁部をもつ。ロクロ成形。	外面～ロクロナデ。内面～ロクロナデ。頭部の欠け口の一部に、摺って平らになった部分あり。	白色・黒色の岩片、礫 内外一灰色	口縁部～頸部1/5残存
11	須恵器 坏	口径 底径 器高 [12.8] (7.0) 3.6	平底。体部は直線的に開く。口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部～体部ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面～ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外一灰白色	2/5残存
12	在地系 片口鉢	口径 底径 器高 (23.6) (9.9) 10.2	口縁部はわずかに内彎する。体部は直線的に開く。平底。ロクロ成形。	外面一口縁部ロクロナデ。体部ナデ。底部回転糸切り。内面～ロクロナデ。体部から底部は摺り痕が顕著。	白色・黒色の岩片 内外一灰色	1/6残存
13	在地系 片口鉢	口径 底径 器高 (31.4) — [7.7]	片口。体部は直線的に開く。口唇部内側が内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ロクロナデ。体部ハケメ。内面～ロクロナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内外一灰色	口縁部～底部1/6残存



第89圖 遺構外出土遺物(1)

第37表 遺構外出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
14	山茶碗 蓋系 片口鉢	口径 底径 器高 (13.8) [11.6]	平底。胴部は直線的に開く。ロコロ成形。	外面-胴部下位へラナゲ。底部左回転糸切り。内面-胴部下位へ底部ヘラナゲ。	白色・褐色の岩片・雲母 内-ぶい・褐色 外-ぶい・黄褐色	胴部下位へ 底部 1/3残存
15	深鉢	口径 底径 器高	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-1Rの単節縄文。内面-ナゲ。	白色・灰色の岩片などの細砂、繊維 内外-ぶい・褐色	黒浜式?
16	深鉢	口径 底径 器高	口縁部は屈折して立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-一端部はヨコナゲ。屈折部以下には連続爪形文、沈線。内面-ナゲ。	白色・灰色・黒色の岩片、角閃石などの大小砂粒 内外-ぶい・褐色	棚板式
17	深鉢	口径 底径 器高	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-タテの条線。内面-ナゲ。	白色・灰色の岩片、角閃石などの大小砂粒 内外-ぶい・黄褐色	加曾利E式
18	甕	口径 底径 器高	胴部上位はやや丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-5条一単位の櫛描波状文3段以上。内面-ヨコのミガキ。	白色・灰色の岩片、角閃石などの細砂 内外-黒褐色	樽式
19	浅鉢	口径 底径 器高	口縁部は短く立ち上がり、把手が付く。粘土組織み上げによる成形。	外面-粘土組織を貼り合わせた把手。内面-ナゲ。	白色・灰色の岩片、角閃石などの大小砂粒 内外-ぶい・黄褐色	加曾利E式
20	深鉢	口径 底径 器高	大波状口縁。波頂部先端はくぼむ。口縁部は内傾して立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-波頂部を軸に、端部に沿い4、5条の沈線。屈折部にはナナメの刻み目か? 磨耗によりその他の調整・装飾不明。内面-磨耗顕著。	白色・灰色の岩片、雲母などの細砂多量 内外-黒褐色	高井東式
21	甕	口径 底径 器高	口縁部は屈曲し、肩部が張る。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部はヨコナゲ、以下ナナメのハケ。内面-ヨコナゲ。	白色・灰色の岩片、雲母などの細砂 内外-暗褐色	S字状口縁付甕
22	甕	口径 底径 器高	底部から胴部へ内反り気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-1Rの単節縄文(付加条の可能性あり)。底面に木葉痕。内面-ヨコのナゲ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外-ぶい・褐色	弥生時代後期
23	壺	口径 底径 器高	肩部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-櫛描波状文、同直線文。櫛描直線文は6条一単位2段残存。磨耗顕著。内面-ナナメのナゲ。	白色(一部長石)・灰色の岩片などの細砂多量 外-ぶい・褐色 内-灰褐色	バレス壺
24	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面-ナナメの平行叩き後、ナナメの浅いハケ。内面-青海波様の当て具痕。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの細砂 外-灰色 内-灰白色	
25	須恵器 甕	口径 底径 器高	口縁部はゆるやかに外反し立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、ロコロ整形。	外面-回転ナゲ後、3段の波長の長い櫛描波状文。内面-回転ナゲ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-灰色	11住周辺住居群上層
26	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部は直線的に立ち上がり、屈折して頸部に連なる成形。粘土組織み上げによる成形。	外面-破片中央に沈線。以下振幅の大きい波状文。内面-ヨコ、ナナメのナゲ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 外-灰黒色 内-灰色	
27	常滑窯 系 甕	口径 底径 器高	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面-緑灰色の釉が全面にかけられている。部分的にコブ状に釉が固着。内面-指押え、ヨコナゲ。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒、小礫 外-緑灰色 内-ぶい・褐色	
28	常滑窯 系 甕	口径 底径 器高	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面-部分的にナナメの浅いハケ。内面-ヨコの浅いハケ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外-ぶい・赤褐色	
29	須恵器 甕	口径 底径 器高	口縁部は外反し立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面-回転ナゲ後、4段の櫛描波状文。内面-回転ナゲ。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-灰色	
30	常滑窯 系 甕	口径 底径 器高	口縁部は折返され、頭部がくぼれる。粘土組織み上げ成形後、叩き、回転台上で整形。	外面-口縁部へ頸部は回転ナゲ。胴部に格子目の叩き目、あるいは押印文。自然釉が所々付着。内面-ヨコナゲ。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-ぶい・赤褐色	3号井戸跡出土の可能性有。内外-ぶい赤褐色。31と同一個体。



第90図 遺構外出土遺物(2)

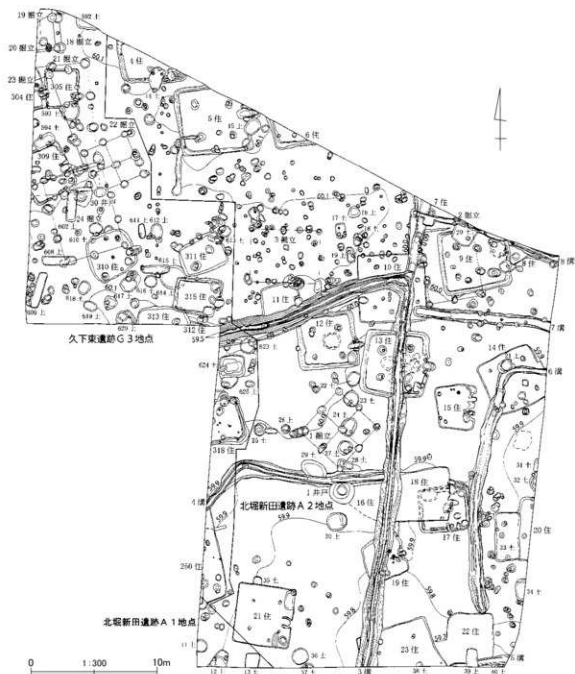
第38表 遺構外出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
31	常滑系 甕	口径 底径 器高	— — —	頸部がくびれ、胴部は大きく張る。粘土組織み上げ成形後、叩き、回転台上での整形。	外面-胴部に格子目の叩き目、あるいは押印文、自然輪が所々付着。内面-ヨコナデ。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい赤褐色	3号井戸跡出土の可能性有、30と同一個体。
32	形象埴輪	口径 底径 器高	— — —	粘土組織み上げによる成形。	外面-浅いタテハケ。内面-タテの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい褐色	人物埴輪? 33・34・38と同一個体?
33	形象埴輪	口径 底径 器高	— — —	下部に向かって開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-中位に突帯、突帯両脇ヨコナデ、それ以外は浅く粗いタテハケ。内面-指押え、タテの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい褐色 内-灰白色	人物埴輪? 32・34・38と同一個体? 11住周辺
34	形象埴輪	口径 底径 器高	— — —	破片下半は膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面-中位に突帯、突帯両脇ヨコナデ、それ以外は浅く粗いタテハケ、突帯上に不整形円形の(部品の)刺離痕が見られる。内面-タテの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい褐色	人物埴輪? 32・33・38と同一個体? 11住周辺
35	円筒埴輪	口径 底径 器高	— — —	口縁部はゆるやかに外反し、開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-端面はヨコナデ、以下タテハケ。内面-端面はヨコナデ、以下ナメのハケ。	白色・灰色の岩片、光沢のある片岩などの大小砂粒 内外-にぶい褐色	
36	円筒埴輪	口径 底径 器高	— — —	体部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-先端の尖った突帯、突帯両脇はヨコナデ、その他はタテハケ。内面-ナメのナデ、ハケ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい褐色	
37	形象埴輪?	口径 底径 器高	— — —	微妙に外反し立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-不揃いなナメのハケ。内面-タテの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片、石英などの大小砂粒、小礫 外-にぶい褐色 内-にぶい褐色	11住周辺
38	形象埴輪	口径 底径 器高	— — —	粘土組織み上げによる成形。	外面-浅いタテハケ。内面-タテの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい褐色	人物埴輪? 32~34と同一個体? 11住周辺
39	円筒埴輪	口径 底径 器高	— — —	粘土組織み上げによる成形。	外面-先端の丸い突帯、突帯両脇ヨコナデ、以下タテハケ。内面-指押え、ナメのナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-明赤褐色	11住周辺
40	円筒埴輪	口径 底径 器高	— — —	粘土組織み上げによる成形。	外面-タテハケ。内面-タテの指ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい褐色	11住周辺
No.	器種	法量(cm)・特徴					備考
41	土鋪	長さ(5.1)、厚さ1.6、重さ13.4g 胎土:白色の岩片 色調:褐色					一部欠損
42	砥石	長さ8.8、幅2.8、厚さ2.0、重さ67.3g					一部欠損

第IV章 北堀新田遺跡A 2・B地点の調査

第1節 調査の概要

北堀新田遺跡は、男堀川と女堀川にはさまれた低位段丘上に位置する集落遺跡である。北堀新田前遺跡(本書第三章)の旧道を挟んだ北側に位置し(調査当時)、次章で報告する久下東遺跡とは、西側で境を接する位置にある。これら3遺跡に、さらに南西側、西側の久下前遺跡、北堀久下塚北遺跡を加



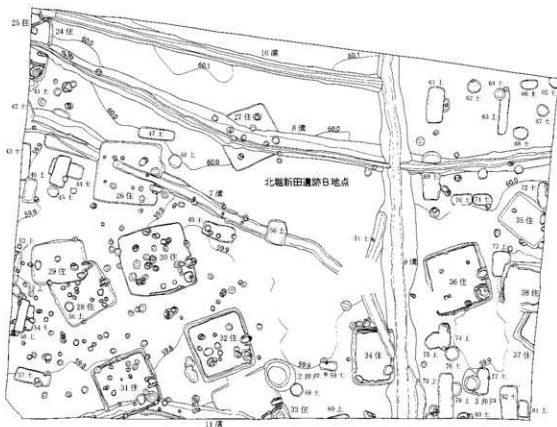
第91図 北堀新田遺跡A 2・B地点全体図

えた5つの遺跡は、遺跡名を異にするが、ひとつながりの遺跡であり、同じ低位段丘上に切れ目なく広がる、古墳時代前期から奈良・平安時代、あるいは中世にかけての大規模な集落跡である。この集落跡の範囲は、住居跡の分布からみて、南北200m、東西500mに及ぶものである。北堀新田遺跡は、この大規模な集落跡の北東部分であり、今回報告するA2・B地点は、北堀新田遺跡の西半の一角である。

北堀新田遺跡では、平成21・22年度に区画整理事業に関連する調査がA1・A2・B地点で、また平成21・23年度に個人住宅の建築に先立つ調査が2箇所で行われている。この内A1地点および後者2箇所の調査に関しては、すでに報告書が刊行されている(松本・的野 2010、佐々木 2010、大熊 2013)。ここに報告するのは、平成21・22年度に発掘調査を実施したA2・B地点についてである(第91図)。報告する調査地点の面積は、A2地点が992㎡、B地点が1,271㎡である。旧道により両地点は、東西に分かれているが、以下の報告では、両地点を一括し、各遺構単位に報告することにした。

なお、次章で報告する久下東遺跡G3地点(本書第V章)との境については、調査時の境が多数の遺構を寸断しているため、変更を加えている。

以下に記載する遺構は、A2・B地点に合わせて、竪穴住居跡35軒、掘立柱建物跡5棟、井戸跡1基、土坑69基、溝跡9条、多数のピットである。



第2節 検出された遺構と遺物

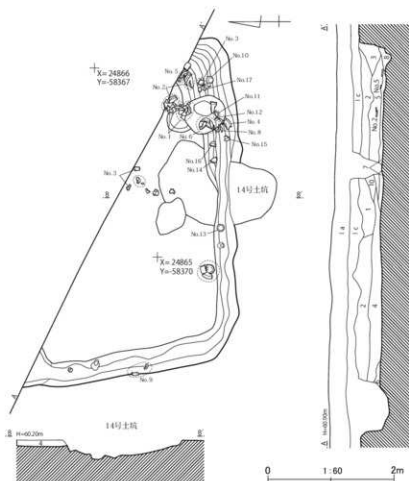
1 竪穴住居跡

4号住居跡（第92・93図、第39・40表、図版36・69）

A2地点北西端で検出した遺構である。南壁中央を14号土坑により壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

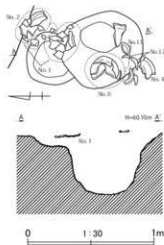
本来は、東壁側にカマドを有する隅丸長方形の住居跡と見て無理はないであろう。規模は、主軸方向で4.50m、副軸方向での現存長は2.91mである。主軸方位はN-82°-E前後と推定できる。床面はほぼ平坦で、床面中央部分は明瞭に硬化している。残存部分の壁際には、壁溝が巡らされている。南東隅脇の土坑は、貯蔵穴であろう。平面形は歪な円形で、U字状に掘り込まれている。坑壁には、掘削痕らしき直線的で細かい痕跡が残されている。最大径は69cm、深さは50cmである。覆土は、ロームを含む暗褐色土が主になるが、一部の覆土に粘土のブロックが含まれる。

貯蔵穴周辺を中心に、かなりの数の土師器が出土している。第93図1・2・4・6などの甕・碗・坏は、貯蔵穴の上層から、19の紡錘車は、西壁側の壁溝から出土している。平安時代の住居跡であろう。

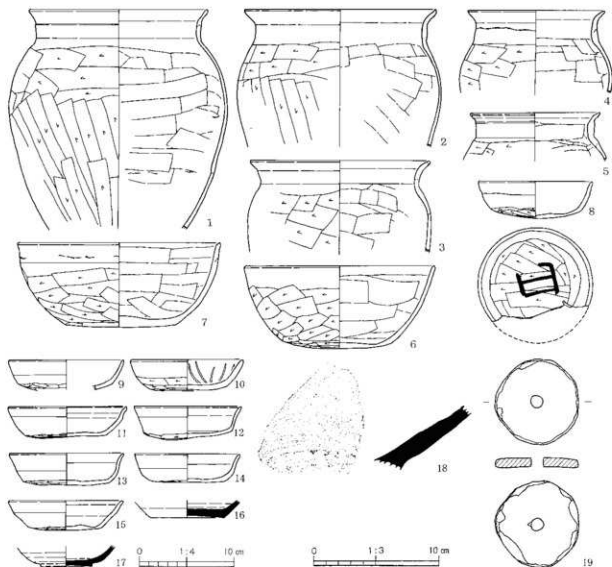


4号住居跡土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともにない。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗灰色粘土層。暗灰色粘土ブロックを均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化微粒を微量含む。
- 5層：暗茶褐色土層。暗灰色粘土ブロックを多量に、ロームブロックを均一に含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 8層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に、炭化ブロックを微量含む。



第92図 4号住居跡平面・断面図



第93図 4号住居跡出土遺物

第93表 4号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (18.8) 底径 — 器高 [23.3]	口縁部はコの字状。胴部上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫、雲母 内外—明赤褐色	口縁部へ胴部下位 1/3残存
2	甕	口径 20.2 底径 — 器高 [14.5]	口縁部はコの字状。胴部上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	口縁部へ胴部中位 1/2残存
3	甕	口径 (19.0) 底径 — 器高 [9.7]	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/2残存
4	甕	口径 (14.4) 底径 — 器高 [8.7]	口縁部はコの字状。胴部上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色、外—赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/3残存
5	甕	口径 (13.6) 底径 — 器高 5.1	口縁部はコの字状。胴部上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—灰褐色	口縁部へ胴部上位 2/5残存
6	鉢	口径 20.1 底径 11.5 器高 8.7	平底。体部から口縁部はやや丸みをもって開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	3/4残存

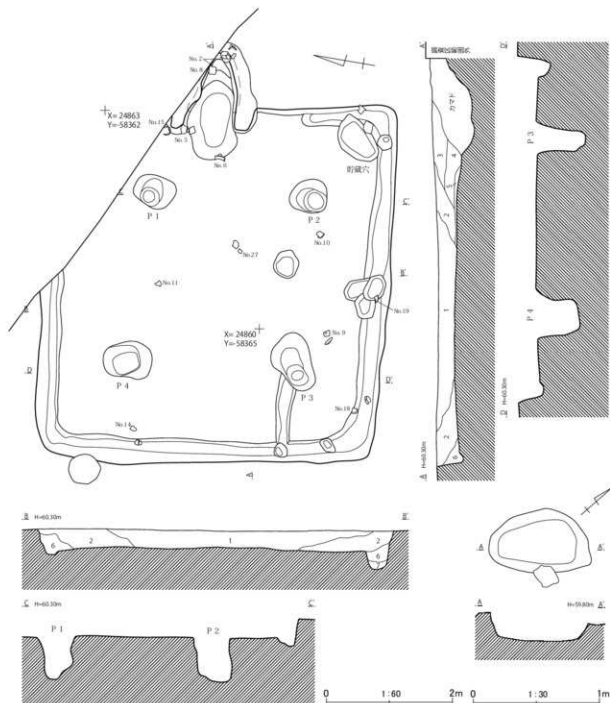
第40表 4号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
7	鉢	口径(21.3) 底径11.7 器高8.9	平底。体部はやや丸みをもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外-明赤褐色	3/5残存
8	坏	口径12.0 底径— 器高3.9	丸底気味。体部から口縁部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部中位ナデ。体部中下位ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、礫 内外-にぶい赤褐色	4/5残存 外面底部に墨書
9	坏	口径12.0 底径9.9 器高[3.2]	丸底気味。体部から口縁部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部中位ナデ。体部下位ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-にぶい褐色	口縁部へ 底部中位 1/2残存
10	坏	口径11.8 底径8.0 器高3.3	平底。体部は立ち上がりやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部放射状暗文。体部螺旋状暗文。	白色・黒色の岩片、角閃石、雲母 内外-褐色	完形
11	坏	口径12.4 底径8.6 器高3.3	平底。体部は僅かに丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面-口縁部へ体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外-にぶい褐色	9/10残存
12	坏	口径11.3 底径9.4 器高3.5	平底気味。体部から口縁部はわずかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部中位ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外-にぶい褐色	2/3残存
13	坏	口径12.0 底径9.2 器高3.4	平底気味。体部から口縁部はわずかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部中位ナデ。体部下位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-にぶい褐色	ほぼ完形
14	坏	口径(11.0) 底径(7.8) 器高3.0	平底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部はやや外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上へ中位ナデ。体部下位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-にぶい褐色	1/3残存
15	坏	口径11.9 底径7.7 器高3.1	平底気味。体部から口縁部はわずかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片 内外-明赤褐色	2/3残存
16	須恵器 坏	口径— 底径(7.8) 器高[1.9]	平底。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面-体部下位ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面-ロクロナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫、海綿状骨針 内外-灰黄色	体部へ底部 1/2残存
17	須恵器 坏	口径— 底径5.5 器高[2.2]	平底。体部は丸みをもって大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-体部下位ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面-ロクロナデ。	白色・黒色・褐色の岩片 内外-黄灰色	体部下位へ 底部 1/3残存
18	須恵器 甕	口径— 底径— 器高—	底部へ胴部にかけて微妙に丸みもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形後、叩き、回転台上での整形。	外面-浅いナメの平行叩き目。底部は回転ナデ。底面は剥落。一部に調整痕。内面-青海波様の当て具痕。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-灰色	
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
19	土製 紡錘車	径6.55、孔径1.0、厚さ0.7、重さ43.1g	内外-右回転糸切り	胎土：白色・褐色の岩片、礫 色調：	ほぼ完形	

5号住居跡(第94~97図、第41~43表、図版36・37・69・70)

A 2地点北西端近くで検出した遺構である。東壁の一部を15号土坑により壊され、北東隅の周辺は調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で5.67m、副軸方向で5.58m、主軸方位はN-86°-Eである。床面はほぼ平坦で、壁溝際を除いて、ほぼ全面硬化している。カマドの南脇を除いて、壁溝が巡らされている。南壁側の壁溝、西壁側の壁溝の側壁、底面には、掘削時の工具痕と思われる痕跡がみとめられる。P1~P4は主柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1・P4が65cm、P2・P3が68cmである。P3の上端から西壁の壁溝をつないで、間仕切り状の浅い小溝が掘られている。P3は、柱が抜去されたのか側壁が楕円形に広がられている。西南東隅に接する土坑は、貯蔵穴であろう。平面形はやや歪な楕円形で、鍋底形に掘り込まれている。



5号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、ロームブロックを微量含む。
 2層：黒褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。
 3層：暗褐色土層。焼土粒を均一に、ローム粒を微量含む。
 4層：暗褐色土層。焼土粒、焼土ブロックを均一に、ロームブ

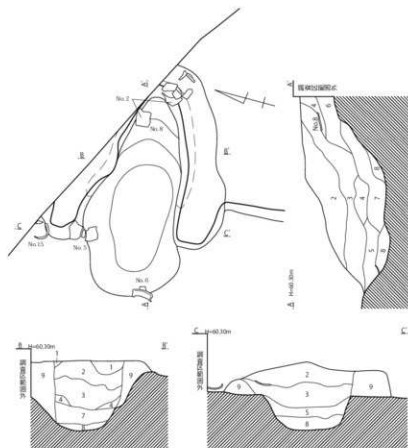
ロックを微量含む。

- 5層：黒灰色土層。炭化物粒を均一に、ローム粒を微量含む。
 6層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量含む。
 7層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともにない。

第94図 5号住居跡平面・断面図(1)

長径は80cm、短径は50cm、深さは23cmである。

カマドは、東壁の中央、やや北寄りに付設されている。燃焼部の平面形は、不整な楕円形で、全



第95図 5号住居跡平面・断面図(2)

長は167cm、中央での横幅は80cmである。縦断面形は船底形に近いが、奥壁、底面には段が見られる。側壁から奥壁にかけて被熱赤化の痕跡が著しい。袖は、淡灰色の粘土を突き固めて造られている。

覆土は、ローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土が主になる。

カマド内、カマドの周辺を中心に、土師器が出土している。円面硯は、覆土中から出土した。出土遺物、覆土から見て、平安時代の住居跡と考えられる。

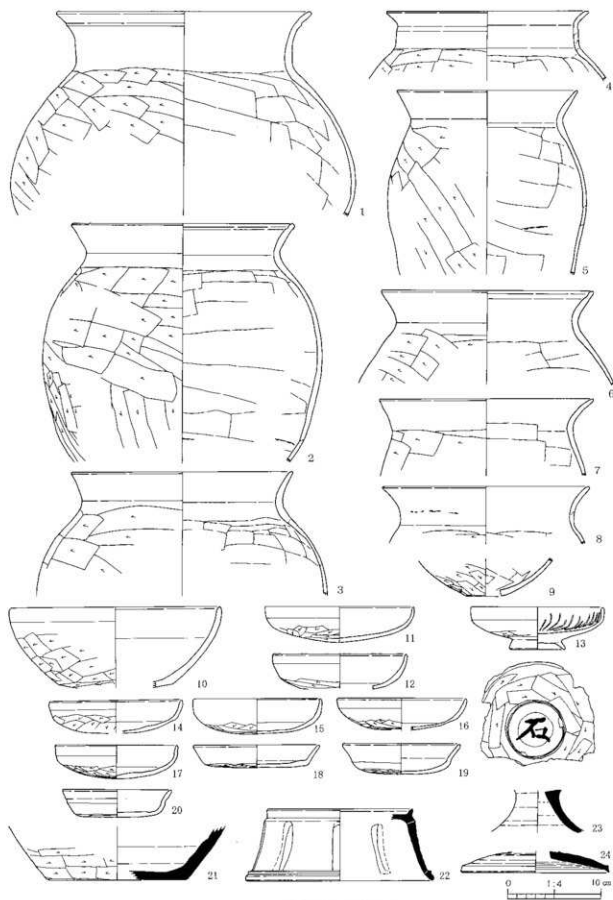
5号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗灰色土層。淡灰色粘土ブロック、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗灰色土層。淡灰色粘土ブロックを多量に、焼土粒、ローム粒を微量含む。
- 3層：暗灰色土層。淡灰色粘土ブロック、焼土ブロックを均一に含む。
- 4層：暗赤褐色土層。焼土ブロックを多量に含む。
- 5層：黒灰色土層。淡灰色粘土ブロック、炭化物粒、焼土粒を均一に含む。
- 6層：淡灰色土層。淡灰色粘土ブロックを多量に含む。
- 7層：黒灰色土層。炭化物粒を均一に、淡灰色粘土ブロック、焼土ブロックを微量含む。
- 8層：暗灰色土層。ロームブロックを均一に、淡灰色粘土ブロックを微量含む。
- 9層：淡灰色粘土層。淡灰色粘土ブロックを多量に含む。カマド袖構築材。

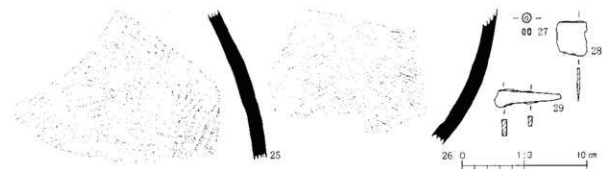
0 1:30 1m

第41表 5号住居跡出土遺物観察表(1)

№	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整・裝飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(27.0) 底径器高 [21.6]	口縁部は直立して上位が外反し、倭をもつ。胴部は大きく丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、雲母 内一に深い褐色 外一明褐色	口縁部へ胴部中位1/4残存
2	甕	口径(23.3) 底径器高 [25.2]	口縁部は外反する。口唇部内側に凹線がめぐる。胴部は丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外一褐色	口縁部へ胴部中位1/5残存
3	甕	口径(23.4) 底径器高 [13.1]	口縁部は外反する。口唇部は大きく丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、籾	口縁部へ胴部中位2/5残存
4	甕	口径(21.2) 底径器高 [7.4]	口縁部はコの字状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、籾	口縁部へ胴部上位1/5残存



第96图 5号住居跡出土遺物(1)



第97図 5号住居跡出土遺物(2)

第42表 5号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
5	甕	口径 (19.2) 底径 器高 [19.5]	口縁部は外傾する。胴部上位に最大径をもつ。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。	白色・褐色の岩片・角閃石、雲母、礫 内外-にぶい赤褐色	口縁部へ胴部下位 1/6残存
6	甕	口径 (22.4) 底径 器高 [9.9]	口縁部は外反する。口唇部内側に凹線がめぐる。胴部は丸みをもつ。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片 内外-明赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/5残存
7	甕	口径 22.6 底径 器高 [8.1]	口縁部は外反する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片 内外-内外-橙色	口縁部へ胴部上位 1/2残存
8	甕	口径 (21.8) 底径 器高 [6.1]	口縁部は外反する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片 内外-赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/2残存
9	甕	口径 底径 器高 3.2 4.0	胴部は大きく丸みをもつて開く。粘土組織積み上げによる成形。	外面-体部へ底部ヘラケズリ。内面-体部へ底部ヘラケズリ。	角閃石 内外-明赤褐色	体部へ底 部破片
10	鉢	口径 (22.0) 底径 (12.1) 器高 [8.5]	平底。体部はやや丸みもち、口縁部は内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位以下ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。以下ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-橙色	1/6残存
11	坏	口径 15.8 底径 器高 3.8	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	1/4残存
12	坏	口径 (14.1) 底径 器高 [3.7]	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、雲母 内外-にぶい黄褐色	口縁部へ体部2/3 残存
13	台付碗	口径 (13.9) 台端径 5.7 器高 4.4	体部下半は丸みをもつ。粘土組織積み上げによる成形。	外面-体部ヘラケズリ。台部ヨコナデ。内面-台部内面ナデ。台部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	1/2残存 台部内面に墨書「石」
14	坏	口径 13.8 底径 器高 3.5	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部へ体部下位ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外-にぶい褐色	5/8残存
15	坏	口径 13.5 底径 器高 3.2	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	7/8残存
16	坏	口径 13.6 底径 器高 3.3	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-橙色	5/9残存
17	坏	口径 12.9 底径 器高 3.6	丸底。口縁部は直立する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-にぶい橙色	2/3残存
18	坏	口径 13.4 底径 器高 2.4	平底。体部は直線的に開く。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部へ体部下位ヨコナデ。体部下位へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	黒色の岩片、角閃石 内外-にぶい赤褐色	2/3残存
19	坏	口径 (12.6) 底径 器高 3.2	平底。体部は立ち上がり丸みをもつ。口縁部はやや内傾する。粘土組織積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外-にぶい橙色	1/4残存

第43表 5号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
20	坏	口径 11.4 底径 8.8 器高 [2.9]	平底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-褐色	3/5残存
21	須臾器 甕	口径 — 底径 (15.0) 器高 [5.7]	平底。胴部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面-胴部下位ナデ。胴部最下端~底部ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫 内外-灰色	1/4残存
22	須臾器 円面硯	視面部径 (15.5) 底径 (20.0) 器高 [7.5]	透かしの形状はやや端部に丸みをもつ長方形か、8~9個。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色・褐色の岩片、礫、海綿状骨針 内外-灰色	視面部~脚台部分 1/5残存
23	須臾器 高坏	口径 — 底径 — 器高 [4.6]	脚部はハの字状に大きく開く。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色・褐色の岩片 内外-灰黄色	脚部残存
24	須臾器 蓋	口径 (16.1) 底径 — 器高 [2.2]	口縁部は短く折れる。ロクロ成形。	外面-天井部ロクロナデ。内面-体部~口縁部ロクロナデ。剥離あり。	白色・黒色・褐色の岩片、礫 内外-灰黄色	1/3残存
25	須臾器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面-ナナメ、ヨコのやや不規則な平行叩き目。内面-ナナメ、ヨコのナデ。部分的に浅い青海波様の当て具痕。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-灰色	
26	須臾器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面-ナナメの不規則な平行叩き目。内面-弧状、あるいは青海波様の当て具痕。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-灰色	
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
27	石製品 白玉	長さ4.5、幅4.5、厚さ3.0、重さ0.1g				完形
28	鉄製品 刀子?	長さ(2.45)、幅2.6、厚さ0.2、重さ5.1g				破片
29	鉄製品	長さ5.0、幅1.3、0.8、厚さ0.4、0.3、重さ5.6g				破片

6号住居跡(第98・99図、第44表、図版37)

A2地点北西端近くで検出した遺構である。北東側の大半が調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

床面が高低2面あり、高い床面の住居の埋没後、規模が小さく、より深い住居を入れ子状に設けている。古い方の住居跡を6a号住居跡とし、新しい方の住居跡を6b号住居跡とする。

6a号住居跡の平面形は、方形、あるいは長方形に近い形態



第98図 6号住居跡出土遺物

第44表 6号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 — 底径 11.0 器高 2.0	丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面-ヘラケズリ。内面-ナデ。	褐色の岩片、角閃石 内外-褐色	体部下位~底部 3/5残存
2	須臾器 坏	口径 8.8 底径 — 器高 [1.8]	平底。体部下端に稜をもつ。ロクロ成形。	外面-体部ロクロナデ。底部右回転糸切り後周辺部右回転ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、礫、海綿状骨針 内外-灰色	体部~底部残存
3	甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はゆるやかに外反し開く。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面-調整痕と思われる細線状の擦痕。内面-ヨコのナデ。	白色・灰色の岩片、雲母、角閃石などの細砂 内外-にぶい黄褐色	

であろうか。周辺の住居跡から類推すれば、方形、長方形で、東側にカマドを有する形態の可能性が高いであろう。規模は、いずれも現存値になるが、南北方向で2.76m、東西方向で3.23mである。南壁が指す方位は $N-84^{\circ}-E$ である。第98図2の須恵器坏は、西壁際から出土している。

6b号住居跡の平面形も同様であろう。規模は、現存値で、南北方向が1.75m、東西方向が2.16mである。南壁が指す方位は、 $N-87^{\circ}-E$ である。床面はほぼ平坦であるが、硬化は顕著ではない。南壁中央近くに深さ28cmの円形のピットがあるが、柱穴とするには位置的に無理がある。土師器片が少数出土している。

覆土は、ローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土が主になるが、6b号住居跡の覆土の一部には、焼土がやや目立つようである。

出土物、覆土から見て、どちらの住居跡も奈良・平安時代の住居跡と考えられる。

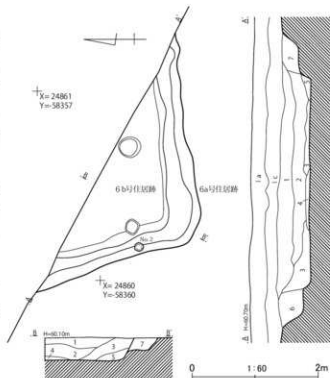
7号住居跡 (第100・101図、第45表、図版37・70)

A2地点の北東半、北縁沿いで検出した遺構である。2号掘立柱建物跡のP1、20号土坑、3・8号溝に壊されており、北東側の大半が調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形、あるいは長方形に近い形態になろうか。規模は、いずれも現存値になるが、南北方向で2.85m、東西方向で2.51mである。南壁が指す方位は $N-83^{\circ}-E$ である。床面はほぼ平坦で、中央に近い部分がわずかに硬化している。西壁の一部には、壁溝が掘られている。第101図のほぼ中央のピットは主柱穴であろう。平面形は、やや歪な円形で、先すぼまりに掘

第45表 7号住居跡出土遺物観察表

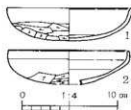
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 13.1 底径 — 器高 3.4	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	3/4残存
2	坏	口径 12.7 底径 — 器高 [3.6]	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部中位ナデ。体部下位ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色の岩片、角閃石 内外—褐色	口縁部～体部1/3残存



6号住居跡土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒を微量含む。1～5層は、6b号住居跡覆土。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土ブロック、ロームブロックを微量含む。
- 3層: 暗茶褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 4層: 暗茶褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 5層: 暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 6層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。6・7層は、6a号住居跡覆土。
- 7層: 暗茶褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを均一に含む。

第99図 6号住居跡平面・断面図



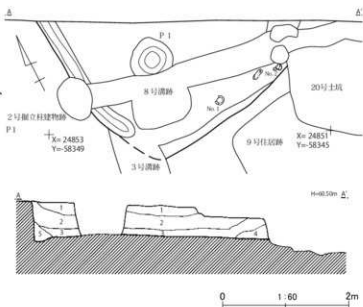
第100図 7号住居跡出土遺物

り込まれている。最大径は66cm、深さは61cmである。

覆土は、ローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土、暗茶褐色土が主になるが、全体に焼土粒、ないしは焼土ブロックが含まれる。

南壁近くで土師器坏(第100図1)や編物石が出土している。また、覆土中からかなりの量の土師器片が出土している。

出土遺物、覆土から見て、奈良時代の住居跡であろうか。



8号住居跡 (第102・103図、第46・47表、図版38・70)

A2地点北東端近く検出した遺構である。北側の大半が調査範囲外であり、9号住居跡、8号溝に壊されているため、三角形のわずかな範囲の床面が残るのみである。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

北西-南東方向での長さは1.62m、北東-南西方向での長さは1.35mである。壁の立ち上がりはしっかりしており、床面は明瞭な平坦面をなし、硬化している。南東壁脇のビットは貯蔵穴の可能性もあるのかもしれない。平面形は、楕円形で、長径69cm、短径58cm、深さは26cmである。このビットの上部、周りに完形に近い土師器などがまとまって出土している。第103図3・4の甔や坏は、ビット上部出土である。

出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期の住居跡と考えられる。

7号住居跡土層注記

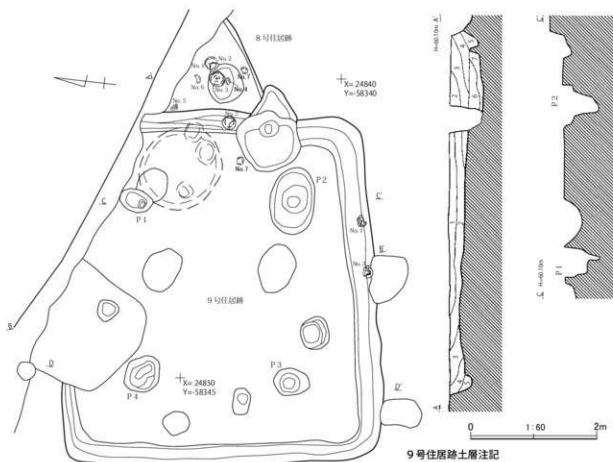
- 1層：暗茶褐色土層。焼土粒を均一に、焼土ブロック、ローム粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

第101図 7号住居跡平面・断面図

9号住居跡 (第102・104・105図、第48表、図版38・39・70)

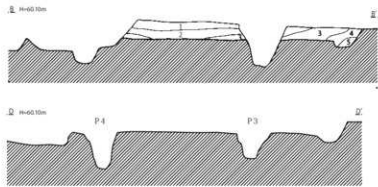
A2地点東端近くで検出した遺構である。8号住居跡を切り、2号掘立柱建物跡のP5・6、P8・9・11、8号溝跡、20号土坑に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。平面形は、方形である。規模は、主軸方向で5.48m、副軸方向で5.17mである。主軸方位はN-80°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央部分を中心に硬化している。壁溝が全周している。P1~P4は主柱穴であろう。上端での平面形は、やや不整な楕円形である。深さは、P1が57cm、P2が57cm、P3が42cm、P4が55cmである。

カマドは、東壁の南東隅にかなり寄った位置に付設されている。燃焼部の平面形は、不整な隅丸方形で、奥壁には、煙道に連なる舌状の出っ張りがある。カマドの全長は136cm、中央での横幅は97cmである。縦断面形は船底形に近いが、奥壁には段が見られる。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著では



9号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
 - 2層：暗褐色土層。ローム粒均一に、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒微量含む。
 - 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、焼土粒を微量含む。
 - 4層：黒褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。
 - 5層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
 - 6層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。しまりは強い。
 - 7層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、灰白色粘土粒を微量含む。しまりは強い。
- 6・7層は、床下土坑覆土。



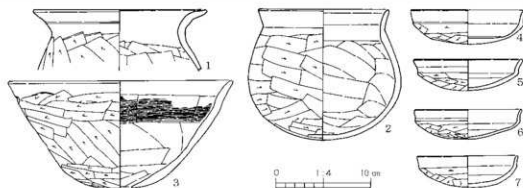
第102図 8・9号住居跡平面・断面図

第46表 8号住居跡出土遺物観察表(1)

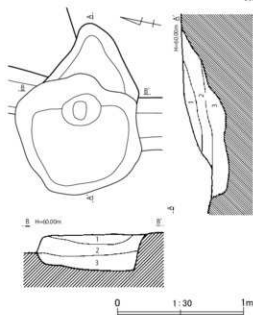
№	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 18.2 底径 ー 器高 [6.5]	口縁部は外反し、中に稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上位へラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上位へラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石。内外一にぶい黄褐色	口縁部へ胴部上位残存
2	壺	口径 13.7 底径 ー 器高 13.9	口縁部は外反する。胴部は球状を呈す。丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部へラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位へ底部へラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、燧、雲母 内外一褐色	7/8残存
3	瓶	口径 23.6 孔径 1.9 器高 11.4	底部に径2cmの円孔。底部には丸みをもつ。体部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内一明赤褐色 外一褐色	完形

第47表 8号住居跡出土土器観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
4	環	口径 12.0 底径 ー 器高 3.6	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内-明赤褐色 外-橙色	完形
5	環	口径 (11.4) 底径 ー 器高 3.3	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母、礫 内外-橙色	2/5残存
6	環	口径 11.2 底径 ー 器高 3.2	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中～下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	1/2残存
7	環	口径 10.5 底径 ー 器高 3.3	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	4/5残存



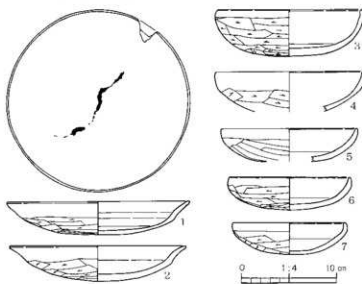
第103図 8号住居跡出土土器



9号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、ロームブロックを微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、焼土ブロックを微量含む。

第104図 9号住居跡平面・断面図



第105図 9号住居跡出土土器

ない。袖は見られなかった。東壁のほぼ中央、壁溝に接して床下土坑が掘りこまれている。平面形はおおむね円形で、径70cmである。底面は平坦で、中央での深さは25cmである。カマドの周辺を中心に、完形、あるいはそれに近い土師器が出土している(第102・105図)。第105図の3の環は、南壁上層から出土している。出土土器から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。

第48表 9号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	皿	口径 底径 器高 19.2 — 3.5	丸底。体部は大きく開く。口縁部は外反する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫内外—棕色	口縁部一部欠損 内面底部に墨痕
2	皿	口径 底径 器高 18.5 — 3.8	丸底。体部は大きく開く。口縁部は外反する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石	ほぼ完形
3	坏	口径 底径 器高 15.3 — 5.0	丸底。口縁部は内彎する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母、礫内外—棕色	口縁部一部欠損
4	坏	口径 底径 器高 (15.6) — [4.2]	口縁部は内彎する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石内外—棕色	口縁部へ一部下部1/3残存
5	坏	口径 底径 器高 (14.3) — [3.5]	丸底。口縁部は内彎する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母内外—棕色	1/4残存
6	坏	口径 底径 器高 12.8 — 3.5	丸底。口縁部は内彎する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、石英内外—にぶい赤褐色	9/10残存
7	坏	口径 底径 器高 11.8 — 3.4	丸底。口縁部は内彎する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石内外—棕色	口縁部1/6欠損

10号住居跡（第106・107図、第49～51表、図版39・40・70）

A 2地点の中央北寄りで検出した遺構である。3・7号溝により床面および四壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形である。カマド、炉跡は見られないが、おそらく3号溝により壊されてしまったのであろう。北上で図示しているが、カマド、炉跡があったとすれば、西壁側の可能性もあると思われる。一応北東壁、南入口部として記載しておく。規模は、南北方向で5.55m、東西方向で5.40mである。主軸方位はほぼ真北を指す。四壁の大部分は、垂直に近く立ち上がる。床面は中央がわずかに高くなるが、ほぼ平坦である。主柱穴を結ぶ方形の範囲内を中心に硬化している。P 1～P 4は主柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な楕円形で、深さは、P 1が32cm、P 2が10cm、P 3が29cm、P 4が14cmである。

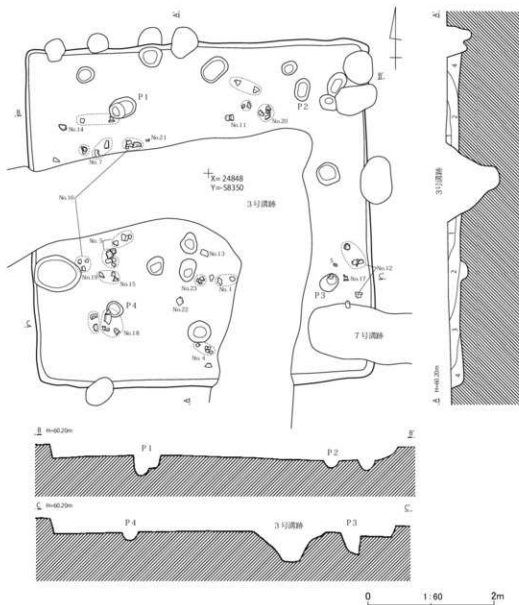
完形、あるいはそれに近い土師器、編み物石が、住居跡全体に分散して多数出土している。遺物の多くは、床面直上～下層出土である。出土遺物、覆土から見て、古墳時代中期後葉の住居跡と考えられる。

11号住居跡（第108・109図、第52表、図版40・70）

A 2地点の中央、西縁近くで検出した遺構である。3号掘立柱建物跡と重複し、3号溝跡に住居跡の南半を大きく壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや不整な方形になるうか。規模は、主軸方向で3.23m、副軸方向での現存長は2.20mである。主軸方位はN-70°-Eを測る。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。

カマドは、東壁にかなり寄った位置に付設されている。左袖は残存するが、右袖は基部を残し3号溝跡に壊されている。燃焼部の平面形は、不整な隅丸方形である。カマドの全長は67cm、中央での横



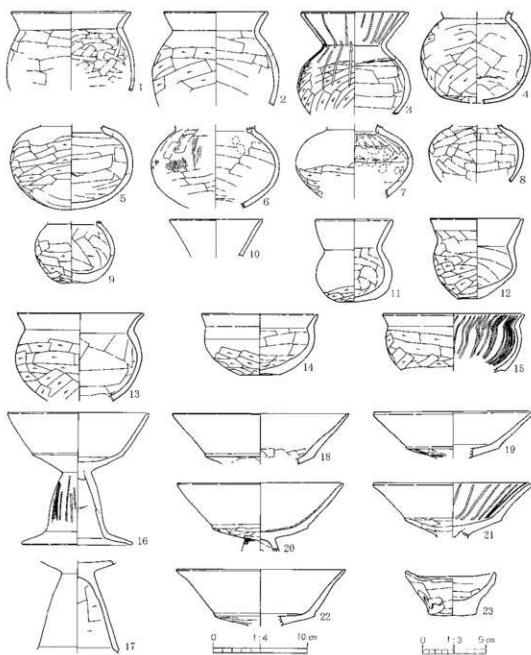
10号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。 3層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、炭化物粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。 4層：暗茶褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。

第106図 10号住居跡平面・断面図

第49表 10号住居跡出土遺物観察表(1)

№	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (12.6) 底径 — 器高 [8.4]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラナゲ。内面-口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラナゲ。	白色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	口縁部~ 胴部中位 1/4残存
2	甕	口径 (11.0) 底径 — 器高 [10.0]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。胴部上位ナゲ。胴部中位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラナゲ。	白色・黒色の岩片 内外-にふい赤褐色	口縁部~ 胴部中位 1/2残存
3	小型壺	口径 11.2 底径 — 器高 [10.9]	口縁部は外傾する。胴部は球状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁~頸部ヨコナゲ後ヘラミガキ。頸部~胴部下位ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面-口縁~頸部ヨコナゲ後ヘラミガキ。頸部~胴部下位ヘラナゲ。	白色の岩片、角四石 内-褐色 外-にふい赤褐色	口縁部~ 胴部下位 1/2残存



第107図 10号住居跡出土遺物

第50表 10号住居跡出土遺物観察表(2)

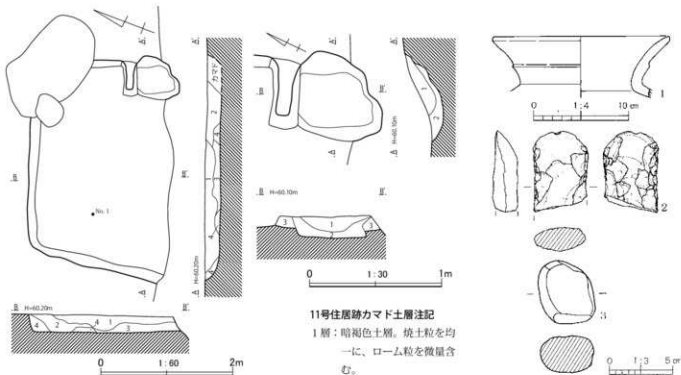
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
4	小型壺	口径 — 底径 7.7 器高 [9.4]	胴部は球状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面一頸部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位～底部ヘラケズリ。内面一頸部ヨコナデ。胴部上位ヨコナデ。胴部上位ナデ。以下ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片。礫 内外一にぶい橙色	頸部～底部2/3残存
5	小型壺	口径 — 底径 [8.9]	胴部は球状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面一頸部～胴部上位ナデ。胴部中位～底部ヘラケズリ。内面一頸部～胴部上位ヨコナデ。胴部上位～底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片。礫、雲母 内外一明赤褐色	頸部～底部1/2残存
6	小型壺	口径 — 底径 [8.7]	胴部は球状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面一ヘラナデ。内面一ヘラナデ。胴部上位指頭痕あり。	白色・黒色の岩片 内外一明赤褐色	頸部～胴部下位1/4残存

第51表 10号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
7	小型壺	口径 底径 器高 [7.8]	胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一頸部～胴部中位ナデ。胴部中～下位ヘラケズリ。内面一頸部ヨコナデ。胴部上位指ナデ絞り目。胴部中～下位ナデ後指頸痕。	白色・褐色の岩片・角閃石、礫、雲母 内外～ふい赤褐色	頸部～胴部 下部 1/4残存
8	小型壺	口径 底径 器高 [6.1]	胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面～ヘラナデ。内面～ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外～褐色	頸部～胴部 下部 1/2残存
9	小型壺	口径 底径 器高 2.2 6.6	胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一頸部ヨコナデ。胴部上位ナデ。胴部中位～底部ヘラケズリ。内面一頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石、雲母 内外～明赤褐色	頸部～底部 4/5残存
10	小型壺	口径 底径 器高 [4.0]	口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面～ヨコナデ。内面～ヨコナデ。	白色・黒色の岩片 内外～明赤褐色	口縁部 4/5残存
11	小型壺	口径 底径 器高 8.0 8.7	口縁部は外傾する。胴部は丸みをもち、丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。胴部上～下位ナデ。底部ヘラケズリ。内面～口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外～明赤褐色	7/8残存
12	小型壺	口径 底径 器高 9.8 2.4 8.5	口縁部は外傾する。胴部はやや丸みをもち、平底。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面～口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外～明赤褐色	4/5残存
13	鉢	口径 底径 器高 [9.3]	口縁部は外反する。体部は丸みをもち、粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位ヘラケズリ。内面～口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外～褐色	3/4残存
14	鉢	口径 底径 器高 (12.3) (4.2) 6.4	口縁部は外傾する。体部は上位に丸みをもち、平底。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面～口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、礫 内外～褐色	2/5残存
15	鉢	口径 底径 器高 14.9 (11.0) [6.1]	口縁部は外反する。体部は丸みをもち、粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。体部下位剝離。内面～ヘラミガキ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外～褐色	3/5残存 脚部剝離 か
16	高坏	口径 底径 器高 (11.8) (4.6) 14.0	口縁部は外傾する。脚部はやや丸みをもち、裾部は開く。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部～坏体部ヨコナデ。体部上位ナデ。脚部ヘラミガキ。裾部ヨコナデ。内面～口縁部～坏体部ヨコナデ。脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外～明赤褐色	1/3残存
17	高坏	口径 底径 器高 [9.8]	脚部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面～体部上位～脚部ナデ。最下端ヨコナデ。内面～坏底部ナデ。脚部上位ナデ。脚部ヘラケズリ。最下端ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外～明赤褐色	体部～脚部 下部 3/5残存
18	高坏	口径 底径 器高 18.6 — [5.4]	口縁部は外傾する。体部は稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。内面～口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内～赤褐色 外～明赤褐色	口縁部～ 体部2/3 残存
19	高坏	口径 底径 器高 (16.8) — [5.0]	口縁部は外傾する。体部は稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部～体部上位ヨコナデ。体部下位ヘラナデ。内面～口縁部～体部上位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外～明赤褐色	口縁部～ 体部下位 2/5残存
20	高坏	口径 底径 器高 16.7 — [5.7]	口縁部は外傾する。体部は稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部～体部上位ヨコナデ。体部下位ヘラナデ。内面～口縁部～体部中位ヘラミガキ。体部下位ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外～明赤褐色	坏部3/4 残存
21	高坏	口径 底径 器高 [5.7]	口縁部は外反する。体部は稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部～体部上位ヨコナデ。体部ヘラナデ。内面～口縁部～体部上位ヘラミガキ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外～明赤褐色	坏部3/4 残存
22	高坏	口径 底径 器高 (17.8) — [6.0]	口縁部は外反する。体部は稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面～口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部ヘラナデ。内面～口縁部～体部上位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外～明赤褐色	口縁部～ 体部下位
23	手づくね	口径 底径 器高 (6.9) 3.6 3.5	口縁部は内彎する。底部は厚い。	外面～口縁部ヨコナデ。体部～体部ヘラナデ。内面～口縁部ヨコナデ。体部～体部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内～褐色 外～ふい褐色	3/4残存

幅は82cmである。袖は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を固めて造られている。縦断面形は船底形に近いが、奥壁には段が見られる。被熱赤化の痕跡は顕著ではない。

主に覆土から土師器片が少量出土している(第109図1)。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期初頭の住居跡であろうか。



11号住居跡土層記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

11号住居跡カマド土層記

- 1層：暗褐色土層。焼土粒を均一に、ローム粒を微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ロームブロック、ローム粒を均一に含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。

第109図 11号住居跡出土遺物

第108図 11号住居跡平面・断面図

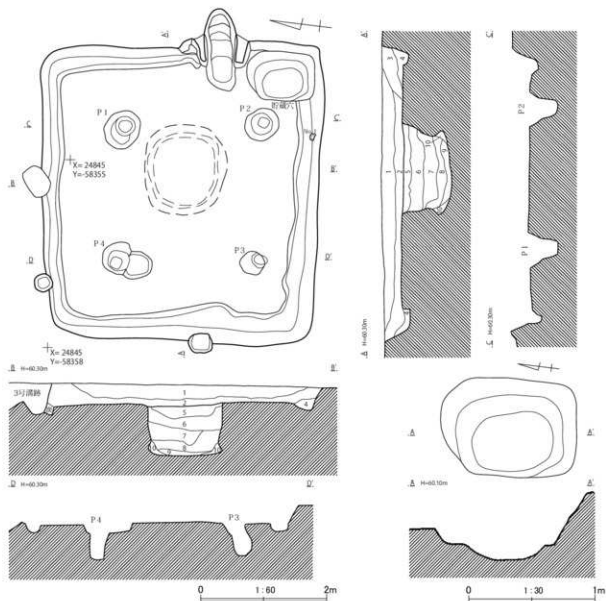
第52表 11号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径(18.6) 底径— 器高[6.4]	口縁部は外反し、中位に段をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内—にぶい赤褐色 外—橙色	口縁部へ頸部1/4 残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	打製石斧	長さ[6.40]、幅[4.38]、厚さ[1.97]、重さ[72.98]g 安山岩。短冊形か、全体に風化顕著。				中央へ刃部欠損
3	軽石	長さ4.95、幅4.2、厚さ2.9、重さ2.9g				壳形

12号住居跡 (第110～112図、第53表、図版40・41・70)

A 2地点東端近くで検出した遺構である。8号住居跡を切り、2号掘立柱建物跡のP5・6、P8・9・11、20号土坑、8号溝跡に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で5.48m、副軸方向で5.17mである。主軸方位はN-80°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。壁溝が全周している。南壁の下部、壁溝の側壁、底面には、工具痕(鋤先によるか)と思われる細かな掘削痕がみとめられる。P1～P4は主柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な楕円形である。深さは、P1が43cm、P2が44cm、P3が54cm、P4が55cmである。南東隅の土坑は、貯蔵穴である。平面形はやや角張った楕円形で、長径110cm、短径77cmである。坑壁は段をもって掘り込まれており、深さは27cmである。



12号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 5層：黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。5~10層は、床下土坑覆土。
- 6層：暗褐色土層。50~100mm大のロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。

- 7層：暗褐色土層。10~20mm大のロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。
- 8層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。
- 9層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。粘性、しまりともない。
- 10層：暗黄褐色土層。ロームブロック、暗茶褐色粘土ブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。

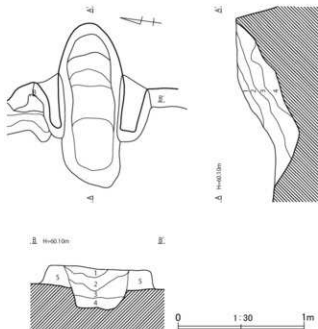
第110図 12号住居跡平面・断面図(1)

カマドは、東壁の南東隅にかなり寄った位置に付設されている。燃焼部の平面形は、不整な隅丸方形で、奥壁には、煙道に連なる舌状の出っ張りがある。カマドの全長は136cm、中央での横幅は97cmである。縦断面形は船底形に近いが、奥壁には段が見られる。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著ではない。袖は半島状に突き出ている。床面の中央、カマド寄りの位置に床下土坑が掘りこまれている。平面形はおおむね円形で、径70cmである。底面はほぼ平坦で、中央での深さは25cmである。坑壁下部は微妙にハンクしている。

カマドの周辺を中心に土師器の破片が少量出土している。第111図1の坏は、やや東寄りの南壁下部に寄り添うようにして出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。



第111図 12号住居跡出土遺物



12号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。焼土ブロック、ローム粒を微量含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。鉄斑、ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に、焼土粒を微量含む。
- 5層：暗灰褐色土層。淡灰白粘土ブロック、ロームブロックを均一に含む。

第112図 12号住居跡平面・断面図(2)

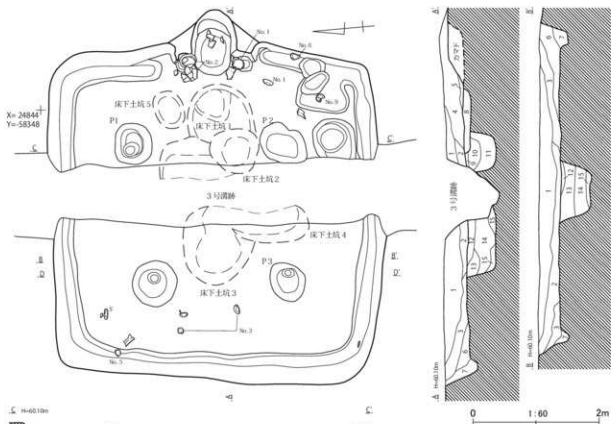
第53表 12号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.2 底径 — 器高 3.3	丸底。口縁部は内嚙する。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫内外にふい赤褐色	3/4残存

13号住居跡 (第113～115図、第54・55表、図版41・42・71)

A 2地点の中央で検出した遺構である。22号土坑、3号溝跡に壊され、12号住居跡のカマド先端と西壁で接している。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形、ないしは隅丸方形である。規模は、主軸方向で5.34m、副軸方向で5.28mである。主軸方位はN-92°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。カマドの袖脇を除いて、壁溝が全周している。P1～P4は主柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1が58cm、P2が51cm、P3が48cm、P4が69cmである。カマドは、東壁の中央に付設されている。燃焼部の平面形は楕円形で、全長は105cm、中央での横幅は73cmである。縦断面形は船底形に近いが、奥壁には段が見られる。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著ではない。袖はローム粒混りの鉄分の沈着した暗褐色土で造られており、倒置された甕が、袖壁として埋め込まれている。床面のほぼ中央には、床下土坑が掘りこまれている。5基ほどの土坑が重なったような形状で、最も深い部分の床面からの深さは、28cmである。カマドの周辺を中心に、完形、あるいはそれ



13号住居跡土層注記

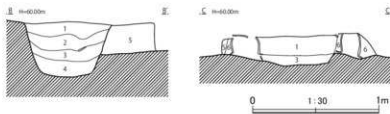
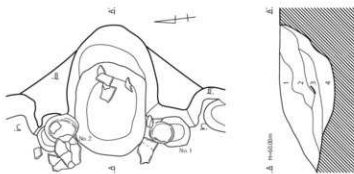
- 1層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。鉄斑、ロームブロックを均一に含む。
- 4層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 5層：暗茶褐色土層。焼土粒を均一に含む。
- 6層：暗褐色土層。鉄斑、ローム粒を均一に、焼土粒を微量含む。
- 7層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。

- 8層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、ロームブロックを均一に含む。床下土坑1覆土。
- 9層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に、焼土ブロックを微量含む。9～11層は、床下土坑2覆土。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 11層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。
- 12層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。12～15層は、床下土坑3覆土。
- 13層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量含む。
- 14層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 15層：暗黄褐色土層。ロームブロック均一に含む。しまりは弱い。

第113図 13号住居跡平面・断面図(1)

第54表 13号住居跡出土遺物観察表(1)

№	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 24.2 底径 一 器高 [32.6]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色	口縁部～胴部下位7/8残存
2	甕	口径 25.0 底径 一 器高 [23.2]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	黄、角閃石	口縁部～胴部下位5/6残存



13号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗灰褐色土層。灰褐色粘土粒を均一に、ローム粒、焼土粒を微量含む。
 2層：暗赤褐色土層。焼土ブロック、灰褐色粘土粒を均一に含む。
 3層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。しまりは弱い。
 4層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。しまりは弱い。
 5層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。
 6層：暗褐色土層。ローム粒、鉄屑を均一に含む。

第114図 13号住居跡平面・断面図(2)

に近い土師器が出土している(第113～115図)。第115図1・2の2点の甕は、袖甕である。9の坏は、貯蔵穴出土、3～6の4点の坏は、入口部から北西隅にかけての位置で出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。

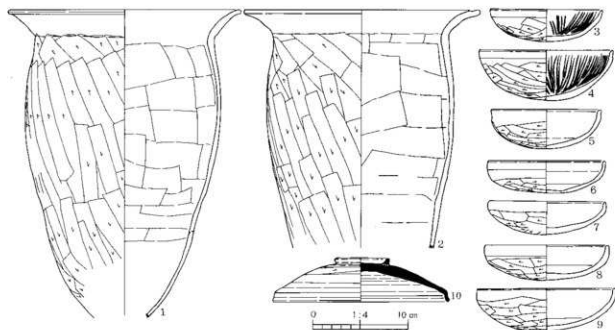
14号住居跡(第116・117図、第56・57表、図版42・43・71)

A2地点の東壁沿いの中央、東寄りで検出した遺構である。20号土坑、6号溝跡により壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや胴の張る方形である。規模は、主軸方向で4.69m、副軸方向で4.70m、主軸方位はN-67°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化して

第55表 13号住居跡出土遺物観察表(2)

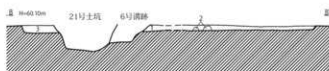
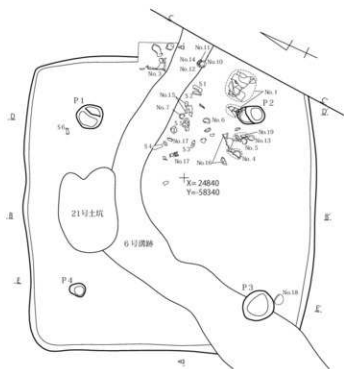
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	坏	口径 14.1 底径 — 器高 5.3	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部上位ナデ。体部上位～底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナゲ。口縁部中位～体部下位ヘラミガキ。底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫、雲母 内外-明赤褐色	7/8残存
4	坏	口径 14.6 底径 — 器高 4.5	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部中位ヨコナゲ。体部下位～底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、石英 内外-にがい褐色	3/5残存
5	坏	口径 11.6 底径 — 器高 4.1	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部上位ヨコナゲ。体部中位～底部ナデ。	角閃石、褐色の岩片 内外-にがい褐色	4/5残存
6	坏	口径 (12.9) 底径 — 器高 3.7	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面-口縁部～体部上位ヨコナゲ。以下ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-にがい褐色	2/3残存
7	坏	口径 12.3 底径 — 器高 3.5	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部上位ヨコナゲ。体部中位～底部ナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-にがい褐色	1/2残存
8	坏	口径 12.4 底径 — 器高 3.4	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面-口縁部～体部中位ヨコナゲ。以下ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、礫 内外-にがい褐色	口縁部～体部一部欠損
9	坏	口径 11.9 底径 — 器高 3.3	丸底。口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部～底部ヘラミガキ。	角閃石、褐色の岩片 内外-褐色	5/6残存
10	須臾器蓋	口径 18.4 底径 5.7 器高 4.6	口縁部の折れはやや長い。ロク口成形。	外面-口縁部ロクロナゲ。ツマミ部貼付時周辺ナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面-ロクロナゲ。	白色・黒色の岩片、礫 内外-灰色	1/2残存



第115図 13号住居跡出土遺物

第56表 14号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.2 底径 10.4 器高 35.5	口縁部は外反し、胴部最大径は中位。平底気味。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	3/4残存
2	甕	口径 21.2 底径 1 器高 [29.9]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫 内外-にぶい褐色	口縁部-胴部下位 1/2残存
3	甕	口径 20.9 底径 1 器高 [21.4]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、礫 内外-にぶい赤褐色	口縁部-胴部中位 1/3残存
4	坏	口径 13.6 底径 1 器高 4.5	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部中位-底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-褐色	口縁部 1/4欠損
5	坏	口径 11.1 底径 1 器高 3.7	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-調整不明瞭。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-褐色	口縁部-胴部欠損
6	坏	口径 11.6 底径 1 器高 4.2	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部中位ヨコナデ。体部下位-底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	7/8残存
7	坏	口径 11.1 底径 1 器高 3.5	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部中位-底部ナデ。	白色・黒色の岩片 内外-褐色	口縁部-胴部欠損
8	坏	口径 11.2 底径 1 器高 3.7	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部中位-底部ナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外-褐色	口縁部欠損
9	坏	口径 11.9 底径 1 器高 3.7	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面-口縁部-体部上位ヨコナデ。以下ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	3/4残存
10	坏	口径 11.1 底径 1 器高 3.0	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-にぶい赤褐色	7/8残存
11	坏	口径 11.2 底径 1 器高 3.6	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部中位ヨコナデ。体部下位-底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	完形
12	坏	口径 11.2 底径 1 器高 3.6	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部中位-底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-褐色	ほぼ完形



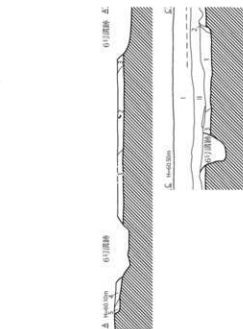
14号住居跡土層注記

[A-A'断面]

- 1層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。5~40mm大のロームブロックを取り巻いてローム粒が雲状に濃集する。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、雲状のローム少なく、分散している。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームが少ない。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、ロームブロックが均一に混合。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、5~30mm大のロームブロックがモヤモヤ入る。ロームブロックとくに壁際に集中する。

14号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。モヤモヤ灰色シルトおよび焼土粒を少量含む。
1・2層は、軟弱ではあるが、カマド構築材の可能性がある。
- 2層：暗褐色土層。2層に近いが、灰色シルトが多い。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。14号住居跡履土か？。



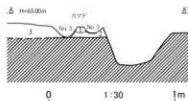
0 1:60 2m

[B-B'断面]

- 1層：暗褐色土層。A-A'断面「1層」と同じ。
- 2層：黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、モヤモヤ暗褐色土が混じる。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含み、焼土粒を極微量含む。

[C-C'断面]

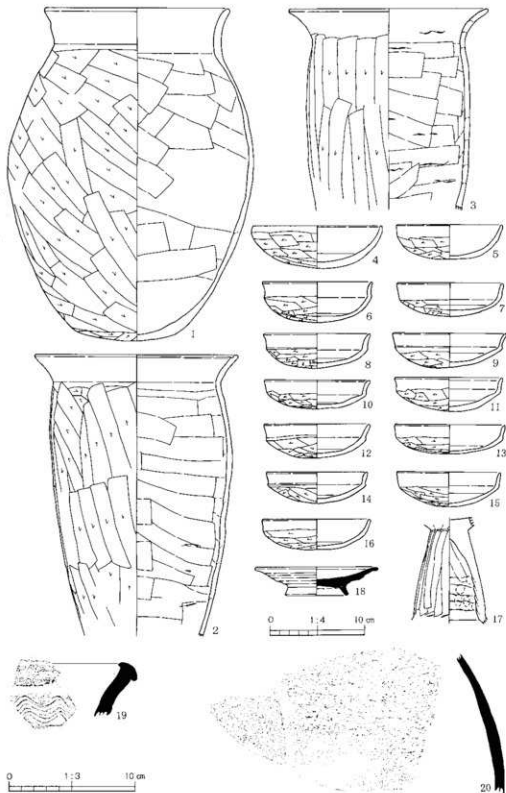
- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを塊状に多量に含む。
- 2層：暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックが乱れ入る。
- 3層：黄褐色土層。黄褐色軟質のロームを主に、暗褐色土が不規則、塊状に混入する。



0 1:30 1m

第116図 14号住居跡平面・断面図

いる。P1～P4は支柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1が23cm、P2が32cm、P3が13cm、P4が22cmである。カマドは、東壁の中央に付設されていたと思われるが、その部分は6号溝跡に壊されており、痕跡的である。焼面が残存せず、袖が不明瞭なため、残存部分を適確にとらえることができなかった。東壁と6号溝跡が交わる部分にモヤモヤ灰色のシルトがまとまっていたこと、それが左袖の痕跡であった可能性を記しておく。このカマドの痕跡部分に近接して、



第117図 14号住居跡出土遺物

第117図3の甕が出土している。袖甕として用いられていたものかもしれない。

床面中央からカマドのあった部分にかけて、坏を主とする土師器が多数出土している(第116図)。大半は床面直上～下層出土である。6号溝跡と東壁の接する右側から、第117図10・11・12・14の坏が重ねられた状態で出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期の住居跡と考えられる。

第57表 14号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
13	坏	口径 11.4 底径 — 器高 3.1	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外—褐色	ほぼ完形の 口縁部一部欠損
14	坏	口径 10.6 底径 — 器高 3.3	丸底。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、礫 内外—褐色	口縁部一部欠損
15	坏	口径 10.9 底径 — 器高 3.7	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、礫 内外—褐色	9/10残存
16	坏	口径 11.3 底径 — 器高 3.2	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	7/8残存 3/4残存
17	高坏	口径 — 底径 — 器高 [11.2]	脚部はわずかに丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—底部～脚部ヘラナデ。内面—底部ヘラナデ。脚部ヘラナデ。輪積痕。指頭痕あり。脚下部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	坏底部～脚部下位
18	須石器皿	口径 12.8 底径 6.2 器高 3.0	口縁部は外反する。高台部は比較的高い。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面—ロクロナデ。高台屈付時周辺部右回転ナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外—灰色	7/8残存
19	須石器甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は彎曲しながら開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—ヨコナデ後、纏描波状文。局部的に鉄分付着。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外—灰白色	
20	須石器甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸く膨らむ。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面—格子目の叩き目。大平が剥落している。内面—弧状、あるいは青海波様の当て具痕。磨耗、刺割顕著。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—灰褐色	

15号住居跡 (第118・119図、第58表、図版43・44・71)

A 2地点の中央、東寄りで見出した遺構であり、確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、不整な横長の長方形というより、台形を横にしたような形態である。後述するようにカマドが2つ残されており、平面形も歪であることから、2軒の住居跡の重複例と考えられないでもないが、土層断面ではその種の痕跡は見られない。新たなカマドが設けられた段階に、拡張するなど住居形態の変更が行なわれた可能性はあるにせよ、そうした過程が一連の過程として行なわれたと推定する。規模は、主軸方向で3.04m、副軸方向で3.61mである。主軸方位はN-90°-Eである。床面中央が不規則に硬化している以外は、全体に硬化も顕著ではない。床面には微妙な凹凸がある。総じて残存状態が悪く、壁もわずかに残るのみである。南東隅は平場をなすように掘り込まれている。位置および深さに問題が残るが、P1～P3は支柱穴の可能性があろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形で、深さは、P1が8cm、P2が10cm、P3が11cmである。南側のカマド脇の土坑は、貯蔵穴であろう。カマドに切られており、北側のカマドに伴うものと考えられる。上端での平面形はやや角張った楕円形で、長径72cm、短径48cmである。船底形に掘り込まれており、底面中央が微妙に浅くなる。最深部での深さは、18cmである。

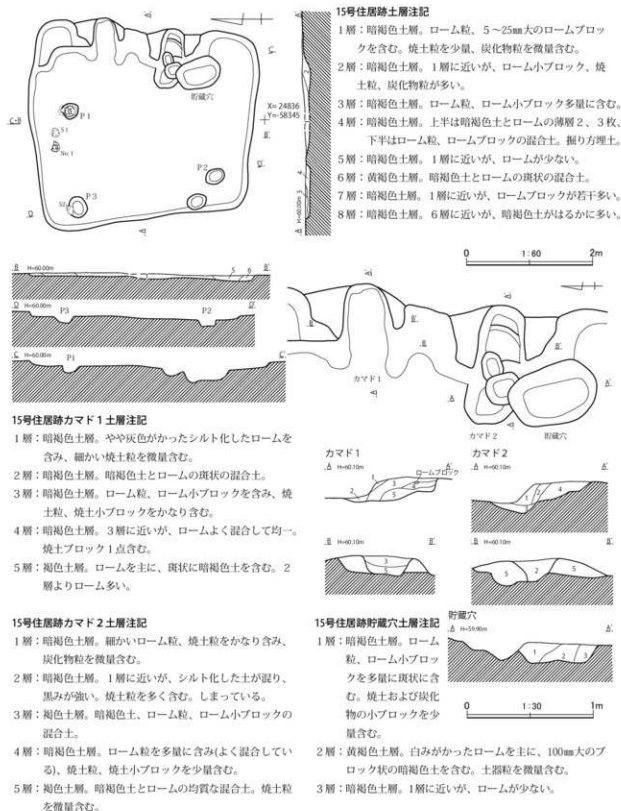


第118図 15号住居跡出土遺物

カマドは、東壁に2つ付設されている。北側のカマドをカマド1、南側の

第58表 15号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須石器高台付碗	口径 (14.0) 底径 — 器高 [5.4]	口縁部は外反する。体部はやや丸みをもつ。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面—ロクロナデ。高台屈付時周辺部右回転ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—灰黄褐色	口縁部～高台部上位2/3残存



第119図 15号住居跡平面・断面図

カマドをカマド2と呼称する。カマド2は、上述したように貯蔵穴を切っており、カマド1に貯蔵穴が伴う段階に続いて、カマド2が付設され住居が使用された段階があったと考える。

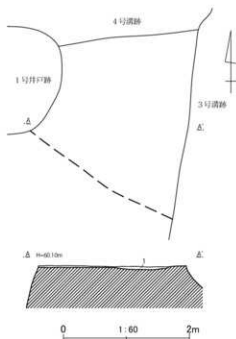
カマド1の燃焼部の平面形は、不整な楕円形である。全長は76cm、中央での横幅は40cmである。燃

焼面はほぼ平坦であるが、奥壁寄りに弱い段がある。被熱赤化の痕跡は顕著ではない。袖は、ローム粒、ロームブロックを混ぜ込んだ暗褐色土を固めて造られている。残りが悪いのは、意図的に壊され、封じられたためかもしれない。カマド2の燃烧部の平面形は、不整な楕円形である。全長は96cm、中央での横幅は40cmである。焚口が浅い掘り込みをなし、段差をなしながら奥壁へと昇ってゆくような形態である。右袖側壁から奥壁にかけてかすかに赤化している以外、被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖の構築材は、カマド1とほとんど同じである。北壁寄りの床面直上より第118図1の坏が出土している。他には土師器小片が覆土中やカマド内より少量出土している。出土物から見て、平安時代の住居跡と考えられる。

16号住居跡 (第120図、図版44)

A2地点の中央、南寄りで見出した遺構である。1号井戸跡、3・4号溝跡に壊されている。3号溝跡をはさみ、18号住居跡とは直接重複関係をなさないが、残存状態から見て、18号住居跡が後出する。わずかな覆土と床面の硬化面のみ残存する遺構であり、しかも床面はほんの一部しか残存しない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

残存部分の範囲は、主軸方向で3.08m、東西方向で2.51mである。床面はほぼ平坦で、明瞭に硬化している。覆土から数点の土師器小片が出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代の住居跡の可能性はある。



16号住居跡土層注記

1層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。

第120図 16号住居跡平面・断面図

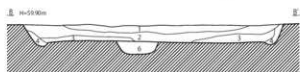
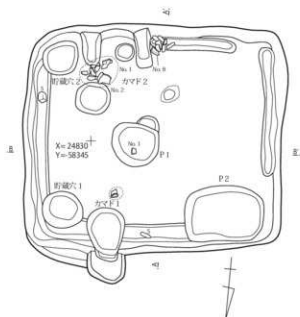
17号住居跡 (第121・122図、第59表、図版44・45・72)

A2地点の南半、東寄りの中央で見出した遺構である。18号住居跡と重複し、北西半を大きく壊されている。また、6号溝跡に東壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

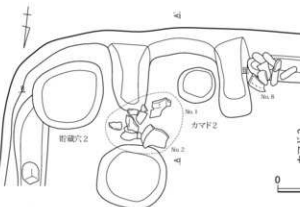
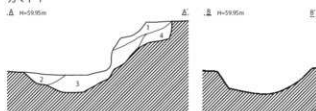
平面形は、方形、ないしは隅丸方形である。規模は、主軸方向で3.66m、副軸方向で4.11mである。以下に記す南側のカマドが最終段階の住居跡とすれば、主軸方位はS-92°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央から北西側、西側にかけて硬化している。四隅、あるいはその近辺を除いて、壁溝が巡らされている。

カマドは、北壁と南壁に1つずつ付設されている。北側のカマドをカマド1、南側のカマドをカマド2と呼称する。また、それぞれのカマドに伴なうと思われる貯蔵穴がカマドの脇に造られている。カマド1は袖も残存しておらず痕跡的であり、カマド1からカマド2へとカマドを付け替え、貯蔵穴を新たに造って住居が使用されたと推定する。

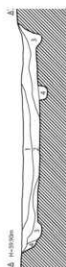
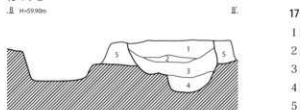
カマド1の燃烧部の平面形は、不整な楕円形を重ねたような形態である。この部分壁高が巡らされているかに見えるが、壁高自体浅く、壁溝とカマドの新古の関係は判然としなない。全長は121cm、中央での横幅は59cmである。焚口から燃烧部にかけて掘り込みをなし、段差をなしながら奥壁、煙道へ



カマド 1



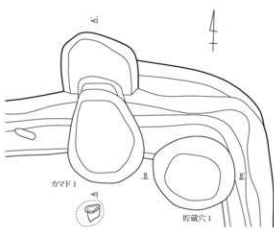
カマド 2



17号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。鉄斑を均一に、ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。鉄斑、ローム粒を均一に含む。
- 3層：暗茶褐色土層。鉄斑、ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を多く含む。ビット覆土。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含む。P 1 (床下土坑)覆土。

0 1:60 2m



17号住居跡カマド 1 土層注記

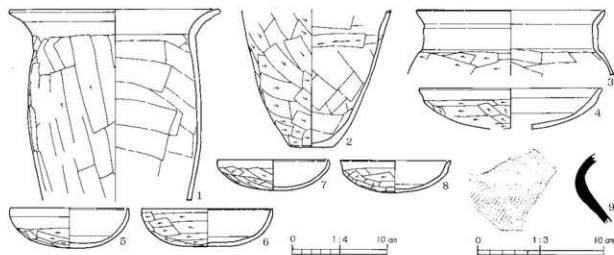
- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。焼土粒、炭化物粒を均一に含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に、ロームブロック、焼土ブロックを微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

0 1:30 1m

17号住居跡カマド 2 土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を均一に含む。
- 4層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 5層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。

第121図 17号住居跡平面・断面図



第122図 17号住居跡出土遺物

第59表 17号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 22.0 底径 — 器高 [20.3]	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母、角閃石 内外—橙色	口縁部へ胴部下位8/10残存
2	甕	口径 — 底径 4.7 器高 [14.5]	胴部は僅かに丸みをもつて開く。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部へ底部ヘラナデ。内面—胴部へ底部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、礫、雲母 内外—にぶい橙色	胴部下位へ底部4/5残存
3	甕	口径 19.8 底径 — 器高 [6.9]	口縁部は二の字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。	角閃石 内外—橙色	口縁部へ頸部1/2残存
4	坏	口径 (19.2) 底径 — 器高 [4.3]	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部中位へ下位ナデ。	角閃石、礫 内外—橙色	口縁部へ体部下位2/5残存
5	坏	口径 12.4 底径 — 器高 4.2	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。以下ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—橙色	3/5残存
6	坏	口径 (13.8) 底径 — 器高 4.0	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部下位へ底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—橙色	2/5残存
7	坏	口径 11.7 底径 — 器高 3.3	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部へ底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内外—橙色	9/10残存
8	坏	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.4	丸底。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部上位ヨコナデ。体部上位へ底部ナデ。	礫 内外—橙色	1/2残存
9	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	頸部は外反しながら立ち上がり、屈曲して肩部に連なる。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面—頸部は回転ナデ。肩部は回転ナデ後、ナツメの平行叩き目。大半が剥落している。内面—頸部は回転ナデ。以下弧状の面て具痕。	白色・灰色の岩片、石英などの大小砂粒、小礫 内外—灰白色	

と昇ってゆくような形態である。被熱赤化の痕跡は顕著ではないが、覆土には明瞭に焼土、炭化物が含まれる。貯蔵穴1は、住居跡の北東隅、カマド1の右脇に設けられている。平面形は楕円形で、長径68cm、短径60cmである。断面形は船底形で、深さは17cmである。カマド2の燃焼部の平面形は、胴の張る横長の長方形に近く、全長は61cm、中央での横幅は78cmである。燃焼面は、床面とほぼ同じ高さで、被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。貯蔵穴2は、カマド2の左脇に付設されている。平面形はやや角張った円形で、最大径は56cmである。断面形は船底形で、深さは15cmである。

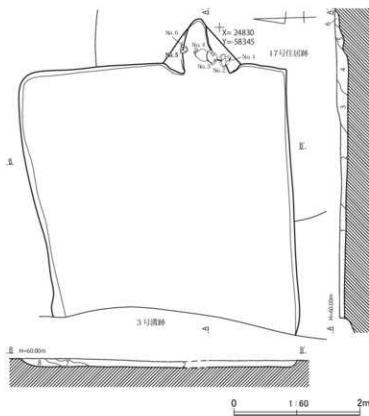
床面の中央東寄り、北西隅寄りの北壁沿いには、床下土坑が掘りこまれている。前者をP1、後者

をP2とする。P1の平面形は、やや歪な楕円形で、長径79cm、短径69cm、深さは19cmである。P2の平面形は、やや歪な隅丸長方形で、長軸長127cm、短軸長は88cm、深さは26cmである。

出土遺物には時間幅が見られるが、主な出土遺物から見て、奈良時代の住居跡と考えられる。

18号住居跡 (第123・124図、第60表、図版45・72)

A2地点の中央、南寄りで見出した遺構である。17号住居跡と大きく重なって造られており、3号

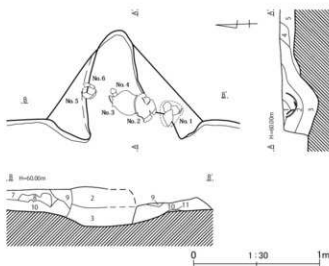


18号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。輪郭の不連続なロームブロックを数個含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックを均一に含む。全体にやや灰色みを帯びており、マンガンを含む。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒を含む。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒、焼土ブロックを含む。一部下面近くに炭化物の薄層がある。
- 5層：明赤褐色土層。赤褐色土と灰黄褐色シルトの混合土を主に、焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。
- 6層：明赤褐色土層。5層に近いが、シルトが多い。図左端に被熱面がある。カマド構築材の可能性もある。
- 7層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームをモヤモヤ含む。
- 8層：暗褐色土層。7層に近いが、全体にロームが多い。

18号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土と灰黄褐色シルトの混合土。焼土粒を微量、マンガンを含む。硬くしまっている。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、シルトが多い、焼土粒も若干多い。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土がはるかに多い。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、灰黄褐色シルトがやや多く、左端に焼土面が見られる。4～11層は、カマド掘り方理土(構築材)で、しまっている。
- 5層：灰黄褐色土層。他の層より白みの強い灰黄褐色シルトと暗褐色土の混合土。焼土粒を局部的に含む。
- 6層：暗褐色土層。暗褐色土と灰黄褐色シルトの混合土を主に、ローム粒を多量に含み、焼土粒、5～10mm大のロームブロックを含む。
- 7層：灰黄褐色シルト層。暗褐色土、ローム、灰黄褐色シルトの混合土を主に、焼土粒を少量含む。
- 8層：暗褐色土層。6層に近いが、灰黄褐色シルトが多く、焼土が少ない。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、灰黄褐色シルトを含み、焼土粒を少量、灰を微量含む。
- 10層：灰黄褐色シルト層。7層に近いが、灰黄褐色シルトが多い。
- 11層：灰黄褐色シルト層。灰黄褐色シルトと灰の薄層のラミナ。

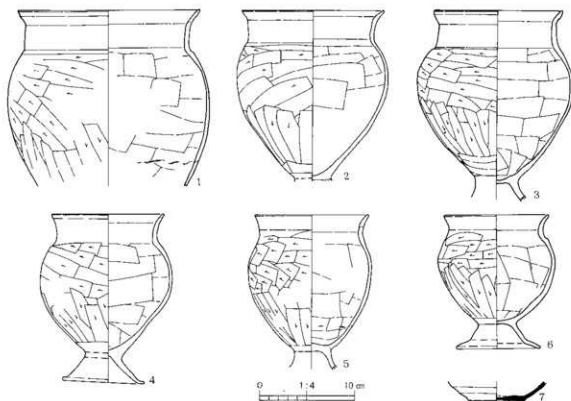


第123図 18号住居跡平面・断面図

溝跡に西壁側を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形になろうか。規模は、主軸方向で3.93m、副軸方向は現存値で4.22mである。主軸方位はN-94°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に、不規則で軽微ではあるが硬化している。

カマドは、東壁の南東隅にかなり寄った位置に付設されている。然焼部の平面形は歪んだ楕円形で、



第124図 18号住居跡出土遺物

第60表 18号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.2 底径 一 器高 [18.7]	口縁部はコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。胴部下位ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母 内外-にぶい赤褐色	口縁部へ 胴部2/3 残存
2	台付甕	口径 15.0 底径 一 器高 [18.1]	口縁部はコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ヘラケズリ。最下位ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部へ底ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-褐色	口縁部へ 底部7/8 残存
3	台付甕	口径 13.5 底径 一 器高 [20.1]	口縁部はコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。最下位ヘラナデ。台部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。台部ヨコナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	口縁部へ 台部中位 9/10残存
4	台付甕	口径 11.7 底径 8.6 器高 18.0	口縁部はコの字状に近い形状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。台部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。台部ヨコナデ。	角閃石、礫、褐色の岩片、雲母 内外-にぶい赤褐色	4/5残存
5	台付甕	口径 11.9 底径 一 器高 11.4	口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。台部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。台部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外-褐色	口縁部へ 台部中位 3/4残存
6	台付甕	口径 11.0 底径 (8.7) 器高 14.1	口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。台部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。台部ヨコナデ。	白色の岩片、角閃石 内外-にぶい赤褐色	2/3残存
7	須恵器 坏	口径 一 底径 6.0 器高 [2.1]	平底。体部は直線的に開く。ロクコ成形。	外面-ロクコナデ。底部右回転糸切り。内面-ロクコナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫 内外-黄灰色	体部下位 へ底部残存

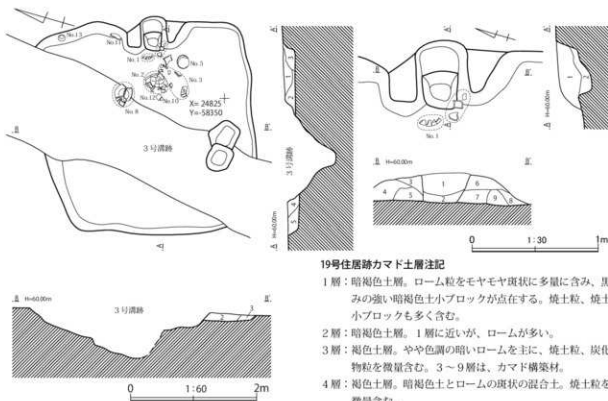
全長は90cm前後、中央での横幅は46cmである。焚口から燃焼部へと浅く掘りこまれているが、床面との境は不明瞭である。燃焼部左側壁は、ハンクしている。縦断面形は船底形に近く、奥壁は微妙な凹凸をもってゆるやかに立ち上がる。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著ではない。袖は灰黄褐色シルトを固めて造られている。

カマド内から、第124図2～6の甕や小型台付甕が出土している(第123図下)。また、覆土中からかなりの量の土師器片が出土している。出土遺物、および覆土から見て、平安時代の住居跡と考えてよいであろう。

19号住居跡 (第125・126図、第61・62表、図版46・72・73)

A 2地点の中央、南寄りで見出した遺構である。3号溝跡により床面の中央を大きく壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや歪な方形、ないしは隅丸方形である。規模は、主軸方向で3.33m、副軸方向で3.39mである。主軸方位はN-72°-Eである。床面はほぼ平坦で、全面的に硬化している。



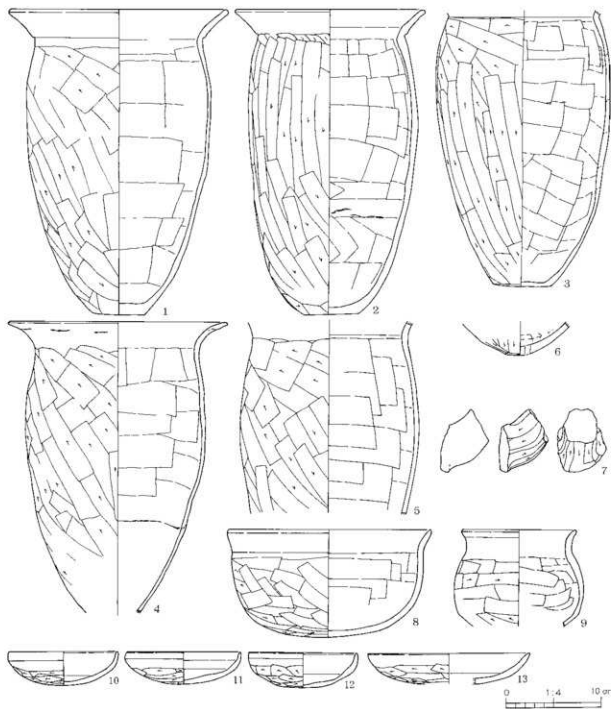
19号住居跡カマド土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒をモヤモヤ斑状に多量に含み、黒みの強い暗褐色土小ブロックが点在する。焼土粒、焼土小ブロックも多く含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層: 褐色土層。やや色調の暗いロームを主に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。3～9層は、カマド構築材。
- 4層: 褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。焼土粒を微量含む。
- 5層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土をモヤモヤ含む。カマドの芯。
- 6層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土をモヤモヤ含む。焼土粒、焼土小ブロックを多量に含む。
- 7層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土をモヤモヤ含む。6層より暗褐色土が多く、焼土が少ない。
- 8層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土をモヤモヤ含む。焼土小ブロックが点在する。
- 9層: 黄褐色土層。5層に近いが、焼土粒を少量含む。カマドの芯。

19号住居跡土層注記

- 1層: 褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。焼土粒を少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、焼土粒が多い。
- 3層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、焼土粒が多く、焼土小ブロックを多く含む。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒を多く含み、焼土粒を微量含む。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、ローム粒、5～30mm大のロームブロック(輪郭不明瞭)をモヤモヤ多量に含む。

第125図 19号住居跡平面・断面図



第126図 19号住居跡出土遺物

第61表 19号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 22.4 底径 5.4 器高 32.4	口縁部は外傾する。胴部はやや丸みをもち、平底。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-にぶい橙色	3/4残存
2	甕	口径 19.8 底径 5.8 器高 32.2	口縁部は外傾する。胴部はやや丸みをもち、平底。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-にぶい橙色	7/8残存

第62表 19号住居跡出土遺物観察表(2)

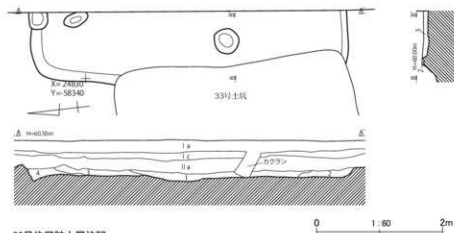
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
3	甕	口径 底径 器高 [29.3]	— 6.0 — —	胴部はやや丸みをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—頸部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面—頸部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	褐色・白色の岩片、角閃石、礫内外—にぶい黄褐色	胴部～底部9/10残存
4	甕	口径 底径 器高 [30.8]	— 22.5 — —	口縁部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母内外—灰褐色	口縁部～胴部下位4/5残存
5	甕	口径 底径 器高 —	— — — —	胴部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母内外—にぶい褐色	胴部～胴部下位1/2残存
6	瓶	口径 底径 器高 [3.6]	— 3.4 — —	丸底。底部に7つの小円孔を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面—ヘラケズリ。内面—ヘラナデ。黒色処理。	白色・褐色の岩片、礫、雲母内—黒色外—にぶい黄褐色	胴部下位～底部1/2残存
7	瓶	長さ 幅 [6.6] [5.5]	— — — —	把手部は中実。胴部器壁に貼付する。	外面—ヘラケズリ。	白色・褐色の岩片、角閃石内外—褐色	把手破片
8	鉢	口径 底径 器高 [11.4]	21.4 — — —	口縁部は外反する。丸底で底部付近は丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石内外—にぶい褐色	6/7残存
9	鉢	口径 底径 器高 [10.2]	11.9 — — —	口縁部は外反する。胴部は丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母、石英内外—褐色	口縁部～胴部下位5/8残存
10	坏	口径 底径 器高 [3.5]	11.5 — — —	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。以下ナデ。	白色の岩片、角閃石、石英、礫内外—褐色	口縁部一部欠損
11	坏	口径 底径 器高 [3.4]	12.0 — — —	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。以下ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母内外—褐色	口縁部一部欠損
12	坏	口径 底径 器高 [3.7]	11.5 — — —	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	褐色・黒色・白色の岩片、角閃石、礫内外—にぶい赤褐色	9/10残存
13	坏	口径 底径 器高 [3.3]	17.1 — — —	丸底。体部から口縁部は大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。体部上～下位ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母内外—にぶい褐色	口縁部～体部下位1/4残存

カマドは、東壁の中央に設けられている。燃焼部の平面形は隅丸長方形で、全長は54cm、中央での横幅は42cmである。バケツ形に近く掘り込まれており、奥壁側には段があり、平場をなしている。右袖側壁から奥壁にかけてわずかに赤化している以外は、被熱赤化の痕跡は、微弱である。袖は、ロームを芯に暗褐色土混じりのロームを突き固めて造られている。

カマドの前面を中心に、完形、あるいはそれに近い土師器が出土している。第126図1～3の甕、8の鉢、10・12の坏は、いずれもカマド前面の床面よりかなり浮いた位置から出土している。他に土師器片が覆土中よりかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えてよいであろう。

20号住居跡 (第127・128図、第63表、図版47)

A2地点の東縁沿いの南に寄った位置で検出した遺構である。33号土坑に切られ、東側の大部分は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはロームより上位の暗褐色土中である。



20号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、5～30mm大のロームブロックを不規則に含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームははるかに多い。
- 3層：褐色土層。暗褐色土とロームの不規則な混合土。ロームブロックには、2層に比し、さらに大きなものが含まれる。
- 4層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土粒、ブロックが斑状に混合する。

第127図 20号住居跡平面・断面図

ある可能性が高いであろう。床面はほぼ平坦で、床面の硬化は軽微である。床面にビットが3つあるが、位置的に柱穴とは考えにくい。

覆土中から土師器小片が少量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代～奈良・平安時代の住居跡と考えられる。

第63表 20号住居跡出土遺物観察表

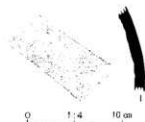
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 壺?	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面一叩き成形後、横位の櫛歯直線文。外面大半剥落。内面一背海波様の当て具痕。	白色・灰色・黒色の岩片などの細砂 内外一灰白色	

21号住居跡 (第129～131図、第64・65表、図版47・48・73)

A 2地点の南縁、南西端近くで検出した遺構である。35号土坑に北壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で4.68m、副軸方向で4.88mである。主軸方位はS-80°-Eである。床面はほぼ平坦で、主柱穴を結ぶ範囲内、および入口部周辺を中心に硬化している。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1が37cm、P2が25cm、P3が31cm、P4が28cmである。南東隅側の土坑は、貯蔵穴であろう。平面形はやや不整な楕円形で、長径79cm、短径68cmである。バケツ形に掘り込まれており、最深部での深さは53cmである。ローム粒、ロームブロックをかなり含む暗褐色土の覆土から、埋め戻されたかにも見える。貯蔵穴の南側を割すように、南壁から伸びる低平な土堤が造られている。土堤は、幅45cm前後、高さ5～8cmである。また、北東隅に接して土坑状の掘り込みが見られるが、貯蔵穴とも床下土坑とも異なるようである。この掘り込みの深さは、10～14cmである。

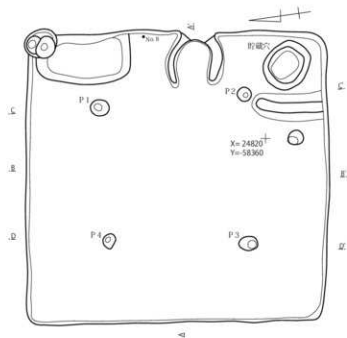
カマドは、東壁のおおむね中央に付設されている。燃焼部の平面形は楕円形で、全長は74cm前後、



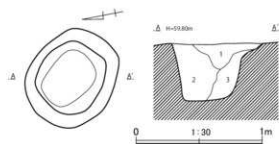
第128図 20号住居跡
出土遺物

平面形は、方形、ないしは長方形になるうか。

規模は、南北方向で5.06m、副軸方向での現存長は1.16mである。西壁の向きは、N-6°-Eである。周囲の住居跡から見て、東壁側にカマドがある



0 1:60 2m



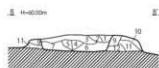
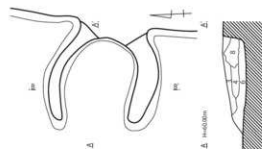
0 1:30 1m

21号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。以下、全体に粘性がややあり、しまっている。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、部分的にロームが雲状にまとまる。

21号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、ローム小ブロックを少量(所々雲状に濃集)、焼土粒を少量含む。以下、全体的に粘性、しまりが弱い。通常の住居跡覆土よりローム多く、スカスカした感じ。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム小ブロックが多く(雲状に在)、20～40mm大のロームブロックを少量含む。
- 3層：暗褐色土層。暗褐色土とロームがやや色調の暗いロームを主に、焼土粒ローム均一に混合。焼土粒の濃集部あり。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム小ブロックが多い、10～50mm大のロームブロックを少量含む。
- 5層：暗褐色土層。暗褐色土とロームがやや色調の暗いロームを主に、焼土粒ローム均一に混合(1・2層のように粒子が見えない)。焼土粒も1・2層より多い。3層より若干ロームが少ない。
- 6層：暗褐色土層。2層に近いが、さらに大きなロームブロックを含む。
- 7層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒がやや多い。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状、迷彩状の混合土。炭化物粒(黒色土粒?)を含む。
- 9層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム小ブロックが多い。
- 10層：暗褐色土層。5層に近いが、10～50mm大のロームブロックを含む。
- 11層：黄褐色土層。ロームを主に、斑状に暗褐色土を含む。
- 12層：暗褐色土層。3層に近いが、10～50mm大のロームブロックを多く含む。60mm大の炭化材を中央に含む。



0 1:30 1m

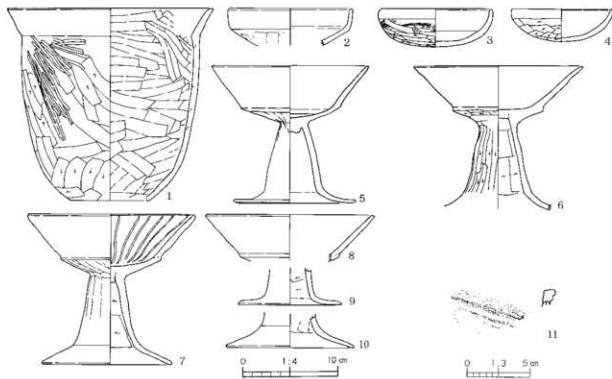
第129図 21号住居跡平面・断面図(1)

21号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかかった暗褐色土を主に、ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。以下、全体的にややしまり、若干粘性有り。
- 2層：黄褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを主に、暗褐色土をモヤモヤ含む。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、焼土粒、焼土小ブロックがかなり多く、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、焼土粒、焼土小ブロックを多く含む。
- 5層：黄褐色土層。シルト化し白みがかかったロームを主に、暗褐色土をモヤモヤ含む。焼土粒を少量含む。
- 6層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームをモヤモヤ含む。

- 7層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む。
- 8層：黄褐色土層。シルト化し白みがかかったロームを主に、暗褐色土、焼土粒、5～15mm大の焼土ブロックをかなり含む、炭化物粒を少量含む。
- 9層：灰黄褐色シルト層。暗褐色土をモヤモヤを微量含む。以下、全体に固くしまっている。9～12層は、カマド構築材。
- 10層：暗褐色土層。シルト粒、30mm大のシルトブロック、焼土粒を含む。
- 11層：暗褐色土層。ローム粒を含み、炭化物粒を少量含む。
- 12層：暗褐色土層。11層に近いが、シルト小ブロック、焼土粒が多い。

第130図 21号住居跡平面・断面図(2)



第131図 21号住居跡出土遺物

第64表 21号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	瓶	口径 (21.8) 底径 (8.0) 器高 20.3	口縁部は外傾する。胴部は下位に丸みをもつ。底部は筒抜け。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラケズリ後ヘラミガキ。胴部中へ下位ヘラミガキ。内面-ヘラナデ。	角閃石 内外-にぶい褐色	1/3残存
2	坏	口径 (13.0) — 底径 (3.9) 器高	口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ後ヘラナデ。内面-口縁部へ体部上位ヨコナデ。体部上へ下位ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、燧 内外-赤褐色	口縁部へ体部1/3残存
3	坏	口径 11.6 底径 — 器高 4.0	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ後ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。体部上位へ底部ナデ。	白色の岩片、雲母 内外-にぶい赤褐色	1/3残存
4	坏	口径 10.5 底径 — 器高 3.4	丸底。口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部上位ヨコナデ。体部上位へ底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-橙褐色	ほぼ完形

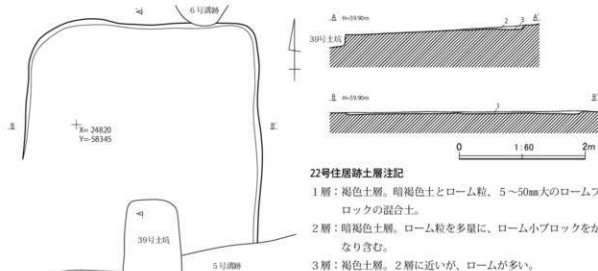
第65表 21号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
5	高坏	口径 (16.4) 底径 (13.0) 器高 14.5	口縁部は外反し、体部に稜をもつ。裾部は水平に近く開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。底部ナデ。脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母内外-にふい赤褐色	1/2残存
6	高坏	口径 (17.8) 底径 — 器高 [15.1]	口縁部は外反する。体部に稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。内面-口縁部上位ヨコナデ。口縁部上位~底部器面摩耗し調整不明瞭。脚部上位ナデ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母内外-褐色	口縁部~裾部1/3残存
7	高坏	口径 17.6 底径 — 器高 15.9	口縁部は外反する。体部に稜をもつ。裾部は水平に近く開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-口縁部~底部ヘラミガキ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母内外-明赤褐色	3/5残存
8	高坏	口径 17.7 底径 (13.7) 器高 [4.9]	口縁部は外反する。体部に稜をもつ。裾部は水平に近く開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面-口縁部上~中位ヨコナデ。口縁部中~下位器面荒れ調整不明瞭。	白色・黒色の岩片、礫、雲母内外-明赤褐色	口縁部~体部3/4残存
9	高坏	口径 — 底径 (11.0) 器高 [3.4]	脚部は直線的。裾部は水平に近く開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-脚部ナデ。裾部ヨコナデ。内面-脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・褐色の岩片、雲母内外-にふい赤褐色	脚部下位~裾部1/3残存
10	高坏	口径 — 底径 (13.3) 器高 [3.6]	裾部は開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-脚部ナデ。裾部ヨコナデ。内面-脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	黒色・白色・褐色の岩片、雲母内外-明赤褐色	脚部下位~裾部1/3残存
11	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は波状口縁をなす。粘土組織み上げによる成形。	外面-一端部下端に2条以上の太い沈線。内面-ナデ。	白色・灰色・黒色の岩片などの細砂内外-にふい黄褐色	高井東式4区

中央での横幅は62cmである。燃焼部は、掘り込みを有さず、床面からそのまま続き、馬蹄形の袖が燃焼部を取り巻いている。左袖側壁から奥壁にかけていくらか赤化している以外は、被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は暗褐色土を用いて造られており、側壁など一部を灰黄褐色シルトで固めている。第131図7の高坏は、南西隅床面直上から出土した。他に覆土中から土師器片などがかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代中期~後期初頭の住居跡と考えられる。

22号住居跡 (第132・133図、図版48・73)

A2地点の南縁沿いの中央で検出した遺構である。39号土坑、5・6号溝跡により壊されている。壁のほとんどを削平されており、覆土の一部がかろうじて残るのみである。確認面は、黄褐色の軟質



第132図 22号住居跡平面・断面図

22号住居跡土層注記

- 1層: 褐色土層。暗褐色土とローム粒、5~50mm大のロームブロックの混合土。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に、ローム小ブロックをかなり含む。
- 3層: 褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。

ローム層上面である。

平面形は、隅丸方形になるのか。規模は、南北方向の現存値で3.73m、東西方向で3.85mである。主軸がどちらになるのか判然としないが、南北であるとすれば、ほぼ真北に近くなる。床面はほぼ平坦で、軽微ではあるが、床面中央を中心に硬化している。

覆土中より少数の土師器小片が出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期～終末期の住居跡の可能性はある。



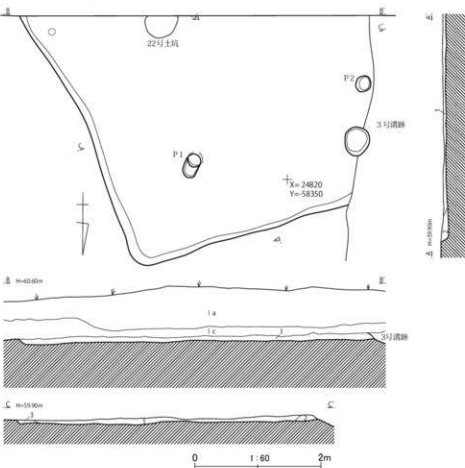
第133図 22号住居跡出土遺物

第66表 22号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.5 底径 — 器高 3.3	丸底。口縁部は外傾する。粘土継積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。指押え、指頭痕あり。以下へラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。以下ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外—褐色	口縁部 1/5欠損

23号住居跡 (第134・135図、第67表、図版48・73)

A 2地点の南縁のほぼ中央で検出した遺構である。38号土坑、3号溝跡に壊されており、遺構の南



23号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ややくすんだ色調の暗褐色を主に、ローム粒、5～15mm大のロームブロックを含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが若干多い。ロームがモヤモヤと濃集する部分あり。
- 3層：暗褐色土層。暗い色調のローム粒、5～40mm大のロームブロックを含む。

第134図 23号住居跡平面・断面図

半は調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形、ないしは長方形になるのか。規模は、いずれも現存地になるが、北西—南東方向で4.40m、北東—南西方向で5.87mである。主軸方位は不明であるが、未調査の南側にカマド、炉などがあるとすれば、主軸方位はS—17°—Eあたりにな



第135図 23号住居跡出土遺物

第67表 23号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土製品 不明	長さ4.1、幅1.4、厚さ1.15 胎土：白色の岩片、角閃石、雲母 色調：橙色。	

る。床面はほぼ平坦であるが、かなり軟弱である。P1・P2は主柱穴の可能性のあるピットである。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形で、深さは、P1が46cm、P2が43cmである。

第135図1の土製品は、覆土中出土である。他に覆土中より少数の土師器小片が出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代の住居跡であろうか。

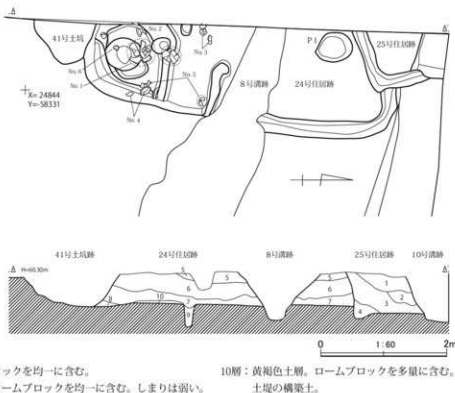
24号住居跡 (第136・137図、第68表、図版49・73)

B地点の北西端で検出した遺構である。25号住居跡、41号土坑、8・10号溝跡に壊されている。西側の大半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅丸方形になろうか。規模は、主軸方向の現存値で1.46m、副軸方向で5.12mである。主軸方位はN-100°-Eである。床面はほぼ平坦で、中央付近を中心に硬化している。カマドの袖脇を除いて、壁溝が巡らされている。P1は、主柱穴として平面形、位置に問題はないが、深さが6cmと浅過ぎるようである。南東隅の土坑、あるいはピットは貯蔵穴であろう。周りが方形気味に浅く掘られ、平場を介して中央に深い掘り込みを有する形態である。最大長は133cm、中央の掘り込みの径は55cm、最深部での深さは45cmである。カマドと劃すように北縁には低平な土堤が付されている。カマドは、東壁の中央に付設されたのであろうが、片側の袖しか残存していない。残存する袖の上面、燃焼部側の側壁に若干焼土が残っている。床面のほぼ中央には、床下土坑が掘りこまれている。5基ほどの土坑が重なったような形状で、最も深い部分の床面からの深さは、28cmである。

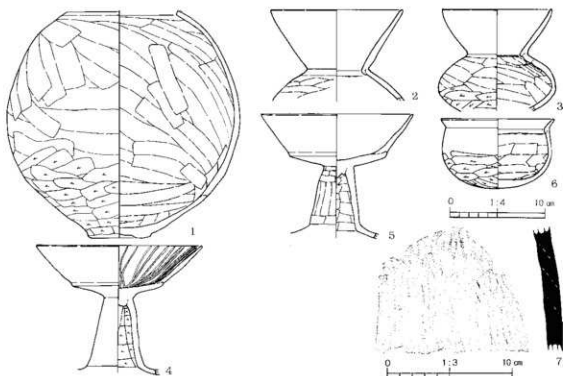
24・25住居跡土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。1～4層は、25号住居跡覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。しまりは弱い。
- 4層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、白色粒を微量含む。5～10層は、24号住居跡覆土。
- 6層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 7層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。
- 8層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 9層：茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。



第136図 24・25号住居跡平面・断面図

貯蔵穴内、その周囲から、完形、あるいはそれに近い土師器が出土している。第137図3の壺や6の鉢は貯蔵穴内、4・5の高坏は土堤の脇から出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第137図 24号住居跡出土遺物

第68表 24号住居跡出土遺物観察表

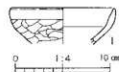
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 — 底径 6.6 器高 [21.4]	胴部は張り、最大径を中位に有する。底部は上げ底。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部上半へラナゲ、下半へラケズリ。底部へラケズリ。内面—胴部へラナゲ。底部へラナゲ。	白色・黒色・褐色の岩片、石英、雲母 内外—明赤褐色	胴部2/3 残存、底部完形
2	鉢	口径 14.0 底径 [9.7]	口縁部は直線的に外傾する。体部は張り。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。体部上位へラナゲ。内面—口縁部ヨコナゲ。体部上位へラナゲだが磨耗。	白色・黒色・褐色の岩片 内外—明赤褐色	口縁部完形。体部1/5残存
3	壺	口径 11.5 底径 [10.8]	口縁部は内彎気味に外傾する。体部は張り。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。体部上半へラナゲの後、下半へラケズリ。内面—口縁部ヨコナゲ。体部へラナゲ。	白色・黒色の岩片 内外—赤褐色	口縁部4/5、体部1/2残存
4	高坏	口径 17.6 底径 [13.6]	口縁部は直線的に開く。脚部は下方に向かってやや開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。坏底部ナゲ。脚部ナゲ。裾部ヨコナゲ。内面—口縁部ヨコナゲの後、放射状増文。坏底部ナゲ。脚部へラケズリの後、へラナゲ。裾部ヨコナゲ。	白色・黒色の岩片 内外—明赤褐色	口縁部1/3、裾部欠損
5	高坏	口径 (16.2) 底径 [13.1]	口縁部は反外気味に開く。脚部は下方に向かってやや開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。坏底部ナゲ。脚部へラナゲ。裾部ヨコナゲ。内面—口縁部ヨコナゲ。坏底部ナゲ。脚部へラナゲ。裾部ヨコナゲ。	白色・黒色・褐色の岩片 内外—明赤褐色	口縁部1/2、裾部欠損
6	鉢	口径 12.0 底径 [7.3]	口縁部は短く外傾する。体部は内彎しながら立ち、底部は丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。体部ナゲの後、下半—底部へラケズリ。内面—口縁部ヨコナゲ。体部—底部へラナゲ。	白色・黒色・褐色の岩片 内外—明赤褐色	完形
7	須恵器甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に丸みをもち立ち上がる。粘土組織み上げによる成形後、叩き整形。	外面—平行叩き目。内面—指押え、ヨコナゲ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒。小礫 外—灰色 内—ぶい褐色	

25号住居跡 (第136・138図、第69表、図版49)

B地点の北西端で検出した遺構である。24号住居跡を切って造られており、10号溝跡に壊されている。遺構の大半は、調査範囲外であり、精査できたのは南東隅の極わずかな範囲である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

規模は、北東-南西方向での現存長は1.06mである。東壁側にカマドがあるとすれば、主軸方位はN-68°-Eあたりになりそうである。残存部分には、壁溝がみとめられる。

覆土から土師器小片が少量出土している。出土遺物、覆土、重複関係から見て、古墳時代後期の住居跡と考えられる。



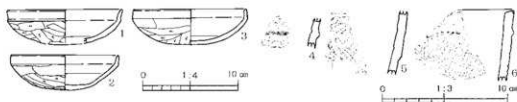
第138図 25号住居跡出土遺物

26号住居跡 (第139・140図、第70表、図版49・50・73)

B地点の中央、西寄りで検出した遺構である。7号溝跡に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

第69表 25号住居跡出土遺物観察表

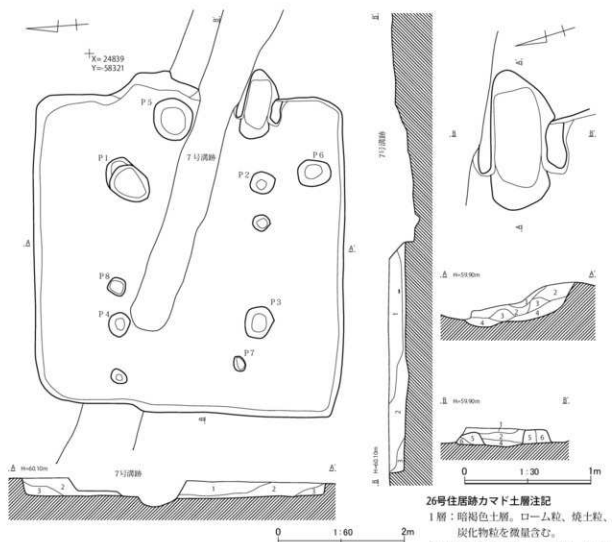
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (11.0) 底径 — 器高 [3.8]	口縁部はやや肥厚し、内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色の岩片、雲母内外-にぶい赤褐色	口縁部~体部1/4残存



第139図 26号住居跡出土遺物

第70表 26号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 [3.5]	丸底。体部は大きく開き、口縁部との境の境は不明瞭。口縁部は短く、外反気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片内外-にぶい褐色	1/3残存
2	坏	口径 11.5 底径 3.7 器高 3.7	丸底。体部は大きく開く。口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部下位~底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片外-にぶい褐色。内-褐色	口縁部1/4欠損
3	坏	口径 (12.0) 底径 — 器高 3.7	丸底。体部は大きく開く。口縁部は短く、やや内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片内外-にぶい褐色	2/3残存
4	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-破片中央に先端の尖った隆帯。上部にタテ、ヨコの沈線。内面-磨耗により調整不明。	白色・灰色の岩片、雲母などの大小砂粒内外-にぶい黄褐色	鶴ヶ島台式
5	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-タテ、ナナメの沈線による区画。区画内にナナメの平行沈線および円形、半円形の刺突。内面-ナナメの浅い条痕。	白色・灰色の岩片、雲母などの大小砂粒内外-にぶい褐色	鶴ヶ島台式
6	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部~胴部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-一端部外縁に刻目。口縁部上半に先端の尖った隆帯、隆帯下端に刺突。以下弧状、ナナメ、ヨコの沈線による区画。区画内にナナメの平行沈線。無文部は浅い条痕。内面-浅い条痕。	白色・灰色の岩片、雲母などの大小砂粒内外-にぶい褐色	鶴ヶ島台式



26号住居跡土層注記

- 1層：黒褐色土層。ロームブロック均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒、A s - Bを微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量含む。しまりは弱い。

- 3層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、炭化物粒を微量含む。
- 5層：黄褐色土層。ロームブロック。5・6層は、カマド袖構築材。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

26号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含み、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。

第140図 26号住居跡平面・断面図

平面形は、やや歪な方形である。規模は、主軸方向で5.38m、副軸方向で5.00mである。主軸方位はN-97°-Eである。床面はほぼ平坦で、主柱穴を結ぶ範囲内を中心に硬化している。P1～P4は主柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1が47cm、P2が31cm、P3が54cm、P4が34cmである。床面で、他に6個のピットを検出しており、その内P6～P8に関しては、P5、P6、P7(あるいはP3)、P8の4個の柱穴同様に方形の並びをなすため、番号を付した。本住居跡の上部にあった住居跡の痕跡の可能性もあると思われる。P5～P8の平面形は、やや不整な円形、楕円形で、深さは、P5が30cm、P6が23cm、P7が23cm、P8が16cmである。

カマドは、東壁の著しく南東隅に寄った位置に設けられている。燃焼部の上端の平面形は、歪な楕円形であるが、底面は長方形に近く角張っている。全長は111cm、中央での横幅は44cmである。縦断

面形は船底形で、奥壁はゆるやかに立ち上がる。被熱赤化の痕跡は、軽微である。袖は、側壁側をロームブロックで固め、暗褐色土で仕上げている。

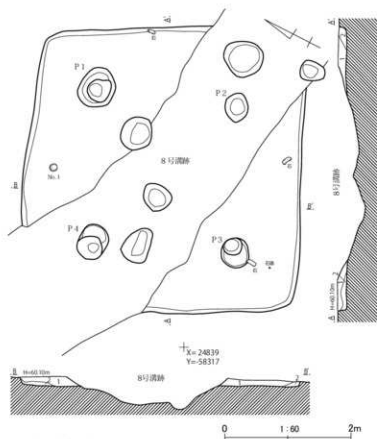
覆土中から土師器小片が少量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期の住居跡と考えられる。

27号住居跡 (第141・142図、 第71表、図版50・73)

B地点の中央、北西寄りで見出しの遺構である。8号溝跡が北西から南東へと抜け、遺構の中央を大きく壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、北東-南西方向で4.60m、北西-南東方向で4.45mである。床面はほぼ平坦で、支柱穴を結ぶ範囲を中心に硬化している。東壁側にカマダがあった可能性を考えているが、とすれば、カマダは壁の中央から著しくずれた位置に想定せざるを得ない。P1～P4は支柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な円形である。深さは、P1が59cm、P2が25cm、P3が74cm、P4が60cmである。他に8号溝跡の主に溝壁から、本住居跡に伴う可能性のあるピットが5個検出されている。

第142図1の坏は北壁近くで出土した。出土遺物から見て、古墳時代終末期の住居跡の可能性はある。

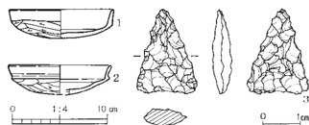


27号住居跡土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。

2層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

第141図 27号住居跡平面・断面図



第142図 27号住居跡出土遺物

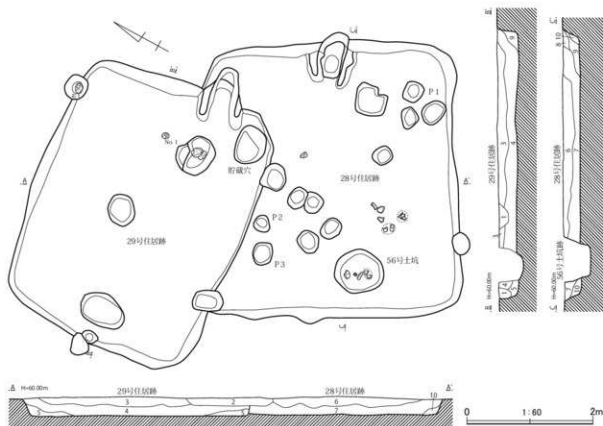
第71表 27号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整・装飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 10.9 底径 — 器高 3.0	丸底。口縁部は外傾気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部へラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色の岩片、石英、角閃石 内外一明赤褐色	完形
2	坏	口径 10.8 底径 — 器高 [3.11]	丸底。口縁部はやや外傾して立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部へラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色・黒色の岩片 外-にぶい赤褐色 内-明赤褐色	1/2残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
3	石鏝	長さ2.25、幅1.62、厚さ0.55、重さ1.31g	チャート。平基無茎。			完形

28号住居跡 (第143・144図、図版50)

B地点の南西半の西縁近くで検出した遺構である。29号住居跡、56号土坑に切られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅丸方形である。規模は、主軸方向で4.35m、副軸方向での現存値は3.16mである。主軸方位はN-64°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。位置、深さから見て、P1~P3が柱穴の候補になる。上端での平面形はやや不整な円形で、深さは、P1が20cm、



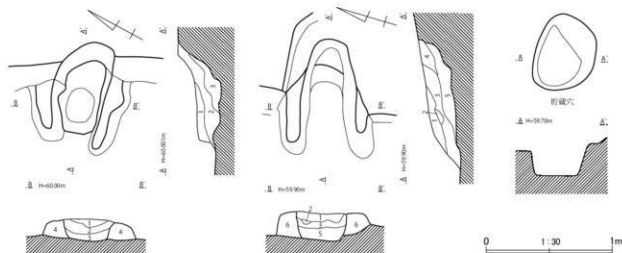
28・29号住居跡土層注記

- | | |
|--|---|
| <p>1層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含み、炭化物粒を微量含む。1~5層は、29号住居跡覆土。</p> <p>2層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。</p> <p>3層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。</p> <p>4層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。</p> <p>5層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。</p> | <p>6層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。6~10層は、28号住居跡覆土。</p> <p>7層：黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。</p> <p>8層：暗灰褐色土層。暗灰褐色粘土ブロック、焼土粒を微量含む。</p> <p>9層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、灰白色粘土ブロックを均一に含む。</p> <p>10層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。</p> |
|--|---|

第143図 28・29号住居跡平面・断面図(1)

第72表 29号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 10.5 — 底径 — 器高 3.4	丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は短く内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部下位~底部ナデ。	白色の岩片、石英、角閃石 内外一明赤褐色	完形
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	回石	長さ17.7、幅14.3、厚さ7.9、重さ1678g	特徴：中央部が円形状に最深2cmほど窪む		石材：角閃石安山岩	完形



28号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗灰褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、暗灰褐色粘土粒を均一に含む。
- 2層：黒褐色土層。ロームブロック、焼土ブロックを全体に均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 4層：暗灰褐色土層。ロームブロック、暗灰褐色粘土ブロックを均一に含む。カマド袖構築材。

29号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、淡灰褐色粘土粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗赤褐色土層。焼土ブロック。
- 3層：黒灰色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 4層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 5層：黒褐色土層。ローム粒を均一に含む、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 6層：暗灰褐色土層。淡灰褐色粘土ブロックを均一に含む。カマド袖構築材。

第144図 28・29号住居跡平面・断面図(2)

P 2が22cm、P 3が21cmである。

カマドは、東壁中央に設けられている。燃焼部の平面形は歪な楕円形で、全長は74cm、中央での横幅は41cmである。縦断面形は船底形に近い。被熱赤化の痕跡は、軽微である。袖は淡灰褐色粘土のブロックを均一に含む土を固めて造られている。

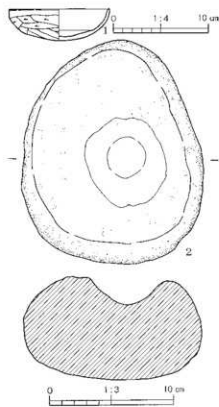
住居跡の南半に土師器片を主とする遺物が散漫に出土しているが、いずれも床面よりやや浮いた位置で出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期の住居跡であろうか。

29号住居跡 (第143～145図、第72表、図版51・74)

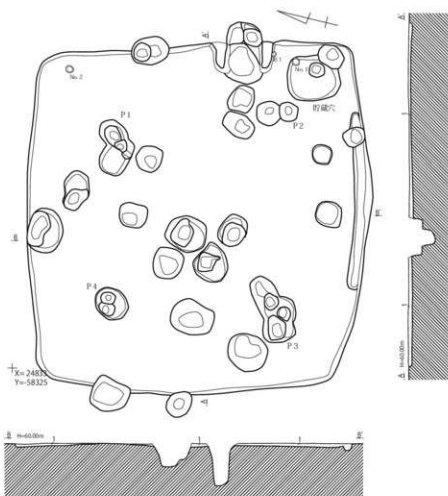
B地点の南西半の西縁近くで検出した遺構である。28号住居跡を壊して造られている。この一帯は、後代のピットが集中しており、床面で検出したピットの中には、本住居跡に伴わないものも含まれる可能性がある。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅丸長方形である。規模は、主軸方向で4.44m、副軸方向で3.48mである。主軸方位はN-86°-Eである。

床面には微妙な凹凸があるが、おおむね平坦である。床面中央

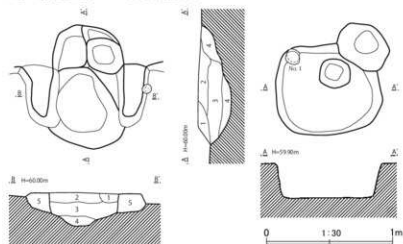


第145図 29号住居跡出土遺物



30号住居跡土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。



30号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ロームブロックを微量、焼土粒を均一に含む。
- 3層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 5層：暗灰褐色土層。灰褐色粘土ブロックを多量に含む。カマド袖構築材。

第146図 30号住居跡平面・断面図

を中心に硬化している。

カマドの袖脇の土坑は、貯蔵穴であろう。上端での平面形は楕円形で、底面は至な半月形である。長径58cm、短径49cm、深さ21cmである。

カマドは、東壁の南東隅寄りにやや斜交して付設されている。燃烧部に掘り込みをもたず、奥壁に向かって斜面をなすような形態である。全長は90cm、燃烧部の横幅は43cmである。左袖側壁の一部がわずかに赤化している以外、被熱赤化の痕跡は見られない。

出土遺物から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。

30号住居跡（第146・147図、第73表、図版51・52・74）

B地点の中央、西寄りで検出した遺構である。全体に覆土も浅く、残存状態は良好ではない。また、床面で多数のピットを検出したが、後代のピット群と重複しているらしく、本住居跡に伴わないものが多いように思われる。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや胴の張る方形、ないしは隅丸方形である。規模は、主軸方向で5.53m、副軸方向で5.51mである。主軸方位はN-77°-Eである。床面はほぼ平坦で、主柱穴を結ぶ範囲内を中心に硬化が顕著である。南壁中央部分のみ壁溝が走る。位置、深さを勘案するなら、P1~P4が主柱穴と考えられる。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。P1~P3は、いずれも他のピットと重複しており、P2に関しても、底面が2つあるなど複雑である。深さは、P1が59cm、P2が61cm、P3が54cm、P4が56cmである。南東隅近くの土坑は、貯蔵穴であろう。平面形は、角張った円形と見ておきたい。最長径84cm、深さは40cmである。ほぼ平坦な底面には、ピット状の掘り込みが見られる。

カマドは、東壁のやや南東隅に寄った位置に設けられている。燃焼部の平面形は不整な楕円形で、全長は65cm、横幅は59cmである。奥壁側にはゆるく傾斜した平場が見られる。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、灰褐色粘土ブロックを多量に含む土を固めて造られている。

第147図1の坯は、貯蔵穴のカマド側のへりから、2の坯は、南西隅近くの床面直上で出土した。他に土師器片が少量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期~奈良時代の住居跡と考えられる。



第147図 30号住居跡出土遺物

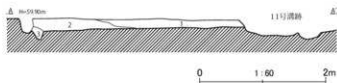
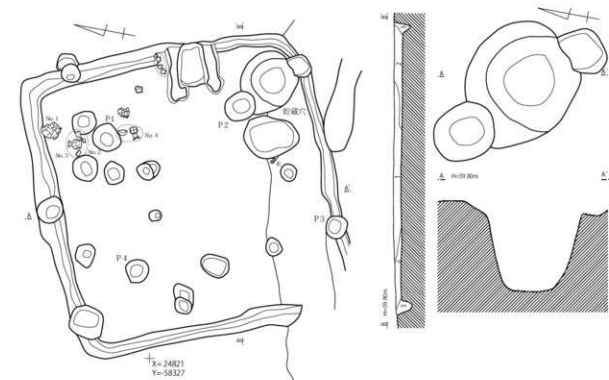
第73表 30号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 10.2 底径 3.4 器高 —	丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は短く内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部へラケズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。底部下位~底部ナデ。	白色の岩片、角四石、褐色の岩片 内外-褐色	ほぼ完形
2	坏	口径 10.0 底径 3.2 器高 —	丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は短く内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部へラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色の岩片、角四石、褐色の岩片 内外-褐色	完形
3	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-破片右端にタテの太い沈線。他はLRの単節縄文。内面-ナデ。	白色・灰色の岩片、角四石、石英など大小砂粒多量 内外-いびい褐色	加曾利E式
4	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-中央に下方ほど間隔が狭くなる2本のナメの沈線。破片左端にも沈線。他は磨耗により調整・装飾不明。内面-ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒多量 内外-いびい褐色	加曾利E式

31号住居跡 (第148・149図、第74表、図版52・53・74)

B地点の南縁沿い、南西隅に近い位置で検出した遺構である。11号溝跡に遺構の南縁を壊されている。この一帯は、後代のピットが集中しており、床面で検出したピットの中には、本住居跡に伴わないものも含まれるようである。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で4.72m、副軸方向で4.99mである。主軸方位はN-68°-Eである。床面はほぼ平坦で、主柱穴を結ぶ範囲内を中心に硬化が顕著である。11号溝跡に壊された部分を除いて、壁溝が全周している。位置、深さから見て、P1~P4を主柱穴と考えてよいであろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1が42cm、P2が34cm、P3が36cm、P4が43cmである。南東隅の土坑は、貯蔵穴である。上端での平面形は、かなり歪な円形で、中央が深くなっている。最大径は104cm、深さ61cmである。



31号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。

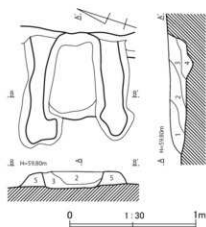
31号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗黄褐色土層。ロームブロック、焼土粒を均一に含む。
- 2層：暗灰色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 3層：黒灰色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 5層：淡黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。カマド袖構築材。

第148図 31号住居跡平面・断面図

カマドは、東壁の中央、やや南東隅寄りに付設されている。燃焼部の平面形は、やや不整な楕円形に近く、全長は69cm、中央での横幅は45cmである。燃焼部は浅い掘り込みをなし、奥壁寄りの底面が浅くくぼむ形態である。全体に被熱赤化の痕跡は軽微であるが、焚口付近の底面、側壁は若干赤化している。袖は、焚口近くがわずかに彎曲する形態で、ロームブロックを多量に混ぜた暗褐色土を固めて造られている。

第149図1～4の甕、台付鉢、高環などは、北東半のP1周辺、カマド脇から出土している。壁際の甕を除いて、いずれも床面直上～下層出土である。出土遺物、覆土から見て、古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第74表 31号住居跡出土土物観察表

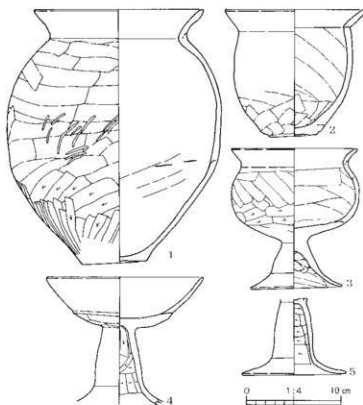
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 17.7 底径 6.6 器高 27.0	口縁部は外反する。胴部はやや張り、最大径を中に有する。底部は上げ底気味。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラナデ後、下位ヘラケズリ。胴中位にヘラ当たり痕あり。底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内-にぶい黄褐色 外-黒褐色	胴部下半 へ底部 1/2欠損
2	小型甕	口径 14.6 底径 5.1 器高 13.5	口縁部は外反する。胴部は張り。底部は平底を見する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデだが磨耗。底部ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内-赤褐色 外-明赤褐色	胴部1/2 欠損
3	台付鉢	口径 13.2 底径 9.5 器高 14.9	口縁部は外反する。体部は張る。底部は短くハの字状に開く。台端部はゆるやかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。器表面割磨。台部ナデ、台端部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。台部へ台端部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内-明赤褐色 外-にぶい赤褐色	ほぼ完形
4	高坏	口径 16.6 底径 9.5 器高 [13.6]	口縁部は外反気味に開く。脚部は下方に向かってやや開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。坏部ヘラナデ。脚部ナデ。裾部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。坏底部ナデ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色・褐色の岩片 内-にぶい褐色 外-赤褐色	裾部欠損
5	高坏	口径 11.1 底径 8.1	胴部は中位にやや膨らみをもつ。裾部はやや外反して開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内-明赤褐色 外-にぶい褐色	脚部のみの 残存

32号住居跡 (第150・151図、第75・76表、図版53・74)

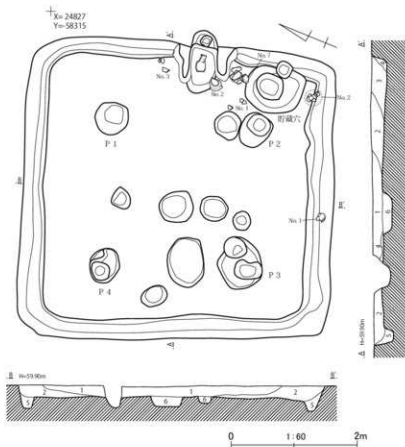
B地点の南西方の南縁寄りで検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形、ないしは隅丸方形である。規模は、主軸方向で4.79m、副軸方向で4.99mである。主軸方位はN-70°-Eである。床面はほぼ平坦で、主柱穴を結ぶ範囲から南壁にかけて明瞭に硬化している。壁溝が全周している。P1~P4は主柱穴であろう。上端での平面形はやや不整な円形、楕円形である。深さは、P1が52cm、P2が48cm、P3が38cm、P4が46cmである。奥壁沿いの南東隅に近接する土坑は、貯蔵穴である。上端での平面形は、不整な円形で、最大径は91cm、深さは48cmである。

カマドは、東壁のほぼ中央に付設されている。奥壁の一部は、ビットにより壊されており、本来の形態が推定しにくい。燃焼部の平面形は、焚口側は楕円形、奥壁側は方形に近い形である。燃焼部の全長は77cm、中央での横幅は44cmである。縦断面形は船底形に近い。被熱赤化の痕跡は、軽微である。袖は淡褐色、淡黄白色の粘土ブロックを混ぜた暗褐色土を固められて造られている。第151図2の甕

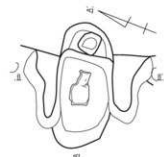


第149図 31号住居跡出土土物



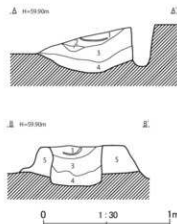
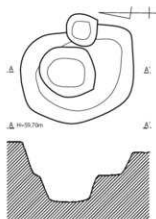
32号住居跡土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、灰白色粘土粒を均一に含む。
- 4層：灰白色粘土層。灰白色粘土ブロックを主とする。
- 5層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 6層：黒褐色土層。ローム粒を微量含む。伴うピットか、床下土坑？



32号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。淡褐色粘土粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗赤褐色土層。焼土ブロックを多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。淡褐色粘土粒、焼土粒均一に含む、淡褐色粘土ブロック、焼土ブロックを微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む、ロームブロック、淡褐色粘土ブロックを均一に含む。
- 5層：淡褐色土層。淡褐色ないしは淡黄白色の粘土ブロックを均一に含む。カマド袖構築材。



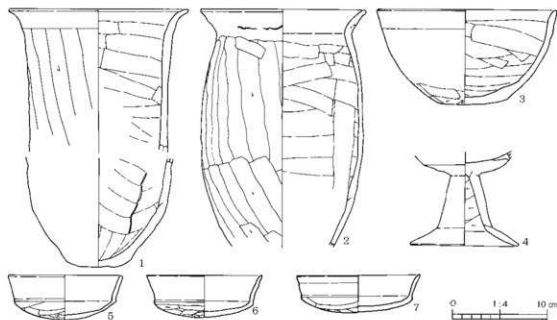
第150図 32号住居跡平面・断面図

第75表 32号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (18.6) 底径 6.2 器高 —	口縁部はゆるやかに外反する。胴部は直線的で、下位にわずかな膨らみ。底部は丸みを帯びた平底。粘土粒積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ、下半は器表面が磨耗。底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、礫、片岩 内-にぶい黄褐色 外-にぶい褐色	口縁部へ胴部上位1/4、胴部下位へ底部3/4残存
2	甕	口径 17.2 底径 — 器高 [25.2]	口縁部は外反する。胴部は中位にわずかな膨らみをもつ。粘土粒積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、石英、礫 内外-にぶい黄褐色	口縁部へ胴部4/5残存

第76表 32号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	鉢	口径 18.7 底径 6.6 器高 10.0	口縁部はわずかに外傾する。底部は丸底気味で厚みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデだが磨耗。胴部下端～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、石英、片岩内・にぶい赤褐色外・灰褐色	2/3残存
4	高坏	口径 — 底径 11.4 器高 [10.0]	胴部は下方に向かって開く。胴部は厚みをもってハの字状に開く。粘土紐積み上げによる成形。	外面一坏底部ナデだが磨耗。胴部ナデ。裾部ヨコナデ。内面一坏底部ナデだが磨耗。胴部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・褐色・褐色の岩片 内外一明赤褐色	坏部、裾部1/2欠損
5	坏	口径 12.0 底径 — 器高 4.7	丸底。体部は大きく開き、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外傾して立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	褐色の岩片多・白色・黒色の岩片 内外一褐色	口縁部1/4欠損
6	坏	口径 12.2 底径 — 器高 4.5	丸底。体部は大きく開き、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	褐色の岩片多、白色・黒色の岩片 内一褐色 外一にぶい褐色	口縁部一部欠損
7	坏	口径 13.0 底径 — 器高 3.9	丸底。体部は大きく開き、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外反して立ち上がり、上位に浅い凹線がめぐる。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	褐色・白色の岩片 内一にぶい褐色 外一にぶい褐色	口縁部1/3欠損



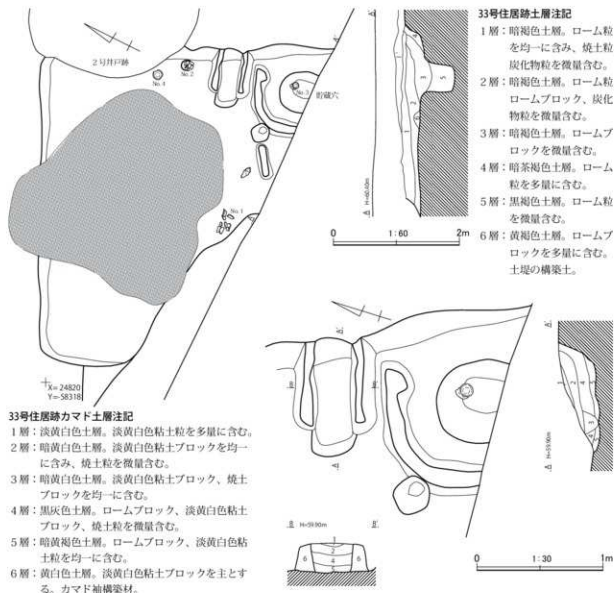
第151図 32号住居跡出土遺物

は袖襷であり、右袖に埋め込まれていたものであろう。

第151図1・7の甕、坏は、カマドから貯蔵穴にかけての範囲から出土した。5の坏は、南壁中央の中層から出土した。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

33号住居跡 (第152・153図、第77表、図版54・74)

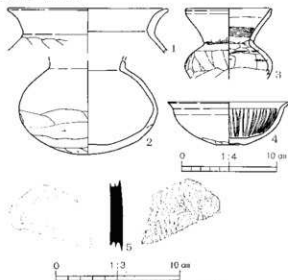
B地点の南西半の南縁で検出した遺構である。2号井戸跡、11号溝跡に壊されている。また、遺構の北半は、攪乱により大きく壊されており、南半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。



第152図 33号住居跡平面・断面図

平面形は、方形になるうか。規模は、主軸方向での推定値で5.2m前後、副軸方向での現存値は3.80mである。主軸方位はN-67°-Eである。床面にはやや凹凸が目立ち、カマド前面を中心に硬化している。カマドの南脇の土坑は、貯蔵穴であろう。上端での平面形は、円形で、径68cm前後、深さは53~58cmである。貯蔵穴を取り巻いて低平な土堤が設けられている。

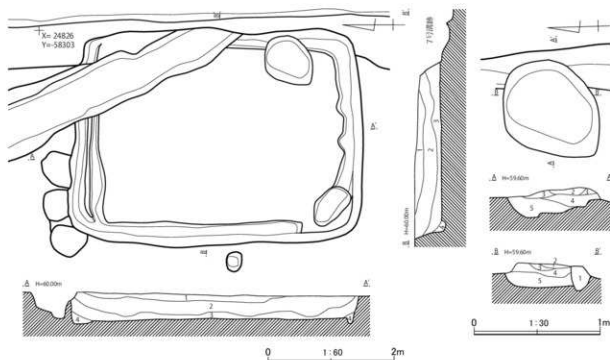
カマドは、東壁のほぼ中央かと思われる位置に付設されている。燃烧部の平面形は、長方形で、燃烧部の全長は95cm、中央での横幅は36cmである。縦断面形は船底形に近いが、奥壁寄りがやや高くなって



第153図 33号住居跡出土遺物

第77表 33号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 17.0 底径 ー 器高 [4.8]	口縁部は外反する。胴部は垂る。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片 内外一明褐色	口縁部へ 胴部上位 3/4残存
2	壺	口径 ー 底径 ー 器高 [9.9]	胴部は中位に最大径、やや偏平気味。丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部下半へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。	白色の岩片 内一にぶい褐色	口縁部・ 胴部1/2 欠損
3	小型壺	口径 9.0 底径 ー 器高 [7.4]	胴部は短く直立する。胴部は中位で垂る。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ、端部に弱い凹線。頸部タテハケ。以下ヘラナデ。内面一口縁部上位ヨコナデ。以下ヘラナデ。一部ハケ。頸部指ナデ。	白色の岩片、石英、褐色の岩片 内外一にぶい褐色	口縁部へ 胴部上半 2/3残存
4	坏	口径 12.9 底径 2.9 器高 4.5	上げ底気味の平底。体部は内彎気味に開き、口縁部は短く外反する。	外面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。体部下端へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ後、放射状暗文。	白色・褐色の岩片・麻、角閃石 内一赤褐色 外一にぶい赤褐色	ほぼ完形
5	須恵器壺?	口径 ー 底径 ー 器高 ー	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。局部的にかすかな叩き目。内面一ナデ。	灰色・黒色の岩片などの細砂 内外一灰色	



34号住居跡土層注記

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 4層: 暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。

34号住居跡カマド土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土ブロックを微量含む。
- 2層: 暗灰褐色土層。淡灰色粘土粒を均一に、焼土粒を微量含む。
- 3層: 暗赤褐色土層。焼土粒、焼土ブロックを均一に含む。
- 4層: 暗灰褐色土層。淡灰色粘土ブロック、焼土ブロックを均一に含む。
- 5層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

第154図 34号住居跡平面・断面図

いる。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、淡黄白色の粘土ブロックを固められ造られている。カマドの左脇から第153図4の坏が、中央付近から1の甕が出土している。3の小型直口壺は、貯蔵穴上層出土である。出土遺物、覆土から見て、古墳時代中期の住居跡と考えられる。

34号住居跡 (第154・155図、第78表、図版54・74)

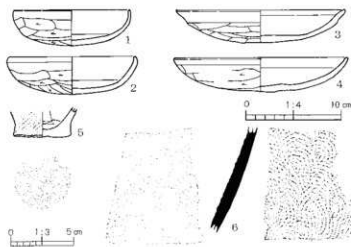
B地点の中央、南東寄りで見出した遺構である。7・9号溝跡に壊され、また、時期の新しいピツ

トにより北壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長方形、ないしは隅丸長方形である。規模は、主軸方向で4.60m、副軸方向で3.37mである。主軸方位はN-90°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。掘り込みは深く、壁の立ち上がりも急峻である。北東、南西隅を除いて、壁溝が巡らされている。

カマドは、東壁の南東に大きく寄った位置に設けられている。カマドの痕跡と言ってもよいのかもしれない。燃焼部の平面形は、歪んだ楕円形、あるいは卵なりに近く、長径は93cm、短径は72cmである。鍋底のような形に掘り込まれており、焚口側がいくらか深くなっている。赤化の痕跡は軽微であるが、側壁は、被熱により硬化しているようである。

覆土中よりか土師器小片が少量出土している。出土遺物から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。



第155図 34号住居跡出土遺物

第78表 34号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	杯	口径 12.2 底径 — 器高 4.8	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外-褐色	2/3残存
2	杯	口径 13.4 底径 — 器高 4.0	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外-褐色	4/5残存
3	皿	口径 17.8 底径 — 器高 3.4	丸底。体部は大きく開き、口縁部は緩やかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外-褐色	4/5残存
4	皿	口径 18.3 底径 — 器高 3.7	丸底。体部は大きく開き、口縁部は緩やかに内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外-にふい赤褐色	2/3残存
5	小型甕	口径 — 底径 4.6 器高 (2.2)	胴部は外傾し立ち上がり、底面は凸面をなす。粘土組織み上げによる成形。	外面-付加象と思われる縄文。底面に木葉痕。内面-粗いヨコ、ナメのナデ。	白色・灰色の岩片、角閃石、石英などの大小砂粒、小礫 外-にふい褐色 内-にふい褐色	弥生時代後期
6	須恵器甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面-叩き後、ヨコ、ナメの残いハケ。局所的にかすかな叩き目。内面-青海波様の当て具痕。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 外-灰白色 内-灰黄褐色	

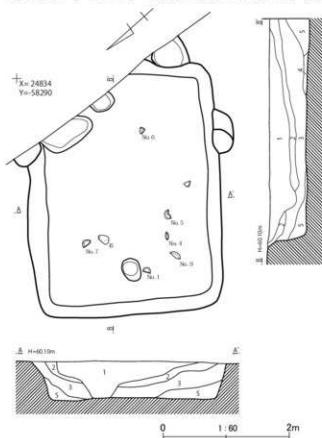
35号住居跡 (第156・157図、第79表、図版54・74)

B地点の東縁沿い中央で検出した遺構である。72号土坑により北東壁の一部を壊されている。東隅周辺は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長方形である。規模は、主軸方向で3.67m、副軸方向で3.10mである。主軸方位はN-50°-Wである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。壁高は60cmを超え、壁の立ち上がりもかなり急峻である。

北東壁の南東端はえぐれており、その部分を中心に、調査区界である東側の壁面に接するあたりシ

ルト質のロームや焼土粒、焼土ブロックを多量に含む土が観察できた。よって北東壁のえぐれは、カマドの一部である可能性がある。また、えぐれの裾は、わずかに隆起しており、袖の痕跡になるのかもしれない。ただし、えぐれた部分の内壁には、被熱赤化の痕跡は顕著ではない。



第155図 1・5・7の坏などが中央から出土しているが、いずれも床面よりかなり浮いた位置である。他に土師器片などがかなりの量出土している。出土遺物から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。

36号住居跡 (第158・159図、第80・81表、図版55・75)

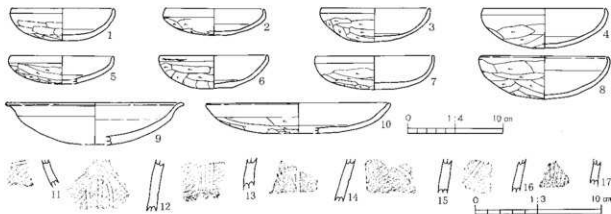
B地点の東縁寄りの中央で検出した遺構である。西壁の一部を攪乱により壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、微妙に胴の張る方形である。規模は、主軸方向で4.83m、副軸方向で5.20mである。主軸方位はN-72°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央から入口部にかけて硬化している。壁溝が全周している。P1～P4は主柱穴である。上端での平面形はやや不整な円形で、深さは、P1が50cm、P2が90cm、P3が39cm、P4が48cmである。南東隅の土坑は、貯蔵穴である。主柱穴と見られるP2と重複している。上端での平面形はやや歪な円形で、底面はかなり不整形である。最大径は131cm、深さは39cmである。

35号住居跡土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：黒色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。淡褐色粘土ブロックを均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

第156図 35号住居跡平面・断面図



第157図 35号住居跡出土遺物

第79表 35号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	坏	口径 底径 器高	(11.0) — 3.4	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上～中位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角四石 内外—褐色	1/2残存
2	坏	口径 底径 器高	10.5 — 2.8	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外—にぶい褐色	1/3残存
3	坏	口径 底径 器高	11.4 — 3.5	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外—にぶい黄褐色	2/3残存
4	坏	口径 底径 器高	13.0 — 4.2	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片 内—にぶい褐色 外—にぶい橙色	3/4残存
5	坏	口径 底径 器高	11.0 — [3.0]	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片 内—にぶい褐色 外—にぶい赤褐色	1/2残存
6	坏	口径 底径 器高	11.4 — 3.5	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片 内—にぶい褐色 外—にぶい赤褐色	3/4残存
7	坏	口径 底径 器高	12.4 — 3.5	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ、以下ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外—にぶい褐色	一部欠損
8	坏	口径 底径 器高	13.4 — 4.5	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	白色の岩片、角四石 内—にぶい褐色 外—にぶい褐色	1/2残存
9	皿	口径 底径 器高	18.6 — [4.4]	丸底。体部は大きく開く。口縁部は緩やかに反折し、端部で強く屈曲する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリだが磨耗。内面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	白色の岩片、石英、角四石 内外—にぶい褐色	1/2残存
10	皿	口径 底径 器高	19.4 — [2.2]	丸底。体部は大きく開く。口縁部は外傾し、端部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色の岩片、角四石 内—褐色 外—にぶい褐色	1/3残存
11	壺	口径 底径 器高	— — —	頸部はゆるやかに彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—破片上位に沈線、以下皿の単節縄文。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片、先沢のある岩片などの細砂 内外—にぶい褐色	弥生時代後期?
12	深鉢	口径 底径 器高	— — —	頸部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—中央に沈線による軸線の入る楕円文。破片右上にナメの沈線。区画文の内外に皿の単節縄文。破片上半は縄文が磨消されているかに見える。内面—ナデ。	灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒。 内—にぶい褐色 外—にぶい黄褐色	堀之内1式 36住14と同一個体か?
13	深鉢	口径 底径 器高	— — —	頸部はゆるやかに彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文施文後、2条のタテの沈線。内面—ナデ。	白色・黒色の岩片などの細砂 内外—にぶい黄褐色	堀之内1式 14、36住13と同一個体か?
14	深鉢	口径 底径 器高	— — —	頸部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—中央にタテの沈線。沈線の両側は磨消。破片右端にも沈線。他は皿の単節縄文。内面—ナデ。	白色・灰色・黒色の岩片、雲母などの大小砂粒 内外—にぶい褐色	堀之内1式 13、36住13と同一個体か?
15	深鉢	口径 底径 器高	— — —	頸部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—破片左端にタテの沈線、右端に弧状の沈線。他は皿の単節縄文。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外—にぶい褐色	堀之内1式
16	深鉢	口径 底径 器高	— — —	頸部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文施文後、ナメの微妙に彎曲した沈線。内面—ナデ。	灰色・赤褐色の岩片などの細砂 内外—にぶい褐色	堀之内1式
17	深鉢	口径 底径 器高	— — —	頸部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—皿の単節縄文。内面—ナデ。	灰色・黒色の岩片などの細砂 内外—にぶい褐色	堀之内1式

カマドは、東壁の中央に付設されている。燃焼部の平面形は楕円形で、全長は92cm、中央での横幅は56cmである。縦断面形は船底形に近いが、焚口、奥壁ともにゆるやかに立ち上がる。被熱赤化は顕著ではないが、奥壁寄りの底面は、被熱し硬くなっている。袖は、淡褐色の粘土ブロックを含む土を



36号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 3層：淡黄褐色土層。淡黄褐色粘土ブロックを均一に含み、焼土ブロックを微量含む。
- 4層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。粘性、しまりともない。
- 6層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。

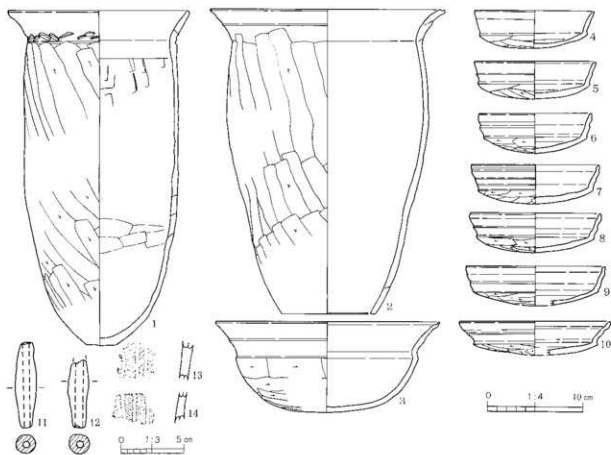
36号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗茶灰色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：淡褐色土層。ロームブロック、炭化物粒を微量、淡褐色粘土粒、焼土粒を均一に含む。
- 3層：暗赤褐色土層。焼土ブロックを多量に含む。
- 4層：暗灰褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性、しまりともない。
- 6層：淡褐色土層。淡褐色粘土ブロックを多量に含む。カマド袖構築材。

第158図 36号住居跡平面・断面図

固めて造られている。

主に住居跡の東半からカマド周辺にかけて、土師器、あるいは土師器大型片が出土している。第159図1の甕はカマド右袖脇から、8の坏は中央から出土している。11の土鍾は南西隅近くの床面直上から出土した。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期～終末期の住居跡と考えられる。



第159図 36号住居跡出土遺物

第80表 36号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.0 底径 (3.2) 器高 35.7	口縁部は外反し、端部で短く立ち上がる。胴部は膨らみをもたない。底部は丸みを帯びた平底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部へ頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、燧 内-に白い褐色 外-に白い黄褐色	2/3残存
2	瓶	口径 (24.6) 底径 (9.9) 器高 32.5	口縁部は外反し、中位に弱い段を有する。口唇部内面に弱い凹線がめぐる。筒状を呈し、胴部中位にわずかな膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片・褐色・片岩・石英 内-灰褐色 外-に白い褐色	1/2残存
3	鉢	口径 (23.8) — 底径 — 器高 9.6	丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反し、上端部で内彎する。中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。 内外面全体に黒色処理。	白色の岩片、角閃石 内-灰褐色 外-褐灰色	2/3残存
4	坏	口径 12.6 — 底径 — 器高 4.0	丸底。体部は丸みもち、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反し、上位に弱い凹線がめぐる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片 内外-に白い褐色	2/3残存
5	坏	口径 12.8 — 底径 — 器高 4.0	丸底。体部は丸みもち、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾し、中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。 内外面全体に黒色処理。	白色・褐色の岩片 内外-黒褐色	口縁部 1/2欠損
6	坏	口径 (12.0) — 底径 — 器高 4.3	丸底。体部は丸みもち、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾し、中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。 外面口縁部・内面全体に黒色処理。	白色の岩片、石英 内-黒色 外-に白い褐色	1/4残存

第81表 36号住居跡出土遺物観察表(2)

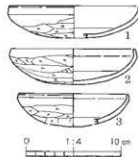
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
7	坏	口径 13.5 底径 一 器高 4.2	丸底。体部は丸みをもち、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾し、段を3段有する粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部回転ヘラナデ。内外面全体に黒色処理。	白色・褐色の岩片・雲母 内外-にぶい褐色	2/3残存
8	坏	口径 13.8 底径 一 器高 4.2	丸底。体部は丸みをもち、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾し、中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。外面口縁部・内面口縁部上に黒色処理。	白色・褐色の岩片・雲母 内外-にぶい褐色 外-にぶい黄褐色	口縁部損 1/3欠損
9	坏	口径 14.6 底径 一 器高 (4.2)	丸底。体部は丸みをもち、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾し、中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。外面全体・内面口縁部に黒色処理。	白色・褐色の岩片・片岩 内外-にぶい褐色 外-灰黄褐色	4/5残存
10	坏	口径 16.0 底径 一 器高 (3.6)	丸底。体部は丸みをもち、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は強外傾し、中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。外面口縁部・内面全体黒色処理。	白色・褐色の岩片 内外-灰黄褐色	口縁部・ 底部一部 欠損
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
11	土鏝	長さ6.8、幅1.6、重さ14.706g 特徴：手捏ね成形、ナデ 胎土：白色の岩片 色調：褐色				完形
12	土鏝	長さ[5.3]、幅1.7、重さ10.382g 特徴：手捏ね成形、ナデ 胎土：白色の岩片 色調：にぶい赤褐色				底部欠損
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
13	深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	胴部は微妙に彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-丸の単筋縄文施文後、5条のタテの沈線。左端の沈線はY字状に絞れる。内面-ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外-にぶい褐色	壺之内1式 35注13・ 14と同一 個体か?
14	深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-丸の単筋縄文施文後、3条のタテの沈線。縄文は所々磨消されている。内面-ナデ。	灰色・黒色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外-にぶい黄褐色	壺之内1式 35注12と 同一個体 か?

37号住居跡 (第160・161図、図版56・75)

B地点の東縁沿い、南に寄った位置で検出した遺構である。38号住居跡に切られている。東側の大部分は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

いずれも現存値になるが、規模は、北東-南西方向で2.10m、北西-南東方向で1.50mである。北西壁の指す方向は、N-29°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。壁溝が設けられている。

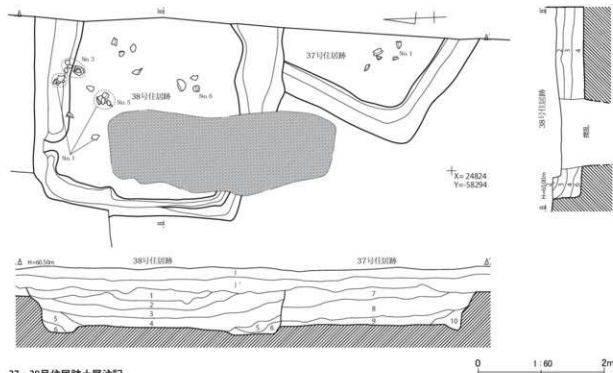
第160図1～3の坏などの破片は、覆土上層から出土している。他に土師器小片がやはり覆土中より少量出土している。出土遺物、覆土から見て、



第160図 37号住居跡出土遺物

第82表 37号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (13.8) 底径 一 器高 (3.4)	丸底。体部は内傾し、口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片・石英 内外-にぶい褐色	1/3残存
2	坏	口径 13.1 底径 一 器高 3.7	丸底。体部は内傾し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外-にぶい褐色	2/3残存
3	坏	口径 11.6 底径 一 器高 [3.2]	丸底。体部は内傾し、口縁部は短く内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面-ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内外-にぶい褐色 外-にぶい黄褐色	1/2残存



37・38号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。1～6層は、38号住居跡覆土。
 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒を微量含む。
 3層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
 4層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含み、焼土粒、焼土ブロックを微量含む。
 5層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒微量含む。
 6層：暗茶褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
 7層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。7～10層は、37号住居跡覆土。
 8層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
 9層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
 10層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒を微量含む。

第161図 37・38号住居跡平面・断面図

奈良時代の住居跡と考えるとよいであろう。

38号住居跡 (第161・162図、第83・84・85表、図版56・75)

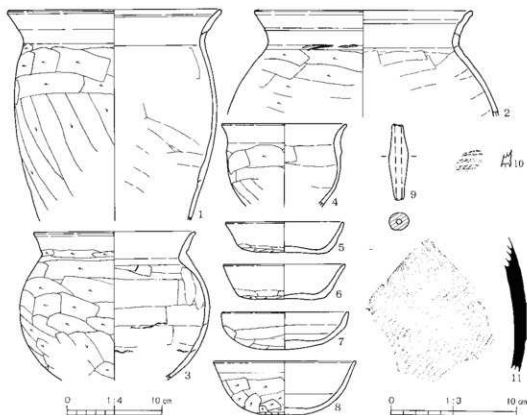
B地点の東縁中央、やや南に寄った位置で検出した遺構である。37号住居跡を切っており、東半分は調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅丸長方形になるのか。東壁側にカマドがあると推定してよいであろう。規模は、主軸方向での現存値が3.89m、副軸方向で3.19mである。主軸方位はN-94°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。北東隅近くの一角を除いて、壁溝が巡らされている。

第162図5・6の坏などの土師器、土師器片の多くは、覆土上・中層出土である。出土遺物、覆土から見て、奈良時代の住居跡と考えられる。

第83表 38号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (22.2) 底径 — 器高 [22.2]	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土経積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片・褐色 内-に深い赤褐色 外-明赤褐色	口縁部～胴部中位 2/3残存



第162図 38号住居跡出土遺物

第84表 38号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	甕	口径(23.0) 底径— 器高[11.0]	口縁部は外反し、外面中位に段をもち、内面上位に弱い凹線がめぐる。胴部は大きく張る。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内—にぶい赤褐色 外—褐色	口縁部～胴部上位 1/4残存
3	甕	口径(17.0) 底径— 器高[15.7]	口縁部は外反し、端部はわずかに屈曲する。胴部は中位が張る。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 内—にぶい褐色 外—灰褐色	口縁部～胴部1/2 残存
4	小型甕	口径(13.2) 底径— 器高[8.8]	口縁部は外反する。胴部は中位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリだが磨耗。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石 内—褐灰色 外—灰褐色	口縁部～胴部1/2 残存
5	坏	口径12.5 底径9.2 器高3.4	やや丸みを帯びた平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～体部ヨコナデ。体部下端ナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	口縁部一部欠損
6	坏	口径12.8 底径9.0 器高3.7	やや丸みを帯びた平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～体部ヨコナデ。体部下端ナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部回転ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	一部欠損
7	坏	口径13.4 底径— 器高4.0	丸底。体部は浅く開き、口縁部は外傾気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリだが磨耗。内面—口縁部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—褐色	2/3残存
8	坏	口径(15.0) 底径— 器高5.6	丸底。体部は内彎し、口縁部はわずかに外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石 内—にぶい褐色 外—明赤褐色	2/3残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
9	土埴	長さ6.0、幅1.5、重さ9.91g	特徴：手捏ね成形、ナデ 胎土：白色の岩片、角閃石 色調：明赤褐色			ほぼ完形

第85表 38号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
10	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—LRの単筋縄文施文後、4条以上の横位の沈線。内面—ナデ。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒 内外—にぶい橙色	堀之内1式
11	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面—平行叩き目。内面—かすかな凹凸のある当て具痕。破片下半に煤付着。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外—灰白色	

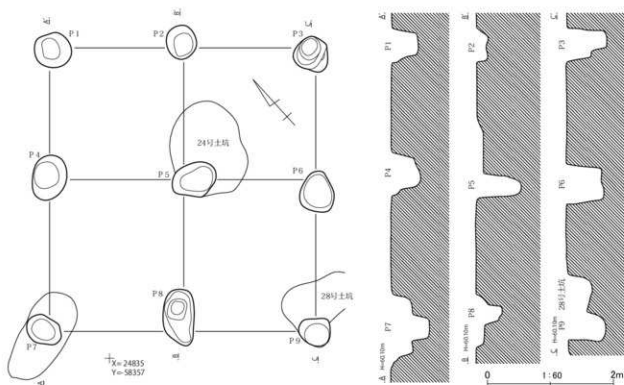
2 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第163図、図版57)

A 2地点の中央、南寄りで見出した遺構である。23・24・27・28号土坑と重なっており、24・28号土坑と本遺構の柱穴が直接切り合うが、新旧関係については、確認を得ることができなかった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

ほぼ全体が正方形をなす2間×2間の総柱建物跡である。柱心間での規模は、北東—南西方向で4.19~4.46m、北西—南東方向で4.13~4.35mである。北東—南西軸の方向は、N-43° - Eを指す。柱心間での柱間の長さは、北東—南西方向で2.00~2.25m、北西—南東方向で1.95~2.39mとややばらつきがある。

柱穴の平面形は、総じてやや不整な円形、楕円形である。最小のP 2が最大径55cm、最大のP 8は、最大径が92cmである。U字形、バケツ形に掘り込まれており、底面に凹凸が目立つようである。深さ



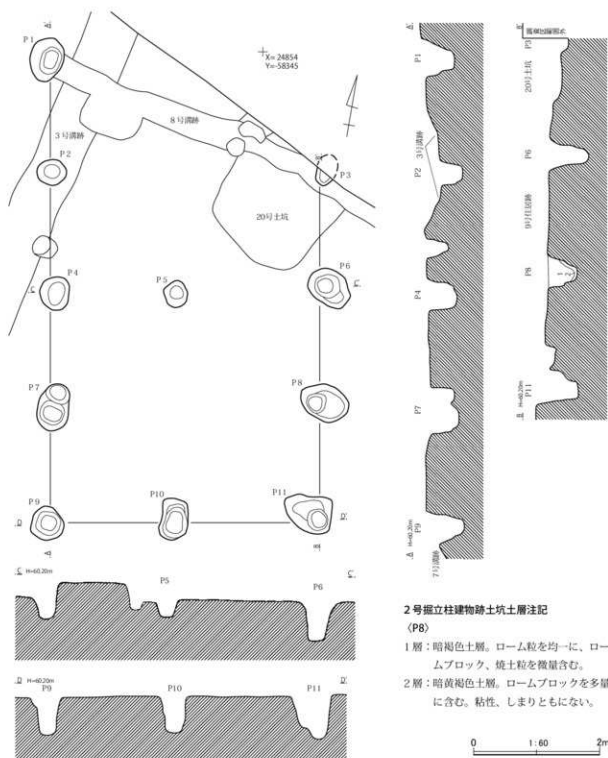
第163図 1号掘立柱建物跡平面・断面図

は、P1～P3が19～63cm、P4～P6が46～64cm、P7～P9が53～59cmである。

覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構の可能性がある。

2号掘立柱建物跡 (第164・165図、第86表、図版57・75)

A2地点北縁沿い、北東端近くで検出した遺構である。9・10号住居跡、20号土坑、3・8号溝跡



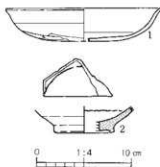
第164図 2号掘立柱建物跡平面・断面図

と重複する。確認できた範囲では、9・10号住居跡に後出する遺構のようである。南側は、調査範囲外になるが、一応西側の並びをもって建物跡の範囲が終わるものとして記載する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

南北に長い2間×4間の側柱建物跡である。柱心間での規模は、南北方向で7.38m、東西方向で4.26~4.35mである。長軸の方向は、N-9°-Wを指す。柱心間での柱間の長さは、南北方向で1.80~1.96m、東西方向で2.00~2.28mとややばらつきがある。

柱穴の平面形は、総じて不整な円形、楕円形である。P5は、補助的な柱の柱穴と考えたが、位置以外強い根拠があるわけではない。最小のP2の径が46cm、P6・P8・P11は、最大径が70~80cmと上端での大きさにばらつきがあるが、柱穴本体の掘り込みは、30~40cmくらいにおさまりそうである。おおむね円柱形、バケツ形に掘り込まれており、底面には凹凸が目立つようである。住居跡と重複するため、深さはかなり区々に見えるが、底面の高さに大きな違いはないようである。総じて住居跡外の確認面から50~60cmの深さの柱穴が多いと言える。覆土が観察できたのは、P8のみであるが、住居跡の覆土などと大きな違いのない暗褐色土であった。

一部の柱穴から、少数の土師器小片が出土しているのみである。重複関係、覆土、および出土遺物から見て、中世の遺構の可能性が高いと考えてよいであろう。



第165図 2号掘立柱建物跡出土遺物

第86表 2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	皿	口径 (16.4) 底径 — 器高 3.4	丸底。口縁部は大きく外反する。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部上位ナゲ。体部上位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナゲ。底部ナゲ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内外一褐色	1/4残存
2	白磁碗	口径 (6.4) 底径 (2.8) 器高	高台は角形。底部は厚手である。内面底部に沈線が1本めぐる。ロクロ成形。	外面-体部下位ロクロナゲ。体部下位~底部右回転ヘラケズリ。内面-ロクロナゲ。高台削り出し。	内外一灰黄色	体部下位~高台部 1/5残存

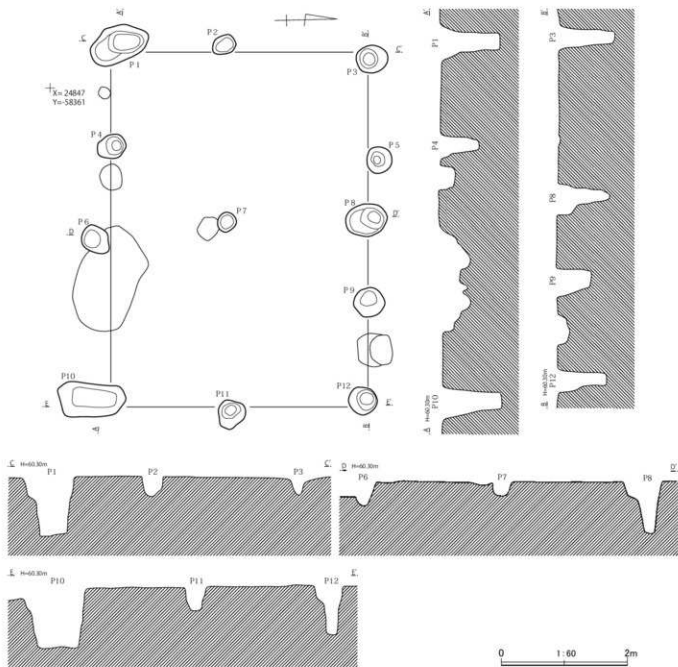
3号掘立柱建物跡 (第166図、図版58)

A2地点北西部のほぼ中央、北寄りに検出した遺構である。11号住居跡を切って造られているようである。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

東西に長い側柱建物跡である。南側の柱穴の並びから、2間×3間の建物と見ることできるが、北側の並びは、柱数、柱の間隔ともかなり不規則であり、問題が残る。柱心間での規模は、東西方向で5.45~5.65m、南北方向で4.20~4.53mかなり区々である。長軸の方向は、ほぼ真西を指す。

柱穴の平面形は、総じて不整な円形、楕円形である。上端での大きさには、かなりばらつきが見られるが、円柱状の柱穴本体は、径30、40cmのものが多い。P10は、時期の異なる土坑などが重複していた可能性が高い。

円柱状に底面まで直に近く掘り込まれているもの、先細りとなるもの、丸みをもって浅く掘り上げられているものと種々あるが、おおむね深いものは、側壁も直に近く、整っている。深さは、P1が95cm、P2が35cm、P3が87cm、P4が62cm、P5が62cm、P6が39cm、P7が21cm、P8が82cm、P9が54cm、P10が94cm、P11が58cm、P12が77cmである。深さが50cm以上の柱穴は、P1・P3~



第166図 3号掘立柱建物跡平面・断面図

P5・P8～P12の9個で、P2・P6・P7の3個が深さ50cm未満の柱穴ということになる。

一部の柱穴から、少数の土師器小片が出土している。覆土からは判断がむつかしいが、不規則な柱穴の並びなどから、あるいは近世、あるいはそれ以降の遺構の可能性があるとしたい。

3 井戸跡

1号井戸跡 (第167・168図、第87表、図版58)

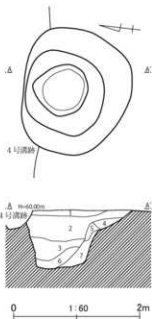
A2地点の南半中央で検出した遺構である。16号住居跡を切っており、4号溝跡に側壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。上端での平面形は、やや不整な円形で、

最大径は197cmである。開口部が大きく開き、以下底面に向かってすぼまり、底面がやや深く掘りくぼめられている。最深处での深さは、90cmである。

覆土は、上層が黒みのやや強い暗褐色土で、下部に行くほど黒みが増し、粘性も強くなる。最下層には、黒みの強い暗褐色土と白みの強いロームが薄層をなしラミナを形成していた。

覆土からは図示した須恵器片をはじめとして、土師器片が少数出土している。

井戸跡としては浅いが、溜め井、水溜めの一種の可能性があろう。重複関係、覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えたい。



第167図 1号井戸跡平面・断面図



第168図 1号井戸跡出土遺物

1号井戸跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒を含む。以下の土層は、全体にしまっており、下半は粘性次第に増す。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、5~20mm大のロームブロックをモヤモヤ雲状に含み、1層より黒みが強い。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、モヤモヤしたローム粒、5~30mm大のロームブロックが多い。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、50~60mm大のロームブロックを含む。
- 5層：褐色土層。2層に近いが、ローム粒が多い。
- 6層：褐色土層。3層に近いが、全体に白みがかかったロームが混じる。かなり粘性が強い。
- 7層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土とロームの薄層が斜めのラミナをなす。かなり粘性が強い。

第87表 1号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形釜・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 甕	口径 (34.9) — 底径 — 器高 [7.3]	形釜は外反する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。自然軸。内面—ロクロナデ。自然軸。	白色・黒色の岩片 内外—灰色	口縁部 1/16残存

2号井戸跡 (第169・170図、図版58)

B地点の南縁近くの中央で検出した遺構である。33号住居跡を切っており、58号溝跡に側壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。掘削作業の安全性を考え、底面まで掘削することができなかった。

上端での平面形は、やや不整な円形で、最大径は275cmである。開口部が開き、中段以下底面に向かってややすぼまる筒状の形態の井筒となるのであろう。調査を行なった最下面の深さは、158cmである。覆土の上部には、白色粘土ブロック、A s-Bが顕著に含まれ、下部には、ローム粒、ロームブロックが含まれるようである。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と思われる。

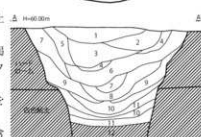
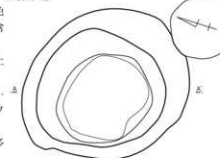
3号井戸跡 (第169図、図版58)

B地点の南東端近くで検出した遺構である。77号土坑と重複するが新旧関係は、不明である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。上端での平面形は、紡錘形、あるいはレモンのような形で

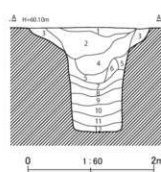
2号井戸跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ロームブロック、白色粘土粒を微量、A s-Bを均一に含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、淡褐色粘土粒を微量、A s-Bを均一に含む。
- 3層：暗灰褐色土層。白色粘土粒、A s-Bを均一に含む、白色粘土ブロックを微量含む。
- 4層：暗灰色土層。白色粘土ブロックを多量に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、淡褐色粘土粒を微量含む。
- 6層：暗灰色土層。ロームブロック、淡褐色粘土ブロック、白色粘土ブロックを微量含む。
- 7層：暗灰色土層。ローム粒、A s-Bを微量含む。しまりは弱い。
- 8層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含む。しまりは弱い。
- 9層：暗灰褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 10層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 11層：暗灰色土層。ロームブロックを微量含む。しまりは弱い。

2号井戸跡



3号井戸跡



- 12層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。

3号井戸跡土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒を微量、白色粒を均一に含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 4層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む、ロームブロックを微量含む。
- 6層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。しまりは弱い。

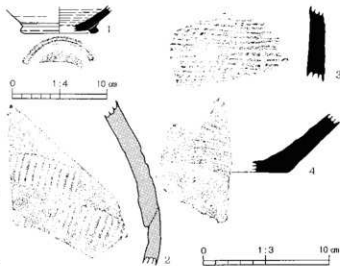
- 8層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。
- 9層：黒褐色土層。ロームブロック、淡褐色粘土ブロックを微量含む。
- 10層：黒褐色土層。ロームブロック、淡褐色粘土粒を微量含む。
- 11層：暗黄褐色土層。ロームブロック、淡褐色粘土ブロックを均一に含む。
- 12層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、淡褐色粘土ブロックを微量含む。

第169図 2・3号井戸跡平面・断面図

あるが、井戸本体は、やや不整な円形である。南北方向での長さは209cm、東西方向での長さは139cmである。開口部が漏斗状に大きく開き、以下筒状の井筒となる形態である。最深部での深さは、157cmである。

覆土は、黒褐色土、暗褐色土からなり、上部は、主にローム粒、ロームブロックを含み、下部は、淡褐色粘土を含むようである。

中世陶器かと思われる陶器片が1点、他に須恵器片が3点、土師器小片が少量出土している。出土遺物、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構の可能性が考えられる。



第170図 2号井戸跡出土遺物

第88表 2号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 高台付 碗	口径 — 底径 (7.4) 器高 [2.8]	高台部は台形状を呈し、内端部が接合する。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面—ロクロナデ。高台貼付時回転ナデ。	白色の岩片 内外—灰白色	体部下半 ～高台部 1/4残存
2	常滑系 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形後、叩き整形。	外面—平行線の押印文。部分的に自然軸の光沢。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片 などの大小砂粒、 小礫 外—灰白色 内—灰色	
3	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形後、叩き整形。	外面—平行叩き目。内面—かすかな当て具痕。粗いハケ。	白色・灰色の岩片 などの大小砂粒、 小礫 内外—灰色	
4	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形後、叩き整形。	外面—叩き目、粗いヨコハケ。底面には条線状の調整痕。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片、 石英などの大小砂粒、 小礫 内外—灰色	

4 土坑

14号土坑 (第171図、図版59)

A 2地点の北西端近くで検出した遺構である。4号住居跡を切っており、時期の新しいビットに坑壁の一部を壊されている。平面形は、不整な楕円形、あるいは空豆のような形で、長径は179cm、短径は108cmである。船底形に掘り込まれており、最深部での深さは30cmである。底面には微妙な凹凸が顕著であり、ビット状の掘り込みが3つある。覆土にはロームが卓越している。土師器片が上層から出土しているが、4号住居跡の遺物が混入したものであろう。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

15号土坑 (第171図、図版59)

A 2地点の北縁沿い、北西端寄りで見出した遺構である。5号住居跡を切っており造られている。平面形は、楕円形で、長径は144cm、短径は107cm、長軸方位はN-49°-Eである。船底形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面には微妙な凹凸があるが、おおむね平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

16号土坑 (第171図、図版59)

A 2地点の北縁寄りの中央で見出した遺構である。平面形は、不整な円形、あるいはおにぎりのような形で、最大径は91cmである。バケツ形に掘り込まれており、最深部での深さは48cmである。底面には微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世の遺構の可能性はある。

17号土坑 (第171図、図版59)

A 2地点の北縁寄りの中央で見出した遺構である。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は120cm、短軸長は77cm、長軸方位はN-6°-Wである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは14cmであ

る。底面にはかなり凹凸があり、ビット状の掘り込みが見られる。土師器小片が数点出土している。覆土にAs-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と思われる。

18号土坑 (第171図、図版59)

A2地点の北縁寄りの中央で検出した遺構である。平面形は、不整な楕円形で、長径は110cm、短径は72cmである。皿形に掘り込まれており、深さは15cm前後で、最深部での深さは28cmである。底面には凹凸が目立ち、またビット状の掘り込みが見られる。土師器小片が数点出土している。覆土の上層にAs-Aが含まれることから、近世後半の遺構と思われる。

19号土坑 (第171図、図版59)

A2地点の北縁寄りの中央で検出した遺構である。平面形は、胴の張る隅丸長方形で、長軸長は122cm、短軸長は63cm、長軸方位はN-9°-Wである。皿形に掘り込まれており、深さは8cm前後、最深部、ビット状の掘り込みでの深さは28cmである。底面にはかなり凹凸があり、やや大きなビット状の掘り込みが2つ見られる。土師器小片が数点出土している。

20号土坑 (第171図、図版59)

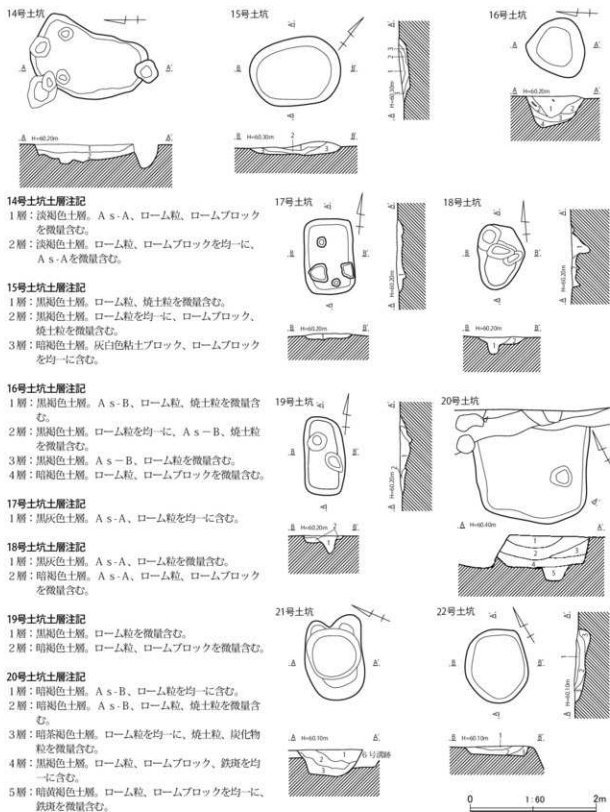
A2地点北縁、おおむね中央で検出した遺構である。9号住居跡を切って造られており、8号溝跡により壊されている。平面形は、かなり不整ではあるが、隅丸方形、あるいは隅丸長方形になろうか。南北方向に主軸があると仮定すれば、現存値で長軸長は152cm、短軸長は183cmである。底面が平らで、直線的に壁が立ち上がる形態であり、深さは40cm前後、ビット状の掘り込み、最深部での深さは68cmである。底面は全体としてはおおむね平らであるが、かなり凸凹している。底面には、ビット状の掘り込みが見られる。土師器小片が少数出土している。出土遺物、覆土、重複関係から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構であろうか。

21号土坑 (第171図、図版59)

A2地点の東縁近く、北寄り中央で検出した遺構である。14号住居跡、6号溝跡を壊して造られている。上端での平面形は、不整な楕円形である。北東側はビットが重なっているのか、膨らんでおり、本来円形に近い形の土坑だったのであろう。長径は117cm、短径は92cmである。横断面形はU字形で、最深部での深さは42cmである。土師器小片が少量出土している。重複関係、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

22号土坑 (第171図、図版60)

A2地点のほぼ中央で検出した遺構である。13号住居跡を壊して造られている。本土坑の南側に、後述する23・24・27・28号土坑、間隔を少しあけて30号土坑と、円形、楕円形の類似した深さの土坑が1列に並んでおり、あるいは同じような時期に造られた類似した用途の一連の土坑とも考えられる。



第171図 14～22号土坑平面・断面図

平面形は、微妙に歪んだ円形で、最大径は116cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面には凹凸が顕著である。

23号土坑（第173図、図版60）

A 2地点のほぼ中央で検出した遺構である。1号掘立柱建物跡と重なるが、柱穴との直接の切り合い関係はない。平面形は、ほぼ円形で、最大径は124cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは12cmである。底面はほぼ平坦であるが、小さなピット状の掘り込みがいくつか見られる。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

24号土坑（第173図、図版60）

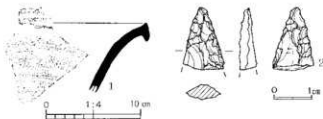
A 2地点の中央、南寄りで見出した遺構である。1号掘立柱建物跡P 5と重複するが、新旧関係は判然としにくい。平面形は、不整な楕円形で、長径は148cm、短径は114cmである。皿形、鍋底形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。ピット状の掘り込みが見られるが、時期の異なるピットと重複しているのかもしれない。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

25号土坑（第173図、図版60）

A 2地点の西縁近くのほぼ中央で見出した遺構である。平面形は、やや不整な円形で、最大径は100cmである。中段に平場を有し、中央が深くなっている。最深部での深さは66cmである。坑壁にはかなり凹凸が目立ち、底面にも微妙な凹凸が見られる。ローム粒、ロームブロックを斑点状、水玉状に多量に含む特徴的な覆土である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

26号土坑（第172・173図、第89表、図版60）

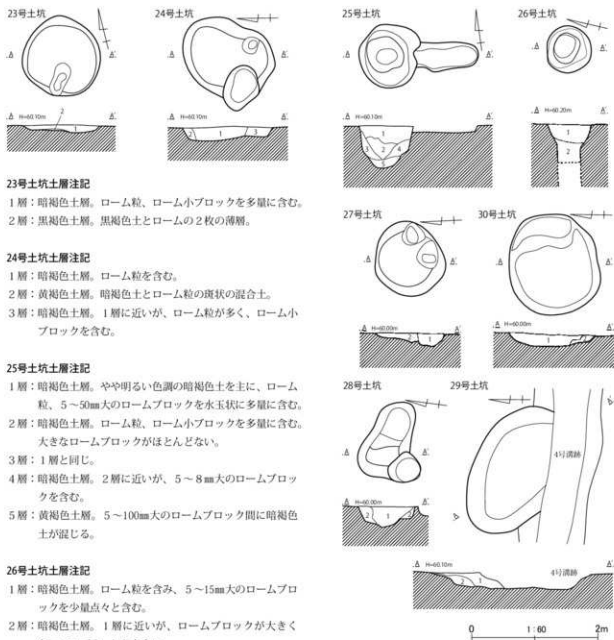
A 2地点の西縁近くのほぼ中央で見出した遺構である。平面形は、ほぼ円形で、最大径は74cmである。開口部が漏斗状に開き、以下柱穴様に筒状に掘り込まれている。底面を出し切ることができなかった。開掘しえた最下面の深さは、60cmである。覆土は、微妙に灰



第172図 26・27号土坑出土遺物

第89表 26・27号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はゆるやかに外反し つつ開く。端部外縁が突出 する。粘土組織み上げ成形 後、ロクロ整形。	外面一回転ナデ。内面一回転ナデ。	白色・灰色の岩 片などの大小砂 粒、小礫 内外一灰色	26号土坑 出土
No.	器種	法量 (cm)・特徴				備考
2	石礫	長さ [1.65]、幅 [1.1]、厚さ [0.5]、重さ [0.64] g チャート				先端部片 27号土坑 出土



23号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。
- 2層：黒褐色土層。黒褐色土とロームの2枚の薄層。

24号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含む。
- 2層：黄褐色土層。暗褐色土とローム粒の斑状の混合土。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多く、ローム小ブロックを含む。

25号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや明るい色調の暗褐色土を主に、ローム粒、5～50mm大のロームブロックを水玉状に多量に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。大きなロームブロックがほとんどない。
- 3層：1層と同じ。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、5～8mm大のロームブロックを含む。
- 5層：黄褐色土層。5～100mm大のロームブロック間に暗褐色土が混じる。

26号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5～15mm大のロームブロックを少量点々と含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが大きく(5～30mm大)、しかも多い。

27号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや色調の明るい暗褐色土(ローム混りの暗褐色土)を主に、5～15mm大のロームブロックを斑状に含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。

28号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。20～30mm大のロームブロックを含む。

29号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、5～30mm大のロームブロックを含む。
- 2層：黄褐色土層。暗褐色土とロームが同層斑状に混じる。

30号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含み、10mm大のロームブロックを少量含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。

第173図 23～30号土坑平面・断面図

色がかった暗褐色土である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えてよいと思われる。

27号土坑（第172・173図、第89表、図版60・75）

A2地点の中央、やや南寄りで見出した遺構である。平面形は、ほぼ円形で、最大径は121cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面はかなり凸凹しており、深さも一様ではない。底面のピット状の掘り込みは、時期の異なるものである可能性もある。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

28号土坑（第173図、図版60）

A2地点の中央、やや南寄りで見出した遺構である。1号掘立柱建物跡と重なるが、新旧関係は不明である。平面形は、不整な楕円形で、長径は128cm、短径は70cm、長軸方位はN-75°-Wである。断面形はU字形で、最深部での深さは32cmである。坑壁、底面ともに凸凹している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

29号土坑（第173図、図版61）

A2地点の中央、南西寄りで見出した遺構である。4号溝跡を切って造られている。平面形は、やや不整な楕円形で、長径は220cm、短径は現存値で121cm、長軸方位はN-57°-Wである。皿形、鍋底形に掘り込まれており、最深部での深さは24cmである。坑壁、底面ともに凸凹している。覆土は、微妙に灰色がかった暗褐色土である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

30号土坑（第173図、図版61）

A2地点の中央、南西寄りで見出した遺構である。平面形は、ほぼ円形で、最大径は161cmである。浅い碗形に近い形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

31号土坑（第175図、図版61）

A2地点の東縁中央で見出した遺構である。32号土坑と近接するが、重複関係にはない。東側の大半は、調査範囲外である。平面形は、隅丸方形、隅丸長方形になろうか。南北方向での長さは114cm、東西方向での現存長は30cmである。バケツ形に掘り込まれており、最深部での深さは34cmである。底面には凹凸が見られる。覆土は、ロームを多く含む暗褐色土である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

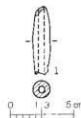
32号土坑（第174・175図、第90表、図版61・75）

A2地点の東縁中央で見出した遺構である。東側の大半は、調査範囲外である。平面形は、円形、楕円形になろうか。南北方向での長さは130cm、東西方向での現存長は52cmである。バケツ形に掘り

第90表 32号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土埴	長さ(5.3)、厚さ1.4、孔径0.5、重さ9.3g 胎土：角閃石 色調：にぶい黄褐色	2/3残存

込まれており、最深部での深さは32cmである。底面はかなり凸凹しており、浅い掘り込みが見られる。覆土は、ロームを多く含む暗褐色土である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。



第174図 32号土坑出土遺物

33号土坑 (第175図、図版61)

A 2地点の東縁近く、中央南寄りで検出した遺構である。小型の住居跡とも呼び得る規模ではあるが、住居に伴う内部施設、床面らしき硬化面が見られずないことから、土坑と考えた。20号住居跡を壊して造られている。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は378cm、短軸長は192cm、長軸方位はN-3°-Wである。坑壁の立ち上がりは、比較的急峻である。最深部での深さは62cmである。底面には微妙な凹凸が見られるが、全体としてはほぼ平坦である。床面には、P1～P4の4つのピットが見られる。西坑壁沿いのP4以外は、いずれも深く、掘り込みもしっかりしている。深さは、P1が50cm、P2が41cm、P3が50cmである。土坑本体の覆土は、ローム粒、ロームブロックを斑点状、水玉状に顕著に含む暗褐色土である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世の遺構であろうか。

34号土坑 (第175図、図版61)

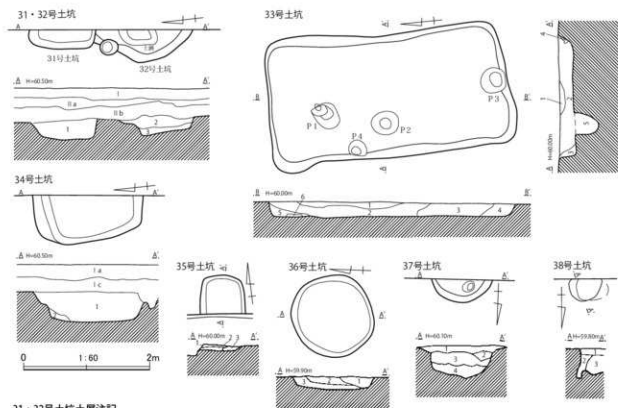
A 2地点の東縁近く、中央南寄りで検出した遺構である。平面形は、隅丸方形のような形になるか。南北方向での長さは176cm、東西方向での現存長は73cmである。バケツ形に掘り込まれており、北側坑壁に段が見られる。最深部での深さは49cmである。底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世の遺構の可能性はある。

35号土坑 (第175図、図版61)

A 2地点の南西端近くで検出した遺構である。21号住居跡と重複する。土層断面で新旧関係を確定することができなかったが、覆土の所見によるなら、住居跡の方が新しい遺構である可能性が高い。平面形は、長方形、ないしは隅丸長方形であろう。南北方向での現存長は60cm、東西方向での長さは72cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは9cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

36号土坑 (第175図)

A 2地点の南縁沿い、西寄りで検出した遺構である。平面形は、円形で、最大径は131cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。坑壁は全周整然と傾斜を変えず掘りこまれており、底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



31・32号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。ややしまっている。31号土坑覆土。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。ややしまっている。2・3層は、32号土坑覆土。
- 3層：褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。ややしまっている。

33号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～15mm大のロームブロックを水玉状に多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。下部に多量のローム。
- 4層：黄褐色土層。ハードロームのブロック。
- 5層：暗褐色土層。やや白みがかったローム粒、5～20mm大のロームブロックが多量に、焼土粒を少量含む。
- 6層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームがやや少ない。

34号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～40mm大のロームブロックを多量に含む。
- 2層：黄褐色土層。ロームブロック間に暗褐色土が混じる。

35号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 2層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を不規則に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを多量に含む。

36号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。40mm大のロームブロックを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを均一に多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。暗褐色土は、1・2層の暗褐色土よりも黒みが強くなり、若干粘性がある。

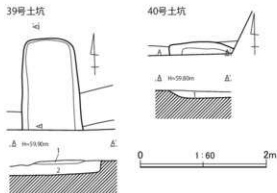
37号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかった粘性、しまりのある暗褐色土を主に、ローム粒を含む。I c層の一部か？
- 2層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、白みを帯びたローム粒、ロームブロックをモヤモヤ含む。
- 3層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 4層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、5～30mm大のロームブロックを不規則に、斑状にモヤモヤ含む。

38号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを不規則に多量に含む。炭化物小ブロックを極微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを不規則に含む。

第175図 31～38号土坑平面・断面図



第176図 39・40号土坑平面・断面図

39号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒を含む。粘性があり、しまっている。
 2層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを水玉状に多量に含む。北側から土が投棄されたらしく大きなまとまりが見える。

40号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒を少量、5～10mm大のロームブロック含み、マンガンが沈着する。ややしまり、粘性がある。

37号土坑 (第175図)

A 2地点の南縁沿い、西寄りで検出した遺構である。南側の大半は、調査範囲外である。平面形は、円形であろうか。東西方向での長さは96cmである。断面形はU字形で、最深部での深さは51cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

38号土坑 (第175図、図版62)

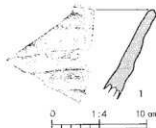
A 2地点の南縁沿い、東寄りで検出した遺構である。平面形は、円形、楕円形であろう。南北方向での現存長は34cm、東西方向での長さは51cmである。最深部での深さは46cmである。底面には凹凸が顕著である。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

39号土坑 (第176・177図、第91表、図版62)

A 2地点の南東端近くで検出した遺構である。22号住居跡、5号溝跡を切って造られている。平面形は、隅丸長方形であろうか。長軸長は現存値で145cm、短軸長は89cmである。長軸方位は、ほぼ真北あたりになる。溝壁は急峻に立ち上がり、ほぼ直線的に掘り込まれている。最深部での深さは22cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。出土遺物、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

40号土坑 (第176図、図版62)

A 2地点の南東端で検出した遺構である。5号溝跡と重複するが、新旧関係は判然としない。東西方向での長さは104cm、最深部での深さは10cmである。覆土から見て、古代の遺構の可能性がある。



第177図 39号土坑出土遺物

第91表 39号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	山茶碗 壺系鉢	口径 — 底径 — 器高 —	体部から口縁部にかけて微妙に曲折しながら立ち上がる。ロクロ成形。	外面一回転ナデ。内面一回転ナデ。端部から口縁部にかけて自然軸の光沢。	白色・灰色の岩片、石英などの大小砂粒。小礫 内外一灰白色	

41号土坑 (第178図)

B地点の北西端近くで検出した遺構である。24号住居跡を切っている。西側の大半は、調査範囲外である。現表土の直下に掘り込み面があるようである。残存部分での平面形は、歪な円形、楕円形に近い。南北方向での長さは153cm、東西方向での現存長は67cmである。鉢形に掘り込まれており、最深部での深さは48cmである。底面は、おおむねなめらかに丸みをもって掘り込まれている。掘り込み面、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

42号土坑 (第178図)

B地点の北西端近く西縁沿いで検出した遺構である。7号溝跡に切られており、西側の大半は、調査範囲外である。平面形は、丸みのある形になりそうである。いずれも現存長になるが、南北方向での長さは95cm、東西方向での長さは63cmである。坑壁が比較的急峻に立ち上がり、底面が平らな形態で、最深部での深さは28cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

43号土坑 (第178図、図版62)

B地点の西縁沿いほぼ中央で検出した遺構である。46号土坑に南東隅を壊され、西側のかんりの部分が調査範囲外である。平面形は、長方形であろう。長軸長は295cm、短軸長は現存値で68cm、長軸方位は $N-4^{\circ}-E$ である。断面形は船底形で、最深部での深さは30cmである。坑壁は整然と急峻に掘りこまれており、底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。土師器小片を主とする遺物が少量出土している。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

44号土坑 (第178図、図版62)

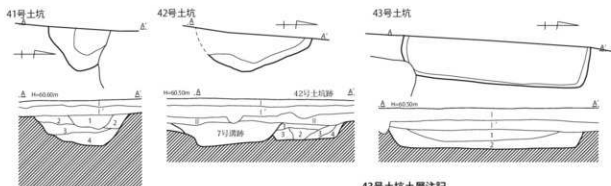
B地点の西縁近くの中央で検出した遺構である。45号土坑に切られている。平面形は、長方形で、長軸長は260cm、短軸長は114cm、長軸方位は $N-75^{\circ}-W$ である。船底形に掘り込まれており、最深部での深さは14cmである。坑壁は直線的で、かなり急峻に掘り込まれている。底面は微妙な凹凸はあるが、ほぼ平坦である。須恵器小片が1点、土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

45号土坑 (第178図、図版62)

B地点の西縁近くの中央で検出した遺構である。44号土坑を壊して造られている。平面形は、長方形で、長軸長は244cm、短軸長は117cm、長軸方位は $N-18^{\circ}-E$ である。坑壁は全周整然と同じような傾斜で掘りこまれており、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは14cmである。須恵器小片が数点、土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

46号土坑 (第178図、図版62)

B地点の西縁近くの中央で検出した遺構である。平面形は、長方形で、長軸長は192cm、短軸長は92cm、長軸方位は $N-8^{\circ}-E$ である。坑壁は直に近く掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは42cmである。覆土から見て、A s-A降下期、近世後半以前の遺構と考えられる。



41号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。

42号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

44・45号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。1・2層は、45号土坑覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。3・4層は、44号土坑覆土。
- 4層：暗灰褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

46号土坑土層注記

- 1層：暗灰褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。

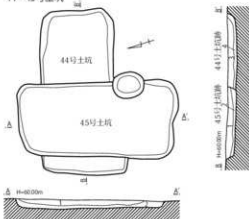
47号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。粘性、しまりともにない。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。粘性、しまりともにない。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。粘性、しまりともにない。

43号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、焼土粒、A s-Aを微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ロームを均一に含み、ロームブロック、A s-Aを微量含む。

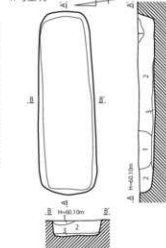
44・45号土坑



46号土坑



47号土坑



0 1:60 2m

第178図 41～47号土坑平面・断面図

47号土坑（第178図、図版63）

B地点の北西半の中央で検出した遺構である。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は290cm、短軸長は88cm、長軸方位はN-83°-Wである。坑壁は直に近く急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

最深度での深さは27cmである。土師器、須恵器の小片が数点出土している。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

48号土坑（第179図、図版62）

B地点の北西部の北西半で検出した遺構である。平面形は、ほぼ円形で、最大径は106cmである。皿形、盆形に掘り込まれており、最深度での深さは20cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。土師器小片を主とする遺物が数点出土している。覆土から見て、古代の遺構と考えられる。

49号土坑（第179図、図版63）

B地点の中央、西寄りで検出した遺構である。平面形は、やや不整な隅丸長方形で、長軸長は278cm、短軸長は120cm、長軸方位はN-73°-Wである。坑壁は急峻に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さは12~16cmである。底面のピットは、いずれも本土坑より古い可能性がある。覆土にA s-Bが混入するようであるが、土師器、須恵器の小片が数点出土している。周辺に同種の遺構が集中しており、やはり近世、あるいはそれ以降の遺構と考える方が自然であろう。

50号土坑（第179図）

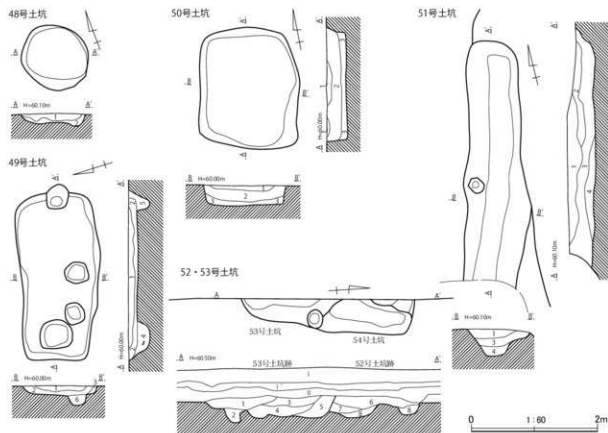
B地点の中央で検出した遺構である。7号溝跡を切って造られている。平面形は、やや不整な隅丸長方形で、長軸長は192cm、短軸長は157cm、長軸方位はN-11°-Eである。断面形は船底形に近く、坑壁はかなり急峻に立ち上がる。最深度での深さは32cmである。底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。土師器、須恵器の小片が数点出土している。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

51号土坑（第179図、図版63）

B地点のほぼ中央で検出した遺構である。短い溝状の遺構と見ることもできないではないが、一応土坑の一種として報告する。9号溝跡を切っており、南端は攪乱により壊されている。平面形は、縦長の隅丸長方形で、長軸方向での現存長は375cm、横幅は157cm、長軸方位はN-14°-Eである。底面が狭く、坑壁が大きく開く形態である。深さは22~45cmである。底面はかなり凸凹している。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、中世の遺構の可能性はある。

52号土坑（第179図、図版63）

B地点の西縁沿いの南に寄った位置で検出した遺構である。53号土坑に切られ、西側の大部分は、調査範囲外である。平面形は、長細い形、あるいは隅丸長方形になるのかもしれない。いずれも現存長になるが、南北方向で142cm、東西方向で52cmを測る。底面には不規則な凹凸が見られ、さらにピットなどが重複している可能性もあるように見られる。最深度での深さは34cmである。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



48号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

49号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、A s - Bを微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロック、A s - Bを微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 6層：暗褐色土層。ロームブロックを微量含む。

50号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、A s - Aを微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 3層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

51号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、白色粒を微量含む。

- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含む。

- 3層：黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

- 4層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

52・53号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物粒を微量含む。1～5層は、53号土坑覆土。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 6層：暗茶褐色土層。ローム粒、白色粒を微量含む。6～8層は、52号土坑覆土。
- 7層：暗茶褐色土層。ロームブロックを微量含む。
- 8層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

第179図 48～53号土坑平面・断面図

53号土坑（第179図、図版63）

B地点の西縁沿いの南に寄った位置で検出した遺構である。52号土坑を切って造られている。平面形は、楕円形のような形になるのであろうか。規模は、南北方向で158cm、東西方向での現存長は36cmである。最深部での深さは34cmである。底面には凹凸が著しい。土師器小片が数点出土している。

54号土坑 (第181図、図版63)

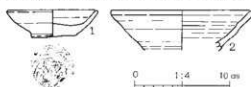
B地点の西縁近くの南に寄った位置で検出した遺構である。55号土坑により壊されている。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は199cm、短軸方向での現存長は55cm、長軸方位はN-8°-Eである。箱形に近く掘り込まれており、坑壁はかなり急峻に立ち上がる。最深部での深さは22cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

55号土坑 (第181図、図版63)

B地点の西縁近くの南に寄った位置で検出した遺構である。54号土坑を切って造られている。平面形は、縦長の長方形で、長軸長は260cm、短軸長は75cm、長軸方位はN-12°-Eである。箱形に近く掘り込まれており、坑壁は全体に急峻に立ち上がる。最深部での深さは40cmである。底面はほぼ平坦である。須恵器小片が1点、土師器小片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

56号土坑 (第180・181図、第92表、図版64・75)

B地点の西縁近く、南西端に寄った位置で検出した遺構である。28号住居跡の床面を壊して造られている。平面形は、やや歪な楕円形で、長径76cm、短径68cmである。バケツ形に掘り込まれており、最深部での深さは40cmである。底面はほぼ平坦である。第180図1・2に示したカワラケや編物石などが上層から出土している。出土遺物、覆土から見て、中世の遺構と考えられる。



第180図 56号土坑出土遺物

第92表 56号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	カワラケ	口径 9.6 底径 4.5 器高 2.9	底部は平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に開く。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り後ナデ。内面-ロクロナデ。	白色・褐色の岩片 内外-にぶい黄褐色	3/4残存
2	カワラケ	口径 (15.0) 底径 - 器高 [4.3]	体部から口縁部にかけて直線的に開く。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色の岩片、角閃石 内外-にぶい黄褐色	口縁部- 体部 1/4残存

57号土坑 (第181図、図版64)

B地点の南西端近くで検出した遺構である。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は280cm、短軸方向での現存長は105cm、長軸方位はN-75°-Wである。坑壁はかなり急峻に立ち上り、底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。最深部での深さは28cmである。土師器小片を主とする遺物が数点出土している。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。

58号土坑 (第181図、図版64)

B地点の中央、南縁近くで検出した遺構である。2号井戸跡を切って造られている。平面形は、ほ

ば円形で、最大径は102cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは5cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、古代の遺構の可能性はある。

59号土坑（第181図、図版64）

B地点の中央、南縁近くで検出した遺構である。北坑壁の一部をピットにより壊されている。平面形は、やや不整な隅丸長方形で、長軸長は136cm、短軸長は66cm、長軸方位はN-82°-Wである。断面形は船底形で、最深部での深さは14cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片を主とする遺物が少数出土している。

60号土坑（第181図、図版64）

B地点の南縁沿い中央で検出した遺構である。平面形は、楕円形か隅丸の形になろうか。いずれも現存値になるが、東西方向での長さは118cm、南北方向での長さは36cmである。最深部での深さは19cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、古代の遺構の可能性はある。

61号土坑（第181図、図版64）

B地点の北東半、北縁寄りで検出した遺構である。東坑壁の一部をピットにより壊されている。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は289cm、短軸長は136cm、長軸方位はN-4°-Eである。船底形に近い形に掘り込まれており、坑壁は四壁ともに垂直に近く立ち上がる。最深部での深さは30cmである。底面はほぼ平坦である。須恵器小片が数点、土師器小片がかなりの量出土している。A s-Aを覆土に含むピットに切られていること、および覆土から見て、近世後半以前の遺構と考えられる。

62号土坑（第182図、図版64）

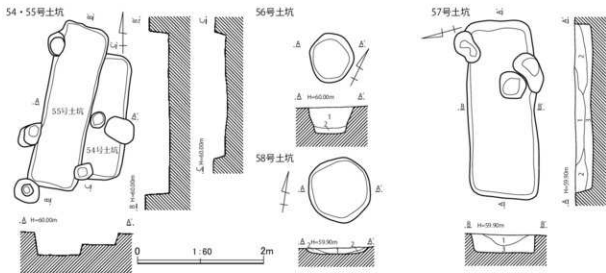
B地点の北東半の北縁寄りで検出した遺構である。平面形は、かなり不整な円形で、最大径は108cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは16cmである。底面には細かな凹凸が見られる。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

63号土坑（第182図、図版65）

B地点の北東端近くで検出した遺構である。64号土坑を切って造られている。平面形は、長楕円形というか、葉巻のような形で、長さは360cm前後、横幅は67cm、長軸方位はN-6°-Eである。断面形は船底形で、最深部での深さは14cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。土師器小片を主とする遺物が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

64号土坑（第182図、図版65）

B地点の北東端近くで検出した遺構である。63号土坑に切られている。平面形は、やや不整な楕円形で、長径92cm、短径83cmである。椀形、鉢形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。土師器小片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



56号土坑土層注記

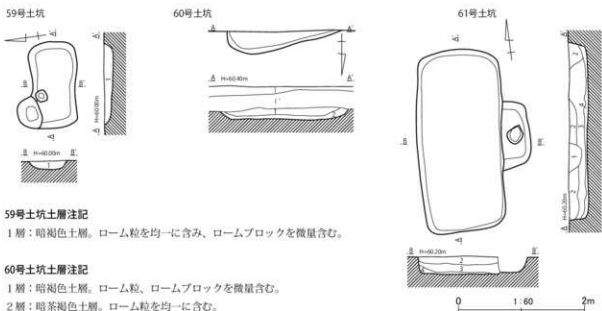
- 1層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：黒褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

58号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。

57号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともにない。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含む。粘性、しまりともにない。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともにない。



59号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

60号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含む。

61号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともにない。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 4層：黒褐色土層。ローム粒を微量含む。

第181図 54～61号土坑平面・断面図

65号土坑 (第182図、図版65)

B地点の北東端で検出した遺構である。北側、東側の大半が調査範囲外である。平面形は、やや角張った円形になろうか。最大径は92cmである。鍋底形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面はかなり凸凹している。土師器小片が少数出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構の可能性がある。

66号土坑 (第182図、図版65)

B地点の北東端で検出した遺構である。平面形は、楕円形で、長径は139cm、短径は74cm、長軸方位はN-88°-Eである。最深部での深さは8cmである。残存状態が悪く、底面近くがかろうじて残った遺構であろう。底面はほぼ平坦である。土師器小片が少数出土している。覆土にA s-Aを含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

67号土坑 (第182図、図版65)

B地点の北東端近くで検出した遺構である。平面形は、やや角張った円形で、最大径は97cmである。鍋底形に掘り込まれており、最深部での深さは20cmである。底面はほぼ平坦である。土師器、須恵器の小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

68号土坑 (第182図、図版65)

B地点の北東端近くで検出した遺構である。平面形は、楕円形で、長径は120cm、短径は101cmである。鍋底のような形に掘り込まれており、最深部での深さは14cmである。底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。土師器小片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

69号土坑 (第182図、図版66)

B地点の北東半中央で検出した遺構である。8号溝跡を切って造られている。平面形は、やや不整な隅丸長方形に近いが、北坑壁は丸みをもっており、東坑壁は曲折する。長軸長は381cm、短軸長は139cm、長軸方位はほぼ真北である。南半の坑壁は比較的急峻に立ち上がるが、北半の坑壁は丸みをもち、立ち上がり方もゆるやかである。底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。最深部での深さは26cmである。土師器小片が少量、須恵器小片が数点出土している。重複関係、覆土から見て、A s-A降下期、近世後半の遺構の可能性がある。

70号土坑 (第182図)

B地点の北東半中央で検出した遺構である。南坑壁の一部を攪乱により壊されている。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は165cm、短軸長は90cm、長軸方位はほぼ東西である。断面形は船底形で、最深部での深さは10cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。71号土坑と近接し、形態も類似することから、同じような時期の遺構と思われる。



第182図 62～70号土坑平面・断面図

71号土坑 (第183図、図版65)

B地点の北東半中央、東寄りで検出した遺構である。南東隅近くを、時期の新しいピットにより壊されている。平面形は、丸みの強い隅丸長方形で、長軸長は152cm、短軸長は93cm、長軸方位はN-86°-Wである。断面形は浅い船底形で、最深部での深さは8cmである。底面は微妙な凹凸はあるもののほぼ平坦である。覆土から見て、古代の遺構の可能性がある。

72号土坑 (第183図)

B地点の東縁沿いの中央、北寄りで検出した遺構である。35号住居跡を切り、東側の大半が調査範囲外である。平面形は、楕円形になろうか。いずれも現存値になるが、長径は204cm、短径は82cmである。坑壁は比較的急峻に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは12cmである。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

73号土坑 (第183図、図版66)

B地点の東縁近くの中央で検出した遺構である。38号住居跡を切って造られている。平面形は、丸みの強い隅丸長方形で、長軸長は200cm、短軸長は142cm、長軸方位はほぼ南北である。坑壁は全周垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは40cmである。土師器小片が数点出土している。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

74号土坑 (第183図、図版66)

B地点の南東半中央で検出した遺構である。75号土坑を切って造られている。平面形は、長楕円形で、長径は217cm、短径は92cm、長軸方位は $N-3^{\circ}-E$ である。坑壁は丸みをもって立ち上がり、底面はほぼ平坦である。北、南の坑壁沿いの底面にはピットが掘られている。底面の深さは10cm前後である。土師器小片が数点出土している。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

75号土坑 (第183図、図版66)

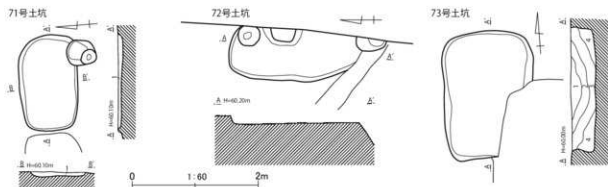
B地点の南東半中央で検出した遺構である。74号土坑に切られている。平面形は、やや不整な楕円形で、長径は126cm、短径は108cmである。皿形に掘り込まれており、最深部での深さは11cmである。底面には微妙な凹凸が見られる。重複関係、覆土から見て、近世後半、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

76号土坑 (第183図、図版66)

B地点の南東半中央で検出した遺構である。74号土坑とは、北西坑壁が接している。平面形は、ほぼ円形で、最大径は120cmである。鍋底形に掘り込まれており、坑壁はやや丸みをもって掘り込まれている。最深部での深さは30cmである。底面はおおむね平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、古代の遺構の可能性がある。

77号土坑 (第183図)

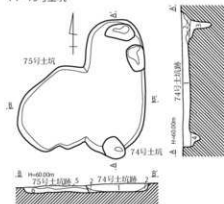
B地点の南東半の南寄りで検出した遺構である。3号井戸跡と重複し、井戸跡に切られているかにも見えるが、新旧関係の確証は得られていない。平面形は、おおむね丸みの強い隅丸長方形になりそうである。長軸長は214cm、短軸長は現存長で100cmである。坑壁は比較的急峻に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは26cmである。土師器小片が数点出土している。周辺にまとまる傾



71号土坑土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

74・75号土坑



74・75号土坑土層注記

1層：黒褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。1～4層は、74号土坑覆土。

2層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。粘性、しまりともにない。

3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

4層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。

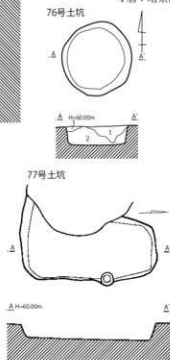
5層：黒色土層。炭化物粒を均一に含む。5・6層は、75号土坑覆土。

6層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

76号土坑土層注記

1層：黒褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。

2層：暗褐色土層。ロームブロック、焼土粒を微量含む。



73号土坑土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒、As-Aを微量含む。

2層：暗褐色土層。ロームブロック、As-Aを微量含む。

3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒、A s-Aを微量含む。

4層：暗茶褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

78・79号土坑土層注記

1層：暗褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。1～3層は、79号土坑覆土。

2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、A s-Aを微量含む。

3層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。

4層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。4・5層は、78号土坑覆土。

5層：黒色土層。ロームブロックを微量含む。

第183図 71～79号土坑平面・断面図

向を示す縦長の土坑と同種の遺構であろう。そうした傍証と覆土から見て、近世後半以降の遺構の可能性がある。

78号土坑 (第183図、図版66)

B地点の南縁、南東端近くで検出した遺構である。79号土坑に切られている。平面形は、楕円形になろうか。長径は現存長で68cm、短径は105cmである。鍋底形、皿形に掘り込まれており、最深部での深さは22cmである。坑壁はゆるやかに丸みをもって立ち上がり、底面はほぼ平坦である。重複関係、および覆土から見て、近世後半以降の遺構であろう。

79号土坑 (第183図、図版66)

B地点の南縁沿い、南東端近くで検出した遺構である。78号土坑を切って造られ、南側は調査範囲外である。平面形は、縦に著しく長い隅丸長方形で、長さは現存長で355cm、横幅は117cm、長軸方位はほぼ南北である。坑壁はかなり丸みをもって立ち上がる。深さは15~17cmである。

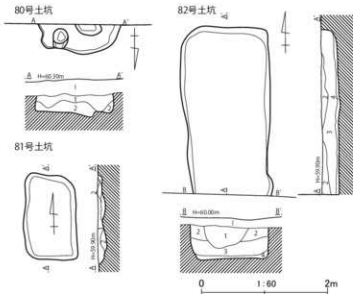
底面はおおむね平坦であるが、微妙な凹凸が見られる。土師器小片が数点出土している。覆土にA s-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

80号土坑 (第184図、図版66)

B地点の南縁沿い、南東端近くで検出した遺構である。南側の大部分は調査範囲外である。平面形は、やや不整な楕円形、円形になろうか。最大径は130cm、最深部での深さは34cmである。坑壁はかなり急峻に立ち上がり、底面には凹凸が顕著である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。

81号土坑 (第184図、図版66)

B地点の南東端の直近で検出した遺構である。82号土坑とは、西坑壁が接触する位置関係にある。平面形は、やや不整な隅丸長方形で、長軸長は132cm、短軸長は100cm、長軸方位はほぼ南北である。縦断面形は船底形に近いが、底面には凹凸が顕著である。深さは、6~14cmである。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。



80号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ロームブロック、A s-Aを微量含む。

81号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
- 2層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

82号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ロームブロック、A s-Aを均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、A s-Aを均一に含む。
- 4層：黒褐色土層。ローム粒を微量含む。しまりが強い。

第184図 80~82号土坑平面・断面図

82号土坑 (第184図、図版66)

B地点の南東端近くで検出した遺構である。81号土坑と東坑壁が接しており、南側は調査範囲外である。平面形は、やや不整な隅丸長方形で、長軸長は現存長で264cm、短軸長は141cm、長軸方位はほぼ南北である。縦断面形は船底形に近く、坑壁はやや丸みをもって直に近く立ち上がる。最深部での深さは54cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。

5 溝跡

今回報告する溝跡は、A2地点の3～8号溝跡の6条、B地点の9～11号溝跡の3条の合計9条の溝跡である。3・4号溝跡に関しては、次章久下東遺跡G3地点の報告(本書:第V章)で、前者が「88号溝跡」、後者が「89号溝跡」と呼称した溝跡と同一の遺構である。なお、3号溝跡は、旧道(調査時)をはさみ、久下前遺跡で「11号溝跡」とした溝跡(松本・的野 2010)とも同一の遺構である。

3号溝跡(第185～187 図、第93・94表、図版67)

A2地点で検出した遺構である。7・10～13・16・18・19・23号住居跡を切って造られている。また、4号溝跡が本遺構と接合し、8号溝跡と重複する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはその上位の暗褐色土層中である。

A2地点東半中央を南北に走り、途中北寄りてV字状に大きく折れ、東西(より正確には、東南東一西北西であるが、簡略化する)方向に向きを変えて走る溝跡である。溝跡本体は、屈折部でV字状に折れるが、そのまま北縁まで真っ直ぐに続く溝跡とも結合しており、それらを含め3号溝跡と呼称した。V字状の溝跡の、東西の溝跡を3a号溝跡、屈折部以南の南北の溝跡を3b号溝跡と呼び、屈折部以北の南北のやや浅い溝跡を3c号溝跡と呼び分け、以下記載する。

いずれも調査範囲内での現存長ということになるが、3a号溝跡の長さは、16.48m、3b号溝跡の長さは、31.60m、南北方向での総現存長は、37.98mである。溝幅は、3a号溝跡が115～200cm、3b号溝跡が86～177cm、3c号溝跡が75～80cmである。3a・3b号溝跡の断面形は、底面付近が細くすばまるV字形に近い形態であり、3c号溝跡の断面形は、箱葉研である。深さは、3a号溝跡が67～91cm、3b号溝跡が63～85cm、3c号溝跡が48cmである。断面形、深さの違いから見て、3a・3b号溝跡は、ひとつつながりの溝跡であり、3c号溝跡は、それに連結すべく設けられた溝跡としてよいであろう。底面はかなり凸凹している。全体に底面の傾斜はわずかであり、所々不規則な深淺があり一様ではないが、3a号溝跡では西から東へ、3b号溝跡では北から南へと底面の標高が低くなる。3c号溝跡の場合、調査範囲に限られ微妙ではあるが、底面の標高は、南から北に向かって明らかに低くなる。

覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土が主になり、下部に行くほど、黒みが増し、粘性も増すようである。土師器片を中心にかなりの量の遺物が出土している。また、第187図3・4の須恵器片、同図6・7の陶器片が覆土中から散漫に出土している。土師器片や須恵器片は、重複する住居跡からの混入品であろう。

3号溝跡土層注記(1)

[A-A'断面]

- 1層: 暗褐色土層。As-B、焼土粒を均一に含む。
- 2層: 暗褐色土層。As-B、ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

[C-C'断面]

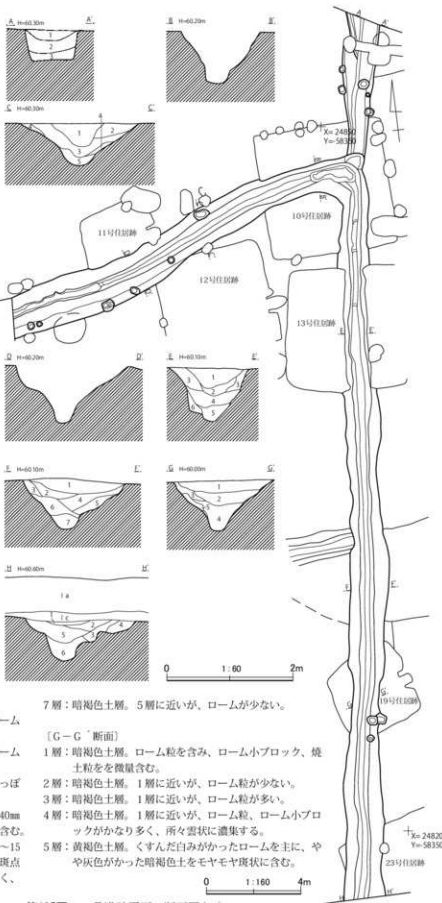
- 1層: 暗褐色土層。As-B、ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗茶褐色土層。As-B、ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、ロームブロック、鉄斑を微量含む。
- 4層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 5層: 暗褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に含む。

[E-E'断面]

- 1層: 黒褐色土層。鉄斑を均一に、As-B、ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層: 黒褐色土層。As-B、鉄斑、ローム粒を微量含む。
- 3層: 暗褐色土層。As-B、ローム粒を微量含む。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、鉄斑、ロームブロックを微量含む。
- 5層: 暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、焼土粒を微量含む。
- 6層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。

[F-F'断面]

- 1層: 暗褐色土層。全体に灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒を含む。この層のみAs-Aを含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒が雲状に濃集する。
- 4層: 暗褐色土層。2層に近いが、白っぽいローム粒が多い。
- 5層: 暗褐色土層。2層に近いが、5~40mm大のロームブロックをモヤモヤ含む。
- 6層: 暗褐色土層。2層に近いが、5~15mm大のロームブロックを多量に斑点状に含む。5層よりロームが多く、よく混ざっている。



7層: 暗褐色土層。5層に近いが、ロームが少ない。

[G-G'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を含み、ローム小ブロック、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が少ない。
- 3層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。
- 4層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックがかなり多く、所々雲状に濃集する。
- 5層: 黄褐色土層。くすんだ白みがかかったロームを主に、やや灰色がかった暗褐色土をモヤモヤ状に含む。

第185図 3号溝跡平面・断面図(1)

3号溝跡土層注記(2)

〔H-H'断面〕

1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、ローム小ブロック、焼土粒（土器粒?）を微量含む。

2層：暗褐色土層。1層に近いが、若干ローム粒が多い。

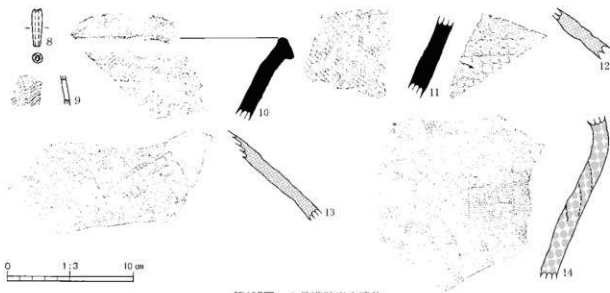
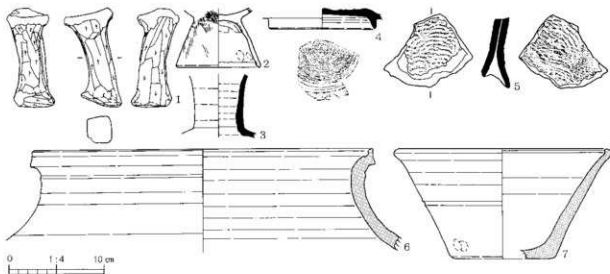
3層：暗褐色土層。1層に近いが、若干ローム粒、ローム小ブロックが多い。

4層：暗褐色土層。3層に近いが、ローム小ブロックが少ない。

5層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒を多量に含む。

6層：暗褐色土層。3層に近いが、ローム粒、5~20mm大のロームブロックが多い。

第186図 3号溝跡平面・断面図(2)



第187図 3号溝跡出土遺物

第93表 3号溝出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	三足 罎?	口径— 底径— 器高 [10.4]	脚部は柱状。	外面—ナゲ、ケズリ	白色の岩片、角閃石、霏 内外—褐色	脚部残存
2	台付 鉢	口径— 底径 8.7 器高 [6.2]	台端部は折り返し。粘土紐積み上げによる成形。	外面—胴部下位～台部ハケメ後ナゲ。 内面—底部ナゲ。台部ヘラナゲ。指オサエ、指頭痕あり。	白色・黒色・褐色の岩片、霏 内外—にぶい黄褐色	底部下位～台部残存
3	須恵器 長頸壺	口径— 底径— 器高 [6.8]	ロクロ成形。	外面—ロクロナゲ。自然軸。内面—ロクロナゲ。上位～下位自然軸。	白色・黒色の岩片 地—灰色 釉—灰オリーブ色	頸部破片

第94表 3号溝出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
4	須恵器 皿	口径 — 底径 11.2 器高 [2.1]	高台部は比較的高い三角形状を呈す。体部は焼き歪みのため落ちている。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転ヘラケズリ。内面—ロクロナデ。	白色・黒色の岩片・礫 内外—オリーブ灰色	高台部 1/4残存
5	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部破片2つが接着。	外面—不明。内面—同心円の当て具痕。	白色・黒色・褐色の岩片・礫 内外—黒褐色	破片
6	陶器常滑 甕	口径 (35.6) 底径 (11.1) 器高 [10.8]	口縁部は外反する。口唇部が上に突き上げられる。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。自然釉。内面—ロクロナデ。	内外—褐灰色	口縁部破片
7	軟質陶器鉢	口径 (21.8) 底径 (11.1) 器高 [11.6]	平底。体部は直線的に開く。口唇部が内側に突き出される。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。指オサエ、指頭痕あり。内面—ロクロナデ。	白色・褐色の岩片・礫、黄母地—ぶい黄褐色、釉—褐灰色	1/6残存
No. 器種		法量(cm)・特徴				備考
8	土罐	長さ2.9、厚さ0.8、孔径0.3、重さ1.7g	胎土：白色の岩片 色調：ぶい黄褐色。			
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
9	甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土紐積み上げによる。	外面—歯状に近い櫛描波状文？ 内面—タテ、ナナメのハケ。	雲母細片などの細砂 内外—暗赤褐色	構式
10	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外反しながら開く。粘土紐積み上げ成形後、ロクロ整形。	外面—回転ナデ後、2段の櫛描波状文。内面—回転ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—灰色	
11	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部下半は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げ成形後、叩き整形。	外面—ナナメの平行叩き痕。内面—磨れた青海波様の粗い当て具痕。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—灰色	
12	常滑窯系 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はかなり内傾し立ち上る。	外面—格子目の叩き目あるいは押印文。内面—ヨコナデ、指押え。部分的にかすかな自然釉の光沢が見られる。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、内面—ぶい褐色	13と同一個体?
13	常滑窯系 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はかなり内傾し立ち上る。	外面—格子目の叩き目あるいは押印文。破片左上端に灰白色の自然釉付着。内面—ヨコナデ、指押え。部分的にかすかな自然釉の光沢が見られる。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、内外—灰白色	12と同一個体?
14	常滑窯系 甕	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はゆるやかに曲折しながら立ち上がり、胴部中位が膨らむ。粘土紐積み上げ成形後、叩き整形。	外面—ナナメのナデ。格子目、菊花様の押印文。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片、石英などの大小砂粒、小礫 外—灰色、ぶい赤褐色 内—ぶい橙褐色	

出土遺物、覆土から見て、3 a・3 b号溝跡は、中世の遺構と思われる。3 c号溝跡も同じような時期の遺構と見られるが、溝の付け替えなども考慮すべきなのかもしれない。

4号溝跡(第188図、図版67)

A 2地点南半を東西に走り、西端で大きく彎曲し、東端で3号溝と結合する溝跡である。16号住居跡、1号井戸跡を切り、29号土坑に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

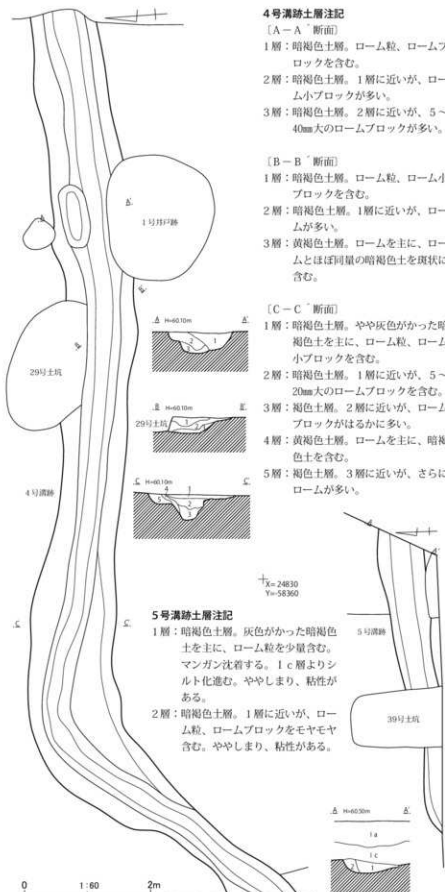
調査範囲内での現存長は、12.09mである。溝幅は100cm前後であるが、彎曲部では溝幅が147cmまで広がる。底面付近は細くすばまり、溝壁上半は所々段を有し開く。深さは25~40cmである。結合する3号溝跡の溝底に比べ、本遺構の溝底はかなり高い。調査範囲内では、溝底は西に向かってわずかに傾斜するのにも見えるが、隣接地点での溝底の標高値を比較すると、深淺がかなり微妙ではあるが、西から東へと標高値は低くなるようである。よって湧水や雨水が流れたとすれば、西から東へということになる。覆土は、やや灰色みを帯びた暗褐色土が主で、下部にはローム粒、ロームブロックをかなり含むようである。

遺物は、土師器小片を中心にかなりの量出土している。また、少数ではあるが、覆土中から陶器片が出土している。出土遺物、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構の可能性はある。

5号溝跡(第188図、図版67)

A2地点の南東端で検出した溝跡である。B地点の同じような位置で検出した同じ走向の溝跡である11号溝跡とは、溝の形態、覆土も類似しており、また溝底の標高値も無理なく繋がることから、やや離れてはいるが、同一の遺構である可能性が高いと考える。22号住居跡を切り、39号土坑に壊されている。40号土坑と接するが、新旧関係は判然としない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはその上位の暗褐色土層中である。

東西に走る溝跡であるが、両端は調査範囲外となり、長さ5mほどの範囲を調査し得たのみである。



溝幅は53～74cm、深さは20cm前後である。溝壁、溝底は、丸みをもって掘り込まれている。覆土は、やや灰色みを帯びた暗褐色土が主になる。土師器小片が少数出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

6号溝跡 (第189～193図、第95・96表、図版67)

A2地点の東縁で検出した遺構である。14・17号住居跡を切り、21号土坑に溝壁の一部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはその上位の暗褐色土層中である。

A2地点東縁の中央北寄りから西へ伸び、直角に近く屈折し、彎曲しながら南北に走る溝跡である。東端は調査範囲外の道路(調査時)であり、近接するB地点では、跡を追うことができない。浅くなり途切れるのか、7号溝跡と合流する可能性が考えられる。南端は途切れるが、明らかに上部が削平されており、本来5号溝と合流していた可能性も考えられないではない。南北方向での全長は、19.29m、東西方向での現存長は、3.69mである。溝幅は73～122cmである。溝壁には傾斜のゆるいところ、やや急なところとあり、溝底にも広狭が見られる。深さは19～38cmである。溝底は南に向かってかすかに傾斜している。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土が主になる。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構かと思われる。

7号溝跡 (第189～193図、第95・96表、図版67)

A2・B両地点で検出した遺構である。10・26・34号住居跡を切り、50号土坑、9号溝により壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

A2地点の北東半からB地点の北西半を経て、斜めに走り、B地点の南東半で溝幅を広げ、南流する溝跡である。西端は、3号溝跡と接近したまま途切れているかに見えるが、本来は3号溝跡と結合していた可能性が高いであろう。また、B地点の西縁では、溝底に深淺のある2条の溝跡の痕跡が見られ、浅い方の溝跡は、A2地点の7号溝跡と溝底が一致し、深い方の溝跡は、そのままB地点内を走り9号溝跡と結合するようである。2条の溝跡とすべきであろうが、適切に区分できない面もあり、1条の溝跡として記載する。いずれも現存長になるが、A2地点での長さは、10.98m、B地点での長さは、36m前後である。溝幅は80～101cmである。ただし、B地点西縁の重複部分では188cm、9号溝跡と重複する部分では307cmまで溝幅が広がる。溝壁はゆるい傾斜をもって立ち上がり、溝底は、西半では平らで、東半では丸くなる。深さは22～42cmである。溝底は、B地点では北西から南東に向かってわずかに深くなる。A2地点では、東から西へとわずかながら溝底が深くなるようである。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土が主になり、As-Aが含まれるのは、最上層の一部の覆土に限られるようである。常滑焼胴部片が1点出土している。その他に須恵器片がかなりの量、土師器小片が多量に出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構かと思われる。

8号溝跡 (第189～193図、第95・96表、図版68)

A2・B両地点で検出した溝跡である。7～9・24・27号住居跡、20号土坑、3号溝跡を切り、69号土坑に壊されている。交差する9号溝跡との関係は、やや微妙ではあるが、9号溝跡より古い遺構

の可能性があるのである。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

現存長は南北で60.82mである。溝幅は、B地点では、122～212cmである。溝壁は、B地点中央でやや傾斜がゆるやかになるが、総じて傾斜は急峻で、断面形はV字形に近い。溝底から溝壁下部にかけて掘削痕と思われる凹凸が顕著に見られる箇所がある。深さは56～82cmである。溝底の傾斜はかなり微妙ではあるが、標高値によれば、9号溝跡の西側では、東から西へ、東側では西から東へと低くなる。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土が主になる。覆土の一部に、A s-Bが含まれる(第189図：I-I'、J-J'断面)。近世かと思われる陶器片が1点出土している。他に土師器小片や須恵器小片がかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構かと思われる。

9号溝跡 (第189～193図、第95・96表、図版68)

B地点の東半中央をほぼ南北に走る溝跡である。34号住居跡、7・8号溝跡を切り、51号土坑に壊されている。10号溝跡と結合して機能していた段階があると考えられる。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

現存長は9.13mである。溝幅は127～185cmである。溝壁はゆるい傾斜をもつ部分と比較的急峻な部分があり、溝底はいくらか狭まり、丸みをもって掘り上げられている。深さは60～68cmである。溝底は南に向かってわずかに低くなっている。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色、暗茶褐色土を主とする。土師器小片が主であるが、覆土中よりかなりの量の遺物が出土している。出土遺物、覆土から見て、中世の遺構である可能性がある。

10号溝跡 (第189～193図、第95・96表、図版68・75)

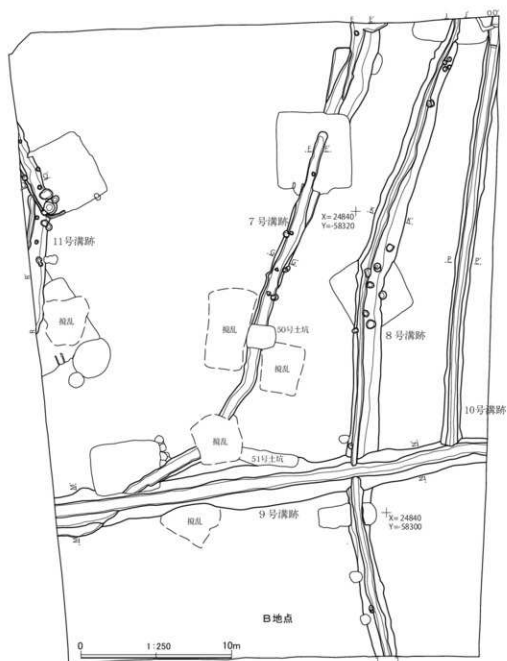
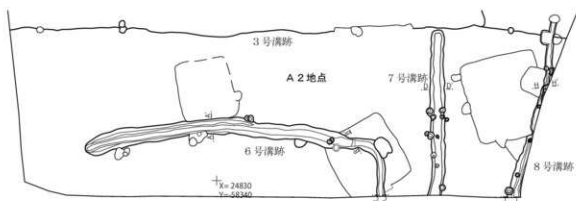
B地点の北西端から9号溝跡まで東西に走る溝跡である。24号住居跡を壊して造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

現存長は南北で28.61mである。溝壁上部が大きく開き、中位以下が逆U字形をなす形態で、溝幅は107～127cmである。溝底はわずかな凹凸はあるもの、おおむね平坦である。西端には段差をなしやや浅くなる部分がある。深さは37～44cmである。溝底の傾斜は微妙であり、西東どちらが低いとも言い難い。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土、暗茶褐色土や黒褐色土である。土師器片が多量に、須恵器片が少量出土している。また、青磁細片を含む陶磁器片が少数出土している。第193図9・13の縄文土器片、打製石斧は、覆土に混入した遺物である。出土遺物、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構かと思われる。

11号溝跡 (第189～193図、第95・96表、図版68)

B地点の南縁、西寄りわずかに彎曲しながら現れ消える溝跡である。先記したようにA2地点の5号溝跡と同一の遺構となる可能性がある。31・33号住居跡を壊して造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面、あるいはその上位の暗褐色土層中である。

現存長は13.93m、溝幅は104～117cmである。溝壁から溝底になだらかに移る丸みをもった形態で、深さは24～38cmである。覆土は、暗灰褐色や黒灰色の灰色みを帯びた土で、所々鉄分が沈着している



第189图 6~11号沟迹平面图

6～11号溝跡土層注記(1)

6号溝跡

[A-A'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。
2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックをモヤモヤ含む。

[B-B'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含み、焼土粒を極微量含む。
2層: 暗褐色土層。1層に近いが、モヤモヤとロームが多い。
3層: 暗褐色土層。2層に近いが、さらにロームが多い。

[C-C'断面]

- 1層: 暗褐色土層。1c層に近いが、やや黒み強く、ローム小ブロックが多い。
2層: 暗褐色土層。3層に近いが、5～30mm大のロームブロックが混れ入る。
3層: 褐色土層。4層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。

7号溝跡

[E-E'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
2層: 暗褐色土層。ローム粒、白色粒を微量含む。
3層: 暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。
4層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
5層: 暗褐色土層。ローム粒、白色粒、焼土粒を微量含む。
6層: 暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。

[F-F'断面]

- 1層: 暗灰褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
2層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
3層: 暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
4層: 暗褐色土層。ローム粒を微量含む。

[G-G'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、白色粒、焼土粒を微量含む。
2層: 暗茶褐色土層。ローム粒を多量に含む。

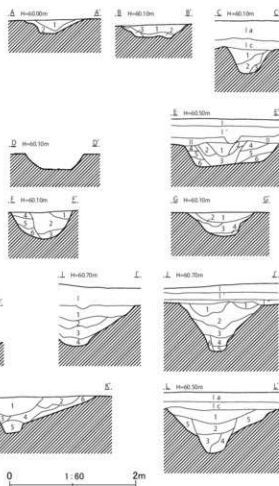
8号溝跡(1)

[I-I'断面]

- 1層: 暗褐色土層。A s-B、ローム粒、焼土粒を均一に含む。
2層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
3層: 暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

[J-J'断面]

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、A s-Bを微量含む。
2層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、A s-Bを微量含む。
3層: 黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒、A s-B、炭化物粒を微量含む。



- 5層: 黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、白色粒を微量含む。
6層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。

- 3層: 黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、白色粒を微量含む。
4層: 黒褐色土層。ローム粒を微量含む。

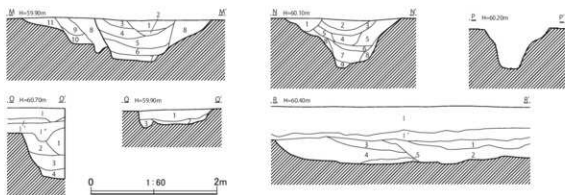
- 4層: 暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

- 4層: 黒褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。

- 5層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

- 6層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。

第190図 6～11号溝跡平面・断面図(1)



6～11号溝跡土層注記(2)

8号溝跡(2)

[K-K'断面]

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 3層: 暗黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。

[L-L'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、白色粒、焼土粒を微量含む。
- 2層: 黒褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 黒褐色土層。ローム粒を微量含む。

9号溝跡

[M-M'断面]

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 2層: 黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。
- 5層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、鉄斑を微量含む。
- 6層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、鉄斑を微量含む。
- 7層: 暗褐色土層。ロームブロック、鉄斑を均一に含む。

[N-N'断面]

- 1層: 暗茶褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層: 暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。
- 5層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

10号溝跡

[O-O'断面]

- 1層: 暗茶褐色土層。ロームブロック均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、焼土粒、A s-Bを微量含む。

11号溝跡(1)

[Q-Q'断面]

- 1層: 暗灰褐色土層。ローム粒を微量、鉄斑を均一に含む。
- 2層: 暗灰褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

- 5層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

- 6層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

- 4層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

- 5層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。

- 8層: 暗褐色土層。ローム粒、炭化物粒を微量含む。9号溝の掘り直し前の溝覆土か?

- 9層: 暗褐色土層。ローム粒、淡白色粘土粒を微量含む。9～11層は、7号溝跡覆土の可能性がある。

- 10層: 暗褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

- 11層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

- 6層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。

- 7層: 暗褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に含む。

- 8層: 暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量含む。

- 9層: 暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。

- 3層: 黒褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、焼土粒を微量含む。

- 4層: 黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

- 3層: 暗灰褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

第191図 6～11号溝跡平面・断面図(2)

6～11号溝跡土層注記(3)

11号溝跡(2)

〔R-R'断面〕

1層：暗灰褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。

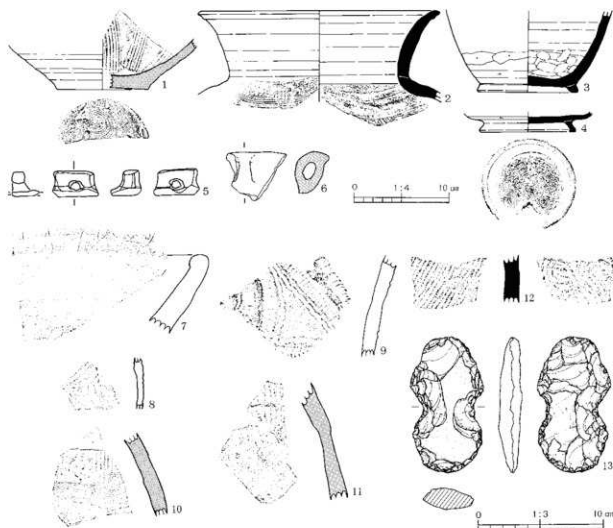
2層：暗灰褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロック、A s-Aを微量含む。

3層：黒灰色土層。ローム粒を微量含む。

4層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。

5層：暗黄褐色土層。ローム粒を均一に含み、ロームブロックを微量含む。

第192図 6～11号溝跡平面・断面図(3)



第193図 6・7・10・11号溝跡出土遺物

第95表 6・7・10・11号溝跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	陶器 播鉢	口径 — 底径 9.7 器高 [5.3]	平底。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面一体部ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面—鉤目。	白色・褐色の岩片、礫 内外一にぶい赤褐色 地一にぶい黄褐色	胴部～底部、1/3 残存6号溝跡出土

第96表 6・7・10・11号溝跡出土遺物観察表(2)

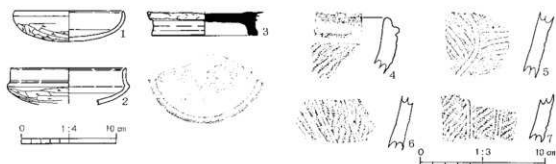
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	須恵器 大 甕	口径 底径 器高 — — [14.6]	口縁部は外反する。胴部は大きく張り出す。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ロコナデ。胴部上位平行吹き後カキメ。内面—口縁部ロコナデ。胴部上位当て具痕。	白色の岩片、チャート 内外—黄灰色	口縁部～胴部上位破片、7号溝跡出土
3	須恵器 瓶	口径 底径 器高 — — [8.6]	高台部は台形状を呈する。胴部はやや丸みをもって開く。ロコロ成形。	外面—ロコロナデ。胴部下端は回転ヘラケズリ。底部ヘラケズリ後ナデ。内面—ロコロナデ。下位ヘラナデ・指頭痕。高台貼付時回転ナデ。	白色の岩片 内外—黄灰色	胴部下半～高台部1/4残存 7号溝跡出土
4	須恵器 高台付 碗	口径 底径 器高 — 10.1 [2.1]	高台部は「ハ」字状に開く。ロコロ成形。	外面—ロコロナデ。体部下端は回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。高台部に自然袖付着。内面—ロコロナデ。高台貼付時回転ナデ。	白色の岩片 外—黄灰色 内—灰色	高台部残存 7号溝跡出土
5	土製品	縦横 — 2.0 [3.6]	手捏ね成形。	内外面—ナデ。	白色の岩片 外—褐色	端部欠損 7号溝跡出土
6	軟質陶器 内耳土 器	口径 底径 器高 — — —	ロコロ成形。	外面—ナデ。内面—ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母、内外—ぶい黄褐色	把手破片の 6号溝跡出土
7	鉢	口径 底径 器高 — — —	口縁部は内外に肥厚し丸くなる。粘土組織み上げによる成形。	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外—ぶい褐色	7号溝跡出土
8	深鉢	口径 底径 器高 — — —	胴部はわずかな丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—下端に細い区画の沈線。区画内にナナメの平行沈線、円形の刺突文。内面—磨耗により不明。	白色・灰色・赤褐色の岩片、石英片などの大小砂粒 外—ぶい褐色 内—ぶい黄褐色	鶴ヶ島台式 7号溝跡出土
9	深鉢	口径 底径 器高 — — —	胴部は外反しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—2箇所ナナメの隆帯。隆帯に沿ってキヤタピラ文。細かな波状沈線。破片下部にもキヤタピラ文と波状沈線。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片、雲母、石英などの大小砂粒多量 外—明赤褐色 内—ぶい褐色	勝版式 10号溝跡出土
10	常滑窯系 甕	口径 底径 器高 — — —	肩部はやや丸みをもって内傾する。粘土組織み上げ後、叩き整形。	外面—平行線、漢文様の押印文。内面—指押え、ナデ。	白色・黒色の岩片などの大小砂粒、小礫 外—灰黒色 内—灰色	11号溝跡出土
11	常滑窯系 甕	口径 底径 器高 — — —	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ成形後、叩き整形。	外面—破片上部に平行線の押印文。下端に自然袖張り上がつて固着。内面—ヨコナデ。かすかな自然袖の光沢が見られる。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 外—ぶい赤褐色 内—褐色	7号溝跡出土
12	須恵器 甕	口径 底径 器高 — — —	胴部はわずかな丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げ後、叩き整形。	外面—平行吹き目。内面—青黄波様の粗い当て具痕。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外—灰黒色	7号溝跡出土
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
13	打製石斧	長さ10.7、幅5.8、厚さ1.87、重さ105.16g	頁岩。分胴形。硬皮をもつ薄片を素材とし、周縁に直接打撃による両面加工を施す。刃部や基部の一部に磨耗痕あり。			完形 10号溝跡出土

6 ビット

今回の調査では、A2地点の北半、B地点の南西半で多数のビットを検出している。時期的には近世あるいはそれ以降に帰属するビットが主となるようである。

7 遺構外出土遺物

主に遺構確認面より上位より出土した遺物の大半は、土器器片である。



第194図 遺構外出土遺物

第97表 遺構外出土遺物観察表

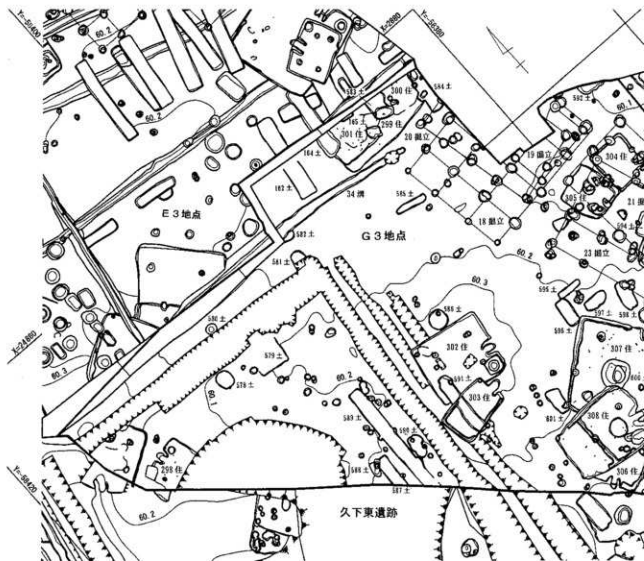
No.	器種	法量(cm)	形部・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.6 底径 — 器高 3.2	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。以下ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外—褐色	3/5残存
2	坏	口径 — 底径 — 器高 3.8	口縁部は直立する。体部に稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部上位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部中位～下位ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外—明赤褐色	口縁部～体部1/4残存
3	須恵器高台付埴	口径 — 底径 — 器高 —	高台は直立気味。底部内面はほぼ平坦。粘土組織み上げ成形後、ロクロ整形。	外面—回転ナデ。底面中央に糸切り痕。内面—回転ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外—灰色	
4	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は内彎し立ち上る。粘土組織み上げによる成形。	外面—端部下端に横位の隆帯。以下LHの単節縄文施文後、隆帯に沿い沈線を巡らす。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 外—にぶい褐色 内—にぶい褐色	加賀利E式
5	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は微妙に彎曲しながら立ち上る。粘土組織み上げによる成形。	外面—弧状の沈線による区画。区画外にはナメの平行沈線。区画外にはヨコの平行する沈線。内面—ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 外—にぶい黄褐色 内—暗褐色	加賀利E式あるいは曾利式
6	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はやや丸みをもって立ち上る。粘土組織み上げによる成形。	外面—多載竹管状の工具により3箇所沈線。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—にぶい褐色	加賀利E式
7	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部はやや丸みをもって立ち上る。粘土組織み上げによる成形。	外面—丸の単節縄文施文後、多載竹管状の工具により2箇所2条一単位のタテの沈線。内面—ナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外—にぶい褐色	加賀利E式

第V章 久下東遺跡G 3地点の調査

第1節 調査の概要

久下東遺跡は、女堀川と男堀川にはさまれた東西に長い低位段丘の南面する平坦地から緩斜面にかけ位置する集落遺跡である。これまでの各章で報告した北堀新田前遺跡(本書第三章)の北東に近接し、北堀新田遺跡(本書第四章)の西側に隣接する遺跡である。

同遺跡では、これまで本庄市教育委員会が、民間開発に先立つ事前調査として2回の発掘調査を実施しており(増田 1985、太田・松本 2005)、また、本庄早稲田の区画整理事業に関連して、平成19・20・22・23年度の4カ年にわたって発掘調査を実施している。都市再生機構が担当した開発予定地、および市担当地点の一部については、すでに平成20～24年度に報告書刊行事業を終え(松本・大熊他 2009、恋河内・的野 2010、恋河内 2012、松本 2013)、本庄市の担当する開発予定地に関しても、平成25年度以降報告書を刊行している(恋河内・的野 2014)。



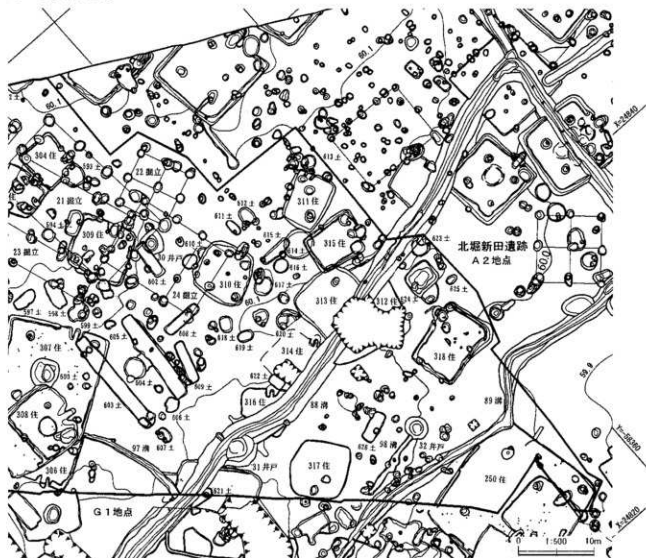
第195図 久下東遺跡G 3地点

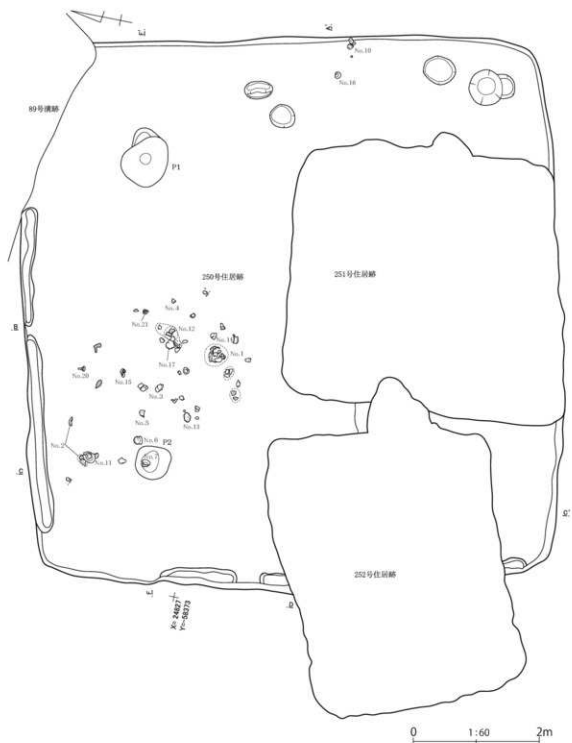
ここに報告するのは、平成23年度に調査を実施した久下東遺跡G3地点についてである。G3地点は、北堀新田遺跡A2地点(本書第IV章)と境を接し、平成24年度に報告したG1地点(松本 2013)の北側に位置する(第195図)。久下東遺跡全体から見ると、東半の一角にあたり、住居跡に関しては、北側にかけてやや密度を減じはじめの一帯にあたる(第6図)。G3地点の調査面積は、約1,377㎡である。なお、前章で報告した北堀新田遺跡A2地点(本書第IV章)との境については、調査時の境が多数の遺構を寸断しているため、変更を加えている。

G3地点で検出した遺構の内、本報告書で記載する遺構は、堅穴住居跡21軒、掘立柱建物跡7棟、井戸跡3基、土坑52基、溝跡4条、多数のピットである。また、上記遺構に加え、久下東遺跡G1地点ですでに報告した250号住居跡(松本 2013: 112~118頁)に関しては、遺構平面図中の遺物分布図、出土遺物図などに不足があったため、追加報告する。

第2節 検出された遺構と遺物

1 堅穴住居跡

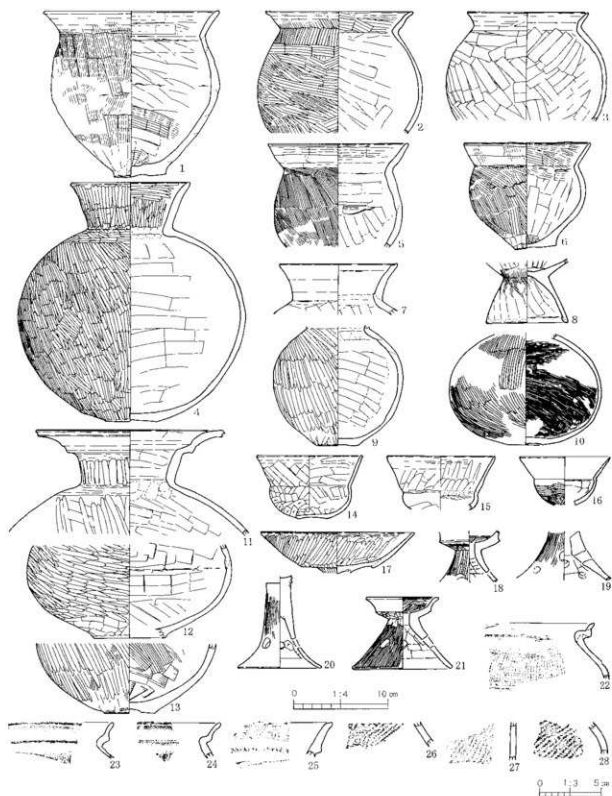




第196図 250号住居跡平面図

250号住居跡 (第196・197図、第98～100表)

G 3地点の南東端で検出した遺構で、一辺が8 mを大きく上回る大型住居跡である。調査地点の境に位置するため、遺構の一部はG 1地点、一部は変更前の地点区分の「北堀新田遺跡A 2地点」の範囲内であり、3地点の調査時にそれぞれ一部を調査する結果となった。G 1地点の報告書において報告したが(松本 2013: 112～118頁)、掲載した出土遺物に不備があったため、遺構平面図、出土遺物図、出土遺物観察表のみ改めて掲載する。



第197図 250号住居跡出土遺物

第98表 250号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 18.7 底径 5.5 器高 17.6	くびれ部が屈曲し、胴部は膨らむ。底面中央が凹む上げ底。粘土粗積み上げによる成形。内外面に輪積み痕残る。	外面一口縁部ヨコナゲ、一部下調整のハケ残る。胴部ナナメの浅いハケ。胴部下位～底部タテ、ナナメのナゲ。器面磨耗。内面一口縁部ヨコナゲ、細線入る。以下ナゲ、部分的にハケ。	白色・赤褐色岩片などの大小砂粒多量 外一に濃い赤褐色 内一褐色	口縁部～くびれ部1/4、胴部～底部ほぼ残存

第99表 250号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	甕	口径 15.6 底径 — 器高 (12.3)	くびれ部が屈曲し、胴部は丸く膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ナナメのハケ後、ヨコナデ。くびれ部以下ナナメ、ヨコの乱雑なハケ。内面—ヨコ、ナナメのハケ後、端部ヨコナデ。以下ナナメのナデ。	白色・灰色・赤茶色岩片などの大小砂粒多量 外—褐色 内—ぶい褐色	口縁部一部欠失、胴部1/4～1/3残存
3	甕	口径 12.8 底径 — 器高 (11.5)	口縁部が短く開き、胴部が球胴状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部へくびれ部ヨコナデ、以下ナナメのナデ、部分的にケズリに近い。内面—口縁部ヨコナデ、以下ナナメのナデ。	灰色・黒色・赤茶色岩片、雲母などの砂粒 外—ぶい褐色 内—褐色	口縁部一部ののみ、くびれ部外—ぶい褐色 内—褐色 1/2残存
4	壺	口径 12.6 底径 6.0～7.0 器高 (25.1)	口縁部は外反し、胴部は球胴状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部タテのミガキ、以下ヨコ、ナナメ、タテのミガキ。内面—口縁部ヨコ、タテのミガキ、頸部指押さえ。胴部ヘラナデ。	白色・灰色・黒色岩片などの大小砂粒多量 内外—ぶい褐色	口縁部～胴部上半1/4～1/2欠失
5	甕	口径 (14.9) 底径 — 器高 (10.9)	口縁部が内彎気味に開き、胴部が丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、細かい糸線が入る。くびれ部以下ナナメのハケ。磨耗しており、ハケメの見えない部分あり。内面—口縁部～胴部中位ヨコナデ。細かい糸線が入る。以下浅い糸線の入ったナナメのナデ。	白色・灰色の岩片、雲母などの砂粒 内外—褐色	口縁部～胴部下位1/2残存。
6	甕	口径 13.6 底径 4.5 器高 11.3	口縁部が大きく開き、胴部は丸く膨らむ。	外面—口縁部ヨコナデ、くびれ部以下ナナメのハケ。胴部下半から底部にかけてナデ、ケズリ。2箇所の打ち欠き、黒斑。底面ナデ、擦痕。内面—口縁部浅いヨコ、ナナメのハケ。以下ナナメのナデ。部分的にケズリに近い。底部蜘蛛の巣状のハケ。	白色・灰色・赤褐色岩片などの大小砂粒 内外—ぶい黄褐色	口縁部1/2、胴部3/4、底部残存
7	壺	口径 12.6 底径 — 器高 (5.4)	口縁部はゆるやかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～屈曲部ヨコナデ、以下ナナメのナデ。内面—端部に浅い凹線状の凹み。口縁部～屈曲部ヨコナデ、以下ナナメのナデ。	白色・灰色・黒色の岩片、雲母などの大小砂粒 内外—褐色	胴部上半以下欠失P-1上部
8	台付甕	口径 15.6 台端径 8.6 器高 (6.6)	端部を折り返したS字発台部。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部ナナメのケズリ、ハケ。台部ナナメのハケ、ナデ、指押さえ。内面—胴部粘土充填、ヘラナデ。脚部ナナメのナデ。	灰色・黒色岩片、雲母などの細砂 内外—ぶい褐色	脚部のみ残存
9	壺	口径 — 底径 4.5 器高 (12.6)	頸部が屈曲して立ち上がり、胴部が球胴状を呈する。底面が少し凹むように成形。粘土組織み上げによる成形。	外面—頸部ヨコナデ、胴部はやや細い丸みのある工具によるナナメのナデ。黒斑あり。内面—頸部指押さえ、指ナデ。以下板状の工具による口縁部ヨコナデ。	灰色・黒色の岩片、雲母などの細砂 内外—褐色	胴部1/3～1/2、底部残存
10	壺	口径 — 底径 3.5 器高 [11.6]	小さい平底。胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—頸部～胴部ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。内面—ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、霰 内外—明赤褐色	胴部上位～底部残存
11	壺	口径 19.9 底径 8.6 器高 (11.2)	筒状の短い頸部に、大きく開く口縁部の付く二重口縁壺。胴部は大きく膨らむ。	外面—口縁部ヨコナデ、頸部タテのナデ(整形痕?)後、ヨコナデ。胴部下調整のヨコ、ナナメのナデ後、ナナメのナデ、ミガキ(単位はよく見えないが、所々光沢がある)。内面—口縁部～頸部ヨコナデ。以下指押さえ、ナナメのナデ。	白色の岩片、雲母などの大小砂粒 内外—明赤褐色	口縁部一部の欠失、頸部完存、胴部上半1/8残存
12	壺	口径 — 底径 (7.5) 器高 (9.8)	胴部は大きく膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部ナナメのミガキ、底部付近ナナメのナデ。内面—ヨコ、ナナメのヘラナデ、ヘラ痕顕著。	白色・灰色の岩片などの細砂 内外—暗褐色	胴部中位以下1/2弱、底部一部残存
13	壺	口径 — 底径 5.5 器高 (7.3)	胴部が丸く膨らむ壺。	幅の狭い丸みのある工具によるナナメのナデ。部分的に下調整のハケメ残る。内面—ハケ具によるナナメのナデ。部分的にハケメ残る。	白色の岩片、雲母などの大小砂粒 内外—褐色	底部～胴部下位ののみ残存。
14	鉢	口径 11.3 底径 2.9 器高 6.8	口縁部は屈曲部から大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～屈曲部ヨコナデ後、ナナメのヘラナデ。屈曲部彫り込むような手法で規を測す。体部ナナメのナデ、ケズリ。内面—口縁部ヨコナデ後、ナナメのナデ。屈曲部細線の入るナナメのナデ。体部ナナメ。	大小砂粒、微量の雲母 内外—ぶい褐色	口縁部～体部中位1/3～1/2残存
15	鉢	口径 11.5 底径 — 器高 (5.7)	口縁部は屈曲部から大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部上半ヨコナデ、下半ナナメのナデ。体部上半ナナメのナデ、体部下半～底部ナナメのケズリ。内面—ヘラナデ。体部ヘラ痕顕著。	大小砂粒、微量の雲母 内外—明赤褐色	口縁部～底部1/2～5/6残存
16	鉢	口径 (9.6) 底径 — 器高 [5.2]	脚部の剥離痕あり。胴部は丸みをもつ開き、口縁部は大きく外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ。内面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外—明赤褐色	口縁部～胴部5/6残存

第100表 250号住居跡出土遺物観察表(3)

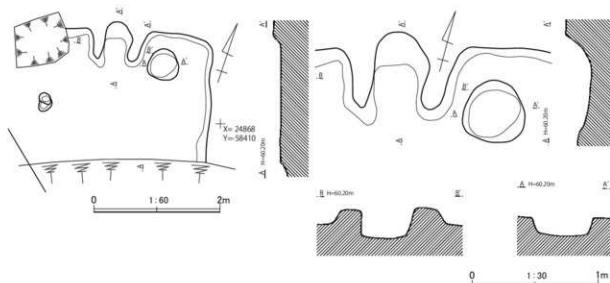
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
17	高坏	口径 底径 器高 16.4 — (4.3)	形部下端に稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一坏部ヨコナデ後、ナナメのミガキ。稜以下タテのミガキ。内面一ロ線部付近ヨコナデ。坏部上半ナメの粗いミガキ(光沢ない)。ナデ。下半ナメ、ヨコのミガキ。	白色・灰色の岩片、雲母などの細砂 内外にぶい褐色	坏部1/3、接合部は全体残存
18	器台	口径 底径 器高 — [5.5]	脚部はハの字状に開く。円孔は3箇所。体部は稜をもち、ロ線部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一ロ線部ヨコナデ。体部上位ヘラミガキ。下位ヘラケズリ。脚部上位ヘラミガキ。内面一ロ線部ヨコナデ。体部上位ヘラミガキ、中位ヘラケズリ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内外一明褐色	ロ線部～脚部中位残存
19	器台	口径 底径 器高 — [5.1]	脚部はハの字状に開く。円孔は3箇所を2段。粘土組織み上げによる成形。	外面一脚部上へ中位ヘラミガキ。内面一脚部上位ナデ。脚部中位ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外一褐色	脚部上位～中位残存
20	高坏	口径 底径 器高 8.7 (9.7)	脚部上位は柱状を呈し、裾部は広がる。円孔は3箇所。	外面一脚部上・下位器面荒れ単位不明、中位ヘラミガキ。内面一坏部ナデ。脚部上位ナデ、中位ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外一褐色	坏部趾部～脚部9/10残存
21	器台	口径 底径 器高 7.6 10.2 7.6	脚部はハの字状に開く。円孔は3箇所。体部は稜をもち、ロ線部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一ロ線部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。脚部上位ヘラナデ。脚部中位ヘラミガキ。内面一坏部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	白色・褐色の岩片、礫、角閃石 内外一褐色	7/8残存
22	甕	口径 底径 器高 — —	ロ線部は屈曲する。胴部が張り、胴部中位が膨らむ器形。粘土組織み上げによる成形。	外面一ロ線部ヨコナデ。以下ナメのハケ後、ヨコの粗いハケ。内面一ヨコナデ。	白色の岩片・雲母などの細砂 内外一明赤褐色	S字状ロ線部付甕
23	甕	口径 底径 器高 — —	ロ線部は屈曲する。粘土組織み上げによる成形。	外面一ロ線部ヨコナデ。以下ナメのハケ。内面一ヨコナデ。	白色の岩片など細砂微量 外一暗褐色 内一ぶい黄褐色	S字状ロ線部付甕
24	甕	口径 底径 器高 — —	ロ線部は屈曲する。粘土組織み上げによる成形。	外面一ロ線部ヨコナデ。以下ナメの粗いハケ。内面一ヨコナデ。	白色の岩片・雲母などの細砂 内外一ぶい黄褐色	S字状ロ線部付甕
25	壺	口径 底径 器高 — —	ロ線部は大きく外反し、開く。ロ線部下端に突帯状の稜をもち、粘土組織み上げによる成形。	外面一ヨコナデ。突帯状の稜端に刻目。内面一ヨコナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外にぶい褐色	二重ロ線壺
26	壺	口径 底径 器高 — —	頸部がゆるやかに立ち上がる器形。	外面一条の乱れたLRの単節陶文。内面一ヨコナデ。	灰色の細かい岩片などの細砂 外一ぶい黄褐色 内一ぶい褐色	共生後期東関東系、28と同一体
27	甕	口径 底径 器高 — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一条の密接するLRの単節陶文。内面一ヨコ、ナメのナデ。	白色・灰色の岩片などの細砂を少量 外一ぶい褐色 内一暗褐色	共生後期東関東系、26と同一体
28	壺	口径 底径 器高 — —	胴部がゆるやかな丸みをもつ器形。	外面一LRの単節陶文2段。黒斑あり。内面一ヨコナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外にぶい褐色	共生後期東関東系、26と同一体

296号住居跡 (第198図、図版78)

調査地点北西端近くで検出した遺構である。南半を大きく攪乱により壊されており、残存状態は良好ではない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形、あるいは長方形になろうか。奥壁はカマドを中心に微妙に斜行するようである。規模は、いずれも現存長であるが、主軸方向で2.15m、副軸方向で3.03mである。主軸方位はN-13°-Wである。壁の立ち上がりは比較的急峻で、床面はおおむね平坦である。カマドと北東隅の間の土坑は、貯蔵穴であろう。上端での平面形は、やや不整な円形で、断面形は逆U字形である。最大径は50cm、深さは14cmである。カマドは、北壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部の平面形は、不整な楕円形で、全長は74cm、中央での横幅は42cmである。横断面は箱薬研に近く、燃焼面から奥壁へと丸みをもって立ち上がる形態である。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著ではない。

カマドの前や貯蔵穴脇の覆土中から土器器片や編物石が出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代の住居跡の可能性がある。



第198図 298号住居跡平面・断面図

299号住居跡 (第200・201図、図版78)

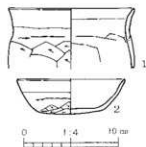
調査地点北縁沿いの東半で検出した遺構である。300・301号住居跡、164・165・583・584号土坑に壊されており、南・西壁の一部のみ遺存する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

いずれも現存長になるが、東西方向での長さは6.56m、南北方向での長さは1.70mで、南壁の向きは、 $N-86^{\circ}-E$ である。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかで、床面はかなり凹凸している。床面の硬化は、それほど顕著ではない。土師器小片が少量出土している。重複関係、覆土から見て、古墳時代の住居跡であろう。

300号住居跡 (第199～201図、第101表、図版78・99)

調査地点北縁沿いの東半で検出した遺構である。299号住居跡を切り、301号住居跡、583・584号土坑に壊されている。床面の極一部というか、床面と思しき硬化面のみ遺存する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

いずれも現存長になるが、東西方向での長さは1.80m、南北方向での長さは1.90mである。床面は微妙な凹凸が見られるが、おおむね平坦であり、部分的ではあるが、明瞭に硬化している。P1・P2は、柱穴の可能性のあるビットである。ともに平面形はやや歪な円形で、深さは、



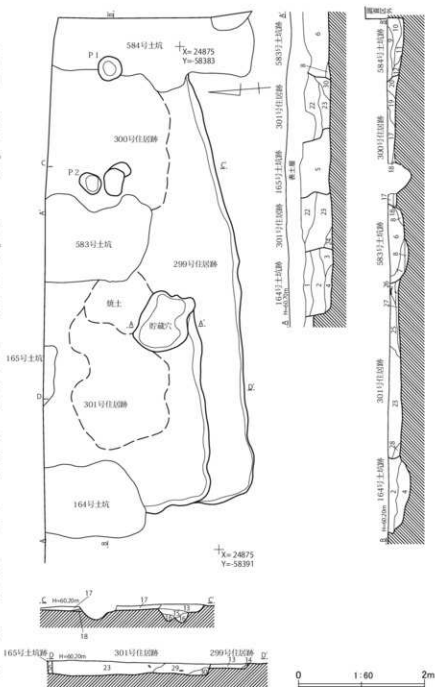
第199図 300号住居跡出土遺物

第101表 300号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (13.2) 底径 — 器高 [6.4]	口縁部は外傾し上位でさらに外反する。胴部はわずかに膨らみをもつ。粘土粗積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。頸部ナゲ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部～頸部ヨコナゲ。胴部ヘラナゲ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母、角閃石 内外—にぶい赤褐色	口縁部～胴部上位 1/4残存
2	坏	口径 (11.3) 底径 7.1 器高 3.7	平底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部までほぼ直線的に開く。粘土粗積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。体部上位ナゲ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面—体部ヨコナゲ。底部ナゲ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外—橙色	1/3残存

584号土坑土層注記(1)

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含み、白色粒を微量含む。1~4層は、164号土坑覆土。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを全体に均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、10~20mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 4層: 暗褐色土層。暗褐色土と10~50mm大のロームブロックの混合土。
- 5層: 黒褐色土層。ローム粒、10~30mm大のロームブロックを全体に均一に含む。粘性、しまりともになく、ボソボソしている。165号土坑覆土。
- 6層: 暗褐色土層。焼土粒を含み、ローム粒を全体に均一に含む。灰白色粘土粒、炭化物粒を少量含む。6~8層は、583号土坑覆土。
- 7層: 暗褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを少量全体に均一に含み、炭化物粒を微量含む。
- 8層: 暗褐色土層。20~40mm大のロームブロックを含み、炭化物粒を少量含む。
- 9層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、白色粒、焼土粒を微量全体に均一に含む。9~12層は、584号土坑覆土。
- 10層: 暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを含み、白色粒を微量、焼土粒を少量全体に均一に含む。
- 11層: 暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを含み、白色粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 12層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含み、焼土粒を含む。白色粒を微量含む。
- 13層: 暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを少量全体に含み、白色粒、焼土粒を微量含む。13・14層は、299号住居跡覆土。15・16層は、同遺構掘り方埋土。
- 14層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 15層: 暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 16層: 暗褐色土層。暗褐色土とローム粒の混合土。

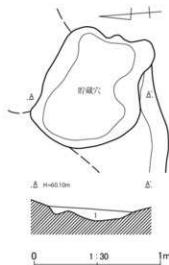


第200図 299~301号住居跡平面・断面図(1)

299～301号住居跡、164・165・583・584号土坑土層注記(2)

- 22層：暗褐色土層。ローム粒を少量、白色粒、焼土粒を微量含む。22～30層は、301号住居跡覆土。
- 23層：暗褐色土層。ローム粒を全体に均一に含み、5～10mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 24層：暗褐色土層。ローム粒、10～30mm大のロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。
- 25層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を含み、白色粒、炭化物粒を微量含む。

- 26層：暗褐色土層。焼土粒を含み、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。カマド覆土？
- 27層：暗褐色土層。焼土粒と灰層が互層をなす。ローム小ブロックを微量含む。
- 28層：暗褐色土層。暗褐色土と50mm大のロームブロックの混合土。
- 29層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロック、焼土粒を含み、白色粒を微量含む。
- 30層：暗褐色土層。30mm大のロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。



301号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。

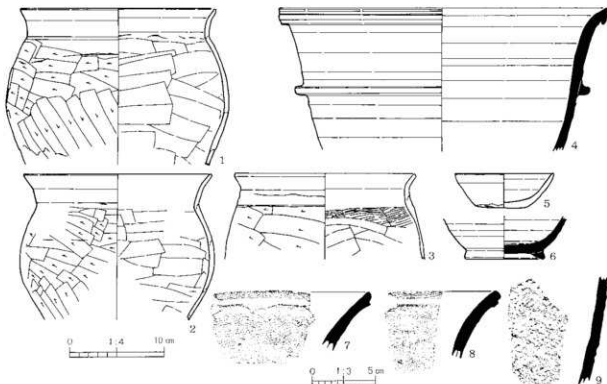
第201図 299～301号住居跡平面・断面図(2)

P1が33cm、P2が12cmである。位置的にどちらかが柱穴の場合、他方は柱穴ではないことになろうが、深さから見れば、P1の方がより柱穴に相応しいようである。

土師器が数点出土している。出土遺物、重複関係から見て、平安時代の住居跡の可能性がある。

301号住居跡(第200～202図、第102表、図版78・99)

調査地点北縁沿いの東半で検出した遺構である。299号住居跡を切り、164・165・583号土坑に壊さ



第202図 301号住居跡出土遺物

第102表 301号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(20.6) 底径— 器高[16.6]	口縁部はコの字状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫 内外—ぶい赤褐色	口縁部へ 胴部下位 1/6残存
2	甕	口径(19.7) 底径— 器高[15.4]	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外—ぶい黄褐色	口縁部へ 胴部下位 1/6残存
3	甕	口径(19.2) 底径— 器高[9.1]	口縁部はやや不整なコの字状を呈す。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	白色の褐色の岩片、礫、雲母、角閃石 内外—明褐色	口縁部へ 胴部上位 5/12残存
4	須恵器 甕	口径(34.8) 底径— 器高[15.2]	ロクロ成形。	外面—口縁部～胴部中位ロクロナデ。内面—口縁部～胴部中位ロクロナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、礫	口縁部へ 胴部中位 1/8残存
5	坏	口径10.3 底径5.4 器高3.6	平底。体部へ口縁部は直線的に開く。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外—ぶい褐色	2/3残存
6	須恵器 甕	口径— 底径(8.0) 器高[4.5]	高台部は低い。体部はやや膨らみをもって開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面—ロクロナデ。高台足付時周辺部回転ナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母、石英 内外—黄灰色	口縁部中位 へ高台部 1/2残存
7	須恵器 甕	口径— 底径— 器高—	口縁部はゆるやかに開く。粘土紐積み上げによる成形後、ロクロ整形。	外面—一端には凹線状のくぼみ。以下回転ナデ後、柳掻波状文、2条の平行沈線、波状文。内面—回転ナデ。	白色・灰色の岩片、石英片などの大小砂粒をかなり含む 内外—灰色	
8	須恵器 甕	口径— 底径— 器高—	口縁部はゆるやかに開く。粘土紐積み上げによる成形後、ロクロ整形。	外面—一端には凹線状のくぼみ。以下回転ナデ後、3箇所柳掻波状文を施す。内面—回転ナデ。	白色・灰色の岩片、石英片などの大小砂粒をかなり含む 内外—灰色	
9	須恵器 甕?	口径— 底径— 器高—	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形後、叩き整形。	外面—格子目叩き。内面—青黄漆様の当て具痕。	白色・赤褐色の岩片などの大小砂粒をかなり含む 内外—ぶい黄褐色	

れている。確認面は黄褐色の軟質ローム層上面である。

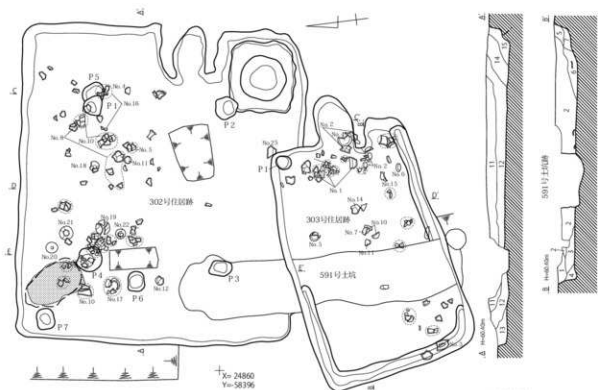
床面と思われる明瞭な硬化面の東端に、焼土の集中部があり、その脇に土坑状の掘り込みが見られることから、焼土の集中部をカマドの名残りとし、土坑状の掘り込みを下部のみ残存貯蔵穴と考えた。平面形は、方形、ないしは隅丸方形に近い形態になろうか。いずれも現存長になるが、規模は、主軸方向で3.86m、副軸方向で2.56mである。主軸方位は、N-90°-E前後になると推定される。南・西壁の一部しか残っていない。壁は不規則に曲折するが、立ち上がりは比較的急峻で、掘り込みもしっかりしている。床面はかなり凸凹しているが、カマドの前面を中心に硬化している。カマド脇の掘り込みは、貯蔵穴であろう。上端での平面形は、手前が丸みを帯び、奥壁側が辺をなす不整形で、最大長は98cm、深さは6cmである。

東側の焼土の集中部は、上記したように燃焼部が痕跡として残るカマドの残滓と見てよいであろう。焼土の集中部の大きさは、残存長になるが、長さが87cm、横幅は104cmである。

覆土中から土師器片や編物石などが散漫に出土している。出土遺物、覆土から見て、平安時代の住居跡と考えられる。

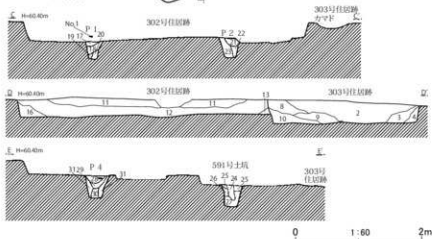
302号住居跡（第203～207図、第103～105表、図版79・80・99）

調査地点の西半ば中央で検出した遺構である。303号住居跡、591号土坑に壊されている。確認面は黄褐色の軟質ローム層上面である。



302・303号住居跡土層注記(1)

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を全体に均一に含み、5～10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。1～10層は、303号住居跡覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロックを全体に均一に含み、白色粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを全体的に少量、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロックを少量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロック、焼土粒を少量含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒を微量含む。
- 8層：暗褐色土層。ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。全体にきめ細かい。
- 9層：暗褐色土層。黒褐色土を少量、ローム粒、20～50mm大のロームブロックを多量に含み、焼土粒を微量含む。
- 10層：暗褐色土層。8層に近いが、焼土粒を微量含む。
- 11層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。以下の土層も同様に、全体にきめ細かく、含有物が少ない。11～16層は、302号住居跡覆土。17～31層は、302号住居跡柱穴覆土。
- 12層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。



第203図 302・303号住居跡平面・断面図(1)

302・303号住居跡土層注記(2)

- 13層：暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを多量に含み、焼土粒を微量含む。
- 14層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5～20mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 15層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、ローム小ブロックを含み、黒褐色土を少量含む。
- 16層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 17層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量に含む。17～20層は、P1覆土。
- 18層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含み、黄灰色シルト質ローム粒を微量含む。
- 19層：暗褐色土層。ローム粒、20mm大のロームブロックを含む。
- 20層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒の混合土。
- 21層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロックを含む。21～23層は、P2覆土。
- 22層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロック、黄灰色シルト質ロームブロックを含む。
- 23層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロックを微量、黄灰色シルト質ロームブロックを多量に含む。
- 24層：にぶい黄褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロックを少量、黄灰色シルト質ローム粒を含む。24～27層は、P3覆土。
- 25層：黒褐色土と黄灰色シルト質ロームブロックの混合土。ローム粒を微量含む。
- 26層：黒褐色土層。ローム粒を少量含む。
- 27層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。
- 28層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。28～31層は、P4覆土。
- 29層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロック、黄灰色シルト質ロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。
- 30層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～20mm大のロームブロックの混合土。
- 31層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、黒褐色土を微量含む。

第204図 302・303号住居跡平面・断面図(2)

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で5.10m、副軸方向で4.54mである。主軸方位はS-76°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に明瞭に硬化している。P1～P4は主柱穴であろう。上端での平面形はかなり不整な円形、楕円形である。深さは、P1が29cm、P2が32cm、P3が35cm、P4が32cmである。P3・P4の土層断面には、柱根跡と思われる痕跡がみとめられる。P5～P7は、本住居跡に伴う可能性のあるビットである。カマド脇の大きな土坑は、貯蔵穴である。上端での平面形は、多少胴の張る方形である。規模は、東西方向で112cm、南北方向で104cmである。上部に方形の平場を有し、中央が丸くバケツ形に掘り込まれている。底面は平坦に仕上げられている。最深部での深さは51cmである。

カマドは、東壁中央、やや南寄りに設けられている。燃焼部の平面形は、やや不整な楕円形と見てよいであろうが、奥壁はかなり直線的である。燃焼部の全長は94cm、中央での横幅は52cmである。側壁、奥壁ともに急峻に立ち上がり、燃焼面は床面と同じ高さで平坦である。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著ではない。袖は、暗褐色土とローム、灰褐色粘土粒の混合土を固めて造られている。

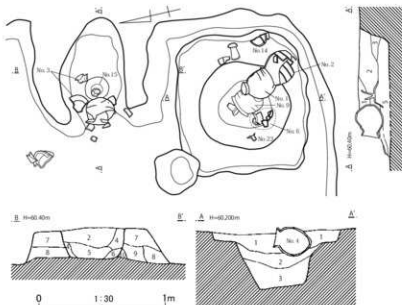
主柱穴P1の周辺、同じくP4周辺、カマド内、貯蔵穴内の主に4箇所から、完形、準完形の土師器がまとまって出土している。第206・207図4・5・8・10・11・16・18の甕、甗や高坏、坏は、P1の周辺、12・17・19～22の甕や高坏、坏は、P4の周辺の、主に上～下層から出土している。3の甕、15の高坏は、カマド内から、1・2・6の甕、9の甗、23の高坏などは、貯蔵穴の上層から折り重なるようにして出土している。出土遺物、覆土などから見て、古墳時代後期初頭の住居跡と考えられる。

303号住居跡(第203～205・208図、第106・107表、図版79・81・100)

調査地点の西半中央、南寄りで見出した遺構である。302号住居跡を切り、591号土坑に壊されてい

302号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、白色粒、焼土粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む、灰褐色粘土粒を多量に、焼土粒、焼土小ブロックを含む。天井部崩落土。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒を少量含む。色調やや暗い。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、灰褐色粘土粒を少量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、灰褐色粘土粒、焼土粒を全体にまばらに少量含む。
- 6層：暗褐色土層。3層に近いが、焼土粒を含まない。
- 7層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、ロームブロック、灰褐色粘土粒の混合土。7～10層は、カマド袖構築材。



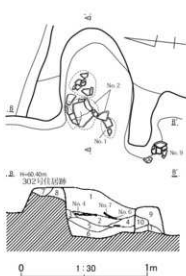
- 8層：暗褐色土層。7層に近いが、ロームブロック、灰褐色粘土粒が多い。
- 9層：暗褐色土層。7層に近いが、灰褐色粘土粒が多い。
- 10層：暗褐色土層。9層に近いが、焼土粒、焼土ブロックが多い。

302号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、黄灰色粘土小ブロックを少量全体に均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロック、

黄灰色粘土粒を少量含む。

- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを少量、黄灰色粘土粒を含み、焼土粒を微量含む。



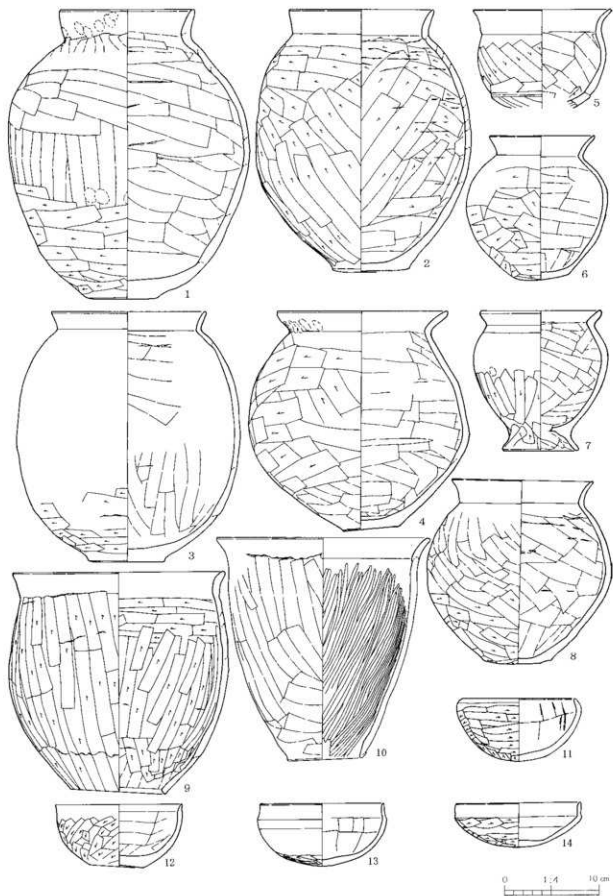
303号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、灰色粘土粒を微量、焼土粒を多量に含む。
- 2層：暗褐色土層。10mm大のロームブロックを少量、灰色粘土粒、10mm大以上の灰色粘土ブロックを多量に、焼土小ブロックを微量含む。天井部崩落土。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を微量、焼土粒を少量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム小ブロックを微量、焼土粒、5～30mm大の焼土ブロックを含む。天井部の被熱部分。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを微量、焼土粒を少量含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。7～11層は、カマド袖構築材。
- 8層：暗褐色土層。7層に近いが、ローム粒が少ない。
- 9層：暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、黒褐色土を微量含む。
- 11層：灰褐色粘質土層。灰色粘土土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。

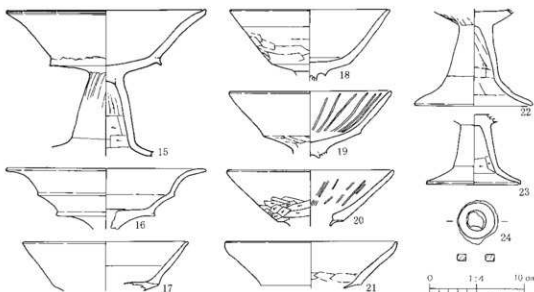
第205図 302・303号住居跡平面・断面図(3)

る。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、奥壁側が入り口側 비해いくらか短い長方形である。規模は、主軸方向で3.90m、副軸



第206图 302号住居跡出土遺物(1)



第207図 302号住居跡出土遺物(2)

第103表 302号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手の特徴	調整・装飾手の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 14.0 底径 7.4 器高 30.6	平底。胴部はやや丸みをもち、上位に最大幅がある。口縁部は短く直立気味。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ後指頭痕。胴部上～中位ヘラナデ、中～下位ヘラケズリ、最下端ナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。胴部下位～底部ナデ。	白色の岩片、石英、雲母、緑 内外一明赤褐色	完形
2	甕	口径 15.0 底径 8.1 器高 28.0	平底。胴部は丸みをもつ。口縁部はわずかに外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。以下ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外一褐色	5/6残存
3	甕	口径 (16.2) 底径 8.0 器高 26.4	平底。胴部は丸みをもつ。口縁部は短く外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上～中位ナデ、中～下位ヘラケズリ、最下端ナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。以下ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、緑 内外一明赤褐色	2/5残存
4	甕	口径 18.0 底径 6.0 器高 23.3	平底。胴部は大きく丸みをもち、最大径は中位にある。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。指頭痕あり。胴部上～下位ヘラケズリ、下位ヘラナデ。底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、角閃石 内外一ぶい赤褐色	ほぼ完形
5	甕	口径 14.6 底径 一 器高 10.4	胴部は丸みがあるが下位に腰をもつ。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	褐色の岩片、角閃石、白色の岩片 内外一ぶい赤褐色	4/5残存

方向で2.50mである。主軸方位はN-82°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。東壁から北壁東半を除いて、壁溝が巡らされている。

カマドは、東壁の中央に設けられている。燃焼部の平面形は、楕円形で、床面と同じ高さの燃焼面からゆるやかなスロープをなし奥壁に連なる形態である。燃焼部の長さは、100cm、横幅は58cmである。被熱赤化の痕跡は、明瞭ではない。左袖はほとんど残存せず、右袖も短い。右袖は、灰褐色の粘土を土台にローム混じりの暗褐色土を固めて造られている。

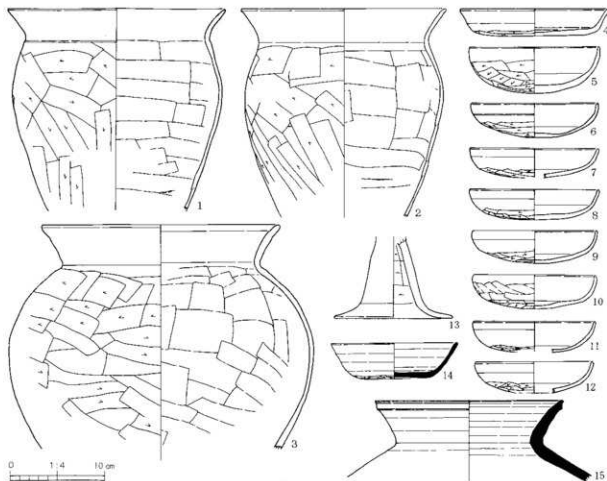
主にカマドの周辺、およびカマドの前から完形、あるいはそれに近い土師器が出土している(第205図5～7・10・11・14・15など)。上層出土の遺物が多く、ほとんどが下層より上位から出土している。第205図9の甕は、カマド内から出土している。出土遺物、覆土から見て、奈良時代の住居跡と考えられる。

第104表 302号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
6	甕	口径	(11.0)	底部はわずかに丸みをもつ。胴部は丸みをもつ。口縁部は斜外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片 外-明褐色 内-灰褐色	1/2残存
		底径	5.7				
		底器高	15.3				
7	台付甕	口径	12.6	台部は短くハの字形に開く。胴部は上位に最大幅をもつ。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上-中位ナデ。胴部中-底部ヘラケズリ。指筒あり。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色 の岩片、礫 内外-明赤褐色	1/2残存
		底径	7.7				
		底器高	14.8				
8	甕	口径	(14.8)	平底。胴部は丸みをもつ。口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上-中位ヘラナデ。胴部中位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、礫 外-明赤褐色 内-暗赤褐色	3/4残存
		底径	7.2				
		底器高	19.4				
9	瓶	口径	22.2	口縁部は外反する。胴部は丸みをもち、底部は筒抜け。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラケズリ、下位ヘラナデ。	白色・黒色・褐色 の岩片、礫 内外-明赤褐色	ほぼ完成
		底径	10.0				
		底器高	23.5				
10	瓶	口径	22.7	口縁部は外反する。胴部はわずかに丸みをもって開く。口縁部は筒抜け。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部ヘラナデ後ヘラミガキ。端部ケズリ。	白色・褐色の岩片、礫 内外-にぶい黄褐色	3/5残存
		底径	8.0				
		底器高	23.6				
11	坏	口径	11.6	丸底。底部から体部は丸みをもち、口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部中位ヘラナデ。体部中位-底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、褐色の岩片 内外-にぶい褐色	ほぼ完成
		底径	—				
		底器高	6.7				
12	坏	口径	(13.4)	平底。体部は丸みをもって開く。口縁部は直立する。口縁部内面は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	3/4残存
		底径	5.6				
		底器高	6.7				
13	坏	口径	(13.0)	丸底。体部は丸みをもち、口縁部の境に稜をもつ。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部中-中位ナデ。体部中位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色 の岩片、雲母 内外-褐色	1/3残存
		底径	—				
		底器高	6.6				
14	坏	口径	13.2	丸底。体部は弱い稜をもつ。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ヘラケズリ。体部一部ナデ。内面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部上位-底部ナデ。	白色・褐色・黒色 の岩片、雲母 内外-明赤褐色	5/6残存
		底径	—				
		底器高	4.7				
15	高坏	口径	20.8	脚部はやや膨らみをもち、一側部は水平に近く開く。体部には三角形の凸帯をもち、口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部ヨコナデ。脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-赤褐色	9/10残存
		底径	(15.4)				
		底器高	—				
16	高坏	口径	(21.0)	体部と口縁部中位に稜をもつ。口縁部は外反し上位は大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部下位器摩耗の為調整不明瞭。内面-口縁部-体部中位器摩耗の為調整不明瞭。	白色・褐色の岩片、角閃石、礫 内外-明赤褐色	坏部1/4残存
		底径	—				
		底器高	—				
17	高坏	口径	17.5	体部は稜をもち、口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部ヨコナデ。内面-口縁部-体部ヨコナデ。体部下位ヘラナデ。	白色の岩片 内外-赤褐色	口縁部-坏底部4/5残存
		底径	—				
		底器高	[5.2]				
18	高坏	口径	16.9	体部は稜をもち、口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部-体部中位ヨコナデ。体部中-下位ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-にぶい褐色	口縁部-坏底部9/10残存
		底径	—				
		底器高	[7.5]				
19	高坏	口径	17.1	体部は稜をもち、口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部中位ヨコナデ。体部中-下位ヘラナデ。内面-口縁部-体部中位放射状ヘラミガキ。体部中-下位中位不明瞭。	雲母、褐色の岩片、礫、白色の岩片 内外-明赤褐色	坏部残存
		底径	—				
		底器高	7.0				
20	高坏	口径	17.5	体部は稜をもち、口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部上-中位ナデ。体部中位-底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部上位-底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色 の岩片、雲母 内外-明赤褐色	口縁部-坏底部9/10残存
		底径	—				
		底器高	[5.9]				
21	高坏	口径	18.1	体部は稜をもち、口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部-体部上位ヨコナデ。体部上-中位ナデ。内面-口縁部-体部中位ヨコナデ。体部中-下位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外-明赤褐色	口縁部-坏底部残存
		底径	—				
		底器高	[5.0]				
22	高坏	口径	—	脚部はやや膨らみをもち、横部は大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-底部ヘラナデ。脚部上-中位ナデ。脚部中位-裾部ヨコナデ。内面-底部-脚部中位指ナデ。脚部中-下位ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	角閃石 内外-にぶい赤褐色	坏底部-脚部7/8残存
		底径	12.5				
		底器高	[10.2]				
23	高坏	口径	—	脚部は直線的、裾部は大きく開く。裾端部は面をもつ。	外面-底部下位-脚部中位ナデ。以下ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片 内外-明赤褐色	脚部1/2残存
		底径	(10.0)				
		底器高	[7.4]				

第105表 302号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
24	鉄製品 不明	長さ4.7、幅4.3、厚さ0.7、重さ36.8g	



第208図 303号住居跡出土遺物

第106表 303号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手の特徴	調整・装飾手の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 23.0 底径 一 器高 [21.3]	口縁部はくの字状に開く。胴部は上位に最大幅をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明褐色	口縁部へ胴部下位1/3残存
2	甕	口径 21.5 底径 一 器高 [22.0]	口縁部はくの字状に開く。胴部は上位に最大幅をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、霽 内外-褐色	口縁部へ胴部下位2/3残存
3	甕	口径 (25.0) 底径 一 器高 [23.7]	口縁部はくの字状に開く。胴部は大きく丸みをもち、上位に最大幅をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、霽、雲母 内外-明赤褐色	口縁部へ胴部下位1/5残存
4	坏	口径 15.6 底径 13.3 器高 2.8	平底。体部の立ち上がりは丸みをもち、口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色の岩片、角閃石、褐色の岩片、雲母、霽 内外-褐色	3/4残存
5	坏	口径 (13.7) 底径 一 器高 4.8	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部へ体部上位ヨコナデ。体部上へ下位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外-ふいじ色	7/8残存

第107表 303号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
6	坏	口径 13.3 底径 一 器高 3.7	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部上位ヨコナデ。以下ナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外一褐色	完形
7	坏	口径 13.6 底径 一 器高 [3.1]	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。中へ下位ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部中へ下位ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、礫 内外一にぶい赤褐色	4/5残存
8	坏	口径 13.6 底径 一 器高 3.2	丸底。口縁部は内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上へ中位ナデ。中へ下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	礫、角閃石 内外一にぶい褐色	1/2残存
9	坏	口径 13.1 底径 一 器高 3.4	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上へ中位ナデ。以下ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部中位ヨコナデ。以下ナデ。	白色の岩片、角閃石、礫 内外一褐色	口縁部へ 体部一部欠損
10	坏	口径 12.8 底径 一 器高 3.6	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上へ中位ヘラケズリ。中へ下位ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部中へ下位ナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石、礫 内外一にぶい赤褐色	3/4残存
11	坏	口径 (12.8) 底径 一 器高 [3.2]	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部ナデ、中へ下位ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部中へ下位ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外一にぶい褐色	2/5残存
12	坏	口径 12.3 底径 一 器高 [3.3]	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。以下ヘラケズリ。内面一口縁部へ体部中位ヨコナデ。以下ナデ。	角閃石 内外一にぶい褐色	1/3残存
13	高坏	口径 一 底径 12.4 器高 [8.7]	脚部はやや膨らみをもち、裾部は水平に近く開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一脚部ナデ。裾部ヨコナデ。内面一脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外一明赤褐色	脚部残存
14	須石器 坏	口径 13.2 底径 8.3 器高 3.8	平底。体部は立ち上がり丸みをもち、口縁部まで直線的に開く。ロクロ成形。	外面一ロクロナデ。体部下位ヘラケズリ。底部糸切り。内面一ロクロナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外一黄灰色	3/4残存
15	須石器 甕	口径 (19.6) 底径 一 器高 [8.6]	口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部ロクロナデ。胴部上位平行引き。内面一口縁部ロクロナデ。胴部上位同心円の当て具痕。	白色・黒色の岩片、礫 内外一灰色	口縁部へ 胴部上位 1/4残存

304号住居跡 (第209図、図版82)

調査地点の中央、北縁近くで検出した遺構である。305号住居跡、21・23号掘立柱建物跡、593号土坑に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は横長の長方形である。規模は、主軸方向で2.73m、副軸方向で3.10mである。主軸方位はN-90°-Eである。確認面が低かったこともあり、覆土がほとんど残存せず、確認面の直下で一部の床面が露出する状態であった。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。東西壁の一部を除いて壁溝が設けられている。

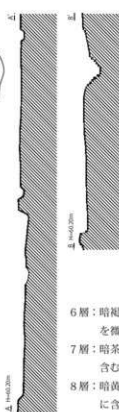
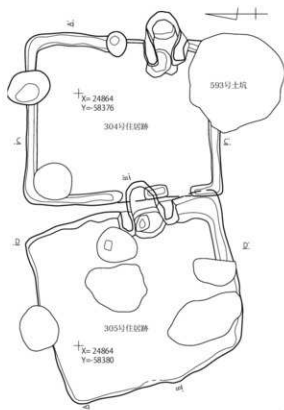
カマドは、東壁の南東隅に寄った位置に付設されている。燃焼部の平面形は、不整な楕円形で、奥壁、焚口側にビット状の浅い掘り込みが見られ、中央が高くなっている。燃焼部の全長は103cm、横幅は54cmである。袖は、低平で短く突き出ており、両袖間の間隔は、焚口側で狭くなる。袖の先端は、灰白色の粘土を固めて造られている。

土師器片を主に、遺物が覆土中より少量出土している。住居形態、出土遺物から見て、古墳時代の住居跡である可能性が考えられる。

305号住居跡 (第209図、図版82)

調査地点の中央、北縁近くで検出した遺構である。304号住居跡を切り、21・23号掘立柱建物跡に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

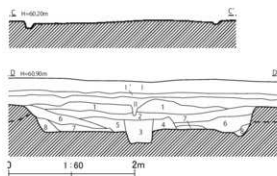
平面形は、横長の長方形である。規模は、主軸方向で2.86m、副軸方向で3.20mである。主軸方位



305号住居跡土層注記

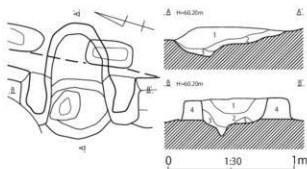
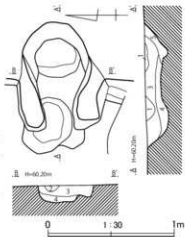
〔D-D'断面〕

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、白色粘土粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、白色粘土粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗灰褐色土層。ロームブロック、灰白色粘土ブロックを微量、灰白色粘土粒を均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、灰白色粘土粒を微量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。
- 7層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 8層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。



304号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗赤褐色土層。焼土ブロックを均一に含む。
- 2層：暗灰色土層。灰色粘土ブロックを均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。



305号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ロームブロック、焼土ブロックを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 4層：暗灰白色土層。灰白色粘土ブロックを多量に含む。

第209図 304・305号住居跡平面・断面図

はN-74° - Eである。床面はほぼ平坦で、明瞭に硬化している。南東隅周辺にのみ壁溝が設けられている。

カマドは、東壁中央、南東隅にやや寄った位置に付設されている。燃烧部の平面形は、不整な楕円形で、焚口側が丸く掘り込まれ、段を有し、奥壁に向かってゆるやかな斜面が形作られている。燃烧部の全長は93cm、中央での横幅は54cmである。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、方形に近く、短く突き出ており、灰白色の粘土ブロックを多量に含む土を固めて造られている。

覆土は、1・2・4～8層の7層で、焼土粒や炭化物粒、灰白色の粘土をかなり含むようである。3層は、覆土の堆積過程の途中に掘り込まれたピットの覆土である。

土師器片を主に、遺物が覆土中より少量出土している。住居形態、出土遺物などから見て、古墳時代の住居跡である可能性が考えられる。

306号住居跡 (第210～213図、図版82)

調査地点中央、南東縁沿いで検出した遺構である。308号住居跡、97号溝跡に壊されている。307号住居跡と重複するが、直接新旧関係を確定することができなかった。また、本遺跡G1地点の既報告の232号住居跡(松本 2013: 92～95頁)と重複するが、今回の調査範囲内では、232号住居跡の痕跡が失われており、直接新旧関係を確定することができなかった。出土遺物から見て、本住居跡の方が古い可能性がある。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長方形になるうか。いずれも残存値になるが、規模は、主軸方向で2.69m、副軸方向で2.02mである。主軸方位はS-57° - Wである。微妙な凹凸はあるが、床面はほぼ平坦であり、硬化している。南・西壁沿いに壁溝が設けられている。

カマドは、西壁の中央付近に設けられている。燃烧部の平面形は、奥壁側が丸くなる縦長の形態である。燃烧面は床面とほぼ同じ高さで、奥壁側に段を有し、煙道に連なる緩斜面が造られている。燃烧部の全長は84cm前後、中央での横幅は44cmである。被熱赤化の痕跡は、それほど顕著ではない。袖は、右袖には暗褐色土を用い、とくに左袖のみ灰黄色粘土を主とする土を突き固めて造られている。

土師器片を主に、遺物が覆土中より少量出土している。住居跡形態、出土遺物から見て、古墳時代後期の住居跡の可能性はある。

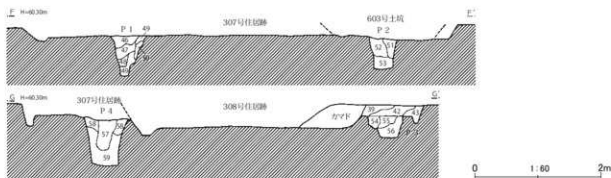
307号住居跡 (第210～213・215図、第108・109表、図版83・100)

調査地点中央、南東縁近くで検出した遺構である。308号住居跡、600号土坑に壊されている。306号住居跡と重複するが、直接新旧関係を確定することができなかった。また、新旧関係は不明であるが、97号溝跡と重複する。97号溝跡の場合、本住居跡に接続する溝跡の可能性も考えられないではないが、覆土の所見では、97号溝跡とは、時期が異なるようである。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、方形に近いが、北東壁に比し、南西壁がかなり短い。規模は、主軸方向で6.42m、副軸方向で6.72mであり、主軸方位はN-57° - Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。北東・南東・南西壁の一部と北西壁に壁溝が設けられている。P1～P4は主柱穴であろう。上端での平面形はかなり不整な円形、楕円形である。深さは、P1が62cm、P2が48cm、P3が



第210图 306~308号住居跡平面·断面图(1)



306～308号住居跡、660号土坑土層注記(1)

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、白色粒を少量、焼土粒を微量含む。1～13層は、308号住居跡覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、白色粒、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、10mm大の黄灰色シルト質ロームブロック、焼土粒微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。しまりなく、ボソボソしている。
- 8層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含み、黄灰色シルト質ローム小ブロック、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、白色粒、焼土小ブロックを微量含む。
- 11層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、白色粒、焼土粒を微量含む。
- 12層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量全体に均一に含む、白色粒を極微量含む。
- 13層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを全体に均一に含む、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 14層：暗褐色土層。ローム粒、5～40mm大のロームブロックを雲状に多量に含む。部分的にロームが暗褐色土より多い。14～16層は、308号住居跡床下土坑覆土。
- 15層：暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを不規則に含む。
- 16層：暗褐色土層。14層に近いが、ローム粒、ロームブロックがやや少ない。
- 17層：暗褐色土層。暗褐色土と10～30mm大のロームブロックの混合土。17～24層は、308号住居跡掘り方埋土。

- 18層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを含む。
- 19層：暗褐色土。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量含む。
- 20層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。
- 21層：暗褐色土。ローム粒、ローム小ブロック、20mm大の黄灰色シルト質ロームブロックを少量含む。
- 22層：暗褐色土層。10～50mm大のロームブロックを含み、焼土粒を少量含む。
- 23層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多量に含む。
- 24層：黄褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを主とする。
- 25層：暗褐色土層。ローム小ブロックを全体に均一に含む、焼土粒、焼土小ブロック、炭化物粒を微量含む。25～35層は、600号土坑覆土。
- 26層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 27層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。
- 28層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多量に全体に均一に含む、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 29層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 30層：暗褐色土層。25層に近いが、焼土粒などを含まない。
- 31層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、10～30mm大のロームブロックの混合土。
- 32層：暗褐色土層。28層に近いが、ロームが多い。
- 33層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に微量含む。
- 34層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。暗褐色土とロームは、ほぼ同量。
- 35層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に少量含む。
- 36層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロック、白色粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。36～45層は、307号住居跡覆土。
- 37層：暗褐色土層。暗褐色土と20～40mm大のロームブロックの混合土。黒褐色土粒、焼土粒を少量含む。しまりが強く、硬化している。

第211図 306～308号住居跡平面・断面図(2)

306～308号住居跡、660号土坑土層注記(2)

- 38層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量、5～20mm大のロームブロックを含む。
- 39層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを全体に均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 40層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを少量含み、黒褐色土粒、白色粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 41層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。色調やや明るい。
- 42層：暗褐色土層。ローム粒、5mm大以下のローム小ブロックを全体に均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 43層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを多量に、焼土粒を微量含む。
- 44層：暗褐色土層。ローム小ブロックを少量含む。
- 45層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを多量に含む。色調が明るい。
- 46層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。46～50層は、307号住居跡P1覆土。
- 47層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5～10mm大のロームブロックを含み、炭化物粒を微量含む。
- 48層：暗褐色土層。47層に近いが、炭化物粒を含まない。
- 49層：黄褐色土層。20mm大以上のロームブロックを主とし、暗褐色土を微量含む。
- 50層：暗褐色土層。暗褐色土と10～20mm大のロームブロックの混合土。
- 51層：暗褐色土層。ローム粒を多く含み、5～10mm大のローム

- ブロック斑点状に含む。51～53層は、307号住居跡P2覆土。
- 52層：暗褐色土層。ローム粒を多く含み、5～30mm大のロームブロックを斑点状に含む。
- 53層：暗褐色土層。52層に近いが、ロームが多い。
- 54層：暗褐色土層。5～30mm大のロームブロックを含み、焼土粒、炭化物粒を少量含む。54～56層は、307号住居跡P3覆土。
- 55層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを全体に均一に含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 56層：暗褐色土層。ローム粒を含み、10～30mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 57層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを全体に均一に含む。57～59層は、P4覆土。
- 58層：黄褐色土層。ロームブロック、ローム粒を多量に含む。
- 59層：にぶい黄褐色土層。ローム粒、30～60mm大のロームブロックを主に、暗褐色土を少量含む。
- 60層：暗褐色土層。ローム小ブロックを少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。307号住居跡のビット覆土。
- 61層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。61～64層は、306号住居跡覆土。
- 62層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、焼土粒を少量含む。
- 63層：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒を含まない。
- 64層：黄褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを主とする。

第212図 306～308号住居跡平面・断面図(3)

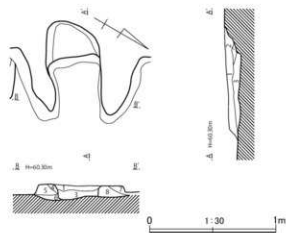
36cm、P4が76cmである。P4の土層断面には、柱根跡がみとめられる。南東隅脇の土坑は、貯蔵穴であろう。平面形は微妙に角張った楕円形で、長径64cm、短径46cmである。バケツ形に掘り込まれており、最深部での深さは42cmである。上・下層ともに焼土粒、炭化物粒を含み、とくに下部のロームブロックを多量に含む土は、埋め戻された土の可能性が有る。

カマドは、北東壁の南東隅にやや寄った位置に付設されている。燃焼部は、奥壁に向かって細長く伸びた形態で、全長は83cm、中央での横幅は37cmである。燃焼面には凹凸があり、側壁は直に近く、奥壁も比較的急峻に立ち上がる。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、半島状に細長く伸びており、にぶい黄褐色粘土を混ぜた土を突き固めて造られている。第215図1・2に図示した堦は、右袖に埋め込まれた袖堦である。

主に土師器片がかなりの量出土している。第215図3・4は、覆土中より出土した土師器である。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

308号住居跡(第210～212・216図、第110・111表、図版84・100)

調査地点中央、南東縁近くで検出した遺構である。306・307号住居跡を切り、600号土坑に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

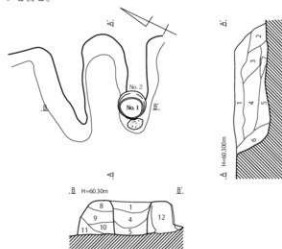


306号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム小ブロック、焼土粒、炭化物粒を微量、灰白色粘土粒を含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒を少量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量全体に均一に含み、黒褐色土(灰)、灰白色粘土粒、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。4～8層は、カマド袖構築材。
- 5層：灰黄色粘土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム小ブロック、黒褐色土を少量含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒を少量、灰黄色粘土粒を含む。
- 8層：暗褐色土層。黒褐色土を微量、灰黄色粘土粒、焼土小ブロックを含む。

307号住居跡カマド土層注記

- 1層：にぶい黄褐色土層。にぶい黄褐色粘土を主に、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、炭化物粒を微量含む。
- 3層：にぶい黄褐色土層。暗褐色土とにぶい黄褐色粘土の混合土。ローム小ブロックを含む。
- 4層：にぶい黄褐色土層。暗褐色土とにぶい黄褐色粘土の混合土。ローム粒、5～10mm大のロームブロック、5～30mm大の焼土ブロック、炭化物粒を少量含む。
- 5層：暗褐色土層。黒褐色土(灰)を多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 6層：暗褐色土層。暗褐色土とにぶい黄褐色粘土の混合土。ローム小ブロックを少量全体に均一に、焼土粒を微量含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5～20mm大のロームブロックを含み、黒褐色土、焼土粒を微量含む。
- 8層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～20mm大のロームブロックの混合土を主に、にぶい黄褐色の粘土をモヤモヤ含む。8～12層は、カマド袖構築材。
- 9層：暗褐色土層。8層に近いが、粘土が多い。粘土はモヤモヤ集塊する。ロームブロックは、5mm前後の小ブロック。
- 10層：にぶい黄褐色粘土層。にぶい黄褐色粘土を主に、暗褐色土、ロームを斑状に含む。焼土粒、焼土ブロックを不規則に少量含む。
- 11層：にぶい黄褐色粘土層。ローム粒を含む。
- 12層：暗褐色土層。10層に近いが、局部的に粘土が多い。かなり純粋な粘土の大ブロックを含む。



307号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロック、灰白色粘土粒、焼土粒、10mm大の炭化物を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを少量、焼土粒、10mm大の炭化物を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。暗褐色土と20mm大以上のロームブロックの混合土。ローム粒を多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む。

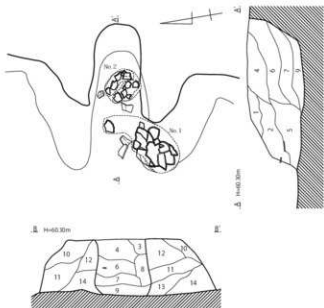


第213図 306・307号住居跡平面・断面図

平面形は、東壁が西壁に比べ長い、かなり丸みをもった縦長の台形のような形態である。規模は、主軸方向で5.86m、副軸方向で4.50mである。主軸方位はS-81°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。北・南壁の一部に壁溝が設けられている。壁溝に接続して、中

308号住居跡カマド土層注記

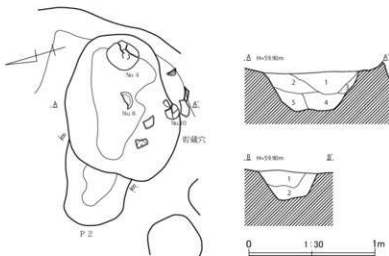
- 1層：暗褐色土層。灰色粘土粒を含み、白色粒、焼土粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。灰色粘土粒、5～10mm大の灰色粘土ブロックを含み、焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 3層：灰色粘土層。灰色粘土と10mm大のロームブロック、5～10mm大の焼土ブロックの混合土。
- 4層：灰色粘土層。暗褐色土を少量、5～10mm大の焼土ブロックを含み、白色粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。灰色粘土粒、灰色粘土小ブロック、焼土粒、焼土小ブロックを含む。
- 6層：暗褐色土層。暗褐色土と灰色粘土粒、5～20mm大の灰色粘土土ブロックの混合土。ローム粒、白色粒を微量、焼土粒を含む。
- 7層：暗褐色土層。5～10mm大のロームブロック、5～10mm大の灰色粘土土ブロックを少量、灰色粘土粒を多量に含み、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 8層：黒褐色土層。5～30mm大の灰色粘土土ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量、黒褐色土(灰)、焼土粒を含み、灰色粘土粒を微量含む。
- 10層：灰色粘土層。暗褐色土を多量に、白色粒を微量、焼土小ブロックを少量含む。10～14層は、カマド軸構築材。



- 11層：灰色粘土層。ローム小ブロック、焼土粒、5～20mm大の焼土ブロックを含む。
- 12層：灰色粘土層。暗褐色土粒を少量、焼土粒を含む。
- 13層：灰色粘土層。ローム小ブロック、焼土粒、焼土小ブロックを少量含む。
- 14層：暗褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に、焼土粒を微量含む。

308号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含み、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、灰色粘土粒を含み、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～20mm大のロームブロック、20mm大の黄灰色シルト質ロームブロックの混合土。
- 5層：暗褐色土層。20mm大以上のロームブロック、黄灰色シルト質ロームブロックを主とする。



308号住居跡P 2土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロック、焼土粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土と20～30mm大のロームブロックの混合土。ローム粒、黒褐色土を少量含む。

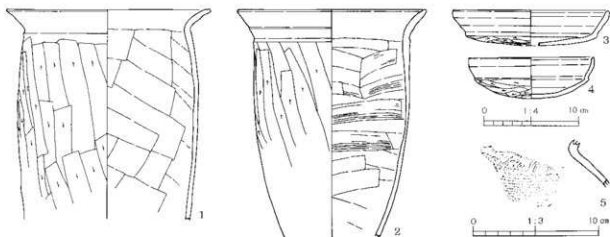
第214図 308号住居跡平面・断面図

中央、やや西壁寄りに床面を横切っていわゆる間仕切り溝と思われる小溝が掘られている。間仕切り溝は、幅20~36cm、深さ15cm前後である。P1・P2は、主柱穴の一種であろうか。P1の平面形は円形で、径40cm前後、深さは26cm、P2の平面形は楕円形らしく、最大径は47cm、深さはどちらも26cmである。南東隅に接する土坑は、貯蔵穴であろう。平面形はやや不整な楕円形で、長径112cm、短径86cmである。挿鉢のような形に掘り込まれており、最深部での深さは38cmである。ローム粒、ロームブロックや灰色粘土粒、灰黄色シルト質ロームなどをかなり含む暗褐色土的特徴的な覆土である。第216図4・8・10の甕や坏などが主に上部から出土している。

カマドは、丸みの強い東壁の中央、やや南東隅寄りに付設されている。燃焼部は、奥壁に向かって細長く伸びた形態で、全長は122cm前後、中央での横幅は48cmである。側壁は直に近く切り立ち、一部ハングし、奥壁も比較的急峻に立ち上がる。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、裾野の広い半島状の状態に残存しており、灰色粘土を主とする土を突き固めて造られている。第216図1に図示した甕は、右袖に埋め込まれた袖甕であろう。

カマドの前面には、床下土坑が掘り込まれている。平面形はやや歪な円形で、最大径129cmである。底面はほぼ平坦で、中央での深さは13cmである。

カマド、貯蔵穴内から出土した土師器以外に、覆土中から主に土師器片がかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、奈良時代の住居跡と考えられる。



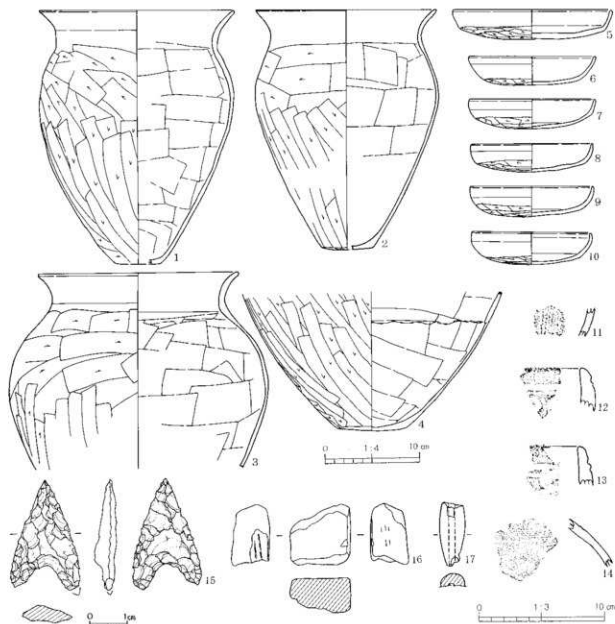
第215図 307号住居跡出土遺物

第108表 307号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 21.6 底径 — 器高 [22.3]	口縁部は大きく外反する。胴部はわずかに膨らみをもつ。粘土継積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	緑、角閃石 内外-にぶい橙色	口縁部へ 胴部下位 3/4残存
2	甕	口径 (20.0) 底径 — 器高 [24.2]	口縁部は外反する。中位に弱い段をもつ。胴部はわずかに膨らみをもつ。粘土継積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 外-明赤褐色 内-にぶい黄褐色	口縁部へ 胴部下位 1/4残存
3	坏	口径 16.4 底径 14.0 器高 [3.7]	丸底。体部に稜をもち、口縁部は外反し、弱い稜を2段もち、上位は直立する。粘土継積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母、緑 内外-にぶい褐色	3/5残存
4	坏	口径 13.1 底径 — 器高 4.4	丸底。体部に稜をもち、口縁部は外反し、上位で弱い稜をもって直立する。粘土継積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外-にぶい橙色	5/6残存

第109表 307号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
5	甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は弱曲し、肩部がやや張る。粘土組織み上げによる成形。	外面—ナナメのハケ後、ヨコの粗いハケ。内面—ヨコナデ、指押え。	白色・灰色・黒色の岩片などの大小砂粒 内外—ぶい橙色	S字状口 縁台付甕



第216図 308号住居跡出土遺物

第110表 308号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.4 底径 — 器高 [27.0]	口縁部は外反する。胴部は丸みをもち、上位に最大径をもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	角閃石、白色の岩片、礫 内外—橙色	8/9残存片
2	甕	口径 19.0 底径 5.4 器高 25.5	口縁部は外反する。胴部は丸みをもち、上位に最大径をもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—明赤褐色	3/4残存片

第111表 308号住居跡出土遺物観察表(2)

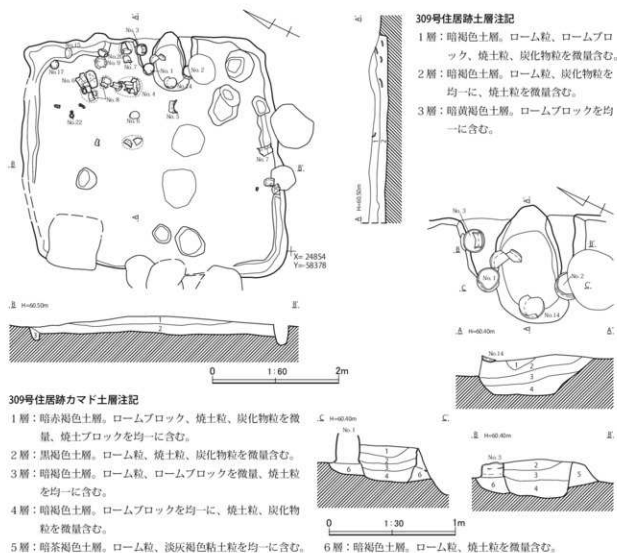
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	甕	口径 11.0 底径 一 器高 [20.7]	口縁部は外反する。胴部は大きく丸みをもち、上位に最大径をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片・礫、角閃石 内外一明赤褐色	口縁部～胴部下位1/2残存
4	甕	口径 一 底径 7.3 器高 [14.6]	平底。胴部は丸みをもって開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一胴部中位～底部ヘラケズリ。内面一胴部中位～底部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片・雲母 内外一にぶい褐色	胴部中位～底部残存
5	坏	口径 一 底径 (16.7) 器高 3.1	平底気味。浅く、口縁部は短く直立し口唇部が内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石・礫 内外一にぶい褐色	3/5残存
6	坏	口径 13.2 底径 一 器高 3.0	平底気味。体部は立ち上がり丸みをもち、口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上～中位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部中位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色・黒色の岩片・礫、角閃石 内外一褐色	3/5残存
7	坏	口径 (13.3) 底径 一 器高 3.1	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色の岩片、角閃石・礫 内外一褐色	3/5残存
8	坏	口径 12.7 底径 一 器高 3.0	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上～中位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部中位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片・雲母 内外一褐色	ほぼ完形
9	坏	口径 12.9 底径 10.8 器高 3.2	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部下位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色の岩片、角閃石・礫 内外一褐色	4/5残存
10	坏	口径 12.6 底径 10.3 器高 3.4	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上～中位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部下位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色・褐色の岩片・角閃石・雲母 内外一褐色	口縁部一部欠損
11	深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	やや丸みをもつ胴部下位ナデ。粘土組織み上げによる成形。	外面-Rの橋糸文。内面一ナナメのナデか。	白色・灰色の岩片など大小砂粒多量 内外一にぶい褐色	縄文時代早期?
12	深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	口縁部は彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一端部下端に太い沈線。直下に1本のやや細い沈線と弧状の沈線。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片・雲母など細砂 内外一明赤褐色	加曾利E式
13	深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	口縁部は彎曲しながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一端部直下に2本の太い沈線。直下に1本のやや細い沈線と弧状の沈線。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 内外一明赤褐色	加曾利E式
14	壺	口径 一 底径 一 器高 一	胴部は丸く膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面一ヨコ・ナナメのナデ、ミガキ。破片上部に刺歯状に近い縞波状文、同直線文。内面一ナナメのハケ、ナデ。	白色・灰色の岩片・雲母など細砂 内外一明赤褐色	バレス壺
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
15	石織	長さ [2.93]、幅1.83、厚さ0.60、重さ1.84g	黒色安山岩 凹基無彫形			片脚端部欠損
16	砥石	長さ4.8、幅4.8、厚さ2.7、重さ77.6g				完形
17	土鏝	長さ(5.0)、幅1.9、重さ10.5g	胎土：白色の岩片 色調：灰褐色。			1/2残存

309号住居跡 (第217～219図、第112～114表、図版85・101)

調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。23・24号掘立柱建物跡、594号土坑に横されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや歪で胴の張る隅丸方形である。規模は、主軸方向で3.68m、副軸方向で4.15mである。主軸方位はN-65°-Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に硬化している。北隅周辺から北西壁の一部、南隅から南東壁の一部に壁溝が設けられている。東隅脇の土坑は、貯蔵穴であろう。平面形はやや不整な楕円形で、長径56cm、短径46cmである。全体的にバケツ形で、底面に段をもって掘り込まれている。最深部での深さは31cmである。

カマドは、北東壁の中央に付設されている。燃焼部の平面形は、不整な楕円形で、全長は94cm、中央での横幅は51cmである。焚口から奥壁にかけて明瞭な掘り込みを有し、側壁は直に近く切り立っている。



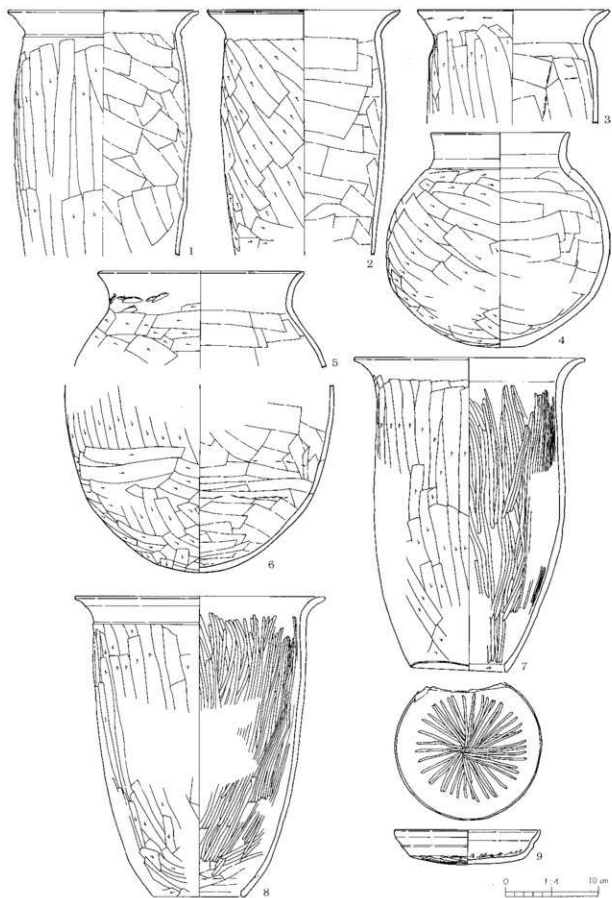
第217図 309号住居跡平面・断面図

る。右袖側の側壁が赤化し硬化している以外は、被熱赤化の痕跡はそれほど顕著ではない。袖は、短く半島状に突き出ており、淡灰褐色の粘土を混ぜた土を固めて造られている。カマド袖の本体とカマド掘り方の埋土に同じような土が用いられている。第218図1～3の甕は、袖甕である。14の坏は、カマド内の上部から出土している。

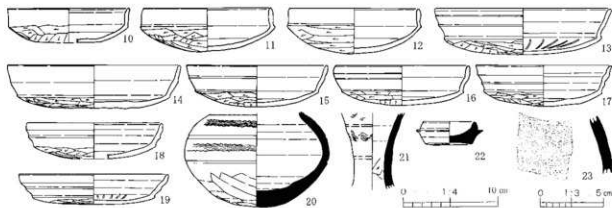
カマドから北隅にかけて、完形、あるいはそれに近い土師器がまとめて出土している(第218・219図4・6～9・15～17・20・22など)。出土遺物、覆土から見て、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

第112表 309号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 20.0 底径 — 器高 [26.0]	口縁部は外反する。胴部はわずかに膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色の岩片・礫、角閃石内外—明赤褐色	口縁部～胴部下位3/4残存
2	甕	口径 (20.2) 底径 — 器高 [26.1]	口縁部は外反する。胴部はわずかに膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母内外—灰褐色	口縁部～胴部下位1/3残存
3	甕	口径 20.0 底径 — 器高 [12.1]	口縁部は外反する。胴部は直線的である。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上～中位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上～中位ヘラナデ。	黄、角閃石、雲母内外—ふい赤褐色	口縁部～胴部中位4/5残存



第218图 309号住居跡出土遺物(1)



第219図 309号住居跡出土遺物(2)

第113表 309号住居跡出土遺物観察表(2)

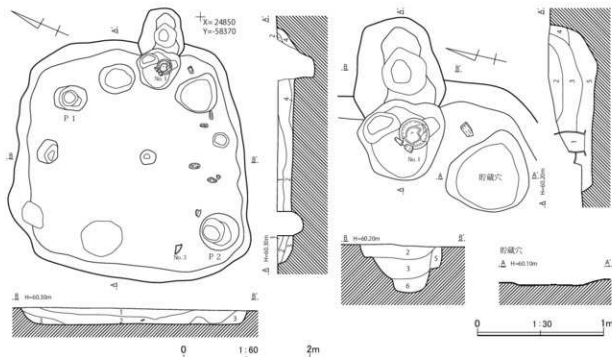
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
4	甕	口径 (14.5)	口縁部は直立し端部がやや外反する。丸底。胴部は球状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石・礫 内外-にぶい褐色	3/5残存
		底径 7.7				
5	甕	口径 (21.6)	口縁部は外反する。胴部は大きく丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石 内外-にぶい褐色	口縁部~胴部上位 1/3残存
		底径 ー				
6	甕	口径 ー	丸底。胴部は丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部中位~底部ヘラケズリ。内面-胴部中位~底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石 内外-明褐色	胴部中位~底部 1/3残存
		底径 ー				
7	甕	口径 (21.8)	口縁部は外反する。胴部は直線的。下位でやや丸みをもつ。底部は簡抜け。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ。下位ヘラナデ。端部ケズリ。	白色・黒色・褐色の岩片・雲母 内外-にぶい褐色	2/5残存
		底径 (10.2)				
8	甕	口径 (26.4)	口縁部は外反する。胴部は直線的。下位でやや丸みをもつ。底部は簡抜け。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ。下位ヘラナデ。	角閃石・礫、白色 内外-褐色	1/2残存
		底径 (9.8)				
9	罎	口径 15.3	丸底。体部に弱い稜をもつ。口縁部下位は外反し、上位はやや内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部上位~底部放射状ヘラミガキ。	白色・褐色の岩片・雲母 内外-にぶい赤褐色 内-赤色	9/10残存
		底径 ー				
10	罎	口径 ー	丸底。体部に弱い稜をもつ。口縁部は直立し、口唇部内側に凹線が巡る。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。赤彩あり。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。全面赤彩あり。	白色・黒色の岩片・礫 外-にぶい褐色 内-赤色	2/3残存
		底径 33.4				
11	罎	口径 13.5	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部中位~底部ナデ。	白色・褐色の岩片・雲母 内外-にぶい赤褐色	2/3残存
		底径 ー				
12	罎	口径 (13.6)	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部中位~底部ナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石 内外-にぶい褐色	1/3残存
		底径 4.7				
13	罎	口径 18.5	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は下位が外反し、上位は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部上位~底部放射状ヘラミガキ。	白色・黒色の岩片・角閃石・雲母 内外-明赤褐色	9/10残存
		底径 4.8				
14	罎	口径 18.2	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は中位に丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色・褐色の岩片・雲母・礫 内外-明赤褐色	3/4残存
		底径 4.6				
15	罎	口径 14.8	丸底。体部に稜をもつ。体部は外反し、口縁部はやや内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下位~底部ナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石 外-にぶい黄褐色 内-明赤褐色	2/3残存
		底径 ー				
16	罎	口径 14.1	丸底。体部に稜をもつ。口縁部下位は外反し、上位は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部中位ヨコナデ。体部下位~底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片・雲母 内外-にぶい赤褐色	3/4残存
		底径 4.2				

第114表 309号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
17	坏	口径 底径 器高 14.4 — 4.3	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反し、稜を2段もつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位～底部ナデ。	白色・黒色の岩片 内外—ぶい褐色	5/6残存
18	坏	口径 底径 器高 14.2 — [3.8]	丸底。体部に稜をもつ。口縁部下位は外反し、上位は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位ナデ。	白色・褐色の岩片、礫 外—ぶい褐色 内—黒色	1/3残存
19	坏	口径 底径 器高 (15.8) — 3.2	丸底。体部に稜をもつ。口縁部は外反し、稜を2段もつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部～底部放射状ヘラミガキ。	白色・黒色の岩片 内外—ぶい褐色	1/3残存
20	須恵器 壺	口径 底径 器高 — — [10.0]	胴部は球状を呈す。丸底。ロクロ成形。	外面—体部上～中位ロクロナデ、波状文。体部中位～底部ヘラナデ。内面—体部～底部ロクロナデ。	白色・黒色の岩片 内外—灰白色	1/3残存
21	須恵器 長頸壺	口径 底径 器高 — — [8.0]	頸部は開く。ロクロ成形。	外面—頸部ロクロナデ、上～中位波状文。内面—頸部上～中位ロクロナデ、中～下位ヘラケズリ。	白色・黒色の岩片 内外—灰色	頸部残存
22	須恵器 合子	口径 底径 器高 5.4 4.9 2.4	上げ底。体部は外反し、頸をもつ。口縁部は厚く直立する。ロクロ成形。	外面—口縁部～体部ロクロナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部～底部ロクロナデ。	黒色の岩片 内外—灰黄色	ほぼ完形
23	須恵器 甕	口径 底径 器高 — — —	胴部は丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形後、ロクロ整形。	外面—網描直線文。内面—指押し、ヨコナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外—灰色	

310号住居跡(第220・221図、第115表、図版85・101)

調査地点の中央、東寄りで見出した遺構である。24号掘立柱建物跡に切られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。



310号住居跡土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 4層: 黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

310号住居跡カマド土層注記

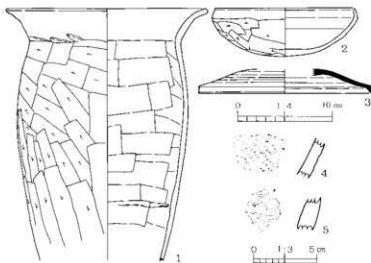
- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 2層: 黒褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒を微量含む。
- 4層: 暗黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 5層: 黒褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 6層: 暗茶褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

第220図 310号住居跡平面・断面図

平面形は、かなり丸みの強い隅丸方形と見てよいであろう。規模は、主軸方向で3.78m、副軸方向で3.68m、主軸方位はN-68°-Eである。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面はおおむね平坦であり、床面中央を中心に適度に硬化している。P1、P2としたピットは、主柱穴の可能性はあるが、他の2本分の柱穴は検出できなかった。P1、P2の上端での平面形は、円形に近く、深さは、P1が51cm、P2が57cmである。東隅近くの土坑は、貯蔵穴であろうか。平面形は、おにぎりのような形で、最大径が66cm、深さは5、6cmである。

カマドは、北東壁の中央、若干東隅に寄った位置に設けられている。全体の平面形は、やや不整形楕円形である。どこまでが本来の燃焼部か判りにくいが、細長い掘り込み全体を燃焼部とするなら、全長は130cm、燃焼部の横幅は73cmである。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。第221図1に図示した甕は、袖袋であったものであろうか。カマド内から出土している。

土師器片を主とする遺物がかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期の住居跡と考えられる。



第221図 310号住居跡出土遺物

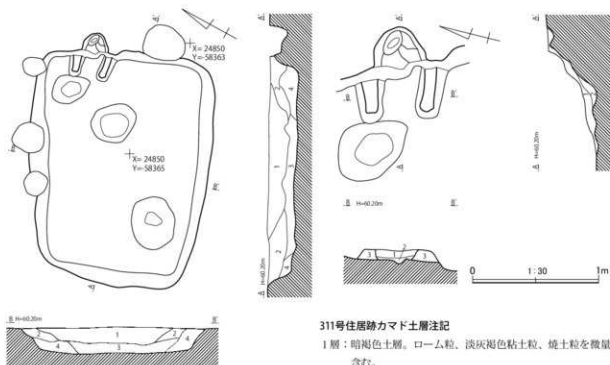
第115表 310号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 底径 器高 [26.8]	口径部は外反する。胴部はやや丸みをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、雲母 内外-にぶい褐色	口縁部～ 胴部下位 9/10残存
2	坏	口径 底径 器高 [14.8] 5.0	丸底。口縁部は内傾する。粘土紐積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	白色の岩片、角四石、雲母 内外-にぶい赤褐色	1/2残存
3	須恵器 蓋	口径 底径 器高 [(18.2) — [2.5]	口縁部は垂直に折れる。口クロ成形。	外面-口クロナデ。自然軸付着。内面-口クロナデ。	白色・黒色の岩片 内外-灰白色	口縁部～ 天井位 1/3残存
4	深鉢	口径 底径 器高 — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面-RLの単筋縄文(より複雑な捻りの可能性もある)。全体に磨耗顕著。内面-ナデ。	白色・灰色の岩片、雲母など大小砂粒、小礫。植物繊維混入。 内外-にぶい橙	縄文時代 前期前半
5	深鉢	口径 底径 器高 — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面-不定方向の擦痕。内面-磨耗により不明。	白色・灰色の岩片、雲母など大小砂粒。植物繊維混入。 内外-にぶい橙	縄文時代 前期前半

311号住居跡 (第222・223図、第116表、図版85・102)

調査地点東縁近くのほぼ中央で検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、東壁に比し西壁がやや短い隅丸長方形と見られる。規模は、主軸方向で3.73m、副軸方向で2.88m、主軸方位はN-68°-Eである。壁の立ち上がりは比較的急峻で、床面はおおむね平坦である。床面中央を中心に硬化している。床面で3個のピットを検出しているが、位置的に見て、主



311号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、淡灰褐色粘土粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 3層：淡灰褐色粘土層。淡灰褐色粘土ブロックを均一に、ロームブロック、焼土ブロックを微量含む。カマド袖構築材。

311号住居跡土層注記

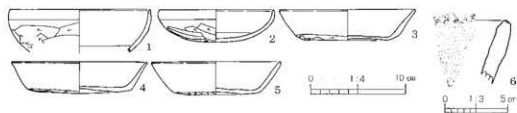
- 1層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物を微量含む。
- 4層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

第222図 311号住居跡平面・断面図

柱穴ではないであろう。

カマドは、東壁の北西隅に著しく偏した位置に設けられている。燃焼部は、床面と同じ高さで、住居壁とカマド奥壁が一連の壁をなすように見えるが、芯を残してかなり袖を削ってしまった結果の可能性もある。現存する壁の上部に浅い掘り込みが見られるが、あるいは煙道に関連する部分になるのかもしれない。燃焼部の被熱赤化の痕跡は、側壁の一部を除いて、顕著ではない。淡灰褐色の粘土ブロックを混ぜた土を固めて造作された袖は、残存状態が良くないためか、低平で短い。

土師器片を主とする遺物がかなりの量出土している。出土遺物、住居形態から見て、平安時代の住居跡と考えられる。



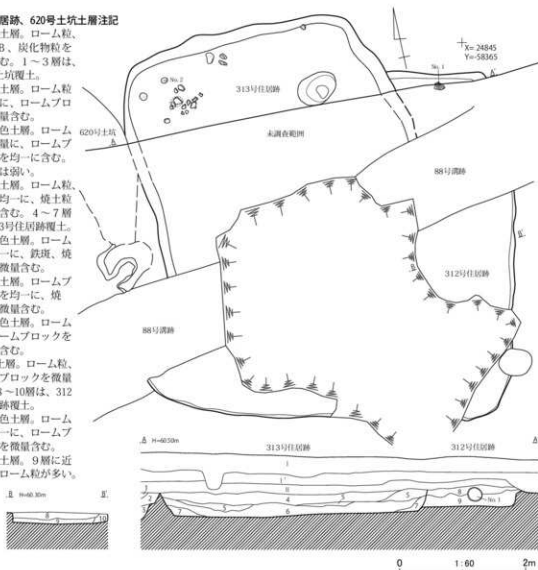
第223図 311号住居跡出土遺物

第116表 311号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (15.0) 底径 ー 器高 [4.5]	体部から口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中～下位ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、体部下位ナデ。	白色・褐色の岩片・角閃石、雲母内外にふい赤褐色	口縁部～体部1/2残存
2	坏	口径 (12.1) 底径 ー 器高 3.4	丸底。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ナデ。	角閃石、褐色の岩片 内外一褐色	1/2残存
3	坏	口径 (14.3) 底径 8.4 器高 3.2	平底。口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	角閃石、白色の岩片 内外一明赤褐色	1/2残存
4	坏	口径 (14.3) 底径 (11.1) 器高 3.3	平底。口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片・角閃石、雲母 内外一明赤褐色	2/5残存
5	坏	口径 (13.6) 底径 (9.0) 器高 3.4	平底。口縁部は直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～体部中位ヨコナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片・角閃石 内外一にふい赤褐色	1/3残存
6	深鉢	口径 ー 底径 ー 器高 ー	口縁部はやや丸みをもって立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一端部に丸棒状工具による押除。ナナメの糸痕あるいは擦痕。内面ナデ。かすかに横方向の擦痕。	白色・灰色の岩片・角閃石片など 大小砂粒、小礫。 植物繊維混入。 内外一にふい褐色	縄文時代 早期?

312・313号住居跡、620号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、As-B、炭化物粒を微量含む。1～3層は、620号土坑覆土。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、鉄斑を均一に、焼土粒を微量含む。4～7層は、313号住居跡覆土。
- 5層：暗灰褐色土層。ローム粒を均一に、鉄斑、焼土粒を微量含む。
- 6層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に、焼土粒を微量含む。
- 7層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 8層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。8～10層は、312号住居跡覆土。
- 9層：暗黄褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。
- 10層：暗褐色土層。9層に近いが、ローム粒が多い。



第224図 312・313号住居跡平面・断面図

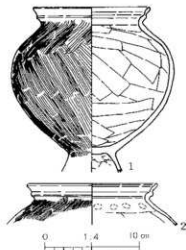
312号住居跡 (第224・225図、第117表、図版86・102)

調査地点南東半の東縁寄りで検出した遺構である。313号住居跡、88号溝跡(北堀新田遺跡A2地点3号溝跡)、および攪乱により遺構の大半を壊されている。314号住居跡と直接重複するの否かについて確認できなかったが、位置的に見て、314号住居跡のカマドが本住居跡を切って造られていることは明らかである。また、調査可能範囲の制約から、遺構の北側、帯状に未調査部分を残す結果となった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅丸方形になるうか。残存状態から見て、床面の北半に炉跡があった可能性が高いであろう。したがって、南北方向に主軸があるものとして、以下記載する。

規模は、主軸方向での現存値で5.56m、副軸方向での推定値で6.04mである。主軸方位はN-12°-Eあたりと思われる。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかで、床面はおおむね平坦である。残存するのが壁際のみであることもあり、床面の硬化はあまり顕著ではない。

第225図1のS字甕は、北東隅近くの覆土中層から出土している。他に土師器片を主とする遺物が少量出土している。大半の遺物が覆土上へ中層出土である。出土遺物、覆土から見て、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

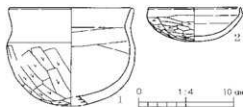


第225図 312号住居跡出土遺物

313号住居跡 (第224・226図、第118表、図版86・102)

調査地点南東半の東縁寄りで検出した遺構である。312号住居跡を切っており、620号土坑、88号溝跡に壊されている。312号住居跡と同様に、遺構の中央、帯状に未調査部分を残してしまった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

東壁に本来カマドがあったと仮定し、記載する。平面



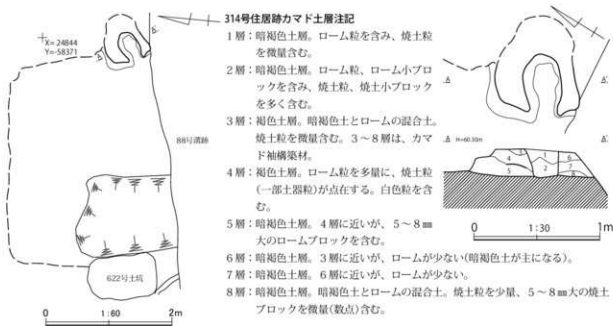
第226図 313号住居跡出土遺物

第117表 312号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口径 12.3 底径 — 器高 (17.4)	口縁部はS字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。頸部～台部ハケメ。内面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部台部ヘラナデ。	褐色・黒色・白色の岩片、雲母、礫 内外—にぶい黄褐色	口縁部へ台部上位残存
2	台付甕	口径 (13.7) 底径 — 器高 [4.4]	口縁部はS字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部上位ハケメ。内面—口縁部ヨコナデ。頸部～胴部上位ナデ指頭痕あり。胴部上位ヘラナデ。	黒色・白色・褐色の岩片 内外—にぶい黄褐色	口縁部へ胴部上位2/5残存

第118表 313号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径 (13.0) 底径 — 器高 10.3	口縁部は外反する。胴部は球状を呈す。丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部～胴部ヘラナデ単位不明瞭。	白色・黒色の岩片、角閃石 外—灰黄褐色 内—黒褐色	1/2残存
2	坏	口径 9.8 底径 — 器高 3.5	丸底。口縁部は内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上位ヨコナデ。体部上位～底部ナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母、礫 内外—明赤褐色	9/10残存



第227図 314号住居跡平面・断面図

形は、かなり不整ではあるが、隅丸方形に近い形態になろうか。規模は、主軸方向で4.21m、副軸方向での現存長は2.80mである。主軸方位は、 $N-90^{\circ}$ - E前後と推定される。床面はおおむね平坦で、中央を中心に硬化している。床面でピットを1個検出しており、位置的には、支柱穴として無理はない。ピットの上端での平面形は、楕円形で、深さは49cmである。

土師器片、編物石などが北西隅の周辺の覆土上へ中層からまともに出て出土している。他に土師器片が少量出土している。出土遺物、覆土から見て、古墳時代終末期～奈良時代の住居跡と考えられる。

314号住居跡 (第227図、図版86)

調査地点南東半のほぼ中央で検出した遺構である。622・620号土坑と重複し、88号溝跡に壊されている。312号住居跡を切っていると見てよいであろう。遺構の輪郭が捉え切れぬまま、カマドの部分を残し、覆土をあらかじめ下げた時点でようやく確認することができた。確認面は、暗褐色土中であるが、大半は黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや不整な隅丸方形と見てよいであろう。規模は、主軸方向での推定値で3.22m、副軸方向での現存長は2.57mである。主軸方位は $N-83^{\circ}$ - Eである。床面はほぼ平坦で、床面中央を中心に顕著に硬化している。

カマドは、東壁に設けられている。推定される主軸方向に対しかなり斜行している。燃焼部の平面形は楕円形で、長径50cm、短径30cmである。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、暗褐色土とロームの混合土を固めて造られている。

カマド内や覆土から、土師器片を主とする遺物が少量出土している。住居形態、出土遺物から見て、古墳時代の住居跡と考えられる。

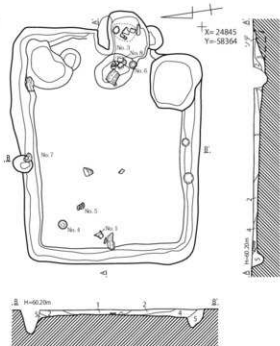
315号住居跡 (第228・229図、第119表、図版86・87・102)

調査地点南東半、東縁近くで検出した遺構である。313号住居跡を切っており、614号土坑により壊

されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

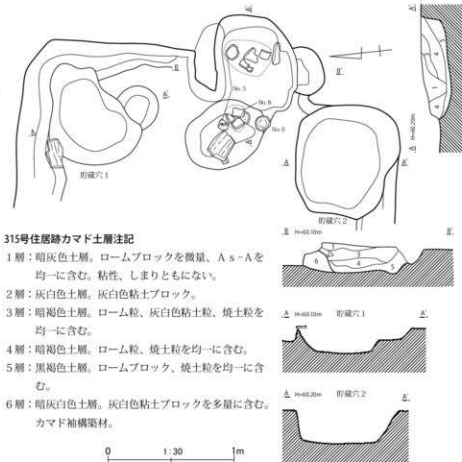
平面形は、長方形、あるいは隅丸長形である。規模は、主軸方向で3.72m、副軸方向で2.94m、主軸方位はS-83°-Eである。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は微妙な凹凸があるもののおおむね平坦であり、中央を中心に硬化している。

貯蔵穴、カマドのある部分を除いて、壁溝が巡らされている。北東隅、南東隅に接する土坑は、貯蔵穴である。北東隅の方を貯蔵穴1、南東隅の方を貯蔵穴2とする。貯蔵穴1の平面形は、曲折に富んだ不整形で、最大長は89cmである。カマド側に浅い掘り込みを有し、本体はバケツ形に掘り込まれている。深さは19cmである。北西壁と上縁の間から片岩の板石が出土している。貯蔵穴2の平面形は、隅丸長方形に近く、最大長は98cmである。やはりバケツ形、たらい形で、深さは26cmである。



315号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を均一に含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ロームブロック、灰白色粘土粒、焼土ブロックを微量含む。
- 4層：黒褐色土層。ロームブロック、炭化物粒を均一に、焼土粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、ロームブロックを均一に含む。

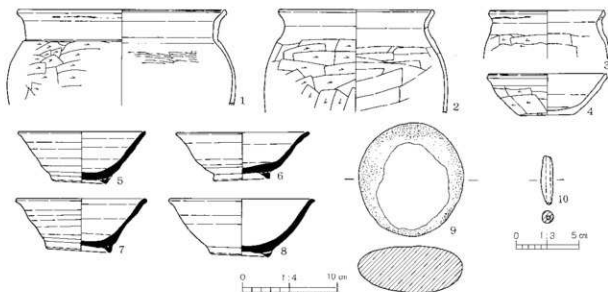


315号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗灰色土層。ロームブロックを微量、A-Aを均一に含む。粘性、しまりともにない。
- 2層：灰白色土層。灰白色粘土ブロック。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、灰白色粘土粒、焼土粒を均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を均一に含む。
- 5層：黒褐色土層。ロームブロック、焼土粒を均一に含む。
- 6層：暗灰白色土層。灰白色粘土ブロックを多量に含む。カマド袖構築材。

第228図 315号住居跡平面・断面図

カマドは、東壁の南に寄った位置に設けられている。燃焼部は、隅丸方形に近く、全長73cm、横幅65cmである。焚口から奥壁にかけ浅く掘り込まれており、燃焼面はほぼ平坦である。燃焼部の被熱赤化は、顕著ではない。袖は、左袖のみ残存しており、灰白色粘土を固めて造られている。奥壁寄りの覆土中から土師器片、編物石などが出土している。焚口の前面に浅い掘り込みが見られ、第229図3の甕や6・8の坏、片岩の大きな板石が上層から出土している。



第229図 315号住居跡出土遺物

第119表 315号住居跡出土遺物観察表

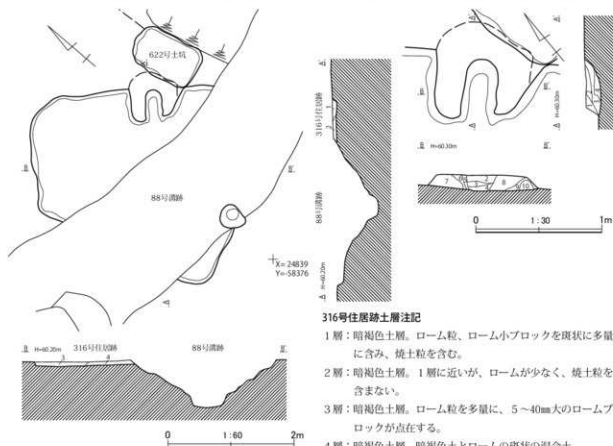
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整・装飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (22.0) — 底径 器高 [10.1]	口縁部はコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、雲母 内外にぶい赤褐色	口縁部へ胴部中位 1/6残存
2	甕	口径 (16.0) — 底径 器高 [10.8]	口縁部は外反し、口唇部が内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部へ胴部上位ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラケズリ。内面一口縁部へ胴部上位ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラナデ。	白色の岩片、雲母、角閃石 外一灰褐色 内一にぶい赤褐色	口縁部へ胴部中位 1/5残存
3	小形甕	口径 (12.0) — 底径 器高 [5.1]	口縁部はややゆれたコの字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部へ胴部上位ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラケズリ。内面一口縁部へ胴部上位ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 内外にぶい赤褐色	口縁部へ胴部上位 1/2残存
4	坏	口径 12.4 底径 6.0 器高 4.4	平底。体部は直線的に開く。口縁部は僅かに外反する。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。内面一口縁部へ体部上位ヨコナデ。体部中位へ底部ナデ。	白色・黒色・褐色の岩片、雲母 内外一明赤褐色	完形
5	須恵器碗	口径 13.4 底径 5.5 器高 5.5	高台部は三角形を呈す。体部に直線的に開く。口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部。底部回転糸切り。内面一口縁部。高台貼付時回転ナデ。	白色・褐色の岩片、雲母 外一黒褐色 内一にぶい黄褐色	3/4残存 内外一灰色
6	須恵器碗	口径 14.0 底径 5.9 器高 5.1	高台部は三角形を呈す。体部にやや丸みをもつ。口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部。底部回転糸切り。内面一口縁部。高台貼付時回転ナデ。	白色の岩片 内外一灰色	1/2残存 内外一灰色
7	須恵器碗	口径 13.6 底径 6.6 器高 5.7	高台部は三角形を呈す。体部に直線的に開く。口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部。底部右回転糸切り。後回転ナデ。内面一口縁部。高台貼付時回転ナデ。	白色・黒色の岩片、雲母 内外一灰色	7/8残存 内外一灰色
8	須恵器碗	口径 15.1 底径 5.9 器高 6.1	高台部は三角形を呈す。体部にやや丸みをもつ。口縁部は外反する。ロクロ成形。	外面一口縁部。底部器面の摩耗著しく底部周辺の調整不明。内面一口縁部。	白色の岩片、雲母、礫 内外一灰黄色	4/5残存 内外一灰黄色
No.	器種	法量(cm)・特徴		備考		
9	磨石	長さ12.1、厚さ5.0、重さ878.5g	角閃石安山岩	完形		
10	土師	長さ3.85、幅0.95、重さ3.1g	胎土：白色・黒色の岩片、礫 色調：にぶい黄褐色	完形		

図化していないが、全長7.5cmほどの角ばった形の粘土塊が出土している。熱変化した土器化しており、表面全体に藁か何かの植物の圧痕が見られる。他に土師器片を主とする遺物がかなりの量出土している。出土遺物、覆土から見て、平安時代の住居跡と考えられる。

316号住居跡 (第230図、図版87)

調査地点南東半、南西縁近くで検出した遺構である。上部を大きく削平されており、床面とわずかな覆土が残る状態であった。また、622号土坑、88号溝に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、かなり歪な横長の隅丸長方形になりそうである。あるいは、88号溝跡を挟んで検出した



316号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを斑状に多量に含み、焼土粒を含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが少なく、焼土粒を含まない。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5~40mm大のロームブロックが点在する。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。

316号住居跡カマド土層注記

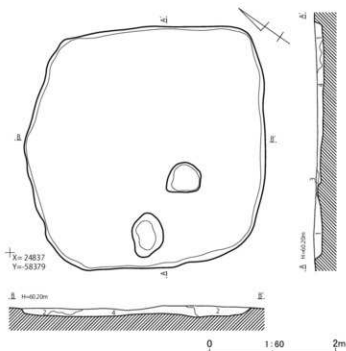
- 1層：暗褐色土層。ローム粒を多く焼土粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土とにふい黄褐色シルトの混合土。ローム粒を含み、焼土粒、焼土小ブロックが点在する。
- 3層：暗褐色土層。暗褐色土とにふい黄褐色シルトの混合土。ローム粒を多量に、焼土粒を含む。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とにふい黄褐色シルトの混合土。ローム粒を含み、焼土粒、焼土小ブロックを多く含む。
- 5層：暗褐色土層。暗褐色土とにふい黄褐色シルトの混合土。5~10層は、カマド構築材。
- 6層：暗褐色土層。暗褐色土とにふい黄褐色シルトの混合土。ローム小ブロック、細かな焼土粒、5~8mm大の焼土ブロックが点在する。
- 7層：暗褐色土層。にふい黄褐色粘土粒を不規則に含み、ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒を含む。
- 8層：暗褐色土層。7層に近いが、5~20mm大の焼土ブロックを含み、ローム小ブロックを多く含む。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒を含む。しまっている。
- 10層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5~40mm大のロームブロックの混合土。しまっている。カマドの芯。

第230図 316号住居跡平面・断面図

南隅周辺は、痕跡的に覆土が残るのみで、本来の形態を留めていないのかもしれない。規模は、主軸方向で3.16m、副軸方向での現存長は2.95mである。主軸方位はN-44°-Eである。床面はおおむね平坦であり、明瞭とまでは言えないが、硬化している。

カマドは、北東壁に付設されている。燃焼部は、奥壁が丸く、細長い形態で、長さは50cm、横幅は26cmである。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。袖は、ロームやにぶい黄褐色粘土を混ぜ込んだ暗褐色土を固めて造られている。

土師器片を主とする遺物が少数出土している。遺構の平面形や出土遺物から見て、古墳時代の住居跡であろうか。



317号住居跡掘り方埋土土層注記

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～60、70mm大のロームブロックが斑状に混合する。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が少ない。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 4層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を微量含む。

第231図 317号住居跡平面・断面図

317号住居跡（第231図、図版87）

調査地点南東半、南西縁沿いで検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

掘り方のみ残存する住居跡である。平面形は、やや歪な隅丸方形で、規模は、北東-南西方向で3.86m、北西-南東方向で3.86m、北東-南西方向での軸方位はN-44°-Eである。掘り方埋土は、ロームを含む暗褐色土、ロームを主とする黄褐色土からなる。掘り方下面には、不規則な凹凸が見られる。

土師器片を主とする遺物が少数出土している。遺構の平面形、出土遺物から見て、古墳時代の住居跡の可能性が考えられる。

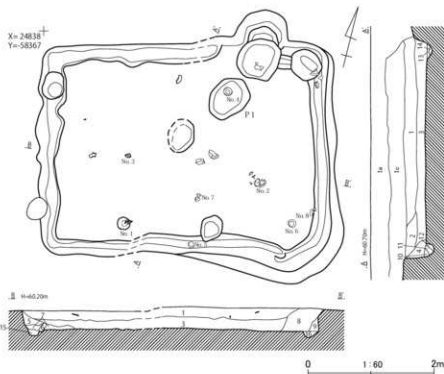
318号住居跡（第232～234図、第120表、図版87・88・102）

調査地点南東半、東縁近くで検出した遺構である。調査可能範囲の制約から、遺構中央に若干未調査部分を残す結果となった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

南東隅周辺の溝壁が崩落などにより広がっているらしく、上端での平面形は、東壁が西壁に比しかなり長い横長の隅丸長方形である。規模は、主軸方向で3.42m、副軸方向で4.80m、主軸方位はN-2°-Wである。壁の立ち上がりは比較的急峻で、床面は微妙な凹凸はあるが、おおむね平坦である。床面は、明瞭に硬化している。カマドまわりを除いて、壁溝が巡らされている。床面で3個のピットを確認しているが、支柱穴と思われるピットは見られない。P1としたピットの覆土上層から第233図4の須恵器の坏が出土している。

318号住居跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。I c層に比べ、やや黒みが強く、しまっている。焼土粒を少量含み、土器粒が点在する。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム小ブロックが多い。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックが多い。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、さらにローム粒、ローム小ブロックが多い。
- 5層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが雲状(40～50mm大)に遺集する。
- 6層：黄褐色土層。暗褐色土、ローム粒、ローム小ブロックの斑状の大ブロック。焼土粒を少量含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを斑状に含む。
- 8層：暗褐色土層。3層土を主に、5～20mm大のロームブロックを局所的に含む。
- 9層：暗褐色土層。8層に近いが、30mm大のロームブロックを含む。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。4層より黒みが強い。10～16層は、壁溝覆土。
- 11層：黄褐色土層。暗褐色土とロームの混合土(ロームが多い)。

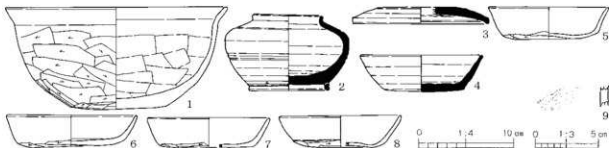


- 12層：暗褐色土層。10層に近いが、暗褐色土が多い。4層より黒みが強い。
- 13層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。3層より黒みが強い。
- 14層：黄褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。
- 15層：黄褐色土層。暗褐色土とローム粒、5～20mm大のロームブロックの斑状の混合土。
- 16層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。

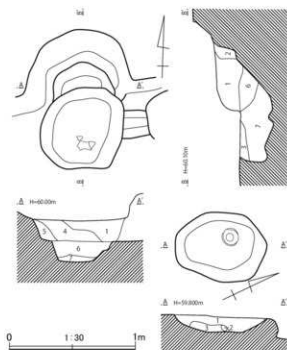
第232図 318号住居跡平面・断面図(1)

カマドは、北壁の南に寄った位置に付設されている。燃焼部は、かなり不整な楕円形に掘り込まれており、底面には凹凸が顕著である。奥壁には階段状の段を有し、煙道へとつながるようである。燃焼部の掘り込みの長さ、65cmである。被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。

遺物の多くは、覆土中出土である。出土遺物、覆土から見て、平安時代の住居跡と考えられる。



第233図 318号住居跡出土遺物



318号住居跡カマド土層注記

- 1層：暗褐色土層。くすんだやや明るい色調の暗褐色土を主に、ローム粒、5～30mm大のロームブロックを多量に、焼土粒、焼土小ブロックをかなり含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が少ない。ローム小ブロックをほとんど含まない。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。2層に比し、ロームが少ない。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、さらにロームが多い。
- 6層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が少ない。
- 7層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが多い。上位の層に比し、焼土が少ない。

318号住居跡P1土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒を多量に、ローム小ブロックを含む。焼土粒を微量含む。
- 2層：明赤褐色土層。焼土、あるいは鉄分の大ブロック。
- 3層：黄褐色土層。ロームを主に、隙間に暗褐色土混じる。

第234図 318号住居跡平面・断面図(2)

第120表 318号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整・装飾手法的特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径(23.4) — 底径 器高 [11.7]	平底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部—胴部上位ヨコナデ。胴部上位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部—胴部上位ヨコナデ。胴部上位～底部ヘラナデ。	白色の岩片、雲母 内外—褐色	1/3残存
2	須恵器 短頸壺	口径(7.4) (8.3) 底径 器高 8.0	口縁部は短く直立する。胴部は狭る。高台部は細い長方形を呈す。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。胴部下位回転ヘラケズリ。高台部回転ナデ。底部右回転ヘラケズリ後回転ナデ。内面—ロクロナデ。高台部貼付時回転ナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外—灰色	3/5残存
3	須恵器 蓋	口径— 底径(14.4) 器高 1.7	天井部は平皿。口縁部は直角に折れる。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。内面—ロクロナデ。	黒色の岩片 内外—灰色	1/5残存
4	須恵器 坏	口径12.8 底径8.5 器高 3.8	平底。体部にやや丸みをもつ。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転ヘラケズリ後ナデ。内面—ロクロナデ。	白色・黒色の岩片 内外—灰色	ほぼ完形
5	坏	口径12.6 底径10.0 器高 3.4	平底。体部から口縁部はほぼ直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部—中位ヨコナデ。以下ヘラケズリ。内面—口縁部—体部中位ヨコナデ。以下ナデ。	白色・褐色の岩片 内外—褐色	口縁部一部欠損
6	坏	口径13.7 底径11.4 器高 3.4	平底。体部から口縁部はほぼ直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部—体部下位ヨコナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部—体部ヨコナデ。底部ナデ。	白色・褐色の岩片 内外—明赤褐色	7/8残存
7	坏	口径12.9 底径9.9 器高 [3.1]	平底。体部から口縁部はほぼ直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部—体部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部—体部ヨコナデ。底部ナデ。	褐色・黒色の岩片 内外—明赤褐色	1/2残存
8	坏	口径(12.8) 底径6.9 器高 3.4	平底。体部から口縁部はほぼ直線的に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部—体部下位ヨコナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部—体部下位ヨコナデ。底部ナデ。	白色・黒色の岩片 内外—明赤褐色	1/2残存
9	甕	口径— 底径— 器高—	胴部は微妙にくびれながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—5、6条—単位の節揃波状文。内面—ヨコナデ。	白色・灰色の岩片、雲母、角閃石などの大小砂粒 外—暗褐色土 内—灰い褐色	構式

2 掘立柱建物跡

G3地点では、18～24号掘立柱建物跡と呼称した7棟の掘立柱建物跡を検出した。いずれも調査地点北半から北東半にかけての限定された範囲に分布している。調査範囲が限られるため、全体像をつかむことはできないが、この一角が、比較的規模の大きな掘立柱建物跡を含む掘立柱建物跡の集中部であることが判る。また、掘立柱建物跡は、重複する例が多いことから、その多くは、ある時期にこの空間が選定され、一定期間に、集中して造られたと見てよいであろう。

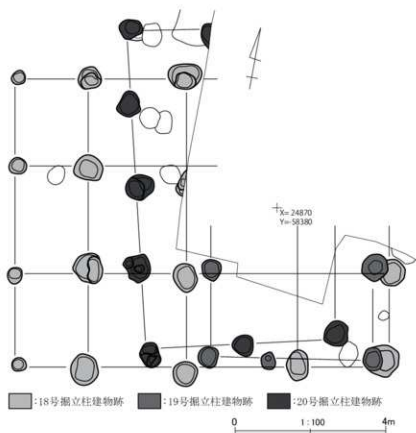
18号掘立柱建物跡（第235～237図、図版88）

調査地点の北東縁沿いの中央で検出した遺構である。19・20号掘立柱建物跡と重複しており、19号掘立柱建物跡に先行する建物跡と見られる。北東側の一角は、調査範囲外である。確認面は、標準土層Ⅲ層とした黄褐色の軟質ローム層上面である。

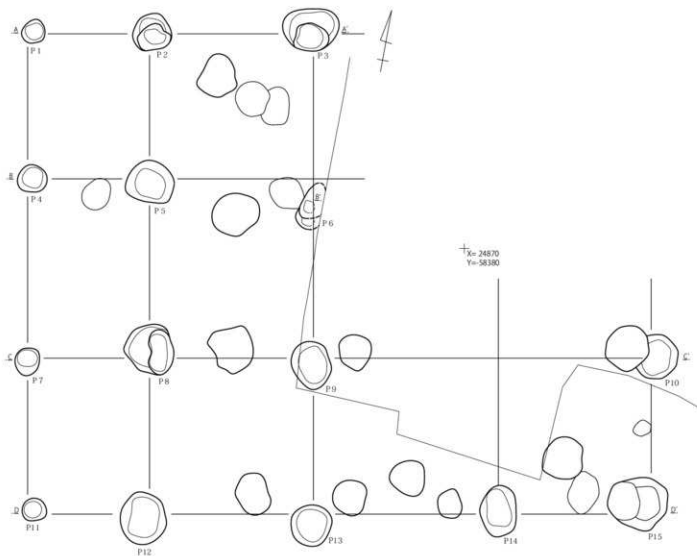
3間×3間の総柱の建物跡と思われ、西側に1間の庇が付されている。柱心間での規模は、南北方向で7.71～7.83m、東西方向で7.96～8.05m、東側の庇の横幅は1.80～1.95mである。南北方向での主軸方位は、 $N-10^{\circ}-W$ である。柱間の長さは、南北方向で2.55～2.86m、東西方向で1.96～2.20mである。

柱穴の平面形は、総じて不整な円形、楕円形である。鍋底形、バケツ形に掘り込まれているものが多い。深さは、P2・P3が49、41cm、P5・P6が31、23cm、P8～P10が32～38cm、P12～P15が22～37cm、底部分であるP1・P4・P7・P11が13～27cmである。覆土は、黒褐色土やロームの混じる暗褐色土が主で、水平堆積に近い堆積状態を示すものがほとんどであるが、P2・P12・P11の覆土は、柱根跡が崩れた堆積状態とも見えなくもない。いずれにせよ、深さから見て、柱穴の下部のみ残存しているのであろう。

土師器小片を主に遺物が少量出土している。覆土の性状、新しい時代の遺物が見られないことなどから、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

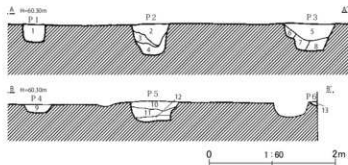


第235図 18～20号掘立柱建物跡位置図



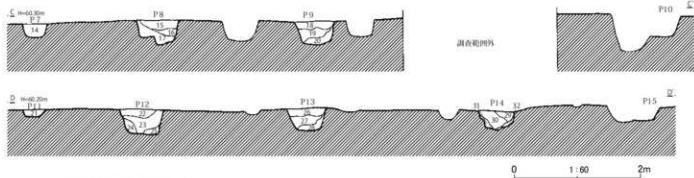
18号独立柱建物跡土層注記(1)

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、10～20mm大のロームブロックを少量、黒褐色土粒、焼土粒を微量含む。P1覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量均一に含む。2～4層は、P2覆土。
- 3層：暗褐色土層。黒褐色土粒を少量含み、ローム粒、5～30mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。5～10mm大の黒褐色土ブロックを少量含み、ローム粒、5～30mm大のロームブロックを全体に均一に含む。5～8層は、P3覆土。
- 6層：暗褐色土層。黒褐色土粒を微量、ローム粒を多量に、5～10mm大のロームブロックを含む。



- 7層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロック、20～30mm大の黄灰色シルト質ロームブロックを多量に含む。
- 8層：暗褐色土層。5層に近いが、黒褐色土ブロックが少なく、黄灰色(にぶい黄褐色)シルト質ローム粒を微量含む。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、白色粒、焼土粒を微量に含む。P4覆土。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒を少量全体に均一に含む。10～12層は、P5覆土。

第236図 18号独立柱建物跡平面・断面図(1)



18号掘立柱建物跡土層注記(2)

- 11層: 暗褐色土層。ローム粒、10~40mm大のロームブロックを少量、炭土粒を微量含む。
- 12層: 暗褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを含み、黄灰色シルト質ローム粒を少量含む。
- 13層: 暗褐色土層。ローム粒、10~20mm大のロームブロックを含む。P 6 覆土。
- 14層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に、5~20mm大のロームブロックを含む。黒褐色土粒を少量、白色粒を微量含む。P 7 覆土。
- 15層: 暗褐色土層。黒褐色土粒を少量、ローム粒、10mm大のロームブロックを含む。15~17層は、P 8 覆土。
- 16層: 暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒を含み、10~30mm大のロームブロックを少量含む。
- 17層: 暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、5~10mm大のロームブロックを斑状に含む。
- 18層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック全体に均一に含む。18~20層は、P 9 覆土。
- 19層: 暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロックを全体に均一に含む。
- 20層: 暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5~30mm大のロームブロックの混合土。黒褐色土粒を少量含む。
- 21層: 暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロック、黒褐色土少量含む。しまりなくボソボソしている。P 11 覆土。

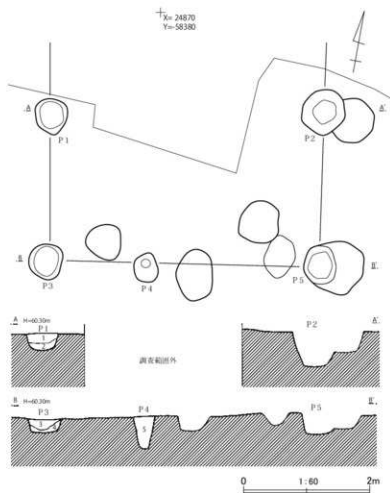
- 22層: 暗褐色土層。ローム粒を含み、5~10mm大のロームブロックが点在する。22~25層は、P 12 覆土。
- 23層: 暗褐色土層。ローム粒を多く含む(東壁よりに、とくにローム多い)、5~30mm大のロームブロックを含む。
- 24層: 暗褐色土層。ローム粒を全体にモヤモヤ含む。
- 25層: 褐色土層。暗褐色土とローム粒、5~10mm大のロームブロックの混合土。
- 26層: 暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを含む。26~28層は、P 13 覆土。
- 27層: 暗褐色土層。黒褐色土粒を少量含む、ローム粒、ローム小ブロックを全体に均一に含む。
- 28層: 暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、5~20mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 29層: 暗褐色土層。黒褐色土を若干含む、ローム粒、ローム小ブロックを含む。29~32層は、P 14 覆土。
- 30層: 暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを全体に均一に含む。
- 31層: 暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを多量に含む。
- 32層: 暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、5~20mm大のロームブロックの混合土。

第237図 18号掘立柱建物跡平面・断面図(2)

19号掘立柱建物跡 (第235・238図、図版88)

調査地点の北東縁沿いの中央で検出した遺構である。18・20号掘立柱建物跡と重複し、18号掘立柱建物跡を切って造られている。北側の大半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

1間×2間の極一部の柱穴のみ残る掘立柱建物跡である。柱穴は、いずれも掘り込みがしっかりしているため、残存する部分はわずかではあるが、掘立柱建物跡の可能性があると見た。また、P 4 に関しては、明瞭な掘り込みを有し、深さも十分であることから加えたが、重複する18号掘立柱建物跡のP 14(前掲)などがより相応しい柱穴になるのかもしれない。柱心間での規模は、南北方向の現存長で2.32~2.45m、東西方向で4.36~4.38mである。主軸方位は、南北でN-10°-Wである。柱間の長さは、東西方向で1.60、2.75mである。



19号掘立柱建物跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、白色粒、焼土粒を微量含む。1・2層は、P1覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。全体に含有物少なく、きめ細かい。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、10～30mm大のロームブロックを少量含む。3・4層は、P3覆土。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を含み、ローム小ブロックを少量含む。
- 5層：黒褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを全体に均一に含む。P4覆土。

第238図 19号掘立柱建物跡平面・断面図

北方向で8.64m、東西方向で5.06m、主軸方位は、N-13°-Wである。柱間の長さは、北方向で2.06～2.21m、東西方向で2.10～2.50mである。

柱穴の平面形は、おおむねやや不整な円形、楕円形であるが、P5・P6のようにかなり不整なものも目に付くようである。深さは、P1が45cm、P2が36cm、P3が25cm、P4が35cm、P5が42cm、P6～P8が23～32cmである。覆土は、黒褐色土やロームの混じる暗褐色土である。P4～P8の覆土は、柱根跡が崩れた堆積状態とも見える。

土師器小片を主とする遺物が少量出土している。覆土の性状、新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

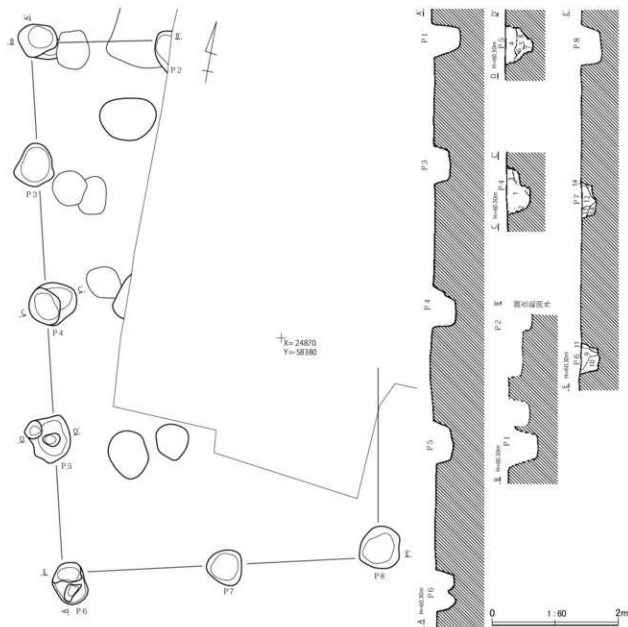
柱穴の平面形は、不整な円形、楕円形である。おおむね鍋底形、バケツ形に掘り込まれており、深さはP1が25cm、P2が52cm、P3が20cm、P4が51cm、P5が33cmである。覆土は、ロームの混じる暗褐色土、黒褐色土が主で、水平堆積に近い堆積状態を示すものがほとんどであり、柱根痕を確認することができなかった。

少数の土師器小片が出土している。覆土の性状、新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

20号掘立柱建物跡 (第235・239図、図版88・89)

調査地点の北東縁沿いの中央で検出した遺構である。18・19号掘立柱建物跡と重複する。584号土坑と重複するが、新旧関係は判然としない。北東側の一角は、調査範囲外である。確認面は、大半の柱穴では、黄褐色の軟質ローム層上面であった。

南北に長い4間×2間の側柱建物跡である。柱間での規模は、南



20号掘立柱建物跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。暗い色調の暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを少量全体に均一に含む。ボソボソしており、しまりが無い。1～3層は、P 4 覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、10～30mm大のロームブロックを含む。
- 3層：暗褐色土層。黒褐色土粒を少量、ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。4～8層は、P 5 覆土。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。色調がやや暗い。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒を含む。

- 7層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。
- 8層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームが若干多い。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを全体に均一に含む。9～11層は、P 6 覆土。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを含む。
- 11層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒の混合土。
- 12層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。12～14層は、P 7 覆土。
- 13層：暗褐色土層。ローム粒、20mm大のロームブロックを含む。
- 14層：黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主とする。

第239図 20号掘立柱建物跡平面・断面図

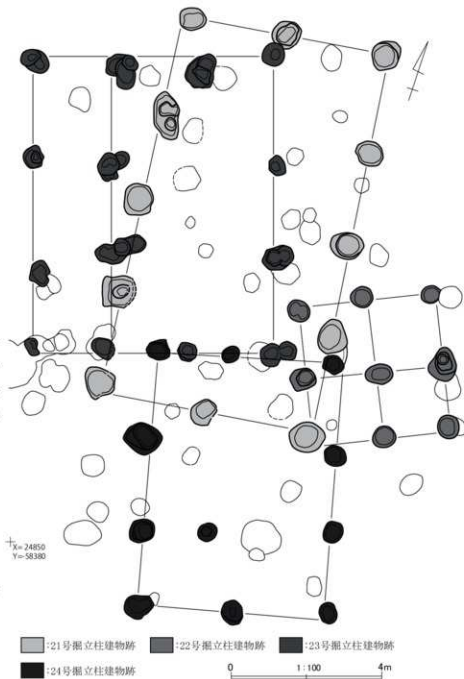
21号掘立柱建物跡（第240～242図、図版88・89）

調査地点のほぼ中央、北東寄りで検出した遺構である。304・305・309号住居跡を切って造られている。30号井戸跡、593・594・602号土坑と重複するが、602号土坑が本遺構を切っている以外、新旧関係は直接確定し得ていない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

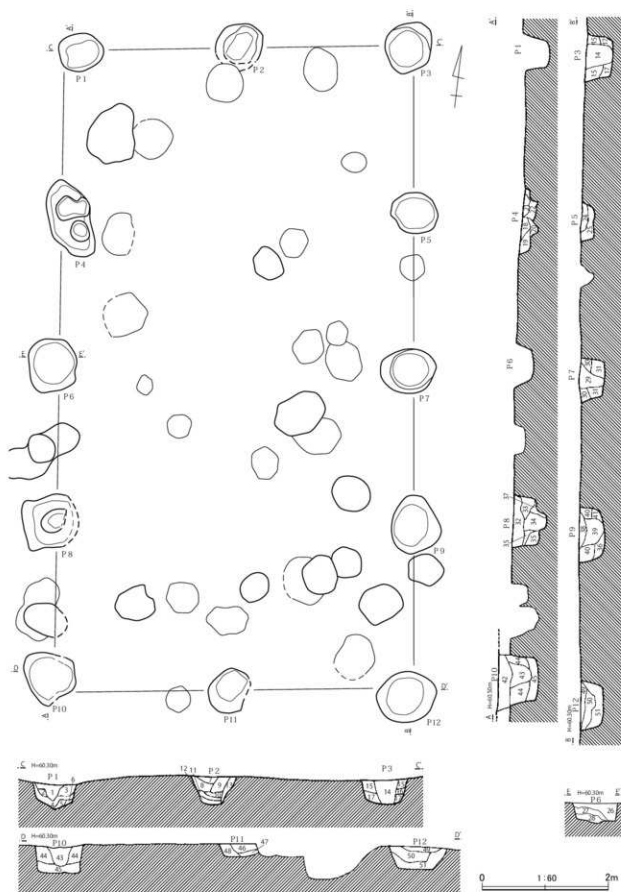
南北に長い4間×2間の掘立柱建物跡である。柱心間での規模は、南北方向で10.05～10.26m、東西方向で5.21～5.77mである。主軸方位は、N-12°-Wである。柱間の長さは、南北方向で1.90～2.26m、東西方向で1.96～2.20mである。

柱穴の平面形は、不整形な円形、楕円形がほとんどであるが、P4のようにかなり不整形なもの、P8のように上端での平面形が方形に近いものなど、変則的なピットが含まれる。本来の柱穴の下部が残存したと思われ、断面形は、逆U字形に近いものが多い。深さは、P1～P3が42～46cm、P4・P5が26、20cm、P6・P7が29、36cm、P8・P9が52、41cm、P10～P12が63、21、35cmである。覆土は、ロームの混じる暗褐色土、黒褐色土などが主で、P1・P3・P7～P10の土層断面には、柱根跡と思われる痕跡がみとめられる。

土師器小片が出土している。覆土の性状、新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世あるいはそれ以前の遺構と考えられる。



第240図 21～24号掘立柱建物跡位置図



第241图 21号掘立柱建物跡平面・断面図(1)

21号掘立柱建物跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。1～6層は、P1覆土。
- 2層：暗褐色土層。黒褐色土粒を微量、ローム粒、5～20mm大のロームブロックを多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、10～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 5層：暗褐色土層。黄灰色シルト質ロームブロックを多量に含む。
- 6層：暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に含む。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、白色粘土ブロックを微量含む。7～13層は、P2覆土。
- 8層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともにない。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、白色粘土ブロックを微量含む。
- 10層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 11層：黒褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 12層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。粘性、しまりともにない。
- 13層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 14層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。14～17層は、P3覆土。
- 15層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 16層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 17層：黒褐色土層。11層と同じ。
- 18層：暗褐色土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。18～22層は、P4覆土。
- 19層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。
- 20層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを微量含む。
- 21層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量含む。
- 22層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含む。
- 23層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、ロームブロックの混合土。
- 24層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。24・25層は、P5覆土。
- 25層：黒褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒を微量含む。

- 26層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。含有物は全体に均一に含まれる。26～28層は、P6覆土。
- 27層：暗褐色土層。黒褐色土粒を微量、ローム粒、30～50mm大のロームブロックを少量含む。
- 28層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 29層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。29～31層は、P7覆土。
- 30層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 31層：暗褐色土層。16層と同じ。
- 32層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。32～37層は、P8覆土。
- 33層：暗褐色土層。黒褐色土粒を微量、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 34層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを全体にまばらに含み、10mm大の焼土ブロックを微量含む。
- 35層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、黄灰色粘土粒を少量含む。
- 36層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 37層：暗褐色土層。ローム粒、10～30mm大のロームブロックを多量に、焼土粒を微量含む。
- 38層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。38～41層は、P9覆土。
- 39層：黒褐色土層。ロームブロックを微量含む。
- 40層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。
- 41層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 42層：黒褐色土層。24層と同じ。42～45層は、P10覆土。
- 43層：黒褐色土層。25層と同じ。
- 44層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック微量含む。
- 45層：暗黄褐色土層。41層と同じ。
- 46層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。46～48層は、P11覆土。
- 47層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 48層：暗茶褐色土層。ローム粒を微量、ロームブロックを均一に含む。
- 49層：黒褐色土層。29層と同じ。49～51層は、P12覆土。
- 50層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、焼土粒を微量含む。
- 51層：暗褐色土層。44層と同じ。

第242図 21号掘立柱建物跡平面・断面図(2)

22号掘立柱建物跡 (第240・243図、図版89)

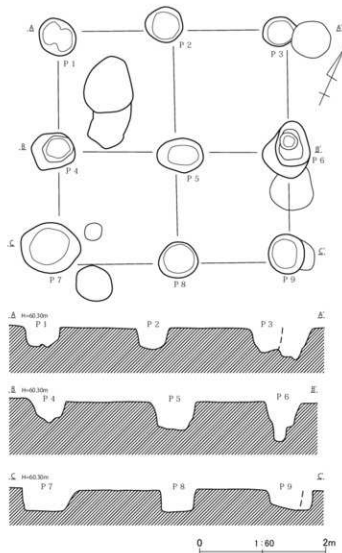
調査地点のほぼ中央、北東縁寄りで検出した遺構である。21・24号掘立柱建物跡住居跡と重複しており、21号掘立柱建物跡とは、同じ柱穴を「共有」する形になっている(本遺構のP7と21号掘立柱建物跡の「P12」)。P7は、本遺構の柱穴としてはやや大き過ぎるかに見え、21号掘立柱建物跡の

柱穴の多くと近い大きさであることからすれば、本遺構は、21号掘立柱建物跡に先行する遺構と見てよいと思われる。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

全体が正方形に近い形の2間×2間の総柱の建物跡である。柱心間での規模は、南北方向で3.37～3.70m、東西方向で3.68～3.75m、南北方向での主軸方位は、N-25°-Wである。柱間の長さは、南北方向での北半で1.73～2.10m、南半で1.55～1.79m、東西方向では、1.7～2.0mである。

柱穴の平面形は、不整な円形、楕円形であるが、P1のように底面が2つに分かれるもの、P6のように下部が先細りとなるものが含まれる。深さは、P1～P3が32～36cm、P4～P6が33、44、62cm、P7～P9が31～35cmである。

土師器小片が少数出土している。覆土の性状、新しい時代の遺物が見られないことなどから、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。



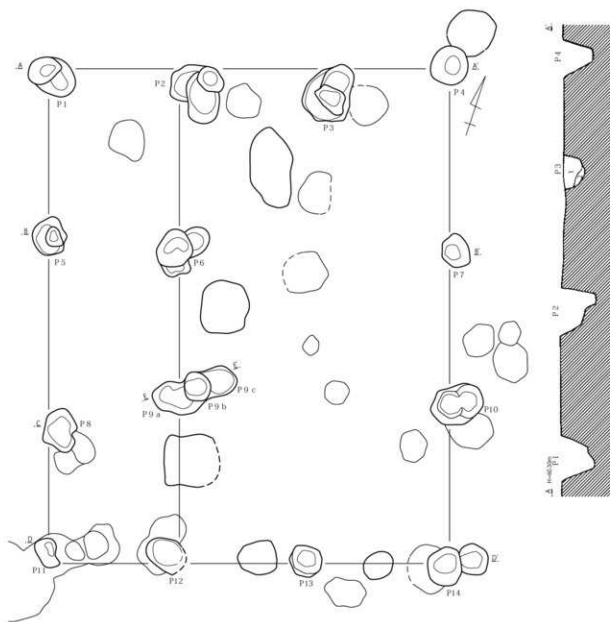
第243図 22号掘立柱建物跡平面・断面図

23号掘立柱建物跡 (第240・244・245図、図版88・89)

調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。304・305・309号住居跡を切って造られている。21号掘立柱建物跡、593・594・598・599号土坑と重複するが、新旧関係を土層断面などでとらえることはできなかった。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

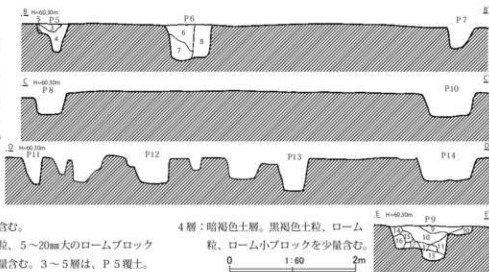
南北に長い2間×3間の側柱建物跡で、西側に1間の庇が付されている。柱心間での規模は、南北方向で7.47～7.87m、東西方向で4.32～4.50m、東側の庇の横幅は1.91～2.20mである。南北方向での主軸方位は、N-19°-Wである。柱間の長さは、南北方向で2.45～2.97m、東西方向で2.00～2.40mである。柱間の長さかなりばらつきが目立つとともに、柱の並びにも揃いな箇所が目につく。

柱穴の平面形は、不整な円形、楕円形と見てよいであろう。P1・P3・P6・P8～P12・P14の各柱穴は、明らかに2、3個、あるいはそれ以上の柱穴が重なり合っており、いずれにせよ柱の付



23号掘立柱建物跡土層注記
(1)

- 1層：暗褐色土層。黒褐色土粒を少量、ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含む。1・2層は、P3覆土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、10～30mm大のロームブロックを少量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを少量、白色粒を微量含む。3～5層は、P5覆土。



第244図 23号掘立柱建物跡平面・断面図(1)

- 5層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、ローム全体に均一に含み、焼土粒を微量含む。6・7層は、P 6 b 覆土。
- 7層：暗褐色土層。ローム粒、10~20mm大のロームブロックを少量まばらに含む。
- 8層：暗褐色土層。黒褐色土粒を微量、ローム粒、10~30mm大のロームブロックを含む。8層は、P 6 a 覆土。
- 9層：暗褐色土層。ローム粒、白色粒を微量含む。9・10層は、P 9 c 覆土。
- 10層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。
- 11層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含む。11~13層は、P 9 b 覆土。
- 12層：暗褐色土層。ローム粒、10~20mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 13層：暗褐色土層。ローム粒、10、40mm大のロームブロックを含む。
- 14層：暗褐色土層。ローム粒、10~20mm大のロームブロックを含む。14~17層は、P 9 a 覆土。
- 15層：暗褐色土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロックを含む。
- 16層：暗褐色土層。ローム粒、10~20mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 17層：暗褐色土層。ローム粒、10~30mm大のロームブロックを多量に含む。

第245図 23号掘立柱建物跡平面・断面図(2)

け替えや建て直しが行なわれた痕跡をとどめる。このことは、断面でも明瞭に見て取れ、上記した柱穴には、どれにも複数の底面が残されている。一応並びのよい柱穴の最深部での深さを記すなら、P 2が56cm、P 3が34cm、P 4が47cm、P 6・P 7が57、34cm、P 9・P 10が55、38cm、P 12~P 14が35~54cm、底部分であるP 1・P 5・P 8・P 11が35~55cmである。覆土を観察することができたのは、P 3・P 5・P 6・P 9の4つであるが、柱根跡の見られるものはなかった。

土師器小片が少数出土している。覆土、および新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世、あるいはそれ以前の遺構であろうか。

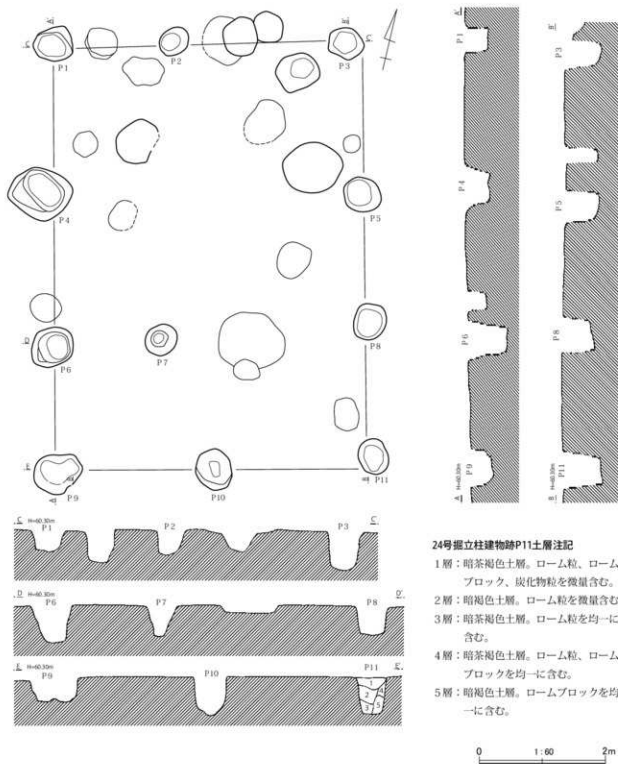
24号掘立柱建物跡 (第240・246図、図版89)

調査地点の中央、やや東寄りで見出した遺構である。309・310号住居跡を切って造られている。21~23号掘立柱建物跡、30号井戸跡、602・608号土坑と重複するが、直接新旧関係を確かめることはできなかった。確認面は、総じて黄褐色の軟質ローム層上面であるが、一部はローム層より上位の層中である。

南北に長い3間×2間の側柱建物跡である。柱心間での規模は、南北方向で6.62~6.72m、東西方向で4.68~5.17m、主軸方位は、N-14°-Wである。柱間の長さは、南北方向で2.00~2.42m、東西方向で1.92~2.79mとばらつきが目立つ。北辺のP 2は、西側に偏しており、無理があるのかもしれない。また、P 7を補助的な柱の穴と考えたが、P 6、P 8と直線的に並ぶということ以外の根拠を見出すことはむづかしい。

柱穴の平面形は、不整な円形、楕円形としてよいが、P 4のようにやや角ばった形のものも含まれる。深さは、P 1~P 3が33、38、62cm、P 4・P 5が41、53cm、P 6~P 8が58、49、44cm、P 9~P 11が37、62、59cmである。覆土を観察できたのは、P 11のみであるが、ロームの混じる暗茶褐色土、あるいは暗褐色土が主であり、1~3層は、柱根跡のやや崩れた堆積状態を示しているようにも見える。

土師器小片が少数出土している。覆土、および新しい時期の遺物が見られないことなどから、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。



第246図 24号掘立柱建物跡平面・断面図

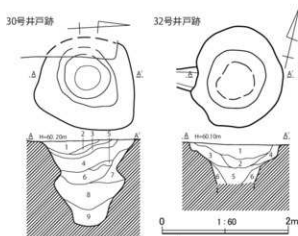
3 井戸跡

30号井戸跡 (第247図、図版90)

調査地点のほぼ中央、東寄りで見出した遺構である。21・24号掘立柱建物跡と重なるが、切り合い

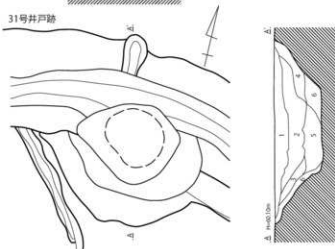
30号井戸跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量、A s-Aを均一に含む。
- 2層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に、ローム粒、A s-Aを均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、A s-Aを均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を微量、A s-Aを均一に含む。
- 5層：暗黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。
- 6層：暗茶褐色土層。ローム粒、A s-Aを均一に含む。
- 7層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。
- 8層：暗灰色土層。ローム粒を微量含む。
- 9層：黒灰色土層。砂、小礫を均一に含む。粘性、しまりともない。



31号井戸跡土層注記土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含み、焼土粒(あるいは土器粒)を少量含む。全体にA s-Aを含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、全体に黒みがやや増し、粘性、しまりが増す。A s-Aは上部にのみ混入する。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが若干多く、10~15mm大のロームブロックを微量含む。2層よりさらに粘性、しまりが増す。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、さらにロームが多い。ローム粒、5~10mm大のロームブロックが所々雲状にまとまる。
- 5層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが多く、小礫を含む。4層よりはローム少ない。粘性が急激に増す。
- 6層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。



32号井戸跡土層注記

- 1層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含む。一面所30mm大のローム粒の遺集部あり。焼土粒、A s-Aを散漫に微量含む。
- 2層：暗黄褐色土層。1層に近いが、ややロームが少なく、しまり増す。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム小ブロックが多い。

- 4層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5~30mm大のロームブロックを含む。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、5~8mm大のロームブロックが多く、粘性が増す。
- 6層：暗褐色土層。4層に近いが、5~20mm大のロームブロックが多い。

第247図 30~32号井戸跡平面・断面図

関係にはない。602号土坑に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。

上端での平面形は、丸みの強い台形のような不整な形態である。南北方向での最大長は161cm、東西方向での現存長は135cmである。開口部が大きく開き、中段を有し一端くびれ、円形の井戸底へとすばまる形態である。くびれは、崩落によってえぐれた箇所であろう。最深部での深さは、136cmである。覆土は、9層に分層できた。1~6層までA s-Aを含み、8・9層にいたって灰色みを増し、9層には砂礫が含まれる。溜め井の一種であろう。

土器器小片を主とする遺物が少数出土している。覆土にA s-Aが含まれることから見て、近世後半以降の遺構であろう。

31号井戸跡 (第247・248図、第121表、図版90・102)

調査地点南東半の南西縁近くで検出した遺構である。88号溝跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。

平面形は、やや歪な楕円形というところであろうか。土層断面から見た最大径は309cmである。筒状の井筒に、漏斗状の大きくゆるやかに開く開口部が付く形態であろう。手掘りで開掘した最下面までの深さは、78cmである。覆土は、6層に分層できた。覆土は、ロームを含むやや黒みの強い暗褐色土が主である。1・2層にはAs-Aが含まれ、5層以下は著しく粘性が増し、小礫を含まれるようになる。

かなりの量の土師器細片が出土しており、また少数ながら常滑焼大甕片や陶磁器片が出土している。陶磁器片は細片であるが、第248図1に図化した。出土遺物、覆土から見て、近世後半以降の遺構と思われる。



第248図 31号井戸跡出土遺物

第121表 31号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形製・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	白磁碗	口径 (18.8) 底径 — 器高 [3.7]	体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は短く外反する。ロクロ成形、整形。	外面—ロクロナゲ。内面—ロクロナゲ。	地—灰黄色 釉—灰オリーブ色	口縁部～ 体部1/20 残存

32号井戸跡 (第247図、図版90)

調査地点南東端近くで検出した遺構である。98号溝跡と重複するが、おそらく98号溝跡は、本遺構に溜り、フローした雨水などを導く溝の跡であろう。確認面は、黄褐色の軟質ローム層の上面である。

平面形は、不整な円形で、最大径は159cmである。開口部が丸みをもって開き、中段以下も丸みをもって底面にいたる形態である。最深部での深さは、65cmである。覆土は、6層で、黒みの強い暗褐色土を主とし、1層にのみAs-Aが含まれる。浅いためか、深い井戸跡に見られる粘性の強い層や砂礫を含む層が見られない。溜め井の一種であろう。

土師器細片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

4 土坑

以下に報告する土坑は、本調査地点と北側のE3地点にまたがる162・164・165号土坑の3基を含め52基である。それらの土坑は、時期や形態など多様であるが、中央にややまとまりをなし分布する大小の縦長の長方形の土坑に関しては、近世、あるいはそれ以降に属する貯蔵用の農業施設が含まれると思われる。その種の土坑の中、長大なものに関しては、繰り返して掘り直して使用され続けたものが含まれるようである。

162号土坑 (第249図、図版91)

調査地点北縁沿いのほぼ中央で検出した遺構である。北側の過半は、本遺跡E3地点の調査に際し調査した。平面形は、長大な長方形である。長軸長は590cm、短軸長は103cmである。長軸方位は、N-8°-Eである。壁は、北半ではハングし、南半では垂直に近く切り立っている。底面はほぼ平坦である。最深部での深さは32cmである。土師器小片が数点出土している。形態的に、植物性食物を埋

置、貯蔵する施設に類似していると言えよう。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

164号土坑 (第249図、図版91)

調査地点北縁沿いの東寄りで検出した遺構である。北側の過半は、本遺跡E3地点の調査に際し調査した。169号住居跡(未報告)、301号住居跡、163号土坑(未報告)を切って造られている。平面形は、かなり不整で長大な隅丸長方形で、長軸長は522cm、短軸長は102cm、長軸方位は、 $N-4^{\circ}-E$ である。船底形に掘り込まれており、最深部での深さは45cmである。覆土の1層に含まれる白色粒は、As-Aであろうか。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

165号土坑 (第249図、図版91)

調査地点北縁沿いの東寄りで検出した遺構である。北側の過半は、本遺跡E3地点の調査に際し調査した。169・170号住居跡(未報告)、301号住居跡を壊している。平面形は、かなり不整で長大な隅丸長方形で、長軸長は現存値で278cm、短軸長は116cm、長軸方位は、 $N-10^{\circ}-E$ である。壁は総じて急峻であり、西側坑壁の一部はハングしている。最深部での深さは45cmである。覆土の1層に含まれる白色粒は、As-Aであろうか。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

578号土坑 (第249図)

調査地点の北西端近くで検出した遺構である。平面形は、微妙に角張った楕円形である。長径は120cm、短径は106cm、最深部での深さは24cmである。底面はほぼ平坦である。

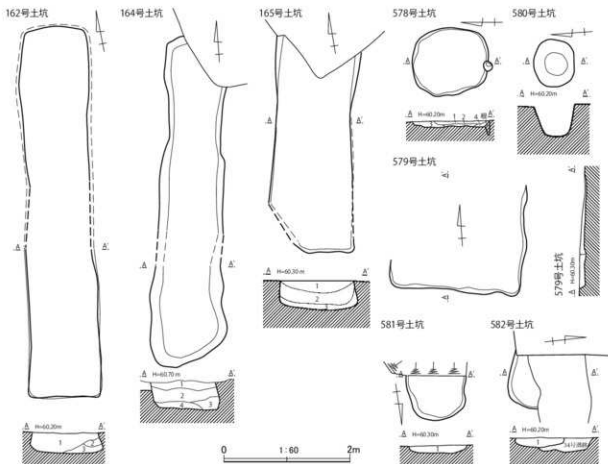
579号土坑 (第249図)

調査地点の北西端寄りで検出した遺構である。北側は削平され、攪乱により壊されている。小形の住居跡と見られないではないが、底面には床面のような硬化面は見られない。平面形は、方形、あるいは長方形になろう。いずれも現存値になるが、規模は、南北方向で170cm、東西方向では210cmである。最深部での深さは10cmである。底面はほぼ平坦である。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

580号土坑 (第249・250図、第122表、図版91・102)

調査地点の北西端寄りの北端近くで検出した遺構である。南側を溝状の攪乱により壊されている。本調査地点内では、床面など一切痕跡をとどめない住居跡の残存した貯蔵穴であろうか。未調査範囲を挟むため即断できないが、北側の隣地である久下東遺跡E3地点の近接する位置で住居跡が検出されており、位置的にその内の158号住居跡(未報告)の貯蔵穴である可能性が考えられよう。一応土坑として記載するが、158号住居跡の報告時に他の遺物を含め再検討したい。

平面形は、やや不整な円形で、最大径は72cm、最深部での深さは50cmである。断面形は、逆U字形



162号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロックを多量に含む。
- 2層：黄褐色土層。1層に近いが、さらに大きなロームブロックが集中する。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが少ない。

164号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、白色粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量、全体に均一に焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、10～50mm大のロームブロックの混合土。

165号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量、30mm大のロームブロックを少量含む。しまっている。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを少量、50mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。

- 3層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量、50mm大のロームブロックを多量に含む。

578号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を含み、10mm大のロームブロックを少量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多量に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を含み、20mm大のロームブロックを多量に含む。

579号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を少量含む。きめ細かく、含有物少ない。

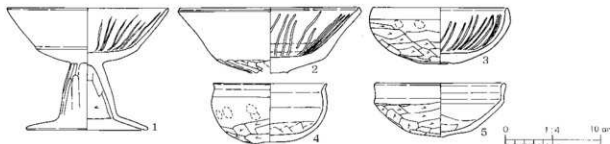
581号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム小ブロックを少量含む。

582号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

第249図 162・164・165・578～582号土坑平面・断面図



第250図 580号土坑出土遺物

第122表 580号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口径 17.0 底径 12.3 器高 12.9	体部に稜を持ち、口縁部は直線的に外反する。脚部はやや丸みをもち、裾部は水平に近く開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部~体部上位ヨコナデ。体部上位~脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-坏部ヘラミガキ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	白色・黒色の岩片、礫、雲母 内外-明赤褐色	3/5残存
2	高坏	口径 19.0 底径 — 器高 [6.8]	体部に弱い稜をもつ。口縁部はやや外反し、口唇部わずかに縮み上げられる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部~体部ヨコナデ。坏底部ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~坏底部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃石、礫、雲母 内外-明赤褐色	坏部残存
3	坏	口径 14.3 底径 — 器高 5.8	丸底。体部は丸みをもつ。口縁部は内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ、指頭痕あり。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラミガキ。	褐色の岩片、角閃石 内外-赤褐色	完形
4	坏	口径 11.9 底径 — 器高 6.4	丸底。体部は丸みをもつ。口縁部は外反し、内面は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上~中位ナデ、指頭痕あり。体部中位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外-明赤褐色	口縁部一部欠損
5	坏	口径 13.6 底径 — 器高 5.8	丸底。口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	白色・褐色・黒色の岩片、角閃石 内外-橙褐色	完形

で、覆土の上~中層からかなり密集した状態で、第250図に示した高坏、坏などの極めて精製の土師器が出土している。出土遺物から見て、古墳時代後期初頭の遺構、あるいは前記したように貯蔵穴と考えられる。

581号土坑 (第249図)

調査地点の北縁近くの中央で検出した遺構である。南半を溝状の攪乱により壊されている。平面形は、楕円形になろうか。長径は現存値で70cm、短径は95cmである。皿形に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。土師器、須恵器の小片が少数出土している。最深部での深さは13cmである。

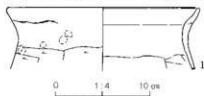
582号土坑 (第249図)

調査地点の北縁中央で検出した遺構である。34号溝跡を切っている。平面形は、楕円形、円形になろうか。最大径は77cmである。最深部での深さは11cmである。底面はほぼ平坦である。重複関係、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降と考えられる。

583号土坑 (第252・253図、第123表、図版91)

調査地点の北縁沿いの東寄りで見出した遺構である。北側部分は、本遺跡E3地点にわたるが、検

出でなかった。2基の土坑が重複しているかにも見えるが、確言できない。全体の平面形は、南北にやや長い不定形な形態であるが、南側は、隅丸長方形に近い形で深くなる。南北方向での現存長は165cm、東西方向での長さは128cmである。最深部での深さは40cmである。底面には凹凸が顕著である。第251図1は、覆土中より出土した土師器甕である。他に土師器小片がかなりの量、須恵器小片が少量出土している。覆土から見て、やはり近世、あるいはそれ以降の遺構と考えてよいであろう。



第251図 583号土坑出土遺物

第123表 583号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 [20.6] 底径 [6.5] 器高 [6.5]	口縁部はコの字状に近い傾向にある。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。指頭痕あり。 胴部上位ヘラケズリ。指頭痕あり。 内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	白色・黒色・褐色の岩片 内外-明赤褐色	口縁部へ胴部上位1/4残存

584号土坑 (第252図、図版91)

調査地点の北縁沿いの東端で検出した遺構である。299・300号住居跡を切っており、北側の一部は、本遺跡E3地点の調査に際し調査し、東側は調査範囲外である。平面形は、西壁の一部が突出した隅丸長方形、あるいは長方形になりそうである。長軸長は384cm、横幅は現存値で98cm、長軸方位は、N-4°-Eである。最深部での深さは30cmである。底面には凹凸が見られ、ピット状の掘り込みが見られる。近世陶器かと思われる微小な破片が1点出土している。他に土師器小片がかなりの量、須恵器小片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

585号土坑 (第252図、図版91)

調査地点の北縁近く、北東端に寄った位置で検出した遺構である。平面形は、やや不整な長楕円形、葉巻のような形で、長さは222cm、横幅は46cmである。長軸方位はN-76°-Wである。壁は全体的に急峻に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは、14cmである。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

586号土坑 (第252図、図版92)

調査地点の北西半中央で検出した遺構である。302号土坑と南側で接しているが、重複関係にはない。平面形は、円形で、径131cmである。最深部での深さは28cmである。底面はほぼ平坦であるが、北東寄りに、ピット状の掘り込みが見られる。土師器小片が少数出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構であろうか。

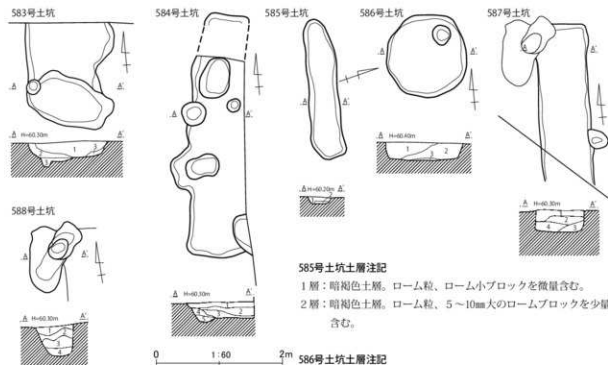
587号土坑 (第252図)

調査地点の南西縁沿いの北西寄りで検出した遺構である。588号土坑に切られているらしく、南側は擾乱により壊されている。平面形は、縦長の長方形になろう。長軸方向での現存長は232cm、横幅は80cm、長軸方位はN-2°-Eである。3辺の壁は直に近く立ち上がる。微妙な凹凸はあるものの、底面はおおむね平坦である。最深部での深さは34cmである。土師器小片を主とする遺物が少量出土し

ているが、周辺の遺構の遺物が混入したものであろう。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

588号土坑 (第252図)

調査地点の南西縁近く、北西寄りで検出した遺構である。587号土坑を切っているようである。土



583号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。焼土粒を含み、ローム粒を全体に均一に含む。灰白色粘土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを少量全体に均一に含む。炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。20～40mm大のロームブロックを含み、炭化物粒を少量含む。

584号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、白色粒、焼土粒を微量全体に均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、白色粒を微量、焼土粒を少量全体に均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含み、白色粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。焼土粒を含む。白色粒を微量含む。
- 5層：暗褐色土層。黒褐色土ブロック、ローム粒、10mm大のロームブロックを少量全体に均一に含む。

585号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。

586号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。

587号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。きまが細かく、含有物が少ない。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロック微量含む。
- 3層：暗褐色土層。1層と同じ。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。色調やや明るい。

588号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～15mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を微量含む。含有物が少ない。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを少量全体に均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロック少量含む。

第252図 583～588号土坑平面・断面図

坑の重複例、さらにピットが重なる例とも見えるが、判断としない。一応1基の土坑として記載する。平面形は、楕円が組み合わさったような不整形形態である。北東-南西方向での長さは138cm、北東-南西方向で103cm、東西方向での長さは80cm、最深部での深さは48cmである。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

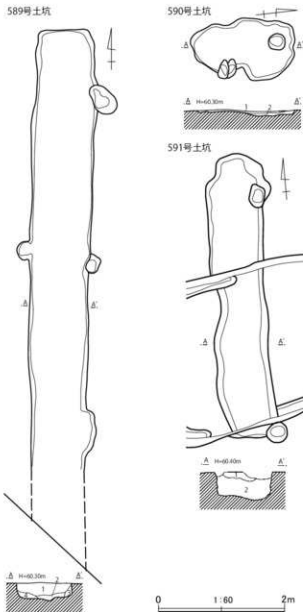
589号土坑 (第253図、図版92)

調査地点の南西縁沿いの北西寄りで検出した遺構である。

南側は攪乱により壊されている。平面形は、縦長の長方形である。長軸方向での現存長は8.12m、横幅は92cmである。長軸方位はほぼ北北である。壁は垂直に近く立ち上がる。微妙な凹凸はあるものの、底面はおおむね平坦である。最深部での深さは28cmである。土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

590号土坑 (第253図、図版92)

調査地点の南西縁近くの北西寄りで検出した遺構である。平面形は、かなり不整形な楕円形、卵形で、長径は160cm、短径は94cm、最深部での深さは8cmである。底面には凹凸があるが、全体としてはおおむね平坦である。土師器小片を主とする遺物が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



589号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、10~30mm大のロームブロックを全体に均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム小ブロックを少量含む。きめが細かい。
- 4層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。

590号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、10~30mm大のロームブロックを多量に含む。

591号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム小ブロック、30mm大のロームブロックを少量、小礫を微量含む。

第253図 589~591号土坑平面・断面図

591号土坑 (第253図)

調査地点の北西半の南西縁寄りで検出した遺構である。303号住居跡を壊して造られている。平面形は、かなり不整で丸みのある縦長の長方形、隅丸長方形と見ることができる。長軸長は4.53m、短軸長は86cm、長軸方位はほぼ真北を指す。最深部での深さは40cmである。いくらか凹凸はあるものの底面はおおむね平坦である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

592号土坑 (第255図、図版92)

調査地点の北東縁沿いの中央で検出した遺構である。北側は調査範囲外である。平面形は、丸みの強い隅丸方形、隅丸長方形になろうか。壁際の現存長は192cmである。最深部での深さは41cmである。底面には凹凸が目立つ。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

593号土坑 (第255図、図版92)

調査地点の中央、北東寄りで検出した遺構である。304号住居跡を切っており、23号掘立柱建物跡と重複する。平面形は、やや歪な円形で、最大径は150cmである。底面にはかなり凹凸が目立ち、ピット状の掘り込みが2個見られる。最深部での深さは20cmである。覆土から見て、近世後半以降の遺構であろう。

594号土坑 (第255図、図版92)

調査地点の中央、北東寄りで検出した遺構である。309号住居跡を切り、21・23号掘立柱建物跡と重複する。平面形は、長楕円形である。長径は170cm、短径98cm、長軸方位はN-63°-Eである。最深部での深さは15cm、底面には凹凸が見られる。覆土にAs-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

595号土坑 (第254・255図、第124表、図版92・102)

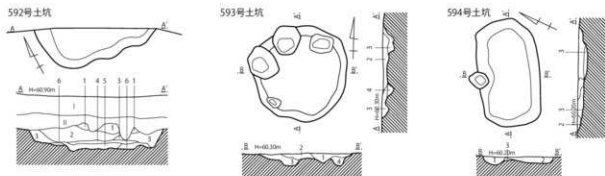
調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。平面形は、縦長の隅丸長方形、あるいは葉巻のような形で、長さは280cm、横幅は72cmである。長軸方位はN-87°-Wである。最深部での深さは8cmで



第254図 595号土坑出土遺物

第124表 595号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	灰軸 陶器 長頸瓶	口径 底径 器高 [6, 8]	頸部は外反する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色・黒色の岩片 地-灰白色 軸-オリーブ灰色	頸部1/3 残存
2	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部は丸く膨らむ。粘土紐積み上げによる成形後、ロクロ整形。	外面-回転ナデ後、ナナメの浅いハケ。内面-ヨコナデ、指押し。	白色・灰色の岩片 などの大小砂粒 内外-灰色	



592号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、鉄斑を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。淡黄灰色粘土ブロック、鉄斑を均一に含む。
- 5層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 6層：暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

593号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、A s-Aを微量含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒を微量、A s-Aを均一に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、A s-Aを均一に、ロームブロックを微量含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

594号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともにない。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、A s-Aを均一に含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

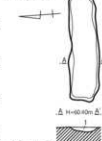
595号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量含み、白色粒を微量含む。

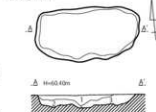
596号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロック、白色粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを全体に均一に含む。

595号土坑



597号土坑



- 3層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量全体に均一に含む。

- 4層：暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量全体に均一に含む。

597号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量全体に均一に含み、白色粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：黄褐色土層。ローム粒、20~40mm大のロームブロックを主とする。
- 3層：暗褐色土層。ローム小ブロックを少量含む。きめが細かい。

598号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロックを全体に均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを含む。

第255図 592~598号土坑平面・断面図

ある。底面には凹凸が見られる。第254図1・2の陶器片、須恵器片の他に土師器小片が少量出土している。覆土から見て、やはり近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

596号土坑 (第255図、図版93)

調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。平面形は、縦長の隅丸長方形である。長軸長は192cm、短軸長は92cm、長軸方位はN-6°-Eである。最深部での深さは15cmである。微妙な凹凸はあるが、底面は全体としてはおおむね平坦である。土師器小破片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

597号土坑 (第255図、図版93)

調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。平面形は、長楕円形に近く、長径162cm、短径94cm、長軸方位はN-86°-Wである。最深部での深さは19cmである。底面にはかなり凹凸が目立つ。土師器小破片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

598号土坑 (第255図、図版93)

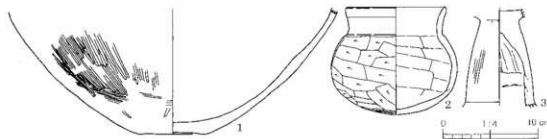
調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。23号掘立柱建物跡と重複する。平面形は、かなり不整な隅丸長方形で、長軸長は194cm、短軸長は94cm、長軸方位はN-12°-Eである。最深部での深さは12cmである。多少凸凹はあるが、底面はおおむね平坦である。土師器小破片が少数出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

599号土坑 (第257図、図版93)

調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。23号掘立柱建物跡と重複し、同遺構を切っているようである。平面形は、かなり不整な楕円形で、長径は138cm、短径は107cmである。断面形は逆U字形で、上端が開き気味になる。最深部での深さは44cmである。底面には、ビット状の掘り込みが見られる。あるいは、全体が抜去された柱穴の一種である可能性もある。土師器小片が数点出土している。

600号土坑 (第256・257図、第125表、図版93・102)

調査地点の中央、やや南西縁寄りで検出した遺構である。307号住居跡を切り、308号住居跡に南西側の壁の一部を壊されている。307号住居跡の埋没後、覆土を掘り抜いて造られ、本遺構の埋没後に308号住居跡が造られた模様である。上端での平面形は、かなり歪な円形で、底面は卵形である。最大径は202cmである。坑壁はゆるやかに立ち上がり、西側、東側の坑壁には段および平場が見られる。最深部での深さは103cmである。覆土は、ロームを含む暗褐色土を主とし、焼土や炭化物がかなり含まれる。第256図に示した土師器の甕や短頸壺は、覆土下層から出土した遺物である。他に土師器片を主に遺物がかなりの量出土している。出土遺物、重複関係、覆土から見て、古墳時代後期～終末期の遺構と考えられる。



第256図 600号土坑出土遺物

第125表 600号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 — 底径 7.2 器高 [13.2]	平底。胴部は大きく丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部中位～底部ヘラミガキ。内面—器面摩耗のため調整不明瞭。	白色・褐色の岩片、角閃石 内外—ぶい黄褐色	胴部中位～底部 1/4残存
2	壺	口径 10.5 底径 — 器高 11.3	口縁部は僅かに外反して立つ。胴部は球状を呈す。丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ココナデ。胴部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面—口縁部ココナデ。以下ヘラナデ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—黄褐色	口縁部一部欠損
3	高坏	口径 — 底径 — 器高 [10.4]	脚部はやや丸みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—坏底部ココナデ。脚部上・下位器面摩耗のため調整不明瞭。中位ヘラミガキ。内面—坏底部ナデ。脚部上へ中位ヘラナデ。中へ下位ナデ。	白色・褐色の岩片、角閃石、燧 内外—明赤褐色	坏底部～脚部下位 2/3残存

601号土坑 (第257図、図版93)

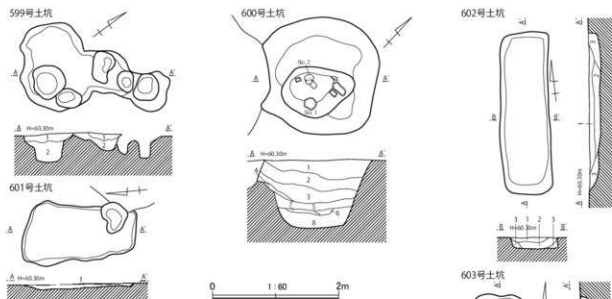
調査地点の中央、南西縁寄りで検出した遺構である。307号住居跡の東隅の一部を壊して造られている。平面形は、かなり歪んだ隅丸長方形で、長軸長は176cm、短軸長は86cm、長軸方位は $N-5^{\circ}-E$ である。最深部での深さは8cmである。多少凹凸が見られるが、全体的に底面は平坦である。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

602号土坑 (第257図、図版94)

調査地点北西部の中央、北東縁寄りで検出した遺構である。30号井戸跡を切り、21・24号掘立柱建物跡と重複する。平面形は、縦長の隅丸長方形で、長軸長は258cm、短軸長は76cm、長軸方位は $N-7^{\circ}-E$ である。底面は平坦である。最深部での深さは18cmである。底面は平坦である。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。

603号土坑 (第257図、図版94)

調査地点の中央、南寄りで検出した遺構である。307号住居跡の一部を壊して造られている。平面形は、縦長の隅丸長方形と見てよいであろう。坑壁はかなりよれよれしている。長軸長は7.47m、短軸長は100cm、長軸方位は $N-5^{\circ}-E$ である。底面には、波打つような微妙な凹凸が見られる。南端の掘り込みは、時期の異なるピットの可能性もある。最深部での深さは13cmである。図化していないが淡青色の磁器小片が1点している。他に須恵器小片が3点、土師器小片が少量出土している。いずれも周辺の遺構から混入した遺物かと思われる。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



599号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、にぶい黄褐色シルト質ローム粒を含み、黒褐色土粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。

600号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム小ブロックを全体に均一に含み、焼土粒、焼土小ブロック、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多量に全体に均一に含み、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを含み、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、10～30mm大のロームブロックの混合土。
- 5層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。
- 6層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に微量含む。
- 7層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。暗褐色土とロームは、ほぼ同量。
- 8層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に少量含む。

601号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5～10mm大のロームブロックを全体に均一に含み、白色粒、焼土粒を微量含む。

602号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロック、焼土粒、A s-Aを微量含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

603号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含み、焼土粒を少量含む。A s-Aを多量に含む。しまっている。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、5～30mm大のロームブロックを局所的に含む。

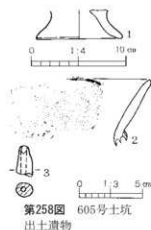
第257図 599～603号土坑平面・断面図

604号土坑 (第259図、図版94)

調査地点の中央、南東寄りで検出した遺構である。南西側の壁の一部を擾乱により壊されている。平面形は、やや不整な円形で、最大径は150cmである。壺のような形に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは37cmである。暗褐色土をベースに、ローム粒、ロームブロックをかなり含む特徴的な覆土である。土師器片を主とする遺物が少量出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

605号土坑 (第258・259図、第126表、図版94)

調査地点の中央、南東寄りで検出した遺構である。606号土坑と接している。平面形は、縦長の隅丸長方形で、長軸長は6.53m、短軸長は103cm、長軸方位はN-4°-Eである。底面には所々掘削時の痕跡かと思われる凹凸がみとめられる。また、底面の2箇所にビット状の掘り込みが見られる。深さは、浅い部分で9cm、最深部での深さは32cmである。覆土は、大小のロームブロックを多く含む暗褐色土が主で、一部にAs-Aが含まれる。土師器片を主とする遺物が少量出土しているが、覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。



第258図 605号土坑
出土遺物

第126表 605号土坑出土遺物観察表

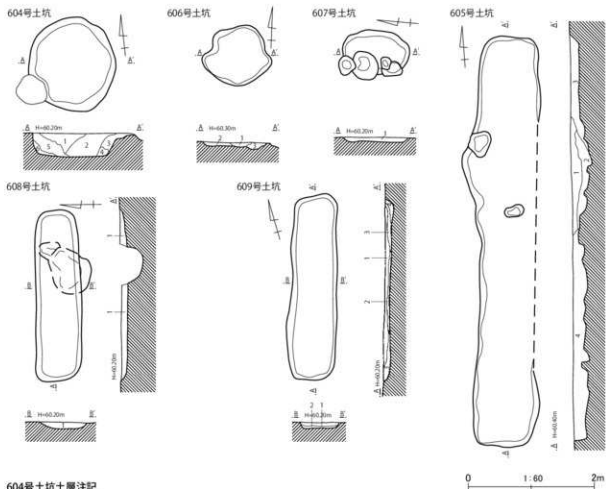
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形 台付甕	口径 底径 器高 — (8.8) [3.0]	台部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-台部ヨコナデ。内面-台部ヨコナデ。	白色の岩片、角閃石、雲母 内外-にぶい褐色	台部1/3 残存
2	直口壺	口径 底径 器高 — — —	後円部はやや丸みをもって開き、頸部は屈折する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。記号文風のナメの平行する細い2条の沈線。頸部に突帯、ハケ具による押捺。内面-ヨコ、ナメのハケ、ナデ。	白色の岩片などの細砂少量 内外-にぶい褐色	
法量(cm)・特徴						
3	土塊	長さ[2.5]、幅[1.2]、重さ2.8g	胎土：白色の岩片、雲母	色調：褐色		1/2残存

606号土坑 (第259図、図版95)

調査地点の中央、南東寄りで検出した遺構である。605号土坑と接している。平面形は、南側が膨らんだかなり不整形で、南北方向での長さは95cm、最深部での深さは10cmである。底面には凹凸が見られる。土師器小片が数点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

607号土坑 (第259図、図版95)

調査地点の中央、南西縁近くで検出した遺構である。西側の壁をビットにより壊されている。平面形は、楕円形になろうか。長径は103cm、短径は69cm、最深部での深さは11cmである。底面には凹凸が著しい。土師器小片が1点出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



604号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を霜降り状に多量に、ローム小ブロックを少量含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒を斑状に含み(所々濃集する)、5~30mm大のロームブロック(30mm大は1、2点)を含む。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ローム小ブロックが点在し、白みの強いローム粒をモヤモヤと多量に含む。
- 4層：黄褐色土層。5~50、60mm大のロームブロックを主に、暗褐色土を斑状に含む。
- 5層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 6層：黄褐色土層。ローム粒、5~20mm大のロームブロックを主に、暗褐色土を斑状に含む。

605号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を含み、5~30mm大のロームブロックを雲状にポツポツ含む。焼土粒を少量、A s-Aを含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、5~40mm大のロームブロックを斑状に多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多く、ロームブロックは5mm大のもののみ。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが大きく(5~70、80mm大)、しかも乱れ入る。A s-Aを含む。

606号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム小ブロックを多量に全体に均一に含み、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。黒褐色土粒、ローム粒、ローム小ブロックを含む。

607号土坑土層注記

- 1層：褐色土層。暗褐色土とローム粒の混合土を主に、40、50mm大のロームブロックを不規則に含む。

608号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

609号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、鉄斑を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、鉄斑、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを少量含む。粘性、しまりともにない。

第259図 604~609号土坑平面・断面図

608号土坑 (第259図、図版95)

調査地点の中央、南東寄りで検出した遺構である。24号掘立柱建物跡の柱穴のひとつを壊して造られている。平面形は、縦長の隅丸方形で、長軸長は270cm、短軸長は72cm、長軸方位は $N-90^{\circ}-W$ である。微妙な凹凸は見られるが、底面はおおむね平坦である。最深部での深さは11cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

609号土坑 (第259図、図版95)

調査地点の中央、南東寄りで検出した遺構である。平面形は、かなり歪な縦長の隅丸方形で、長軸長は292cm、短軸長は70cm、長軸方位は $N-16^{\circ}-E$ である。底面には細かな凹凸が見られる。最深部での深さは12cmである。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

610号土坑 (第261図、図版95)

調査地点の中央、東寄りで検出した遺構である。24号掘立柱建物跡と重複し、南側の壁の一部をビットにより壊されている。平面形は、やや歪な円形で、最大径は105cmである。浅い碗形に掘り込まれており、底面には凹凸が見られる。覆土から見て、古代の遺構と考えられる。

611号土坑 (第260・261図、第127表、図版95・102)

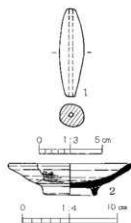
調査地点の南東半、北東寄りで検出した遺構である。平面形は、長楕円形で、長径115cm、短径55cm、長軸方位は $N-4^{\circ}-W$ である。底面には多少凹凸があり、ビット状の掘り込みが見られる。最深部での深さは19cmである。第260図1の土鍾は、覆土中より出土した。覆土にA s-Aが含まれることから近世後半以降の遺構と考えられる。

612号土坑 (第261図、図版96)

調査地点の南東半、北東寄りで検出した遺構である。平面形は、やや歪な楕円形で、長径123cm、短径95cm、長軸方位は $N-10^{\circ}-W$ である。底面には凹凸が見られる。最深部での深さは30cmである。

613号土坑 (第260・261図、第127表、図版96・102)

調査地点の東縁近くの北寄りで検出した遺構である。ビットを切っている。平面形は、やや不整形な円形で、最大径は102cmである。底面はほぼ平坦である。最深部での深さは12cmである。第260図2の高台付の須恵器皿は、覆



第260図 611・613号土坑出土遺物

第127表 611・613号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
1	土鍾	長さ6.59、幅1.95、重さ22.1g 胎土：黒色・褐色・白色の岩片、角閃石 色調：明赤褐色				完形 611号土坑出土
2	須恵器皿	口径 13.0 底径 5.1 器高 3.3	高台部は逆台形状を呈す。体部はわずかに丸みをもって開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。線刻あり。底面回転糸切り。内面—ロクロナデ。高台貼付時ナデ。	白色・黒色の岩片、礫 内外—灰色	3/4残存 613号土坑出土

土中より出土した。他に土師器小片を主とする遺物が少数出土している。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。

614号土坑 (第261図、図版96)

調査地点の東縁近くの北寄りで検出した遺構である。315号住居跡、615号土坑に切られており、311号住居跡に接している。平面形は、ほぼ円形で、最大径は198cmである。船底形に近く掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは45cmである。土師器小片が少量出土している。重複関係や覆土から見て、古代の遺構と考えられる。

615号土坑 (第261図、図版96)

調査地点の東縁近くの北寄りで検出した遺構である。614号土坑を切って造られている。平面形は、かなり歪な楕円形で、長径230cm、短径72cm、長軸方位は $N-90^{\circ}-W$ である。底面には微妙な凹凸が見られる。最深部での深さは15cmである。覆土にAs-Aが含まれることから、近世後半以降の遺構と考えられる。

616号土坑 (第261図、図版96)

調査地点の東縁近くの北寄りで検出した遺構である。平面形は、円形で、最大径は98cmである。底面には細かな凹凸が目立つ。浅い部分での深さは8cm、最深部での深さは25cmである。覆土は、暗褐色土、黒褐色土を主とし、614号土坑の覆土に類似している。覆土から見て、古代の遺構の可能性はある。

617号土坑 (第262・263図、第128表、図版96)

調査地点の南東半のほぼ中央で検出した遺構である。2基の土坑の重複例と見てよいであろう。南側のやや大ぶりの土坑を617a号土坑、北側の小さい方の土坑を617b号土坑として記載する。なお、2基の土坑の新旧関係は判然としないが、覆土に大きな違いはない。

617a号土坑の平面形は、所々角張ったかなり不整な円形で、最大径は135cmである。椀形に丸く掘り込まれており、底面には細かな凹凸が見られる。最深部での深さは14cmである。

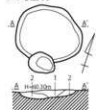
617b号土坑の平面形は、かなり不整な楕円形で、長径109cm、短径73cm、長軸方位は $N-55^{\circ}-E$ である。中段を有し、底面にかけて先細りとなる。最深部での深さは72cmである。

両土坑の境目あたりを中心に比較的大きな土師器片が数点出土している。出土遺物、覆土から見て、どちらも古代の遺構である可能性がある。

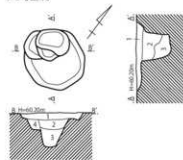
618号土坑 (第263図、図版96)

調査地点の南東半のほぼ中央で検出した遺構である。平面形は、微妙に角張った楕円形で、長径108cm、短径86cm、長軸方位は $N-31^{\circ}-E$ である。底面には凹凸が見られる。最深部での深さは15cmである。覆土から見て、古代の遺構と考えられる。

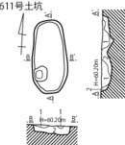
610号土坑



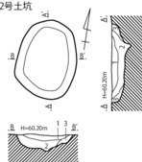
613号土坑



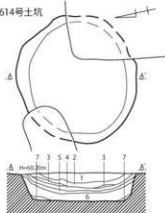
611号土坑



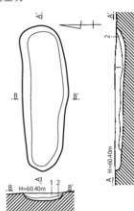
612号土坑



614号土坑



615号土坑



610号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。

611号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、A s-Aを均一に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。粘性、しまりともにない。

612号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、鉄斑を均一に含む。
- 2層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

613号土坑土層注記

- 1層：暗灰褐色土層。ローム粒を微量、A s-Aを均一に含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒を微量含む。
- 3層：暗茶褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。
- 4層：暗褐色土層。ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。

614号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロックを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 3層：黒褐色土層。ローム粒を微量含む。

616号土坑



- 4層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量含む。

- 5層：黒褐色土層。ローム粒を微量含む。

- 6層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。

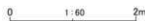
- 7層：暗茶褐色土層。ローム粒を微量含む。粘性、しまりともにない。

615号土坑土層注記

- 1層：暗茶褐色土層。ローム粒、A s-Aを微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に、A s-Aを微量含む。

616号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。



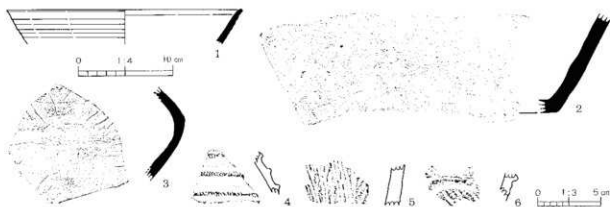
第261図 610～616号土坑平面・断面図

619号土坑 (第263図、図版96)

調査地点の南東半のほぼ中央で検出した遺構である。平面形は、楕円形で、長径108cm、短径71cm、長軸方位はN-72°-Wである。底面は段差をもって深くっており、最深部での深さは22cmである。覆土から見て、近世後半以降の遺構と考えられる。

620号土坑 (第262・263図、第128表、図版97)

調査地点の南東半の中央、東寄りで見出した遺構である。313号住居跡と接している。遺構の南半部分は、調査範囲の関係で検出することができなかった。平面形は、やや歪な楕円形になるうか。長径は現存値で106cm、短径は153cm、長軸方位はN-13°-Wあたりになる。坑壁に段を有し、底面には凹凸、段差が見られる。最深部での深さは72cmである。覆土から見て、古代の遺構の可能性はある。



第262図 617・620～623号土坑出土遺物

第128表 617・620～623号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 碗	口径 (24.8) — 底径 — 器高 [3.6]	口管部がわずかに外反する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。内面-ロクロナデ。	白色の岩片、襷内外-橙色	口縁部へ 体部 1/10残存 617号土 坑出土
2	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	底部～胴部下位は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形後、ロクロ成形。	外面-ヨコ、ナメのナデ。底部外面はヨコのケズリ。内面-ヨコナデ、指押え。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 外-黒灰色 内-灰色	617号土 坑出土
3	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は算盤玉形に丸く膨らみ立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形後、ロクロ整形。	外面-回転ナデ。内面-回転ナデ。	白色の岩片などの細砂少量 内外-灰白色	623号土 坑出土
4	高坏	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部～坏部上半は内傾し立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面-間隔をあけ横位の突帯3条。突帯先端に細かな連続押捺。ヨコのナデ、ミガキ。内面-ヨコ、ナメのナデ、ミガキ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい橙色	吉ヶ谷式 620号土 坑出土
5	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面-タテ回転組の単節縄文施文後、多数竹管状工具によるタテの不規則な条線。内面-ナデ。	白色・灰色の岩片、石英、長石などの大小砂粒、小礫 内外-にぶい橙色	加曾利E 式 621号土 坑出土
6	深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土紐積み上げによる成形。	外面-曲線的な横位の隆帯。隆帯下には縄の単節縄文。内面-ナデ。	白色・灰色の岩片、雲母などの大小砂粒 内外-にぶい橙色	加曾利E 式 622号土 坑出土



617号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

618号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 2層：暗黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを均一に含む。

619号土坑土層注記

- 1層：暗灰褐色土層。A s-A、炭化物粒を微量含む。
- 2層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

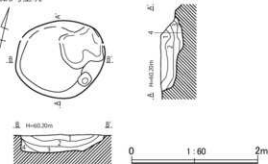
620号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。A s-Bを均一に、ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層：暗褐色土層。A s-B、ローム粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。A s-B、ローム粒、炭化物粒を微量含む。
- 4層：暗茶褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 5層：黒褐色土層。ローム粒を均一に、ロームブロックを微量含む。
- 6層：暗黄褐色土層。ローム粒を多量に、ロームブロックを均一に含む。しまりは弱い。

621号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を多量に含み、30mm大の炭化物を1個含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。1層に比し、焼土粒、炭化物粒が激減する。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、5～20mm大のロームブロックを含む。1層と同様に大きな炭化物を含む。
- 4層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土とロームの混合土の大ブロック。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームが少なく、斑状を呈する。

623号土坑



622号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを斑状、雲状に多量に含む。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を多量に含み、40mm大の輪郭の不明瞭な灰白色シルトブロックを1点含む。

623号土坑土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、A s-Bを均一に含む。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒、ロームブロック、A s-Bを微量含む。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒を均一に含む。
- 4層：暗黄褐色土層。ロームブロックを均一に含む。

第263図 617～623号土坑平面・断面図

621号土坑 (第262・263図、第128表、図版97)

調査地点の南東半、南西縁沿いで検出した遺構である。本遺跡G1地点で報告した236号住居跡(松本 2013: 92~95頁)を切り、88号溝跡に北側、西側部分を壊されている。平面形は、長楕円形になるだろうか。いずれも現存値になるが、長径は144cm、短径は50cm、長軸方位は $S-84^{\circ}-E$ である。坑壁が斜めに立ち上がり、底面が比較的狭い形態で、最深部での深さは26cmである。重複関係、覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

622号土坑 (第262・263図、第128表、図版97)

調査地点の南東半の中央、やや南寄りで検出した遺構である。316号住居跡のカマドを切って造られている。平面形は、やや丸みのある隅丸長方形で、長軸長は110cm、短軸長は69cm、長軸方位は $N-9^{\circ}-W$ である。多少凹凸があるが、底面はおおむね平坦である。最深部での深さは10cmである。縄文土器片が1点(第262図6)、土師器小片が4点出土している。出土遺物、覆土から見て、古代の遺構の可能性はある。

623号土坑 (第262・263図、第128表、図版97)

調査地点の東縁沿いの中央付近で検出した遺構である。88号溝跡に切られている。平面形は、かなり歪な円形で、最大径は144cmである。底面は北東側が1段深くなっている。深さは、浅い部分で22cm、最深部での深さは36cmである。図示した須恵器片(第262図3)の他に、須恵器片2点、少数の土師器小片が出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

624号土坑 (第264図、図版97)

調査地点の東縁近くの中央で検出した遺構である。2基の土坑の重複例としてよく、南側の浅く舌状の部分を624a号土坑、北側の角張った部分を624b号土坑とし記載する。

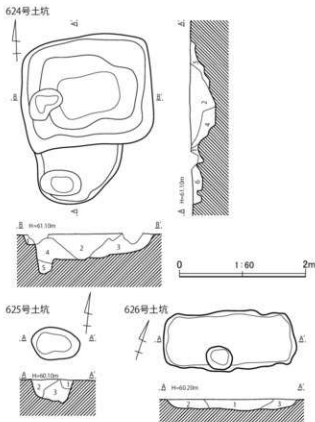
624a号土坑の平面形は、楕円形になるだろうか。南北方向での現存長は89cm、東西方向での長さは139cmである。底面には凹凸が著しく、ビット状の掘り込みが見られる。浅い部分での深さは10cm前後、最深部での深さは48cmである。土師器小片を主とする遺物が少量出土している。

624b号土坑の平面形は、隅丸長方形で、長軸長は207cm、短軸長は173cm、長軸方位は $N-84^{\circ}-E$ である。中段に平場を有し、さらに中央が深くなる形態である。最深部での深さは40cmである。土師器片が少量出土している。

2基の土坑のどちらも、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

625号土坑 (第264図、図版97)

調査地点の東縁近くの中央で検出した遺構である。平面形は、楕円形で、長径は76cm、短径は50cm、長軸方位は $S-79^{\circ}-E$ である。坑壁は比較的急峻に立ち上がり、底面には凹凸が著しい。最深部での深さは38cmである。S字髷胴銅片1点を含む土師器小片が6点出土している。覆土から見て、古代の遺構であろうか。



第264図 624～626号土坑平面・断面図

624号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。上部の表土層の混入土。
- 2層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを水玉状に多量に、炭土粒、炭化物粒を微量含む。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、5～20mm大のロームブロックが多い。底面近くラミナをなす。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、5～40mm大のロームブロックが多い。大きなロームブロックを含まない。
- 5層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、5～50mm大のロームブロックを不規則に含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを含む。

625号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが小さい。
- 3層：暗褐色土層。ローム粒、50mm大のロームブロックを不規則に含む。

626号土坑土層注記

- 1層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、5～8mm大のロームブロックを含む。ローム粒は所々雲状に集塊する。土器粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。

626号土坑 (第264・265図、第129表、図版97)

調査地点の南東半の南東端寄りで検出した遺構である。平面形は、かなり丸みの強い隅丸長方形で、長軸長は210cm、短軸長は91cm、長軸方位はN-71°-Eである。船底形に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であるが、南坑壁に沿ってビット状の掘り込みが見られる。深さはおおむね10cm前後である。図示した縄文土器片(第265図1)の他に、土師器小片がかなりの量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。



第265図 626号土坑出土土器物

第129表 626号土坑出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径 底径 器高	胴部はゆるやかに開きながら立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一沈線で楕円文かと思われる区画文。区画外には縦の単節縄文。破片上端にも横位の沈線。内面一ナデ。	白色・灰色の岩片、角閃石などの大小砂粒多量 内外一黒灰色	安行3a～3b式

5 溝跡

34号溝跡 (第266・267図、第130表、図版98)

調査地点の北縁沿いの東寄りで検出した遺構である。本遺跡のE3地点で北側の立ち上がりのみ調査した遺構であり、E3地点内の158・159号住居跡(未報告)を切って造られている。本調査地点の

582号土坑に壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

調査地点内では、北縁の鉤手に折れる部分から東に向かって伸び、浅くなり途切れる、微妙に彎曲しながら東西方向に走る溝跡である。調査地点内で現存長は10.05m、E3地点内の部分を含めた現存長は約20mである。

溝幅は45～90cmである。溝壁は丸みをもって立ち上がり、溝底には凹凸が顕著である。深さは8～23cmである。溝底は西に向かってかすかに傾斜している。覆土は、ローム粒、ロームブロックをかなり含む暗褐色土を主とする。

覆土中より須恵器小片が少数、土師器小片が少量出土している。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構かと思われる。

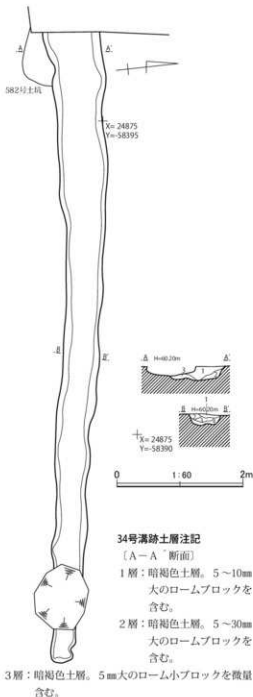
88号溝跡 (第268・269図、第131表、図版98・102)

調査地点の南東半中央で検出した遺構である。北堀新田前遺跡の章(本書第IV章)で報告した3号溝と同一であり(第195図)、広大な範囲を区画する溝跡の一部である。236号住居跡(松本 2013: 92～95頁)、312～314・316号住居跡、621・623号土坑を切り、31号井戸跡に壊されている。また、後述する97号溝跡と重複する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

本遺跡G1地点との境である南西縁からわずかに蛇行しながら伸び、東縁で北堀新田前遺跡A2地点の5号溝跡に連なる東西に走る溝跡である。調査範囲内での長さは21.33m、溝幅は73～107cmである。断面形はV字形に近く、溝壁がゆるやかに大きく開き、溝底が一様に狭まる形態である。確認面であるローム層上面からの深さは、西端付近で90cm、中央で83cm、東端76cmである。底面の標高を見ると、かなり深淺があり、中央付近で溝底がやや浅くなるところがあるが、微妙ながらも西から東に向かって底面が低く、あるいは深くなるようである。覆土は、住居跡覆



第266図 34号溝跡出土遺物



〔B-B 断面〕
1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
3層：暗褐色土層。2層に近いが、さらにロームが多い。
4層：暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを多く含む。

第267図 34号溝跡平面・断面図

第130表 34号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はゆるやかに開く。 粘土組織み上げによる成形 後、ロクロ整形。	外面一回転ナデ。端部に凹線。端面お よび端部直下に櫛歯状状文。内面一回 転ナデ。	白色の岩片・小礫 内外一灰色	

土よりやや黒みの強い暗褐色土を主とする。As-Aは、覆土最上層の一部に限られ、中・下層にはシルト質のロームが目立つようになり、若干粘性が増すようである。

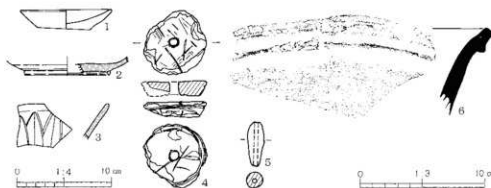
カワラケや陶磁器片が数点出土している(第268図1~3)。他に多量の土師器片、少数の須恵器片が、覆土の上・中層を中心に、全体からほぼ万遍なく出土している。出土遺物、覆土の性状から見て、中世の遺構と考えられる。

89号溝跡 (第269・270図、図版98)

調査地点の南東端近くで検出した遺構である。北堀新田遺跡の章(本書第IV章)で報告した4号溝と同一であり(第195図)、250号住居跡を切って造られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

本遺跡G1地点の23号井戸跡(松本 2013: 126~128頁)に発し、本調査地点を抜け、北堀新田遺

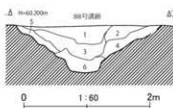
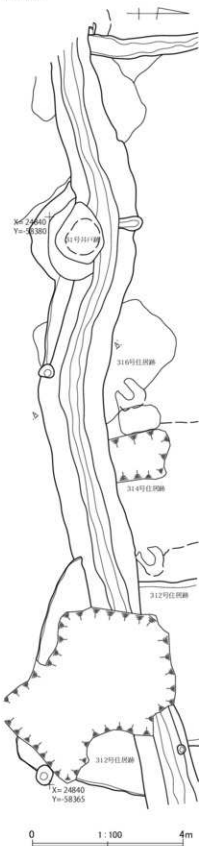
跡A2地点で3号溝跡(本書第IV章)と合流する溝跡である。本調査地点では、南西縁から東西に伸び、一旦北側に屈折し、東縁で北堀新田遺跡



第268図 88号溝跡出土遺物

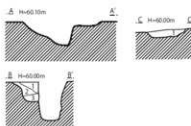
第131表 88号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	カワラケ	口径 9.6 底径 5.6 器高 2.1	平底。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面一調整不明瞭。内面一調整不明瞭。	白色・黒色・褐色の岩片 内外一にぶい褐色	4/5残存
2	灰釉陶器碗	口径 — 底径 (8.9) 器高 [1.9]	高台部は小さい角高台。	外面一ロクロナデ。内面一ロクロナデ。高台最付時回転ナデ。	白色・黒色の岩片 地一灰白色 釉一オリブ灰色	体部下位 ~ 底部 1/8残存
3	青磁碗	口径 — 底径 — 器高 —	ロクロ成形。	外面一連弁文。	内外一灰オリブ色	破片
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
4	石製紡錘車	上径一、下径一、厚さ1.2、重さ35.1g				一部欠損
5	土鐘	長さ3.5、幅1.3、重さ4.2g 胎土: 白色・黒色の岩片 色調: 明褐色				完形
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
6	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はゆるやかに開く。 粘土組織み上げによる成形 後、ロクロ整形。	外面一回転ナデ。細かな擦痕。内面一 回転ナデ。	白色・灰色の岩片・白色の小礫 内外一灰色	



88号溝土層注記

- 1層：暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、ローム小ブロックを含む。焼土粒を少量含む。上半にA s-A含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、さらにロームが多い。白みの強い粘土粒を含み、焼土粒を少量含む。
- 4層：暗褐色土層。2層に近いが、5～15mm大のロームブロックが斑状に混合し、所々ローム粒が雲状に濃集する。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ローム粒、ロームブロックが多い。
- 6層：黄褐色土層。暗褐色土、ローム粒、5～50mm大のロームブロック、にぶい黄褐色シルトの混合土。



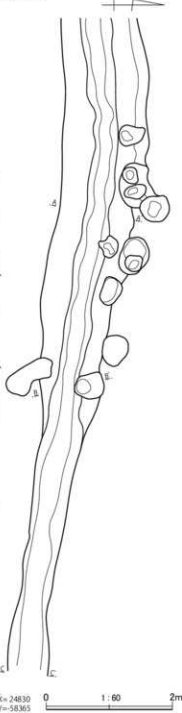
89号溝土層注記

〔B-B'断面〕

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、ローム小ブロックを含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層：暗褐色土層。1層に近いが、さらに斑状にローム粒、5～15mm大のロームブロックロームを含む。

〔C-C'断面〕

- 1層：暗褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを斑状に含み、焼土粒を微量含む。50mm大の黒褐色土の大ブロックあり。



A 2 地点へと抜けてゆく。調査地点内での現存長は12.55m、溝幅は47~136cmである。西半ではV字形に近い断面形で、東半では溝壁、溝底ともにやや丸みを帯びる。深さは、西端近くで37cm、中央で31cm、東端で12cmである。覆土は、住居跡覆土よりやや黒みの強い暗褐色土を主とする。23号井戸跡(前掲)からフローした湧水などを3号溝跡(本書第IV章)へと導くための溝跡であろう。

ごく少数の土師器片などが、覆土

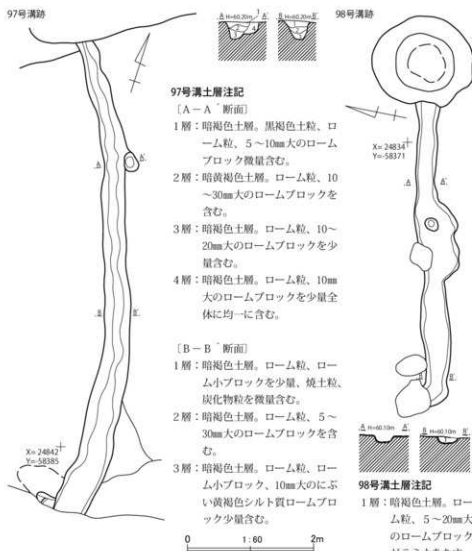
中から出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構の可能性がある。

97号溝跡 (第270・271図、第132表、図版102)

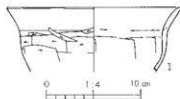
調査地点の南西線沿いの中央で検出した遺構である。236号住居跡(前掲)、306・307号住居跡を切って造られている。88号溝跡と重複するが、新旧関係を確定できなかった。当初236号住居跡と306号住居跡、あるいは307号住居跡とをつなぐ小溝とも考えたが、236号住居跡のカマドを壊しており、88号溝跡に関連する遺構と考えられる。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

第132表 97号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径(18.3) 底径— 器高[6.8]	口縁部は外反する。粘土粒積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上へ中位ヘラナゲ。	白色・黒色の岩片、角閃石 内外—にふい黄褐色	口縁部へ胴部中位2/5残存



第270図 97・98号溝跡平面・断面図



第271図 97号溝跡出土遺物

弧を描いて南北方向に走る溝跡である。現存長は7.48mである。溝幅は27~68cmである。溝壁はゆるい傾斜をもって立ち上がり、溝底には凹凸が著しい。深さは25~34cmである。溝底は南に向かってかすかに傾斜している。覆土は、住居跡の覆土よりやや黒みの強い暗褐色土が主で、ローム粒、ロームブロックをかなり含む。

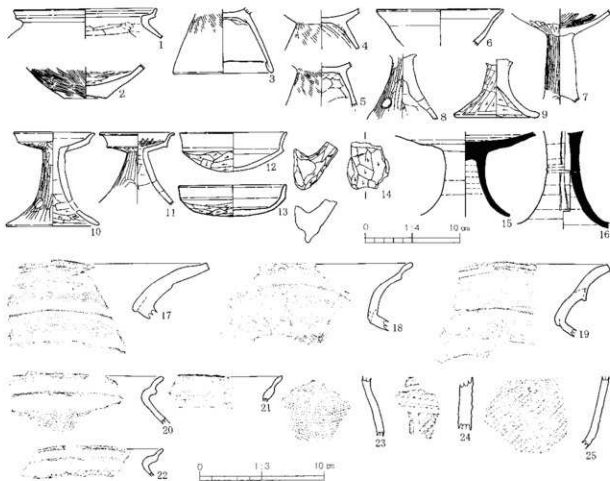
須恵器片1点、土師器小片が少量出土している。出土遺物、覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構かと思われる。

98号溝跡 (第270図、図版98)

調査地点の南東端近くで検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

32号井戸跡に発し、東西方向に走る溝跡である。長さは4.78mである。中央部に溝幅が広がり、両端ではややすぼまる。溝幅は28~66cmである。断面形は箱葉研に近いが、溝壁が丸みをもつ部分がある。深さは12~17cmである。溝底には凹凸が見られる。覆土は、ローム粒、ロームブロックをかなり含む暗褐色土が主である。32号井戸跡と一体となって機能した施設の跡と見てよいであろう。また、先端が89号溝跡に接近したまま途切れており、同溝跡とも関連する可能性が考えられる。

土師器小片が少数出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前の遺構かと思われる。



第272図 遺構外出土遺物

6 ビット

調査地点の北東半、掘立柱建物跡の集中域を中心に多数のビットを検出しているが、掘立柱建物跡として抽出できたビット以外、明瞭な配列、並びを見出すことができなかった。それらのビットの中には、拾い切れない柱穴のみならず、掘立柱建物跡と関連する施設やさらに後代の施設の跡なども含まれる可能性があり、さらに検討する必要があるであろう。

7 遺構外出土遺物

第272図(図版102)に遺構外から出土した資料を示した。同図1~11、19~23の古墳時代前期の土器は、いずれも調査範囲の南東部の表土を除去した段階に採集した資料であり、その多くは、今回資料を再提示した本地点250号住居跡(本書:212~215頁)に伴う可能性があるものと思われる。

第133表 遺構外出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(15.0) 底径— 器高[3.2]	口縁部はS字状を呈す。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。内面—口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。折頸痕あり。	磯、角閃石 内外—明褐色	口縁部へ 頸部1/8 残存
2	甕	口径— 底径4.5 器高[3.6]	やや上げ底。胴部は大きく開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部下位ハケメ。底部ナデ。内面—胴部下位へ底部ヘラナデ。	白色・黒色・褐色 の岩片、石英、磯 内外—明赤褐色	胴部下位 へ底部残 存
3	台付甕	口径— 底径10.6 器高[6.8]	台部端部は折り返し。粘土組織み上げによる成形。	外面—台部ハケメ後ナデ。内面—底部ナデ。台部ナデ。	白色・黒色の岩片 内外—にぶい黄橙 色	台部2/3 残存
4	台付甕	口径— 底径— 器高[4.3]	粘土組織み上げによる成形。	外面—底部へ台部ハケメ後ナデ。内面—底部ナデ。台部ヘラナデ。	白色・黒色の岩 片、角閃石 内外—明褐色	底部へ台 部1/2残 存
5	台付甕	口径— 底径— 器高[4.7]	粘土組織み上げによる成形。	外面—底部へ台部ハケメ後ナデ。内面—底部ナデ。台部ヘラナデ。	白色の岩片、角閃 石、褐色の岩片、 磯 内外—にぶい黄橙 色	底部へ台 部1/2残 存
6	鉢	口径13.3 底径— 器高[3.9]	口縁部は外反し、口唇部が内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色・褐色の岩 片、角閃石 内外—褐色	口縁部へ 体部2/3 残存
7	高坏	口径— 底径— 器高[9.9]	脚部は柱状を呈す。胴部との境に円孔3箇所。粘土組織み上げによる成形。	外面—坏部中位ナデ。下位ヘラケズリ。脚部ヘラミガキ。内面—坏部ヘラミガキ。脚部ヘラミガキ。下位ヘラナデ。	白色の岩片、雲 母、石英 内外—にぶい赤褐 色	底部下位 へ脚部 2/5残存
8	高坏	口径— 底径— 器高[6.9]	脚部はゆるやかに外反する。円孔は3箇所。粘土組織み上げによる成形。	外面—脚部ヘラミガキ。内面—脚部中位ヘラミガキ。下位ヘラナデ。	白色・黒色の岩 片、磯、雲母 内外—赤褐色	脚部1/3 残存
9	高坏	口径— 底径8.6 器高[6.1]	脚部は細く、胴部がハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—脚部ヘラミガキ。胴部ヨコナデ。内面—底部ナデ。脚部中へ下位ヘラミガキ。	白色・褐色の岩 片、角閃石、磯 内外—にぶい赤褐 色	脚部3/5 残存
10	器台	口径8.4 底径9.8 器高9.9	口縁部は外反する。脚部はハの字状に開く。円孔は3箇所。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部へ脚部ヘラミガキ。内面—口縁部ヨコナデ。体部単位不明瞭。脚部ヘラケズリ。	角閃石、褐色の岩 片 内外—明赤褐色	4/5残存
11	器台	口径(7.8) 底径— 器高[7.6]	口縁部は外反する。脚部はハの字状に開く。円孔は3箇所。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。脚部ヘラミガキ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。脚部ヘラケズリ。	白色・黒色の岩 片、雲母、磯 内外—明赤褐色	口縁部へ 脚部下位 2/3残存
12	坏	口径11.2 底径— 器高4.1	丸底。体部に横をもつ。口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部上位ヨコナデ。体部中位へ底部ナデ。	白色・褐色の岩 片、雲母、磯 内外—褐色	口縁部一 部欠損
13	坏	口径11.3 底径— 器高3.3	丸底。体部に横をもつ。口縁部は直立する。	外面—口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部中位ヨコナデ。体部下位へ底部ナデ。	白色の岩片、角閃 石、雲母 内外—褐色	1/2残存

第134表 遺構外出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
14	甌	口径 底径 器高	— — —	胴部に直接貼り付けたものか。	外面-把手部ヘラケズリ。 白色・褐色の岩片・雲母 内外一褐色	把手破片	
15	須恵器 高坏	口径 底径 器高	— — [9.0]	体部は水平に近く開く。ロクロ成形。	外面-環部下位～脚部ロクロナデ。内面-環部下位～脚部ロクロナデ。	白色・褐色・黒色の岩片 内外一黄灰色	体部下位～脚部残存
16	須恵器 高坏	口径 底径 器高	— — [10.3]	脚部は長脚2段。透孔は上段が楕状で下段は長方形を呈す。ロクロ成形。	外面-脚部ロクロナデ。内面-脚部ロクロナデ。	白色・黒色の岩片 内外一灰色	脚部上位へ下位3/4残存
17	壺	口径 底径 器高	— — —	口縁部は屈曲しながら大きくなり、頸部は摺折して肩部に連なる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ。以下斜めのハケ。内面-ヨコナデ。	白色・灰色の岩片・雲母などの細砂 内外一にぶい褐色	二重口縁壺
18	壺	口径 底径 器高	— — —	口縁部は屈曲しながら開き、頸部は摺折して肩部に連なる。粘土組織み上げによる成形。	外面-ヨコナデ。内面-ヨコナデ。	白色・灰色の岩片・雲母などの細砂 内外一にぶい褐色	二重口縁壺
19	壺	口径 底径 器高	— — —	口縁部は屈曲しながら開き、頸部は摺折して肩部に連なる。粘土組織み上げによる成形。	外面-ヨコナデ。内面-ヨコナデ。	白色・灰色の岩片・雲母片などの細砂 内外一明赤褐色	二重口縁壺
20	甕	口径 底径 器高	— — —	口縁部は屈曲し、肩部がやや張る。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ、以下ナナメのハケ。内面-ヨコナデ。	白色・灰色の岩片・雲母などの細砂 内外一にぶい褐色	S字状口縁台付甕
21	甕	口径 底径 器高	— — —	口縁部は屈曲する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ。細線状の擦痕。内面-ヨコナデ。	白色・灰色・黒色の岩片などの細砂 外-にぶい褐色 内-にぶい黄褐色	S字状口縁台付甕
22	甕	口径 底径 器高	— — —	口縁部は屈曲し、肩部はやや張る。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ、以下ナナメのハケ。内面-ヨコナデ。	白色・灰色・赤褐色の岩片などの大小砂粒 内外一にぶい褐色	S字状口縁台付甕
23	甕	口径 底径 器高	— — —	胴部は丸みをもって膨らむ。粘土組織み上げによる成形。	外面-タテ、ナナメのハケ後、ヨコの粗いハケ。内面-ヨコ、ナナメのナデ。	灰色・黒色の岩片などの大小砂粒をかなり含む 内外一にぶい褐色	S字状口縁台付甕
24	深鉢	口径 底径 器高	— — —	胴部は直線的に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-縦回転RLの単節調文。横位の波状文、直線文。下部には2条の縦位の直線文。内面-ナデ。	白色・灰色の岩片などの大小砂粒 外-にぶい黄褐色 内-にぶい黄褐色	加曾利E式
25	深鉢	口径 底径 器高	— — —	破片下端が微妙に内彎する。粘土組織み上げによる成形。	外面-縦回転RLの単節調文。内面-ヨコ、ナナメのナデ。	白色・灰色の岩片、などの大小砂粒少量 内外一暗褐色	加曾利E式

第VI章 自然科学分析

第1節 北堀新田前遺跡の自然科学分析

1 2号墓周溝覆土内出土炭化物の放射性炭素年代測定

藤根 久・孔 智賢・佐々木由香・AMS年代測定グループ*(パレオ・ラボ)

*パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫

Zaur Lomtavidze・Ineza Jorjoliani

1 はじめに

本庄市北堀新田前遺跡の平成18年度の調査では、古墳時代前期の方形周溝墓、前方後方墳および住居跡などが調査された。前方後方墳である2号墓の周溝内には、厚さ最大80cmの黒色土壌が堆積していた。一方、調査地点(A2・A3地点)西側の埋没谷内にも、同様な厚さ最大80cmの黒色土壌が堆積し、5層(恋河内・松本 2008:第185図「5層」)中には白色軽石が分散して堆積している状況が観察された。谷内からは時期が判別可能な遺物はほとんど出土していない。なお、同じ西側埋没谷内の5層に含まれる軽石質テフラに関しては、北堀新田前遺跡A1地点の報告に際し、報告を終えている(恋河内・松本 2008:196・197頁)。

ここでは、A2地点の2号墓の周溝から土壌洗浄によって得られた最下位層8層(本書:第53~56図、2号墓後方部東隅脇のF-F'断面、同後方部前縁付近のG-G'断面の「8層」)中の炭化種実および炭化材の放射性炭素年代測定を行ない、堆積物の堆積年代について検討した。放射性炭素年代測定の試料抽出は藤根、孔、佐々木が行ない、測定はAMS年代測定グループが行なった。

2 放射性炭素年代測定

a 試料と方法

測定した試料は、2号墓の後方部東隅近くのF-F'断面の周溝覆土を採取し、土壌洗浄して得られた最下位層8層から出土したブドウ属炭化種子(PLD-8426)と炭化材(PLD-8637)である(種実同定の詳細に関しては次項参照)。8層から得られた炭化材は複数あるが、中でも一番大きい破片を測定試料とした。炭化材の部位は最外年輪以外の部位不明であるが、実体顕微鏡下での観察では樹皮に近いと思われる部分を採取した。

試料は調製した後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した(第135表)。得られた¹³C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、¹³C年代、暦年代を算出した。

第135表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-8426	遺構：2号墓 層位：8層	試料の種類：ブドウ属種子 試料の性状：炭化 状態：dry	サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化 ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-8637	遺構：2号墓 層位：8層	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分 を採取 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化 ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

b 結果

第136表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行なって暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{13}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第173図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行なうために記載した。

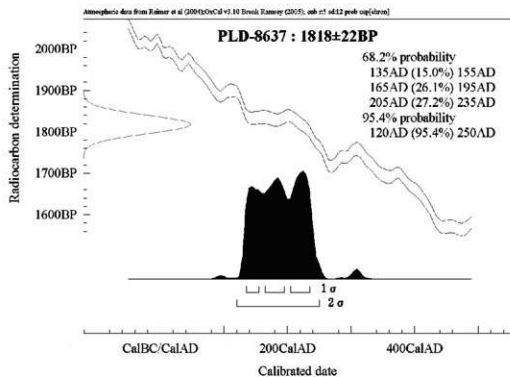
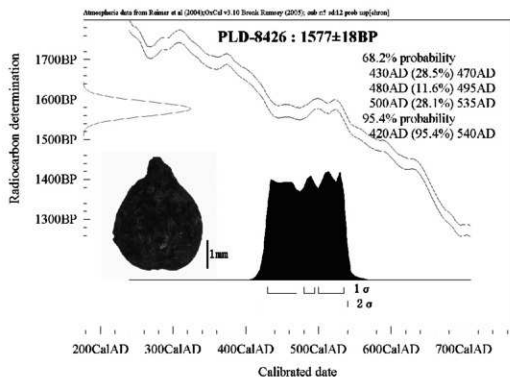
^{14}C 年代はAD. 1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal13.10(較正曲線データ：INTCAL04)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。



PLD-8246 : ブドウ属種子(2号墓周溝8層)

PLD-8637 : 炭化材(2号墓周溝8層)

第273図 2号墓の周溝内堆積物中の年代試料と暦年較正図

第136表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-8426	-29.42 \pm 0.18	1577 \pm 18	1575 \pm 20	430AD(28.5%)470AD 480AD(11.6%)495AD 500AD(28.1%)535AD	420AD(95.4%)540AD
PLD-8637	-25.13 \pm 0.21	1818 \pm 22	1820 \pm 20	135AD(15.0%)155AD 165AD(26.1%)195AD 205AD(27.2%)235AD	120AD(95.4%)250AD

c 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行なった。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

測定したブドウ属炭化種子(PLD-8426)は、2号墓の周溝の最下位層8層から抽出した試料である。測定の結果は、暦年校正の結果、2 σ (95.4%)の確率で420-540calAD(95.4%)であり、5世紀初頭から6世紀前半の年代範囲を示した。

また8層から抽出した炭化材(PLD-8637)は、同様に120-250calAD(95.4%)であり、2世紀前半から3世紀中頃の年代範囲を示した。この2号墓に伴う遺物としてS字口縁台付甕が出土しているが、時期が古墳時代前期の第5段階に属することから、炭化材(PLD-8637)の120-250calAD(95.4%)という年代範囲は、これまでの年代観よりやや古い値であった。なお、木材の ^{14}C 年代が示すのは、その部分の年輪が形成された年代である。最外年輪を試料とした場合、その年代が示すのは枯死あるいは伐採の年代であり、木材が利用された年代に近いと考えることができる。一方、最外年輪より内側の部位を試料とした場合、その年代が示すのは枯死あるいは伐採の年代よりも古い年代である。これは古木効果と呼ばれる。炭化材は樹皮に近い部分と判断したが、最外年輪以外であるため、古木効果の可能性はある。

一方、すでに報告したように調査区西側の埋没谷内堆積物5層中から、6世紀中葉の榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、または5世紀末の榛名山ニツ岳浜川テフラ(Hr-FA)が検出されたことから(前掲書:196・197頁)、この谷は2号墓が形成された後の堆積物が堆積していることが推定された。

(2007年3月受理)

引用・参考文献

- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 第四紀学会, 3-20.
- 町田 洋・新井房夫(2003) 新編火山灰アトラスー日本列島とその周辺. 336, 財団法人東京大学出版会.
- Ramsey, C.B.(1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Ramsey, C.B.(2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Rennele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.

2 2号墓周溝覆土内出土炭化種実の同定

佐々木由香・米田恭子(パレオ・ラボ)

1 はじめに

本庄市北堀新田前遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓、前方後方墳の調査がなされ、そのうちの2号墓の周溝内溝底付近の下層には、厚さ最大80cmの黒色土壌が堆積していた。

ここでは、2号墓の周溝から採取された土壌を水洗洗浄し、得られた炭化種実同定を行なって、利用植物や周辺の植生について検討した。

2 試料と方法

試料は2号墓の周溝中の覆土である1・2・8層である。試料は、周溝の最も深い部分から柱状に連続して取り上げられた(本書：第55図F-F'断面のほぼ中央)。8層は周溝の最下層にあたる。土壌は重量を計量後、0.25mm目の茶漚を用いてフローテーションを行なった。その後0.5mmと0.25mm目の篩を用いて水洗選別を行なった。回収された炭化物は乾燥し、種実および炭化材を抽出した。種実遺体と炭化材は本庄市教育委員会が保管している。

3 結果

1層：炭化種実は得られなかった。

2層：ブドウ科炭化種子1、破片1(以下破片は括弧で示す)点、サナエタデ-オオイヌタデ炭化果実1点、ホタルイ-カンガレイ炭化果実1点、不明A炭化種実1点、不明B炭化種実1点、不明C炭化種実1点、虫えい28点が得られた。

8層：ブドウ属炭化種子1点、ブドウ科炭化種子(1)点、不明D炭化種実(2)点、虫えい23点が得られた。

以下に同定された種実を記載し、また写真を示して同定の根拠とする(図版103)。

(1)ブドウ属 *Vitis* ブドウ科 炭化種子

側面観は卵形、上面観は楕円形。背面には匙状の脰があり、腹面に縦方向の深い孔が2つある。種皮は薄く硬い。背面のへその形態でブドウ属とノブドウは区別できるが、背面が遺存していな

いものはブドウ科とした。ブドウ科としたものは全体の形態から、ノブドウよりもブドウ属に近いと思われる。

- (2) ホタルイ-カンガレイ *Schoenoplectus hotarui* (Ohwi) Holub-S. *triangulatus* (Roxb.) Sojak
炭化果実

上面観は両凸レンズ形、側面観は短倒卵形。頂部が尖り、基部は狭まって着点がある。

- (3) サナエタデ-オオイスタデ *Persicaria lapathifolia* Gray var. *incana* (K. Koch) H. Hara -
P. nodsa (Pers.) Opiz 炭化果実

上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は楕円形で先端がやや尖る。

- (4) 不明A unknown A 炭化種実

上面観はやや角張った楕円形、断面観は扁平。長さ2.5×幅2.2×厚さ1.2mm。表面は摩擦しており、遺存が悪い。片面端部の中央にへそと思われる楕円の小孔があり、やや突出する。

- (5) 不明B unknown B 炭化種実

上面観はいびつな楕円形、断面観は円形。長さ3.0×幅2.1×厚さ1.7mmであるが、一部破損している可能性が高い。表面は摩擦しており、表面に特徴的な模様などは観察できなかった。

- (6) 不明C unknown C 炭化種実

上面観・断面観ともにいびつな球形。直径1.8mm程度。中央には浅く細い縦溝があり、片端は胚が抜けたように欠けているが、本来の形状かは不明である。

- (7) 不明D unknown D 炭化種実

大きい破片で一辺3mm程度の果実片または種子片。断面は0.5mm程度。表面に短い筋状の文様が入るが、表面が摩擦しておりはっきりしない。比較的大きな堅果などの破片と思われるが、遺存状態が悪くはっきりしない。

- (8) 虫えい

虫こぶともいわれ、虫が卵を産み付けるために植物体の一部が奇形になったもの。大きさ・形態も多様である。表面観は最大幅1.3-3.3mm、高さ0.8-3.2mmの円形ないし四角形で、中央が窪むものがある。断面観は円形ないし楕円形。なお、虫えいのみ破片でも1点と数えた。

4. 考察

周溝から出土した種実のうち、食用となるのはヤマブドウなどが含まれるブドウ属である。このうち、8層から出土したブドウ属種子で放射性炭素年代測定が行なわれ、5世紀初頭から6世紀前半の年代範囲が得られている。

第137表 北掘新田前遺跡出土炭化種実一覧表 数字は個数、()内は半分ないし破片数を示す

分類群名・部位\出土位置・洗浄量		2号墓		
		周溝		
		1層	2層	8層
		1573g	5990g	5417g
ブドウ属	炭化種子			1
ブドウ科	炭化種子		1 (1)	(1)
サナエタデ-オオイスタデ	炭化果実		1	
ホタルイ-カンガレイ	炭化果実		1	
不明A	炭化果実/種子		1	
不明B	炭化果実/種子		1	
不明C	炭化果実/種子		1	
不明D	炭化果実/種子			(2)
虫えい			28	23

る(詳細は年代測定の項参照)。その他のホタルイ-カンガレイ、サナエタデ-オオイヌタデは周溝周辺に生育していたことが想定される。ホタルイ-カンガレイは水生植物であることから、元々周溝に生育した植物とすると、周溝内に水が滞水する環境であったことが想定される。これらは炭化して出土したことから、偶発の可能性もあるが、何らかの火を受けて埋没したことが考えられる。

(2007年3月受理)

第七章 まとめ

以上で北堀新田前遺跡A2・A3地点、北堀新田遺跡A2・B地点、久下東遺跡G3地点の発掘調査についての事実報告を終えるが、3遺跡5地点がひとつの大規模な集落跡の東側の一角をなすことを改めて強調しておきたい。もとよりこの集落跡全体の時間的な推移、様々な遺構が織りなす各時期ごとの様相を見極めうる段階にはないが、地点ごとの違いの一端は、今回の報告においてもうかがうことができるように思う。ここでは、とくに第III章、北堀新田前遺跡の章で報告した古墳時代前期の1～3号墓について簡単な覚書を記すことにしたい。

児玉地域に関する古墳時代前期の土器編年については、すでに多くの成果があり(坂本 1984)(恋河内 1990・1999)(福田 1997)(大谷・福田 2011)、それらの諸成果を参考に、まず1～3号墓出土土器の様相、時間的位置付けについて考えてみたい。なお、1号墓については、壺口縁部片が1点出土しているのみであり(本書:第51図3)、以下検討する材料は、2・3号墓出土土器である。

2号墓からは、小型のS字甕2個体、大小の壺7個体、高坏2個体、器台1個体、二重口縁壺の口縁部片、文様片などが出土している(第58・59図)。大半の土器は、同墓の南東溝のかなり狭い範囲からまとまって出土した(第57図)。出土状況などから見て、方台部に配された土器が、周溝内に転落したものと考えてよいであろう。土器が集中する層準から溝底にかけては、黒みの強い黒褐色土と多量のローム粒、ロームブロックが不規則に混合する厚い層が堆積しており(第54図:C-C'断面、図版15・16)、この不自然な混合土が墳丘の封土の一部であるとすれば、土器が周溝に転落するに先立って墳丘が削られるようなことがあった可能性を示唆する。この混合土は、1号墓の北東溝、北西溝などでも確認されている(第48～50図:C-C'、D-D'、G-G'、H-H'断面、図版13)。

2号墓出土土器のうち、まず2個体の小型のS字甕(第58図1・2)についてであるが、1は台付甕、2は胴部下半以下を欠き、破片下端が肥厚し多少問題が残るが、同大、同種の調整手法から見て、1と同じ台付甕と見てよいであろう。この種の土器は、少なからず類例があるが、平底の例も目立つようである。小型の平底のS字甕あるいは鉢は、新田前遺跡に隣接する久下前遺跡A1地点の河川跡からも複数例出土している(恋河内・的野 2010:第120図)。第58図1・2の甕は、煮沸形態としての本来の機能を失った小型土器であり、墳墓に供献されるべく2個一対で作られた土器と考えられる。

S字甕の変遷については、その一中心地である群馬県域ですでに大筋では一致した見解が得られており(田口 1981・2000)(深澤 1988・2004)、それらを参照するなら、1・2の小型のS字甕は、くびれ部内面にハケが施されず、肩部外面にヨコハケを残す段階に位置づけられることになる。この段階を、暫定的に古墳時代前期中葉とするなら(恋河内 1999)、周辺では、川越田遺跡25号住居跡出土土器(富田・赤熊 1985)、社具路遺跡4号土坑出土土器(長谷川・山川 1987)、浅見境北遺跡31号住居跡出土土器(恋河内 1997)などの諸例を、ほぼ同じ段階の一括資料として挙げることができる。また、前記した久下前遺跡A1地点およびB1地点の河川跡出土土器(恋河内・的野 2010:第115～120図、第164～166図)の一部は、この段階に含まれる。

いずれの資料も、肩部外面にヨコハケを残すS字甕とヨコハケのないS字甕が伴存する一方、ヨコハケの手法には種々あるようである。また各遺構出土土器を比較するなら、共存する甕以外の器種、

壺、高杯、器台にも時期差が見られることから、この段階自体かなりの時間幅を含むと推定できる。

3号墓では、2号墓で出土したS字甕よりやや大きめの小型のS字甕が出土しており(第63図1)、この問題を考える手掛りを与えてくれる。2号墓のS字甕の場合、外面のハケが全体に明瞭であるという特徴が見られる。ヨコハケも条線が深く鮮明である。また器形的にも肩部が張り、胴部下半がすばまり、古い器形の面影をとどめている。3号墓のS字甕では、ハケ自体浅く、不明瞭である。肩部のヨコハケも浅く切れ切れで、肩部上半のハケは痕跡的である。脚部外面のハケも粗略である。器形も、2号墓の甕のようなめりはりを失い、全体に丸くなっている。小型のS字甕の比較は、3号墓が2号墓に後出することを示しており、3号墓の小型のS字甕は、手法的な粗略化から見て、肩部外面にヨコハケを施す手法の見られるS字甕の最終段階に位置付けられるようである。

2号墓出土土器にもどるなら、壺にも顕著な特徴がみとめられる。同大の2種の壺(第58図3・4、6・7)は、墳墓に供献される土器にまま見られる趣向である。同大ではあるものの、細部の特徴を異にしており、これもまたこの種の同大の土器が複数出土した場合によく見られる特色の一つである。4個体の壺いずれも明慮なミガキがなされていない点は、時期的な特徴になる。

2号墓からは、二重口縁の装飾壺も出土している(第58図8・9、第59図13~17)。破片資料の中には同一個体片が含まれるため、確認できたのは6個体分であるが、完形、準完形の土器が集中して出土した南東溝からだけでなく、覆土がごくわずかな範囲しか残存していない南西溝からも破片が出土していることが注意を引く(第59図14・17)。本来さらに多くの装飾壺が墳丘に配されていたのであろう。

文様は、肩部上位にのみに限られるらしく、破片を含め文様の判読できるものでは、上下の櫛描直線文間を横流れの櫛描波状文で埋める単純な構成である。著しく変容しているが、庄内式の装飾壺の文様に連なる文様の一つであろうか。

口縁部が判る例は少ないが、口縁部形態には、2種あるようである。一つは第58図8の壺の口縁部形態である。筒状の頸部から口縁部が大きく開き、口縁部外面の下端に稜を有する。いま一つは、第58図9の大型壺の口縁部形態である。筒状の頸部から屈曲し、平坦面をなし、さらに屈曲して口縁部が開くごく単純な形態であるが、口縁部が外反せず直線的に開く点が際立った特徴になる。第58図5、第59図13の壺も同種の口縁部形態になる可能性がある。

2つ目に取り上げた口縁部形態に関しては、口縁部が外反する例は多々見られるが、直線的なものに限れば、類例は極めて限られる。著名な例として、鷺山古墳出土の壺(増田・坂本他 1986: 第5図1)を挙げることができる。鷺山古墳の壺の場合、口縁部がさらに伸長しており、口縁部に円孔を有し、肩部に加飾がなされないなどの違いが指摘できる。他方口縁部形態の類似だけでなく、口縁部上半の内外をヨコナデし、ハケを磨消する、あるいは下半にのみハケを装飾的に残す手法など類似点もみとめられる。この手の手法は、東遠江から駿河の弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺に見られる手法である。

鷺山古墳の壺の口縁部の円孔は2個一対であり、考えられるのは、器受部に円孔あるいは透かしを有する装飾器台などのそれが壺の口縁部に取り入れられた可能性であろう。口縁部に円孔を有する壺は、口縁部形態など種々異なるが、深谷市東川端遺跡1号方形周溝墓(瀧瀬・中村 1990)、熊谷市塩古墳群第I支群1号墳(新井 2011)などでも出土している。後者の壺の円孔も2個一対である。

2号墓の壺(第58図9)と鷺山古墳の壺の最も大きな違いは、やはり前者の肩部には文様があり、後者にはないという点である。パレス壺においても、櫛描文などの肩部～胴部の装飾が失われ無文化する段階が知られており(田口 1987)(長滝・中沢 2005)、この過程に併行して他系列の壺も一律に無文化したかどうかは議論の余地があるにせよ、鷺山古墳の壺は、壺から文様が失われた段階にあるとする推定はさほど無理はないであろう。口縁部の伸長や円孔も、無文化とともにより儀器化が進んだ過程を考えれば大きな齟齬はない。頸部長の伸長や縮減など他の特徴に顕著な変化が見られないことからすれば、2号墓の壺(同9)が鷺山古墳の壺に先行するとしても、そこに大きな時間的懸隔を想定することはできない。小型のS字甕の推移についての先の推定を踏まえ、2号墓の土器から3号墓の土器への推移が妥当であるとするなら、2号墓の壺(同9)に後出する鷺山古墳の壺は、3号墓の土器と併行する可能性が高いことになる。少なくとも鷺山古墳の壺には、古墳時代前期中葉、S字甕の「くびれ部内面にハケが施されず、肩部外面にヨコハケを残す段階」の中におさまる位置を与えることができる。

2号墓からは、他に高坏(第58図10・11)や器台(同12)が出土している。10の高坏は全面に密なミガキが施されているが、他の高坏(11)、器台(12)には、ミガキは顕著ではなく、調整部位に限られる。2号墓の段階が、高坏、器台などの「精製の」な器種が全面的にミガキで仕上げられる段階ではないことを示しているであろう。

3号墓出土の小型のS字甕については先にふれたが、3号墓の周溝からは、他に壺が3個体、鉢が1個体、器台が2個体出土している(第63図)。

壺に関しては、破片を含めて文様が施文された例は一切見られない。また、口縁部を欠いた4の壺にその可能性が残るものの、二重口縁壺も1点も出土していない。調査範囲に限られるため断定することはできないが、3号墓の段階には、文様施文を特徴とする装飾壺が見られない可能性があると考えられる。この壺の無文化という傾向は、近傍の浅見山I遺跡で調査された古墳時代前期の11基の方形周溝墓(内1基は前方後方墳か)から出土した土器(松本・大熊他 2009)にも文様の施された装飾壺が見られないことも関連するはずである。浅見山I遺跡の方形周溝墓出土土器の多くは、2・3号墓出土土器より後出し、3号墓の段階以降、壺の無文化の傾向が定着したと見ることができる。

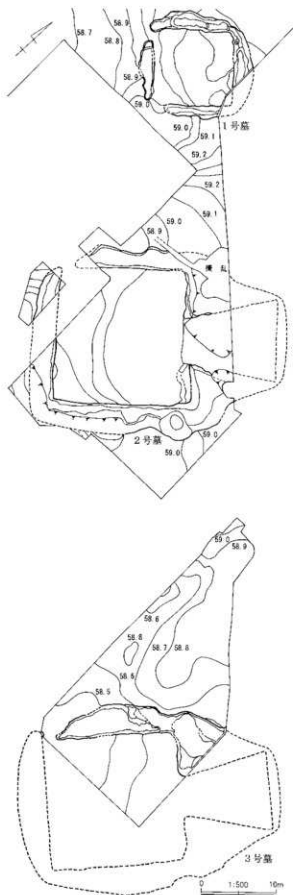
3号墓から出土した2個体の器台(第63図6・7)はほぼ同大であり、器受部の作りもよく似ている。2号墓の2対の壺と同様に供献土器として対をなし作られた土器であろう。器受部外面の上端付近への強いヨコナデにより浅いくぼみをなす器台が時に見られるが、3号墓の器台の場合、凹線状のくぼみが深く、むしろ器体そのものが屈曲しており、S字甕の口縁部に類似する。類例として群馬県前橋市荒砥北原遺跡1号方形周溝墓の器台(石坂・小島 1986:第39図1・2)を挙げておきたい。3号墓の器台に器受部の形態がより近いのは2(同上:第39図2)の器台であるが、同器台の脚部は直線的に開き、脚端が内彎する特異な形態で、3号墓の器台の方が明らかに後出的である。

荒砥北原遺跡1号方形周溝墓で器台に相伴する土器としては、2・3号墓同様に小型のS字甕あるいは鉢の他に、大型壺、8個体の同大の中型壺、系統不明の鉢、高坏などがあるが、小型のS字甕のハケと器形、中型壺の口縁部外面下端の押捺、刻み目、高坏の細かなミガキなどいずれも3号墓出土土器のみならず、2号墓出土土器にも先行する特徴を備えている。器台の一つ(同上:第39図3)が口縁部に円孔を有する装飾器台であることにも留意したい。

大型壺(同上:第43図16)は、胴部中位以上が赤彩された無文の壺であり、口縁部に棒状浮文、肩部に扁平な円形浮文が付されている。赤彩や浮文の特徴から見て、駿河辺りのいわゆる「大廓の壺」とは別系列の壺であろう。口縁部の上端が外方に折り返され、棒状浮文が付されるなど異なる特徴も見られるが、複合口縁に由来する口縁部の形態そのものは、頸部から屈曲し面を成し、さらに口縁部が直線的に立ち上がる点など、2号墓の大型壺(本書:第58図9)の口縁部形態に類似する。この種の壺が2号墓の大型壺が生成する媒体となり、あるいは母体となった可能性を考えたい。

形態的にはやや異なるが、後張遺跡の河道跡や河道跡内の土坑下層からは、大廓式の一列と考えられる壺(恋河内 2005:第102図8、第116図19)が出土しており、久下前遺跡A1地点の河川跡からは、大廓式の特徴を備えた壺の破片(恋河内・的野 2010:第115図6)が出土している。また、塩古墳群第1支群7号墳からは同系列の変容した壺(新井 2011:第14図18・19)が出土しており、2号墓の大型壺と荒砥北原遺跡の大型壺とを結び付けることが臆説とは言いつても示す傍証が増えつつある。あるいは、荒砥北原遺跡1号方形周溝墓の特異な形態の鉢あるいは小型甕(石坂・小島 1986:第39図6)の類品が、大きさの大小はあるが、塩古墳群第1支群2号墳、美里町南志渡川遺跡4号墓から出土していること(新井 2011:第13図12)(長滝・中沢 2005:第41図7)など、前方後方墳などの墳墓に関わる葬送儀礼を通じた、地域を越えた何らかの交流の網の目があったことを示す事例も見られる。2号墓の大型壺も、そうした文物、情報の交換、交流の網の目の中から生み出されたのであろう。

最後に1～3号墓そのものに立ち返って、2、3記しておきたい。なお、第274図に1～3号



第274図 北堀新田前遺跡1～3号墓推定復元図

墓の推定復元図を掲載したが、2・3号墓に関しては、地域、時期、規模ともに近い前方後方墳である南志波川遺跡4号墓(長滝・中沢 2005)を参考に推定復元した。

1～3号墓の立地する微高地は、南西側、西側に埋没谷を控え、南西側、西側に墓域が広がる可能性はほとんどない。1・2号墓の北側、南側は、北堀新田前遺跡の調査前に試掘調査を実施しており、この周辺に他の墳墓は一切検出されていない。他の墳墓がありうるとすれば、2号墓の東側から3号墓を取り巻く一帯であるが、他に墳墓があり、墓域が広がったとしても、1～3号墓が形成する空間が他に一切墳墓のない切り取られたような区間であることに変わりはない。1～3号墓は、あらかじめ墓域として選定された空間に順次造られた墳墓なのであろう。

ほぼ同大の前方後方墳と推定される2・3号墓が、2号墓→3号墓の順に造られたことは、先に記した出土土器の比較から明らかである。1号墓には確実な共伴土器が見られず、直接時期を比定する材料を欠くが、北端の1号墓が造られ、2号墓、3号墓と北から南へ間隔を置いて前方後方墳が造られ続けたと見るのが、ごく素直な見方であろう。この見方をとるなら、方台部長10m余の方形周溝墓である1号墓がまず造られ、墳形が異なり、規模が格段に大きい2・3号墓が続いて造られるという大きな飛躍を含む過程を復元することになる。1号墓には全く供献土器が見られないことも、このある種の飛躍の一端を示していると考えられる。

一方、3基の墳墓に共通点も見られる。一つは、陸橋部である。1号墓は、西隅、南隅には確実に陸橋部を有し、3号墓も西隅に陸橋部を有することは間違いない。2号墓の場合、西隅周辺は残存状態が悪く多少問題が残るが、溝底が西隅に向かって浅くなっており、西隅が陸橋部をなすと見てよいであろう。陸橋部は方台部や後方部での埋葬とそれに伴う儀礼を行なう際の通路と思われ、1～3号墓いずれも西隅に陸橋部を有するのは、1～3号墓の形態的特徴の類似以上の儀礼行為に直結する結びつきを示している。そうした形態的特徴より何よりも、3基が同じ墓域にある距離を置いて造営されていること自体が示す、結びつきの強さは言うまでもない。

先に記した北堀新田前遺跡2・3号墓出土土器の位置付けについての検討は、2・3号墓、とりわけ3号墓が鷺山古墳(増田・坂本 前掲)と同時期である可能性があることを示した。同じ女堀川流域にある北堀新田前遺跡と鷺山古墳は、直線距離にして約2.5km、方墳長約60mとされる鷺山古墳と推定墳丘長が30mにも満たない北堀新田前遺跡3号墓がほぼ同時期に造られたことが意味することについては、今後あらためて究明しなければならない。

しかしながら、北堀新田前遺跡の周辺、数100mの圏内には、5基の方形周溝墓が確認されている宍勝寺北裏遺跡があり、また11基(早稲田大学調査分を含む)の方形周溝墓、前方後方墳と推定される1基の墳墓からなる浅見山1遺跡、古墳時代前期末葉と目される前方後円墳、方墳である前山1・2号墳および数基の時期・墳形不明古墳からなる前山古墳群、中期とされる墳丘径60m前後の造り出し付の円墳である公郷塚古墳といった具合に、古墳時代前期から中期にかけての墳墓、あるいは墳墓群が集中しており、まずは、これらの遺跡、遺構を比較、検討し、その関係を整理することが緊要の課題であろう。また、区画事業地内には、古墳時代前期の集落跡もあるのであるから、墳墓と集落の関係についても分析、検討を進める必要がある。今後に残された課題は、山積しているように思われる。

末筆ながら、発掘調査、報告書の作成にあたりご協力、ご教示を賜った様々な方々から心から御礼申し上げます次第である。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤塚次郎 1989 「前方後方墳覚書89」『月刊考古学ジャーナル』307号、ニューサイエンス社
- 1992 「東海系のトレースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域—」『古代文化』第44巻第6号、古代学協会
- 他 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集、愛知県埋蔵文化財センター
- 1994 『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集、愛知県埋蔵文化財センター
- 1997 『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第74集、愛知県埋蔵文化財センター
- 浅野一郎 1999 『大久保山V』早稲田大学本庄校地文化財調査報告5、早稲田大学
- 浅間 陽 2014 『山王山遺跡—A1・A2地点の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告第40集、本庄市教育委員会
- 新井 端 2011 『埼玉県指定史跡「塩古墳群」の調査』熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集、熊谷市教育委員会
- 石坂 茂・小島敦子 1986 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団編）、群馬県考古資料普及会
- 石坂俊郎 2006 「南関東の様相」『第11回東北・関東前方後円墳研究会 大会 《シンポジウム》前方後方墳とその周辺 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 2008 「中耕・広面墳墓群と供献土器(1)」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第2号、埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 謙 1998 『地神ノ塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩田明広 1998 『今井桑里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢重昭 1994 「「毛野」形成期の地域相—前方後方墳及び周溝墓の分布を中心に—」『駿台史学』第91号、駿台史学会
- 1995 「毛野の周溝墓と前方後方形周溝墓」『駿台史学』第92号、駿台史学会
- 2000 「前方後方墳と東国の古墳発生」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版
- 梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹他 1981 『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会
- 大熊季広 2011 『西富田新田遺跡Ⅱ—B地点の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告書第26集、本庄市教育委員会
- 2013 『左口遺跡Ⅱ—B地点の調査—・本庄飯玉遺跡・北堀新田遺跡—D地点の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告書第34集、本庄市教育委員会
- 大村 直 1995 「東国における古墳の出現」『展望考古学 考古学研究会40周年記念論集』考古学研究会
- 太田博之 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 2007 『西五十子古墳群』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集、本庄市教育委員会
- 2008 『雌彦遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第12集、本庄市教育委員会
- 2009 『雌彦Ⅱ・笠ヶ谷戸・小島本伝』本庄市埋蔵文化財調査報告書第15集、本庄市教育委員会
- ・佐藤好司 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書V—公卿塚古墳』本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集、本庄市教育委員会
- ・松本 完 2005 『四方田(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査)・久下東(Ⅱ次調査)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第31集、本庄市教育委員会
- ・松本 完他 2003 『有勝寺裏墳輪窓跡・有勝寺北裏遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第26集、本庄市教育委員会

- ・————・的野善行 2006 『旭・小島古墳群—林地区Ⅰ』本市市理藏文化財調査報告書第3集、本市市教育委員会
- 大谷 徹 2007 『夏目／夏目西／弥彦次』埼玉県埋藏文化財調査事業団報告書第346集、埼玉県埋藏文化財調査事業団
- ・福田 聖 2011 『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋藏文化財調査事業団報告書第346集、埼玉県埋藏文化財調査事業団
- 小沢 洋 1995 「南関東の前方後円墳」『前方後方墳を考える』第3回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 2000 「房総の出現期古墳—神門古墳群と高部古墳群—」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版
- 小澤正人 1996 『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4、早稲田大学
- 書上元博 1994 『稲荷台遺跡』埼玉県埋藏文化財調査事業団報告書第139集、埼玉県埋藏文化財調査事業団
- 柿沼幹夫 1994 「吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『特別展 検証! 関東の弥生文化 一粒の米が変えたくらし』埼玉県立博物館
- 1996 『北関東① 埼玉県』『関東の方形周溝墓』同成社
- 2014 「荒川中下流域における古墳時代前期前半の付帯施設を有する墳墓」『埼玉考古』第49号、埼玉考古学会
- 神川町教育委員会編 1989 『神川町誌』神川町
- 上里町史編集専門委員会編 1992 『上里町史 資料編』上里町
- 川村浩司 1993 「小型短頸鉢形土器考」『博古研究』第5号、博古研究会
- 鶴持和夫・村田章人他 1995 『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋藏文化財調査事業団報告書第148集、埼玉県埋藏文化財調査事業団
- 志河内昭彦 1990 『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集、児玉町教育委員会
- 1991 『真鏡寺後遺跡Ⅲ—C・F・D地点の調査—』児玉町文化財調査報告書第14集、児玉町教育委員会
- 1993 『川越田遺跡Ⅱ (B・C地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第5集、児玉町遺跡調査会
- 1995 『飯玉東Ⅱ・高縄田・桶越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集、児玉町教育委員会
- 1996 『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集、児玉町教育委員会
- 1997 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集、児玉町教育委員会
- 1999 『日延Ⅱ・児玉条埋遺跡』児玉町文化財調査報告書第31集、児玉町教育委員会
- 2005 『後張遺跡Ⅲ (C地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第20集、児玉町遺跡調査会
- 2012 『久下前遺跡Ⅳ (D1・E1地点)・久下東遺跡Ⅴ (F1地点)』本市市理藏文化財調査報告書第28集、本市市教育委員会
- ・松本 光 2008 『七色塚遺跡Ⅱ—B1地点— 北塚新田前遺跡—A1地点—』本市市理藏文化財調査報告書第7集、本市市教育委員会
- ・的野善行 2010 『北塚久下塚北遺跡Ⅱ—B地点— 久下東遺跡Ⅳ—C1・D1・E1地点— 久下前遺跡Ⅱ—A1・B1地点—』本市市理藏文化財調査報告書第19集、本市市教育委員会
- ・———— 2014 『七色塚遺跡Ⅲ (B2地点) 北塚久下塚北遺跡Ⅲ (C・D地点) 久下東遺跡Ⅵ (A2・B2・B3・F2地点) 有勝寺北裏遺跡Ⅳ (C地点)』本市市理藏文化財調査報告書第37集、本市市教育委員会

- 小久保徹・柿沼幹夫他 1978 『東谷・前山・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 小林健二 1998 「山梨県出土の東海系土器一波及と定着と変容」『山梨県考古学協会誌』山梨県考古学協会
- 2000 「甲斐のS字襷を考える」『S字襷を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 駒見佳容子 1985 『御送祭紀の一検討—関東地方を中心として—』『土曜考古』第10号、土曜考古学会
- 尾 彭生・佐々木幹雄・荒川正夫他 1980 『大久保山I』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1、早稲田大学
- ・細田 勝 2001 『大久保山IX』早稲田大学本庄校地文化財調査報告9、早稲田大学
- 埼玉県史編さん室編 1982 『新編埼玉県史 資料編2(原始・古代)』埼玉県
- 坂本和俊 1984 『III 埼玉県』『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 1990 「東京・埼玉・神奈川」『古墳時代の研究 第11巻 地域の古墳II 東日本』雄山閣
- 佐々木藤雄 2010 『北堀新田遺跡』本市市埋蔵文化財調査報告書第22集、本市市教育委員会
- 笹森紀己子 1989 「小型器台形土器に関する覚書」『古代』第87号、早稲田大学考古学会
- 佐藤好司・増田一裕 1989 『諏訪遺跡(B地点)・久城前(B地点)発掘調査報告書』本市市埋蔵文化財調査報告第15集、本市市教育委員会
- 佐藤忠雄・駒宮史朗・島羽政之 2003 『石蒔B遺跡』岡部町史料調査報告書第1集、岡部町教育委員会
- 塩谷 修 1992 「壺形埴輪の性格」『博古研究』第2号、博古研究会
- 菅谷浩之 1984 『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史料調査報告古代第1集、児玉町教育委員会
- 他 1975 「美里村長坂聖天塚古墳の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 1978 『日の森遺跡発掘調査概報』埼玉県児玉郡美里町教育委員会
- 杉崎茂樹 1991 「古墳時代の北武蔵における有力首長層の動態」『古代探層III』早稲田大学出版部
- 1993 『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木敏則 2002 『西遠江の古式土師器—堤町様式—』『考古学論文集 東海之路』『東海之路』刊行会
- 鈴木徳雄・西口正純・栗島義明 1981 『深町・城の内遺跡』深町遺跡調査会
- 高崎市史編さん委員会編 1999 『新編 高崎市史 資料編1 原始古代1』高崎市
- 高橋一夫 1989 「前方後方墳出土土器の研究」『研究紀要』6号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之・中村倉司 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 他 1997 『今井川越田遺跡III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田口一郎 1987 「パレス・スタイル壺の末裔たち」『第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」研究報告編』愛知考古学談話会
- 1995 「北関東の前方後方墳」『前方後方墳を考える』第3回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 2000 「北関東西部におけるS字口縁壺の波及と定着」『S字襷を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 他 1981 『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第22集、高崎市教育委員会
- 田中新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号、早稲田大学考古学会
- 1984 「出現期古墳の理解と展望—神門五号墳の調査と関連して—」『古代』第77号、早稲田大学考古学会
- 2002 「有段口縁壺の成立と展開—特化への道程・類別と二地域分析—」『土筆』第6号、土筆舎
- 田中 裕 2005 「壺形埴輪と東関東の前期古墳」『千葉県文化財センター研究紀要』24、千葉県文化財センター
- 角田芳昭 2001 『波志江中野面遺跡(1)』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第281集、群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 徳山寿樹 1995 『堀向・藤塚A・柿島・内出B・C・児玉条里』児玉町文化財調査報告書第18集、児玉町教育委員会
- 利根川章彦 1997 「前方後方形墓・方形墓群の構成—いわゆる「飛躍しえない被葬者層」の行方—」『埼玉県立博物館紀要』22、埼玉県立博物館
- 1998 『西富田・四方田条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1994 『稲荷前遺跡(B・C)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢良一他 2000 『上野遺跡(A・B地点)』美里町遺跡発掘調査報告書第11集、美里町教育委員会
- 中嶋郁夫 1997 「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』第13号、静岡県
- 長滝歳康・中沢良一 2005 『南志渡川遺跡 志渡川古墳・志渡川遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第16集、美里町教育委員会
- 新山保和 2008 「群馬県出土の二重口縁壺」『研究紀要』26、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川 勇・石橋柱一他 1985 『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集2分冊、本庄市教育委員会
- ・山川守男他 1987 『社貝路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集3分冊、本庄市教育委員会
- 原田 幹 2000 「S字甕の波及と定着をめぐる問題」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 伴瀬宗一 1996 『今井川越田遺跡III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信 1987 『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 比田井克仁 1995 「二重口縁壺の東国波及」『古代』第100号、早稲田大学考古学会
- 広井 造 1995 「越後における前方後方形墳墓の出現」『新潟考古』第6号、新潟県考古学会
- 深澤敦仁 1998 「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』XVI、庄内式土器研究会
- 2004 「北関東」『第9回東北・関東前方後円墳研究会 大会 《シンポジウム》東日本における古墳の出現について 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 福田 聖 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2007 「方形周溝墓の土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』第104号、駿台史学会
- 細田 勝・富田和夫・利根川章彦 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』本庄市
- 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市
- 増田逸郎・柿沼幹夫・小久保 徹他 1979 『下田・諏訪』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
- ・小久保 徹他 1977 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集、埼玉県教育委員会
- ・駒宮史朗他 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集、埼玉県教育委員会

- ・坂本和俊他 1986 『埼玉古式古墳調査報告書』埼玉県民部県史編さん室
- ・立石盛詞他 1982・1983 『後張 本文編・図版編Ⅰ・Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田一裕 1985 『本庄遺跡群発掘調査報告書—久下東遺跡・遺構編—』本庄市埋蔵文化財調査報告第7集、本庄市教育委員会
- 1989 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
- 1990 『諏訪・久城前・久城往來北遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第17集、本庄市教育委員会
- 1990 『山根遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第18集、本庄市教育委員会
- ・太田博之・松本 完 2001 『本庄市域における古式古墳の調査成果と課題』群馬古墳文化研究会・南毛古墳文化研究会第5回合同史料検討会資料、南毛古墳文化研究会
- 松本 完 2004 『九反田(Ⅲ次調査)・観音塚(Ⅲ次調査)』本庄市埋蔵文化財調査報告第28集、本庄市教育委員会
- 2013 『久下前V(F1地点)・久下東遺跡VI(G1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告第32集、本庄市教育委員会
- ・大熊季広 2009 『浅見山I遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告第13集、本庄市教育委員会
- ・町田奈緒子 2002 a 『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第25集、本庄市教育委員会
- ・—— 2002 b 『大久保山遺跡浅見山I地区(第2次)・北堀前山古墳群(第2・3次)発掘調査報告書』本庄市遺跡調査会報告第6集、本庄市遺跡調査会
- ・的野善行 2007 『発掘調査情報1 本庄市北堀新田前遺跡の調査』『情報』28、埼玉考古学会
- ・—— 2010 『久下前遺跡(C1地点)・北堀新田遺跡(A1地点)・有勝寺北裏遺跡(A1・B1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第23集、本庄市教育委員会
- 美里町史編纂委員会 1986 『美里町史 通史編』美里町
- 村田健二 1990 『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山川守男・福田 聖・石坂俊郎 1998 『北武蔵における土器群の画期と交流』『庄内式土器研究』XⅧ、庄内式土器研究会
- 山岸良二編 1996 『関東の方形周溝墓』同成社
- 山本 禎・福田 聖 2009 『安養寺古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第362集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 若狭 徹 1990 『群馬県における弥生土器の崩壊過程』『群馬考古学手帳』Vol. 1、群馬土器研究会
- 2000 『S字甕波及期の様式変革と集団動態』『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 渡井英誉 1998 『大塚式土器小考—大塚式土器の画期とその展開—』『庄内式土器研究』XⅥ、庄内式土器研究会
- 1999 『中見代式土器小考—大塚式土器から中見代式土器へ—』『東国土器研究』第5号、東国土器研究会

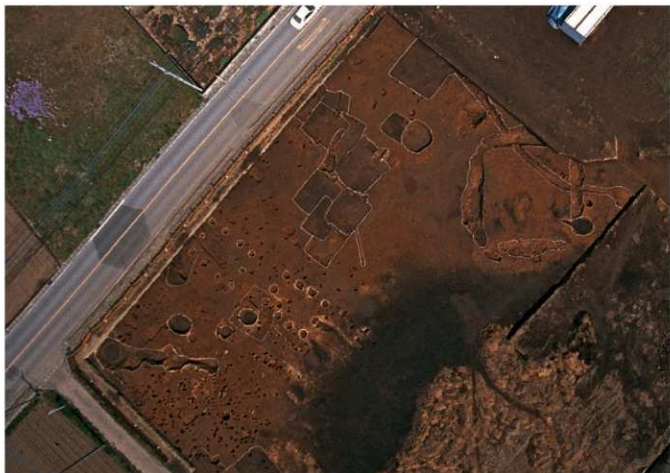
图 版



北堀新田前遺跡と周辺の遺跡(南西上空より、中央を走る道路がほぼ東西方向)



北堀新田前遺跡全景(上空より。上が北西)



北堀新田前遺跡A2地点北西部全景(上空より。上が北東)



北堀新田前遺跡A2地点北西部住居跡群と掘立柱建物跡(上空より。上が北)



2号住居跡(西より)



2号住居跡カマド(西より)



2号住居跡カマド土層断面(南より)



6号住居跡(東より)



7号住居跡(西より)



7号住居跡カマド跡(南より)



8号住居跡(南より)



8号住居跡掘り方(西より)



北堀新田前遺跡A2地点北西部東半の住居跡群(上空より。上が北)



9号住居跡(南西より)



10号住居跡(西より。中央上、左は12a・12b号住居跡)



11号住居跡(西より)



11号住居跡東西土層断面(南より)



11号住居跡カマド遺物出土状態(西より)



11号住居跡カマド(西より)



11号住居跡カマド(北より)



12a・12b号住居跡(西より)。下カマドが12a号住居跡、左は13号住居跡)



12 a 号住居跡カマド(東より)



12 b 号住居跡カマド(西より)



13号住居跡(西より)



14号住居跡(西より)



14号住居跡カマド(西より)



15号住居跡(西より)



15号住居跡カマド(西より)



15号住居跡・3号溝跡(南西より)



15号住居跡遺物出土状態(南より)



16号住居跡(西より)



16号住居跡カマド(西より)



17号住居跡(西より)



17号住居跡カマド(西より)



17号住居跡遺物出土状態(西より)



18号住居跡(西より)



18号住居跡土層断面(南西より)



18号住居跡遺物出土状態(南より)



19号住居跡(上は6号井戸跡、北より)



20号住居跡(西より)



20号住居跡遺物出土状態(西より)



21号住居跡(南東より)



1・2号掘立柱建物跡(上空より。上が北)



1号掘立柱建物跡(南より)



2号掘立柱建物跡(南より)



2号掘立柱建物跡P 6土層断面(西より)



2号掘立柱建物跡P 8土層断面(西より)



1～3号墓全景(上空より。上が北西、上から順に1・2・3号墓)



1号墓(上空より。上が南西)



1号墓西側陸橋(南より)



1号墓北西溝(北東より)



1号墓北側陸橋(北西より)



1号墓北東溝・北側陸橋(東より)



1号墓南東溝(北東より)



1号墓南西溝(南東より)



1号墓C-C' 北西溝土層断面(北東より)



1号墓F-F' 南西溝土層断面(南東より)



1号墓G-G' 北東溝土層断面(南東より)



1号墓H-H' 北溝土層断面(西より)



2号墓(上空より。上が南西)



2号墓南東溝～東隅(北東より)



2号墓北隅(北東より)



2号墓南側くびれ部(北東より)



2号墓北側くびれ部(北東より)



2号墓南西溝(南西より)



2号墓南東溝遺物出土状態(1)(西より)



2号墓南東溝遺物出土状態(2)(南東より)



2号墓南東溝遺物出土状態(3)(北西より)



2号墓南東溝遺物出土状態(4)(北東より)



2号墓南西溝遺物出土状態(西より)



2号墓C-C'南東溝土層断面(北東より)



2号墓F-F'南東溝土層断面(北より)



2号墓J-J'南西溝土層断面(東より)



3号墓(上空より。左下境界線の右下方向が北)



3号墓後方部前縁、北隅、北西溝(北東より)



3号墓南西溝先端(北より)



3号墓C-C' 南東溝土層断面(南西より)



3号墓B-B' 南東溝土層断面(北より)



3号墓北西溝遺物出土状態(1)(北東より)



3号墓北西溝遺物出土状態(2)(北より)



1号井戸跡・5～11号土坑・1号溝跡(南東より)



5・6号土坑(東より)



6～11号土坑(南東より)



1号井戸跡A-A'土層断面(南東より)



7・8号土坑D-D'土層断面(南東より)



9・10号土坑E-E'土層断面(南東より)



2号井戸跡(北より)



4号井戸跡(南より)



4号井戸跡土層断面(北より)



5号井戸跡(南西より)



6号井戸跡(北西より)



6号井戸跡土層断面(東より)



7号井戸跡(1)(南東より)



7号井戸跡(2)(西より)



1号土坑(北より)



2号土坑(東より)



3号土坑(南西より)



4b号土坑(東より)



4a号土坑(南より)



11号土坑(北東より)



11号土坑(東より)



12号土坑(北より)



14号土坑(南西より)



15号土坑(東より)



16号土坑(東より)



17号土坑(東より)



18号土坑土層断面(北東より)



18号土坑(東より)



19号土坑(東より)



20号土坑(南より)



21号土坑(東より)



25号土坑(西より)



26号土坑土層断面(南より)



27号土坑(西より)



28号土坑(南より)



29号土坑(東より)



30号土坑(西より)



30号土坑土層断面(西より)



32号土坑(東より)



33号土坑(東より)



35号土坑(西より)



36号土坑(東より)



37号土坑(北より)



38号土坑(北より)



38号土坑土層断面(南西より)



39号土坑(南より)



40号土坑(南東より)



43号土坑(南より)



45号土坑(南東より)



46号土坑(南東より)



2号溝跡(上空より)



4号溝跡(南東より)



4号溝跡(南より、交差する溝は、1号墓周溝)



5号溝跡(北より)



5号溝跡(東より)



6号溝跡(北東より)



7号住居跡出土遺物



8号住居跡出土遺物



11号住居跡出土遺物



12 a 号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物



12 b 号住居跡出土遺物



14号住居跡出土遺物



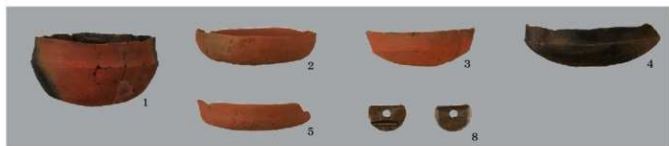
15号住居跡出土遺物



16号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物



19号住居跡出土遺物



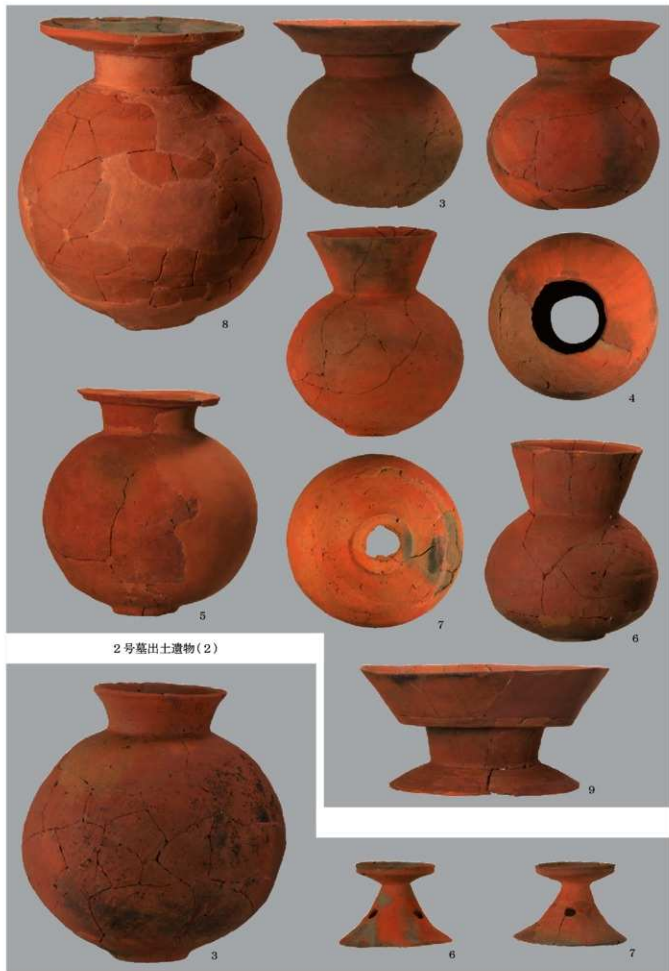
20号住居跡出土遺物



1号墓出土遺物



2号墓出土遺物(1)



2号墓出土遺物(2)

3号墓出土遺物(1)



2·4·5号井戸跡出土遺物



3号墓出土遺物(2)



1号井戸跡出土遺物



6号井戸跡出土遺物



1·2号土坑出土遺物



26·30号土坑出土遺物



1号溝跡出土遺物(1)



1号溝跡出土遺物(2)

5号溝跡出土遺物



遺構外出土遺物



北堀新田遺跡A2地点全景(東より)



北堀新田遺跡A2地点北半(東より)



北堀新田遺跡B地点全景(西より)



北堀新田遺跡B地点全景(北西より)



北堀新田遺跡B地点南半(南西より)



北堀新田遺跡B地点東半(南より)



4号住居跡(西より)



4号住居跡遺物出土状態(1)(西より)



4号住居跡遺物出土状態(2)(南西より)



4号住居跡貯蔵穴(西より)



5号住居跡(西より)



5号住居跡南壁溝掘削痕(西より)



5号住居跡西壁溝掘削痕(北より)



5号住居跡カマド(西より)



5号住居跡貯蔵穴(西より)



6号住居跡(南西より)



7号住居跡(西より)



8号住居跡(北より)



8号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(南より)



9号住居跡(西より)



9号住居跡カマド(西より)



9号住居跡南壁溝遺物出土状態(1)(北より)



9号住居跡南壁溝遺物出土状態(2)(北より)



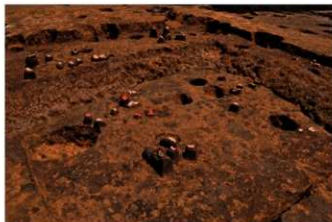
9号住居跡床下土坑(南より)



9号住居跡南西壁溝(北より)



10号住居跡(西より)



10号住居跡遺物出土状態(1)(南西より)



10号住居跡遺物出土状態(2)(南より)



11号住居跡(西より)



11号住居跡カマド(西より)



12号住居跡(南西より)



12号住居跡カマド(南西より)



12号住居跡貯蔵穴(南西より)



12号住居跡完掘状態(南西より)



12号住居跡床下土坑(南西より)



13号住居跡(西より)



13号住居跡カマド(西より)



13号住居跡カマド遺物出土状態(西より)



13号住居跡貯蔵穴(西より)



13号住居跡床下土坑(西より)



14号住居跡(南西より)



14号住居跡遺物出土状態(1)(南西より)



14号住居跡遺物出土状態(2)(南西より)



14号住居跡遺物出土状態(3)(北西より)



14号住居跡カマド(南西より)



15号住居跡(西より)



15号住居跡カマド1 (西より)



15号住居跡カマド2 (西より)



15号住居跡貯蔵穴 (西より)



16号住居跡 (北より)



17号住居跡 (北より)



17号住居跡カマド1(南より)



17号住居跡カマド2(北より)



17号住居跡貯蔵穴1(南より)



17号住居跡貯蔵穴2(北より)



18号住居跡(西より)



18号住居跡カマド(西より)



18号住居跡カマドB-B'土層断面(西より)



18号住居跡カマド遺物出土状態(西より)



19号住居跡(南西より)



19号住居跡カマド(南西より)



19号住居跡カマドおよび周辺遺物出土状態(南西より)



19号住居跡A-A'土層断面(南東より)



19号住居跡B-B'土層断面(南西より)



20号住居跡(西より)



20号住居跡土層断面(西より)



21号住居跡(西より)



21号住居跡カマド(西より)



21号住居跡カマドA-A'土層断面(北より)



21号住居跡カマド、貯蔵穴(北より)



21号住居跡貯蔵穴(北より)



22号住居跡(北より)



23号住居跡(東より)



23号住居跡土層断面(北より)



24号住居跡(東より)



24号住居跡カマド(西より)



24号住居跡貯蔵穴(西より)



25号住居跡(東より)



26号住居跡(西より)



26号住居跡カマド(西より)



27号住居跡(南西より)



28号住居跡(南西より)



28号住居跡カマド(西より)



28号住居跡遺物出土状態(南東より)



29号住居跡(西より)



29号住居跡カマド(南西より)



29号住居跡貯蔵穴(西より)



29号住居跡遺物出土状態(西より)



30号住居跡(南西より)



30号住居跡カマド(南西より)



30号住居跡貯蔵穴(南西より)



31号住居跡 (南西より)



31号住居跡遺物出土状態(1)(東より)



31号住居跡遺物出土状態(2)(北西より)



31号住居跡カマド(南西より)



31号住居跡貯蔵穴(南西より)



32号住居跡(南西より)



32号住居跡カマド(南西より)



32号住居跡貯蔵穴(南西より)



33号住居跡(南西より)



33号住居跡カマド(南西より)



33号住居跡貯蔵穴、土壇(北西より)



33号住居跡貯蔵穴(西より)



34号住居跡(西より)



34号住居跡カマド(西より)



35号住居跡(南西より)



35号住居跡カマド(南西より)



36号住居跡(南西より)



36号住居跡遺物出土状態(1)(南東より)



36号住居跡遺物出土状態(2)(南西より)



36号住居跡カマド(南西より)



36号住居跡貯蔵穴(南西より)



37・38号住居跡(西より)



37号住居跡(西より)



37号住居跡遺物出土状態(東より)



38号住居跡遺物出土状態(1)(北西より)



38号住居跡遺物出土状態(2)(東より)



1号掘立柱建物跡(南西より)



2号掘立柱建物跡(南より)



3号掘立柱建物跡(東より)



1号井戸跡(西より)



1号井戸跡土層断面(西より)



2号井戸跡(北より)



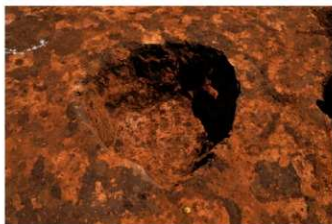
3号井戸跡(北より)



14号土坑(南より)



15号土坑(南西より)



16号土坑(南より)



17号土坑(北より)



18号土坑(北東より)



19号土坑(北より)



20号土坑(北西より)



21号土坑(南西より)



22号土坑(西より)



23号土坑(北より)



24号土坑(北より)



25号土坑(南より)



25号土坑土層断面(南より)



26号土坑(北より)



27号土坑(東より)



28号土坑(北東より)



29号土坑(北より)



30号土坑(南西より)



31号土坑(西より)



32号土坑(西より)



33号土坑(西より)



33号土坑土層断面(南より)



34号土坑(西より)



35号土坑(東より)



38号土坑(北より)



39号土坑(西より)



39号土坑土層断面(西より)



40号土坑(北より)



43号土坑(東より)



44・45号土坑(南東より)



46号土坑(南より)



48号土坑(西より)



47号土坑(西より)



49号土坑(北西より)



51号土坑(南西より)



52・53号土坑(南より)



54・55号土坑(北西より)



56号土坑(南西より)



58号土坑(南より)



57号土坑(北西より)



59号土坑(西より)



60号土坑(北より)



61号土坑(南より)



62号土坑(南より)



63号土坑(南より)



64号土坑(東より)



65号土坑(南より)



66号土坑(南より)



67号土坑(南より)



68号土坑(南より)



71号土坑(東より)



69号土坑(南より)



73号土坑(東より)



74・75号土坑(南より)



76号土坑(南より)



78・79号土坑(北より)



80号土坑(北より)



81・82号土坑(北より)



3号溝跡溝底掘削痕(北より)



3号溝跡土層断面(南より)



4号溝跡(東より)



5号溝跡土層断面(西より)



6号溝跡(南より)



6号溝跡土層断面(南東より)



7号溝跡(北より)



7号溝跡土層断面(南東より)



8号溝跡溝底掘削痕(東より)



8号溝跡土層断面(西より)



9号溝跡土層断面(北より)



9号溝跡(南より)



10号溝跡(東より)



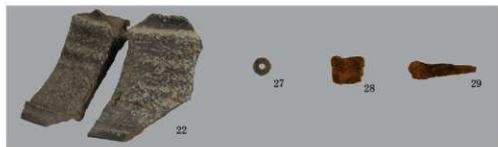
11号溝跡(東より)



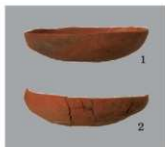
4号住居跡出土遺物



5号住居跡出土遺物(1)



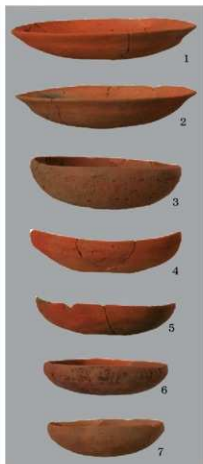
5号住居跡出土遺物(2)



7号住居跡出土遺物



8号住居跡出土遺物



9号住居跡出土遺物



10号住居跡出土遺物



11号住居跡出土遺物



12号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物



14号住居跡出土遺物

15号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物



18号住居跡出土遺物

19号住居跡出土遺物(1)



19号住居跡出土遺物(2)



21号住居跡出土遺物



22号住居跡出土遺物



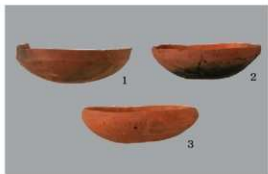
23号住居跡出土遺物



24号住居跡出土遺物



26号住居跡出土遺物



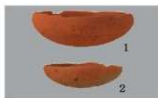
27号住居跡出土遺物



28号住居跡出土遺物



29号住居跡出土遺物



30号住居跡出土遺物



2



3



1



4

31号住居跡出土遺物



2

3



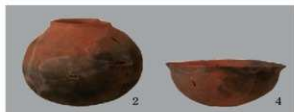
5



6



7



2

4

33号住居跡出土遺物

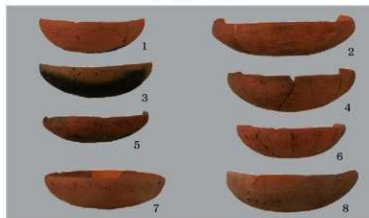


1

2

3

34号住居跡出土遺物



1

3

5

7

2

4

6

8

35号住居跡出土遺物



9



10



36号住居跡出土遺物

37号住居跡出土遺物



38号住居跡出土遺物

2号掘立柱建物跡出土遺物

27号土坑出土遺物

32号土坑出土遺物

56号土坑出土遺物

10号溝跡出土遺物

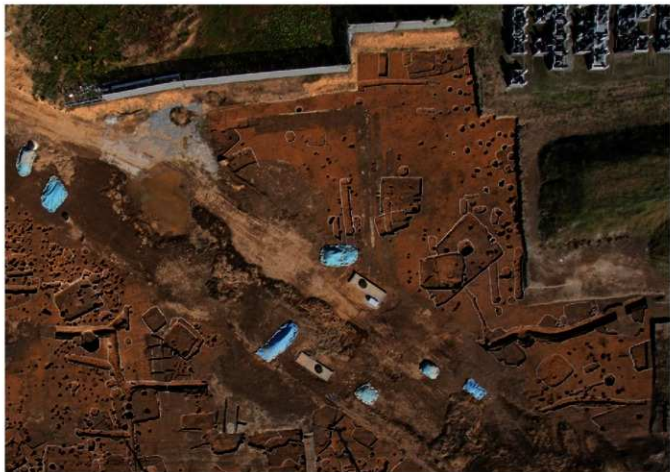
遺構外出土遺物



久下東遺跡遠景(東より。中央を走る道路が南北方向)



久下東遺跡G1～G3地点全景(上空より。左端の道路が南北方向)



久下東遺跡G1～C3地点全景(上空より。上部の調査区界がほぼ東西方向)



久下東遺跡G3地点北東半掘立柱建物跡群(上空より。上が北)



298号住居跡(南東より)



301号住居跡遺物出土状態(西より)



299～301号住居跡(西より)



301号住居跡土層断面(南より)



299・301号住居跡土層断面(西より)



302・303号住居跡(西より)



302号住居跡(北西より)



302号住居跡遺物出土状態(1)(北西より)



302号住居跡遺物出土状態(2)(北東より)



302号住居跡カマド・貯蔵穴(西より)



302号住居跡カマド土層断面(西より)



302号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状態(西より)



302号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(東より)



302号住居跡貯蔵穴土層断面(西より)



303号住居跡(西より)



303号住居跡遺物出土状態(1)(西より)



303号住居跡カマド(西より)



303号住居跡カマド土層断面(1)(南西より)



303号住居跡遺物出土状態(2)(北東より)



303号住居跡カマド土層断面(2)(南より)



303号住居跡遺物出土状態(3)(北東より)



304・305号居跡(南より)



304号住居跡カマド(西より)



305号住居跡(西より。西半部分)



305号住居跡カマド(西より)



306号住居跡(北東より)



306号住居跡カマド(北東より)



306号住居跡カマド土層断面(1)(北西より)



306号住居跡カマド土層断面(2)(北東より)



307号住居跡(南西より。下は、308号住居跡)



307号住居跡遺物出土状態(南西より)



307号住居跡カマド(南西より)



307号住居跡カマド軸土層断面(南西より)



307号住居跡貯蔵穴(南西より)



308号住居跡(西より)



308号住居跡カマド(西より)



308号住居跡遺物出土状態(南西より)



308号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(西より)



308号住居跡床下土坑(北より)



309号住居跡(南東より)



309号住居跡遺物出土状態(北西より)



309号住居跡カマド(南西より)



310号住居跡(南西より)



310号住居跡カマド(南西より)



310号住居跡貯蔵穴(西より)



311号住居跡(南西より)



311号住居跡カマド(西より)



312号住居跡(東より。中央斜めに走るのは、88号溝跡)



313号住居跡(北より)



314号住居跡(西より。右側の溝は、88号溝跡)



314号住居跡カマド(南西より)



315号住居跡(西より)



315号住居跡遺物出土状態(南より)



315号住居跡カマド(西より)



316号住居跡(南西より。中央斜めに走るのは、88号溝跡)



316号住居跡カマド(南西より)



317号住居跡(南西より)



318号住居跡カマド(南より)



318号住居跡西半(南より)



318号住居跡東半(南より)



18～21・23号掘立柱建物跡(上空より。縦に走る調査区
界がほぼ南北方向。北半が18～20号掘立柱建物跡。)



18号掘立柱建物跡P-14土層断面(南より)



19号掘立柱建物跡P-1土層断面(南より)



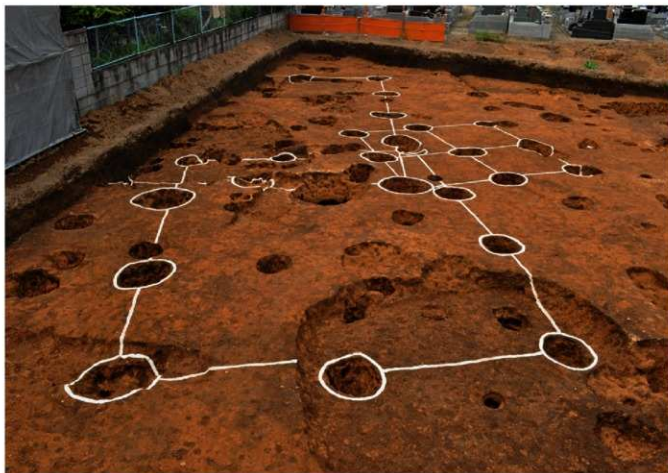
19号掘立柱建物跡P-3土層断面(南より)



20号掘立柱建物跡P-5土層断面(南より)



20号掘立柱建物跡P-7土層断面(南より)



21～24号掘立柱建物跡(南東より。手前は24号掘立柱建物跡)



21号掘立柱建物跡(南より)



21号掘立柱建物跡P-1土層断面(南より)



21号掘立柱建物跡P-6土層断面(南より)



24号掘立柱建物跡(南東より。手前は310号住居跡)



30号井戸跡(南より)



31号井戸跡(南東より)



31号井戸跡土層断面(1)(東より)



31号井戸跡土層断面(2)(北より)



32号井戸跡、98号溝跡(北東より)



32号井戸跡(南西より)



32号井戸跡土層断面(南より)



162号土坑(南西より)



580号土坑(東より)



580号土坑遺物出土状態(西より)



164・165・583号土坑(南より)



583号土坑(南より)



585号土坑(南東より)



584号土坑(南より)



586号土坑(北より)



586号土坑土層断面(北より)



589・590号土坑(北より)



592号土坑(南西より)



593号土坑(南より)



594号土坑(北東より)



595号土坑(西より)



596号土坑(西より)



597号土坑(西より)



598号土坑(東より)



599号土坑(西より)



600号土坑(北より)



600号土坑遺物出土状態(北西より)



601号土坑(西より)



601号土坑土層断面(西より)



602号土坑(西より)



603号土坑(南より)



604号土坑(南より)



604号土坑土層断面(南より)



605号土坑(南より)



606号土坑(南より)



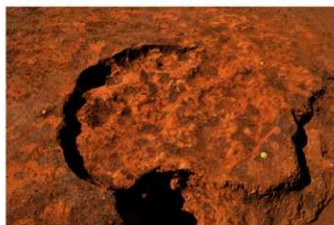
607号土坑(東より)



608号土坑(西より)



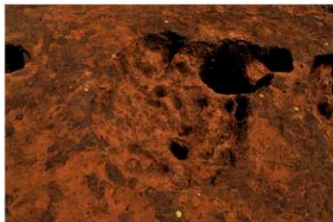
609号土坑(南西より)



610号土坑(南より)



611号土坑(北より)



612号土坑(北より)



613号土坑(東より)



614号土坑(南西より)



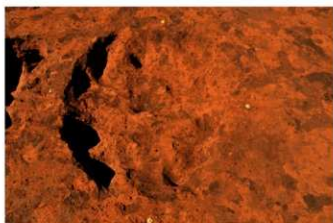
615号土坑(西より)



616号土坑(西より)



617号土坑(西より)



618号土坑(南西より)



619号土坑(南東より)



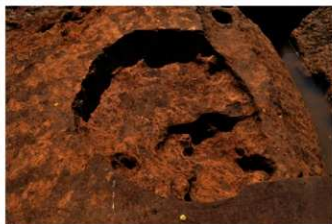
620号土坑(南より)



621号土坑(南より)



622号土坑(北西より)



623号土坑(南東より)



624号土坑(西より)



625号土坑土層断面(南より)



626号土坑(南西より)



34号溝跡(東より)



88号溝跡(2)(南西より)



88号溝跡(1)(北東より)



88号溝跡土層断面(1)(南東より)



88号溝跡土層断面(2)(西より)



89・98号溝跡(西より。左が98号溝跡)



300号住居跡出土遺物

301号住居跡出土遺物



302号住居跡出土遺物



303号住居跡出土遺物



307号住居跡出土遺物

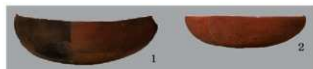


308号住居跡出土遺物



309号住居跡出土遺物

310号住居跡出土遺物



311号住居跡出土遺物



315号住居跡出土遺物



318号住居跡出土遺物



88号溝跡出土遺物



97号溝跡出土遺物



遺構外出土遺物



312号住居跡出土遺物



313号住居跡出土遺物



31号井戸跡
出土遺物

595号土坑
出土遺物



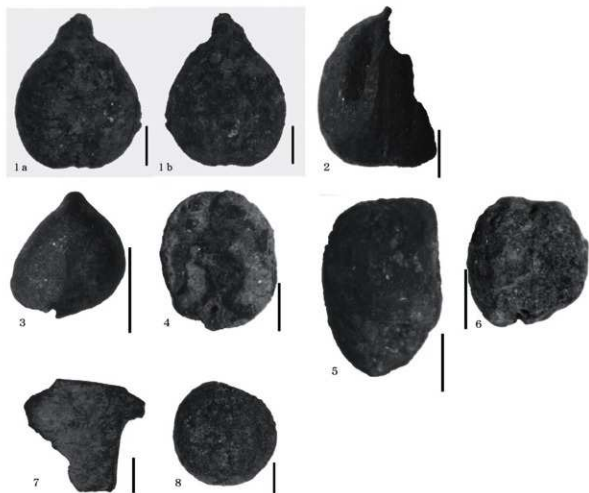
600号土坑出土遺物



580号土坑出土遺物



611・613号土坑出土遺物



(スケールバーは、7が50.5mm、その他は1mm)

1. ブドウ属炭化種子(8層、放射性炭素年代測定試料) 2. ブドウ科炭化種子(3層) 3. サナエタデー
 オオイスタデ炭化果実(3層) 4. 不明A炭化果実(3層) 5. 不明B炭化果実(3層) 6. 不明B炭化果実
 (3層) 7. 不明D炭化果実(8層) 8. 虫えい(8層)

北堀新田前遺跡2号墓周溝覆土出土の炭化種実

報告書抄録

フリガナ	キタボリシンデンマエイセキⅡ (A2・A3 地点)・キタボリシンデンイセキⅣ (A2・B 地点)・クダヒガシイセキⅧ (G3 地点)						
書名	北堀新田前遺跡Ⅱ (A2・A3 地点)・北堀新田遺跡Ⅳ (A2・B 地点)・久下東遺跡Ⅷ (G3 地点)						
副書名	本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8						
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書					巻次	第44集
編著者	松本 完・藤根 久・孔 智賢・佐々木由香・米田恭子・小林紘一・伊藤茂・廣田正史・瀬谷 薫・Zaur Lomatatidze・Ineza Jorjoliani						
編集機関	本庄市教育委員会						
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185						
発行日	西暦2015年(平成27年) 3月 27日						
フリガナ所収遺跡	フリガナ所在地	コード	北緯(°′″)	東経(°′″)	調査期間	調査積	調査原因
北堀新田前遺跡 A2・A3地点	本庄市北堀1958-1、1963-1他	112119 53-063	36° 13′ 18″	139° 11′ 5″	20070109～20070406	3,461㎡	区画整理
北堀新田遺跡 A2・B地点	本庄市北堀1549-1、1556-1他	112119 53-062	36° 13′ 19″	139° 11′ 3″	20100407～20100603、20100603～20100817	2,263㎡	＃
久下東遺跡 G3地点	本庄市北堀1559-6・7他	112119 53-064	36° 13′ 20″	139° 11′ 1″	20110826～20110207	1,377㎡	＃
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
北堀新田前遺跡	集落墳墓	縄文・弥生時代			縄文土器片・弥生土器・弥生土器片		
		古墳時代前期	方形周溝墓1基、前方後方墳2基		土師器		
		古墳時代中期	竪穴住居跡1軒		土師器		
		古墳時代後期	竪穴住居跡3軒		土師器・須恵器・埴輪・石製紡錘車・鉄製品		
		奈良・平安時代	竪穴住居跡8軒		土師器・須恵器・土製品・磁石		
		古墳～平安時代	竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、土坑17基、溝跡2条		土師器片・須恵器片・土鏃		
		中・近世	掘立柱建物跡2棟、井戸跡5基、土坑29基、溝跡3条		陶磁器・土鏃・石製品		
時期不詳							
北堀新田遺跡	集落	縄文・弥生時代			縄文土器片・弥生土器片・打製石斧・石鏃		
		古墳時代中期	竪穴住居跡4軒		土師器		
		古墳時代後期	竪穴住居跡11軒		土師器・須恵器		
		古墳時代終末期	竪穴住居跡3軒		土師器・須恵器・土鏃		
		奈良・平安時代	竪穴住居跡14軒		土師器・須恵器・円面硯・土製紡錘車・鉄製品		
		古墳～平安時代	竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土坑9基		土師器・須恵器		
		中・近世	掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、土坑56基、溝跡9条		カワラケ、陶磁器・土鏃		
時期不詳	土坑4基						
久下東遺跡	集落	縄文・弥生時代			縄文土器片・弥生土器片・石鏃		
		古墳時代中期	竪穴住居跡1軒		土師器		
		古墳時代後期	竪穴住居跡4軒		土師器・須恵器・鉄製品		
		古墳時代終末期	竪穴住居跡2軒		土師器・須恵器		
		奈良・平安時代	竪穴住居跡7軒		土師器・須恵器		
		古墳～平安時代	竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡7棟、土坑15基、溝跡2条		土師器・須恵器		
		中・近世	井戸跡3基、土坑33基、溝跡3条				
時期不詳	土坑4基						

本庄市埋蔵文化財調査報告書第44集

北堀新田前遺跡Ⅱ(A2・A3地点)・
北堀新田遺跡Ⅳ(A2・B地点)・
久下東遺跡Ⅷ(G3地点)

-本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8-

平成27年 3月23日 印刷

平成27年 3月27日 発行

発行／本庄市教育委員会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／山進社印刷株式会社

埼玉県本庄市本庄3丁目3番36号